

(財)大阪府文化センター調査報告書 第160集

寝屋川市

讃良郡条里遺跡 V

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化センター調査報告書 第160集

寝屋川市

讃良郡条里遺跡Ⅴ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



1 調査地遠景（南西から）平成15年8月



2 調査地遠景（南西から）平成16年12月

序 文

讃良郡条里遺跡は、条里型地割が残っていることで古くから知られる、大阪府寝屋川市に所在する遺跡です。今回、第二京阪道路（大阪北道路）の建設に伴い、大規模な発掘調査が行われることとなりました。

本書に収録する讃良郡条里遺跡03-2では、ブナ科などの照葉樹林を舞台とした縄文時代の人々の活動が見られ、その後の飛鳥時代を中心とした頃には、集落が営まれた跡が見つかっています。そして奈良時代以降には集落は、現在に見られるような条里型地割が見られる景観へと変化してゆきました。その背景には、人が自然へ懸命に働きかける姿が見えるような気がします。

このような調査成果は、周辺地域の歴史的景観を復元するために欠かす事のできない資料と言えます。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関西支社枚方工事事務所、寝屋川市、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷教育委員会、砂自治会、小路自治会、高宮自治会、小路水利組合、高宮水利組合、高宮財産区、そして地元住民の皆様に深く感謝すると共に、今後とも文化財の保護に一層の御協力と御理解を賜りますよう、お願いいたします。

平成19年 3月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府寝屋川市高宮（たかみや）地先他に所在する讃良郡条里遺跡03-2と、同市小路（しょうじ）地先に所在する讃良郡条里遺跡05-1の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第二京阪道路（大阪北道路）の建設に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 受託名称、受託期間および調査体制は、以下の通りである。

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その3）
平成15年4月1日～平成16年3月31日
調査部長 玉井功 調整課長 赤木克視 京阪支所 支所長 渡邊昌宏
調査第一係 係長 宮野淳一、技師 杉本厚典・佐伯博光、専門調査員 正岡大実

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その3-2）
平成16年4月1日～平成17年3月31日
調査部長 玉井功 調整課長 赤木克視 京阪調査事務所 所長 渡邊昌宏
調査第一係 係長 宮野淳一、主査 松本啓子、技師 佐伯博光、専門調査員 赤塚亨

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その3-3）
平成17年4月1日～平成17年5月31日
調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 京阪調査事務所 所長 山本彰
調査第一係 係長 宮野淳一、技師 佐伯博光、専門調査員 青柳佳奈・六辻彩香

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡他遺物整理
平成17年4月1日～平成18年3月31日
調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 京阪調査事務所 所長 山本彰
調査第一係 係長 宮野淳一、技師 佐伯博光、専門調査員 青柳佳奈・六辻彩香

第二京阪道路（大阪北道路） 太秦遺跡他整理
平成18年4月1日～平成19年3月31日
調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘 京阪調査事務所 所長 山本彰
調査第一係 係長 藤永正明、技師 佐伯博光、専門調査員 六辻彩香
4. 讃良郡条里遺跡03-2の工事請負名称は「讃良郡条里遺跡（その5）」である。
5. 遺物写真については、京阪調査事務所 主任技師上野貞子が担当した。木器・金属製品の保存処理については、中部調査事務所 主査山口誠治が担当した。また、遺物観察として石器に関する報文は、専門調査員 和田大作が執筆した。
6. 植物珪酸体・花粉・珪藻微化石分析は古環境研究所に、火山灰分析・放射性炭素年代測定（AMS）・岩石石材鑑定（肉眼鑑定）はパリノ・サーヴェイに、それぞれ委託した。
7. 本書の執筆は、佐伯が行った。
8. 編集は、佐伯・六辻が行った。
9. 現地での発掘調査では、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社（旧

日本道路公団) 関西支社枚方工事事務所、寝屋川市、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷教育委員会、砂自治会、小路自治会、高宮自治会、小路水利組合、高宮水利組合、高宮財産区の皆様のご協力を得るとともに、関係各機関の方々のご指導、ご教示を賜った。感謝いたします。

10. 本書収録の写真・遺物などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 発掘調査及び整理作業は、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】 2003.8」に従って行った。
2. 発掘調査で行った測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標系第Ⅵ系を基準とし、数値はm単位で表示している。また、本書で記す北は、座標北を示す。
3. 発掘調査で使用した測量の標高は、東京湾平均海水準面（T.P.）を基準とする。本文中ではT.P.を省略して記しており、挿図についてのみT.P.を付して表示している。
4. 発掘調査は、調査地内を12の調査区に分けて行っており、原則として人力掘削の着手順に、1から11までの調査区番号を付している。
5. 遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。 例) 123溝、456流路
なお、複数の遺構の集合である、掘立柱建物については遺構番号とは別に、遺構の種類を表す文字の後ろに、アラビア数字の通し番号を付して表している。 例) 掘立柱建物 1
また、複数の調査区にまたがっている流路や溝などの遺構の場合は、本書作成段階で1つの遺構番号に代表させて示したが、必要に応じて（ ）内に併記している。
例) 789流路（246流路）
6. 遺物の番号は、本文・遺物実測図・遺物写真すべてに共通する。
7. 断面図・平面図・遺構図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
8. 遺物図版の縮尺は、原則として土器1／4、石器2／3であるが、木製品や一部の土器、銭貨や石製品・金属製品については必要に応じて異なる縮尺を用い、スケールバーと縮尺で表示している。
9. 地層の土色および遺物観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2004年版 農林水産省農林水産会議事務局監修・財団法人日本色彩研究色票監修に準拠した。

目 次

巻頭カラー図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法	6
第4章 基本層序	8
第5章 調査成果	31
第1節 第1-2面の遺構と遺物	32
第2節 第1-3面の遺構と遺物	32
第3節 第1-4面の遺構と遺物	32
第4節 第1-5面の遺構と遺物	37
第5節 第2面の遺構と遺物	38
第6節 第3-1面の遺構と遺物	39
第7節 第3-2面の遺構と遺物	43
第8節 第4-2面の遺構と遺物	47
第9節 第4-3面の遺構と遺物	105
第10節 第4-4面の遺構と遺物	107
第11節 第5-1面の遺構と遺物	112
第12節 第6-1面の遺構と遺物	116
第13節 第6-2面の遺構と遺物	126
第14節 第7面の遺構と遺物	127
第15節 第8面の遺構と遺物	127
第6章 自然科学的分析 遺構・遺物の検討	131
第1節 放射性炭素年測定（AMS法）	131
第2節 テフラの検出と同定	135
第3節 岩石石材鑑定	139
第4節 植物珪酸体分析	143
第5節 花粉分析	151
第6節 珪藻分析	155
第7節 第6-1面石器集中部の検討	158
第7章 まとめ	166

目 次

図 1	調査地位置図	1
図 2	調査地配置図	2
図 3	調査地周辺の航空写真	4
図 4	遺跡分布図	5
図 5	地区割図	7
図 6	A 断面地層模式図	11・12
図 7	B 断面地層模式図	13・14
図 8	C 断面地層模式図	15・16
図 9	D 断面地層模式図	17・18
図10	坪割り図	31
図11	第 1 - 2 面 (3 - 1 区・3 - 2 区)	33
図12	第 1 - 3 面 (3 - 1 区)	34
図13	第 1 - 4 面 (3 - 1 区・3 - 2 区)	35
図14	第 1 - 5 面 (3 - 2 区・7 区)	36
図15	第 2 面 地割り	38
図16	721溝 (1371溝)・722溝 (1369溝) 断面	39
図17	102・103・104土坑 断面	40
図18	第 3 - 1 面	41・42
図19	第 3 - 2 面	44
図20	1 a 層～3 a 層出土遺物	45
図21	第 3 - 1 面・第 3 - 2 面 遺構出土遺物	46
図22	第 4 - 2 面 等高線図	47
図23	第 4 - 2 面	49・50
図24	845流路断面図 652溝・651溝・678溝平・断面図	51
図25	503流路・504流路・505流路断面図	52
図26	172流路他平面図・断面模式図	53
図27	504流路北肩 遺物出土状況	54
図28	786凹み 遺物出土状況	55
図29	793流路 大甕出土状況	55
図30	微高地部分建物位置図	56
図31	建物 1	57
図32	建物 2	58
図33	建物 3	59
図34	建物 5	60
図35	建物 4	60

図36	建物 7	60
図37	建物 6	61
図38	建物 8	62
図39	建物 9	63
図40	建物10	64
図41	建物11 a・11 b・11 c	65
図42	建物12	66
図43	建物13	66
図44	建物14	66
図45	建物15	68
図46	建物16	69
図47	建物17	70
図48	建物18	70
図49	建物19	71
図50	建物20	72
図51	建物21	73
図52	建物22	74
図53	建物23	75
図54	建物24	75
図55	建物25	76
図56	建物26	77
図57	1018溝・1023溝・1145溝(1146溝)・1019溝(1095溝・1218溝)・1248溝 位置図	79
図58	244井戸	81
図59	244井戸 井戸枠立面図	82
図60	微高地上検出遺構位置図(第4-2面 部分拡大図)	83・84
図61	278ピット・578ピット平・断面図	85
図62	1541土坑・625ピット・225土坑・658土坑平・断面図	87
図63	1243土坑	88
図64	1096土坑・1097土坑・1164土坑	89
図65	826井戸	90
図66	1429土坑	91
図67	4-2 a層出土遺物(1)	92
図68	4-2 a層出土遺物(2)・第4-2面遺構出土遺物(1)	93
図69	第4-2面遺構出土遺物(2)	94
図70	第4-2面遺構出土遺物(3)	95
図71	第4-2面遺構出土遺物(4)	96
図72	第4-2面遺構出土遺物(5)	97
図73	第4-2面遺構出土遺物(6)	98

図74	第4 - 2面遺構出土遺物 (7)	99
図75	第4 - 2面遺構出土遺物 (8)	100
図76	第4 - 2面遺構出土遺物 (9)	101
図77	第4 - 2面遺構出土遺物 (10)	102
図78	第4 - 2面遺構出土遺物 (11)	103
図79	第4 - 2面遺構出土遺物 (12)	104
図80	352流路	105
図81	第4 - 3面	106
図82	339流路	106
図83	847流路・409流路・408流路 断面図	108
図84	第4 - 4面	109・110
図85	857流路 断面A	111
図86	857流路 断面B・C	112
図87	第5 - 1面	113・114
図88	863流路	115
図89	912流路 (A断面)	116
図90	第6 - 1面	117・118
図91	912流路 (B断面)	119
図92	562流路	120
図93	第6面上 土器出土状況	121
図94	566流路	121
図95	石器集中部 遺物分布図	122
図96	加工が見られる礫	123
図97	石器集中部出土石器 (1)	124
図98	石器集中部出土石器 (2)	125
図99	第6 - 2面	126
図100	第7面	127
図101	東壁断面	128
図102	第8面	128
図103	第4 - 3面遺構・第7面遺構・第4 - 4 a層~第7 a層 出土遺物	129
図104	石器	130
図105	礫の長幅分布	158
図106	剥片1と剥片2	158
図107	サヌカイト製石器の分布	159
図108	剥片3 (小サイズ) の区画別出土数	160
図109	剥片3 (小サイズ) 以外の区画別出土数	161
図110	土器・礫の分布	161
図111	類型別に見たサヌカイト製石器の分布	162

図112	石核・剥片の長幅分布	163
図113	楔形石器・削器・石錐・石鏃の長幅分布	163
図114	石鏃に形状の類似した剥片 2	164

表 目 次

表 1	讚良郡条里遺跡調査一覧（当センターにおける調査）	3
表 2	基本層序断面図層名表	19
表 3	遺物観察表	168

グラフ目次

グラフ 1	3-1 a・3-2 a層出土遺物集計表	46
グラフ 2	座標北を基準とした建物の方向	78

写真図版目次

巻頭カラー図版

- 1 調査地遠景（南西から）平成15年8月
- 2 調査地遠景（南西から）平成16年12月

図版 1

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 第2面南半 全景（東から）：1区 | 4 第1-5面 全景（南から）：3-2区 |
| 2 第2面北半 全景（東から）：1区 | 5 第2面 全景（北から）：4区 |
| 3 第1-4面 全景（北から）：3-1区 | 6 第2面 全景（北から）：9区 |

図版 2

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 第3-1面北半 全景（東から）：1区 | 4 第3-1面 全景（南から）：4区 |
| 2 第3-1面南半 全景（東から）：1区 | 5 第3-1面 全景（西から）：5区 |
| 3 第3-1面 全景（南から）：3-2区 | 6 第3-1面 全景（南から）：8区 |

図版 3

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 第3-2面南半 全景（東から）：1区 | 4 第3-2面南半 全景（西から）：8区 |
| 2 第3-2面北半 全景（東から）：1区 | 5 102土坑（西から） |
| 3 第3-2面北半 全景（西から）：8区 | 6 103土坑（西から） |

図版4

- | | |
|--------------------------|----------------|
| 1 第4-2面南半 全景(東から):1区 | 5 278ピット(西から) |
| 2 第4-2面北半 全景(東から):1区 | 6 486ピット(南西から) |
| 3 微高地上検出遺構(北から):1区 第4-2面 | 7 227ピット(西から) |
| 4 荷重痕跡(東から) | |

図版5

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1 225土坑(西から) | 5 199ピット(西から) |
| 2 244井戸(南西から) | 6 1715土坑(南から) |
| 3 244井戸(南西から) | 7 504流路北肩 遺物出土状況(南東から) |
| 4 244井戸(北西から) | |

図版6

- | | |
|-----------------------|--------------|
| 1 第4-2面 全景(南から):2区 | 5 651溝(東から) |
| 2 652溝・651溝・678溝(北から) | 6 652溝(西から) |
| 3 第4-2面 全景(南から):3-1区 | 7 633土坑(西から) |
| 4 651溝・652溝(東から) | |

図版7

- | | |
|---------------|----------------------|
| 1 644土坑(西から) | 5 第4-2面 全景(南から):3-2区 |
| 2 658ピット(南から) | 6 第4-2面 全景(北から):4区 |
| 3 668溝(南から) | 7 第4-2面 全景(北から):4区 |
| 4 669土坑(東から) | |

図版8

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 1014溝・1015溝(西から) | 5 1164土坑(北から) |
| 2 1096土坑(南から) | 6 第4-2面 全景(西から):5区 |
| 3 1097土坑(南から) | 7 740流路(北西から) |
| 4 1243土坑(西から) | |

図版9

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 793流路 大甕出土状況(西から) | 5 793流路内遺物出土状況(北から) |
| 2 1341流路(北東から) | 6 830溝(東から) |
| 3 786凹み(北から) | 7 789土器集中部(東から) |
| 4 793流路内遺物出土状況(西から) | |

図版10

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 第4-2面南側 全景(西から):6区 | 4 第4-2面 全景(南から):8区 |
| 2 第4-2面北側 全景(西から):6区 | 5 第4-2面 全景(北から):7区 |
| 3 第4-2面 全景(南西から):8区 | 6 927土坑(北から) |

図版11

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1 第4-2面 全景 (東から) : 9区 | 5 1431ピット (南から) |
| 2 第4-2面 全景 (北西から) : 9区 | 6 1539土坑 (南から) |
| 3 第4-2面 全景 (北から) : 9区 | 7 1541土坑 (南から) |
| 4 1429土坑 (西から) | |

図版12

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 建物1 (南東から) | 5 248柱穴 (東から) : 建物1 |
| 2 建物2 (北から) | 6 256柱穴 (南から) : 建物1 |
| 3 建物3 (東から) | 7 211柱穴 (東から) : 建物2 |
| 4 247柱穴 (東から) : 建物1 | |

図版13

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 224柱穴 (東から) : 建物2 | 5 186柱穴 (北東から) : 建物3 |
| 2 433柱穴 (東から) : 建物2 | 6 207柱穴 (北西から) : 建物3 |
| 3 438柱穴 (南から) : 建物2 | 7 213柱穴 (西から) : 建物3 |
| 4 450柱穴 (西から) : 建物2 | 8 214柱穴 (南から) : 建物3 |

図版14

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 建物4 (北西から) | 5 1347柱穴 (西から) : 建物4 |
| 2 建物5 (北から) | 6 1348柱穴 (南から) : 建物4 |
| 3 建物6 (南から) | 7 613柱穴 (南西から) : 建物5 |
| 4 1352柱穴 (西から) : 建物4 | |

図版15

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 615柱穴 (北から) : 建物5 | 5 665柱穴 (北から) : 建物6 |
| 2 617柱穴 (東から) : 建物5 | 6 664柱穴 (西から) : 建物6 |
| 3 619柱穴 (南から) : 建物5 | 7 822柱穴 (東から) : 建物7 |
| 4 623柱穴 (東から) : 建物6 | 8 824柱穴 (東から) : 建物7 |

図版16

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 建物7 (東から) | 5 818柱穴 (南から) : 建物8 |
| 2 建物8 (東から) | 6 1056柱穴 (北から) : 建物9 |
| 3 817柱穴 (北東から) : 建物8 | 7 1057柱穴 (北から) : 建物9 |
| 4 817柱穴 (北東から) : 建物8 | |

図版17

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 建物9 (南から) | 5 1082柱穴 (北から) : 建物9 |
| 2 建物10 (西から) | 6 1174柱穴 (西から) : 建物9 |
| 3 建物11 (北から) | 7 1036柱穴 (北から) : 建物10 |
| 4 1058柱穴 (南から) : 建物9 | |

図版18

- | | | | |
|---|------------------|---|----------------------------|
| 1 | 1038柱穴（南から）：建物10 | 5 | 1112柱穴（東から）：建物11 c |
| 2 | 1039柱穴（北から）：建物10 | 6 | 1118柱穴（東から）：建物11 b |
| 3 | 1040柱穴（南から）：建物10 | 7 | 1122柱穴（西から）：建物11 a |
| 4 | 1041柱穴（北から）：建物10 | 8 | 1173・1127柱穴（南東から）：建物11 a・b |

図版19

- | | | | |
|---|------------------|---|------------------|
| 1 | 建物12（南から） | 5 | 1029柱穴（東から）：建物12 |
| 2 | 建物13（北西から） | 6 | 1125柱穴（東から）：建物13 |
| 3 | 建物14（南東から） | 7 | 1131柱穴（北から）：建物13 |
| 4 | 1045柱穴（南から）：建物12 | | |

図版20

- | | | | |
|---|-------------------|---|------------|
| 1 | 1136柱穴（北から）：建物13 | 5 | 建物15（南から） |
| 2 | 1176柱穴（北東から）：建物14 | 6 | 建物16（北西から） |
| 3 | 1177柱穴（北から）：建物14 | 7 | 建物18（東から） |
| 4 | 1188柱穴（北から）：建物14 | | |

図版21

- | | | | |
|---|------------------|---|------------------------|
| 1 | 1222柱穴（北から）：建物15 | 5 | 1153柱穴（北から）〈奥の柱穴〉：建物16 |
| 2 | 1227柱穴（南から）：建物15 | 6 | 1154柱穴（北から）：建物17 |
| 3 | 1232柱穴（南から）：建物15 | 7 | 1158柱穴（北から）：建物17 |
| 4 | 1235柱穴（南から）：建物15 | 8 | 1565柱穴（東から）：建物18 |

図版22

- | | | | |
|---|------------------|---|------------|
| 1 | 1566柱穴（東から）：建物18 | 5 | 建物19（北西から） |
| 2 | 1567柱穴（東から）：建物18 | 6 | 建物20（南から） |
| 3 | 1553柱穴（西から）：建物19 | 7 | 建物21（東から） |
| 4 | 1549柱穴（北から）：建物19 | | |

図版23

- | | | | |
|---|------------------|---|------------------|
| 1 | 1549柱穴（北から）：建物19 | 5 | 1537柱穴（南から）：建物20 |
| 2 | 1583柱穴（南から）：建物19 | 6 | 1410柱穴（北から）：建物21 |
| 3 | 1535柱穴（南から）：建物20 | 7 | 1584柱穴（南から）：建物21 |
| 4 | 1536柱穴（南から）：建物20 | 8 | 1458柱穴（南から）：建物21 |

図版24

- | | | | |
|---|------------------|---|------------------|
| 1 | 建物22（西から） | 5 | 1409柱穴（南から）：建物22 |
| 2 | 建物23（南から） | 6 | 1675柱穴（西から）：建物22 |
| 3 | 建物24（南から） | 7 | 1437柱穴（西から）：建物23 |
| 4 | 1405柱穴（北から）：建物22 | | |

図版25

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 1439柱穴（南から）：建物23 | 5 1392柱穴（南から）：建物24 |
| 2 1467柱穴（南から）：建物23 | 6 1475柱穴（西から）：建物24 |
| 3 1389柱穴（南から）：建物24 | 7 1662柱穴（南東から）：建物25 |
| 4 1391柱穴（南から）：建物24 | 8 1665柱穴（南東から）：建物25 |

図版26

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 建物25（北から） | 5 1498柱穴（北西から）：建物26 |
| 2 1421柱穴（北西から）：建物25 | 6 1507柱穴（南東から）：建物26 |
| 3 建物26（南から） | 7 1730柱穴（南東から）：建物26 |
| 4 1416柱穴（北から）：建物25 | |

図版27

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1 第4-3面北半 全景（東から）：1区 | 5 352流路 断面（西から） |
| 2 第4-3面南半 全景（東から）：1区 | 6 352流路 断面（西から） |
| 3 第4-4面北半 全景（東から）：1区 | 7 409流路（西から） |
| 4 352流路 遺物出土状況（西から） | |

図版28

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 第4-4面 全景（南から）：2区 | 4 第4-4面 全景（南西から）：6区 |
| 2 第4-4面 全景（南から）：5区 | 5 第4-4面南半 全景（西から）：8区 |
| 3 795流路（北西から） | 6 第4-4面北半 全景（西から）：8区 |

図版29

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 第4-4面 全景（東から）：9区 | 4 第5-1面 全景（南から）：2区 |
| 2 第5-1面南半 全景（東から）：1区 | 5 第5-1面 全景（南から）：4区 |
| 3 第5-1面南半 全景（東から）：1区 | 6 第5-1面 全景（西から）：5区 |

図版30

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 826井戸（南から） | 4 第5-1面南半 全景（西から）：6区 |
| 2 826井戸（北東から） | 5 第5-2面南半 全景（西から）：6区 |
| 3 第5-1面北半 全景（西から）：6区 | 6 第5-2面北半 全景（西から）：6区 |

図版31

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 第5-1面南半 全景（西から）：8区 | 5 4a層系下面検出遺構（東から）：1区 |
| 2 第5-1面北半 全景（西から）：8区 | 6 第6-1面北半 全景（東から）：1区 |
| 3 4a層系下面検出遺構（東から）：1区 | |
| 4 4a層系下面検出遺構（北から）：1区 | |

図版32

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 第6-1面南半 全景（東から）：1区 | 4 第6-1面検出土器（南東から） |
| 2 第6-1面南半 全景（北東から）：1区 | 5 第6-1面検出 石器集中部（南東から） |
| 3 第6-1面検出土器（東から） | 6 第6-1面検出 石器集中部（東から） |

図版33

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1 562流路 (南東から) | 5 第6-1面 全景 (南から): 2区 |
| 2 562流路 断面 (南東から) | 6 第6-1面 全景 (北から): 3-1区 |
| 3 1301流路 (東から) | 7 第6-1面 全景 (南から): 3-2区 |
| 4 1361流路 (南から) | |

図版34

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 第6-1面 全景 (南から): 4区 | 4 第6-1面 全景 (西から): 5区 |
| 2 第6-1面 全景 (北西から): 4区 | 5 第6-1面 全景 (西から): 6区 |
| 3 第6-1面 全景 (北から): 4区 | 6 第6-1面 全景 (北から): 7区 |

図版35

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1 第6-1面南半 全景 (西から): 8区 | 4 第6-1a層下面南半 全景 (東から): 1区 |
| 2 第6-1面北半 全景 (西から): 8区 | 5 第6-1a層下面北半 全景 (東から): 1区 |
| 3 第6-1面 全景 (西から): 11区 | 6 第6-1a層下面 全景 (南から): 2区 |

図版36

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 第6-1a層下面 全景 (北から): 3-1区 | 4 第6-2面北半 全景 (西から): 6区 |
| 2 第6-1a層下面 全景 (南から): 3-2区 | 5 第6-2面南半 全景 (西から): 6区 |
| 3 第6-1a層下面 全景 (西から): 5区 | 6 第6-1a層下面 全景 (北から): 7区 |

図版37

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 第6-2面北半 全景 (西から): 8区 | 5 第8面 全景 (西から): 1区 |
| 2 第6-2面南半 全景 (西から): 8区 | 6 土坑状変形 (北東から) |
| 3 第6-2a層下面北半 全景 (西から): 6区 | 7 土坑状変形 断面 (北東から) |
| 4 第7面 全景 (東から): 1区 | |

図版38 出土遺物 (1)

図版51 出土遺物 (14)

図版39 出土遺物 (2)

図版52 出土遺物 (15)

図版40 出土遺物 (3)

図版53 出土遺物 (16)

図版41 出土遺物 (4)

図版54 出土遺物 (17)

図版42 出土遺物 (5)

図版55 出土遺物 (18)

図版43 出土遺物 (6)

図版56 出土遺物 (19)

図版44 出土遺物 (7)

図版57 出土遺物 (20)

図版45 出土遺物 (8)

図版58 出土遺物 (21)

図版46 出土遺物 (9)

図版59 出土遺物 (22)

図版47 出土遺物 (10)

図版60 出土遺物 (23)

図版48 出土遺物 (11)

図版61 出土遺物 (24)

図版49 出土遺物 (12)

図版62 出土遺物 (25)

図版50 出土遺物 (13)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書に記載する、讃良郡条里遺跡内の発掘調査は、第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴って実施したものである。讃良郡条里遺跡03-2は大阪府寝屋川市高宮地先他に所在し、讃良郡条里遺跡05-1は同市小路地先に所在する。なお、讃良郡条里遺跡05-1は、讃良郡条里遺跡03-2内を東から西へ流れる楠根川の堤体と河床部分にあたり、位置的に見ると讃良郡条里遺跡05-1を讃良郡条里遺跡03-2が、内包する形となる。

当該遺跡は、埋蔵文化財包蔵地として周知されていたため、道路建設に先立って確認調査が平成13年（2001年）～平成15年（2003年）に行われた。これらの調査成果を踏まえ、また一部は平行しながら、平成14年（2002年）4月から讃良郡条里遺跡（その1）、讃良郡条里遺跡（その2）、讃良郡条里遺跡（その3）¹⁾として、本格的な発掘調査が実施された。その後、同遺跡内をほぼ東西に貫くように計画されている道路予定地内を、讃良郡条里遺跡（その3）の西側に讃良郡条里遺跡03-1を、そして讃良郡条里遺跡03-1から大阪外環状線（国道170号線）までの範囲を、讃良郡条里遺跡03-2として調査を行い、讃良郡条里遺跡03-2調査終了後に讃良郡条里遺跡05-1の発掘調査を行っている。

また、大阪外環状線（国道170号線）の西に隣接する讃良郡条里遺跡03-3は、報告書がすでに刊行されている。²⁾

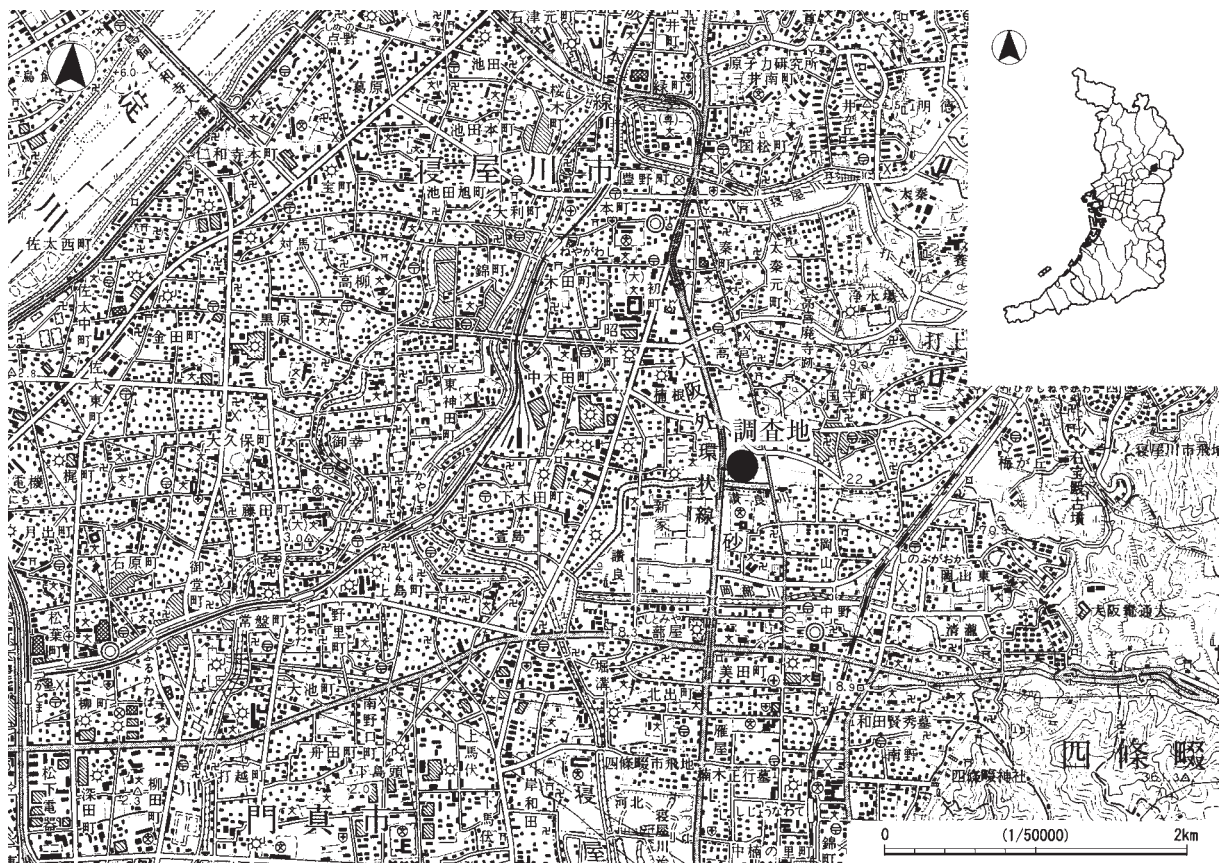


図1 調査地位置図

第2節 調査の経過

讃良郡条里遺跡03-2は、複数年にまたがるものであるが、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所との受託契約は、単年度契約となっており、計5本の受託契約で行ったものである。

平成15年4月に国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所と第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その3）として、平成16年3月までの受託契約を結び、発掘調査を開始した。平成16年4月から平成17年3月までは、第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その3-2）、平成17年4月から平成17年5月までは、第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その3-3）として受託契約を結んで発掘調査を行った。平成17年6月から平成18年3月までは、（第二京阪道路大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理 讃良郡条里遺跡（3）遺物整理として、遺物整理作業と讃良郡条里遺跡05-1の発掘調査を行った。平成18年4月から平成19年3月までは、讃良郡条里遺跡03-2と讃良郡条里遺跡05-1の遺物整理作業を行い、本書の刊行を行っている。

現地における調査は、讃良郡条里遺跡03-2が平成15年5月27日に1区の機械掘削を、6月10日に人力掘削を開始した。その後は、諸条件に従って、一部は平行しながら2区・3-1区と順に調査を行い、平成17年4月7日に全ての人力掘削が終了した。讃良郡条里遺跡05-1は、平成17年5月10日に機械掘削を、5月16日に人力掘削を開始し、6月14日に終了している。

- | | | | |
|----|--------------|--------------------------|----------|
| 1) | 讃良郡条里遺跡（その1） | （財）大阪府文化財センター調査報告書 第109集 | 2004年 2月 |
| | 讃良郡条里遺跡（その2） | （財）大阪府文化財センター調査報告書 第 98集 | 2003年 6月 |
| | 讃良郡条里遺跡（その3） | （財）大阪府文化財センター調査報告書 第114集 | 2004年 3月 |
| 2) | 讃良郡条里遺跡Ⅳ | （財）大阪府文化財センター調査報告書 第138集 | 2006年 2月 |

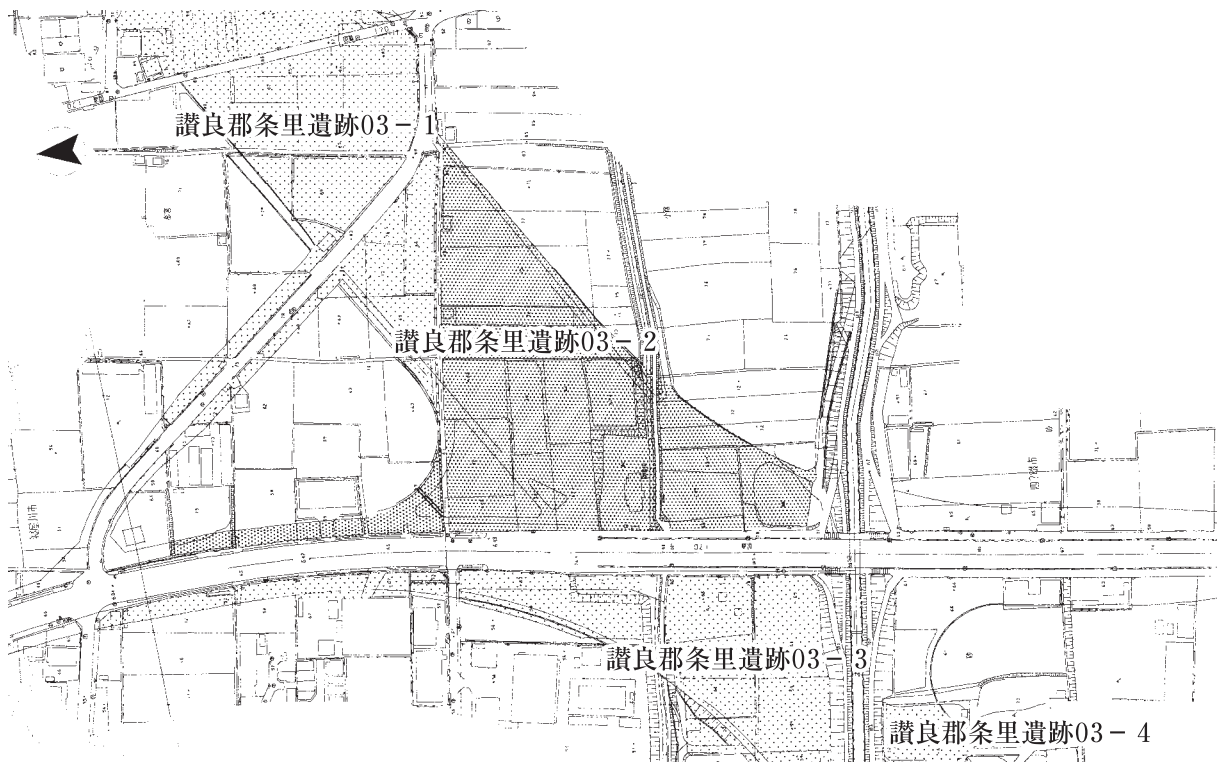


図2 調査地配置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

讃良郡条里遺跡は、大阪層群が撓曲して形成された枚方丘陵に接する沖積地に立地しており、東西約1.65km南北約2.65kmの広範囲に及ぶ遺跡である。遺跡の南東部分は、四條畷市に含まれるが、大半は寝屋川市域に広がっている。本書に収録する讃良郡条里遺跡03-2と05-1は、その中でも東の寝屋川市域にあり、遺跡内を東西に流れる讃良川の右岸、大阪外環状線（国道170号線）の東側に位置する。

調査地は、東から西への傾斜地となっており、東端と西端では現地表面の比高差が2m近くある。このため、切土・盛土などの造成を行い水田面積を確保している。水田は、条里地割の景観をよく残していることから、古代河内国讃良郡に施工された条里型地割の復元可能な遺跡として周知され、その名を遺跡名としている。また、調査地内と調査地の南端を東西に流れる、楠根川と讃良川の現在の姿は人工的に固定されたものであるが、これらの前身になる河川により当調査地を含め周辺の地形が形作られたと考えられる。楠根川と讃良川の間は、その南北の地表面に比べておよそ1m近く高くなっており、航空写真による地形判読によると、この様な高まりは、西へ伸びており東西に長い微高地を形成している。

第2節 歴史的環境

当センターでは、これまでも当調査地を含む讃良郡条里遺跡内で発掘調査を行っており、すでに刊行されている報告書もいくつかある。また、周辺の小路遺跡や高宮遺跡についても既刊の報告書があり、歴史的環境については、これら既刊の報告書と基本的に重複するため、ここでは簡単に記しておく。詳細については、既刊の報告書を参照されたい。

旧石器時代 遺物の出土は少ないが旧石器時代では、国府型のナイフ形石器が高宮遺跡、讃良川遺跡、讃良川川床遺跡、忍ヶ丘駅前遺跡から出土しており、南山下遺跡からは有舌尖頭器が、岡山南遺跡からは木葉状尖頭器が出土している。

縄文時代 縄文時代前期では、当遺跡土坑内から北白川下層Ⅲ式～大歳山式の土器が出土している他、

表1 讃良郡条里遺跡調査一覧（当センターにおける調査）

調査名	所在地	調査年度	報告書名	
讃良郡条里遺跡 00（確認）	寝屋川市高宮 四條畷市砂地先	平成12年度	『讃良郡条里遺跡、小路、打上遺跡、茄子作遺跡、藤坂大亀遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』	第77集
讃良郡条里遺跡 01（確認2）	寝屋川市高宮・新家 四條畷市砂地先	平成13年度	『讃良郡条里遺跡、小路、打上遺跡、茄子作遺跡、藤坂大亀遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』	第77集
讃良郡条里遺跡 01（確認3）	寝屋川市新家二丁目他	平成13年度	『門良西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』	第93集
讃良郡条里遺跡 02-1	寝屋川市高宮	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その1）』	第109集
讃良郡条里遺跡 02-2	寝屋川市高宮	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その2）』	第98集
讃良郡条里遺跡 02-3	寝屋川市高宮・小路	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その3）』	第114集
讃良郡条里遺跡 02-3-2	寝屋川市高宮・小路	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その3）』	第114集
讃良郡条里遺跡 02-4	寝屋川市萱島東3丁目 讃良東町地先	平成14年度	讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡	第101集
讃良郡条里遺跡 03-1	寝屋川市高宮 四條畷市砂地先	平成15年度～ 平成17年度		
讃良郡条里遺跡 03-2	寝屋川市高宮・小路	平成15年度 平成17年度	『讃良郡条里遺跡Ⅴ』	第160集
讃良郡条里遺跡 05-1	寝屋川市小路地先	平成17年度	『讃良郡条里遺跡Ⅴ』	第160集
讃良郡条里遺跡 05-2	寝屋川市寝屋地先	平成17年度		
讃良郡条里遺跡 03-3	寝屋川市楠根南町地先	平成12年度 平成16年度	『讃良郡条里遺跡Ⅳ』	第138集

高宮遺跡で石鏃・石錐・石匙が出土している。縄文時代中期では、直径2m前後の貯蔵穴が当遺跡で見ついている他、船元式の土器が大量に出土している讃良川遺跡、縄文時代中期後半・後期後半の土器が出土している砂遺跡なども見られる。また、更良岡山遺跡では晩期の土壇墓27基が見つかっており、大型彫刻石棒やヒスイの石斧も出土している。また、高宮八丁遺跡や長保寺遺跡でも、縄文時代晩期の土器が出土している。この他、讃良郡条里遺跡、小路遺跡、高宮遺跡からは、縄文時代中期から後・晩期の土器が出土している。

弥生時代 この時代の遺跡としては、弥生時代前期から中期の土坑、柱穴、貯蔵穴などの遺構が見ついている他、石庖丁や鋤、鋤などの農耕具が多く出土している高宮八丁遺跡が知られている。弥生時代中期では太秦遺跡が集落として知られている。また、隣接する大尾遺跡では、同じく弥生時代中期の方形周溝墓が見ついている。打上中道遺跡や小路遺跡では弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代 この時代に属する遺跡では、前方後円墳の忍岡古墳があり鉄製武器類や碧玉製品が出土している。小路遺跡では庄内期の前方後方形周溝墓が見ついている。更良岡山古墳群は5世紀後半の群集墳で、帆立貝式古墳を中心として円墳・方墳で構成される。太秦古墳群は高塚古墳を含む、5世紀後半～6世紀前半の群集墳である。

古代 古代には有力氏族の居館に伴う大型掘立柱建物群が見ついている高宮遺跡と、薬師寺式の伽藍配置をもつ高宮廃寺があげられる。この他、古代寺院としては讃良寺跡・太秦廃寺・正法寺跡などがある。



図3 調査地周辺の航空写真

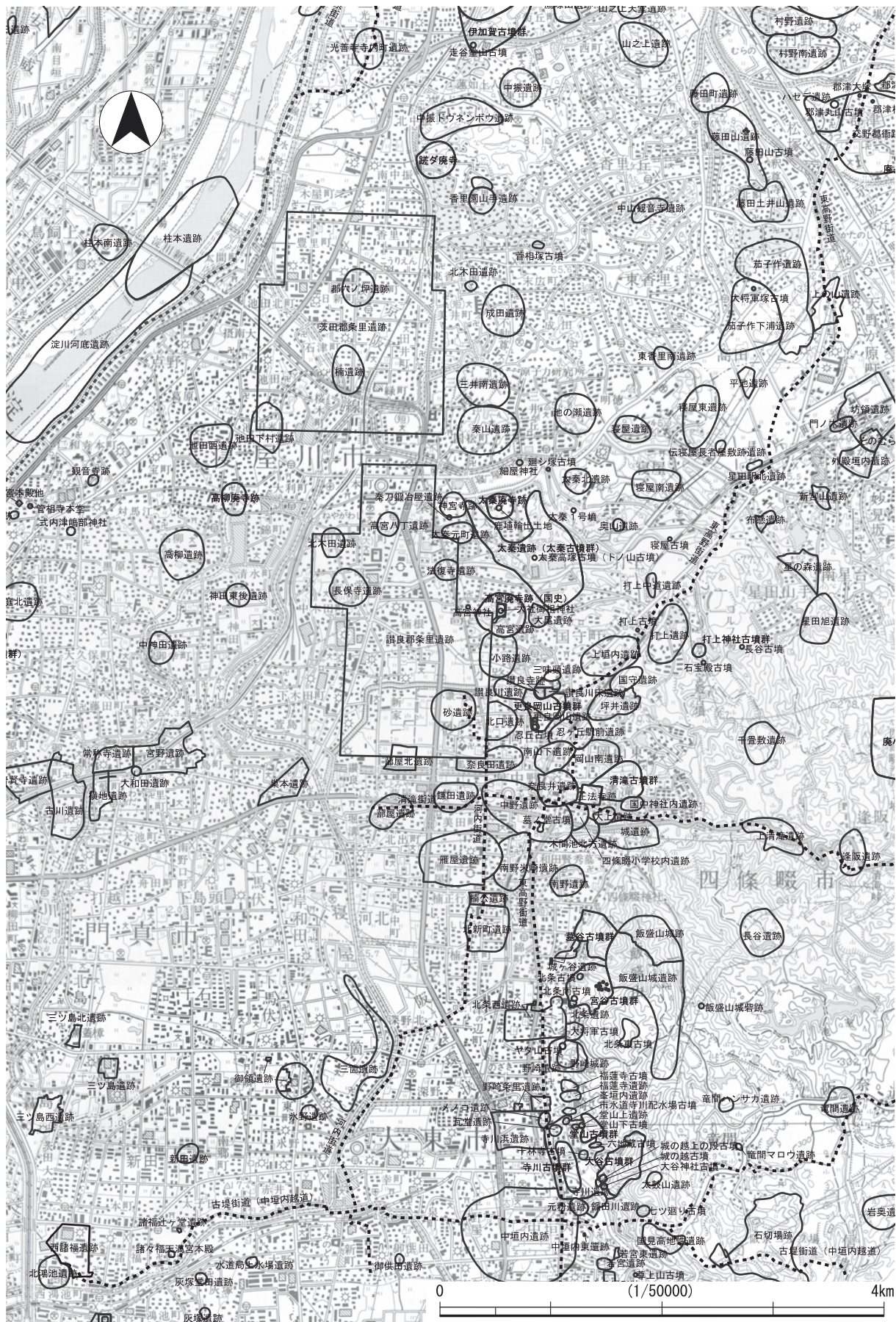


図4 遺跡分布図

第3章 調査の方法

本書で報告する讃良郡条里遺跡03-2は、現地での調査を平成15年5月から開始し、平成17年4月に終了している。讃良郡条里遺跡05-1は、讃良郡条里遺跡03-2内を東西に流れる楠根川の河床及び堤体部分の発掘調査で、平成17年5月から6月まで行い、整理作業を讃良郡条里遺跡03-2と合わせて平成19年まで行った。

発掘調査および整理作業においては、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】 2003.8」に従って行った。

事前調査

現地での発掘調査を行う前に事前調査を実施しており、周辺環境への配慮をはじめとして、地元自治会および関係諸機関との調整を行った。発掘調査では、調査地内を横断する農業用の水路や、隣接する耕作地に泥水を出さない事。また、雨による仮置土の流出や、風による土砂の飛散防止、重機の振動や騒音など周辺環境に対して、十分注意をして行った。

調査区割り

讃良郡条里遺跡03-2は、掘削土の仮置き場所の確保や、主要な道路からの通行確保のため、調査地を11の調査区に分割して行っている。各調査区には、原則として人力掘削を開始した順に、アラビア数字で調査区名を付けている。なお、讃良郡条里遺跡05-1は、分割していない。

地層観察用トレンチ（筋掘り）

地層観察用のトレンチを、発掘調査の起因となった第二京阪道路の基準線に平行して北東から南西方向に設置している。これは、本調査地の東西に隣接し、発掘調査を平行して実施している讃良郡条里遺跡03-1や03-3と地層の比較検討するために、調査担当者間で話し合っただけのものである。その上で、さらに層序を把握するため、複数の連続するトレンチを設けた。これは、一つ一つの調査区の面積が広く、また一方向のみでは十分に地層が把握できないためである。基本的には、これらの地層観察用のトレンチによって各調査区の層序の検討を行ったが、状況に応じて補助トレンチを設け、地層の観察に努めた。ここでは、図5に示すような主な地層観察用のトレンチを、便宜上A、B、C、Dと呼称する。

測量・実測

調査において行った測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標系第VI系を基準としており、水準については、東京湾平均海水準面（T.P.）を基準としている。調査を行った遺構面の測量には、必要に応じてヘリコプターをカメラステーションとして使用する航空写真測量を実施した。

また、デジタルカメラを使って、オルソフォトを作成する機器も導入し、使用している。

掘削方法

発掘調査では、盛土及び現耕土と、明らかに近世に堆積したと判断できる地層を、重機を用いて掘削した。その後、1層ずつ人力によって掘削を行い、遺構や遺物の検出に努めた。

基本的には、6a層と呼称している土壌層の下面で面的な調査を終えているが、それよりも下層に縄文時代後期以前の遺物が含まれている可能性があるため、部分的に掘り下げて調査を行っている。

第4章 基本層序

調査地は枚方丘陵から西へ派生する扇状地に立地する。このため、扇状地を形成する流路から吐き出された堆積物による地表の埋没と、埋没させた堆積物の地表部分の土壌化、そしてさらなる堆積物による地表面の埋没という過程を繰り返して形成された遺跡である。また、中世段階以降は、積極的に耕作地として利用するために、傾斜を利用した大規模な切土・盛土による造成を行って、現在にいたる景観が形作られている。こうした地形環境への人間の働きかけを理解し、遺跡を理解するためには地層の観察を行い、層序を把握することが必要である。

層序を把握するための地層の観察にあたっては、氾濫堆積物の側方変化や同時異相に留意し、さらにこのような氾濫堆積物を母材とした、土壌層・作土層の層相や二次的な変化に注意した。そして、層序を考える上で、自然の営力による堆積層（氾濫堆積層）と、その土壌化や攪拌による作土化を念頭において基本層序を設定した。その際、土壌化・作土化している層をa層、その母材となった堆積層をb層としている。なお、調査地の大部分の地層は、作土層もしくは土壌層の連続堆積であるため、上部からの土壌化や作土化に伴う攪拌が下層に及んでおり、下層の本来の地表面は失われている。しかし、元々存在していたa層上面での人間活動の痕跡は存在しており、遺構の埋土などを観察することによって、上層上面からの遺構であるのか、そうでないのかの理解に努めた。基本的に、上から順に地層を除去し、下の地層を○a層（○b層）とし、その上面を第○面と呼称して遺構検出を行っている。

なお、調査の進展に伴い当初と層序の認識が変わっている部分もある。その点については、本報告書作成段階でさらに検討を加え、どのように修正したのかをできるだけ多く記述するように努めた。

以下、基本層序について記すが、記載は主に調査地を北東から南西へ貫く地層観察用のAトレンチ、Aトレンチに直行するB・Cトレンチ、堆積環境の異なる楠根川と讃良川の間地層を理解するためにDトレンチの断面図を中心に記述する。もちろん基本層序を把握するために、他の地層観察用のトレンチでの地層の検討も行っている

1 a層

シルト混じり細砂～中砂。シルトブロック・小礫・極粗砂～粗砂混じる。酸化鉄の沈着が見られる。全体に非常に砂っぽい土質である。現耕土の直下であり、上面は現耕土により削られている。

土質により細分が可能な層である。3-1区・3-2区では、厚く堆積しており、層厚は80cm以上を測る。ここでは、大きく1-1a・1-2a・1-3a・1-4a・1-5aの5層に分層できる。

土質は、やはり非常に砂っぽく、粗砂を含む中砂～細砂でシルトが若干混じり、中礫～細礫を多く含む。1-1a層まで機械掘削を行った。

1-2a層 灰～暗灰黄 粗砂～中砂シルト混じりで、極細砂粒・小礫混じる非常に砂っぽい。作土。

1-3a層 灰オリーブ 中砂～細砂シルト混じりで、粗砂混じる。砂っぽい。作土。

1-4a層 褐 中砂～粗砂混じりシルト。酸化鉄の沈着が見られる。砂っぽい。作土。

1-5a層 暗灰黄 中砂～粗砂混じりシルト。ややシルトが多く混じる。砂っぽい。作土。

2 a層

細砂シルト、中砂～極粗砂混じる。マンガンを酸化鉄の沈着が見られる。上面は、上層の耕作による

攪拌のため失われている。層相は、全体に1 a層と同様に砂っぽいが、ややシルトを多く含む。土質により細分が可能な層である。遺構検出は、上層の1 a層を除去した面で行っている。3-1区・3-2区では、1 a層と同様に厚く堆積しており、全体の層厚は40cmを測る。土質により大きく3層に分層している。2-1 a・2-2 a・2-3 a層とする。各a層間には、氾濫堆積層が部分的に見られる。各層の上面で畦畔や畝立てを検出している。中世後半以降の作土層である。

3 a層

3 a層は、大きく2層に細分している。上層を3-1 a層、下層を3-2 a層とする。共に色調は灰黄褐を基調とし、土質はシルトで中砂～極粗砂粒を含む。上層の2 a層よりもシルトの含有量が多いため、2 a層との層境に酸化鉄の沈着が著しく、マンガンの沈着も多く見られる。

3-1 a層 細砂シルトで中砂～粗砂粒入る。8区では、3-1 a層の上面に、須恵器や土師器の細片が含まれる若干土壌化した、極粗砂～中砂の薄層が見られた。中世の作土層である。

3-2 a層 シルトで中砂～極粗砂粒入る土質である。部分的に粗砂粒を多く含む部分があり、ここでは小規模で一時的な流路の存在が考えられる。1・6・8区では、3-2 a層の下に、褐灰中砂～粗砂シルト混じりの薄層が見られる。中世の作土層である。

3-1 a層・3-2 a層は、場所により遺存状態が異なり、分層ができないもしくは分層可能でも層厚が薄く、平面的な調査が行えない部分が見られた。このため、遺構面の検出は、上層の2 a層を除去し行っている。

4 a層

4 a層は大きく、4-1 a層・4-2 a層・4-3 a層・4-4 a層の4層の土壤層からなる。土質は、全体に均質でシルト主体であり、若干粗砂～中砂粒を含む。なお、1区南西部分と5区・9区・3-1区・3-2区にかけて存在する微高地部分では、上層からの攪拌や土壌化の影響が著しく、細分ができなかった。このため、微高地部分では4-2 a層・4-2面のみの検出となっている。

4-1 a層 1区や8区で見られ、下層の流路が完全に埋まりきれず窪みとなり、周囲より若干低くなった部分で見られる層である。明らかに、前述の3-1 a層の下層に見られる薄層とは土質が異なるため認識できた。

4-2 a層 上部の暗色化が著しく、上面では荷重痕跡が顕著に見られる層である。色調は褐灰～黒褐を基調としており、土質は細砂～シルトで中砂が混じる上部と、さほど暗色化していない褐灰シルトで中砂が若干混じる下部に細分できる。4-2 a上層・4-2 a下層と呼称している。

4-2 a上層は、1区・8区などでは良好に観察できるが、その他の調査区では、わずかな凹みに取り残されたような形でしか観察できなかった。しかし、途切れ途切れながら、調査地全体に渡って見られることから、本来は全体に存在していたと考えられ、耕作層である3-2 a層上面からの耕作に伴う攪拌によって、大半が失われたと考えられる。

4-2 a下層は、調査区全体を通して非常に安定して観察できる層で、基本的に遺構検出は、4-2 a上層を除去した、4-2 a下層上面で行っている。4-2 a下層も、上面は上層の耕作に伴う攪拌及び、土壌化により失われている。奈良時代から古墳時代に考えられる層である。

4-3 a層 におい黄褐細砂混じりシルトである。微高地以外で見られる層であるが、その内の大部分では、上層の4-2 a層の土壌化に伴い失われ、断面では観察できるが平面的な調査を行えない部分も多くあった。しかし、1区では、比較的安定して観察できた層である。そのため、本書では、1区に

ついでのみ、平面図を掲載し、遺構の記述を行っている。弥生時代を中心とした時期と考えられる層である。

4-4 a層 明褐灰～褐灰細砂シルトで、微高地以外の1区・2区・6区・8区を中心とした部分で見られる層である。全体的には、4-3 a層より暗色化は弱い。土壌層である。出土遺物などから大きく弥生時代に考えられる層準である。

5 a層

5 a層は、大きく5-1 a層と5-2 a層の2層に分層している。土質はおおむね粗砂～極粗砂を多く含むシルトで、4 a層系とは大きく土質が異なる。これは、下層の5 b層を母材とするためである。

5-1 a層 暗褐～褐灰中砂～極粗砂混じりシルト。土壌層。

5-2 a層 黒褐～灰褐中砂～極粗砂シルト混じりである。土壌層。

5-1 a層よりも5-2 a層が中砂～極粗砂を多く含む。微高地上では上層からの攪拌や土壌化の影響で認識することができなかった。また、5-1 a層と5-2 a層も分層ができない部分も多く見られ、基本層序として設定しているが、遺構の検出は、上層の4-4 a層を除去した面で行っている。土壌層である。出土遺物は、極めて少ないものの縄文時代晩期～弥生時代前期にあたる層準と考えられる。

5 b層 5 a層の母材となる自然堆積層である。堆積状況は場所によって大きく異なり、6区・8区東半での層厚は最大25cmを測るほど厚い堆積が見られるが、8区西半～1区東半ではほとんど見られない。そして、1区の西および、5区・9区・3-1区・3-2区・7区でも厚く堆積しており最大85cmを測る。縄文時代晩期頃の層準と考えられる。

6 a層

6 a層は、暗色化が非常に強い土壌層で、暗灰・オリーブ黒シルト中砂若干入る層である。調査区全体を通してみると大きく3層に分層できる。

6-1 a層 暗灰極粗砂～粗砂混じりシルト、細砂～シルトブロックφ10～20mm入る。土壌層。

6-2 a層 黒細砂シルト 中砂～粗砂多く入る。土壌層。

6-3 a層 黒褐シルト、細砂やや混じる。中砂～粗砂粒若干入るである。土壌層。

各々の土壌層間に自然堆積層が見られる部分もある。6-1 b層・6-2 b層・6-3 b層と呼称している。調査は、6-1 a層除去面で終了しているが、下層にも縄文土器の出土が見られるため、部分的に掘り下げて遺構や遺物の検出に努めた。6-1 a層上面で、縄文時代後期の土器や、石器及び剥片の集中する遺構を検出しており、縄文時代後期に相当する層準と考えられる。

7 a層

暗色化の著しい土壌層である6 a層以下にも、薄い青灰色の地層をはさんで複数の土壌層の堆積が見られる。その内、1区において上面で流路を検出した土壌層を7 a層とした。7 a層は、暗灰シルトで粗砂～細礫含む。7 a層も土質や暗色化の違いから、さらに細分できる。周辺の調査成果から縄文時代後期に相当すると考えられる。

8 a層

同様に暗色化が著しい土壌層である。黒シルトで粗砂～細礫を多く含み、未分解の有機物が多く含まれる。上面を、1区において、部分的に調査を行った。7 a層との間に、氾濫堆積物が認められる。

7 a層と同じく、周辺の調査成果から縄文時代後期に相当すると考えられる。

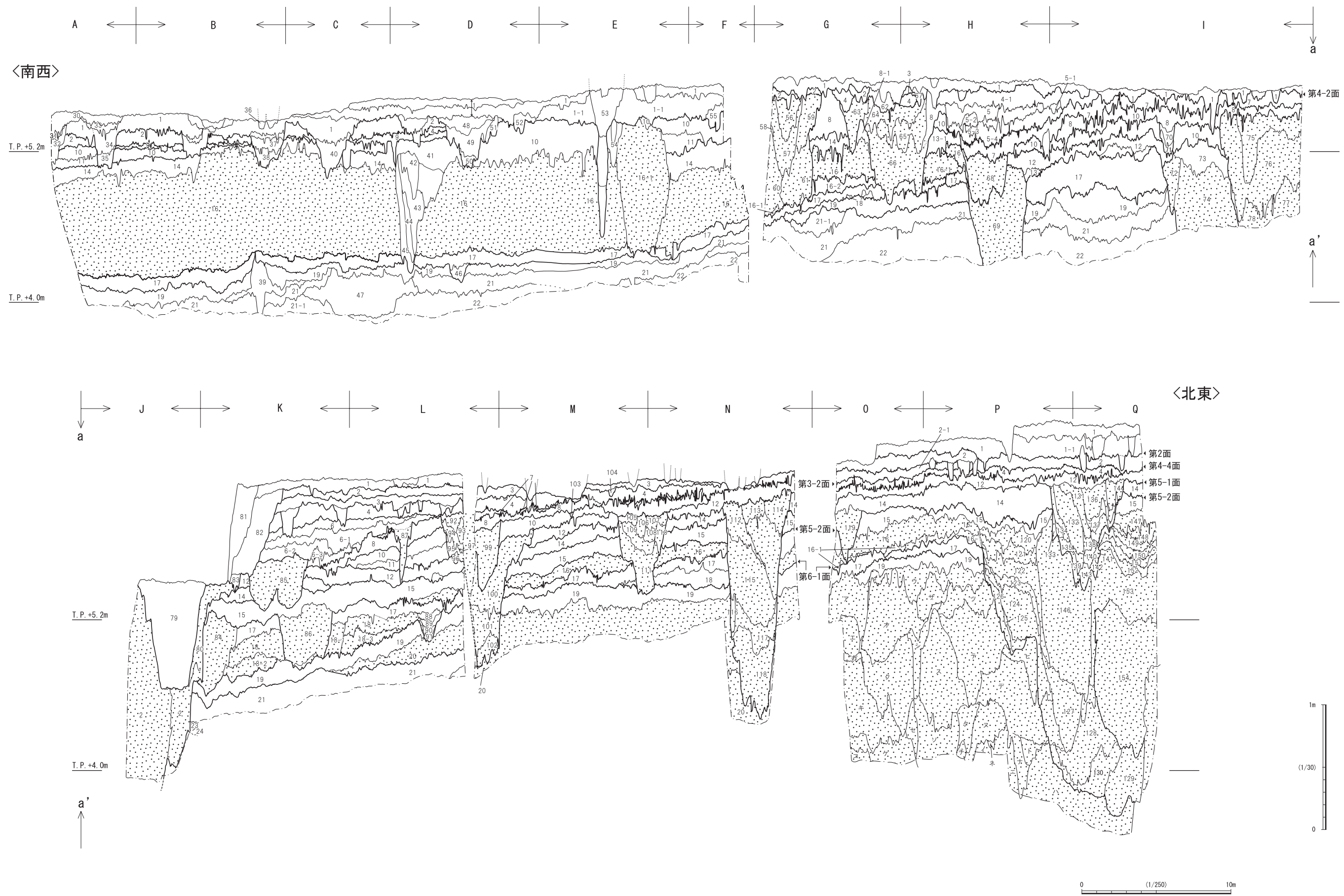


图6 A断面地層模式図

〈南〉

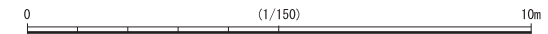
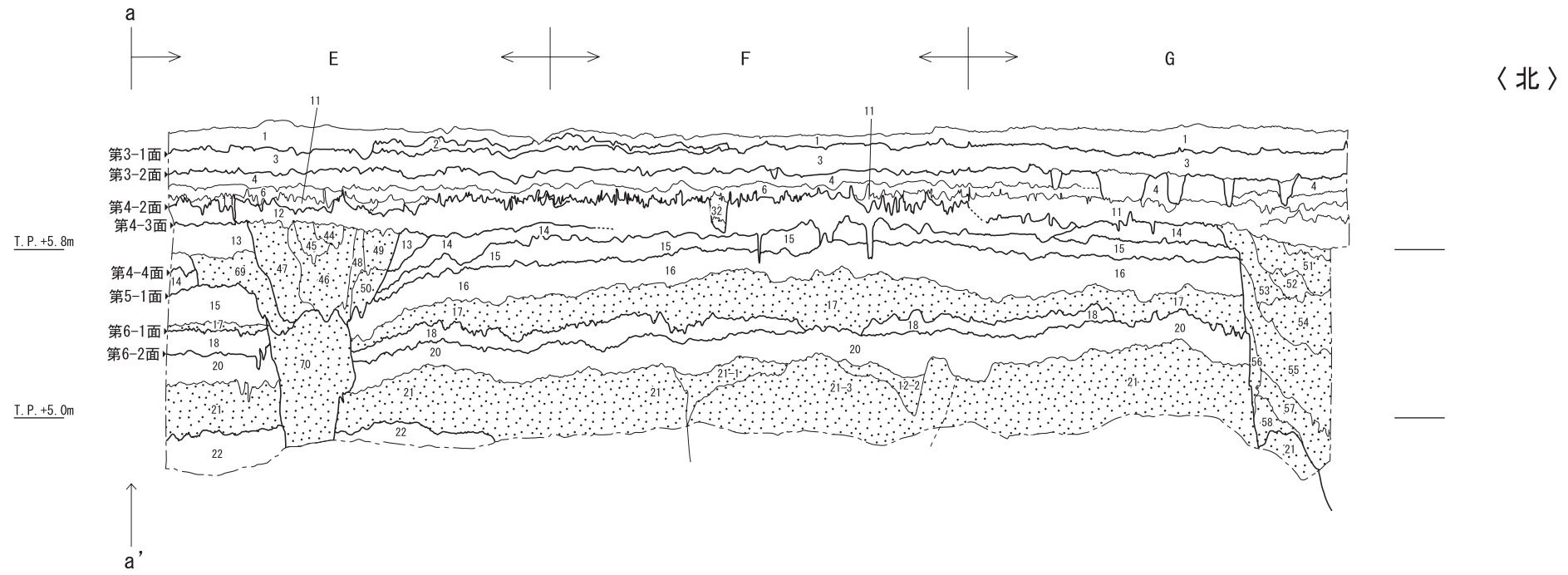
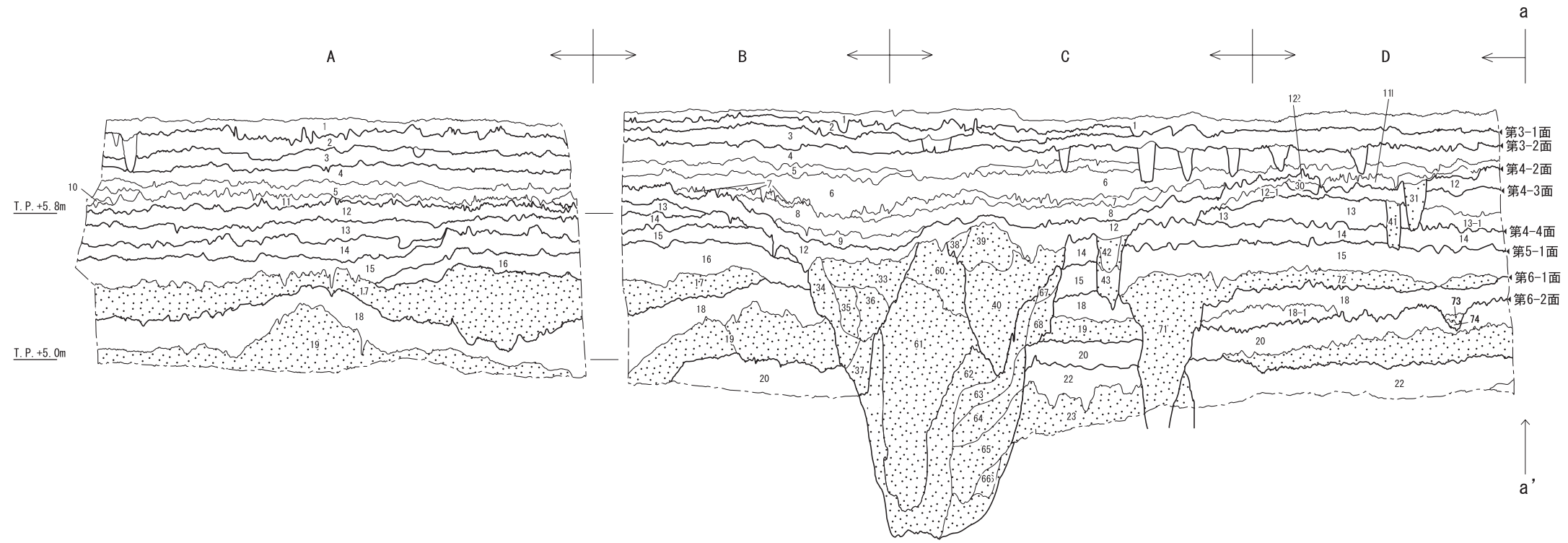
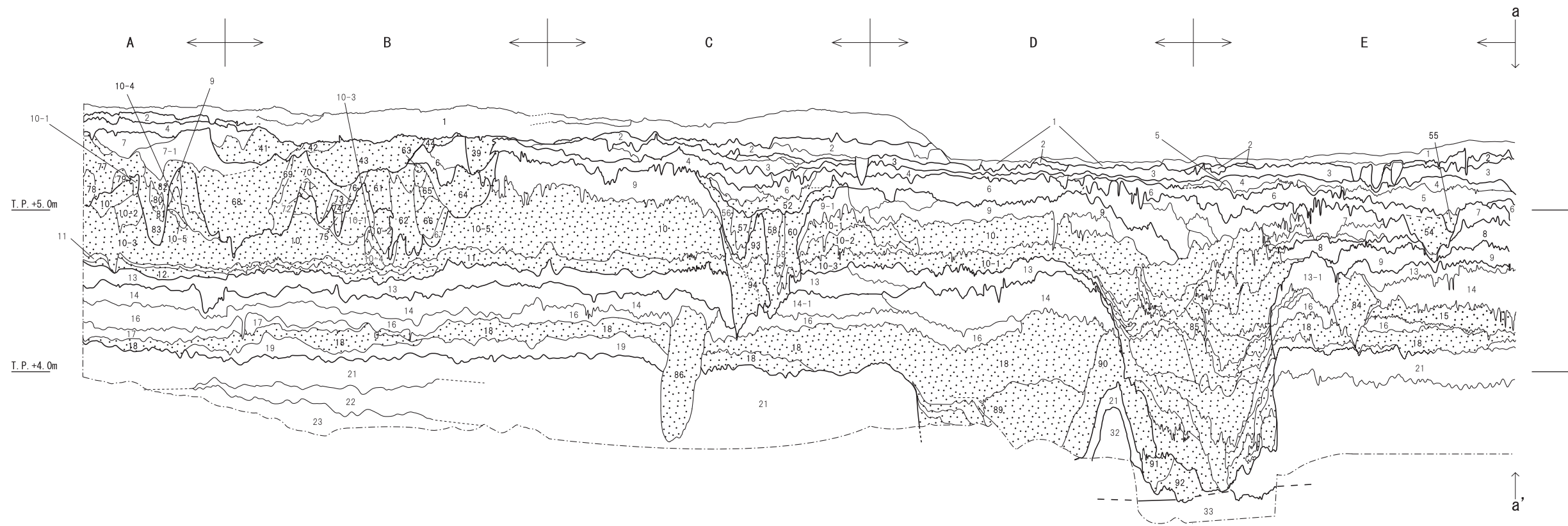


图7 B断面地層模式图

〈北西〉



〈南東〉

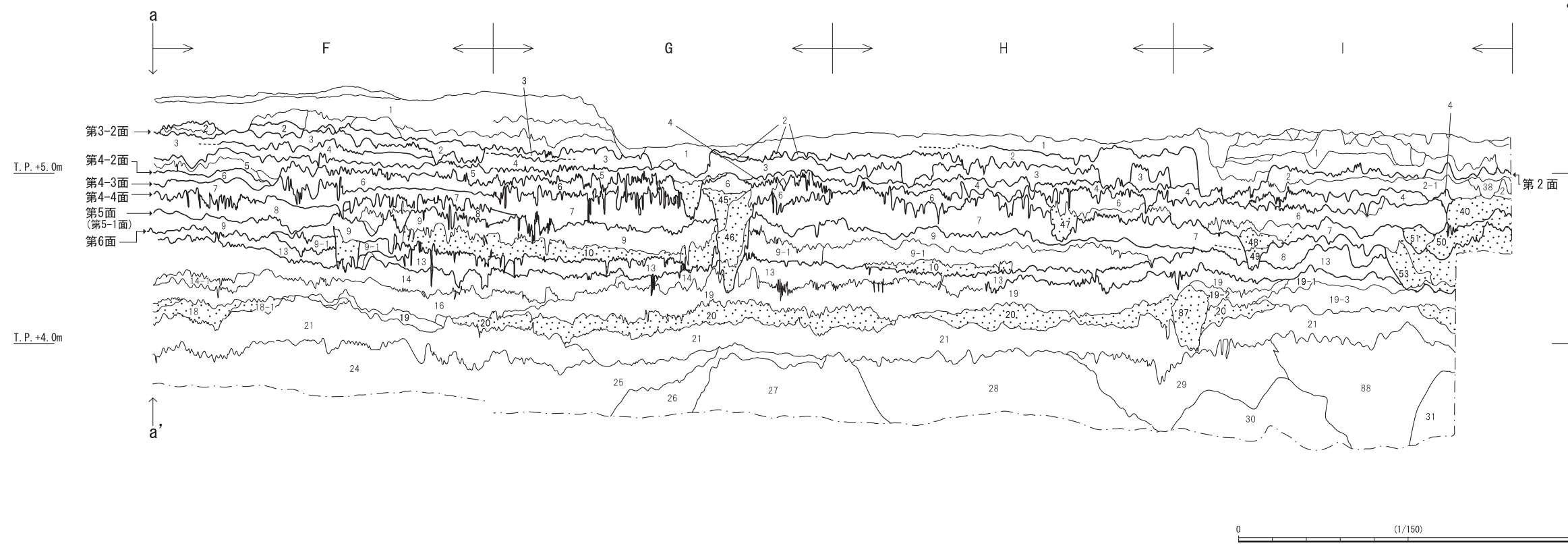


图8 C断面地层模式图

〈南〉

〈北〉

〈西〉

〈東〉

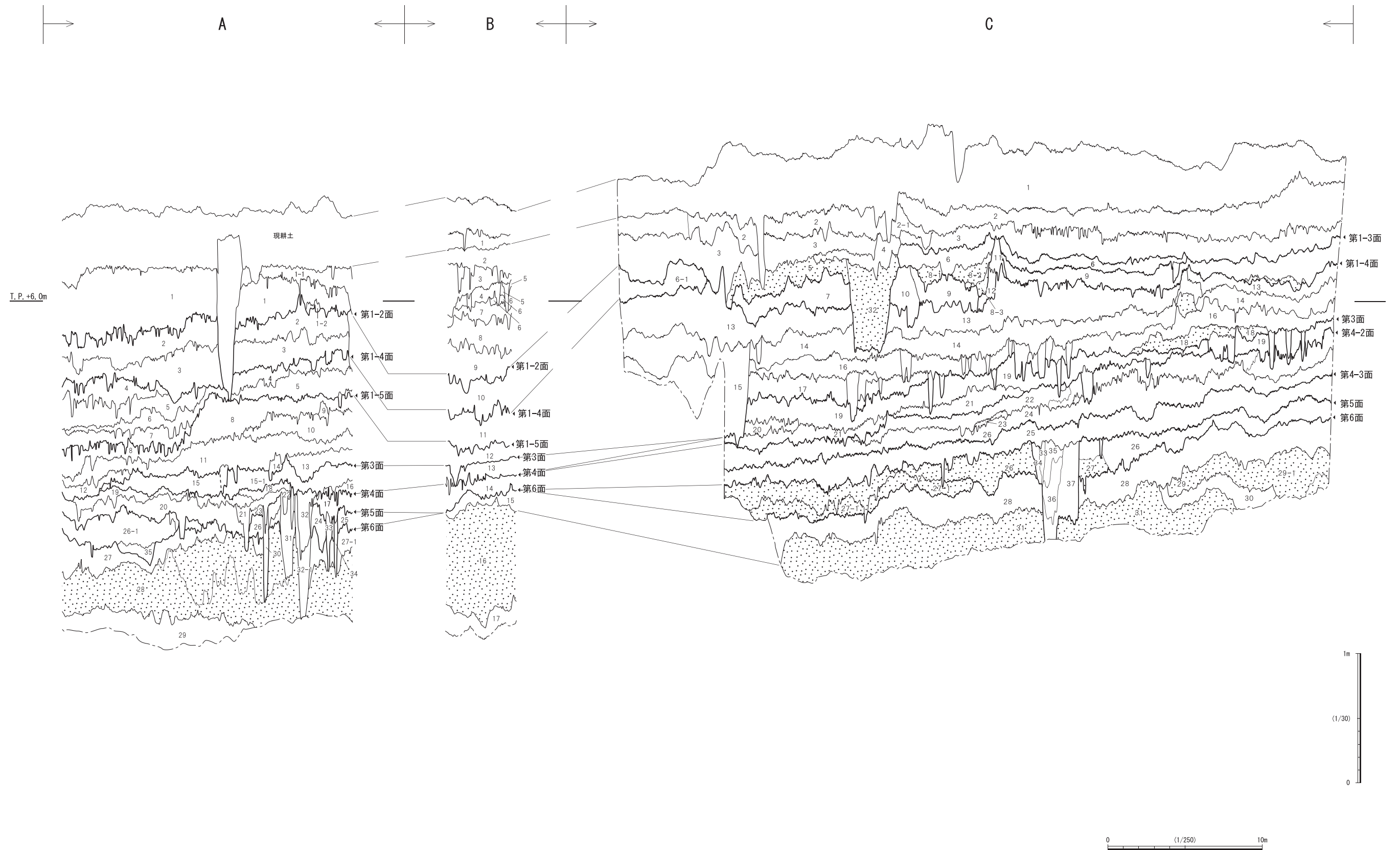


图9 D断面地层模式图

表2 基本層序断面図層名表

A 断面地層模式図

A	1	2.5Y7/1	灰白	細砂 シルトブロック混じる	1a層
B	1	7.5Y7/1~7/2	灰白	細砂 シルトブロック混じる 小礫若干混じる	1a層
C	1	2.5Y7/3~6/3	浅黄~オリーブ黄	細砂シルト シルトブロック混じる 上部シルト多い Fe沈着	1a層
D	1	2.5Y6/1	黄灰	細砂~中砂 シルトやや混じる 小礫混じる	1a層
E	1	2.5Y8/2~7/2	灰白~灰黄	細砂~中砂シルト混じり シルトブロック混じる 極粗砂~粗砂粒混じる Fe沈着	1a層
E	1-1	2.5Y8/2~6/2	灰白~灰黄	細砂~中砂 シルト混じり シルトブロック混じる 小礫~極粗砂~粗砂粒混じる Fe沈着	1a層
F	1	10YR7/2	にぶい黄褐	細砂 ややシルト混じる 中砂~粗砂粒混じる	1a層
G	1	5Y6/2	灰オリーブ	細砂~中砂混じりシルト 粗砂若干含む	1a層
H	1	7.5YR4/1~3/1	褐灰~黒褐	シルト 中砂若干混じる Mn沈着	1a層
L	1			細砂シルト混じり 中砂~粗砂粒混じる	1a層
P	1	10YR6/4	にぶい黄橙	細砂~中砂 シルト混じり	1a層
Q	1	2.5Y6/2	灰黄	細砂シルト 中砂混じり Fe・Mn沈着 ラミナ状に細砂~中砂が挟在する	1a層
Q	1-1	10YR5/4	にぶい黄褐	中砂~粗砂混じりシルト Fe・Mn沈着	1a層
A	2	2.5Y6/2	灰黄	細砂シルト 中砂粒混じる	2a層
B	2	5Y6/3	オリーブ黄	細砂シルト 中砂~極粗砂粒混じる	2a層
D	2	5Y5/2	灰オリーブ		2a層
G	2	5YR4/3	にぶい赤褐	細砂~中砂混じりシルト Fe・Mn沈着	2a層
L	2			細砂シルト 中砂粒若干混じる Mn	2a層
P	2	7.5YR6/2	灰褐	シルト 細砂混じり 中砂混じる	2a層
P	2-1	7.5YR6/3	にぶい褐	シルト 中砂混じる	2a層
Q	2	10YR6/3	にぶい黄橙	細砂混じりシルト 中砂混じる Fe・Mn沈着	2a層
H	3	10YR4/2	灰黄褐	中砂混じり 土器小片含む	3-1a層
L	3	10YR4/2	灰黄褐	細砂シルト 中砂粒若干混じる Mn沈着 やや細砂多い	3-1a層
M	3	10YR5/3	にぶい黄褐	細砂シルト 中砂~粗砂粒混じる	3-1a層
D	4	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂シルト 中砂~粗砂多く混じる 土器片多く混じる	3-2a (3-2a相当) 層
G	4	2.5Y6/2~5/2	灰黄~暗灰黄	細砂混じりシルト 粗砂含む 上面Fe沈着あり 小礫0.5mm若干混じる	3-2a (3-2a相当) 層
H	4	10YR3/2	黒褐	シルト 粗砂混じり	3-2a (3-2a相当) 層
H	4-1	10YR4/2	灰黄褐	シルト 中砂混じり	3-2a層
L	4			シルト 中砂~極粗砂粒混じる	3-2a層
M	4	10YR4/3	にぶい黄褐	細砂シルト 中砂~粗砂粒混じる Fe・Mn沈着	3-2a層
P	4	7.5YR6/2	灰褐	シルト 細砂混じり 中砂若干混じる	3-2a (3-2a相当) 層
Q	4	10YR4/3	褐灰	細砂混じりシルト 中砂混じる 10YR4/6 褐シルトブロック混じる	3-2a (3-2a相当) 層
H	5	10YR5/2	灰黄褐	シルト 中砂~極細砂混じる	3-2a下層凹み
H	5-1	7.5Y3/1	黒褐	シルト 極細砂~粗砂多く混じる	3-2a下層凹み
H	5-2	10YR7/3~5/3	にぶい黄橙~にぶい黄褐	細砂シルト混じり 中砂~極細砂混じる	3-2a下層凹み
H	5-3	10YR6/2	灰黄褐	粗砂~中砂シルト若干混じる	3-2a下層凹み
H	5-4	10YR6/2~3/2・10YR6/3~4/3	灰黄褐~黒褐・にぶい黄橙~にぶい黄褐	細砂主体 中砂混じりシルトブロック多く混じる 下層のまきあげ ブロック多い 凹凸多い・凹み層近くでは、10YR6/3~4/3 にぶい黄橙~にぶい黄褐 シルト中砂混じる、シルト多く含む	3-2a下層凹み
K	6	10YR3/3	暗褐	シルト中砂~粗砂粒混じる	3-2a下層
K	6-1	10YR5/1	褐灰	中砂~粗砂シルト混じり	3-2a下層
K	6-2	2.5YR4/4	褐	細砂シルト混じり	3-2a下層
K	6-3	7.5YR4/2	灰褐	細砂シルト中砂~極粗砂粒混じる	3-2a下層
H	7	10YR4/1~2/1	褐灰~黒	シルト 上半は中砂混じる 下半は細砂 ラミナあり炭化物混じる	4-2a上層
I	7	10YR3/2	黒褐	シルト中砂混じり 粗砂若干混じる シルト分多い	4-2a上層
M	7	10YR3/2	黒褐	細砂シルト 中砂~粗砂粒若干混じる 暗色化 上層により 上面凹凸著しい	4-2a上層
G	8	10YR3/2	黒褐	中砂~細砂混じりシルト 粗砂若干混じる 土器片若干混じる	4-2a下層
G	8-1	7.5YR6/1~4/1	褐灰	中砂~粗砂混じりシルト	4-2a下層
H	8	10YR5/1~5/2	褐灰~灰黄褐	中砂~粗砂混じりシルト	4-2下層
I	8	7.5YR6/1~4/1	褐灰	シルト 中砂若干混じる Mn沈着	4-2a下層
K	8	7.5YR6/1~4/1	褐灰	シルト 中砂若干混じる Mn沈着	4-2a下層
L	8			シルト 中砂粒若干混じる Fe・Mn沈着	4-2a下層
M	8	7.5YR4/3	褐	細砂シルト 中砂~粗砂粒若干混じる 上面凹凸著しい	4-2a下層
B	9	2.5Y5/1	黄灰	中砂 シルトやや混じる 極粗砂粒多く混じる 土器片混じる	4-3a上層
D	9	2.5Y3/2	黒褐	シルト 細砂やや混じる 中砂粒混じる 土器片混じる	4-3a上層
A	10	10YR5/1	褐灰	細砂シルト 中砂~粗砂粒混じる	4-3a層
B	10	10YR5/2	暗灰黄	シルト 中砂~粗砂粒 土器片混じる	4-3a層
D	10	2.5Y3/1	黒褐	シルト細砂混じり 中砂~粗砂粒多く混じる土器片混じる 上半シルト多い 下半細砂多い	4-3a層
E	10	10YR3/2	黒褐	中砂~細砂シルト 粗砂~極粗砂粒混じる 上半部ややシルト多い 下面層理面不明瞭	4-3a層
H	10	10YR3/1	黒褐	シルト 中砂若干混じる Mn・Fe沈着若干あり 根跡あり	4-3a層
H	10	10YR5/2~4/2	灰黄褐	シルト細砂混じり 若干中砂混じるφ2~3cmシルトブロック多く混じる	4-3a層

I	10	7.5YR7/1~5/1	明褐色～褐色	細砂 中砂若干混じる シルトブロック φ10～5mm混じる	4-3a層
L	10	7.5YR7/1~5/1	明褐色～褐色	シルト 中砂～極粗砂粒混じる	4-3a層
M	10	7.5YR4/2	灰褐色	細砂シルト 中砂粒若干混じる	4-3a層
A	11	10YR6/1	褐色	細砂シルト 中砂粒混じる	4-3a下層
F	11	10YR6/1	褐色	やや土壌化した層	4-3a下層
L	11	10YR6/1	褐色	シルト 細砂混じる	4-3a下層
H	12	10Y6/3~4/3	にぶい黄橙～にぶい黄褐色	細砂シルト混じり シルトブロック 粗砂～極粗砂混じる 27の土壌化著しい層	4-4a層
I	12	7.5YR7/1~5/1	明褐色～褐色	細砂 粗砂混じる 下層のブロック若干混じる	4-4a層
K	12			細砂 シルト混じり	4-4a層
L	12			細砂シルト	4-4a層
M	12	10YR4/2	灰黄褐色	細砂 ややシルト含む 中砂～粗砂粒混じる	4-4a層
N	12	7.5Y5/4	にぶい褐色	シルト 細砂混じる	4-4a層
P	12	7.5YR6/2~3/2	灰褐色～黒褐色	シルト 中砂混じる 上部凹凸著しい	4-4a層
Q	12	10YR4/1	褐色	細砂混じりシルト 10YR4/6 褐色シルトブロック混じる 上面凹凸著しい	4-4a層
H	13	10YR5/1	褐色	シルト 中砂若干混じる	4-4a下層
H	13-1	10YR6/1~3/1	褐色～黒褐色	細砂～シルト 中砂混じる 上層の土壌化の影響受ける	4-4a下層
A	14	10YR6/1~3/1	褐色～黒褐色	中砂～粗砂 やや土壌化	5a層
B	14	2.5Y6/1	青灰	極粗砂～粗砂 下面は不明瞭	5a層
C	14	2.5Y4/1	黄灰	中砂 上層下部でやや土壌化した層	5a層
E	14	2.5Y4/1	黄灰	上層の下部で土壌化の影響を受けた層	5a層
G	14	10YR4/1~2/1	褐色～黒	中砂～細砂 上層のブロック若干混じる 下層上部が若干土壌化した層	5a層
K	14	10YR4/1~2/1	黒褐色～黒	細砂シルト 粗砂～極粗砂粒多く混じる シルトブロック混じる	5-1a層
M	14	2.5Y3/1	黒褐色	細砂シルト 中砂～極粗砂混じり	5-1a層
N	14	7.5YR3/3	暗褐色	中砂～極粗砂粒混じりシルト	5-1a層
O	14	10YR4/1	褐色	シルト 中砂混じり・粗砂～極粗砂混じる	5-1a層
P	14	10YR6/3	にぶい黄橙	中砂～粗砂混じりシルト	5-1a層
Q	14	10YR3/1	黒褐色	細砂混じりシルト 中砂～粗砂混じる	5-1a層
K	15	10YR3/1	黒褐色	細砂シルト 粗砂～極粗砂 ややシルトブロック混じる	5-2a層
L	15	10YR3/1	黒褐色	中砂～極粗砂 シルト混じり	5-2a層
M	15	5Y2/2	オリーブ黒	中砂～極粗砂 細砂シルトやや混じる	5-2a層
N	15	7.5YR2/2	黒褐色	中砂～極粗砂粒シルト混じり	5-2a層
O	15	7.5YR4/2	灰褐色	砂混じり粘質シルト Fe沈着	5-2a層
P	15	10YR6/4	にぶい黄橙	中砂～粗砂混じりシルト 上層よりシルト少ない	5-2a層
Q	15	2.5Y3/2	黒褐色	中砂～粗砂シルト混じり 若干土壌化	5-2a層
B	16	7.5GY6/1	緑灰	中砂～極粗砂 極粗砂～粗砂 ラミナあり	5b層
D	16	10YR8/1~5/1	灰白～褐色	上半細砂～中砂 下面中砂～粗砂 ラミナあり	5b層
E	16	10YR8/1~5/1	灰白～褐色	中砂～極粗砂 ラミナあり	5b層
E	16-1	10YR8/1~5/1	灰白～褐色	粗砂～極粗砂 ラミナあり	5b層
F	16	10Y8/1~6/1	灰白～灰	細砂 ラミナあり	5b層
G	16	5B6/1	青灰	細砂 ラミナあり Fe沈着あり 根跡あり	5b層
G	16-1	5B6/1	青灰	細砂 ラミナあり	5b層
G	16-2	7.5Y6/1~4/1	灰	中砂～粗砂 ラミナあり 上面凹凸多い 粗砂がブロック状に混じる	5b層
H	16	10YR7/1~4/1	灰白～褐色	細砂～中砂 上層の影響か? 若干土壌化 部分的にラミナあり	5b層
H	16-1	10YR6/2~5/2	灰黄褐色	極細砂～粗砂 シルトブロック混じる ラミナあり	5b層
M	16	5Y4/1	灰	細砂～極粗砂 若干土壌化 ラミナあり	5b層
N	16	7.5YR4/1	褐色	中砂～粗砂 ややシルト混じる ラミナあり	5b層
O	16	10YR4/4	褐色	粘土 シルト混じり砂礫 ラミナあり	5b層
O	16-1	10YR4/2	灰黄褐色	砂礫混じりシルト ラミナあり	5b層
P	16	10YR6/2	灰黄褐色	中砂～粗砂・シルト若干混じる ラミナあり	5b層
P	16-1	10YR5/2	灰黄褐色	細砂～中砂・シルト 細砂ブロック混じる 上面凹凸あり	5b層
B	17	N3/0	暗灰	細砂シルト 中砂～粗砂粒混じる	6-1a層
D	17	N3/0	暗灰	シルト 中砂粒若干混じる	6-1a層
E	17	N3/0	暗灰	シルト	6-1a層
F	17	N3/0	暗灰	シルト 中砂～極粗砂粒混じる	6-1a層
G	17	5Y3/1	オリーブ黒	中砂混じりシルト	6-1a層
H	17	10YR2/1	黒	シルト 粗砂～中砂混じる	6-1a層
I	17	N3/0	暗灰	極粗砂～粗砂混じりシルト 細砂～シルトブロック φ10～20mmが混じる よくしまる	6-1a層
K	17	7.5YR6/1	褐色	細砂ややシルト混じる 中砂～粗砂粒混じる	6-1a層
L	17	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト 中砂～粗砂粒混じる	6-1a層
M	17	10YR4/2	灰黄褐色	細砂シルト Fe・Mn沈着あり	6-1a層
N	17	7.5YR5/2	灰褐色	中砂混じりシルト	6-1a層
O	17	5Y2/2	オリーブ黒	砂混じりシルト質粘土(暗色化)～同色砂礫混じり粘質シルト	6-1a層
P	17	10YR4/1	褐色	細砂シルト 中砂～粗砂混じる	6-1a層
G	18	7.5Y7/1	灰白	中砂～細砂 ラミナあり	6-1b層
K	18	2.5Y6/2	灰黄	細砂 ラミナあり	6-1b層
K	18-1	7.5Y7/1	灰白	細砂 ラミナあり	6-1b層
K	18-2	2.5Y4/1	黄灰	中砂シルト 細砂混じり 粗砂～極粗砂粒混じる やや土壌化	6-1b層
L	18	10YR6/2	灰黄褐色	中砂シルト 粗砂～極粗砂粒混じる ラミナあり	6-1b層
L	18-3	5Y7/3	浅黄	細砂 Fe沈着あり ラミナあり	6-1b層
N	18	10YR4/3	にぶい黄褐色	中砂～粗砂 シルト混じり ラミナあり	6-1b層

B	19	7.5GY5/1	緑灰	細砂シルト混じり 中砂～粗砂混じる	6-2a層
C	19	7.5GY5/1	緑灰	細砂シルト混じり 中砂～粗砂混じる	6-2a層
D	19	10Y5/1	灰	細砂シルト	6-2a層
E	19	N4/0	灰	シルト 細砂やや混じる ブロック混じる	6-2a層
G	19	5Y3/1	オリブ黒	中砂～粗砂混じりシルト上層よりやや粗砂を含む	6-2a層
H	19	10YR2/1	黒	細砂シルト 中砂～粗砂多く混じる	6-2a層
I	19	N3/0	暗灰	中砂シルト混じり 極粗砂～粗砂若干混じる	6-2a層
K	19	2.5Y2/1	黒	シルト 細砂やや混じる 中砂～粗砂粒若干混じる	6-2a層
L	19	10YR3/1～2/1	黒褐～黒	シルト 上部中砂粒若干混じる	6-2a層
M	19	10YR2/1	黒	細砂シルト	6-2a層
N	19	10YR3/1	黒褐	シルト	6-2a層
O	19	10YR4/3	にぶい黄褐	砂混じりシルト～粘質シルト 暗色化	6-2a層
P	19	10YR4/1	褐灰	細砂シルト 中砂～粗砂混じる 上層よりシルト少ない	6-2a層
L	20	5G6/1	緑灰	細砂 粗砂～極粗砂粒わずかに混じる ラミナあり	6-2b層
L	20			細砂シルト・中砂 ラミナあり	6-2b層
N	20			細砂～中砂 ラミナあり	6-2b層
B	21	N2/0	黒	細砂～中砂 シルトやや混じる	6-3a層
B	21-1	2.5GY2/1	黒	細砂～中砂 シルト混じる	6-3a下層
C	21	N2/0	黒	細砂～中砂 シルトやや混じる	6-3a層
D	21	N3/0	暗灰	シルト 細砂～粗砂粒混じる	6-3a層
E	21	N2/0	黒	シルト 中砂～粗砂粒混じる	6-3a層
F	21	N4/0～3/0	灰～暗灰	中砂～粗砂 シルト	6-3a層
G	21	5Y3/1～2/1	オリブ黒～黒	中砂混じりシルト 上層よりシルト分が強く粗砂があまり混じらない	6-3a層
G	21-1	5Y3/2	オリブ黒	上層より粗砂を多く含み下半には粗砂ブロックが多くみられる	6-3a層
H	21	10YR2/2	黒褐	細砂シルト 若干中砂混じる	6-3a層
I	21	N3/0	暗灰	中砂～細砂混じりシルト 上層よりややシルト分多い	6-2a層
K	21	2.5Y3/2	黒褐	シルト 細砂やや混じる 中砂～粗砂粒若干混じる	6-3a層
L	21	N3/0	暗灰	シルト 細砂混じり	6-3a層
D	22	N2/0	黒	シルト やや中砂～粗砂粒混じる	6-3a層
E	22	N2/0	黒	シルト	6-1a下層
F	22	N2/0	黒	細砂シルト 中砂～粗砂粒混じる	6-1a下層
G	22	5Y2/2～2/1	オリブ黒～黒	中砂混じりシルト 上層よりシルト分が多い	6-2a下層
I	22	N6/0～5/0	灰	細砂～中砂 ラミナあり	6-2b層
J	23	7.5GY6/1	緑灰	細砂 ラミナあり	6-3b層
J	24	N2/0	黒	中砂～極粗 砂・シルト	6-4a層
A	30	5Y7/2	灰白	シルトブロック混じる	溝 埋土
A	31	5Y7/2	灰白	細砂	溝 埋土
A	32	5Y7/2	灰白	中砂～細砂 シルトブロック混じる	溝 埋土
A	33	7.5Y7/1	灰白	細砂～シルト	溝 埋土
A	34	7.5Y7/1～7/2	灰白	細砂～中砂 シルトブロック混じる	第2面溝 埋土
A	35	10YR5/1～4/1	褐灰	シルト 中砂混じりのブロック土	第2面溝 埋土
B	36	5Y6/3	オリブ黄	細砂～シルト ラミナ部分的にあり	第2面溝 埋土
B	37	5Y7/1	灰白	細砂 シルトブロック混じる 細砂～中砂のブロック土	第2面溝 埋土
B	38	2.5Y6/2	灰黄	シルトブロック ブロック土	第2面溝 埋土
B	39			中砂～極粗砂 中砂	第6-2面流路 埋土
C	40	2.5Y6/1～6/3	黄灰～にぶい黄	シルトブロックと細砂 中砂のブロック土埋土	第2面溝 埋土
D	41	2.5Y4/2～3/2	暗灰黄～黒褐	細砂シルト混じり 下半は細砂～中砂多く混じる 立ち上がりは不明だが遺構内埋土	4-3a層遺構 埋土
D	42	10YR4/3	にぶい黄褐	中砂～細砂	第2面溝 埋土
D	43	10YR3/1～1.7/1	黒褐～黒	細砂 ややシルト混じる 中砂～粗砂粒混じる	4-3a層中遺構 埋土
D	44	10Y6/1	灰	細砂～中砂	4-3a層中遺構 埋土
D	45	2.5Y7/1	灰白	中砂～粗砂	4-3a層中遺構 埋土
D	46	2.5Y7/1	灰白	細砂～中砂	6-1a下層a2流路 埋土
C	47			中砂～粗砂	6-1a下層a3流路 埋土
D	48	5Y7/1～7/3	灰白～浅黄	細砂 シルト混じり シルトブロックφ1～2cm多く混じる 上部Fe沈着 小礫若干混じる	第2面溝 埋土
D	49	5Y7/1	灰白	細砂 中砂～粗砂 シルトブロック混じる 小礫混じる	第2面溝 埋土
D	50	5Y5/2～4/2	灰オリーブ	シルトブロックと細砂のブロック埋土	第2面溝 埋土
D	51	2.5Y7/1	灰白	中砂～細砂 シルト混じり	第2面溝 埋土
D	52	2.5Y7/1～7/2	灰白～灰黄	細砂 シルト混じり シルトブロック混じる 上部シルト多い Fe沈着	耕作溝 埋土
E	53			中砂～細砂 旧耕土 小礫～中礫	井戸 埋土
E	54	10YR5/2	灰黄褐	シルト 中砂～粗砂粒混じる	遺構 埋土
F	55	10YR7/2	にぶい黄橙	細砂 シルト混じり	耕作溝 埋土
G	56	10YR8/1～6/1・6/2	灰白～褐灰・灰黄褐	細砂～中砂・粗砂 ラミナあり	172流路他 埋土
G	57	10YR8/1～6/1・5/2～5/3	灰白～褐灰・灰黄褐～にぶい黄褐	細砂～粗砂 下半にシルト ラミナあり	172流路他 埋土
G	58	10YR5/2	灰黄褐	細砂混じりシルト 土器小片、炭化物混じる	172流路他 埋土
G	59	10YR4/4	褐	シルトやや混じる ラミナを持つブロックφ2～3cm若干混じる	172流路他 埋土
G	60	2.5Y8/1～6/1	灰白～黄褐	中砂～粗砂 シルトブロック、小礫混じる ラミナあり	172流路他 埋土
G	61	10YR8/4～6/4	浅黄橙～にぶい黄褐	粗砂～中砂 ラミナ有 Fe沈着	172流路他 埋土
G	62	10YR5/4	にぶい黄褐	中砂～粗砂混じりシルト	172流路他 埋土最上層
G	63	2.5Y7/1～5/1	灰白～黄灰	中砂～粗砂 ラミナあり	172流路他 埋土
G	64	10YR6/2～4/2	灰黄褐	中砂～極粗砂混じりシルト	172流路他 埋土
G	65	10YR7/1～5/1	灰白～褐灰	粗砂～細砂 ラミナあり	172流路他 埋土
G	66	10YR8/1～6/1・6/2	灰白～褐灰・灰黄褐	細砂～極粗砂 小礫混じり ラミナあり	172流路他 埋土
H	67	10YR6/3	にぶい黄橙	細砂 シルト混じり 小溝埋土	小溝 埋土
H	68	10YR8/1～2/1	灰白～黒	粗砂～シルト 水成堆積層 ラミナあり	431流路 埋土

H	69	10YR6/1~2/1	褐灰~黒	粗砂~シルト	水成堆積層	ラミナあり	第6-1面流路	埋土	
I	70	7.5YR4/1~4/2	褐灰~灰褐	シルト	中砂~細砂混じる	溝埋土	377溝	埋土	
I	71	7.5YR4/1~4/2	褐灰~灰褐	シルト	中砂~細砂混じり	下半に中砂多く混じる	377溝	埋土	
I	72	7.5YR5/1~5/4	褐灰~にぶい褐	シルト~細砂	ラミナあり	溝埋土	第5-1面流路	埋土	
I	73	7.5YR6/1~5/1	褐灰	細砂シルト	中砂若干混じる		第5-1面流路	埋土	
I	74	7.5YR7/1~4/1	明褐灰~褐灰	細砂~粗砂	シルト挟む	ラミナあり	溝埋土	第5-1面流路	埋土
I	75	7.5YR6/2~4/3	にぶい褐~褐	極粗砂~細砂	シルト	溝埋土	第4-3面溝	埋土	
I	76	7.5YR7/1~4/1	明褐灰~褐灰	極粗砂~細砂	シルト	溝埋土	第4-3面溝	埋土	
I	77	N3/0	暗灰	シルト細砂	溝底堆積層	溝埋土	第4-3面溝	埋土	
I	78	N4/0	灰	シルト細砂	中砂混じり	溝底堆積層	溝埋土	第4-3面溝	埋土
J	79	10YR6/1~4/1	褐灰	細砂シルト	ブロック土	2面攪乱埋土	溜井	埋土	
K	80			細砂シルト	旧耕土		1360流路	埋土	
K	81	10YR6/1	褐灰	細砂シルト混じり	中砂~中礫混じる	旧耕土	旧耕土		
K	82	10YR6/4~4/4	にぶい黄橙~褐	細砂シルト混じり	中砂~小礫混じる	旧耕土	段差盛土		
K	83	10YR5/1	褐灰	細砂	旧耕土		段差盛土		
K	84	2.5Y7/1~6/1	灰白~黄灰	中砂~極粗砂			第6-1面流路	埋土	
K	85	10YR7/1~5/1	3/2~ 3/3 暗褐	灰白~褐灰	黒褐~ 暗褐	シルト	粗砂~中砂混じる	第4-2面上流路	埋土
K	86	2.5Y7/3~4/3	浅黄~オリーブ褐	中砂~極粗砂	細砂混じる	下部シルトブロック	細砂	第6-2面流路	埋土
L	87	10YR5/2	灰黄褐	上半中砂~粗砂混じるシルト	下半細砂~中砂混じるシルト			流路	埋土
L	88	10YR7/1	灰白	細砂シルト			6-1a層下面流路	埋土	
L	89	10YR6/1	褐灰	細砂シルト	中砂粒混じる		6-1a層下面流路	埋土	
L	90	5Y7/1	灰白	細砂			6-1a層下面流路	埋土	
L	91	5Y5/1	灰	中砂~細砂シルト			6-1a層下面流路	埋土	
L	92	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	粗砂~中砂・細砂	ラミナあり		845流路	埋土	
L	93	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	細砂シルト	ラミナあり		845流路	埋土	
L	94	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	中砂~粗砂	細砂~シルト	ラミナあり	845流路	埋土	
L	95	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	細砂	粗砂~中砂	細砂シルト	ラミナあり	845流路	埋土
L	96	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	細砂~中砂	ラミナあり		845流路	埋土	
L	97	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	細砂	ラミナあり		845流路	埋土	
L	99	10YR5/1~6/1	褐灰	中砂~極粗砂	上面シルト	やや土壌化	846流路	埋土	
L	100	2.5Y7/1~6/1	灰白~黄灰	細砂主体	粗砂~中砂	ラミナあり	846流路	埋土	
L	101	5Y3/1	オリーブ黒	シルト	中砂混じり	炭化物混じる	ラミナあり	846流路	埋土
L	102	2.5Y4/1	黄灰	中砂	ラミナあり		846流路	埋土	
M	103	N7/0	灰白	極粗砂~中砂	溝埋土		溝	埋土	
M	104	2.5Y7/2	灰黄	細砂シルト	小溝埋土		溝	埋土	
M	105	10YR4/1~4/2	褐灰~灰黄褐	細砂シルト	下部中砂~極粗砂粒混じる	流路最上部窪み	埋土	848流路	埋土
M	106	10YR5/2	灰黄褐	細砂	シルトブロック混じる	下部炭化物	ラミナあり	848流路	埋土
M	107			シルト	極粗砂粒混じる			848流路	埋土
M	108	7.5Y4/3	褐	細砂シルト	流路埋土			848流路	埋土
M	109	10YR6/1~7/1	褐灰~灰白	極粗砂~細砂	シルトブロック混じる	ラミナあり	流路埋土	848流路	埋土
M	110	7.5YR7/1~6/1	4/3 ~3/3 明褐灰~褐灰 暗褐	褐~ 暗褐	シルト~極粗砂	流路埋土		848流路	埋土
M	111	7.5YR5/2~3/2	灰褐~黒褐	細砂~極粗砂	シルト混じり	ラミナあり	流路埋土	848流路	埋土
N	112	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	シルト~細砂			1361流路	埋土	
N	113	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	シルト混じる中砂			1361流路	埋土	
N	114	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	粗砂~極粗砂	粗砂混じりシルト	細砂	1361流路	埋土	
N	115	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	中砂~極粗砂	細砂	中砂~粗砂	1361流路	埋土	
N	116	2.5Y7/1~4/1	灰白~黄灰	ブロック	細砂		1361流路	埋土	
N	117	5Y3/1	オリーブ黒	シルト	細砂		1361流路	埋土	
N	118	5Y5/1~3/1	灰~オリーブ黒	中砂~粗砂			1361流路	埋土	
O	119	10YR4/4	褐灰	細砂~粗砂			流路	埋土	
P	120	2.5Y5/4	黄褐	細砂	若干シルト混じる	Fe・Mn沈着	土壌化	第6-1面流路	埋土
P	121	2.5Y6/3	にぶい黄	細砂	やや土壌化	Fe・Mn沈着		第6-1面流路	埋土
P	122	2.5Y7/2	灰黄	細砂	中砂			第6-1面流路	埋土
P	123	5BG7/1	明青灰	細砂シルト				第6-1面流路	埋土
P	124	2.5Y7/1	灰白	細砂~極細砂の互層				第6-1面流路	埋土
P	125	2.5Y7/1	灰白	粗砂~極粗砂	シルトブロック混じる			第6-1面流路	埋土
P	126	2.5Y4/1~3/1	黄灰~黒褐	粗砂~極粗砂	φ3~5cm黒褐シルトブロック混じる			第6-1面流路	埋土
P	127	2.5Y4/1~3/1	黄灰~黒褐	細砂	極粗砂~小礫			第6-1面流路	埋土
Q	128	2.5Y6/1	黄灰	小石混じり砂礫				第6-1a面流路	埋土
Q	129	5Y7/1~7.5Y6/1	灰白~灰	砂とシルトの互層	ラミナ顕著			第6-1a面流路	埋土
Q	130	5Y7/1	灰白	小石	シルト混じり粗砂			第6-1a面流路	埋土
P	131	5Y5/1	灰	細砂シルト	中砂~粗砂混じる	流路埋土		863流路	埋土
P	132	5Y6/1	灰	細砂	ややシルト混じる	下層ラミナあり	流路埋土	863流路	埋土
P	133	2.5Y6/2	灰黄	細砂~中砂	シルト	ブロック入る		863流路	埋土
P	134	2.5Y5/1	黄灰	細砂シルト	中砂~粗砂混じる	流路埋土		863流路	埋土
P	135	2.5Y5/2	暗灰黄	極粗砂~粗砂	ややシルト混じる	流路埋土		863流路	埋土
Q	136	10YR7/1	灰白	細砂	ややシルト混じる	下部ラミナあり		863流路	埋土
Q	137	10YR7/1	灰白	中砂混じる				863流路	埋土
Q	138	10YR7/1	灰白	細砂	中砂~粗砂			863流路	埋土
Q	139	10YR7/1	灰白	シルト				863流路	埋土
Q	140	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	細砂~極粗砂	シルトブロック混じる	ラミナあり		863流路	埋土
Q	141	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	シルトブロック入る	中砂	ラミナあり		863流路	埋土
Q	142	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	中砂	ラミナあり			863流路	埋土

Q	143	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	シルト 中砂~粗砂 ブロック入る ラミナあり	863流路 埋土
Q	144	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	中砂~粗砂 ラミナあり	863流路 埋土
P	146	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	中砂~極粗砂 小礫 ラミナあり	第6-1面流路 埋土
Q	147	10YR3/1~6/1	黒褐~褐灰	中砂~粗砂 ラミナあり	
Q	148	10YR7/3	にぶい黄橙	細砂 Fe沈着 上部粗砂混じる 流路内上部土壌化層	第6-1面流路 埋土
Q	149	10YR6/3	にぶい黄橙	細砂 ややシルト混じる Fe沈着 やや土壌化 流路内上部土壌化層	第6-1面流路 埋土
Q	150	10YR5/1	褐灰	細砂混じりシルト 暗色化 流路内上部土壌化層	第6-1面流路 埋土
Q	151	2.5Y6/1	黄灰	細砂 流路内上部土壌化層	第6-1面流路 埋土
Q	152	2.5Y6/2	灰黄	細砂 流路内上部土壌化層	第6-1面流路 埋土
Q	153	2.5Y6/2	灰黄	中砂~細砂 細砂~極細砂 淘汰良い ラミナあり	第6-1面流路 埋土
Q	154	2.5Y6/2	灰黄	粗砂~極粗砂 細砂~極粗砂 小礫混じる ラミナあり	第6-1面流路 埋土
O	ア	7.5GY5/1	緑灰	細砂混じりシルト ラミナあり	6-2b層
O	イ	7.5Y4/2	灰オリーブ	砂礫混じりシルト ラミナあり	6-2b層
O	ウ	7.5Y4/1	灰	砂礫混じりシルト ラミナあり	6-2b層
O	エ	10YR5/3~N6/	にぶい黄褐~灰	砂礫混じり砂質シルト ラミナあり	6-2b層
O	オ	5Y5/1	灰	礫混じり砂 ラミナあり6-2b層	6-2b層
O	カ	N2/0	黒	細砂混じりシルト~粘質シルト やや土壌化	6-2b層
O	キ	7.5Y4/1	灰	細砂混じりシルト ラミナあり	6-2b層
O	ク	2.5Y6/2	灰黄	シルト 砂礫の互層 ラミナあり	6-2b層
O	ケ	10Y4/1	灰	シルト混じり 細砂~粗砂 ラミナあり	6-2b層
O	コ	7.5Y3/1	オリーブ黒	粘質シルト ラミナあり	6-2b層
P	サ	2.5Y5/3	黄褐	中砂~粗砂 ラミナあり	6-2b層
P	シ	5Y5/1	灰	中砂~粗砂 ラミナあり	6-2b層
P	ス	5Y7/1	灰白	小石 シルト混じり砂礫 ラミナあり	6-2b層
P	セ	10Y3/1	オリーブ黒	極細砂混じり粘質シルト	6-2b層
P	ソ	7.5Y3/1	オリーブ黒	細砂 黒色砂混じり粘土ブロックが上位に混じる ラミナあり	6-2b層
P	タ	5Y4/1	灰	極細砂混じり シルト質粘土	6-2b層
P	チ	2.5Y5/1	黄灰	細砂混じりシルト ラミナあり	6-2b層
P	ツ	5BG6/1	青灰	中砂~細砂 粗砂粒若干混じる ラミナあり	6-2b層
P	テ	10BG7/1~10Y8/1	明青灰~灰白	細砂~中砂 粗砂~極粗砂 下層流路内埋土 ラミナあり	6-2b層
P	ト	5Y7/1	灰白	細砂 炭化物混じる ラミナあり	6-2b層
P	ナ	10YR5/1	灰褐	中砂~粗砂 シルト混じり ラミナあり	6-2b層
P	ニ	5Y4/1	灰	砂質シルト ラミナあり	6-2b層
P	ヌ	N4/0	灰	極細砂混じりシルト ラミナあり	6-2b層
P	ネ	5Y3/1	オリーブ黒	細砂混じり粘土 ラミナあり	6-2b層
P	ノ	5Y4/1~3/1	灰~オリーブ黒	粘土混じりシルト ラミナあり	6-2b層
Q	ハ	5Y3/1	オリーブ黒	極細砂混じり粘質シルト 一部砂礫混じる ラミナあり	6-2b層
P	ヒ	N4/0	灰	極粗砂~小礫 土器混じる ラミナあり	6-2b層

B断面地層模式図

A	1	10YR5/2	浅黄~にぶい黄	細砂 シルト混じり 酸化鉄沈着あり	1a層
B	1	10YR5/2	灰黄褐	細砂 シルトやや混じる 酸化鉄沈着あり	1a層
C	1	2.5Y7/3~6/3	浅黄~にぶい黄	細砂 シルト混じり	1a層
E	1	2.5Y7/3~6/4	浅黄~にぶい黄	細砂 シルト混じり	1a層
F	1	2.5Y7/3~6/4	浅黄~にぶい黄	細砂 ややシルト混じる 中砂~粗砂粒混じる	1a層
G	1	10YR5/2	灰黄褐	細砂 シルト若干混じる 中砂・粗砂粒若干混じる 下半酸化鉄沈着著しい	1a層
A	2	10YR4/4	褐灰	細砂混じりシルト Mn沈着 中砂~粗砂粒混じる	2a層
B	2	2.5Y6/2~6/3	灰黄~にぶい黄	細砂混じりシルト 中砂~粗砂粒混じる 酸化鉄沈着あり マンガン斑あり 上面に酸化鉄沈着多い	2a層
E	2	2.5Y6/2~6/3	灰黄~にぶい黄	細砂混じりシルト 中砂~粗砂粒混じる 酸化鉄沈着あり マンガン斑あり 上面に酸化鉄沈着多い	2a層
A	3	10YR4/3	にぶい黄褐	細砂混じりシルト 中砂~粗砂粒混じる	3-1a層
B	3	2.5Y6/3~5/3	にぶい黄~黄褐	細砂混じりシルト 中砂~粗砂粒混じる 酸化鉄沈着、マンガン斑あり	3-1a層
E	3	2.5Y6/3~5/3	にぶい黄~黄褐	細砂 シルト混じり 中砂粒わずかに混じる	3-1a層
F	3	2.5Y6/3~5/3	にぶい黄~黄褐	細砂シルト 中砂~粗砂粒若干混じる	3-1a層
G	3	10YR4/3	にぶい黄褐	細砂シルト 中砂~極粗砂粒混じる	3-1a層
A	4	10YR3/2	黒褐	細砂混じりシルト 中砂~粗砂粒多く混じる	3-2a層
B	4	2.5Y5/2~4/2	暗灰黄	シルト 中砂~極粗砂粒混じる 暗色化	3-2a層
E	4	2.5Y5/2~4/2	暗灰黄	細砂混じりシルト 中砂粒混じる 暗色化	3-2a層
F	4	2.5Y5/2~4/2	暗灰黄	細砂シルト 中砂~粗砂粒若干混じる	3-2a層
G	4	10YR3/2	黒褐	シルト 中砂~粗砂粒混じる	3-2a層
A	5	10YR2/3	黒褐	中砂~粗砂混じりシルト	3-2a下層
B	5	2.5Y4/2	暗灰黄	中砂~極粗砂混じりシルト 中砂~極粗砂は下層の由来 暗色化	3-2a下層
B	6	2.5Y5/1~4/1	黄灰	中砂~極粗砂 シルト混じり 北へいくとシルト混じりとなる	3-2a下層
C	6	2.5Y5/1~4/1	黄灰	中砂~極粗砂 シルト混じり 北へいくとシルト混じりとなる	3-2a下層
D	6	2.5Y5/1~4/1	黄灰	中砂~極粗砂 シルト混じり 北へいくとシルト混じりとなる	3-2a下層
E	6	2.5Y5/1~4/1	黄灰	細砂混じりシルト 中砂~粗砂粒多く混じる	3-2a下層

F	6	10YR4/1	褐灰	細砂混じりシルト 中砂～粗砂粒多く混じる上面にわずかに暗色化した層がわずかに残る	3-2a下層
B	7	10YR3/4	暗褐	シルト 上層の中砂～粗砂が厚く堆積している箇所のみ存在 所々中砂に削られブロック状になる部分あり	4-1a層 凹埋土
B	8	10YR2/3	黒褐	シルト 中砂～粗砂粒混じる	4-1a層 凹埋土
B	9	10YR3/2	黒褐	シルト 中砂粒若干混じる	4-1a層 凹埋土
C	7	10YR3/4	暗褐	シルト 上層の中砂～粗砂が厚く堆積している箇所のみ存在 所々中砂に削られブロック状になる部分あり	4-1a層 凹埋土
C	8	10YR2/3	黒褐	シルト 中砂～粗砂粒混じる 低くなっている部分のみ存在	4-1a層 凹埋土
A	10	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト 中砂～粗砂粒混じる	4-2a上層
A	11	10YR3/2	黒褐	シルト 中砂粒混じる	4-2a上層
D	11	10YR4/2～3/2	灰黄褐～黒褐	シルト 中砂～極粗砂粒混じる やや暗色化	4-2a上層
E	11	10YR4/2～3/2	灰黄褐～黒褐	シルト 中砂～極粗砂粒混じる やや暗色化	4-2a上層
F	11	10YR2/2	黒褐	シルト 中砂粒若干混じる 暗色化 大半が凹凸により不明瞭	4-2a上層
G	11	10YR3/4	暗褐	全体に暗色化 細砂シルト 中砂～粗砂粒混じる	4-2a上層
A	12	10YR3/2	黒褐	シルト 中砂粒混じり	4-2a下層
B	12	10YR2/2	黒褐	シルト 中砂～粗砂粒若干混じる	4-2a下層
C	12	10YR3/4	暗褐	細砂混じりシルト 中砂～粗砂粒混じる 酸化鉄沈着あり	4-2a下層
C	12-1	10YR2/2	黒褐	シルト 中砂～粗砂粒若干混じる	4-2a下層
D	12	10YR3/4	暗褐	シルト 中砂粒混じる 細砂シルト	4-2a下層
E	12	10YR3/4	暗褐	シルト 上部わずかに暗色化した層が残る	4-2a下層
G	14	10YR3/4	暗褐	シルト	4-2a下層
A	13	10YR2/2	黒褐	細砂混じりシルト 中砂～粗砂粒混じる やや暗色化	4-3a層
B	13	10YR4/2	灰褐黄	シルト 中砂～極粗砂粒混じる	4-3a層
C	13	10YR4/2	灰黄褐	シルト 中砂～粗砂粒混じる	4-3a層
D	13	10YR4/2	灰黄褐	細砂シルト 中砂～極粗砂粒混じる	4-3a層
D	13-1	10YR4/2	灰黄褐	細砂シルト 中砂～極粗砂粒混じる	4-3a下層
E	13	10YR2/4	灰黄褐	細砂シルト 中砂～粗砂粒混じる	4-3a層
A	14	10YR4/2	灰黄褐	細砂シルト～シルト	4-4a層
B	14	10YR3/2	黒褐	シルト 細砂混じる	4-4a層
C	14	10YR5/2	灰黄褐	細砂シルト	4-4a層
D	14	10YR5/2	灰黄褐	細砂混じりシルト 中砂粒わずかに混じる	4-4a層
E	14	10YR5/2	灰黄褐	細砂混じりシルト	4-4a層
F	14	10YR5/2	灰黄褐	徐々に細砂～シルトへ	4-4a層
D	15	10YR4/1	褐灰	中砂～極粗砂 ややシルト混じる	5-1a層
A	15	10YR2/2	黒褐	中砂～極粗砂混じりシルト	5-1a層
B	15	10YR3/1	黒褐	中砂～極粗砂 シルト混じり	5-1a層
C	15	10YR4/1	褐灰	中砂～極粗砂 シルト	5-1a層
E	15	10YR4/1	褐灰	細砂シルト 中砂～粗砂粒多く混じる	5-1a層
F	15	10YR2/2	黒褐	細砂 シルトブロック 粗砂～極粗砂粒混じる	5-1a層
G	15	10YR2/2	黒褐	細砂 シルトブロック 粗砂～極粗砂粒混じる	5-1a層
A	16	10YR4/1	褐灰	中砂～粗砂粒シルトやや混じる	5-2a層
B	16	10YR4/1	褐灰	中砂～極粗砂 ややシルト混じる	5-2a層
E	16	7.5YR3/2～3/3	黒褐～暗褐	中砂～粗砂 シルトやや混じる	5-2a層
F	16	7.5YR3/2～3/3	黒褐～暗褐	細砂 粗砂～極粗砂粒混じる	5-2a層
G	16	7.5YR3/2～3/3	黒褐～暗褐	細砂 粗砂～極粗砂粒混じる	5-2a層
A	17	10YR8/1～6/1	灰白～褐灰	中砂～極粗砂 粗砂～極粗砂 ラミナあり	5-2b層
B	17	10YR8/1～6/1	灰白～褐灰	細砂 部分的にラミナ見られる ラミナあり	5-2b層
E	17	10YR3/1～2/1	黒褐	中砂～粗砂 シルトブロック混じる やや土壌化	5-2b層
F	17	10YR3/1～2/1	黒褐	中砂～細砂 ラミナ見られない	5-2b層
G	17	10YR3/1～2/1	黒褐	中砂～極粗砂粒多い 細砂主体 ラミナあり	5-2b層
A	18	N2/0	黒	細砂シルト 中砂～極粗砂混じる 中砂シルト 細砂混じり	6-1a層
B	18	N2/0	黒	細砂 ややシルト混じる 中砂～粗砂粒混じる	6-1a層
C	18	7.5GY7/1	明緑灰	細砂シルト	6-1a層
C	18-1	7.5YR3/2～3/3	黒褐～暗灰	細砂 シルト混じり 中砂粒混じる 酸化鉄沈着、マンガン班あり	6-1a下層
D	18	10YR7/4	にぶい黄橙	シルト 中砂～粗砂粒わずかに混じる やや暗色化 酸化鉄沈着	6-1a層
D	18-1	2.5Y6/4	にぶい黄	中砂シルト 酸化鉄沈着	6-1a下層
E	18	10YR7/4	にぶい黄橙	細砂シルト 中砂～粗砂混じる	6-1a層
F	18	7.5YR3/2～3/3	黒褐～暗褐	細砂～シルト 中砂～極粗砂粒混じる 上面凹凸著しい	6-1a層
G	18	7.5YR3/2～3/3	黒褐～暗褐	細砂～シルト 中砂～極粗砂粒混じる 上面凹凸著しい	6-1a層
A	19	5G7/1	明緑灰	中砂～極粗砂 ラミナあり	6-1b層
B	19	5G7/1	明緑灰	中砂～極粗砂 ラミナあり	6-1b層
C	19	5G7/1	明緑灰	細砂 ラミナあり	6-1b層
C	20	7.5Y2/1	黒	中砂シルト 細砂やや混じる 粗砂～極粗砂粒混じる	6-2a層
D	20	10YR3/1	黒褐	細砂シルト 中砂～粗砂粒わずかに混じる	6-2a層
E	20	10YR3/1～2/1	黒褐～黒	細砂シルト 暗色化 下面不明瞭	6-2a層
F	20	10YR3/1～2/1	黒褐～黒	細砂シルト 上半中砂～極粗砂粒混じる 下面は不明瞭	6-2a層
G	20	10YR3/1～2/1	黒褐～黒	細砂シルト	6-2a層
C	21	10GY7/1～6/1	明緑灰～緑灰	細砂 上半生痕あり ラミナあり	6-2b層
D	21	5B6/1	青灰	細砂 中砂～粗砂粒わずかに混じる 上下面とも層理面が不明瞭 ラミナあり	6-2b層
E	21	5B6/1	青灰	細砂 ラミナあり	6-2b層
F	21	5B6/1	青灰	細砂 根痕多い ラミナあり	6-2b層

F	21-1	7.5Y4/1	灰	細砂 粗砂～極粗砂粒混じる 肩部に粗砂～極粗砂粒多い 下層流路内埋土 ラミナあり	6-2b層
F	21-2	2.5GY5/1	オリーブ灰	粗砂～極粗砂 下層流路内埋土 ラミナあり	6-2b層
F	21-3	10Y5/1	灰	細砂～極粗砂 極粗砂ラミナ有 下層流路内埋土 ラミナあり	6-2b層
G	21	7.5GY4/1	暗緑灰	中砂～粗砂粒多く混じる	6-2b層
C	22	N4/0	灰	細砂シルト 中砂粒混じる	6-3a層
D	22	10YR2/1	黒褐	細砂シルト 中砂～粗砂粒やや混じる	6-3a層
E	22	10YR2/1	黒褐	細砂シルト 中砂～粗砂粒やや混じる	6-3a層
C	23	N7/0	灰白	中砂～粗砂	6-3b層
D	30	7.5YR4/3	褐	中砂～極粗砂混じりシルト	溝 埋土 (第4-2面)
D	31	7.5YR4/3	褐	細砂 中砂 細砂シルト	溝 埋土 (第4-2面)
F	32	7.5YR4/3	褐	シルト 中砂～粗砂粒混じる 流路埋土	流路 (第4-2面)
B	33	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	シルト 細砂	凹内流路 (第4-3面)
B	34	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	シルト 中砂～粗砂粒混じる	凹内流路 (第4-3面)
B	35	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	中砂～粗砂	凹内流路 (第4-3面)
B	36	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	細砂 シルト	凹内流路 (第4-3面)
B	37	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	中砂～粗砂粒多い 植物遺体混じる	凹内流路 (第4-3面)
C	38	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	細砂シルト 中砂粒混じる	凹内流路 (第4-3面)
C	39	2.5Y6/1～2/1	黄灰～黒	中砂～極粗砂 ややシルト混じる 若干土壌化	凹内流路 (第4-3面)
C	40	2.5Y7/1～3/1	灰白～黒褐	中砂 極粗砂	凹内流路 (第4-3面)
D	41			細砂シルト 細砂	溝 (第4-2面)
C	42	5Y3/2	オリーブ黒	シルト 中砂～極粗砂粒混じる	流路 (第4-3面)
C	43	5Y6/1～3/2	灰～オリーブ黒	細砂 シルト 粗砂	流路 (第4-3面)
E	44	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細砂～極粗砂 シルトブロック混じる 流路埋土	848流路 (第4-3面)
E	45	10YR3/3	暗褐	細砂 中砂粒混じる 酸化鉄沈着あり 流路埋土	848流路 (第4-3面)
E	46	10YR2/3	黒褐	細砂～極粗砂 溝埋土 ラミナあり	848流路 (第4-3面)
E	47	2.5Y2/3	黒褐	極粗砂～粗砂 細砂混じる 流路埋土 ラミナあり	848流路 (第4-3面)
E	48	2.5Y2/3	黒褐	細砂～粗砂 ラミナあり	848流路 (第4-3面)
E	49	2.5Y2/3	黒褐	細砂・中砂～粗砂粒混じる ラミナあり	848流路 (第4-3面)
E	50	2.5Y2/3	黒褐	細砂 ラミナあり	848流路 (第4-3面)
G	51	7.5YR4/3	褐	細砂 ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	52	10YR4/3	にぶい黄褐	中砂～粗砂 ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	53	10YR4/3	にぶい黄褐	細砂 シルトやや混じる ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	54	10YR4/4	褐	中砂 ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	55	2.5Y4/3	オリーブ褐	細砂～シルト ブロック入る ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	56	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト 中砂混じる ブロック入る ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	57	2.5Y3/1	黒褐	細砂～シルト ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
G	58			中砂 ラミナあり	1361流路 (第4-3面)
B	59	2.5Y5/1～2/1	黄灰～黒	細砂 青灰シルト シルト 中砂粒混じる	1360流路 (第5-1面)
C	60	2.5Y6/4～4/4	にぶい黄～オリーブ褐	細砂シルト ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	61	2.5Y7/1～4/1	灰白～黄灰	中砂 極粗砂 細砂 中砂～極粗砂 ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	62			細砂シルト 中砂 シルト 細砂 極粗砂～小礫 ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	63	N7/0～2/0	灰白～黒	シルト 中砂粒混じる ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	64	N7/0～2/0	灰白～黒	シルト 中砂粒混じる 中砂～粗砂 ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	65	N7/0～2/0	灰白～黒	中砂～粗砂 ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	66	N7/0～2/0	灰白～黒	細砂 ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	67	N7/0～2/0	灰白～黒	中砂粒多い ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
C	68	N7/0～2/0	灰白～黒	細砂多い 細砂シルト 中砂混じり ラミナあり	1360流路 (第5-1面)
E	69	2.5Y2/4	暗灰黄	細砂 中砂粒混じる シルトブロック混じる 流路からの砂	848流路下層 (第4-4面)
E	70	2.5Y5/2～3/2	暗灰黄～黒褐	細砂～極粗砂 シルト 植物遺体細砂～シルト層にあり ラミナあり 第4-4面流路埋土	848流路下層 (第4-4面)
C	71	2.5Y8/1～7/1	灰白	極粗砂～粗砂 中砂 細砂	流路 (第6-1面)
D	72	10YR5/3	にぶい黄褐	中砂シルト 細砂混じる マンガン班あり	6-1a上層
D	73	7.5GY6/2	緑灰	細砂	溝 (第6-2面)
D	74	N5/0	灰	中砂シルト	溝 (第6-2面)

C断面地層模式図

B	1	10YR7/3	にぶい黄橙	粗砂微量含む細砂	1a層
D	1	10YR7/3	にぶい黄橙	粗砂微量含む細砂	1a層
E	1	2.5Y4/4	オリーブ褐	粗砂微量含む細砂	1a層
F	1	2.5Y4/4	オリーブ褐	粗砂微量含む細砂	1a層
G	1	2.5Y4/4	オリーブ褐	粗砂微量含む細砂	1a層
H	1	10YR7/2	にぶい黄橙	シルト混じり細砂	1a層
I	1	5Y6/2	灰オリーブ	粗砂混じり細砂	1a層
A	2	7.5YR5/4	にぶい褐	粗砂混じり細砂	2a層
C	2	10YR6/1	褐灰	粗砂混じり細砂	2a層
D	2	10YR6/1	褐灰	粗砂混じり細砂	2a層
E	2	10YR6/1	褐灰	粗砂混じり細砂	2a層
F	2	10YR6/1	褐灰	粗砂混じり細砂	2a層
G	2	10YR6/1	褐灰	粗砂混じり細砂 上部に酸化鉄の沈着あり	2a層
H	2	10YR6/3	にぶい黄橙	シルト混じり細砂	2a層
I	2	2.5Y4/3	灰オリーブ	シルト質細砂 作土 上部にFeの沈着多い	2a上層
I	2-1	10YR6/3	にぶい黄橙	シルト混じり細砂	2a下層
C	3	10YR3/2	黒褐	粗砂混じりシルト	3-1a層

D	3	10YR3/2	黒褐	粗砂混じりシルト	3-1a層
E	3	7.5Y3/1	オリーブ黒	粗砂混じりシルト	3-1a層
F	3	7.5Y3/1	オリーブ黒	粗砂混じりシルト	3-1a層
G	3	7.5Y3/1	オリーブ黒	粗砂混じり粘質土 粘質強い	3-1a層
H	3	2.5Y4/2	暗灰黄	細礫混じり細砂～中砂	3-1a層
A	4	10YR5/3	にぶい黄褐	細砂 弱く暗色化	3-2a層
C	4	10YR5/2	灰黄褐	小礫混じり細砂	3-2a層
D	4	10YR5/2	灰黄褐	小礫混じり細砂 1.5cm大の角礫混じる 土器混じる	3-2a層
E	4	10YR5/2	灰黄褐	小礫混じり細砂 1.5cm大の角礫混じる 土器混じる	3-2a層
F	4	10YR5/2	灰黄褐	小礫混じり細砂 1.5cm大の角礫混じる 土器混じる	3-2a層
G	4	10YR5/2	灰黄褐	小礫混じり細砂 1.5cm大の角礫混じる 土器混じる	3-2a層
H	4	7.5Y4/3	暗オリーブ	細礫混じり細砂～中砂	3-2a層
I	4	7.5Y4/3	暗オリーブ	細礫混じり細砂～中砂 (上面にわずかに 2.5Y4/2 暗灰黄 細礫混じり細砂～中砂の薄層あり)	3-2a層
E	5	5Y2/1	黒	土壌化 細砂混じりシルト 部分的に粗砂がラミナ状に混じる	3-2a下層
F	5	5Y2/1	黒	土壌化 細砂混じりシルト 部分的に粗砂がラミナ状に混じる	3-2a下層
G	5	5Y2/1	黒	土壌化 細砂混じりシルト 部分的に粗砂がラミナ状に混じる	3-2a下層
B	6			細砂～粗砂 やや土壌化	4-2a層
D	6	7.5Y4/1	褐灰	粘質土 暗色化	4-2a層
E	6	7.5Y4/1	褐灰	シルト	4-2a層
F	6			シルト粗砂混じる	4-2a層
G	6			シルト粗砂わずかに混じる 暗色化 上面に荷重痕跡見られる	4-2a層
H	6			シルト粗砂わずかに混じる 暗色化 上面に荷重痕跡見られる	4-2a層
I	6	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	細礫混じり細砂粒砂～中粒砂 下部ラミナ不明・土壌化	4-2a層
A	7	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	4-3a層
A	7-1	10YR4/2	灰黄褐	極細砂～細砂 土壌化	4-3a層
E	7			細砂混じりシルト	4-3a層
F	7			細砂混じりシルト 上部暗色化	4-3a層
G	7	10YR5/3～5/4	にぶい黄褐	細砂混じりシルト	4-3a層
H	7	10YR5/3～5/4	にぶい黄褐	細砂混じりシルト	4-3a層
I	7	10YR5/3～5/4	にぶい黄褐	細砂混じりシルト	4-3a層
E	8			シルト質粘土 乾根入りやすく角柱状に割れる 根も多い	4-4a層
F	8			極細砂混じりシルト	4-4a層
I	8	2.5Y3/2	黒褐	極細砂混じりシルト	4-4a層
A	9	5Y2/1	黒	細砂～極細砂	5-1a層
C	9	2.5Y3/1	黒褐	粗砂多い 粗砂混じり細砂	5-1a層
C	9	2.5Y3/1	黒褐	粗砂混じり細砂	5-1a層
D	9	7.5YR3/1	黒褐	シルト～中砂混じり粗砂	5-1a層
D	9-1	7.5YR4/3	褐	粘土少量混じる 細砂～中砂	5-1a層
E	9			中砂少量含む 細砂含むシルト質粘土 南半のように黒褐色化せず4層系と同様 粘土主体で茶褐	5-1a層
F	9			中砂少量含む 細砂含むシルト質粘土	5-1a層
F	9-1			極細砂混じりシルト	5-1a層
G	9	2.5Y5/2	暗灰黄	中砂少量含む 細砂含むシルト質粘土 弱く暗色化 下面に木根顕著	5-1a層
H	9	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト混じり中砂～細砂	5-1a層
H	9-1	2.5Y5/2	暗灰黄	粗砂混じり細砂～中砂	5-1a層
A	10	10GY6/1	緑灰	細礫 ラミナあり	5b層
A	10-1	10GY6/1	緑灰	粗砂混じりシルト ラミナあり	5b層
A	10-2	10GY6/1	緑灰	細砂 ラミナあり	5b層
A	10-3	2.5Y4/4	オリーブ褐	中砂～粗砂 ラミナあり	5b層
A	10-4			粗砂 ラミナあり	5b層
A	10-5	10GY6/1	緑灰	中砂～細砂 ラミナあり	5b層
B	10	2.5GY6/1	オリーブ灰	細砂 ラミナあり	5b層
B	10	5GY6/1	オリーブ灰	細砂 ラミナあり	5b層
B	10-2	N4/0	灰	シルト～粗砂 弱い土壌化	5b層
B	10-3	N4/0	灰	中砂～細砂 ラミナあり	5b層
B	10-4	N4/0	灰	細礫～礫 ラミナあり	5b層
B	10-5	10GY6/1	緑灰	細砂 ラミナあり	5b層
C	10	5Y7/2	灰白	上部から 細砂→粗砂・粗砂がブロック状に混じる ラミナあり	5-1b層
C	10-1	2.5Y5/2	暗灰黄	細砂～中砂 根跡あり ラミナあり	5-1b層
C	10-2	2.5Y5/2	暗灰黄	細砂～極細砂 ラミナあり	5-1b層
C	10-3	N4/0	灰	粘質土 下部中砂～粗砂混じり ラミナあり	5-1b層
D	10	2.5Y5/2	暗灰黄	上部細砂 下部粗砂 ラミナあり	5-1b層
D	10-1	N4/0	灰	粘質土 ラミナあり	5-1b層
G	10	2.5Y8/1	灰白	細砂～極細砂 ラミナあり	5-1b層
H	10	2.5Y7/2	灰黄	細砂 ラミナあり	5b層
A	11	10G2/1	緑黒	シルト～極細砂 ラミナあり	5b層
B	11	5B6/1	青灰	粘質土 ラミナあり	5b層
A	12	N8/0	灰白	粘土	5b層
A	13	N3/0	暗灰	砂混じりシルト～粘土	6-1a層
B	13	N3/0	暗灰	粗砂混じり粘土	6-1a層
C	13	N5/0	灰	粘質土 下部に砂多い	6-1a層

D	13	N4/0	灰	粘質土	6-1a層
E	13	N4/0	灰	粗砂～中砂含む砂質粘土 古土壤	6-1a層
E	13-1	N4/0	灰	細砂 上層部分やや土壌化 細砂	6-1a層
F	13	N4/0	灰	粗砂～中砂含む砂質粘土	6-1a層
G	13	10YR5/1	褐灰	粗砂～中砂含む砂質粘土 鉄分沈着あり	6-1a層
H	13	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	シルト混じり細砂～極細砂 土壌化 鉄分の沈着多く見られる 上部シルト分多い	6-1a層
I	13	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	シルト混じり細砂～極細砂 土壌化 鉄分の沈着多く見られる 上部シルト分多い	6-1a層
A	14	5B1.7/1	青黒	細砂	6-2a層
B	14	5B1.7/1	青黒	細礫～粗砂混じり細砂	6-2a層
C	14	N1.5/	黒	砂多く含む粘土	6-2a層
C	14-1	N1.5/	黒	中砂～粗砂混じり細砂	6-2a層
D	14	2.5Y3/1	黒褐	中砂～粗砂	6-2a層
E	14	2.5Y3/1	黒褐	粗砂含む極粗砂含むシルト粘土混じり細砂 淘汰悪い 根φ1～2mm 粘土混じる	6-2a層
F	14			粗砂～細礫多く含む細砂 非常に安定	6-2a層
F	14-1			極砂混じり細砂 やや土壌化	6-2a層
G	14	10YR3/1	黒褐	粗砂混じりシルト～細砂	6-2a層
E	15	10YR3/1	黒褐	上方の影響で粗砂粘土(φ1mm程度の根混じる 土壌の 灰オリーブ粘土が混じる)を含むが下位は細砂	6-2b層
A	16	5B3/1	暗青灰	細砂～中砂混じりシルト	6-3a層
B	16	5B3/1	暗青灰	細砂混じりシルト	6-3a層
C	16	N6/0	灰	シルト 上部粘土分多く暗色化	6-3a層
D	16	2.5Y3/1～N3/0	黒褐～暗灰	細砂多い	6-3a層
E	16	2.5Y3/1～N3/0	黒褐～暗灰	粗砂混じり細砂 上部に根痕φ1～2mm混じる	6-3a層
F	16	2.5Y3/1～N3/0	黒褐～暗灰	細砂混じりシルト やや粘質強い 下部シルト多く上部 細砂多い 強く土壌化	6-3a層
G	16	2.5Y3/1～N3/0	黒褐～暗灰	中砂含むシルト質細砂	6-3a層
A	17	5B3/1	暗青灰	中砂混じり細砂 細砂	6-3a下部
B	17	5B3/1	暗青灰	中砂混じり細砂 細砂	6-3a下部
A	18	5B3/1	暗青灰	中砂混じり細砂～極細砂 やや土壌化	6-3b層
B	18	5B3/1	暗青灰	中砂混じり細砂～極細砂 やや土壌化	6-3b層
B	18	N3/0	暗灰	中砂混じり細砂 ラミナあり	6-3b層
C	18	N3/0	暗灰	細砂 ラミナあり	6-3b層
D	18	7.5Y5/1	灰	シルト混じり細砂・細砂～極細砂・中砂・細礫～粗砂多 い ラミナあり	6-3b層
E	18	5B6/1	青灰	極細砂～細砂 ラミナは不鮮明	6-3b層
F	18	N6/0	灰	極細砂シルト 細砂多い ラミナあり	6-3b層
F	18-1	N6/0	灰	極細砂シルト ラミナあり	6-3b層
A	19	N6/0	青灰	粗砂混じり中砂	6-4a層
B	19	5B6/1	青灰	極粗砂～粗砂混じり細砂	6-4a層
C	19	5B6/1	青灰	シルト混じり細砂	6-4a層
F	19	10YR2/3	黒褐	シルト質粘土	6-4a層
G	19	10YR2/3	黒褐	粗砂～中砂混じる 粘土分多い	6-4a層
H	19	10YR2/3	黒褐	シルト質粘土 粗砂少量混じる シルト混じり極細砂	6-4a層
I	19	10YR2/3	黒褐	細砂混じりシルト	6-4a層
I	19-1	2.5Y3/1	黒褐	粗砂～極粗砂シルト混じり	6-4a層
I	19-2	10YR5/4	にぶい黄褐	粗砂～極粗砂シルト混じり	6-4a層
I	19-3	5Y3/1	オリーブ黒	シルト混じり極細砂 Fe沈着顕著	6-4a層
F	20			中砂～極細砂	6-4b層
G	20	5Y4/1～6/2	灰～灰オリーブ	灰白細砂多いが全体としてやや土壌化	6-4b層
H	20	2.5GY7/1	明オリーブ灰	灰白細砂多いが全体としてやや土壌化	6-4b層
I	20	N4/	灰	中砂～粗砂 ラミナあり	6-4b層
B	21	5B4/1	暗青灰	細砂シルト	7-1a層
C	21	N3/0	暗灰	シルト粗砂～細礫含む	7a層
D	21	2.5Y3/1	黒褐	シルト粗砂～細礫含む 古土壤	7-1a層
E	21	2.5Y3/1	黒褐	粗砂～中砂含む細砂 暗色化著しい 細礫含む	7-1a層
F	21	5Y2/1	黒	上部細砂多く中砂混じる 下部シルト～粘土	7-1a層
G	21	5Y2/1	黒	粗砂～中砂混じる シルト質細砂 細泥化	7-1a層
H	21	N6/0	灰	細砂 粗砂帯状に混じる 粘土・シルト分多い 下面凹 凸あり	7-1a層
I	21	N3/0	暗灰	細砂 下部に行くにつれ中砂 下面凹凸あり	7-1a層
B	22	N4/0	灰	細砂シルト	7a層
B	23	5PB6/1	青灰	細砂シルト	7a層
F	24	5PB6/1	青灰	細砂シルト	7a層
G	25	5Y6/1	灰	細砂	7a層
G	26	N5/0	灰	中砂～粗砂	7a層
G	27	5Y5/2	灰オリーブ	細礫～極粗砂 ラミナあり	7b層
H	28	5Y6/1	灰	上部より下部へ中砂～粗砂	7a層
H	29	2.5GY6/1	オリーブ灰	極粗砂 細礫 粗砂少量混じる細砂 細砂主体	7a層
I	30	2.5GY6/1	オリーブ灰	中砂～粗砂 ラミナあり	7b層
I	31	2.5GY6/1	オリーブ灰	硬くなる細砂 ラミナあり	7b層
D	32	10G5/1	緑灰	中砂混じり細砂	7b層
D	33	5Y2/1	黒	粗砂～中砂混じりシルト 石材物多く含む 34～37は欠番	8a層
I	38	7.5Y6/2	灰オリーブ	シルト質細砂 下部にラミナあり	第2面遺構 埋土
B	39	2.5Y6/3	にぶい黄	中砂～粗砂	348流路(第3-2面)
I	40	7.5Y6/1	灰	細砂～極細砂 溝埋土	170溝(3-1a層下面)
B	41	2.5Y3/2	黒褐	細砂～中砂 ラミナあり	172溝(第4-2面)

B	42	2. 5Y3/2	黒褐	細砂～粗砂～細礫 土器混じる	172溝 (第4-2面)
B	43	2. 5Y3/2	黒褐	細砂～粗砂 ラミナあり	172溝 (第4-2面)
B	44	2. 5Y3/2	黒褐	粗砂	172溝 (第4-2面)
G	45	10YR5/2	灰黄褐	中砂～シルト 硬くしまっている	351溝 (第4-3面)
G	46	10YR5/1	褐灰	細砂～中砂	351溝 (第4-3面)
H	47	10YR5/1	褐灰	中砂～粗砂 ラミナあり 溝埋土	351溝 (第4-3面)
I	48	5Y5/1	灰	粗砂	351溝 (第4-3面)
I	49	2. 5Y5/1	黄灰	シルト～極細砂	351溝 (第4-3面)
I	50	10YR5/2	灰黄褐	細砂～中砂	360溝 (第4-3面)
I	51	2. 5Y6/2	灰黄	粗砂～細砂 ラミナあり 溝埋土	360溝 (第4-3面)
C	52	2. 5Y6/2	灰黄	細砂～粗砂	380溝 (第4-3面) ・431溝 (第4-4面)
I	53	2. 5Y4/2	暗灰黄	極粗砂 ラミナあり 溝埋土	408溝 (第4-4面)
E	54	5Y3/1	灰	極細砂混じりシルト質粘土～粘土	流路 (第4-3面)
E	55			溝 粗砂 ラミナあり	溝 (第4-2面)
C	56	2. 5Y3/2	黒褐	細砂シルト	431溝 (第5-1面)
C	57	2. 5Y5/2	暗灰黄	中砂～極粗砂	431溝 (第5-1面)
C	58	7. 5Y6/1	灰	細砂	431溝 (第5-1面)
C	59	5Y2/1	黒	中砂～極粗砂シルト混じり	431溝 (第5-1面)
C	60	10YR2/1	黒	シルト～粘土	431溝 (第5-1面)
B	61	10YR3/1	黒褐	細砂～極細砂 粗砂混じる 土壌化	503流路 (第5-1面)
B	62	10YR3/1	黒褐	細砂～粗砂 ラミナあり	503流路 (第5-1面)
B	63	2. 5Y7/3	浅黄	細砂	503流路 (第5-1面)
B	64	2. 5Y7/3	浅黄	細砂～粗砂 灰色偽礫混じる	503流路 (第5-1面)
B	65	2. 5Y6/4	にぶい黄	中砂～粗砂	503流路 (第5-1面)
B	66	N3/0	暗灰	上部Fe沈着 中砂 粗砂	503流路 (第5-1面)
B	67	N3/0	暗灰	上部シルト 下部細砂	503流路 (第5-1面)
B	68	10YR4/3	にぶい黄褐	中砂～極粗砂 偽礫含む	504流路 (第5-1面)
B	69	2. 5Y6/2	灰黄	細砂	504流路 (第5-1面)
B	70	2. 5Y6/3	にぶい黄	細砂～粗砂 ブロック含む	504流路 (第5-1面)
B	71	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂	504流路 (第5-1面)
B	72	10YR3/2	黒褐	極細砂	504流路 (第5-1面)
B	73	7. 5Y5/1	灰	極細砂	504流路 (第5-1面)
B	74	5Y6/2	灰オリーブ	細砂	504流路 (第5-1面)
B	75	5Y4/1	灰	中砂	504流路 (第5-1面)
B	76	2. 5GY5/1	オリーブ灰	中砂～粗砂	504流路 (第5-1面)
A	77			細砂シルト 下半中砂から細砂ラミナあり	505流路 (第5-1面)
A	78			ブロック入る シルト	505流路 (第5-1面)
A	79	10YR3/1	黒褐	ブロック入る 中砂～粗砂	505流路 (第5-1面)
A	80	5Y4/1	灰	ブロック入る 茶褐色シルト	505流路 (第5-1面)
A	81	5Y4/1	灰	ブロック入る 中砂～粗砂	505流路 (第5-1面)
A	82	5Y4/1	灰	Fe沈着 細砂～中砂	505流路 (第5-1面)
A	83	5Y4/1	灰	粗砂 中砂	505流路 (第5-1面)
E	84	5Y4/1	灰	中砂～粗砂	流路 (第6-1面)
D	85	7. 5Y7/1～7. 5Y2/1・ 7. 5GY5/1	灰白～黒・オリーブ 灰	細礫～極粗砂 粗砂～細砂 極細砂～シルト ラミナあり	流路 (第6-1面)
C	86	2. 5Y4/1～2. 5Y2/1	黄灰～黒	上部暗色化 中砂～極粗砂	流路 (6-2a層下面)
I	87	2. 5Y6/2	灰黄	細砂～粗砂 流路埋土	流路 (6-4層下面)
I	88	10Y5/1～5Y6/2	灰～灰オリーブ	中砂	流路 (7-1a層下面)
D	89	2. 5GY6/1	オリーブ灰	粗砂～細砂 ラミナあり	流路 (第7面)
D	90	5GY5/1	オリーブ灰	細砂～極細砂 ラミナあり	流路 (第7面)
D	91	7. 5Y7/2	灰白	極細砂～細砂 ラミナあり	流路 (第7面)
D	92	5B6/1	青灰	細砂 ラミナあり	流路 (第7面)
C	93	N3/0	暗灰	粗砂混じり細砂	流路 (第6-1面)
C	94	N3/0	暗灰	極細砂～シルト	流路 (第6-1面)

D断面地層模式図

A	1	2. 5GY4/1	暗オリーブ灰	シルト	1a層
A	1-1	5GY5/1	オリーブ灰	砂質シルト	1a層
A	1-2	5Y5/3	灰オリーブ	粘質シルト	1a層
A	2	2. 5Y4/3	オリーブ褐	シルト 粘土 礫混じり砂	1-2a層
A	3	10YR4/4	褐	砂粘土混じりシルト	a層
A	4	10YR4/4	褐	砂混じり粘土 Fe多い	1-4a層
A	5	10YR4/3	にぶい黄褐	砂混じり粘土	a層
A	6	2. 5Y4/3	オリーブ褐	粘土混じり砂礫	a層
A	7	5Y4/2	灰オリーブ	砂混じり粘質シルト	a層
A	8	2. 5Y4/2	暗灰黄	砂混じりシルト質粘土	1-5a層
A	9	5Y6/1	灰	砂 粘土混じり細砂	a層
A	10	5Y5/1	灰	シルト質粘土	a層
A	11	2. 5Y4/2	暗灰黄	砂混じりシルト質粘土	a層
A	12	5Y4/2	灰オリーブ	粘質シルト	a層
A	13	5Y5/2	灰オリーブ	砂礫混じりシルト質粘土	a層
A	14	5Y6/1	灰	砂礫混じりシルト質粘土	a層
A	15	5Y3/2	オリーブ黒	砂礫混じりシルト質粘土	3a層
A	15-1	2. 5Y5/3	黄褐	砂礫混じりシルト質粘土～砂礫	3a層
A	16	5Y7/2	灰白	粘土 細砂礫シルト	a層
A	17	5Y4/1	灰	細砂混じり粘質シルト	4a層
A	18	7. 5Y4/1	灰	砂混じり粘質シルト	4a層

A	19	2. 5Y3/3	暗オリーブ褐	砂礫混じり粘質シルト 土器片 砂粒多く入る	4-2a相当層
A	20	10YR3/3	暗褐	シルト 粘土混じり砂 Fe沈着著しい	4-3a相当層
A	21	5Y4/1	灰	砂混じり粘質シルト Mn Fe沈着	4a層
A	22	5Y3/2	オリーブ黒	砂混じりシルト	4a層
A	23	5Y4/1	灰	シルト 砂粒入る	4a層
A	24	5Y3/1	オリーブ黒	砂混じり粘質シルト	5a相当層
A	25	5Y3/1	オリーブ黒	砂混じり粘質シルト	5a相当層
A	26	5Y3/2	オリーブ黒	砂混じり粘質シルト	5a相当層
A	26-1	2. 5Y4/2	暗灰黄	砂混じり粘質シルト	5a相当層
A	27	2. 5Y4/1	黄灰	砂礫混じりシルト質粘土	6a層
A	27-1	2. 5Y4/2	暗灰黄	シルト	6a層
A	28	7. 5Y4/2	灰オリーブ	砂～シルト 下部のほう細かい ラミナあり	6b層
A	29	5Y2/1	黒	砂混じり粘土～粘土混じり砂礫	a層
A	30	5Y5/2	灰オリーブ	砂混じり粘質シルト	遺構 埋土
A	31	5Y4/2	灰オリーブ	砂混じりシルト～砂混じり粘質シルト Fe・Mn沈着	遺構 埋土
A	32	10Y4/1	灰	中砂～細砂・粘土	遺構 埋土
A	32-1	5Y4/1	灰	粗砂～細砂混じり粘質シルト	遺構 埋土
A	33	N3/0	暗灰	砂混じり粘質シルト	遺構 埋土
A	34	10Y4/1	灰	砂混じり粘質シルト	遺構 埋土
A	35	7. 5Y4/1	灰	砂礫	a層
B	1	2. 5Y3/2	黒褐	砂 粘土	現耕土
B	2	2. 5Y4/4	オリーブ褐	砂礫混じりシルト	旧耕土
B	3	2. 5Y4/3	オリーブ褐	砂混じりシルト～(粘質シルト) 下部に水成の砂 Fe・Mn沈着	旧耕土
B	4	10YR4/6	褐	粘質シルト Fe沈着	1a層系
B	5	2. 5Y5/4	黄褐	粘質シルト	1a層系
B	6	10YR4/4	褐	シルト質粘土 Fe沈着	1a層系
B	7	10YR4/4	褐	粘質シルト Fe多量沈着	1a層系
B	8	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質粘土 Fe沈着	1a層系
B	9	2. 5Y4/2	暗灰黄	砂礫 小石混じりシルト	1a層系
B	10	2. 5Y4/2	暗灰黄	粘土 極細砂混じりシルト	2a層系
B	11	2. 5Y4/2	暗灰黄	細砂 シルト 小石混じり粘土	2a層系
B	12	5YR3/2	暗赤褐	シルト 小石混じり砂礫	2a層系
B	13	5Y4/2	灰オリーブ	極細砂混じりシルト(西半)～粘質シルト(東半)	3a層
B	14	10YR3/1	黒褐	細砂混じりシルト～粘質シルト	4a層
B	15	7. 5YR3/2	黒褐	砂礫混じり粘質シルト	6a層
B	16	10YR4/4	褐	細砂～中砂 ラミナあり	6b層
B	17	2. 5Y3/1	黒褐	シルト質粘土 Fe少量沈着	6-2a層
C	1	10YR3/2	黒褐	細砂混じりシルト・小礫入る	現耕土
C	2	2. 5Y5/2	暗灰黄	極細砂粒含み 細砂 しまり良い 淘汰やや悪い φ1～2cmの礫を多く含む マンガン斑状に7%沈着	旧耕土
C	2-1	7. 5Y7/1	灰白	極細砂粒含み 中砂～細砂 下部に若干ラミナ見られる	
C	3	7. 5Y5/1	灰	粗砂含み 中砂～細砂 しまりやや悪い 淘汰悪い マンガン斑状に5%沈着 φ5mm以内の礫を多く含む	旧耕土
C	4	7. 5Y6/1	灰	極細砂粒含み 中砂～細砂 若干ラミナ見られる	
C	5	5Y8/1	灰白	中砂～細砂 ラミナ見られる	自然堆積層
C	6	2. 5Y5/2	暗灰黄	極細砂粒含み 粗砂～中砂 しまり良い 淘汰非常に悪い マンガン斑状に7%沈着 φ1cm以内の礫を多く含む	1-2a層
C	6-1	5Y6/1	灰	中砂含み 細砂～極細砂	1-2a層
C	7	5Y5/1	灰	極細砂粒含み 細砂～極細砂	1-2・3a層
C	8-1	2. 5Y5/1	黄灰	粗砂含み 中砂 ラミナ顕著	自然堆積層
C	8-2	2. 5Y5/1	黄灰	粗砂含み 中砂 ラミナ顕著	自然堆積層
C	8-3	5Y8/1	灰白	極細砂粒含み 粗砂	自然堆積層
C	9	5Y6/2	灰オリーブ	粗砂含み 中砂～細砂 しまり良い 淘汰やや悪い マンガン斑状に5%沈着 φ5mm大の礫を多く含む 下半に水平葉理有(中砂主体)	1-3a層
C	10	5Y7/1	灰白	極粗砂粒含み 粗砂～中砂 φ1cmの礫多い	1-3b層
C	11	2. 5Y7/1	灰白	極細砂粒含み 中砂 6の層の土をブロック上を含む	畦畔盛土
C	12	5Y6/1	灰	粗砂含み 極細砂～シルト	畦畔盛土
C	13	5Y5/1	灰	極細砂粒含み 極細砂～シルト しまり良い 淘汰やや良い φ1cm以内の礫を上半中心に少量含む マンガン斑状に3%沈着 φ2～3mmの礫を多く含む(畦畔の芯になる)	1-4a層
C	14	5Y5/2	灰オリーブ	極細砂粒から粗砂 しまり良い 淘汰非常に悪い φ7～10mmの礫を多く含む φ5～7mmの礫を非常に多く含む	2a層系
C	15	7. 5Y6/1	灰	中砂混じり 細砂～極細砂 淘汰悪い しまり悪い	2a層系
C	16	2. 5Y6/2	灰黄	極粗砂含み 中砂 しまりやや良い 淘汰良い 層中にφ1cm以内の礫を微量含む マンガン斑状に7%沈着	2a層系
C	17	7. 5Y6/1	灰	粗砂含み 細砂～極細砂 しまり悪い 淘汰やや悪い	2a層系
C	18	5Y7/1	灰白	極細砂粒含み 粗砂～中砂 しまり非常に良い 淘汰悪い 砂質 下半中心に葉理有 φ2cm大の礫少量含む φ1cm以内の礫を多く含む	自然堆積層
C	19	5Y5/2	灰オリーブ	粗砂含み 細砂～極細砂 しまり良い 淘汰悪い φ2～3mmの礫を層中にやや多く含む 土器片有 東半は粗粒化傾向強くなる	3a層
C	20	10Y6/1	灰	細砂～極細砂 しまり悪い 淘汰良い	3a層系
C	21	2. 5Y5/1	黄灰	粗砂含み 中砂～細砂 しまり良い 淘汰悪い 粘性弱い 2～3mmの礫を非常に多く含む 下層12の層のシルトブロックを少量含む 土器片を多く含む	3a層系

C	22	5Y5/1	灰	粗砂含み 細砂～極細砂（一部シルト含む） しまり良い 淘汰やや悪い マンガン斑状に10%沈着 φ2～3mmの礫を層中に多く含む 土器片少量含む	4-2a相当層
C	23	2.5Y6/1	黄灰	粗砂含み 中砂 しまりやや悪い 淘汰悪い φ2～3mmの礫で構成される層	4-2a相当層系
C	24	2.5Y6/1	黄灰	粗砂含み 極細砂～シルト しまり良い 淘汰やや悪い マンガン斑状に15%沈着 φ2～3mmの礫を非常に多く含む φ5mm大の礫を少量含む	4-2a相当層系
C	25	N4/0	灰	極細砂粒含み 極細砂～シルト しまり良い 淘汰悪い φ2～3mmの礫を非常に多く含む φ5mm大の礫を少量含む マンガン継位に7%沈着	4-3a相当層
C	26	5Y7/1	灰白	粗砂含み 中砂（一部シルト含む） 上半中心に上層15の層のシルトブロック（N4/灰）が5%混入（φ3cm前後）擾乱受けている 上半は粗砂主体の葉理顕著 下半は中砂主体の葉理 最下端は極細砂～シルト（2.5Y7/1 明オリブ灰） 東半部は上部土壌化しており5a相当層となる。	5b層
C	27	5Y6/1	灰	極細砂粒含み 粗砂 しまり非常に悪い 淘汰悪い 粘性弱い（砂質） 上層16の層よりもよりしまり悪く構造も少ない	5b層
C	27-1	2.5Y6/3	にぶい黄	細砂含み シルト～粘土 しまり良い 淘汰良い	5b層
C	28	N5/0～N4/0	灰	中砂含み 極細砂～シルト しまりやや悪い 淘汰やや良い 粘性やや強い 上半中心にマンガン継位に3%沈着（暗色帯） φ1～2mmの礫を少量含む	6a層
C	29	5GY5/1	オリブ灰	（西半）中砂含み 細砂	6b層
C	29-1	7.5Y6/1	灰	（東半）粗砂～中砂 しまりやや悪い 淘汰やや悪い 東半に行くにしたがって粗粒化 マンガン斑状に3%沈着 一部で葉理あり	6b層
C	30	N4/0	灰	中砂含み 細砂～極細砂 しまりやや良い 粘性やや弱い（暗色帯）	土壌層
C	31	7.5Y6/1	灰	粗砂含み 中砂～細砂 しまり悪い 粘性弱い 淘汰やや悪い φ2～3mmの礫を多く含む 部分的に葉理有	自然堆積層
C	32	7.5Y5/1	灰	極細砂粒含み 極細砂～中砂 上半は極細砂粒主体 下半は極細砂ブロック	6a層
C	33	2.5Y4/1	黄灰	中砂含み 極細砂～シルト しまり良い 淘汰悪い	遺構 埋土
C	34	2.5Y4/1	黄灰	粗砂含み 細砂～極細砂 しまりやや悪い	遺構 埋土
C	35	5Y5/1	灰	中砂含み 極細砂 しまり良い 淘汰良い 細粒化 上方細粒化	遺構 埋土
C	36	5Y4/1	灰	極細砂粒含み 粗砂～中砂 しまりやや悪い 淘汰悪い 上方細粒化	遺構 埋土
C	37	N4/0	灰	粗砂含み 中砂～細砂 しまり良い 淘汰やや悪6a層がブロック状に混入	遺構 埋土

第5章 調査成果

楠根川と讃良川に挟まれた3-1区・3-2区・7区では、これら河川からの氾濫堆積物が頻繁に供給されているため、耕作面の遺存状態が良好であった。このため、ここでのみ第1-2面・第1-3面・第1-4面・第1-5面の調査を行っている。いずれも畦畔や畝と畝間などを検出している。

作土層は、頻繁に供給される氾濫堆積物を反映して、非常に砂っぽく細礫も多く含まれている。また、場所によってはラミナ構造の見られるブロックが観察できることから、十分に作土化される前にさらに土砂が供給され、また作土化するための攪拌を行うといった一連の流れの中で、形成されたと考えられる。この一連の行為により、調査区は周囲より1m程高い自然堤防を形成している。この自然堤防は、国道170号線（大阪外環状線）を越えて西へ伸び、最終的には寝屋川が形成した自然堤防へとつながっている。

本調査地が所在する讃良郡条里遺跡は、条里型地割を現在も見る事ができる遺跡として、周知されている遺跡であり、小字名にもその名残を留めている。本調査地は11坪・13坪・14坪・十五ノ坪にあたり、調査区内では坪境の検出が想定できた。しかし現在、坪境の位置には里道や水路・道路・河川といった地物があり、これらの保全のため調査対象とすることができず、唯一11坪と14坪の坪境を調査対象としたのみである。また、3-1区・3-2区・7区は13坪にあたり、検出した畦畔や段差は、昭和36年（1961年）の空中写真（図3）や、調査前の地形図から作成した図10の、薄い太線で示す畦畔位置とほとんど変わっておらず、この状況は第3面段階まで遡ることができる。

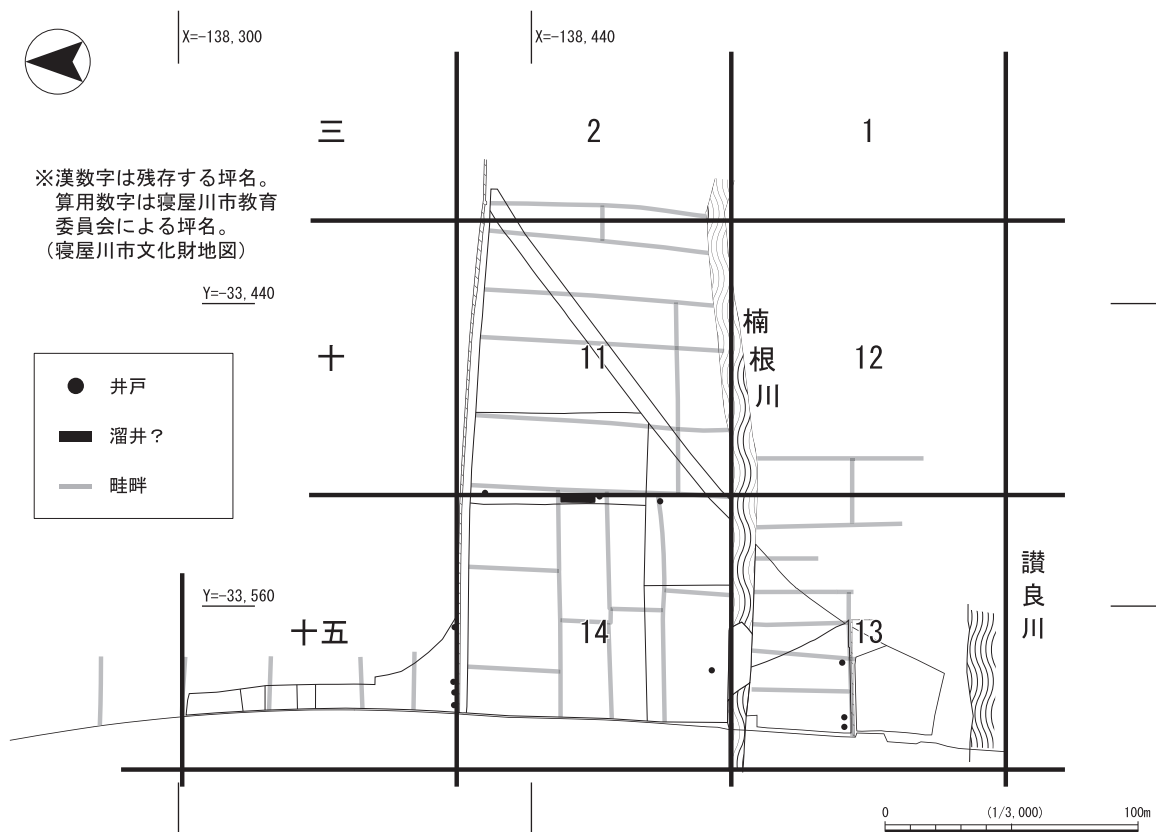


図10 坪割り図

第1節 第1－2面の遺構と遺物（図11）

第1－2面は、3－1区と3－2区で検出した遺構面で、1－1 a層及び1－1 a層下に部分的に残っている氾濫堆積層（1－1 b層）を除去して検出している。

この面では、畦畔・高まり・溝・島島・段・畝と畝間を検出している。

1691高まりは、南北長約12m東西長7.4m、作土面からの高さが約20cmを測る、ややいびつながら方形を呈する高まりである。1691高まりの南西角には、1692畦畔が取り付くが、取り付き部分には、水口が設けられている。水口には、中砂から粗砂の堆積が見られた。

1692畦畔は、南北方向の畦畔で3－2区の調査時には、畝と誤認していたようで、改めて図11に1692畦畔から南へ延びる黒い点線で復元し、示している。1693溝は、L字状の非常に浅い溝で幅は約60cm、深さは約5cmである。1694島島は、上半部分が全て失われ、芯となる部分のみの検出となっている。芯の部分は、ラミナが見られる中砂から極粗砂のブロックであり、周辺に堆積した氾濫堆積物を掻き集めて盛ったものと考えられる。島島の西肩は調査区外のため全幅は不明であるが、5m以上あると考えられる。検出延長は約33.2mで、高さは、耕作面から約15cmを測る。この他1692畦畔から東へ約4mの部分で南北方向の段を検出している。この段の東側は西側よりも約35cm耕作面が高くなっている。段と1692畦畔の間で、1691高まりの南では、南北方向の畝と畝間を数条検出している。畝間には、ラミナの見られる細砂～中砂が堆積していた。この部分の耕作面の標高は、約5.8m、段の東側は6.1～6.2mを測る。1691高まりと1692畦畔から1694島島の間でも畝と畝間を検出している。特に、L字状の1693溝の南では良好な状態で検出している。畝間には、ラミナ構造の見られる細砂～中砂が堆積していた。この部分の標高は約5.6mである。

図11の左側に、a－a'の位置で遺構面の断面を作成しているが、平坦面が造られ東から西へ徐々に低くなって行くのがわかる。また、大きく耕作面の高さが変わる部分には、東から段差、1691高まりの西裾とその延長線上の1692畦畔、1693溝とその延長線上の段差、1694島島の東裾がある。図10と対照すると丁度畦畔の位置にあたり、これらの遺構は13坪内の南北方向の地割を表すものと考えられる。

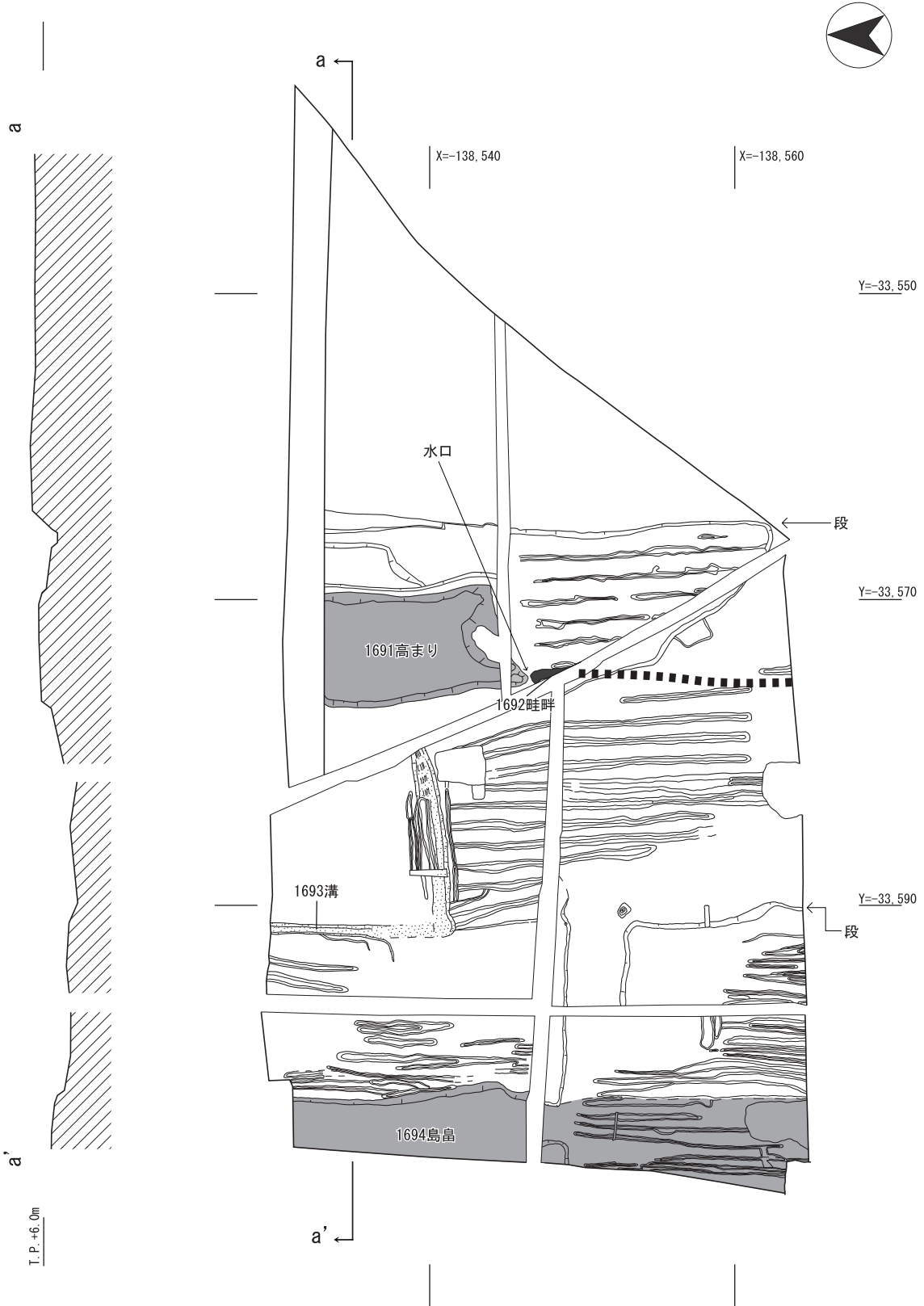
第2節 第1－3面の遺構と遺物（図12）

第1－3面は、3－1区の東部分でのみ、遺存していた遺構面である。遺構面の検出にあたっては、作土層である1－2 a層と、その下層の1－2 b層を除去して行った。ここでは南北方向の1695畦畔と1696畦畔、東西方向の1697畦畔、1698畦畔、そして1699溝を検出している。1695畦畔と1696畦畔は平行して造られており、その間は約11mを測る。これらの畦畔をつなぐような形で平行する1697畦畔と1698畦畔が、わずか1mほどの間隔で造られている。1699溝は、上面の1691高まりの西裾部分にあたる位置に掘削されている。

第3節 第1－4面の遺構と遺物（図13、図版1-3）

第1－4面は、3－1区と3－2区で検出した遺構面である。1－2 a層及び1－3 a層と、部分的に残っている1－3 b層を除去して検出した。

坪内の南北方向の地割を示す遺構として、1702畦畔・1704溝・1705溝・1708島島とそれらにつながる段があげられる。1702畦畔は南北方向の畦畔で、その西側に沿って、畦畔より低く耕作面より約4



※地形を強調するために
高さを4倍(1/100)にしている。

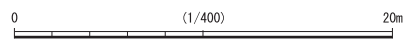


図11 第1-2面(3-1区・3-2区)

cm高い、最大幅約1.5mを測る犬走状の遺構を検出している。1704溝は幅約1m、深さは約10cmを測る。溝の北延長上には、東側より西側が10～15cm低い南北方向の段を検出している。1705溝は、幅50cm、深さ5cmを測る。溝の南の延長線上には、東側より西側が約5cm低い南北方向の段を検出している。

1708島畠は、第1～4面段階で、拡張するために盛られた部分を除去しているのみで、上面の高さは第1～2面とほとんど変わらない。幅はやや狭くなり、一部西肩を検出している。この部分で幅は約3.8mを測る。

1702畦畔の東では、南北方向の1700畦畔と1701畦畔を検出している他、南北の作土面の高さが異なっており、北半は南半よりも約35cm高く、段差がついている。一部、この段に沿って犬走の様な遺構が造られていた。第1～3面では、1700畦畔と1701畦畔の位置に畦畔が検出されており、この面の畦畔を踏襲して造ったと考えられる。

1702畦畔と1704溝の間では、1703畦畔を検出している。1703畦畔は、高さは4～5cm、幅約1～1.5mを測り、南で東へやや振れる。1704溝と1705溝の間では、主に南側で南北方向の畝と畝間を数条検出している。畝間の間隔は約50cmで、畝の上部は失われている。

この畝と畝間の南には、東西方向の1706畦畔を検出している。畦畔の幅は約35cm、高さは畦畔の北側で4cm、南側で24cmを測る。この1706畦畔を挟んで南の耕作面の高さは北側よりも約23cm低くなっている。

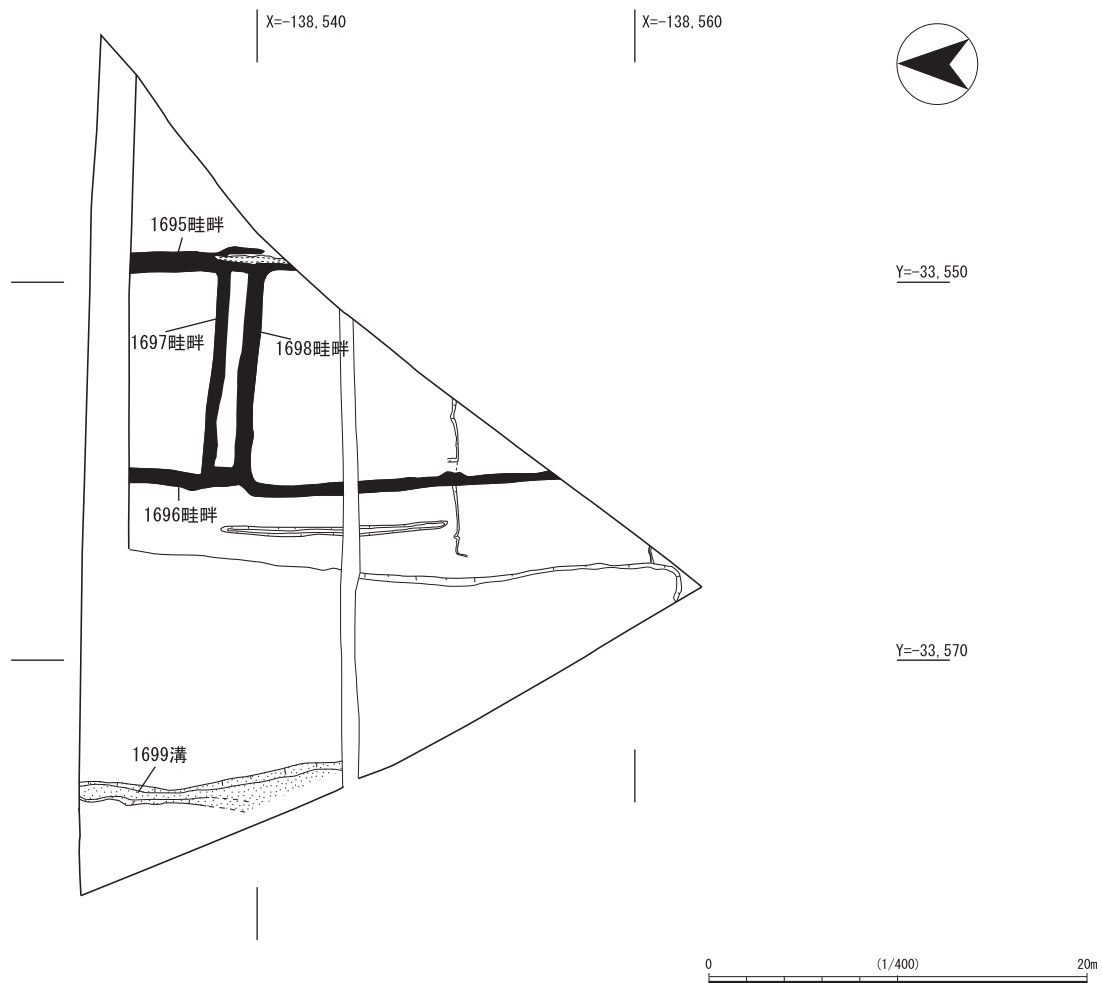
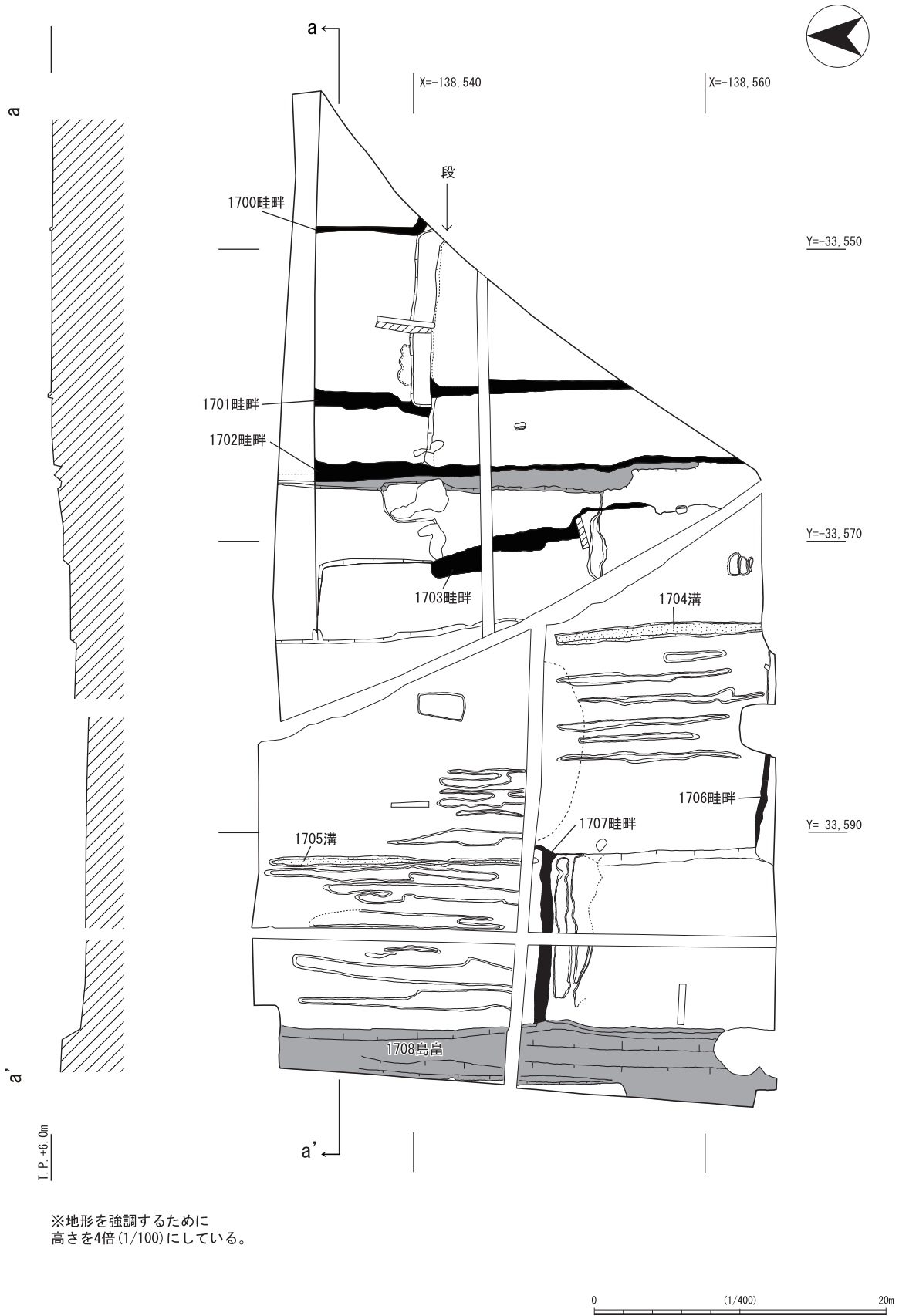


図12 第1～3面（3-1区）



※地形を強調するために
高さを4倍(1/100)にしている。

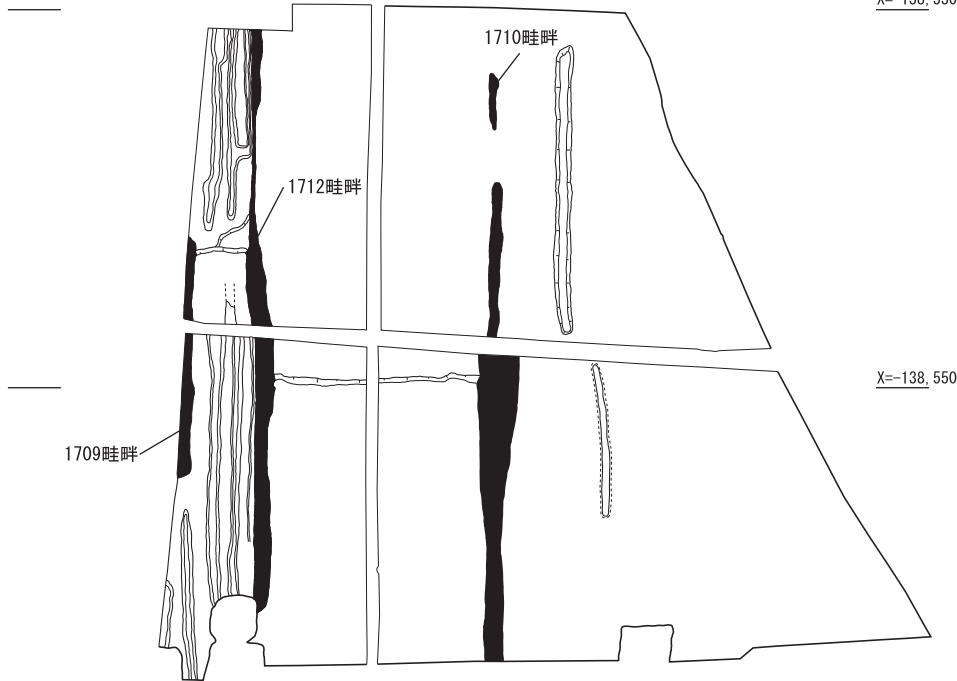
図13 第1-4面(3-1区・3-2区)

Y=-33,600

Y=-33,580

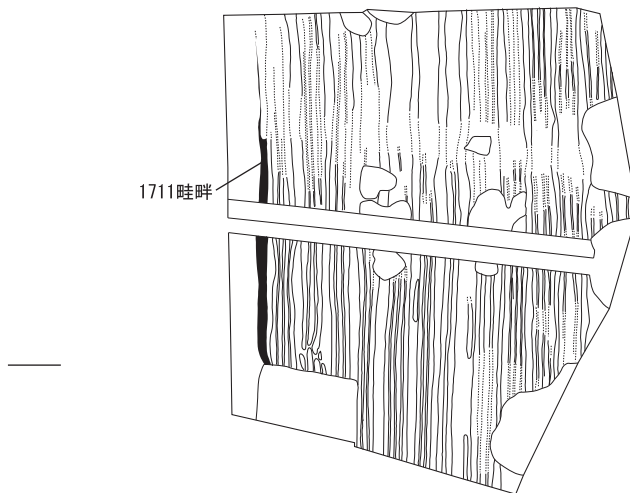


X=-138,530



X=-138,550

X=-138,570



X=-138,590

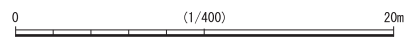


图14 第1-5面(3-2区·7区)

1705溝と1708島島の間では、1707畦畔と南北方向の畝と畝間を検出している。1707畦畔は、1705溝の南延長上にある段と1078島島を結ぶように造られている。幅は約70cm、高さ約3cmである。水口は検出していない。1707畦畔の北側では幅1m前後、深さ5cmほどのやや幅の広い畝と畝間を検出している。畝間には、底付近にわずかではあるがラミナの見られる細砂から中砂が堆積している。

第4節 第1 - 5面の遺構と遺物 (図14、図版1-4)

第1 - 5面は、1 - 4 a層及びその下に堆積している複数の作土層を除去して検出した遺構面で、3 - 2区および7区でのみ調査を行っている。3 - 2区と7区の間は、畦畔による地割の位置にあたるが、調査中も使用しているコンクリート製の用排水路があり周辺の農業用用水路として確保する必要があったため、調査できなかった。

この面では、南北方向の畦畔、段、畝と畝間を検出している。

1710畦畔は、検出長のほぼ中くらいからやや幅が広がっており、この部分では幅2mを測るが、高さは非常に低く3 - 4cm程度である。1712畦畔は、東肩の一部が削られたようになっており、おそらく上面の島島を造るさいに、島島の東裾として利用されたため削平を受けたと考えられる。この南北方向の1710畦畔と1712畦畔をつなぐような形で東西方向の段を検出しており、北側が南側よりも約10cm高くなっている。耕作面の高さは、段の北側で5.4m前後、南側では5.3m前後を測る。1712畦畔の西では、1709畦畔を検出している。検出長は約13mで、高さは約15cmである。調査区域の端で検出しているので全体像は明らかではない。1つの推測として、上面には島島があるが、島島は耕作面上昇とともに拡張を繰り返すことがあるため、1709畦畔は島島の東裾の可能性も考えられる。

1711畦畔は、検出長約17mを測る。1711畦畔を境に耕作面の高さが東より西が低くなっており、比高差は25cmを測る。1711畦畔の東では、耕作面上に氾濫堆積物層が遺存しており、南北方向の畝と畝間を、良好に検出できた。畝と畝間は非常に密で、上面で検出している畝と畝間よりも間隔は狭い。畝間には、耕作面直上にラミナの見られるシルトが存在し、その上には、細砂から中砂が堆積している。

この他、第1 - 2面からの調査に伴い井戸を検出している。井戸自体は調査対象から除外したが、ここで若干その分布について見てみたい。

調査地内では、中世末以降に造られて廃棄された11基の井戸を検出している。井戸は、全て坪境付近に造られており、13・14・十五ノ坪に集中している。13坪の3基の井戸は、いずれも柱材を転用した材を方形に組み、その外側に板材の側板を持つものである。14坪では、13坪で検出した井戸と同様の構造を持つ井戸3基と、円形の掘形の素掘り井戸もしくは溜井と考えられるもの1基、南北17m、東西3.5m、深さ90cmの掘方が長方形の溜井と思われるもの1基を検出した。十五ノ坪では、素掘りで掘方が円形の、井戸もしくは溜井と考えられるもの3基と、板材を使った井戸枠を持つと考えられる井戸1基を検出している。井戸枠を持つ井戸に関してはいずれも、上部構造を撤去した後、板材で蓋をして廃棄・埋戻しを行っている。なお、14坪の井戸内からは、井戸枠専用瓦が数点出土しており、井戸枠専用瓦による上部構造を持っていたと考えられる。

条里型地割の見られる耕作域での井戸の分布については、池島・福万寺遺跡で井上氏が掘削位置は自然堤防上に分布することを指摘しており、条里型地割に規制されるものではないと考えられるが、今回検出した井戸は、全て坪境付近に造られており、本調査地での井戸の掘削に際しては、条里型地割による何らかの制限があった可能性が考えられよう。

第5節 第2面の遺構と遺物 (図15、図版1-1・2・5・6)

1 a層系を除去して検出した遺構面で、2 a層を作土層とする中世段階の耕作面である。この面では、耕作に伴う小溝を多数検出している。小溝は、地割方向に規制されるため、14坪・十五ノ坪にあたる1区・2区・4区・5区西半・9区は、東西方向の小溝が南北方向の小溝よりも卓越している。それに対し、11坪・13坪にあたる5区東半・6区・8区および3-1区・3-2区・7区においては南北方向の小溝が東西方向の小溝よりも卓越している。

坪境は、5区・8区において見られる南北の80cm段差が、ほぼ11坪と14坪の坪境の位置にあたり坪境として考えることができる。各坪内の地割となる畦畔は、上層上面からの耕作に伴う攪拌もしくは、同位置において畦畔を造ることにより、この面ではほとんど検出できなかったが、その痕跡を示すものとして、5区・9区を東西に通る地割り位置 (図15 A) と、8区を南北に通る地割り位置で (図15 B) 高さ4cmほどの段を検出している。検出した小溝内からは、瓦器の小皿 (図20-1) や天聖元寶 (図20-13)、石鏃 (図104-330) の他、土師器・須恵器・瓦質土器などの破片が出土している。

1 a層上層・2 a層出土遺物

1 a層上層～2 a層で出土した遺物には陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器・土製品・石器・金属製品・木製品などがある。この内、図化したものに土師皿、備前摺鉢、土師器杯・甕、須恵器甕、土錘、丸瓦、銭貨、サヌカイト製品など (図20-2～12・14～16、図104-340・341・344) がある。

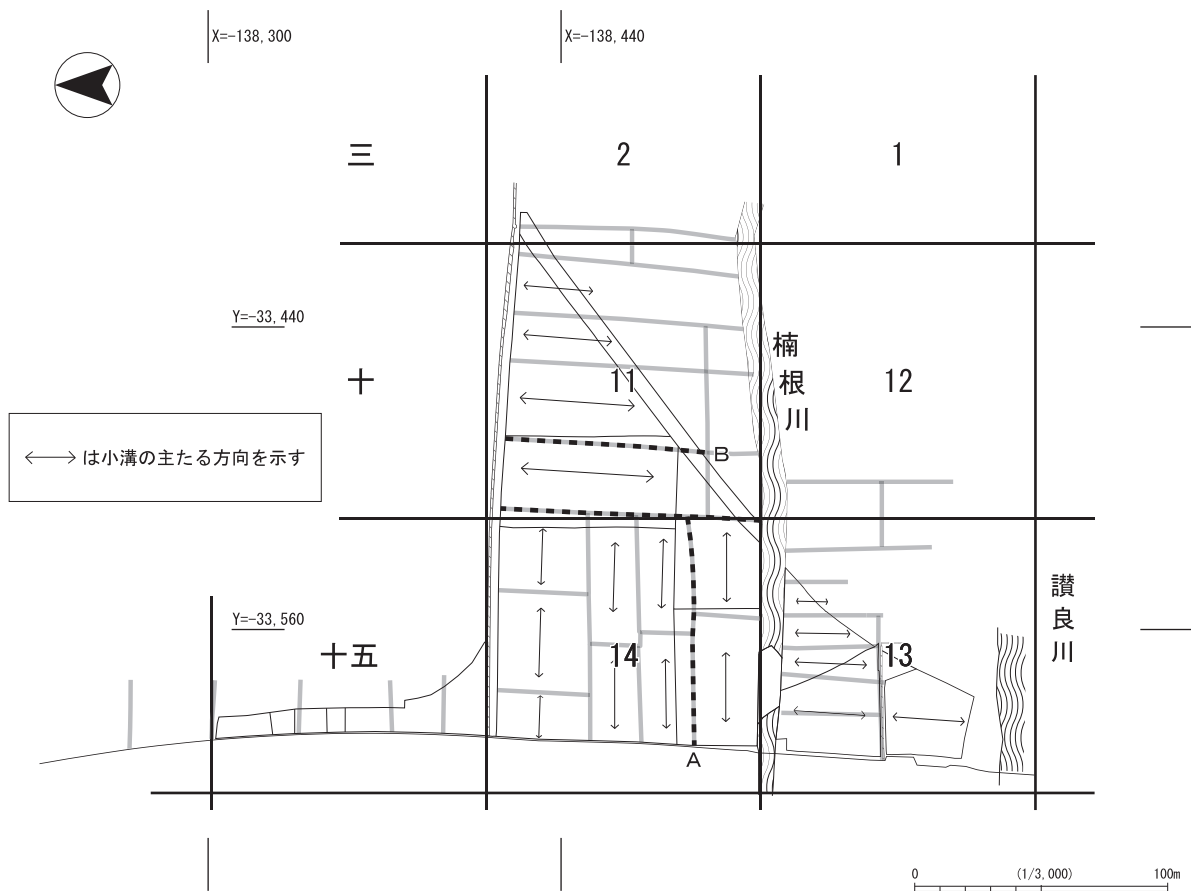


図15 第2面 地割り

第3 a層 (図18・19)

基本層序において述べたように、3 a層は中世段階の耕作層で、色調は灰黄褐。土質は中砂～極粗砂粒を含むシルトであり、上層の2 a層よりもシルトの含有量が多いため、2 a層との層境に酸化第二鉄の沈着が著しく、マンガン斑も多く見られる。また、場所により3 a層は大きく2層に分層でき、上層を3-1 a層、下層を3-2 a層としている。細かく見ると上層は、細砂混じりのシルトで中砂～極粗砂粒を含む。下層は、シルトで中砂～極粗砂粒を上層よりやや多く含んでいる。いずれも2層より暗色化が強く容易に認識できる層である。第3面の調査としてここでは、2 a層を除去した遺構面で全体図を作成している。そのため、3 a層を細分できる部分では3-1 a層上面、3-1 a層が見られなかった部分では3-2 a層上面となっている。ここで、3 a層の遺存状況を東から順に記す。6区では3 a層を細分できずまた、2 a層により削平を受け3 a層自体を検出できない部分も見られた。8区においては、6区と接する部分で3層の細分はできなかったが、西へ向かうにつれ3-1 a・3-2 a層に細分可能となる。3-1 a層は細砂シルト中砂粒若干混じりでやや細砂が多い。3-2 a層は、シルト中砂から極粗砂粒が混じる。ここでは、3-1 a層の上面に、須恵器や土師器の細片を含む、若干土壌化した極粗砂～中砂の薄層が見られた。8区の西端には、中世段階の切土による1～0.8m近い段があるため、この段から1区にかけて3 a層は失われている。1区中ほどからは、3-1 a・3-2 a層に細分可能となる。5区では、3 a層は存在するものの細分はできない。9区では、3 a層が部分的に分層可能であるが、多くは一層として捉え調査を行っている。9区や5区と楠根川を挟んで位置する3-1区では、調査段階では直接層の対比が行えなかったが層相などから3 a層に対応する層を認識しているが、面的な調査は行っていない。後続する3-2区では3-1区の調査成果を踏まえ、3 a層に対応する層の上面で調査を行った。2区、4区、7区では、3 a層は見られるものの細分はできなかった。

第6節 第3-1面の遺構と遺物 (図18、図版2-1～6)

本遺構面は、2 a層を除去して検出した遺構面で、3 a層を作土とする耕作面であるが、層上面は、上層の2 a層上面および1 a層上面からの耕作に伴う攪拌のため失われており、本来の景観を保っていない。この面で検出した遺構の大半は、耕作に伴う小溝である。埋土は2層に帰属するため、上層上面からの耕作に伴う遺構である。小溝は、第2面と同様に、地割り方向に規制されるため、14坪・十五ノ坪にあたる1区・2区・4区・5区西半・9区は、東西方向の小溝が、11坪・13坪にあたる5区東半・6区・8区および3-1区・3-2区・7区においては南北方向の小溝が卓越している。小溝内からは土師器・瓦器・瓦質土器などの、主に中世段階の土器の小片が多く見られた他、須恵器の杯なども出土している。(図21-37・38・40・41・45・47)

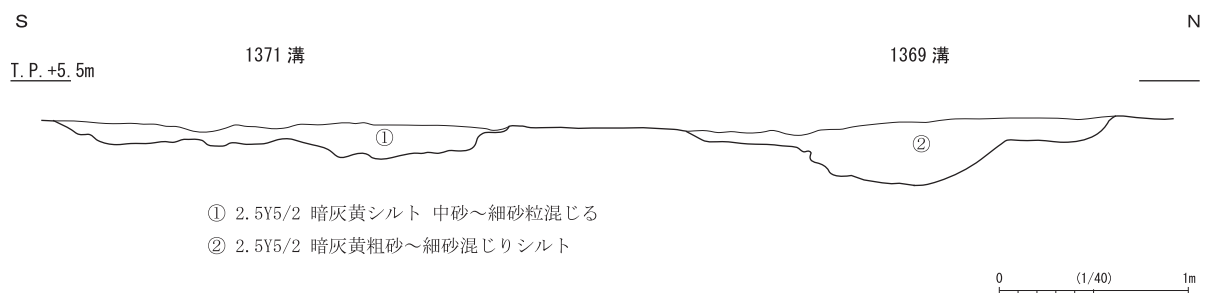


図16 721溝 (1371溝)・722溝 (1369溝) 断面

この他、14坪の南端の地割りにあたる5区・9区では、南北方向の幅が広く、深さもやや深い溝、719溝・721溝・722溝・724溝・723溝、1712溝、1713溝を検出している。(図16・18)

いずれの溝も東端は、11坪と14坪の坪境付近で収束しているが、坪境に取り付いて終わるのか、坪境と間隔を空けて収束するのかは、坪境付近が上層からの削平などが著しく不明である。西端は調査区外へと続いている。

719溝[1372溝]は、幅約1.1m、深さは約10cm。721溝[1371溝]は、幅約1.2m、深さは約12cm。

722溝[1369溝]は、幅約1.2m、深さは約16cmで、掘方は二段掘りを呈する部分が見られる。

724溝[1373溝]は、幅約1.3m、深さは約6cm。723溝[1370溝]は、幅約1.5m、深さ約9cmで、722溝[1369溝]と同様に、二段掘りの様になっている部分が見られる。

1712溝は、幅約1.3m、深さ約11cm。1713溝は、幅約50cm、深さは約3cmである。

※[]内の遺構番号は9区調査時のものである。

図16に、721溝[1371溝]と722溝[1369溝]の南北断面を掲げるが、二段掘りのような掘方を呈する。埋土は、どちらも単層で暗灰黄を呈し中砂～細砂粒混じるシルトと、粗砂～細砂混じりシルトである。埋土から見て、人為的に埋め戻したと考えられる。また、最下部にラミナを持つ細砂～極細砂が見られないことから、比較的短時間で掘削し、埋め戻したものと考えられる。しっかりした掘方や、埋土の状況、規則正しい配置などから天地返しに伴う溝ではないかと考えられる。

いずれも溝からも須恵器や土師器、弥生土器、縄文土器の小片が出土している他、719溝[1372溝]、

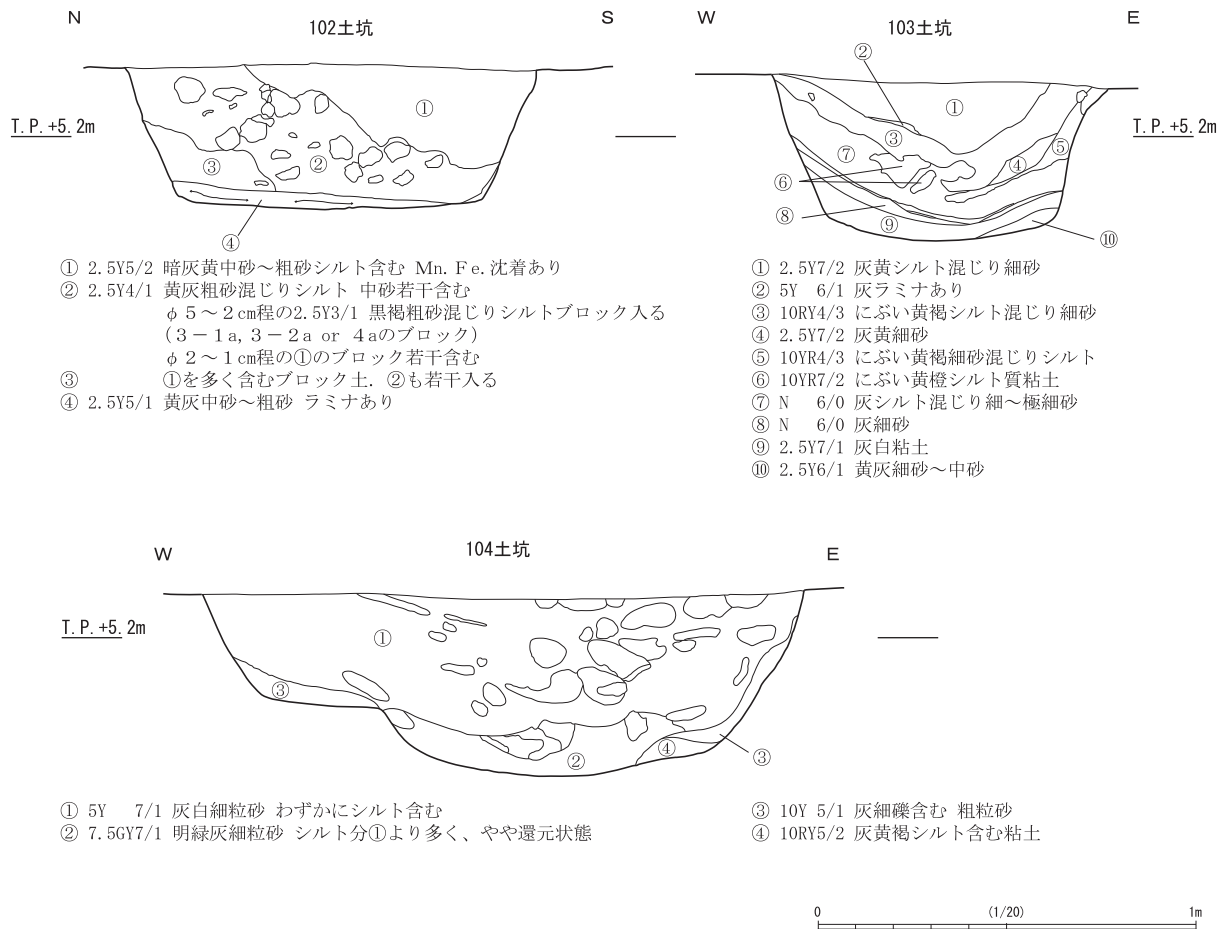


図17 102・103・104土坑 断面

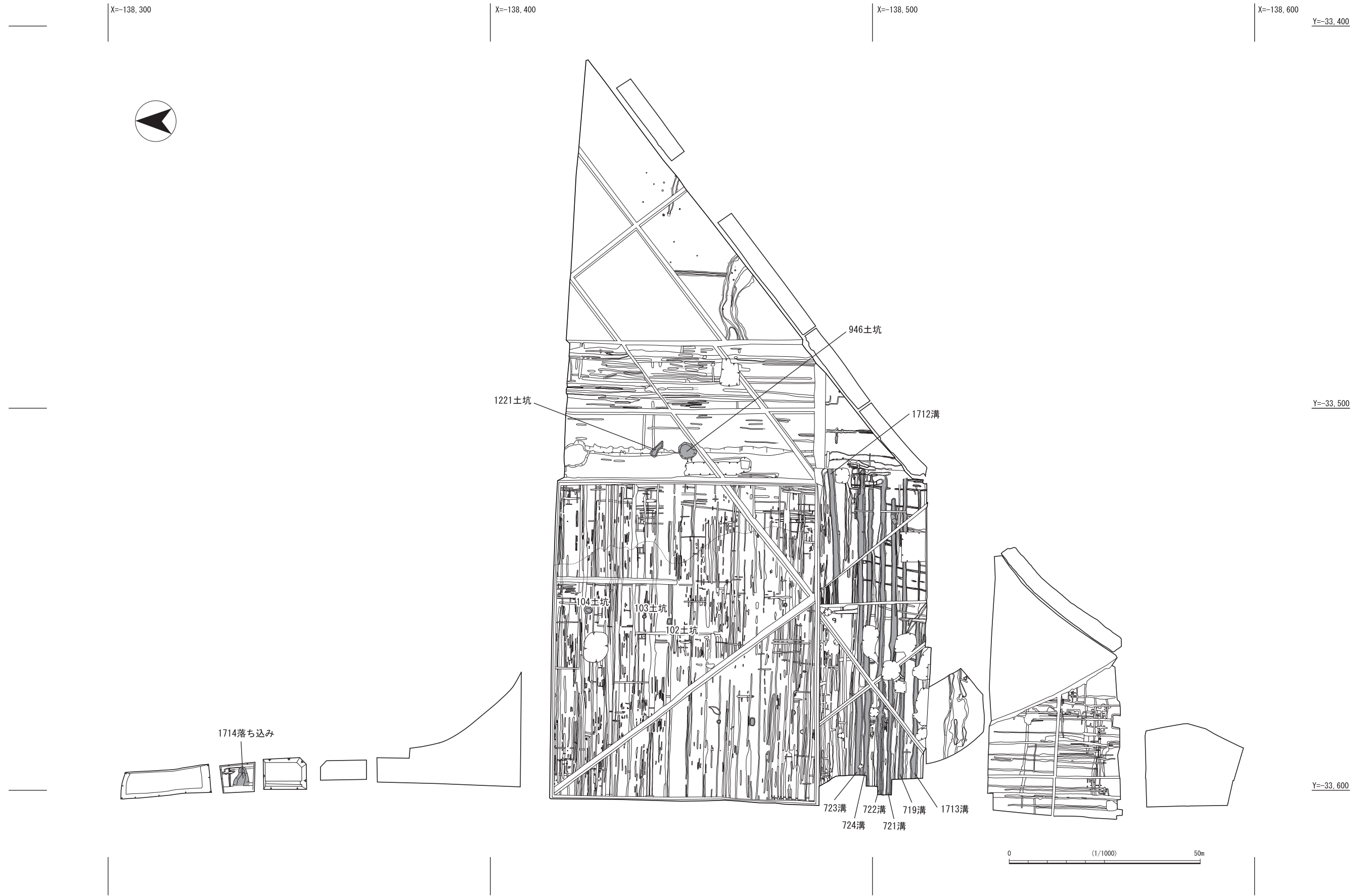


図18 第3-1面

と723溝[1370溝]から土師皿（図21-42・44）と瓦器片が、722溝[1369溝]から瓦質土器片が出土している。また、724溝[1373溝]から須恵器 杯蓋（図21-35・36）と、小片ではあるが青磁碗の口縁部片が1点出土している。

また、5区で1 1坪と1 4坪の坪境を検出している。幅は約1～1.5m、高さはわずかに2cmほどであるが、8区で坪境の痕跡とする高さ90cmほどの段の延長上にあり坪境として捉えることができる。

なお、この坪境の東で南北方向の畦畔と、この畦畔から西へ3mほど延びる畦畔を検出している。

この他、1区で土坑3基、8区で土坑2基、4区で落ち込みを検出している（図18）

102土坑（図17・図版3-5）は、平面形が隅丸方形で長辺1.7m、短辺1.1m、深さは38cmを測る。

103土坑（図17・図版3-6）は、直径90cmの楕円の平面形で、深さは41cmである。

104土坑（図17）は、長軸が2.1m、短軸1.6mの楕円の平面形を呈し、深さは深い部分で46cmである。

いずれの土坑も埋土は、下層のブロックと上層の2 a層のブロックが混じっており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。また、102・103土坑は、最下層にラミナが見られる細砂～中砂が見られることから、掘削してから埋め戻しまで、しばらく時間が空いていた可能性が考えられる。いずれの土坑からも、遺物は出土していない。

946土坑は、ほぼ円形の平面形で直径約4.5mの土坑である。埋土内から土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、青磁の他、瓦器椀（図21-43）も出土している。

1221土坑は、長軸4.5m短軸1.2mの長楕円の平面形をしており、埋土から軒平瓦片（図21-39）が出土している。この瓦は、高宮廃寺から出土する均整唐草文軒平瓦と同型であり、奈良時代末～平安時代初頭のものと考えられる。また、同型の瓦は、讃良郡条里02-1や隣接する讃良郡条里03-1からも出土している。

4区の1714落ち込みは、長軸が東西方向で検出長が5mを測る遺構である。西側は調査区外へ延びている。深さは94cmである。埋土は、下半は中砂～極粗砂で直径10cm前後のシルトブロックを含む。上半は、2 a層のブロックを含む中砂～極粗砂である。埋土から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。

第7節 第3-2面の遺構と遺物（図19 図版3-1～4）

この面は、3-1 a層を除去し検出した遺構面で、3-2 a層を作土層とする遺構面である。3-2面・3-2 a層は、先述したように場所によって検出状況・遺存状況が異なっており、基本的に1区及び8区のかなり限定された部分でよく確認できた。そのためここでは、良好な状態で3-2面を検出した1区部分について述べる。

この面では、耕作に伴う小溝の他、1718溝、377畦畔・378畦畔・379畦畔を検出している。また、小溝の検出状況は、上面と同様である。

1718溝は、幅約5cm、深さ約7cmで、南東から北西へ延びている。

この溝の南肩に沿うように377畦畔がある。検出長は約37mで、高さは約4cmである。この377畦畔の南に378畦畔がある。

378畦畔は、検出長32m、高さ約5cmである。377畦畔と378畦畔をつなぐ379畦畔がある。高さは約5cmである。いずれの畦畔も、耕作面上に僅かに堆積していた中砂～粗砂を除去して検出しているが、畦畔としては非常に低くまた、幅も1m前後と広い。畦畔としている377畦畔と378畦畔の下には第4-

2面で流路を検出している。このためこの流路内に堆積した砂層がやや盛り上がり、それを畦畔とした可能性が考えられる。

その他、11区で検出した、1329ピットから土師器 皿（図21-46）が1点出土している。

3 a層（3-1 a層・3-2 a層）出土遺物

3-1 a・3-2 a層から出土した遺物の内、図化したものに図20-17~34がある。

当該層は中世の耕作層であるが、図化した遺物に古墳時代から奈良時代の遺物が中心となっているのは、下層に古墳時代~奈良時代の地層があり、この地層を母材として作土が形成されているためである。特に18~29・31・32・33は3-1・2区からの出土遺物であり、ここでは下層で古墳時代~奈良時代の遺構が集中していることに由来する。反面、中世段階の遺物を図化できなかったのは、大部分が細片であったためである。

この他、石鏃も出土している。（図104-331・335・336、図版60-366）

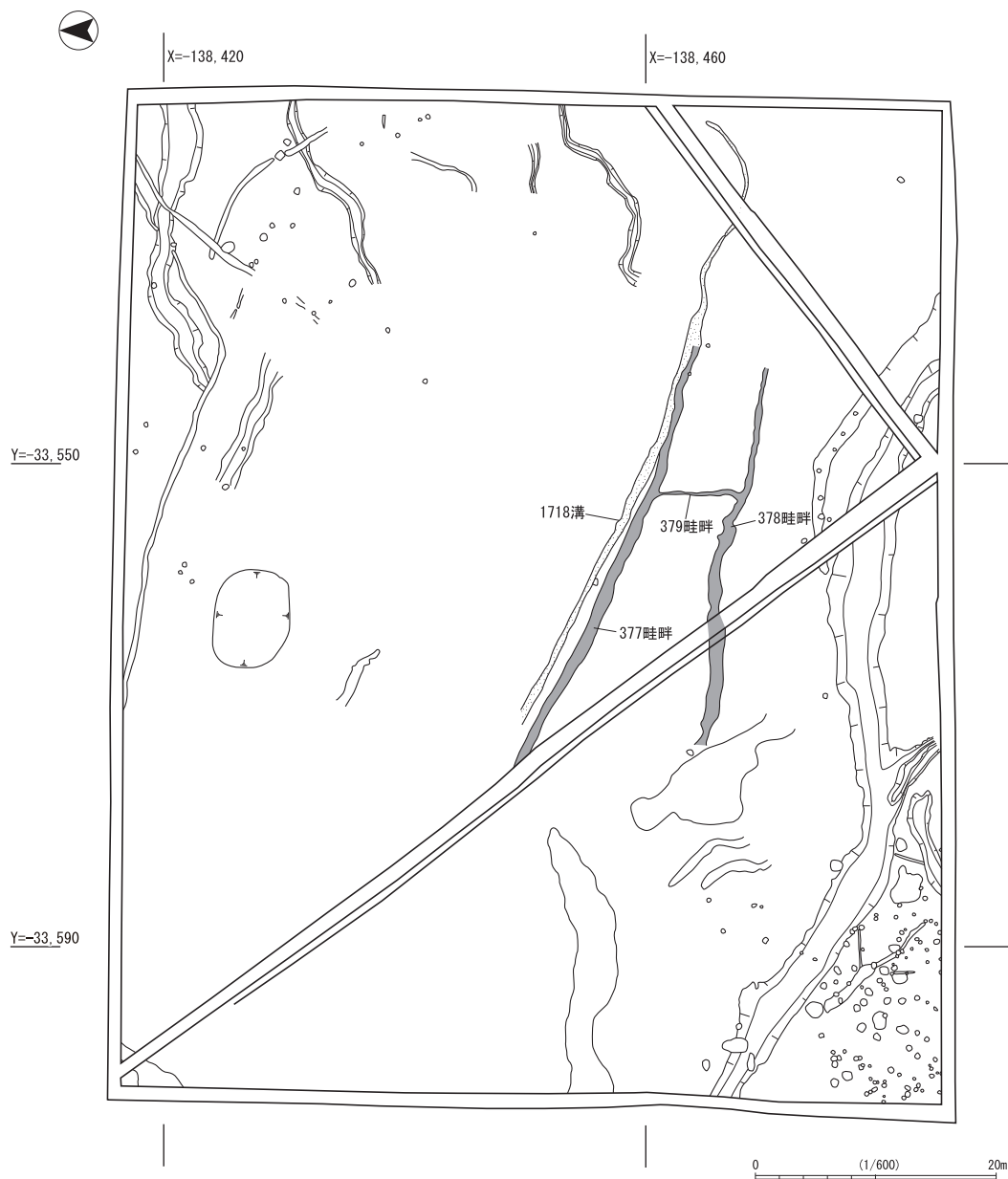


図19 第3-2面

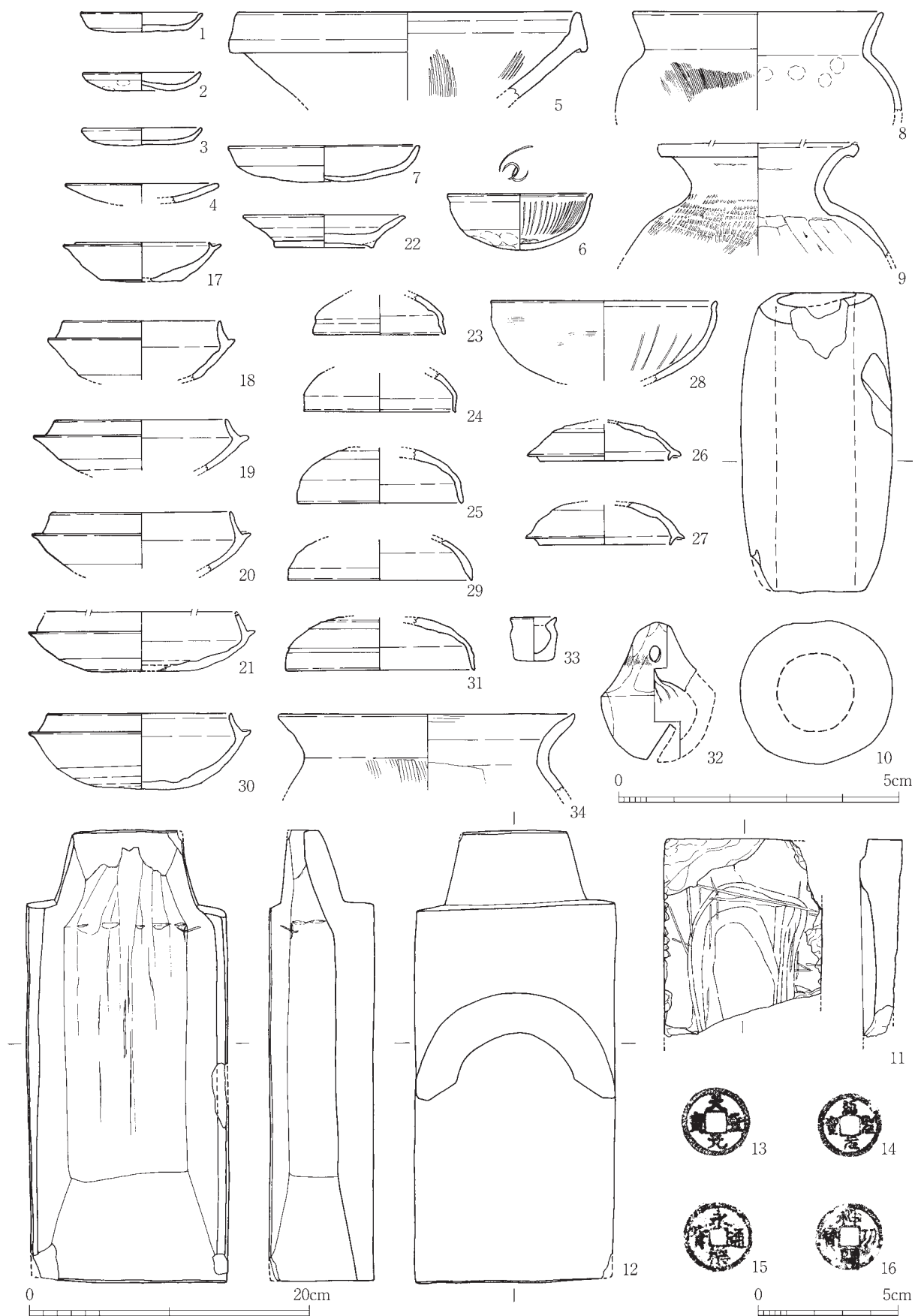


図20 1 a層～3 a層出土遺物

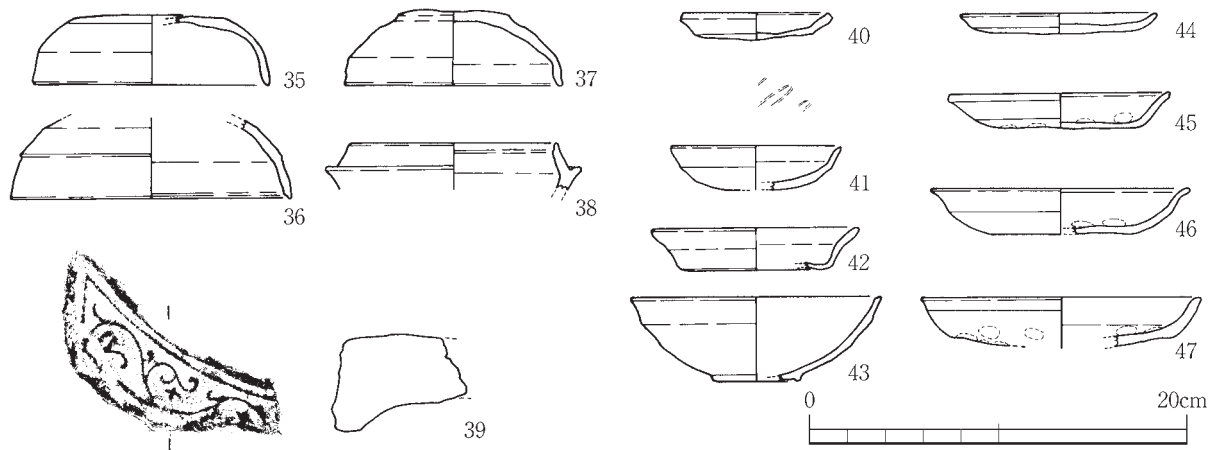
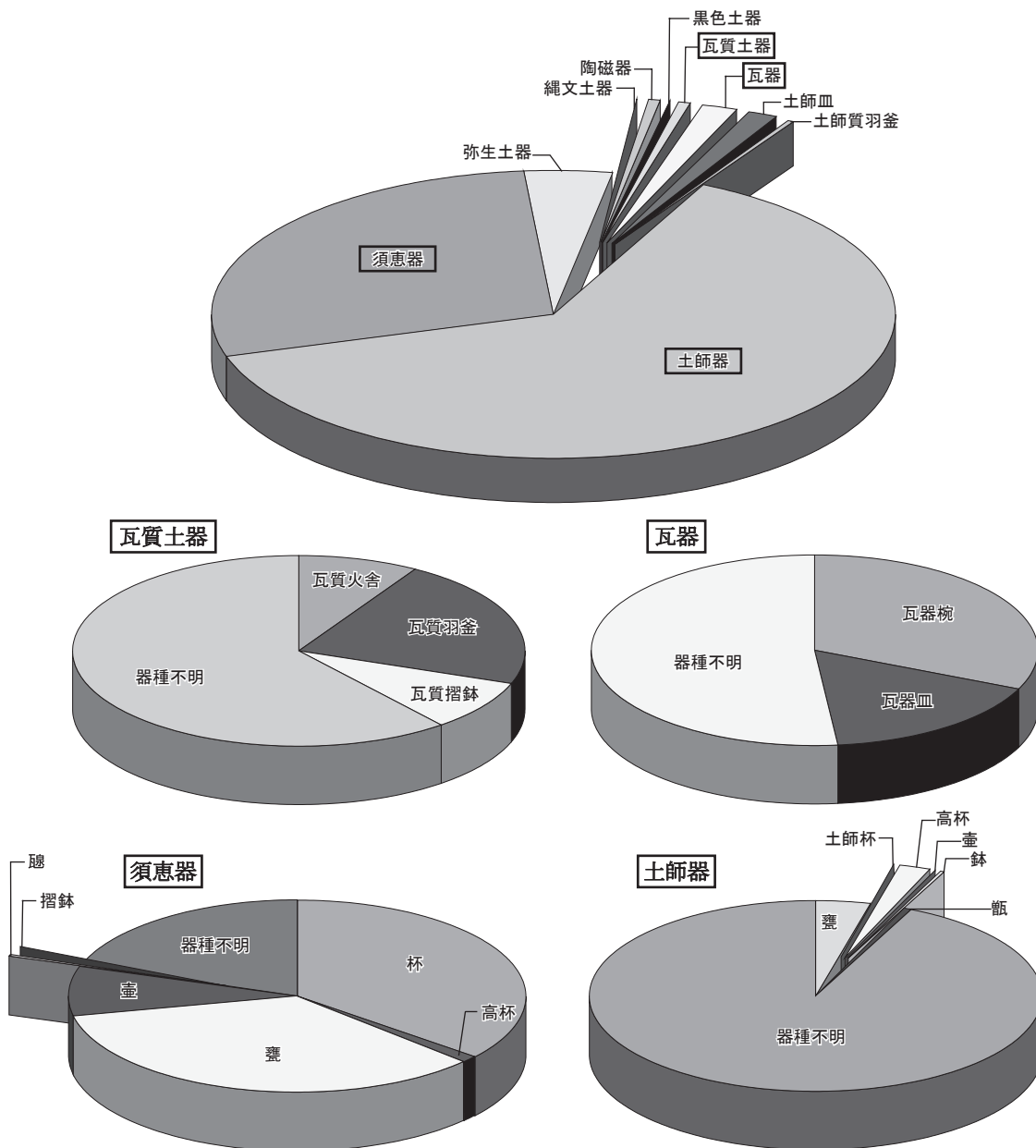


図21 第3-1面・第3-2面 遺構出土遺物

グラフ1 3-1a・3-2a層出土遺物集計表



4 a層

4 a層は、3 a層（3-1 a・3-2 a層）を除去して検出される土壤層で、基本層序で述べたように、大きく4-1 a層・4-2 a層・4-3 a層・4-4 a層の4層の土壤層からなり、それぞれの上面が第4-1面、第4-2面、第4-3面、第4-4面となる。この内、4-1 a層は主に1区や8区で見られる層で、下層の流路が完全に埋まりきらず窪みとなり、周囲より若干低くなった部分に堆積している層である。基本層序として4-1 a層と設定しているが層上面での遺構検出は部分的に行ったのにとどまる。以下、順に第4-2面、第4-3面、第4-4面について述べる。

第8節 第4-2面の遺構と遺物（図23、図版4-1～3、図版6-1・3、図版7-5～7、 図版8-6、図版10-1～5、図版11-1～3）

第4-2面は、3 a層及び3 a層下に堆積している土壤層と、4-1 a層を除去して検出した遺構面で、土壤層である4-2 a層を基盤層とする面である。上述したように、4-2 a層は暗色化が著しい4-2 a上層と4-2 a下層に細分できる。4-2 a上層は、1区・8区などでは良好に観察できるが、その他の調査区では、わずかな凹凸に取り残されたような形でしか観察できなかつた。しかし、途切れ途切れながら、調査地全体にわたって見られることから、本来は全体に存在していたと考えられ、耕作層である3-2 a層上面からの耕作に伴う攪拌によって大半が失われたと考えられる。4-2 a下層は、この4-2 a上層の母材となった層である。調査区全体を通して非常に安定して観察できる層である。

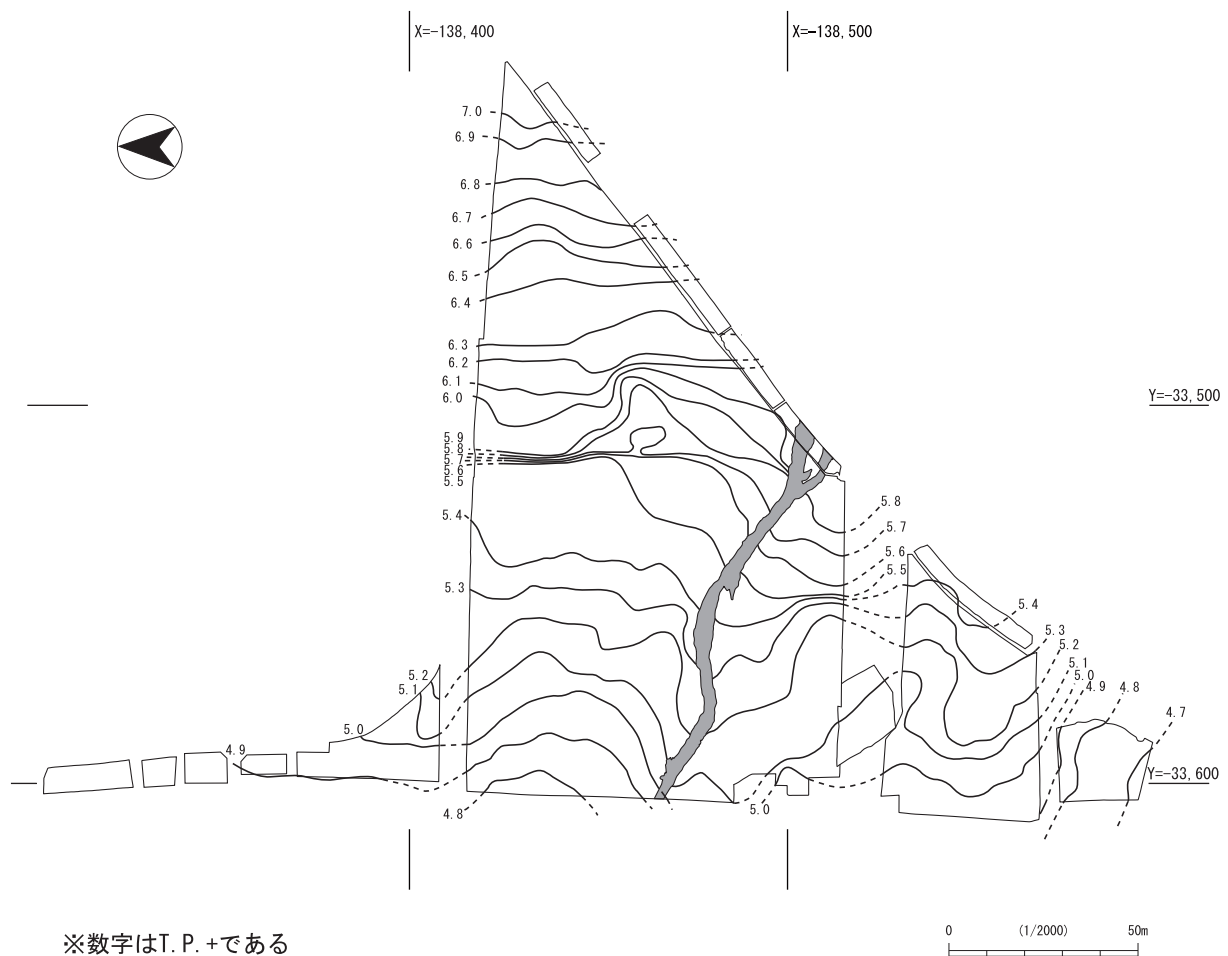


図22 第4-2面 等高線図

結果、遺構検出は4-2 a上層を除去した面で行っている。なお、3 a層下面・4-2 a上層上面の大部分で荷重痕跡が顕著に見られた。(図版4-4)

この面の地形は、大きく東から西へ傾斜する地形に、南東から北西方向へ延びる微高地が入り込む様子が読み取れる。(図22) この微高地は、1区南西部分と5区・9区と3-1・3-2区にあり、その縁辺の北側に沿ってトーンで示した172流路が位置する。微高地には周囲に比べ遺構が集中しており、掘立柱建物26棟、土坑、溝、ピット等を検出している。また、この微高地は等高線を見ると、現在楠根川が位置している部分で東へ入り込む様子を示すことから、2つに分かれることも考えられる。この微高地を形成している堆積層は、縄文時代晩期に考えられる氾濫堆積層であり、2つの等高線のピークをつないだ先に、この氾濫堆積物を吐き出した流路の存在が想定できる。

以下、第4-2面で検出した、主な遺構・遺物を時期を追って述べる。

平安時代以降の遺構・遺物

図24に示す651溝・652溝(1014溝)、678溝(1015溝)は、3-1区と3-2区で検出した溝である。(図版6-2・4~6、図版8-1)他の流路・溝とは大きく異なり東西の正方位にのるものであることから、条里型地割に規制されたものと考えられる。この面で検出しているのが、上層上面より掘削された溝である。いずれの溝も水が流れた事を示す、ラミナが見られる粗砂~細砂が堆積しており、水路としての機能を持っていた可能性がうかがえる。

651溝は、最大幅2mで、深さは約47cmである。652溝は、幅約1m、深さが20cmである。651溝・652溝は1014溝とつながる。678溝は、幅約80cm、深さ約10cmで、1015溝とつながる。これらの溝の内、651溝が幅・深さともに一番規模が大きく、主要な溝であったことが考えられる。そこから溢れた水を受けのために、幅が狭く深さも浅い652溝、678溝(1015溝)が掘削されたと考えられる。

このことは、652溝、678溝(1015溝)の溝底が652溝の溝底より20cmほど高い位置にあることからも言えよう。また、これらの溝は、最終的に同一層で埋没していることから、少なくとも埋没直前には、3本の溝が併存していたと考えられる。

651溝埋土内からは須恵器 杯(図73-184・185)、須恵器 杯蓋(図74-186)、弥生時代後期の甕体部(図76-187)、石鏃(図104-338)が出土している他、多数の土師器・須恵器片が出土している。また、図化はできなかったが、1014溝から黒色土器片が1点、561溝から土師皿片、652溝から羽釜片が出土しており、出土遺物から考えると平安時代に埋没した溝と考えられる。

この他、2区で検出した598ピット(図23)がある。598ピットは、平面形が不整形の方形で、深さは浅く約4cmである。掘形の底面からやや浮いた状態で土師器 椀(図74-213)が約1/2出土している。時期は10世紀前後と考えられる。

奈良・飛鳥時代の遺構・遺物

検出した当該時期の遺構・遺物を流路、掘立柱建物、溝、井戸、土坑、ピットの順で記述する。

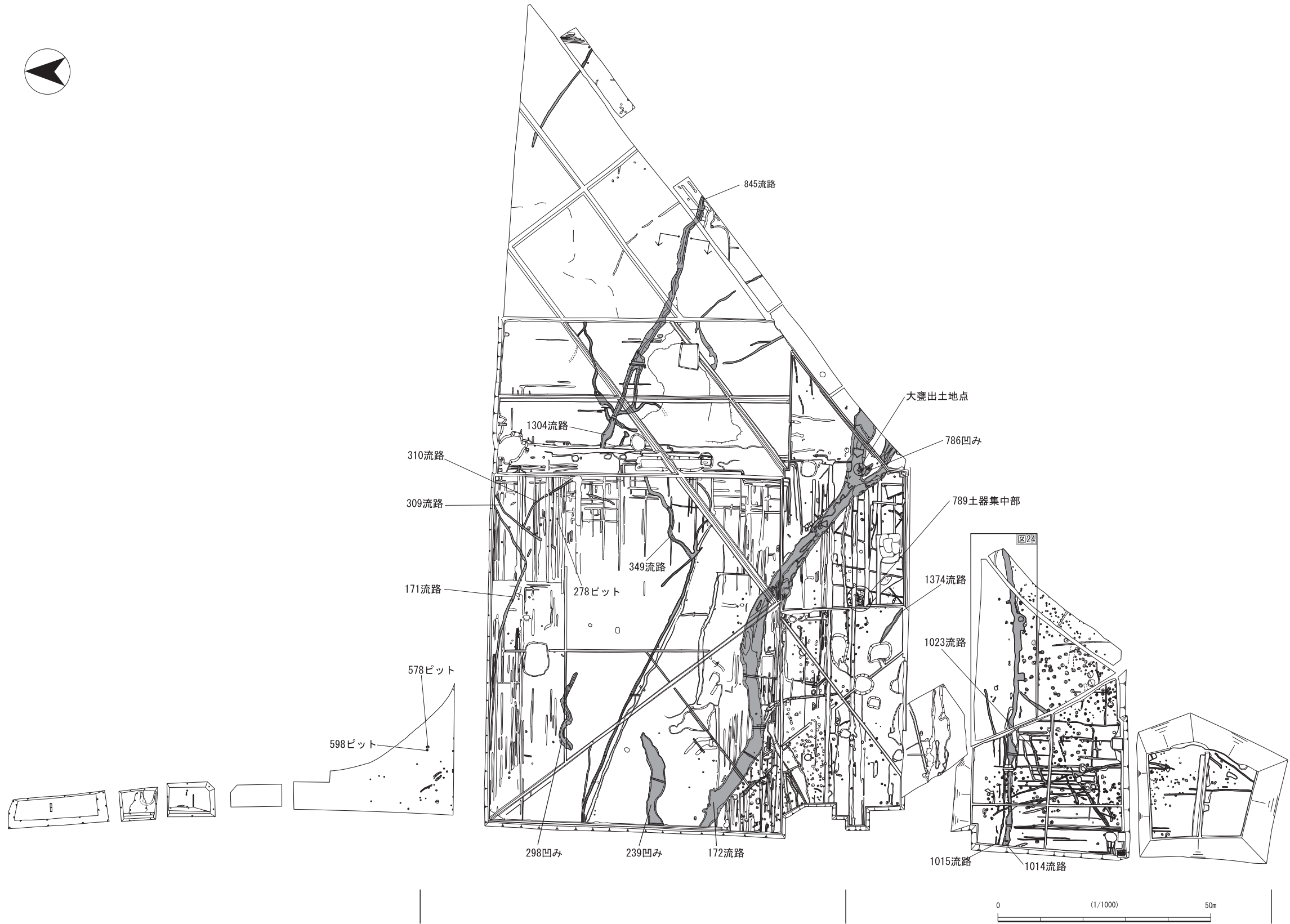
845流路(1304流路)(図23)は、下層の流路が完全に埋没せず凹みとして残り、再び水の流れにより刻まれた流路である。この流路は349流路へつなぐと考えられるが、中世段階の造成により途中が削平され、確認はできなかった。流路の規模は、上流側の8区で幅約1m、深さは約40cmを測る。埋土は大きく2層に分層できる。上層は10YR4/2灰黄褐シルト~細砂でラミナが見られる。下層は10YR5/2灰黄褐極細砂、シルトブロック混じりである。下層には、粗砂から細砂の流路内堆積物が存在する。

X=-138,300

X=-138,400

X=-138,500

X=-138,600 Y=-33,400



Y=-33,500

Y=-33,600

図23 第4-2面

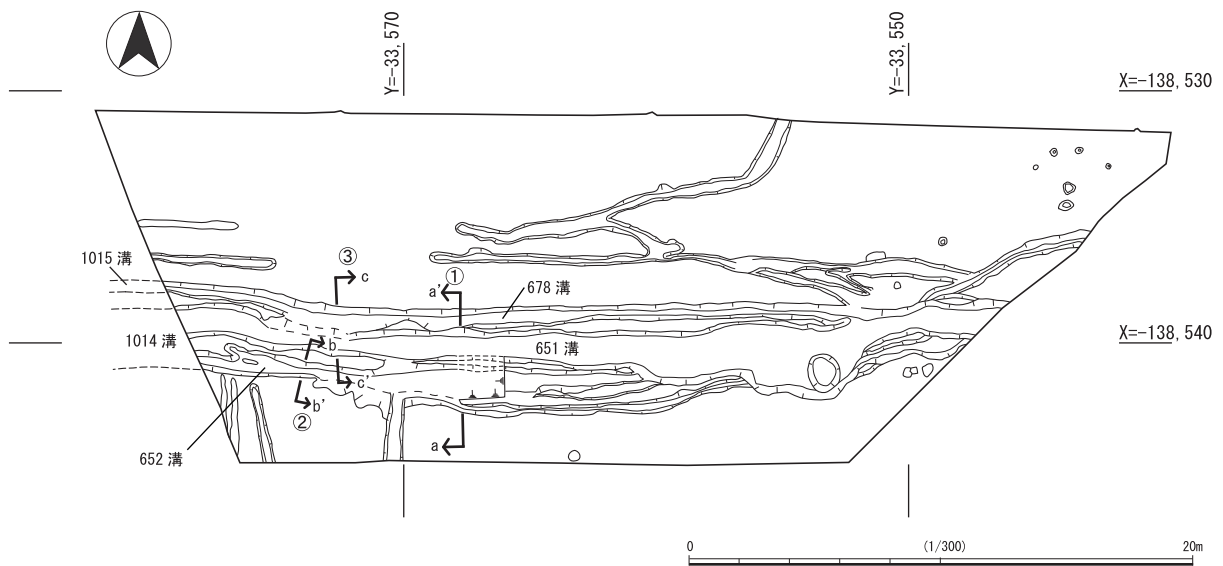
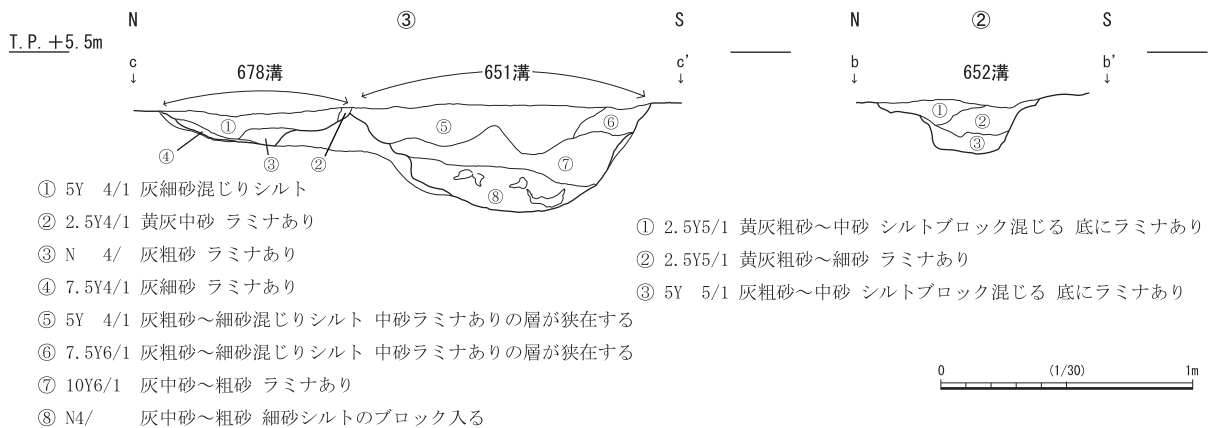
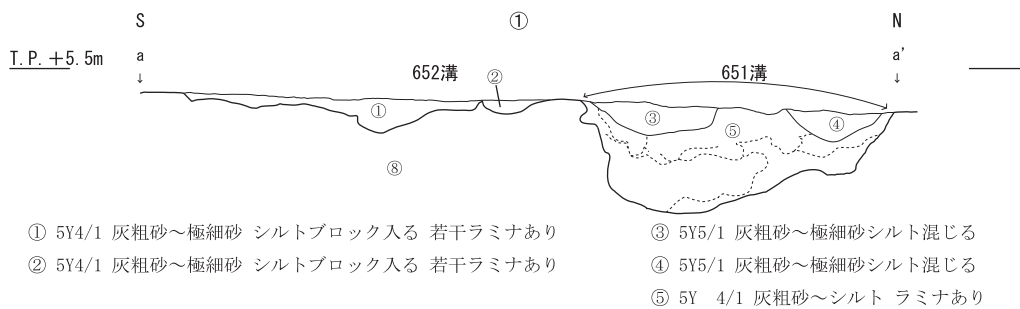
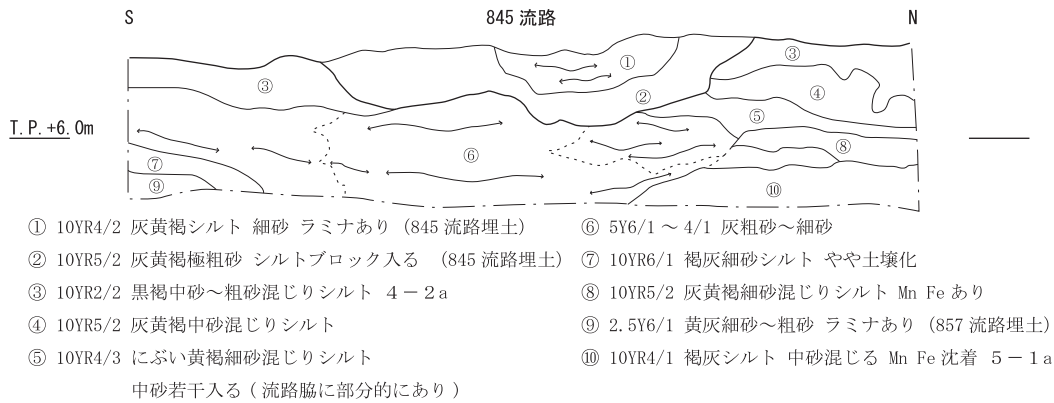


図24 845流路断面図 652溝・651溝・678溝平・断面図

310流路・309流路・171流路（図23）は、いずれも幅は狭く浅い流路で、ラミナの見られる中砂から粗砂が堆積している。298凹みと239凹みは、下層の流路が埋没した最終段階の堆積層を掘り下げたものである。特に遺物は出土していない。

また、9区で検出した、1374流路からは、須恵器 杯（図73-194）が出土している。

172流路（740流路）は、段階的に埋没した流路の上層部分を掘り下げたもので、下層には順に342流路（794流路・793流路（=1341流路）・739流路（=1344流路）・796流路）・341流路（795流路・797流路）→432流路・500流路→503流路・504流路・505流路が存在する。これは調査時に、第4-2面から第5面までの各遺構面に対応するものと考え、掘り下げたためである。しかし、上位の流路と下位の流路から出土した遺物が接合した点や、各流路の出土遺物の時期を見てみると7世紀中頃のものが多く見られる点などから、おおむね同時期に埋没したと考えられる。（図23・25・26）（図版8-7、図版28-3）

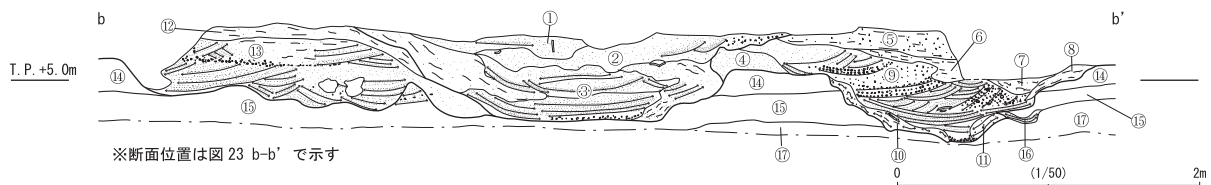
また、各流路が帰属する遺構面は、他の遺構や出土遺物などの検討からも、時期が異なるものではないことがわかっている。さらに、流路南側の遺構が集中している微高地上では、層の細分・対応関係が捉えられなかったため、ここで全ての流路を本遺構面に帰属する遺構とする。

出土遺物を記述する際には、これらの流路の遺構番号をもって表す。これは本来上層・下層として示すべきであるが、あえて流路の遺構番号を使って埋没過程と出土位置を示すものとする。

本流路の幅は、最大で上流側で約7m、蛇行している部分で13m以上、下流側で約4mを測る。蛇行している部分は北側が攻撃面となり流路幅が広がっておりかつ、数条に分かれて流路が掘り込まれている。この部分での流路の深さは、深い部分で約75cm、浅い部分で40cmである。

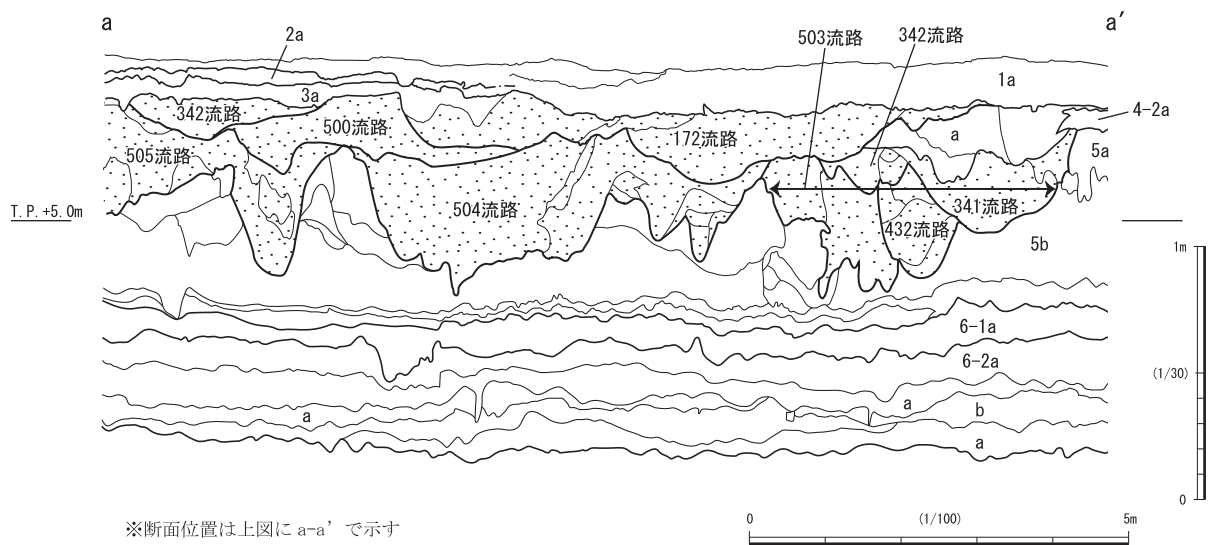
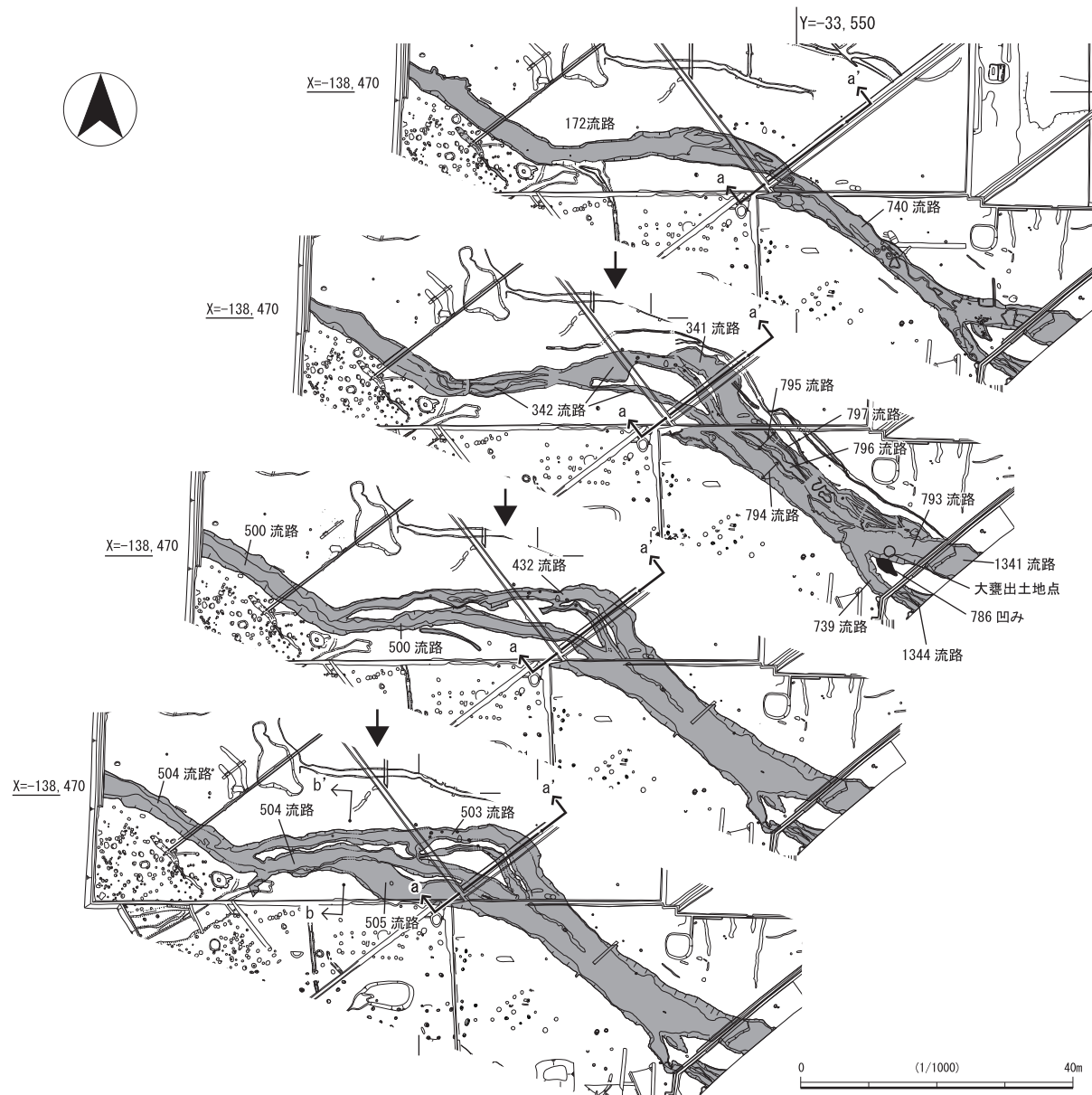
流路底の高さは上流側で約5.0m、下流側では、約4.7mを測る。埋土は、おおむね極粗砂～中砂で細礫を含む。上部は上層からの影響を受けやや土壌化している。底付近ではシルトブロックが見られ、一部には機能時の堆積と考えられるシルト・細砂から極細砂が見られた。

172流路内からは、頸部から口縁部は失われている須恵器の甕（図68-91）が、頸部を横にした状態で出土している。甕内からは、流入した細砂と共に、須恵器 杯H（図68-93）・短頸壺（図68-94）、土師器 甕の口縁部の一部（図68-92）、砥石（図68-95）、埴輪片と、馬の下顎骨の一部と思われる部位



- ① 5Y 6/2 灰オリーブ細砂含む極細砂 φ 3～5mmの礫含む 土器片混じる しまりやや悪い 淘汰やや悪い Mn. 15%含むラミナ入る（504 流路埋土）
- ② 2.5Y3/2 黒褐中砂～細砂 ラミナ入る φ 3mm大の礫を土器片のあたりに含む しまりやや悪い 淘汰やや悪い Mn. 15%含む（504 流路埋土）
- ③ 2.5Y4/1 黄灰極細砂～シルト やや粘性 ラミナ多く入る φ 3～10mmの礫を下部を中心に含む しまり悪い 淘汰悪い 流底にφ 1cm前後の礫を非常に多く含む（504 流路埋土）
- ④ 10YR3/3 暗褐中砂～細砂 φ 2～3mmの礫を若干含む しまりやや悪い 淘汰やや悪い Mn. 10%含む（503 流路埋土）
- ⑤ 2.5Y4/3 オリーブ褐細砂～極細砂 やや粘性 φ 3mm大を中心に3～7mm大の礫を含む Mn. 15%含む しまりやや悪い 淘汰やや悪い（503 流路埋土）
- ⑥ 2.5Y3/2 黒褐中砂～細砂 φ 1cm大の礫を若干含む 縦方向にMn. 10%含む しまり良い 淘汰良い（503 流路埋土）
- ⑦ 2.5Y4/1 黄灰粗砂含みの細砂～極細砂 しまり良い 淘汰やや良い φ 3～5mmの礫を微量含む マンガン斑状に3%含む（503 流路埋土）
- ⑧ 2.5Y2/1 黒粗砂含みの細砂～極細砂（下層⑩を母材にした土壌層） しまりやや悪い 一部シルト含む 淘汰悪い φ 3mm前後の土器を少量含む（503 流路埋土）
- ⑨ 2.5Y7/1～6/1 灰白～黄灰極細砂含み中砂～細砂 しまり悪い 北側にφ 1cm大の礫を多く含む 上方細粒化 ラミナ顕著（503 流路埋土）
- ⑩ ⑨と同じ（503 流路埋土）
- ⑪ N 3/ 暗灰細砂含みの極細砂～シルト ⑩層の土が互層状に混入（偽礫）（503 流路埋土）
- ⑫ 2.5Y4/1 黄灰粗砂含みの細砂～極細砂 上半中心にφ 3mm以内の礫を少量含む 淘汰やや悪い マンガン縦位に7%含む（505 流路埋土）
- ⑬ 7.5Y7/1 灰白細砂含みの中砂～細砂 上方細粒化の傾向あり上半 Mn. の付着著しい ラミナ全体に顕著 層中6 a層起源の偽礫φ 10～12cmを含む 層の中央中心にφ 1cm大の礫を多く含む（505 流路埋土）
- ⑭ 2.5Y7/1～6/1 灰白～黄灰粗砂含みの細砂～極細砂 淘汰やや悪い マンガン斑状に3% φ 3～5mmの礫を少量含む（5 a）
- ⑮ 5G7 7/1 明オリーブ灰 中砂～極細砂 マンガン縦位に5%沈着 酸化マンガンのφ 1cm少量含む 植物遺体を水平方向に含む（5 b）
- ⑯ N 4/ 灰中砂含みの極細砂～シルト ⑩層の土を互層状に含む（5 b）
- ⑰ 5G7 6/1 オリーブ灰粗砂含みの細砂～極細砂 φ 5mm前後の礫を多く含む 上層の影響でマンガン縦位に上半中心に3%沈着（5 b）

図25 503流路・504流路・505流路断面図



※断面位置は上図に a-a' で示す

図26 172流路他平面図・断面模式図

と歯（図版54-352）が出土している。これらの遺物が全て偶然、甕の中に入ったとは考えにくく、故意に甕に入れられた可能性が推測できる。従って、馬の歯から見て水に関わる何らかの祭祀・まじないに伴う遺物と考えられる。時期は7世紀中頃のものである。

また、504流路の北肩からも須恵器 杯H蓋（図69-101）と土師器 甕（図69-111）、馬の歯（図版54-351）、甕の周囲から桃核が1点出土している。出土状況から見て、杯蓋で、甕の口の蓋をしていた可能性も考えられる。これもやはり、水に関わる何らかの祭祀・まじないに関するものではないであろうか。時期は、7世紀中頃である。（図27、図版5-7）

786凹みは、調査区南東端付近で793流路（1341流路）と739流路（1344流路）が、合流し342流路（794流路）となる部分で検出した凹みである。786凹みの埋土は、342流路（794流路）や793（流路）・739（流路）から溢流した細砂～中砂が堆積しており、それを除去すると6cm内外の須恵器・土師器の小片が、底面付近からまとまって出土した。（図23・28、図版9-3）

図化した遺物に図73-166～179・図74-208がある。166～170は須恵器の杯蓋、171～173は杯、174は甕である。175～177は、土師器の甕。178は、土師器で、口縁端部は横ナデ、体部外面は斜め方向のハケ、内面は横方向のハケが残るが多くは、横方向の荒いナデである。179は緑色片岩の砥石である。208はつまみの付く蓋である。

流路内から多くの遺物が出土している。

793流路と739（流路）が合流するあたりは特に多く、須恵器 大甕、甕、高杯、杯や、剣形埴輪（図72-145）、石見型盾形埴輪（図72-143・144）、曲物などが出土している。大甕はある程度まとまった形で、ほぼ一個体分出土している。出土状況から見て比較的近い場所から流路内へ入り込んだものと考えられる。（図23・29、図70-155、図版9-1）この他、図化しているものには、172流路から杯G蓋（図68-87）、杯G（図68-88）、杯H（図68-89）、高台付長頸壺（図68-90）、甕（図69-96）、庄内末～布留初頃と考えられる甕（図69-97）が出土している。740流路からは、須恵器 杯蓋（図70-160）、無蓋高杯（図70-161）、杯H（図70-159）、弥生後期 甕底部（図73-162）がある。

794流路からは、土師器 甕（図71-150・151）、鉢（図71-152）、片口鉢（図71-153）。794・793流路

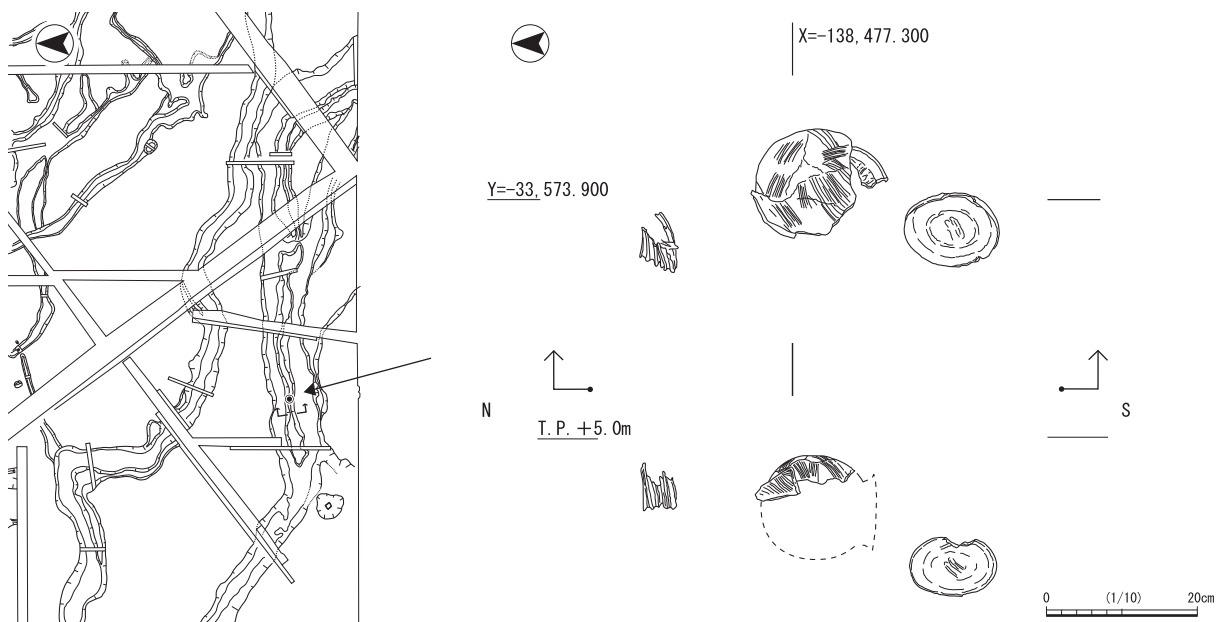
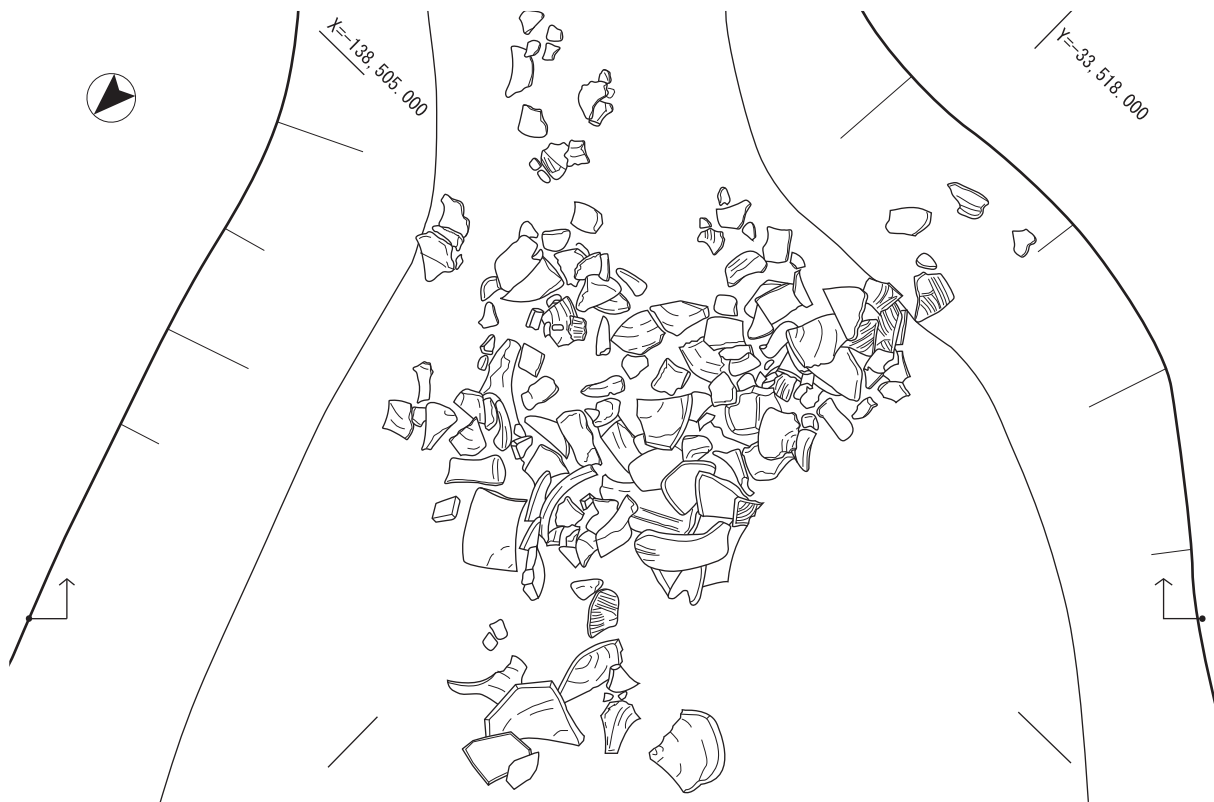


図27 504流路北肩 遺物出土状況

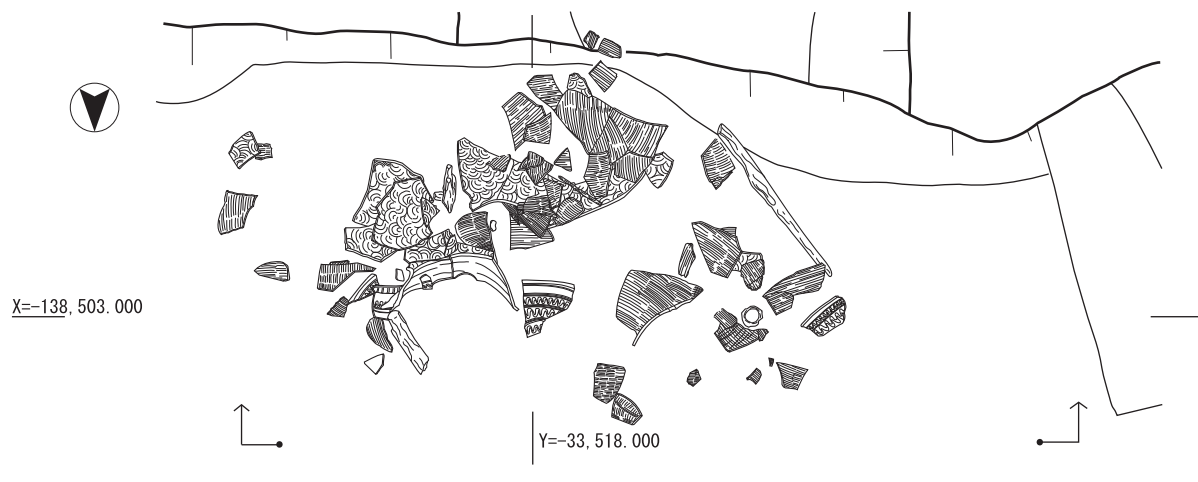


T. P. +5.9m



※出土位置は図 26 参照

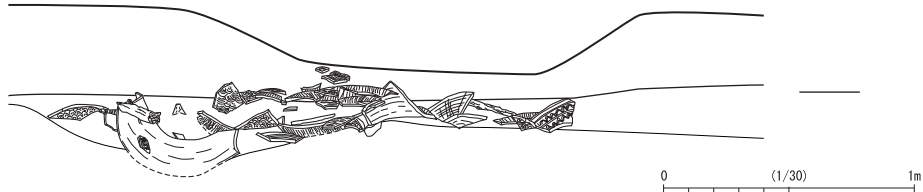
図28 786凹み 遺物出土状況



X=-138,503.000

Y=-33,518.000

T. P. +5.5m



※出土位置は図 26 参照

図29 793流路 大甕出土状況



图30 微高地部分建物位置图

から、須恵器 杯G蓋 (図70-154)、土師器 甕 (図71-156・158)、高杯 (図71-157)。793流路 (図版9-4・5) から、須恵器 甕 (図69-122)、杯H蓋 (図70-123・124)、杯蓋 (図70-125・126)、杯H (図70-127~130)、無蓋高杯 (図70-131)、有蓋高杯 (図70-132・133)、平瓶 (図70-134)、鉢 (図70-135)、土師器 甕 (図71-136~138・141・142)、杯C (図71-139・140)、把手付甕 (図73-146)、高杯 (図73-148)、壺 (図73-149)、弥生土器 甕 (図73-147)。1341流路 (図版9-2) からは、須恵器 甕 (図71-164)、杯蓋 (図70-163) が、1344流路からは、須恵器 杯B蓋 (図70-165) が、500流路からは、須恵器 杯蓋 (図69-114)、摺鉢 (図69-118)、土師器 杯A (図69-115)、鍋 (図69-116)、甕 (図69-119)、弥生時代の壺 (図69-117) の底部、503流路からは石錐 (図版60-365)、504流路からは、須恵器 杯H (図68-98、図69-103)、杯G蓋 (図69-99)、杯蓋 (図69-100・102)、壺L (図69-109)、土師器 杯C (図69-104~107)、甕 (図69-108)、甕 (図69-112)、高杯 (図69-110)、505流路からは、須恵器 甕 (図69-120)・杯H (図68-72)、土師器 甕 (図71-121)・杯C (図67-57) 壺 (図68-86) が出土している。また、348流路から、土師器 壺 (図69-113) が出土している。出土遺物から本流路の埋没時期は7世紀中頃を中心として、8世紀初め頃には、埋没していたと考えられる。

次に、この流路の南側の微高地上で検出した建物について記述する。(図30)

建物1 (図30・31、図版12-1・4~6) は、総柱の掘立柱建物で、軸はN-17°-Wと西へやや振る南北棟である。規模は、桁行2間で延長は4.4m、梁間も2間で延長が3.6mである。柱間は、桁行が2.2m等間、梁間は、1.8m等間で、床面積は、15.8㎡を測る。建物を構成する柱穴の平面形は、不整円形が主であるが隅丸方形に近いものも見られる。深さはもっとも深いもので30cm、浅いものでは8cmであった。柱痕跡が見られる271柱穴は、掘方が8cmと非常に浅く、柱穴上部が大きく削平を受けていると考えられる。他の柱穴では、柱痕跡が見られず柱は全て抜き取られたものと考えられる。柱穴の埋

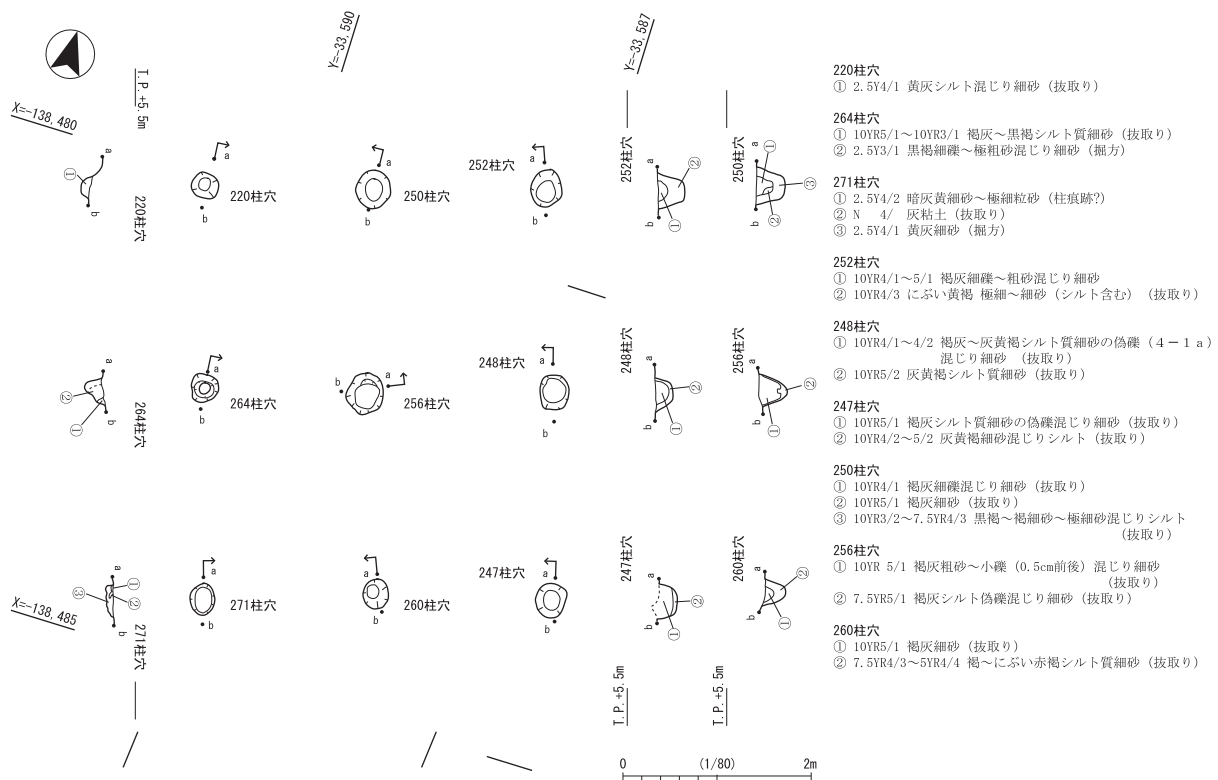


図31 建物1

土は、おおむね褐灰色で粗砂～細礫混じりのシルト質細砂である。柱穴からの出土遺物はほとんど無く、僅かに271柱穴から土師器片が2点出土したのみである。このため、時期を決定する事は難しいが、本建物と主軸を揃えている他の建物の時期から見て、飛鳥時代と考えられる。

建物2（図30・32、図版12-2・7、図版13-1～4）は、桁行2間で延長4.8m、梁行2間で延長4mの、南北棟の掘立柱建物である。建物は、N-5°-Wとやや西へ振れる。柱間は、桁行が北の間が2.7m、南の間が2.1mと異なっており、平入りで柱間の広い部分に出入り口が設けられていた可能性が考えられる。梁間は2m等間で、床面積は19.2㎡である。柱穴の平面形は、隅丸方形から不整形まで混在しているが、柱根や柱痕跡が認められた433柱穴や、明瞭な抜き取りが見られる438柱穴を見ると隅丸方形であることから、本来は全て隅丸方形であったと推測できる。また、掘方は433柱穴・438柱穴を見ると断面方形で、底面は平らであり、柱は掘方の端に寄せられている。なお、433柱穴以外の柱は、438柱穴を含め全て抜き取られている。柱穴の埋土はおおむね黒褐色で粗砂混じりの中砂～細砂シルトである。柱根の残っている433柱穴の埋土を見ると、柱を据えた後に黒色シルト混じり細砂で、一気に掘方を埋めた様である。

また、433柱穴からは滑石製の紡錘車（図73-200）が1点出土している。紡錘車は上面の直径が3cm、下面の直径は4.8cmで、厚みは1cmを測る。孔の直径は、上面で1.1cm、下面で0.8cmである。文様は、施されていない。450柱穴から杯蓋片（図74-204）が出土している。他の柱穴からも土器が出土しているが、いずれも細片である。建物2は、建物3の柱穴との重複関係から建物3よりも新しい建物であり、建物の方向などから見て、奈良時代に属すると考えられる。

建物3（図30・33・、図版12-3、図版13-5～8）は、軸を西へ振る掘立柱建物で、N-36°-Wと

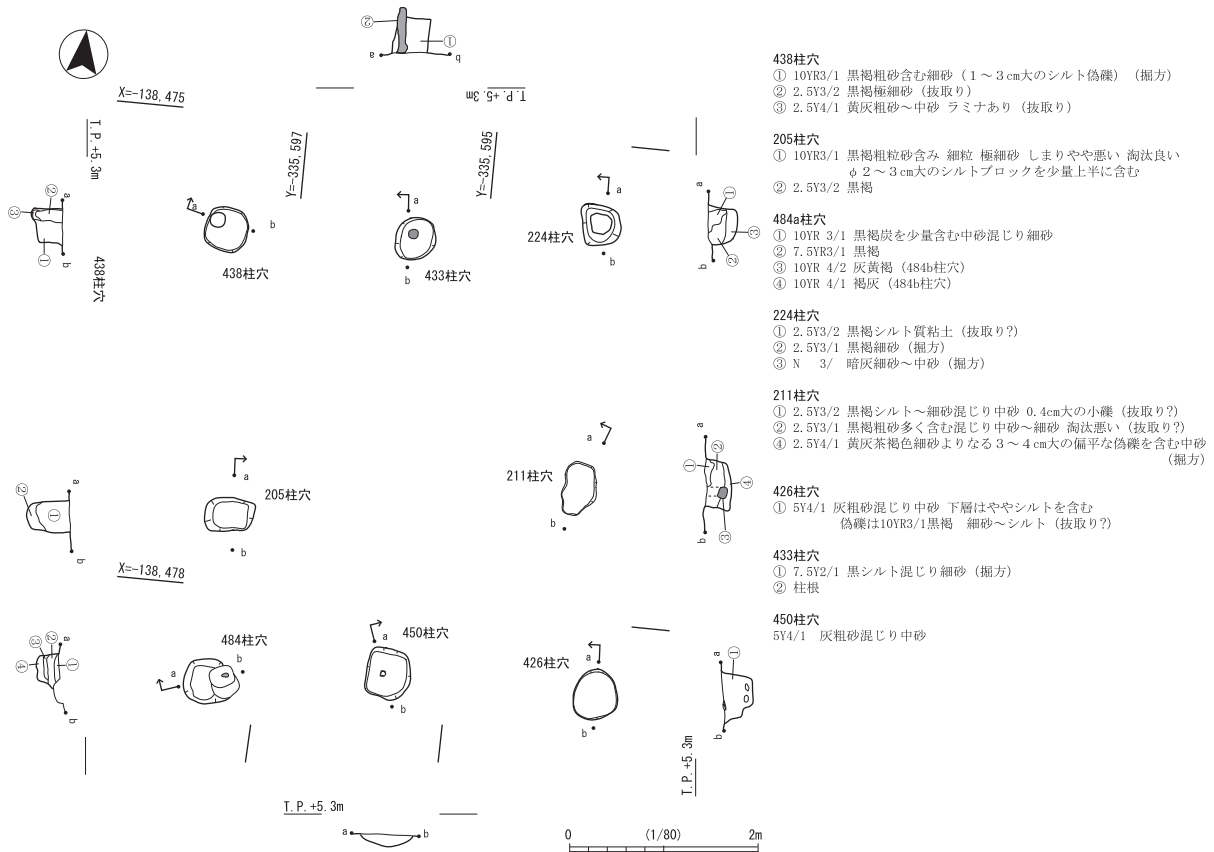


図32 建物2

他の建物と比べ振れが大きい。桁行は4間で延長が6.4m、梁行は2間で延長が3.2mである。柱間は、桁行が東から順に1.5m、1.5m、1.9m、1.5mであり、東から3間目が、他より0.4m程広がっている。おそらくここに出入り口が設けられていたのであろう。梁行は東妻側で、北から1.4m、3.2mで、南妻側では逆に北から3.2m、1.4mとなっており、側柱筋に対して棟通りがやや北で西へ振れる建物となっている。床面積は、20.5㎡である。身舎内には、棟柱筋にのる2つの柱穴を検出しており、床を支える床束と考えられる。建物を構成する柱穴の平面形は、不整形円形から隅丸方形まで多様であるが、これは柱の抜き取りを行った際に掘方を壊したためと考えられる。本来は、抜き取りがなく柱痕跡が見られる452柱穴のように隅丸方形であったと考えられる。また、掘方は断面逆台形を呈し、底面は平らである。

なお、柱痕跡部分は、不等沈下を起こしやや窪んでいる。このような不等沈下による窪みは建物2の433柱穴などでも見られる。埋土は、主に黒褐色で粗砂～中砂混じりシルトである。柱穴から出土した遺物は、すべて土師器の小片であり、時期を特定することは難しいが、建物の方向が建物20・23・24などと同方向であることから、飛鳥時代のものと考えられる。

建物4（図30・35、図版14-1・4～6）は、総柱の掘立柱建物で、軸はN-30°-Wと西へ振れる南北棟である。桁行は2間以上で、調査区南東外へ延びる。梁行は2間で延長は3mである。桁行方向の柱間は、東側柱筋で2.1m、西側柱筋で2.2mと異なっており、柱筋も揃っていない。このため、大きく南西方向へ広がる歪んだ平面形を示す。梁行の柱間は1.5m等間である。柱穴は一辺60cm～40cmの隅丸方形の平面形で、深さは25cm～10cmと非常に浅いが、柱痕跡の見られるものが多い。柱穴の掘方の埋土は、黒褐～黒中砂混じりシルトで、柱痕跡はおおむね灰～暗灰中砂混じりシルトである。柱穴から



図33 建物3

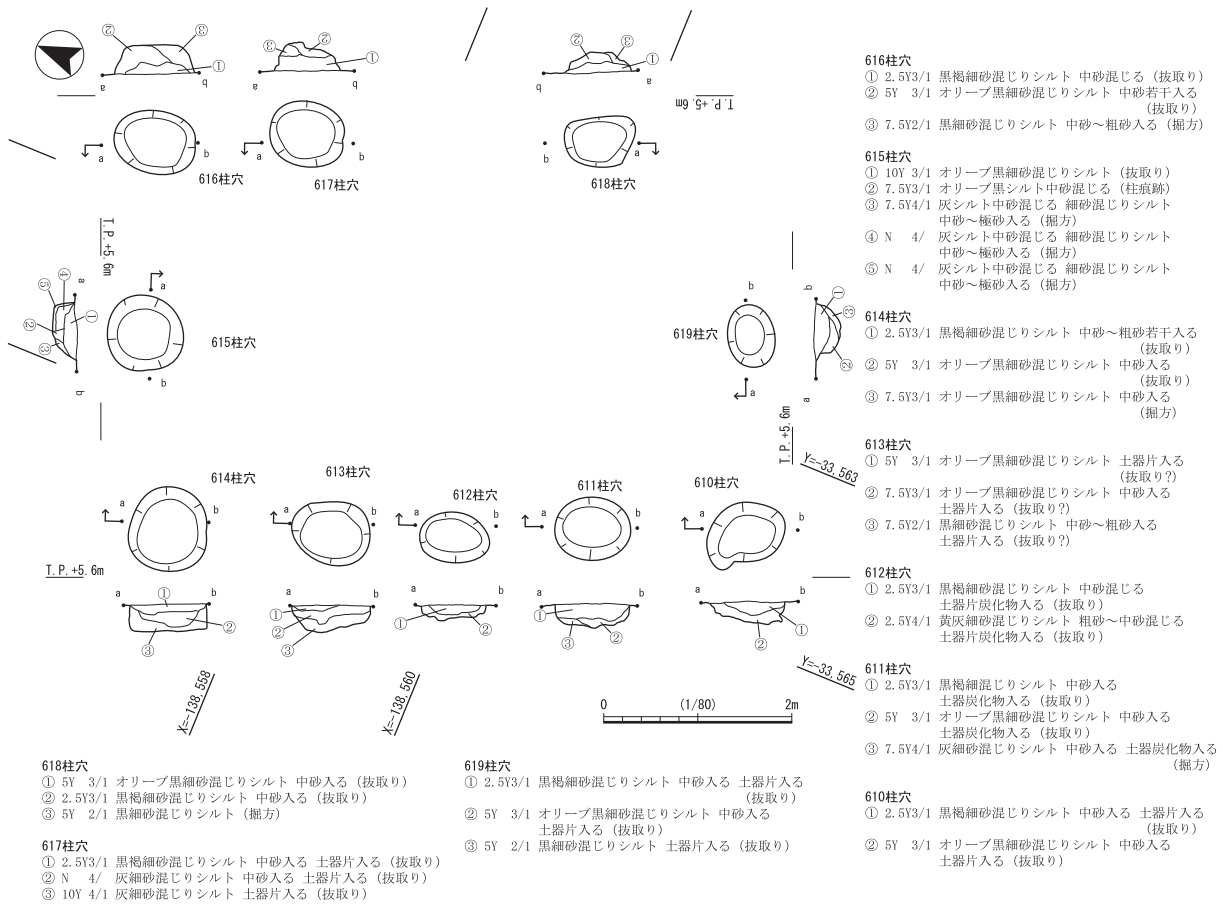


図34 建物5

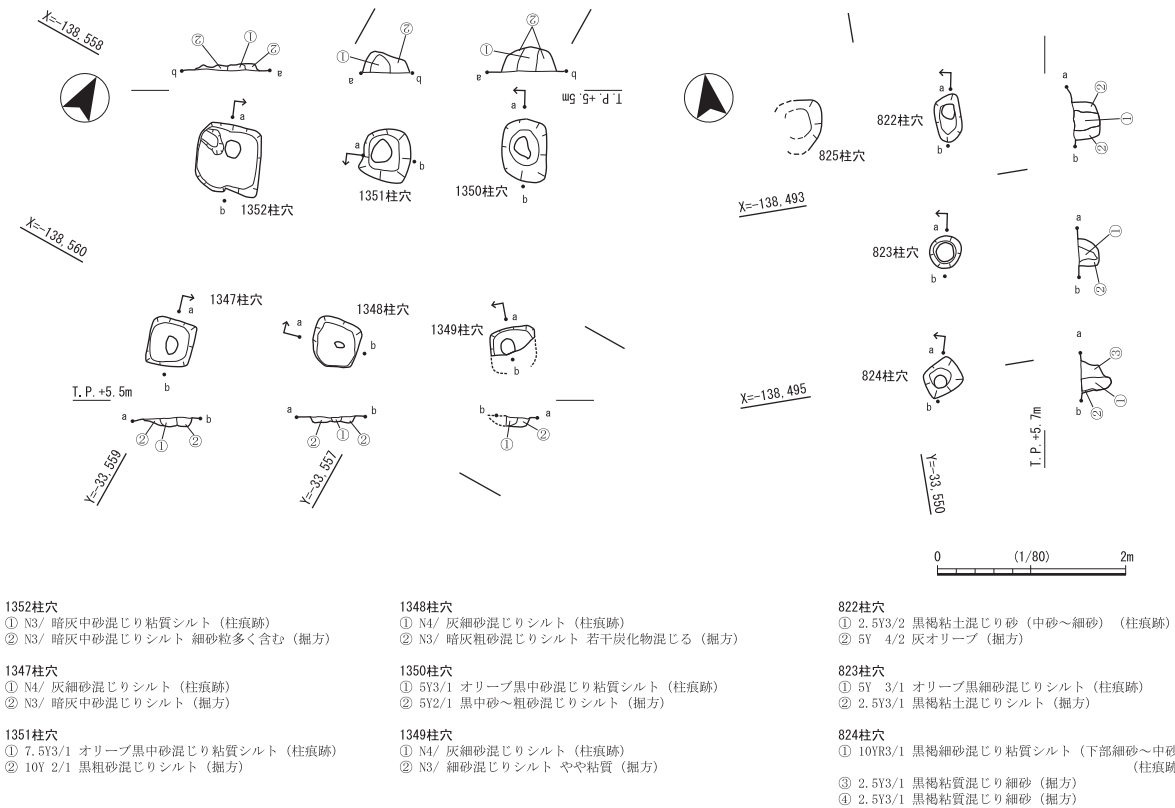


図35 建物4

図36 建物7

は6世紀代の須恵器 杯・杯蓋の他、6世紀後半代の土師器 椀が出土しているが、建物の方向が、建物5や建物6と同様であることからおそらく建物4の時期は飛鳥時代と考えられ、柱穴出土遺物は混入と考えられる。

建物5（図30・34、図版14-2・7、図版15-1～3）は、桁行4間（3間）で延長6.3m、梁行2間で延長4mの南北棟の掘立柱建物で、軸はN-24°-Wと西へ振れる。桁行の柱間は西側柱筋と東側柱筋では不揃いであり、西側柱筋では北から順に1.8m、1.2m、1.8m、1.5mを測る。東側柱筋では、西側柱の612柱穴に対応する柱穴がなく3間で、北から順に1.5m、3.3m、1.6mとなる。西側柱筋で中央部分が広く空くのは、おそらくここに入出口が設けられていたためと考えられる。なお、柱穴は検出時には辺を持った隅丸方形を呈していたが、検出層が砂質であることと、柱穴の掘削から平面図作成までの間に、雨などにより壁面が崩れたため、楕円の平面形となっている。柱穴の深さは、30cm前後で大半の柱穴に柱の抜き取りが見られた。抜き取り穴の埋土は、オリーブ黒細砂混じりシルト、中砂～

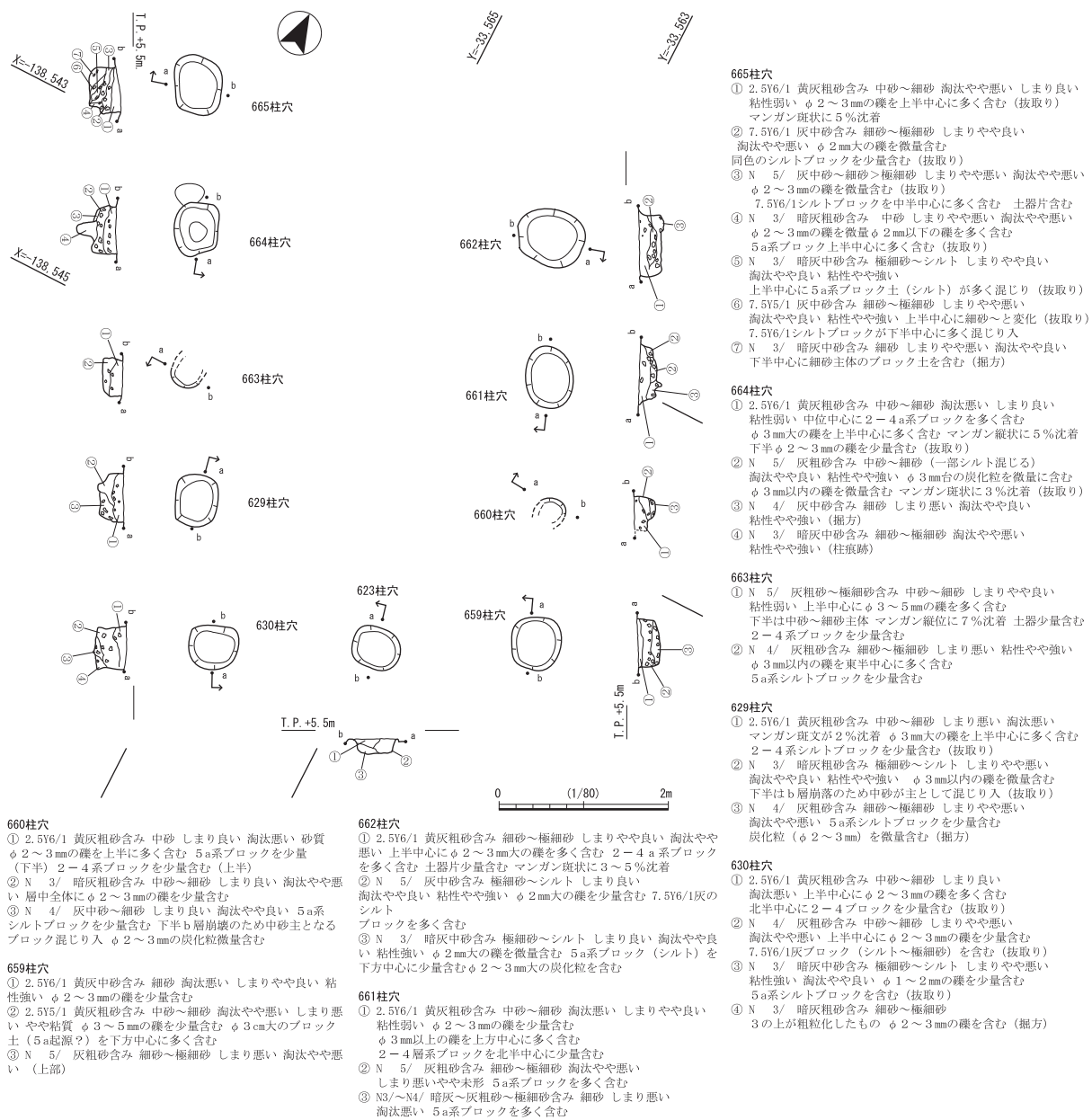


図37 建物6

粗砂粒を含むである。また、610・611・616～618柱穴では、黒細砂混じりシルト中砂～粗砂粒を含む埋土である。柱穴から出土した遺物には、616柱穴から6世紀後半の杯（図73-192）が出土している他、6世紀代の須恵器 杯・甕などの小片や、土師器の小片が認められるが、建物の時期は飛鳥時代に属すると考えられる。

建物6（図30・37、図版14-3、図版15-4～6）は、桁行4間で延長6.8m、梁行2間で延長が4mの南北棟の掘立柱建物である。軸はN-26°-Wと西へ振れる。柱間は、桁行方向が1.7m等間、梁行方向が2m等間である。なお、北妻柱と北東隅柱は、651溝により削平され失われている。柱穴の平面形は、661・662柱穴以外では辺が見られることから、楕円に近い隅丸長方形を基本とすると思われる。断面は、抜き取り跡や柱の不等沈下による凹みを除くと、掘方の底面は平らで壁は底からほぼ垂直に立ち上がる矩形を示す。深さは、20～40cm前後である。柱は抜き取りが見られるものが多い。抜き取り穴の埋土は、黄灰粗砂含む中砂から細砂で、掘方の埋土は暗灰～灰粗砂含む中砂から細砂である。柱穴からは、須恵器 杯片や土師器の小片が出土しているのみで、建物の時期の特定は難しいが、建物の方向などから飛鳥時代と考えられよう。

建物7（図30・36、図版16-1、図版15-7・8）は、東西棟の掘立柱建物で、軸はN-10°-Eとわずかに東へ振れる。桁行は、北側柱筋で1間分を検出したのみである。梁行は2間で延長は2.8mである。柱間は、桁行は1.5～1.6m、梁行は1.4m等間である。柱穴の平面形は隅丸方形から楕円形と様々である。深さは、30cm前後を測る。柱穴には、黒褐色細砂混じり粘質シルトの柱痕跡が認められた。掘方埋土は、黒褐色粘土混じりシルトである。柱穴からは、土師器の細片が出土しているのみで、時期を特定することは難しいが、隣接する建物22・23・24と建物の向きを揃えており、これらと同時期の奈

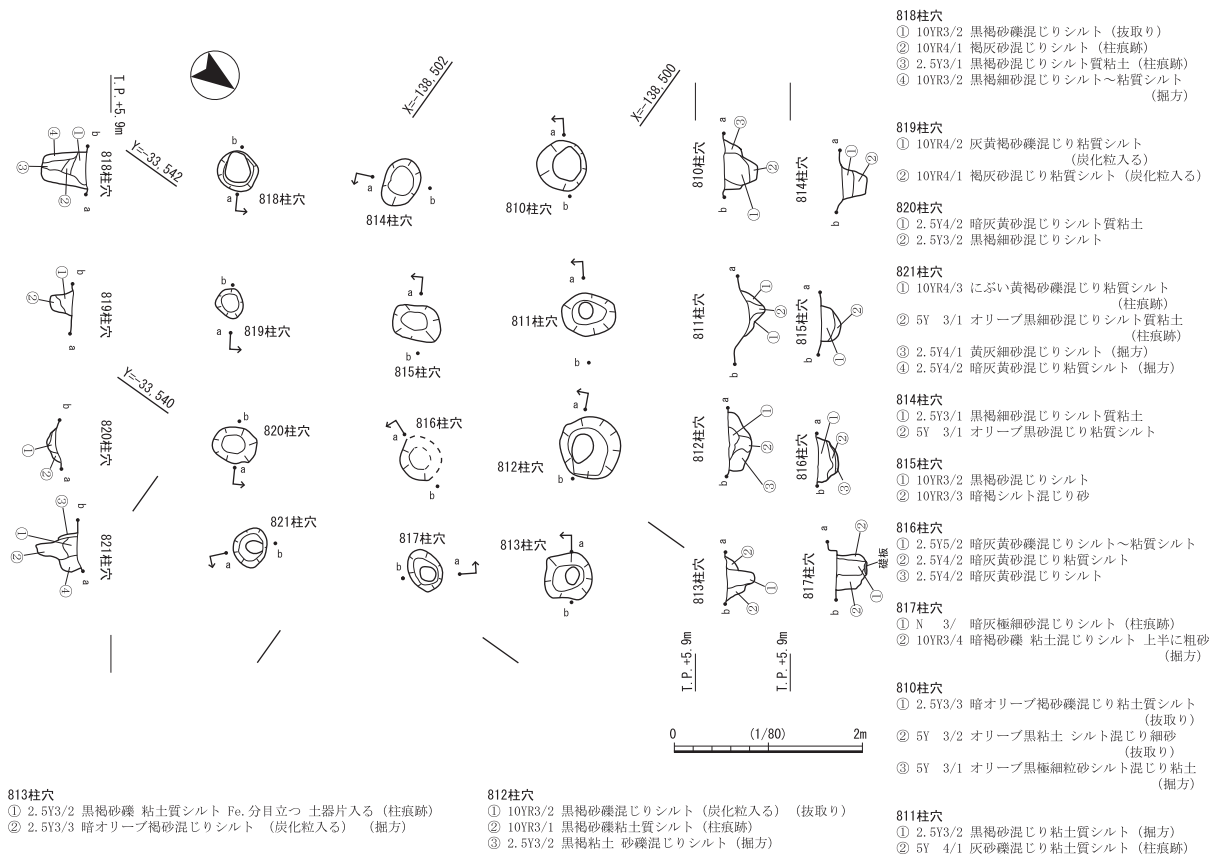


図38 建物8

良時代の建物と考えられる。

建物8 (図30・38、図版16-2～5) は、東西棟の総柱掘立柱建物である。軸はN-35°-Wと西へ振れる。桁行は3間で延長は4.2m、梁行が2間の延長3.5mである。柱間は、桁行が北側柱筋で、西から順に1.5m、1.4m、1.3m。南側柱筋では西から1.5m、1.5m、1.2mである。梁行は、西妻側で北から1.8m、1.7m。東妻側で、北から1.7m、1.8mである。柱穴の平面形は、不整形円で、深さは8～46cmとバラツキが見られる。柱穴には、柱痕跡が見られる817柱穴や813柱穴などの他、暗オリーブ褐砂礫混じり粘土質シルトが抜き取りに充填された810柱穴が混在している。掘方埋土は、暗灰～褐色系の砂混じり粘質シルトである。なお、817柱穴からは礎盤が出土しており、他の建物に見られるような柱の不等沈下を防ぐ工夫をしていたようである。柱穴から出土した遺物は、土師器や弥生土器の小片であり、時期を特定することは難しいが、大きく見ると建物の方向が建物4・5・6などと同方向であり、おそらく同時期の建物と考えられる。

建物9 (図30・39、図版16-6・7、図版17-1・4～6) は、東西棟の掘立柱建物で、軸はN-25°-Wである。桁行は4間で、北側柱筋の延長が6.6m、南側柱筋の延長は6.2mと、南側柱筋の方が20cm短く、梁行は2間であるが西妻側の延長が4.0m、東妻側が4.2mと西妻側の延長が20cm短い。そ

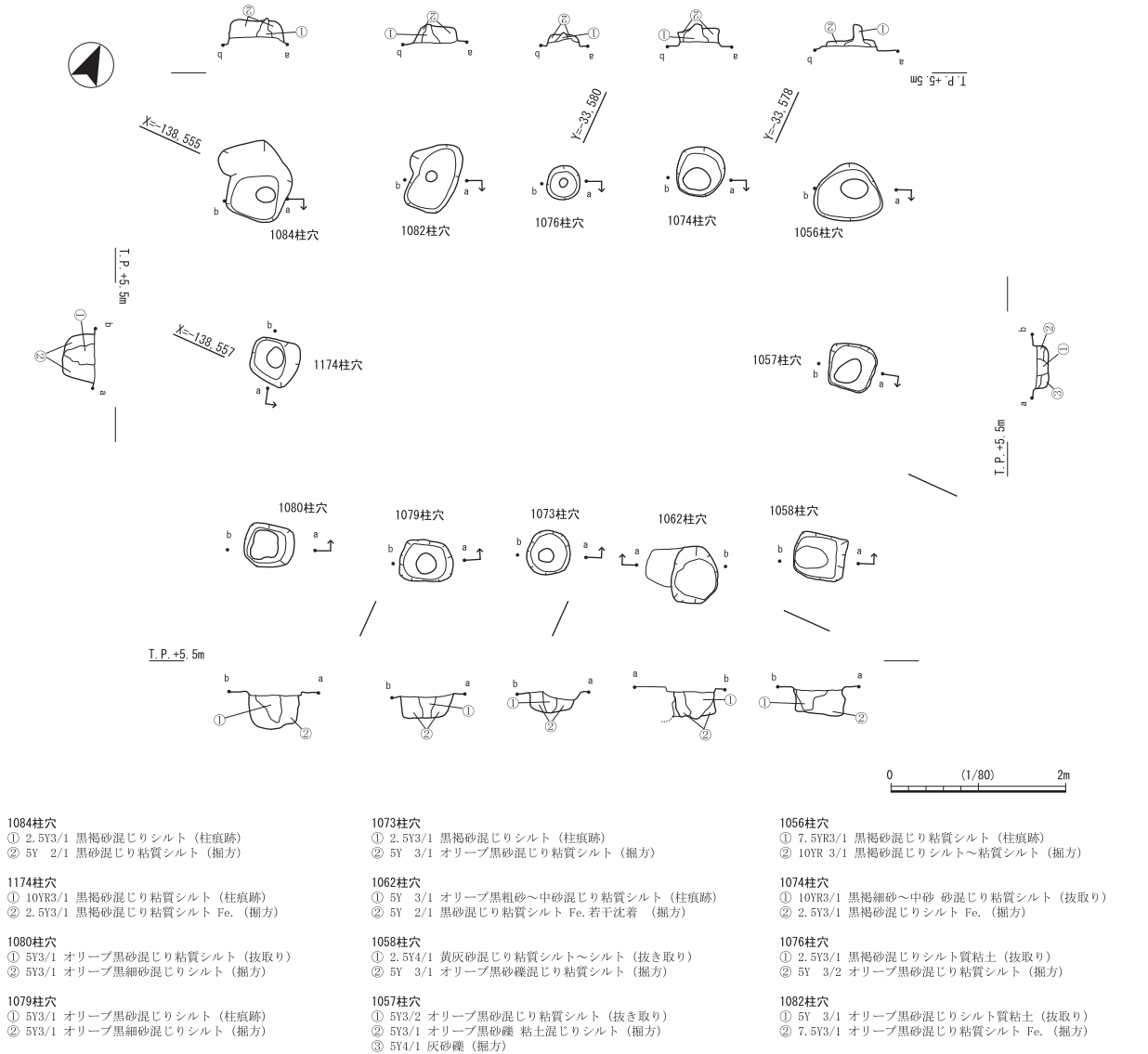


図39 建物9

のため、身舎の平面形はややいびつである。柱間は、桁行方向が北側柱筋で西から順に1.9m、1.5m、1.5m、1.7m。南側柱筋で西から1.8m、1.3m、1.8m、1.3mである。梁行は、東妻側が北から順に1.9m、2.1m。東妻側が2.1m等間である。柱穴の平面形は、隅丸方形や不整円形が混在しているが、隅丸方形が主である。深さは40～8cmとバラツキが見られる。掘方は、断面逆台形から方形を呈する。

柱穴には、抜き取りが見られるものと、柱痕跡が見られるものがある。抜き取り穴の埋土は、黒褐～オリーブ黒色砂混じり粘質シルトが主である。掘方の埋土は、抜き取り穴の埋土と類似する黒褐～オリーブ黒色砂混じり粘質シルトが主に見られる。また、1056柱穴では、約15cmに達する柱の不等沈下と考えられる痕跡が見られた。

柱穴からは、7世紀中頃と考えられる、径が小さく丸みを帯びる須恵器 杯H蓋片や、杯H片などが出土しており、飛鳥時代に属する建物と考えられる。

建物10（図30・40、図版17-2・7、図版18-1～4）は、東西棟の総柱掘立柱建物で、軸はN-8°-Wである。桁行は2間で延長が3.8m、梁行も2間で延長は2.9mである。柱間は、桁行方向が1.6m等間、梁行方向は、北から1.5m、1.4mである。柱穴の平面形は、隅丸方形で断面は逆台形を示す。深さは浅い柱穴で20cm前後、深い柱穴では40cm前後である。柱穴には、抜き取りが見られるものと、柱痕跡が見られるものとが混在している。抜き取り穴・掘方ともに埋土は、黒褐～黒色砂混じり粘質シルトが主であるが、抜き取り穴の埋土の土質がやや砂粒を多く含む。

柱穴からは、7世紀中頃の須恵器 杯H片が出土しており、飛鳥時代に属する建物と考えられる。

建物11（図30・41、図版17-3、図版18-5～8）は、3棟の南北棟の掘立柱建物が重なりあっており、それぞれ建物を建物11a、建物11b、建物11cとした。なお、各建物は南妻側が調査区外となっており、桁行方向は検出分を記す。

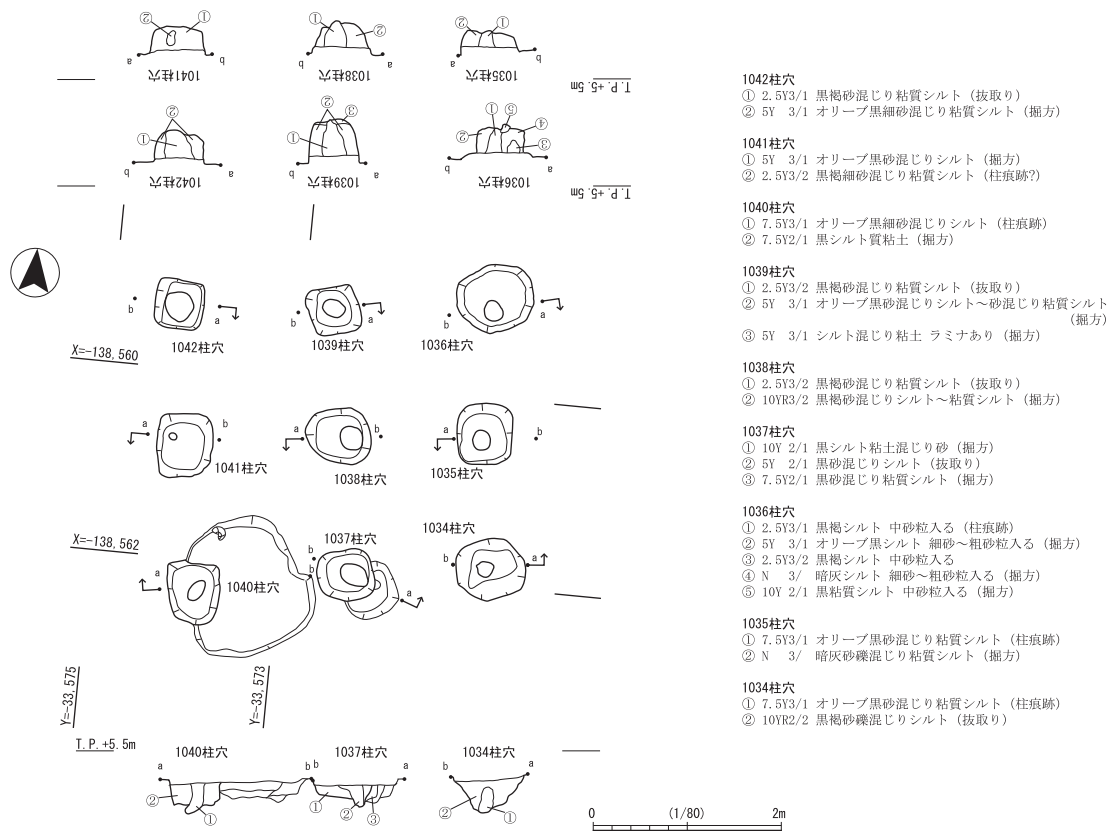


図40 建物10

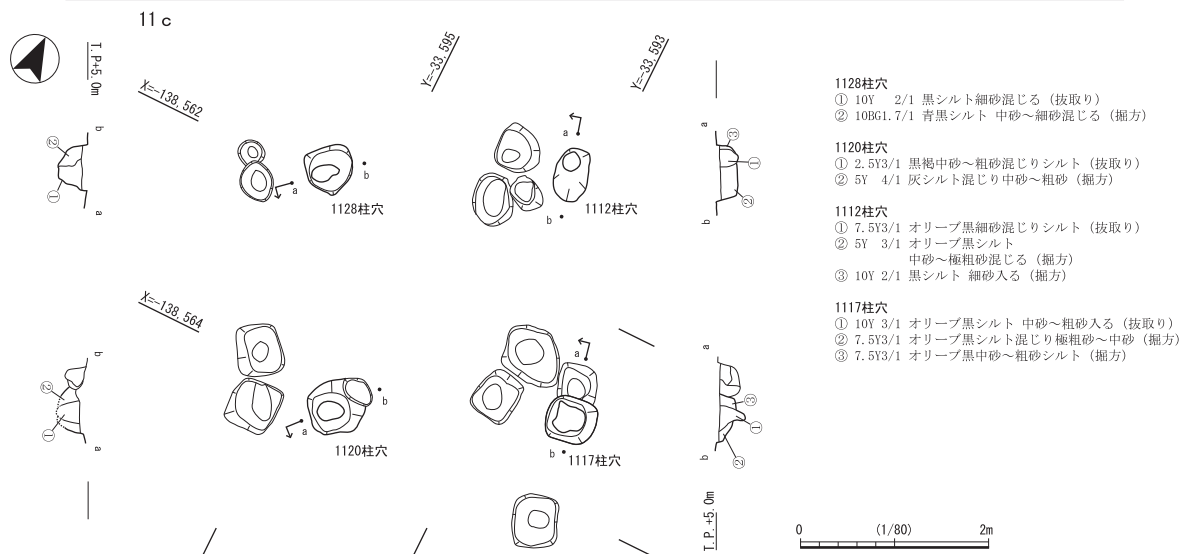
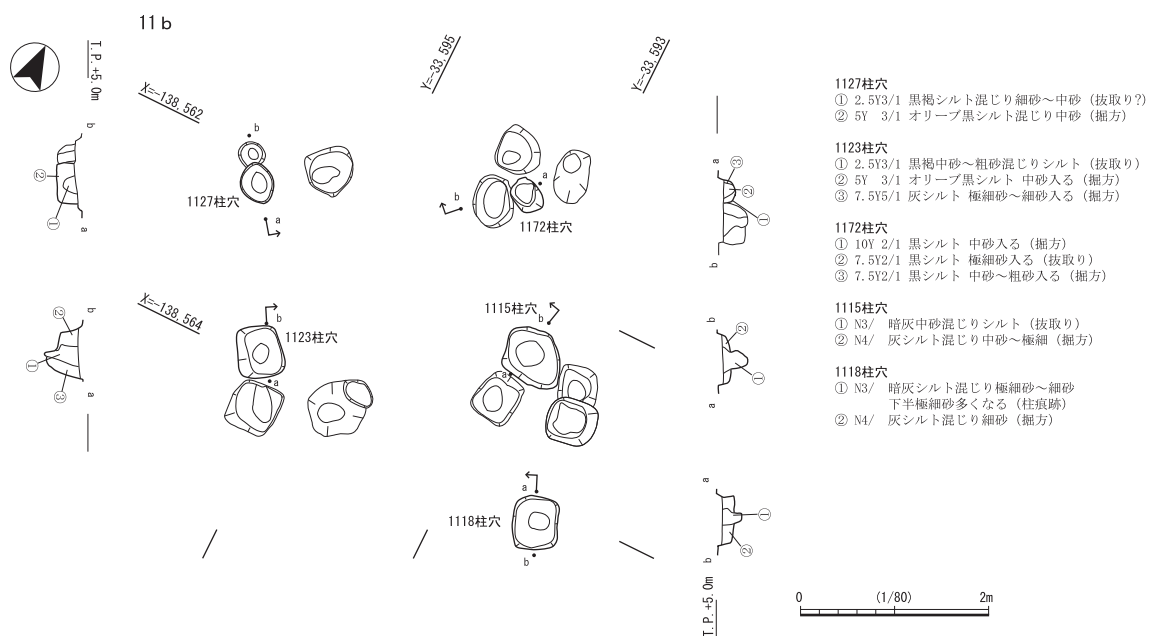
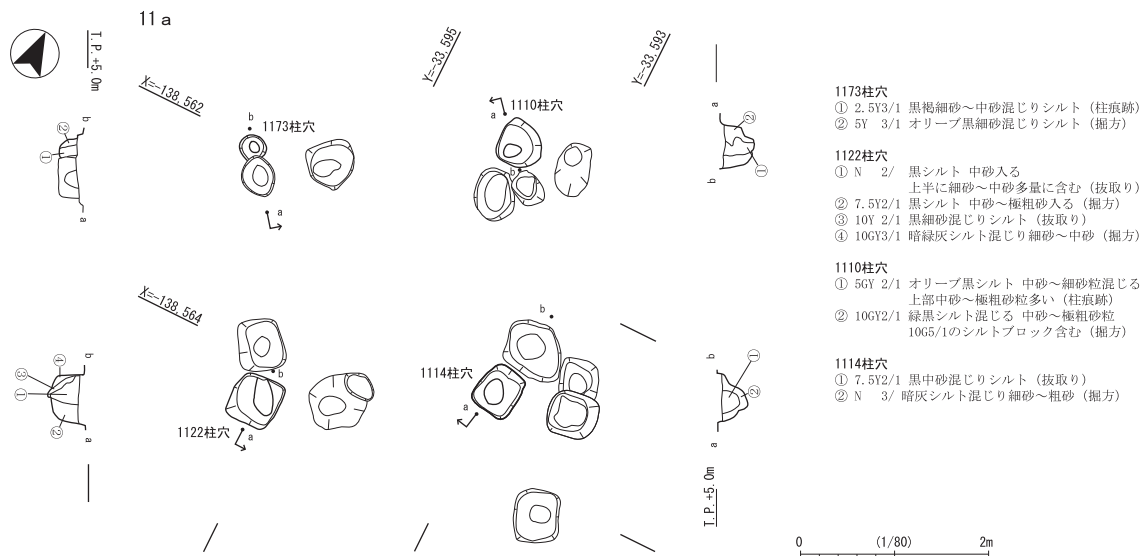
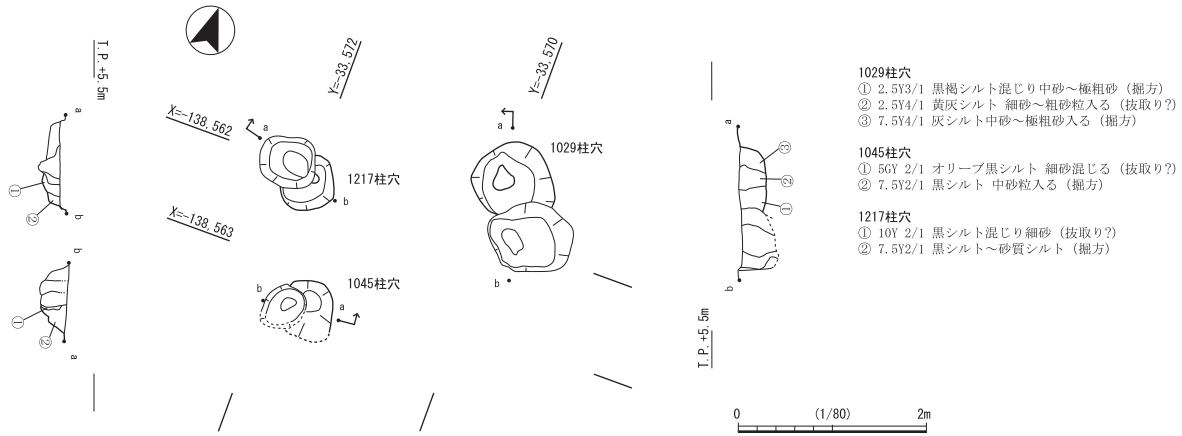
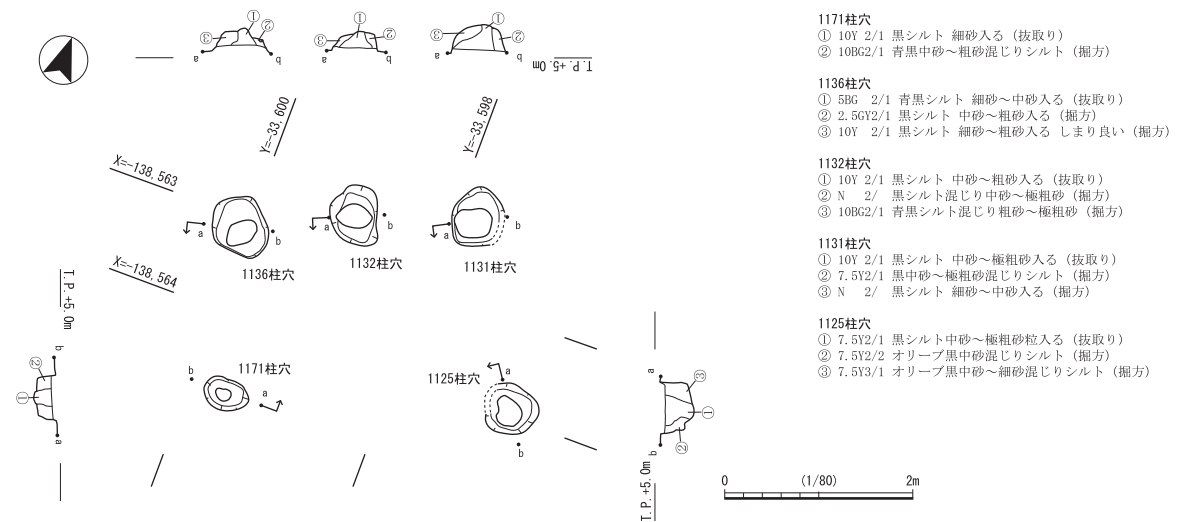


図41 建物11a・11b・11c



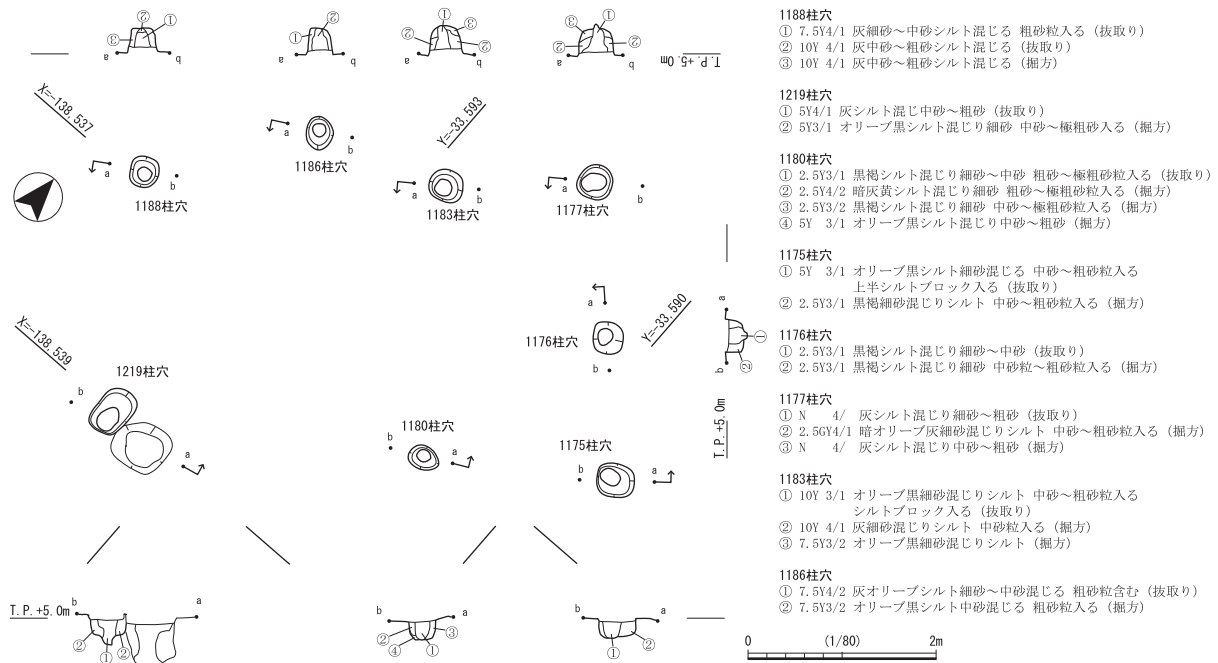
- 1029柱穴**
 ① 2.5V3/1 黒褐シルト混じり中砂～極粗砂（掘方）
 ② 2.5V4/1 黄灰シルト 細砂～粗砂粒入る（掘方）
 ③ 7.5V4/1 灰シルト中砂～極粗砂入る（掘方）
- 1045柱穴**
 ① 5G 2/1 オリーブ黒シルト 細砂混じる（掘方）
 ② 7.5V2/1 黒シルト 中砂粒入る（掘方）
- 1217柱穴**
 ① 10Y 2/1 黒シルト混じり細砂（掘方）
 ② 7.5V2/1 黒シルト～砂質シルト（掘方）

図42 建物12



- 1171柱穴**
 ① 10Y 2/1 黒シルト 細砂入る（掘方）
 ② 10B62/1 青黒中砂～粗砂混じりシルト（掘方）
- 1136柱穴**
 ① 5B6 2/1 青黒シルト 細砂～中砂入る（掘方）
 ② 2.5G12/1 黒シルト 中砂～粗砂入る（掘方）
 ③ 10Y 2/1 黒シルト 細砂～粗砂入る しまり良い（掘方）
- 1132柱穴**
 ① 10Y 2/1 黒シルト 中砂～粗砂入る（掘方）
 ② N 2/ 黒シルト混じり中砂～極粗砂（掘方）
 ③ 10B62/1 青黒シルト混じり粗砂～極粗砂（掘方）
- 1131柱穴**
 ① 10Y 2/1 黒シルト 中砂～極粗砂入る（掘方）
 ② 7.5V2/1 黒中砂～極粗砂混じりシルト（掘方）
 ③ N 2/ 黒シルト 細砂～中砂入る（掘方）
- 1125柱穴**
 ① 7.5V2/1 黒シルト中砂～極粗砂粒入る（掘方）
 ② 7.5V2/2 オリーブ黒中砂混じりシルト（掘方）
 ③ 7.5V3/1 オリーブ黒中砂～細砂混じりシルト（掘方）

図43 建物13



- 1188柱穴**
 ① 7.5V4/1 灰細砂～中砂シルト混じる 粗砂粒入る（掘方）
 ② 10Y 4/1 灰中砂～粗砂シルト混じる（掘方）
 ③ 10Y 4/1 灰中砂～粗砂シルト混じる（掘方）
- 1219柱穴**
 ① 5V4/1 灰シルト混じり中砂～粗砂（掘方）
 ② 5V3/1 オリーブ黒シルト混じり細砂 中砂～極粗砂入る（掘方）
- 1180柱穴**
 ① 2.5V3/1 黒褐シルト混じり細砂～中砂 粗砂～極粗砂粒入る（掘方）
 ② 2.5V4/2 暗灰黄シルト混じり細砂 粗砂～極粗砂粒入る（掘方）
 ③ 2.5V3/2 黒褐シルト混じり細砂 中砂～極粗砂粒入る（掘方）
 ④ 5Y 3/1 オリーブ黒シルト混じり中砂～粗砂（掘方）
- 1175柱穴**
 ① 5Y 3/1 オリーブ黒シルト細砂混じる 中砂～粗砂粒入る 上半シルトブロック入る（掘方）
 ② 2.5V3/1 黒褐細砂混じりシルト 中砂～粗砂粒入る（掘方）
- 1176柱穴**
 ① 2.5V3/1 黒褐シルト混じり細砂～中砂（掘方）
 ② 2.5V3/1 黒褐シルト混じり細砂 中砂粒～粗砂粒入る（掘方）
- 1177柱穴**
 ① N 4/ 灰シルト混じり細砂～粗砂（掘方）
 ② 2.5G4/1 暗オリーブ灰細砂混じりシルト 中砂～粗砂粒入る（掘方）
 ③ N 4/ 灰シルト混じり中砂～粗砂（掘方）
- 1183柱穴**
 ① 10Y 3/1 オリーブ黒細砂混じりシルト 中砂～粗砂粒入る シルトブロック入る（掘方）
 ② 10Y 4/1 灰細砂混じりシルト 中砂粒入る（掘方）
 ③ 7.5V3/2 オリーブ黒細砂混じりシルト（掘方）
- 1186柱穴**
 ① 7.5V4/2 灰オリーブシルト細砂～中砂混じる 粗砂粒含む（掘方）
 ② 7.5V3/2 オリーブ黒シルト中砂混じる 粗砂粒入る（掘方）

図44 建物14

建物11a（図30・41）の規模は、桁行1間（2.5m）、梁行1間（2.6m）を検出している。北妻柱は検出できなかった。建物の軸はN-25°-Wである。建物を構成する柱穴は1173柱穴、1110柱穴、1114柱穴、1122柱穴である。柱穴の平面形は、隅丸方形を主としているが北西隅柱（1173柱穴）は円形である。深さは浅い柱穴で20cm前後、深い柱穴では40cm前後である。1110柱穴以外に、抜き取りが見られた。

建物11b（図30・41）は、桁行2間（3.6m）、梁行1間（2.8m）を検出している。建物11a同様に、妻柱は検出できなかった。建物の軸はN-26°-Wである。建物を構成する柱穴は1127柱穴、1123柱穴、1172柱穴、1115柱穴、1118柱穴である。柱穴の平面形は、隅丸方形を主としており、深さは10~20cmである。1118柱穴以外は、抜き取りが見られた。

北西隅柱の1127柱穴が、建物11aの北西隅柱1173柱穴と重なっており、その前後関係から建物11aが建物11bより先行する建物であることがわかる。

建物11c（図30・41）は、桁行1間（2.6m）、梁行1間（2.6m）を検出している。建物11a・11b同様に、妻柱は検出していない。建物の軸はN-27°-Wである。建物を構成する柱穴は1128柱穴、1120柱穴、1112柱穴、1117柱穴である。柱穴の平面形は、隅丸方形を主としており、深さは20cm前後である。全ての柱に抜き取りが見られる。建物11cの柱穴は、他の建物の柱穴と重なっておらず、遺構の重複による前後関係は不明である。

建物11a・11b・11cとも、掘方及び抜き取り穴の埋土の色調は、暗褐色から黒色を基調とするシルト粗砂~中砂混じりである。柱穴から出土した遺物は全て細片であるが、7世紀中頃と考えられる土師器杯が数点見られ、飛鳥時代に属する建物と考えられる。その中で、建物11a・建物11b・建物11cの建替えが行われたと思われる。建替えの順は、柱穴の重複関係から、建物11a→建物11bは確定であるが、建物11cは不明である。なお、掘方埋土や建物の方向は、建物5・6・16・12と類似している。

建物12（図30・42、図版19-1・4・5）は、桁行1間以上、梁行1間以上の東西棟の掘立柱建物である。調査区内で検出できた柱間は、桁行方向が2.0m、梁行方向が1.2mである。建物の軸はN-21°-Wである。柱穴の平面形は隅丸方形である。掘方は平らな底面から、やや斜め外側に立ち上がる壁面を持つ、断面逆台形を示す。全ての柱穴に、柱の抜き取り跡が見られた。埋土は、抜き取り穴・掘方ともに黄灰~黒褐色を主体とするシルト中砂~極細砂混じりで、掘方の埋土がやや極粗砂粒を多く含んでいる。柱穴からは、土師器・須恵器の細片の他、7世紀中頃の須恵器杯G蓋片などが出土している。建物は、出土遺物や埋土、建物の方向が建物4・5・9・10などと同じ点などから、飛鳥時代に属する建物と考えられる。

また、1217柱穴は、建物10を構成する1037柱穴との重複関係から、1217柱穴が古い。このため建物12は建物10に先行することがわかる。

建物13（図30・43、図版19-2・6・7、図版20-1）は、桁行1間以上、梁行2間の南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査中も農業用に使用している水路下に延びているため、調査できなかった。

柱間は、桁行方向が東側柱筋で2.0m、西側柱筋で1.8mである。梁行方向は、検出できた北妻側で、西から順に1.2m、1.4mとなる。身舎の平面形は、東側柱筋が南で東へやや開く。軸はN-20°-Wと西へ振れる。柱穴の平面形は不整形であり、断面は、掘方の底面が平らでやや斜め外側に立ち上がる形態を呈する。すべての柱穴に、抜き取りが見られた。抜き取り穴、掘方ともに黒色シルト中砂~粗砂が混じる埋土であるが、掘方埋土はやや色調が暗い。

柱穴からの出土遺物は、土師器の細片のみであり建物の時期は確定できないが、主軸方向が建物12や、建物4・5・9・10などと同じ点などから、飛鳥時代に属する建物と考えられよう。

建物14（図30・44、図版19-3、図版20-2～4）は、桁行2間で延長4.8m、梁行2間で延長が北妻側3.1m、南妻側2.8mの掘立柱建物で、N-42°-Wと西へ振れる。桁行方向の柱間は、北から順に1.8m、3mと南側の一間分が大きく開いている。また、北側柱筋から外側に外れて、1186柱穴があるが、この建物を構成する柱穴として考えるには難しく、建物に付随する何らかの施設の柱穴と思われる。梁行方向の柱間は、北妻側が西から順に1.6m、1.5mである。また、南妻側の妻柱は、1014溝で削平され失われている。柱穴は、他の建物の柱穴に比べやや小ぶりで、不整円形である。全ての柱穴に、柱の抜き取り跡が見られる。埋土は、相対的に他の建物の柱穴に比べやや明るい色調を示す。南東隅柱の1219柱穴は、建物15の北西隅柱1222柱穴との重複関係にあり、1222柱穴が1219柱穴に先行する柱穴である。従って、建物15は、建物14に先行する建物である。

出土遺物は、1180柱穴から、8世紀代の須恵器 高台付壺の底部片（図74-209）が出土していることから、建物14は、奈良時代に属するものと考えられる。

建物15（図30・45、図版20-5、図版21-1～4）は、東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物で、建物の軸はN-18°-Wである。南側の柱間は、東から1.5m、1.7mで延長は3.2mを測る。対面する北側では、南側の1227柱穴に対応する柱穴が、1014溝により失われている。延長は3.5mと南側より30cm長く、そのため、身舎の平面形がやや北東に広がるややいびつな形になっている。東側の柱間は、1.6m等間で延長は3.2m。西側の柱間は北から1.8m、1.4mと北側の一間が40cm広くなる。延長は3.2mである。

柱穴は、一辺が50cm前後の隅丸方形の平面形を呈する。掘方は、平らな底面からほぼ垂直か、またはやや外側に開く壁面を有する。全ての柱穴に、柱抜き取り跡が見られる。抜き取り穴の埋土は、暗灰色を基調としたシルトで中砂～粗砂粒が混じる。掘方の埋土は、抜き取り穴の埋土よりもやや明るい暗灰色を基調としたシルトで、含有する中砂～粗砂粒が少ない。

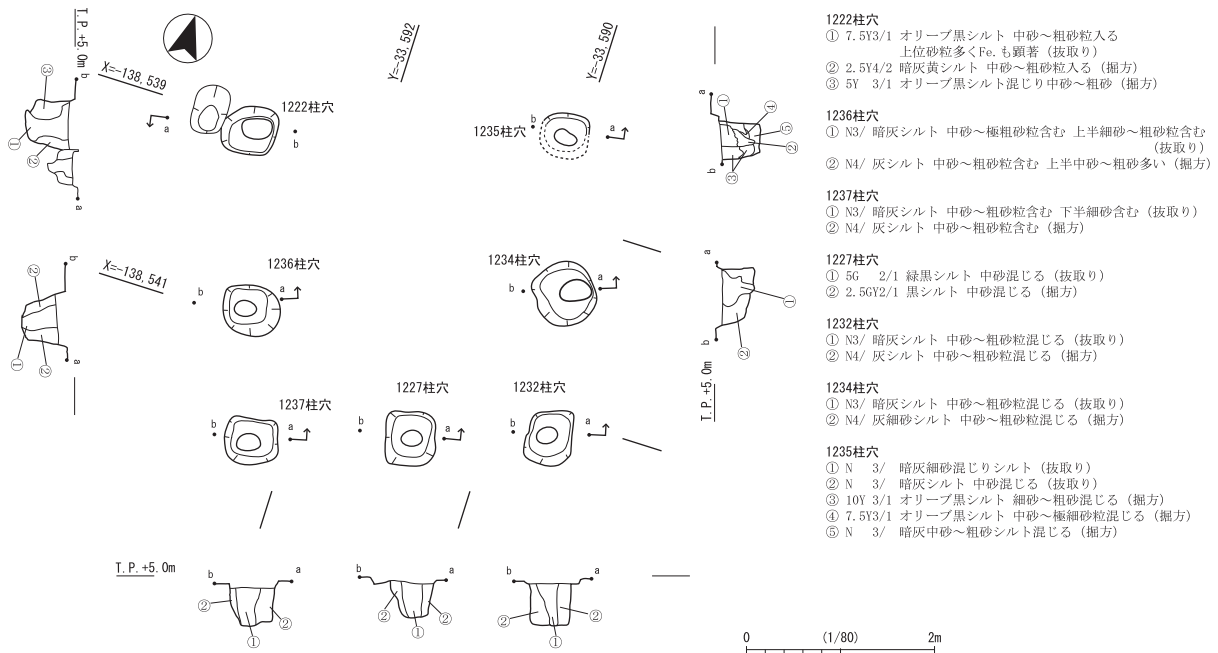


図45 建物15

柱穴からは、須恵器や土師器の碎片が出土しているのみであり、建物の時期については確定できないが、掘方の埋土の様相や、建物の向きなどが、建物6・9・16などと類似していることから飛鳥時代に属するものと考えられる。

建物16（図30・46、図版20-6、図版21-5）は、桁行2間（4.2m）、梁行2間（3.2m）の南北棟の掘立柱建物である。なお、西妻柱と南東隅柱、南側柱の中央の3箇所の柱穴は検出できなかった。桁行方向の柱間は、北側柱筋で西から2.4m、1.9mで、西の間分が50cm広がる。梁行方向の柱間は1.6m等間である。建物の軸はN-20°-Wと西へ振れる。

柱穴は隅丸方形の平面形で、断面は逆台形を呈する。柱穴には、抜き取りが見られるものと、柱痕跡が見られるものがある。抜き取り穴の埋土は、やや明るい黄灰系を基調とする砂混じりシルト。掘方埋土も同系色・同質を基調するが、ややシルト質が強く砂粒の混じりが少ない。柱穴からは、須恵器や土師器の碎片が出土しているのみであり、建物の時期については確定できないが、建物の方向が建物10・11と類似していることから、飛鳥時代と考えられる。

建物17（図30・47、図版21-6・7）は、桁行4間で延長が5.0m、梁行2間で延長が3.2mを測る、南北棟の掘立柱建物である。桁行方向の柱間は東側柱筋が北から、1.3m、1.4m、1.0m、1.3m。西側柱筋は、ほぼ1.3m等間である。梁行方向の柱間は、1.6m等間である。妻柱である1158柱穴と1081柱穴は共に、隅柱をつないだ身舎よりやや外側に位置する。建物の軸はN-22°-Wである。柱穴の平面形は、隅丸方形と楕円形が混在するが、隅丸方形を基調とする。全ての柱穴には抜き取り穴が見られる。抜き取り穴の埋土は、黄灰もしくは褐灰色を基調とする砂粒混じりシルトで掘方埋土よりも、やや極粗砂～粗砂粒を多く含む。掘方埋土は、抜き取り穴の埋土よりもやや暗い色調の、黄灰もしくは褐灰色砂粒混じりシルトである。柱穴からの出土遺物は、細片がほとんどであるが、他の建物に比べ多く倍以上の出土量である。7世紀中頃の須恵器 杯H蓋（図74-206）が1160柱穴から、1088柱穴（図68-75）と

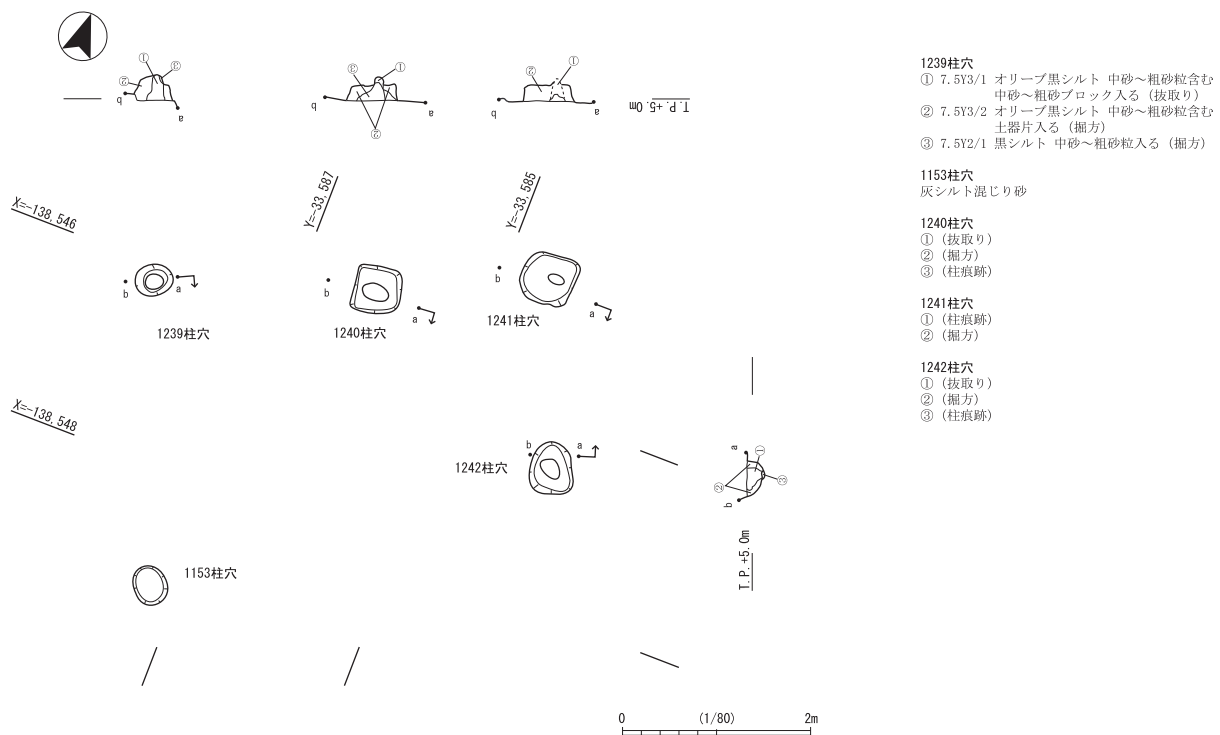
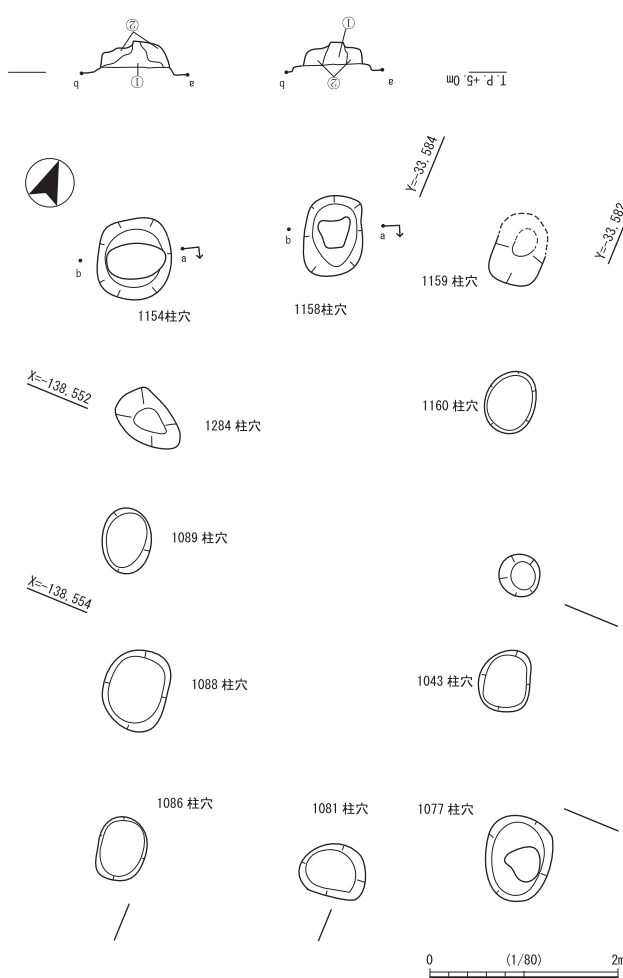


図46 建物16

1284柱穴（図74-207）からも同じく須恵器 杯H蓋が出土しており、建物の時期は飛鳥時代と考えられる。また、1086柱穴から管玉（図74-229）、1089柱穴からは弥生時代後期と考えられる蓋（図76-266）が出土しているが、この2点は、混じり込みであろう。

掘方埋土や建物の主軸方向は、飛鳥時代とする他の建物と同じ傾向が見られる。なお、この建物17は調査時には、建物として認識することができず、整理段階において建物として解釈したものである。

建物18（図30・48、図版20-7・図版21-8、図版22-1・2）は、ほぼ南北一直線に並ぶ1565柱穴・1566柱穴・1684柱穴・1567柱穴を東側柱とする掘立柱建物である。なお、調査時に1566柱穴は、掘方の位置が他の3つの柱穴を結ぶ線上から、やや内側に入るため、建物を構成する柱穴から除外していたが、掘方の平面形や埋土の様子などから検討の結果、建物18を構成する柱穴とした。従って、建物18は桁行3間で延長3.9mを測る南北棟となる。桁行の柱間は、北から1.5m、1.2m、1.2mである。建物の軸は不明であるが、検出した側柱筋で見ると、N-4°-Eとわずかに振れる。柱穴は一辺約50cmの隅丸方形の平面形で、深さは50~60cmを測る。非常にしっかりとした掘方の柱穴で、1567柱穴以外には、

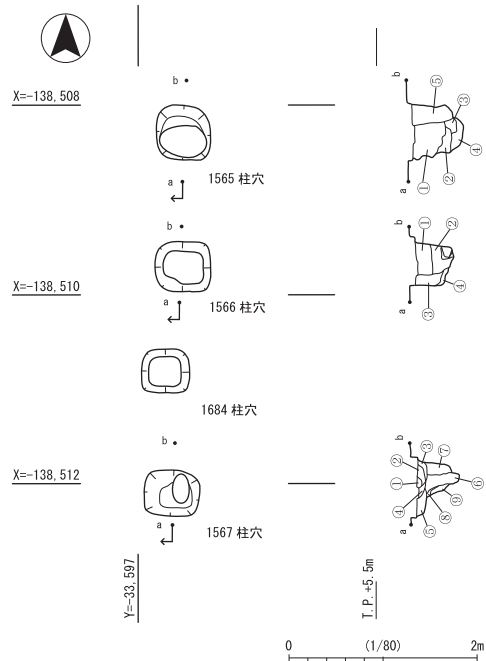


- 1154 柱穴**
 ① 2.5Y5/1 黄灰砂混じり粘質シルト（抜取り）
 ② 10YR5/1 褐灰砂混じりシルト（掘方）

- 1158 柱穴**
 ① 2.5Y5/2 暗灰黄細砂混じり粘質シルト（抜取り）
 ② 灰色が濃くやや粘質の強い土が入る

- 1284 柱穴**
 灰粘土混じりシルト（掘方）

- 1077 柱穴**
 灰褐粘質シルト（掘方）
 暗黄褐細砂混じりシルト質粘土（抜取り）



- 1565 柱穴**
 ① 10YR4/1 褐灰シルト 中砂～粗砂粒入る（抜取り）
 ② 10YR2/1 黒シルト 中砂～粗砂粒入る（抜取り）
 ③ 10YR2/1 黒シルト（抜取り）
 ④ 10YR4/1 褐灰中砂～粗砂 シルトブロック入る（抜取り）
 ⑤ 10YR4/1 褐灰シルト 中砂～粗砂粒入る（掘方）

- 1566 柱穴**
 ① 10YR3/1 黒褐シルト 中砂～粗砂粒含む（抜取り）
 ② 10YR3/1 黒褐シルト 中砂～粗砂粒若干含む（抜取り）
 ③ 10YR3/1 黒褐シルト 中砂～粗砂粒含む（掘方）
 ④ 10YR5/1 褐灰中砂～粗砂 シルトブロック入る（掘方）

- 1567 柱穴**
 ① 10YR4/1 褐灰シルト 中砂～粗砂粒入る（抜取り）
 ② 10YR6/1 褐灰中砂～粗砂 シルトブロック入る（抜取り）
 ③ 10YR5/1 褐灰中砂～粗砂 シルト（抜取り）
 ④ 10YR5/1 褐灰シルト 中砂～粗砂粒入る（抜取り）
 ⑤ 10YR4/1 褐灰シルト 中砂～粗砂粒多く含む（抜取り）
 ⑥ 10YR3/1 黒褐中砂 シルト シルトブロック入る（柱痕跡）
 ⑦ 10YR2/1 黒シルト 中砂～粗砂粒入る（掘方）
 ⑧ 10YR6/1 褐灰中砂～粗砂 シルトブロック入る（抜取り）
 ⑨ 10YR5/1 褐灰中砂 シルト（掘方）

図47 建物17

図48 建物18

抜き取りが見られる。抜き取り穴の埋土は、褐灰～黒褐シルト粗砂～中砂粒を含む。掘方の埋土は、やや色調が抜き取り穴の埋土より暗い、褐灰～黒褐シルトで、粗砂～中砂粒の混じりも少ない。柱穴からは8世紀前半頃と考えられる土師器 杯C片が出土している他は、土師器の細片であり建物の時期の特定は難しいが、建物の向きが、建物2・7・10と同方向であるため、これらの建物と同じ奈良時代に属すると考えられよう。

建物19（図30・49、図版22-3・4・5、図版23-1・2）は、桁行3間で延長5.3m、梁行2間で延長3.4mを測る、東西棟の掘立柱建物である。桁行方向の柱間は、北側柱筋が東から1.6m、2.3m、1.4mで、2間目が広く開く柱位置となっている。南側柱筋は北側柱の1550柱穴に対応する柱穴が、筋掘り内にあったため検出できなかったが、柱間はほぼ北側柱筋に揃うと思われる。梁行方向の柱間は、ほぼ1.7m等間である。建物の軸はN-15°-Wである。

柱穴の平面形は不整形円形から方形のものまで混在しており、深さは隅柱である1549穴・1552柱穴・1561柱穴・1583柱穴が他よりもやや深い傾向が見られるものの、全体的に浅く遺存状況は悪い。柱穴の平面精査では、すべての柱穴に柱痕跡を見つけたが、断面観察では柱痕跡と断定できるものは無かった。そのため、すべて抜き取られたと考えられよう。柱穴の埋土は、灰色系を基調とする粗砂混じりシルトである。

1549柱穴からは、土師器 杯C（図74-212）が出土している。復元すると口縁部の一部は失われているもののほぼ完形になった。

建物20（図30・60、図版22-6、図版23-3～5）は、桁行3間で延長4.5m、梁行2間で延長4.0mを測る東西棟の掘立柱建物である。建物の主軸はほぼ東西正方位である。桁行方向の柱間は、バラツキが

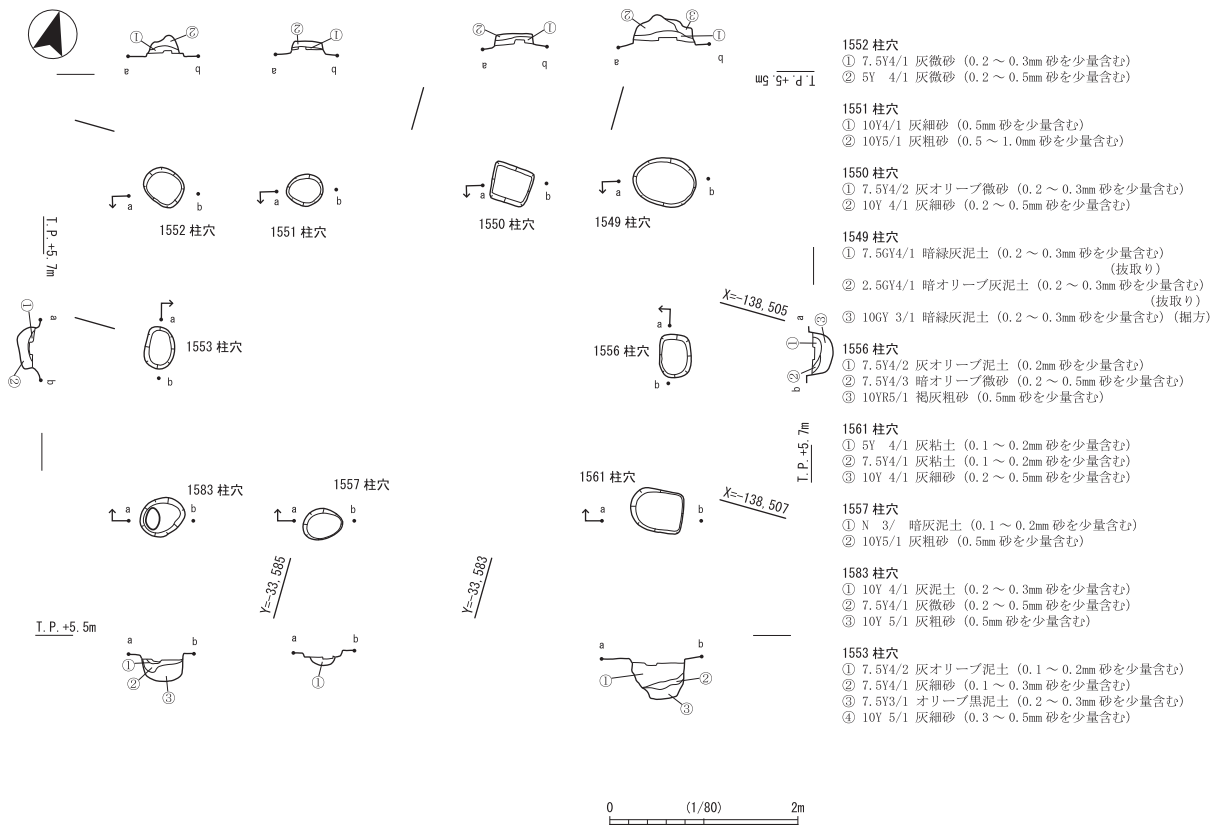


図49 建物19

見られるが北側柱と南側柱はどちらも、東から1.7m、1.2m、1.6mで揃えられている。梁行方向の柱間は、ほぼ2.0m等間である。身舎内には、妻柱筋に沿って2基の柱穴を検出しているが、他の柱穴よりも小振りであり、平面形も円形または楕円形を示し異なる点が見られる。このため、床束の柱穴ではないかと考えられる。なお、1600柱穴・1601柱穴は、調査時に建物20の東柱として認識していなかったため、断面図は作成していない。他の建物を構成する柱穴の平面形は隅丸方形であるが、東妻柱のみ円形を示す。掘方は、おおむね平らな底面からほぼ垂直に立ち上がる壁面をもつ。1532柱穴では抜き取りが見られるが、他の柱穴では柱が朽ち、木質が粘土～シルトに置き換わった柱痕跡を検出している。1513・1535柱穴を見ると褐灰色細砂シルト中砂粒入る柱痕跡が見られる。掘方埋土は、褐灰色を基調とする細砂シルトで中砂～粗砂粒が入る。柱穴から出土した遺物は、全て細片の須恵器、土師器で建物の時期を特定することはできない。しかし、建物の向きがほぼ正方位であることから、建物2や建物18と同じ奈良時代に属するものと考えられる。

建物21 (図30・51、図版22-7、図版23-6～8) は、桁行2間で延長5.0m、梁行2間で延長が東妻側で3.8m、西妻側で4.0を測る東西棟の掘立柱建物である。東西妻側の長さが異なるため、南の側柱筋が東でやや内側に入り込む平面形である。建物の軸はN-65°-Wである。なお、北側柱筋の中央の柱穴は攪乱により失われている。桁行方向の柱間は、南側柱筋で西から2.7m、2.3mである。梁行方向の柱間は、東妻側で北から1.7m、2.1m。西妻側では2.0m等間である。柱穴は隅丸方形を基調とする平

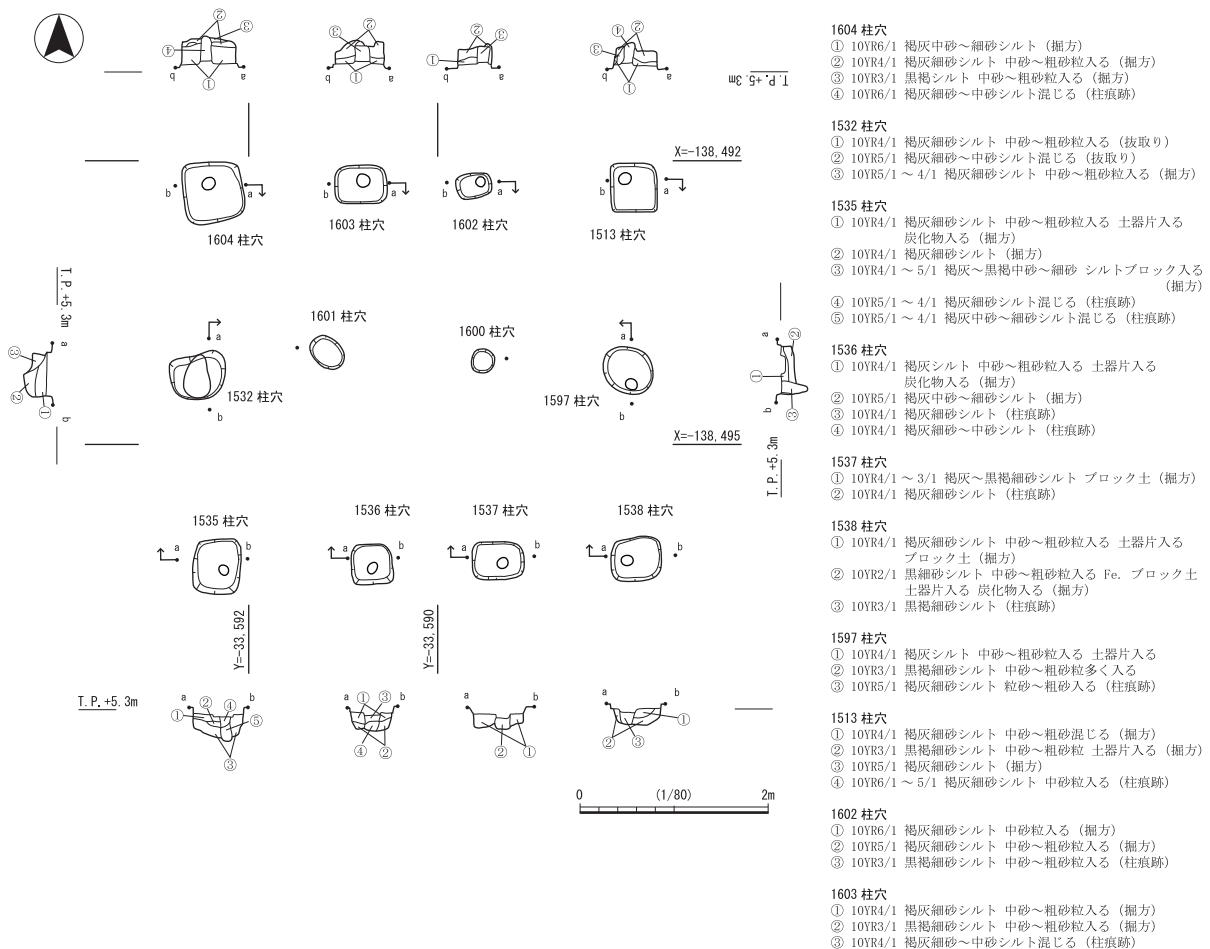


図50 建物20

面形を呈する。1410柱穴は、不整楕円形であるが、これは柱の抜き取りにより掘方が壊されたためであろう。柱痕跡が見られる1585柱穴は隅丸方形であり、本来の掘方は隅丸方形であると考えられる。掘方の断面は、平らな底面からほぼ垂直に立ち上がる壁面が見られる。掘方の埋土は、おおむね黒褐色を基調とするシルトで中砂～粗砂粒が含まれる。1410柱穴の抜き取り穴の埋土は、やや明るい黒褐色を基調とするシルトで中砂～粗砂粒を掘方埋土よりやや多く含んでいる。

柱穴からの出土遺物はほとんどなく、建物の時期決定はむずかしいが柱穴の埋土から見ると、飛鳥時代に属する建物の柱穴の埋土に類似する。

建物22（図30・52、図版24-1・4～6）は、桁行3間で延長5.1m、梁行2間の延長4.1mを測る、東西棟の掘立柱建物である。建物の軸はN-4°-Wとほぼ正方位である。桁行方向の柱間は北側柱筋で東から1.7m、1.9m、1.5m。南側柱筋で、同じく東から1.5m、2.4m、1.2mである。東西側柱筋とも、中央の間分がやや広くとられている。梁行方向の柱間は、西妻側ではほぼ2.0m等間である。東妻側では、北東隅柱の827柱穴と南東隅柱の854柱穴を結ぶ線上からやや東へ離れた位置で、棟筋が通る853柱穴を検出している。身舎からは離れているものの、この853柱穴を東妻柱と考えると、柱間は西妻側と同様にほぼ2.0m等間である。この事から、調査時には853柱穴を建物を構成する東妻柱とは認識していなかったが、ここで改めて東妻柱と考えたい。

柱穴の平面は、隅丸方形を基調とするが、不整円形のものも若干見られる。掘方は、他の建物で検出している隅丸方形の柱穴によく見られるような、矩形の断面形を呈する。南側柱の1675柱穴では、柱の不等沈下を防ぐための板状の礎盤が出土している。この礎盤のためか、1675柱穴では、他の1405柱穴や1406柱穴、1408・1409柱穴で見られるような柱痕跡が、掘方底面から下方へ沈むようないわゆる不等沈下の痕跡は見られなかった。827柱穴以外の柱穴には、抜き取りが見られた。抜き取り穴の埋土は、灰

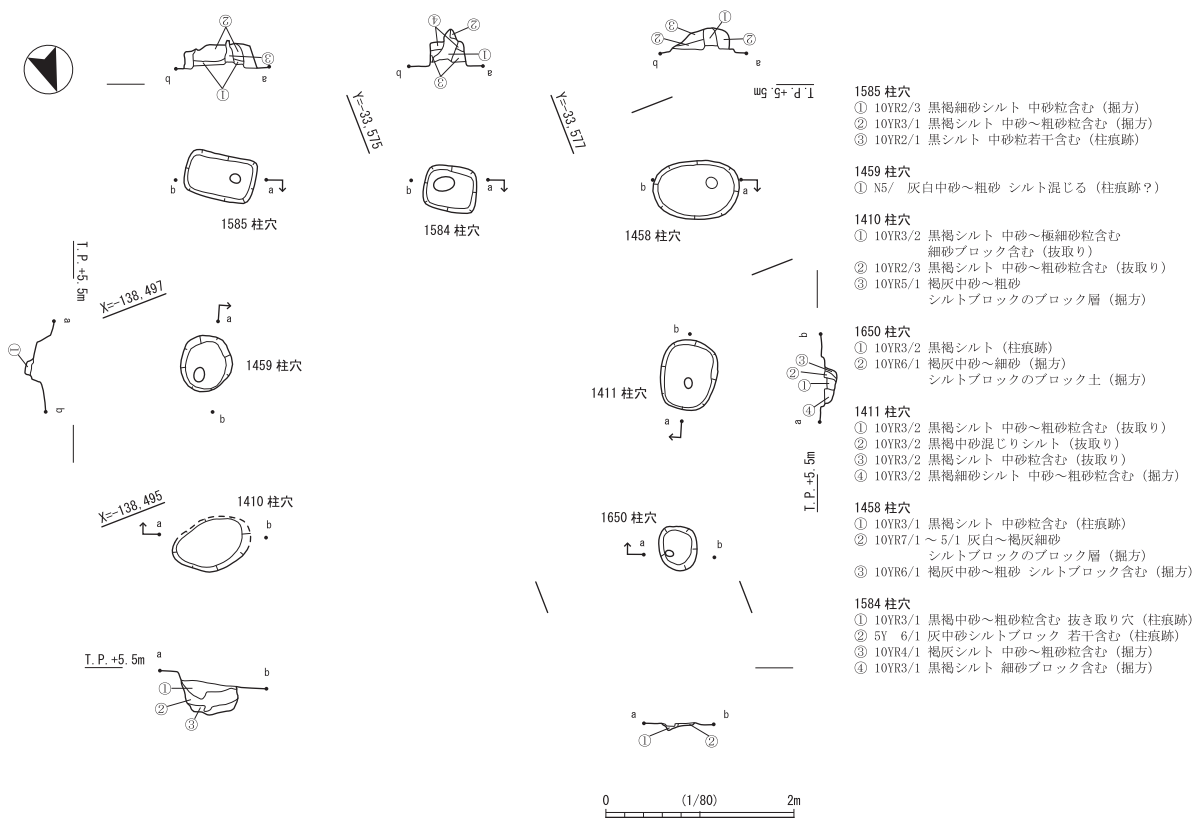


図51 建物21

黄褐～褐灰を基調とする明るい色調で、細砂シルト中砂～粗砂が混じる。掘方埋土は、黒褐色主体で細砂シルト中砂～粗砂粒含み、シルトブロックを含む。柱穴からの出土遺物は、土師器・須恵器の細片であり建物の時期の特定は難しいが、建物の方向が奈良時代と考えられる建物2や、建物18・20と同様に正方位をとるので、おそらく奈良時代に属する建物であろう。

建物23（図30・53、図版24-2・7、図版25-1・2）は、桁行2間で延長3.2m、梁行2間の延長2.8mを測る、東西棟の掘立柱建物である。建物の主軸は、N-3°-Wとほぼ正方位である。柱間は、桁行方向が1.6m等間。梁行方向は、東妻側が北から1.5m、1.3mで西妻側が北から1.4m等間である。柱穴の平面形は、不整円形でおおむね直径が40～50cmである。西妻柱1437柱穴では、柱の木質が土に置き換わった柱痕跡が見られるなど、柱痕跡が見られるものが多い。1437柱穴では、他の建物で見られる柱の不等沈下の痕跡が見られる他、柱痕跡が大きく南へ傾いている。このままの方向で復元すると大きく傾いた妻柱が想定でき、上屋構造を考えると非常に不安定である。このため、建物を廃棄する時に、柱を抜き取ろうとし傾けたが抜き取れなかったため、地上部分で柱を切断した、もしくは切断後に掘方内に残された柱根に何らかの力が加わり傾いたのではないかと推測できる。掘方埋土は、褐灰色泥土で砂粒をやや含んでいるものと、中砂～極粗砂にシルトブロックが若干含まれるものと2種類ある。前者は、建物を検出した土壌層を母材としており、後者は、建物を検出した土壌層の下層に堆積している氾濫堆積物を主たる母材としている事に由来する。これは、他の建物の柱穴にも共通する。

柱穴からは、須恵器片が1点と土師器の細片が出土しているのみで建物の時期を確定できる遺物はないが、建物の方向や埋土が、建物2や建物20・22などと類似していることから奈良時代に属すると考えられる。

建物24（図30・54、図版24-3、図版25-3～6）は、建物23の東約1.5mにある東西棟の掘立柱建物である。切り妻であれば軒は接しないが、非常に近い位置にある。建物の軸は、N-4°-Eとほぼ正

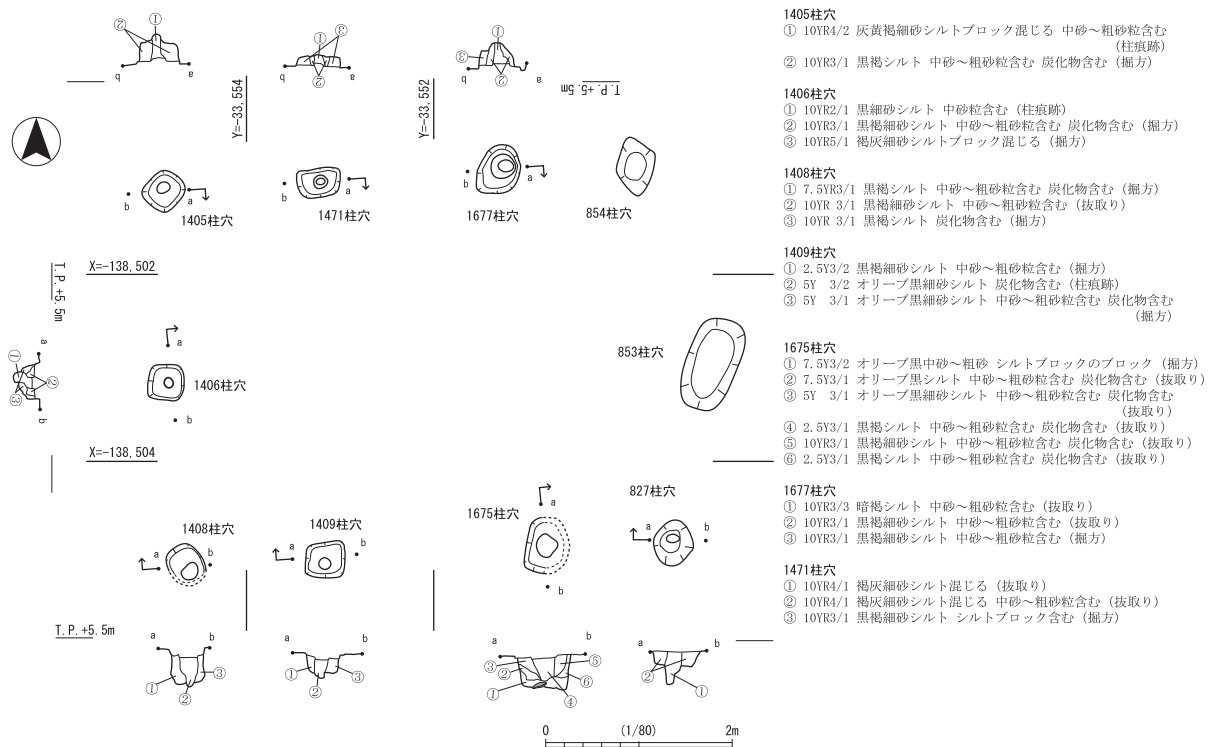
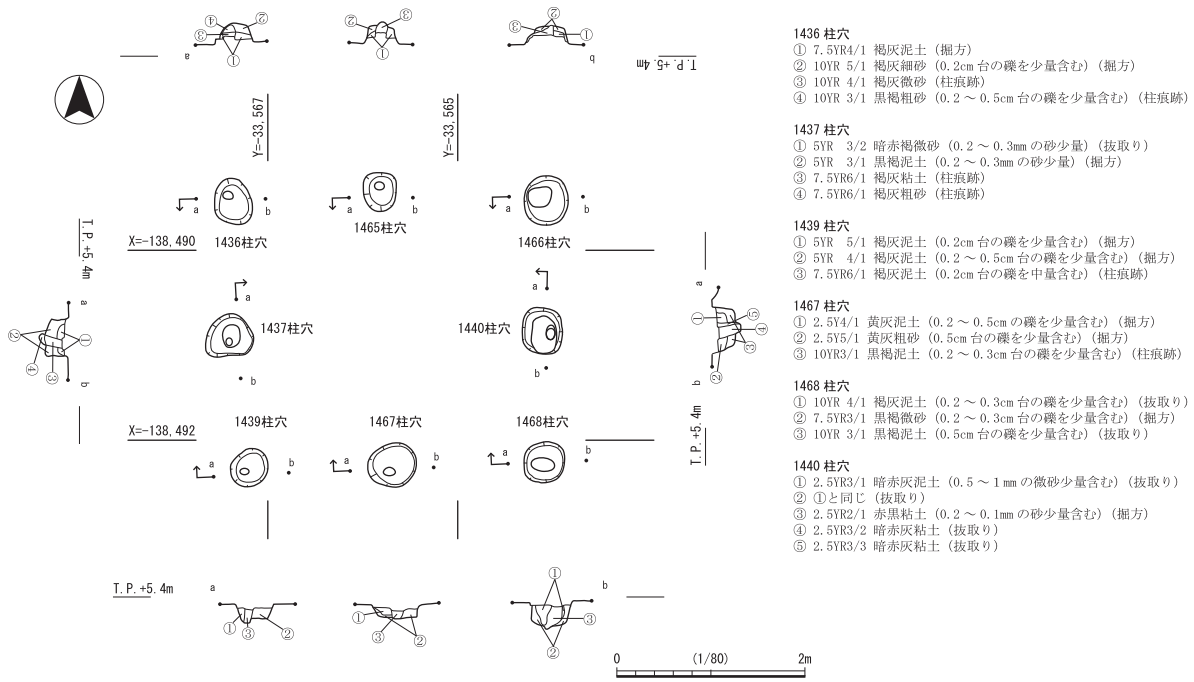


図52 建物22



1465 柱穴

- ① 2.5Y3/1 黄灰細砂 (0.5cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ② 2.5Y4/1 黄灰細砂 (0.5cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ③ 10YR5/1 褐灰粗砂 (0.5cm 台の礫を中量含む) (柱痕跡)

1466 柱穴

- ① 2.5Y4/1 黄灰微砂 (0.5cm 台の礫を少量含む) (抜取り)
- ② 2.5Y3/1 黒褐細砂 (0.5cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ③ 10YR4/1 褐灰微砂 (0.5cm 台の礫を少量含む) (抜取り)

1436 柱穴

- ① 7.5YR4/1 褐灰泥土 (掘方)
- ② 10YR 5/1 褐灰細砂 (0.2cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ③ 10YR 4/1 褐灰微砂 (柱痕跡)
- ④ 10YR 3/1 黒褐粗砂 (0.2 ~ 0.5cm 台の礫を少量含む) (柱痕跡)

1437 柱穴

- ① 5YR 3/2 暗赤褐微砂 (0.2 ~ 0.3mm の砂少量) (抜取り)
- ② 5YR 3/1 黒褐泥土 (0.2 ~ 0.3mm の砂少量) (掘方)
- ③ 7.5YR6/1 褐灰粘土 (柱痕跡)
- ④ 7.5YR6/1 褐灰粗砂 (柱痕跡)

1439 柱穴

- ① 5YR 5/1 褐灰泥土 (0.2cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ② 5YR 4/1 褐灰泥土 (0.2 ~ 0.5cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ③ 7.5YR6/1 褐灰泥土 (0.2cm 台の礫を中量含む) (柱痕跡)

1467 柱穴

- ① 2.5Y4/1 黄灰泥土 (0.2 ~ 0.5cm の礫を少量含む) (掘方)
- ② 2.5Y5/1 黄灰粗砂 (0.5cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ③ 10YR3/1 黒褐泥土 (0.2 ~ 0.3cm 台の礫を少量含む) (柱痕跡)

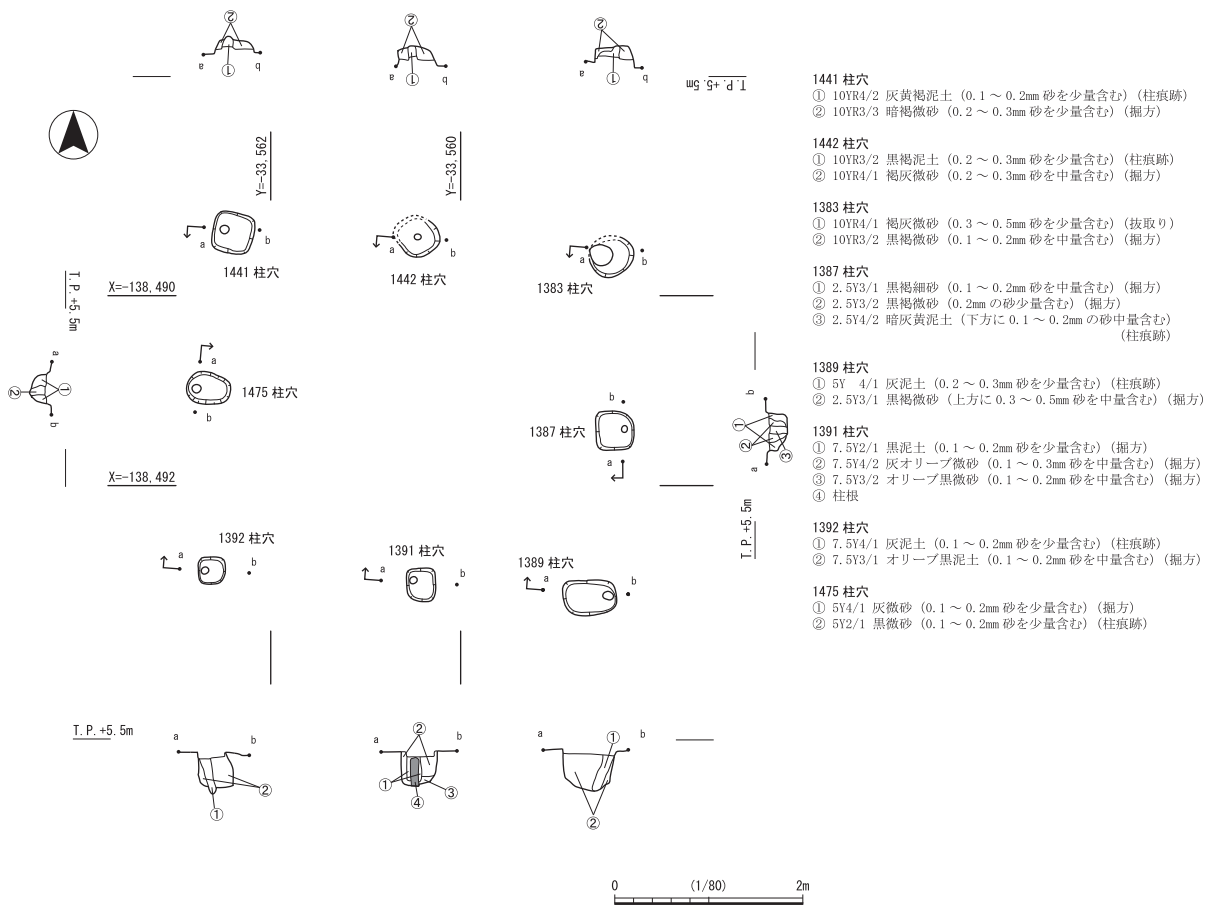
1468 柱穴

- ① 10YR 4/1 褐灰泥土 (0.2 ~ 0.3cm 台の礫を少量含む) (抜取り)
- ② 7.5YR3/1 黒褐微砂 (0.2 ~ 0.3cm 台の礫を少量含む) (掘方)
- ③ 10YR 3/1 黒褐泥土 (0.5cm 台の礫を少量含む) (抜取り)

1440 柱穴

- ① 2.5YR3/1 暗赤灰泥土 (0.5 ~ 1mm の微砂少量含む) (抜取り)
- ② ①と同じ (抜取り)
- ③ 2.5YR2/1 赤黒粘土 (0.2 ~ 0.1mm の砂少量含む) (掘方)
- ④ 2.5YR3/2 暗赤灰粘土 (抜取り)
- ⑤ 2.5YR3/3 暗赤灰粘土 (抜取り)

図53 建物23



1441 柱穴

- ① 10YR4/2 灰黄褐泥土 (0.1 ~ 0.2mm 砂を少量含む) (柱痕跡)
- ② 10YR3/3 暗褐微砂 (0.2 ~ 0.3mm 砂を少量含む) (掘方)

1442 柱穴

- ① 10YR3/2 黒褐泥土 (0.2 ~ 0.3mm 砂を少量含む) (柱痕跡)
- ② 10YR4/1 褐灰微砂 (0.2 ~ 0.3mm 砂を中量含む) (掘方)

1383 柱穴

- ① 10YR4/1 褐灰微砂 (0.3 ~ 0.5mm 砂を少量含む) (抜取り)
- ② 10YR3/2 黒褐微砂 (0.1 ~ 0.2mm 砂を中量含む) (掘方)

1387 柱穴

- ① 2.5Y3/1 黒褐細砂 (0.1 ~ 0.2mm 砂を中量含む) (掘方)
- ② 2.5Y3/2 黒褐微砂 (0.2mm の砂少量含む) (掘方)
- ③ 2.5Y4/2 暗灰黄泥土 (下方に 0.1 ~ 0.2mm の砂中量含む) (柱痕跡)

1389 柱穴

- ① 5Y 4/1 灰泥土 (0.2 ~ 0.3mm 砂を少量含む) (柱痕跡)
- ② 2.5Y3/1 黒褐微砂 (上方に 0.3 ~ 0.5mm 砂を中量含む) (掘方)

1391 柱穴

- ① 7.5Y2/1 黒泥土 (0.1 ~ 0.2mm 砂を少量含む) (掘方)
- ② 7.5Y4/2 灰オリーブ微砂 (0.1 ~ 0.3mm 砂を中量含む) (掘方)
- ③ 7.5Y3/2 オリーブ黒微砂 (0.1 ~ 0.2mm 砂を中量含む) (掘方)
- ④ 柱根

1392 柱穴

- ① 7.5Y4/1 灰泥土 (0.1 ~ 0.2mm 砂を少量含む) (柱痕跡)
- ② 7.5Y3/1 オリーブ黒泥土 (0.1 ~ 0.2mm 砂を中量含む) (掘方)

1475 柱穴

- ① 5Y4/1 灰微砂 (0.1 ~ 0.2mm 砂を少量含む) (掘方)
- ② 5Y2/1 黒微砂 (0.1 ~ 0.2mm 砂を少量含む) (柱痕跡)

図54 建物24

方位である。梁行は2間で延長が3.8m。桁行も2間で、北側柱筋では延長4m、南側柱筋では4.3mと、身舎がやや南でハの字に開く平面形である。桁行方向の柱間は、北側柱筋で2.0m等間。南側柱筋は東から2.2m、2.1mである。梁行方向の柱間は、1.8m等間である。柱穴の平面形は隅丸方形を基調とするようである。掘形の断面形は、平らな底面からほぼ垂直に立ち上がる壁面が見られる。1383柱穴は、抜き取りが見られたが、それ以外の柱穴では、柱痕跡を検出している。特に1391柱穴では、柱根が出土している。柱根は、残存長が17.5cm、直径約3.8cmである。柱根の上端部は、腐っているが下端部は良く残っており、多角形に面取りを施した加工痕が観察できる。(図79-280) やはりこの1391柱穴でも、柱が不等沈下を起こしており、掘方底面から約4cm下方へ沈んでいる。建物24の柱穴だけでも8基の内、6基に不等沈下が見られる。掘方埋土は、建物23の柱穴と類似しており、褐灰色の泥土を主体とする。1383柱穴の抜き取り穴の埋土は、掘方埋土よりやや明度が高い褐灰色の微砂で0.3~0.5mm砂粒を少量含む。

柱穴から出土した遺物は柱根の他、土師器の小片であり、建物の時期を表すような遺物はないが、建物の方向、柱穴の埋土などから、建物2・20・23などと同時期の奈良時代と考えられる。

建物25(図30・55、図版26-1・2・4、図版25-7・8)は、桁行3間で北側柱筋の延長が4.8m、南側柱筋の延長が5.1m。梁行が2間で延長が4.0mの掘立柱建物である。西妻柱は、側溝に重なったため検出できなかった。建物の軸は、N-49°-Wと西へ大きく振れる。桁行方向の柱間は、北側柱筋で西から1.2m、2.2m、1.4m。南側柱筋では西から1.5m、2.2m、1.4mとなる。南北側柱筋とも中央の

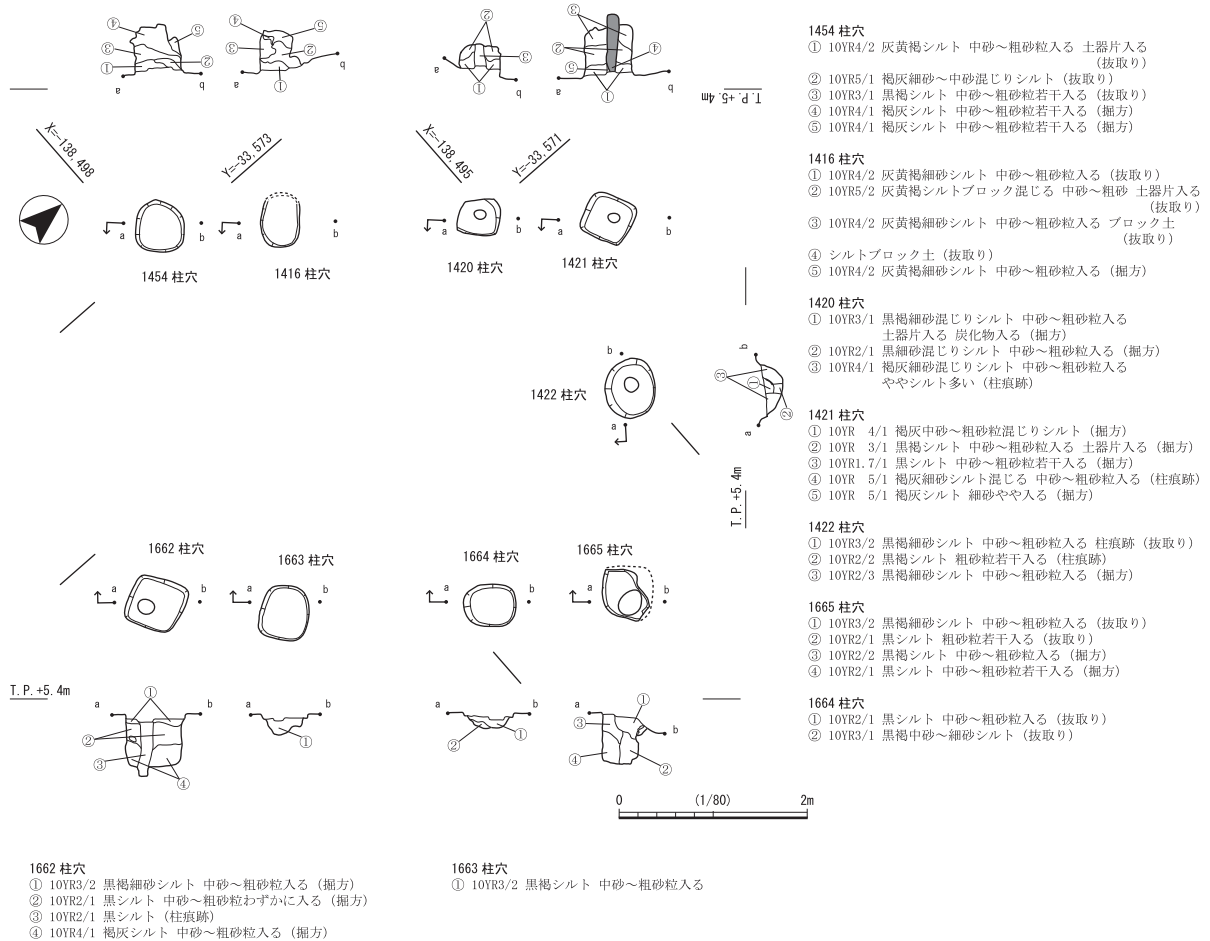


図55 建物25

柱間が2.2mと大きく空く。梁行方向の柱間は、東妻側で北から1.8m、2.2mである。柱穴の平面形は、おおむね隅丸方形であり、掘方断面は矩形を呈する。深さは、深い柱穴で約50cm、浅い柱穴では、約10cmである。1421柱穴では、残存長54cmの柱根が出土している。柱根の上端は朽ちているが、下端部分は良く残っており、多角形に面取りを施した幅約2～3cmの加工痕が明瞭に観察できる。この部分での柱の直径は14cmを測る。(図79-281) この他、1662柱穴では、柱の木質が土と置き換わったと考えられる柱痕跡を検出している。これらの柱穴は、他の建物と同様に柱の不等沈下が見られ、掘方断面より最大で10cm下方へ沈んだ窪みが見られる。掘方の埋土は、中砂～粗砂粒が入る黒褐細砂シルト～シルトを基調としている。抜き取り埋土は、掘方埋土よりも粗砂～極粗砂粒が多く入り、細砂混じりシルトのブロックが見られる。柱穴からは、土師器の細片が出土しているのみで、建物の時期を考えることは難しい。建物の主軸の向きを見ると、建物20や建物24などほぼ正方位に主軸がのる一群とは異なり、柱穴の埋土が類似している建物5・建物6・建物8・建物26など一群と比べると若干振れが大きい。しかし、どちらかと言えば後者に近い点が多く、ここでは飛鳥時代前後に属する建物と考えておく。なお、建物の向きが類似しているものとしては建物3・建物14があげられる。

建物26(図30・56、図版26-3・5～7)は、桁行4間で延長が、北側柱筋で4.0m、南側柱筋で4.3mを測り、梁行が2間で延長3.1mの東西棟の掘立柱建物で、軸はN-30°-Wである。桁行方向の柱間は、北側柱筋で東から1.0m、1.1m、1.0m、0.9mとほぼ1.0mの等間を指向しているようである。南側柱筋はややバラツキが大きく、東から順に1.1m、1.2m、0.8m、1.2mである。梁行方向の柱間は東妻側が、北から1.7m、1.4m。西妻側が1.8m、1.3mである。柱穴の平面形は、不整円形から隅丸方

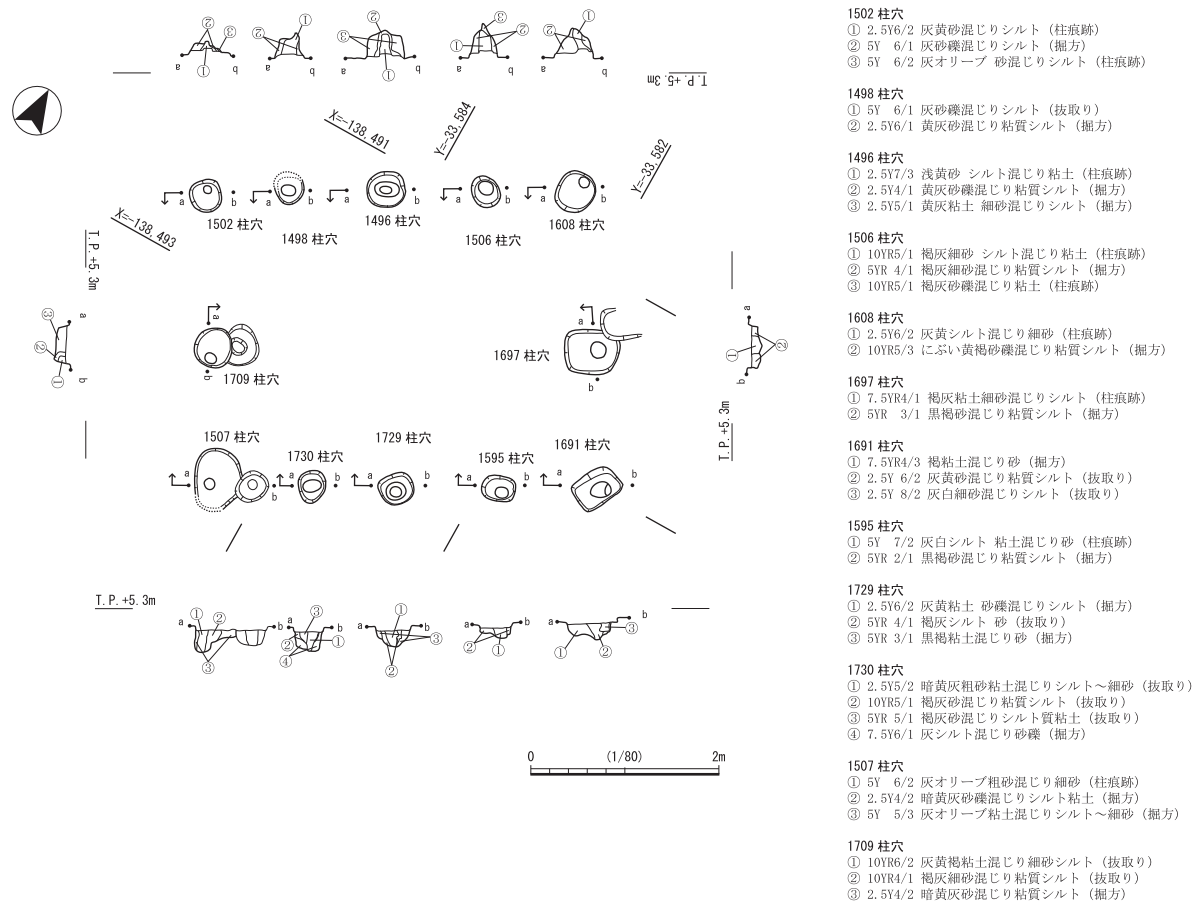


図56 建物26

形や大きく隅丸方形を主とし、長軸が50～60cmを測る。掘方の深さは全て30cm前後で、抜き取り跡が見られる柱穴では、抜き取り穴が掘方の底面より下方に及んでいるものも見られる。掘方埋土は、やや明るい灰黄～褐灰色シルト砂混じりを基調とする。他の建物の柱穴に比べやや砂粒の混じりが多く砂っぽい感じである。抜き取り穴の埋土は、灰黄～灰砂礫混じりシルトを基調とする。抜き取り穴内に中砂～極粗砂のブロックを含むものも見られた。これは、抜き取り穴を掘り、柱を抜いた時に下層の氾濫堆積層がブロック状に入り込んだためではないかと考えられる。

柱穴からは、土師器細片が出土しているのみで、建物の時期を特定できることは難しいが、建物の向きが建物 8・6・19などと似ており、おそらく飛鳥時代に属するものと考えられる。

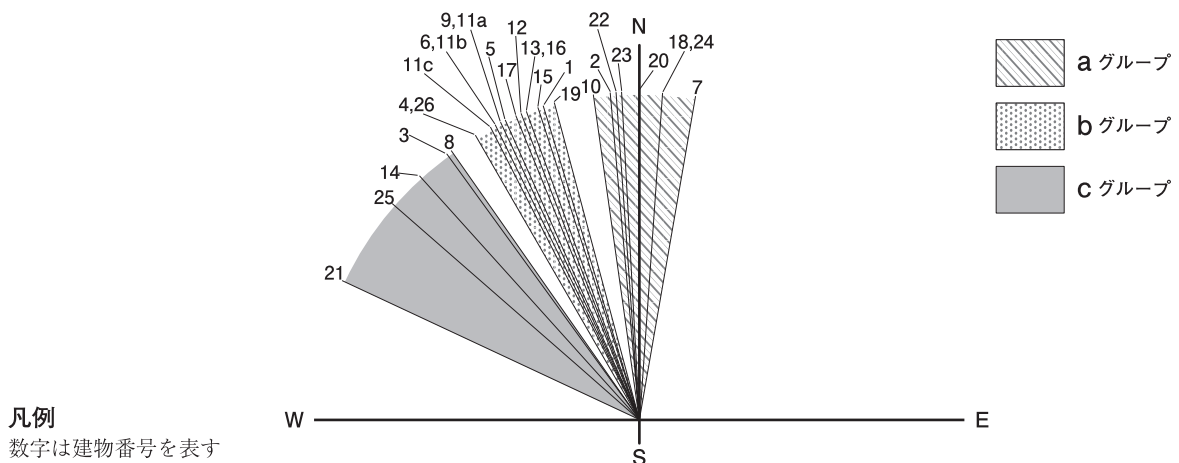
ここで、検出した建物について若干まとめておく。(図30・グラフ2)

検出した建物は、ほぼ同位置で、2回の建て替えが行われている建物11a・b・cを合わせて計29棟である。これらの建物について、座標北からの振れを見てみると大きく a、b、c の3つのグループに分けることがグラフ2からわかる。aグループは、建物 2・建物 7・建物10・建物18・建物20・建物22・建物23・建物24からなる8棟。bグループは、建物 1・建物 4・建物 5・建物 6・建物 9・建物11a・建物11b・建物11c・建物12・建物13・建物15・建物16・建物17・建物19・建物26からなる15棟。cグループは、建物 3・建物 8・建物14・建物21・建物25の4棟である。

aグループを見ると建物の振れが、座標北を中心として、東へ10°～西へ8°の中に収まる。bグループは、座標北から西へ15°～30°の振れの中で収まっている。cグループは、ややバラツキがおおきいものの、座標北から西へ35°～65°の振れの中に収まっている。建物の振れによるこれらのグループに、柱穴の平面形や埋土を考えあわせ、さらに出土遺物からの検討を加えると、aグループは、柱穴の埋土がやや明るい褐灰色を基調とし、出土遺物はおおむね奈良時代を示し、b・cグループは、共に柱穴の埋土が黒褐色を基調としており、出土遺物は飛鳥時代を示す。そして、建物の柱穴の前後関係から、建物 3 (cグループ) → 建物 2 (aグループ)、建物12 (bグループ) → 建物10 (aグループ)、建物15 (bグループ) → 建物14 (cグループ) という建物の前後関係があり、a、b、cの3つの建物のグループは、bグループ→cグループ→aグループの順に変遷が考えられる。

また、この建物群の存続期間は、出土遺物から飛鳥時代から奈良時代とすることができよう。これは、建物群が立地する微高地の縁辺を流れる流路も出土遺物を見ると、飛鳥時代から奈良時代を示しており、矛盾しない。

グラフ2 座標北を基準とした建物の方向



次に、溝について述べる。(図57・60)

この面では、調査区全体で幅が10～30cmの小溝を多数検出しているが、その内80パーセント以上は、上層上面から耕作に伴う小溝である。これらの小溝の方向は、ほぼ正方位であり、かつ埋土が上層の作土であることから色調・土質とも大きく異なるため容易に見分けることができる。小溝からは当該時期の遺物の他、奈良時代から古墳時代の遺物が出土しているが、これは、下層から混入したと考えられる。このような小溝からの出土遺物に、6世紀中頃の須恵器 杯(図73-182)などがある。

これらの小溝の他、正方位にのらず、また中砂～極粗砂を主な埋土とする小溝を上述した建物の近辺で検出している(図57)。それらの中で主なものは、1248溝・1023溝・1019溝(1218溝)・1095溝・1145溝・1146溝・1018溝である。これらの溝は、bグループに属する建物9・建物12・建物13・建物11a・b・c、建物15・建物16・建物17の周辺で検出しており、ほぼ建物と同じ方向を指向している。溝は、雨落溝に類するような排水を兼ねた溝か、建物同士を区切る意味を持つような、境界としての意味合いをもつような溝ではないかと考えられる。

1248溝は、延長約10mを検出しており、深さは4cm前後を測る。埋土は、黄褐砂混じりシルト質粘土である。この1248溝にほぼ並行するように1019溝(1218溝)から直角に、東へ延びる1023溝がある。

1023溝は、延長約11m分を検出しており、深さは14cm前後を測る。埋土は、最終埋没層が灰粘質シルトで、下層はオリブ黒シルト混じり粗砂・シルト～細砂である。1248溝と1023溝の内法幅は1.4m前後である。

1019溝(1218溝)は、方向から見て1095溝と一連の溝と考えられ、検出延長は都合26mを測る。幅は50cm前後で、深さは11cm前後である。埋土は、上層が灰砂混じり粘質シルトで、下層が暗黄褐シ

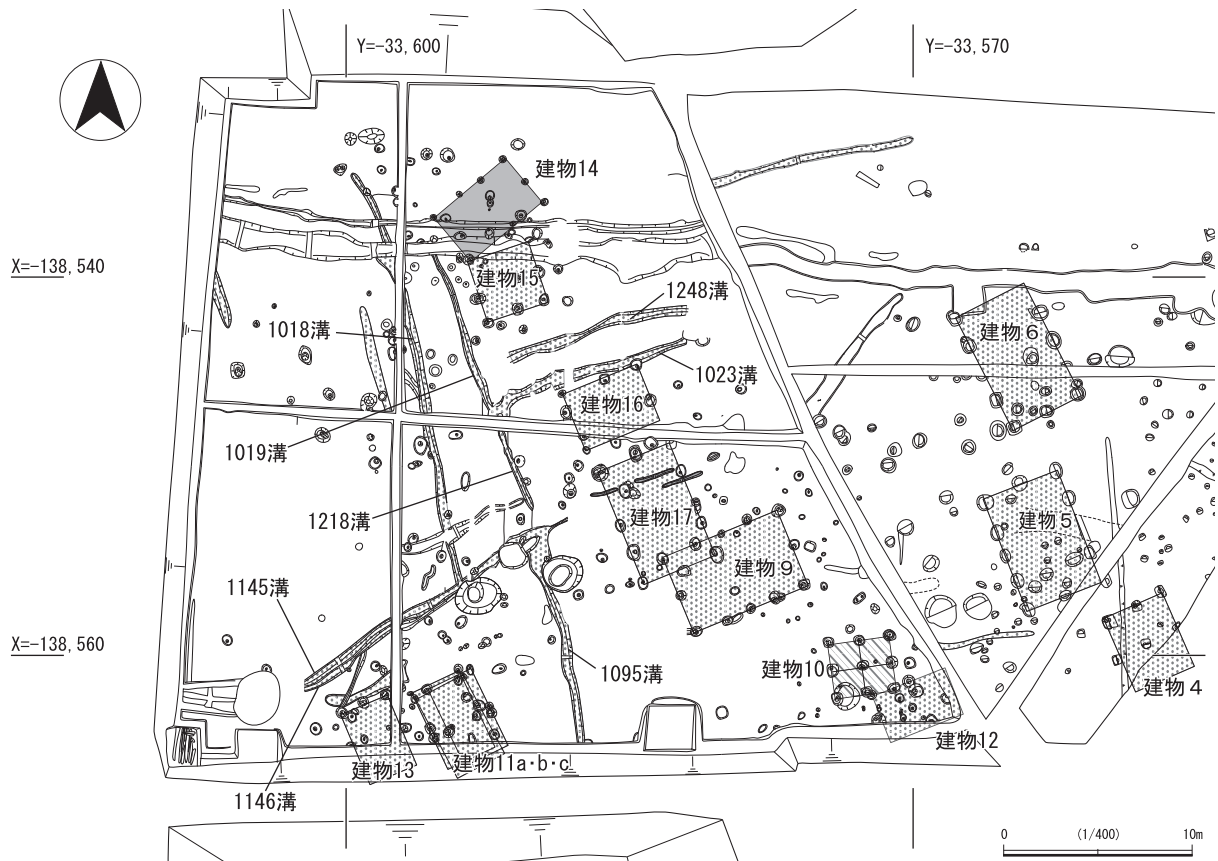


図57 1018溝・1023溝・1145溝(1146溝)・1019溝(1095溝・1218溝)・1248溝 位置図

ルト砂混じりである。この1019溝（1218溝）・1095溝にはほぼ平行して掘削された1018溝がある。延長は約22.3mを測り、幅は50cm前後、深さは25cm前後である。埋土は、暗茶褐砂礫混じりシルト質粘土である。

1018溝と1019溝（1218溝）・1095溝の内法はおよそ2.5mである。また、1018溝は、南西端で1145溝と1146溝に分かれる1145溝に取り付き、この溝より南には延びていない。

1145溝は、幅約50cmで、深さは10cm前後である。埋土は、暗黄灰砂混じりシルトである。1145溝は、さらに1095溝と交わり、そして西へ約1m延びている。1095溝より西へ延びている部分は、それより東部分より幅が狭く20cm前後で、深さも4cm前後と浅く規模が小さくなっている。また、延長上には、途切れ途切れながら同規模の溝が7mほど西へ続いているように見える。

なお、この規模の小さな溝は、建物17の身舎内にあり、建物17が存在していた時点には、掘削されていないか、廃棄されていたと考えられる。この溝と1023溝との内法幅は6.4m前後を測る。1145溝と1095溝が交わっている部分は、平面形がやや膨らむような感じである。

これらの溝から出土した遺物には、1095溝から7世紀中頃の土師器 杯C（図74-211）が、1145溝からは、土師器 甕口縁部（図74-214）と口縁部に指押さえを施した凸帯が巡り、体部外面はやや斜め方向の縦ハケが見られる土器（図74-215）が出土している。この他にも、細片であるが、土師器 杯Cや、須恵器 杯G蓋と考えられる土器片が出土しており、これらの溝はおおむね飛鳥時代に位置づけられる。

245溝（図60）は、溝としているが、おそらく172流路の変遷段階で、流路が一時的に破堤を起し地面を抉った痕跡と考えられる。流路が北へやや方向を変える位置の攻撃面側にあることから言えよう。埋土は、シルト混じりの中砂から粗砂である。埋土中から、7世紀前半頃の須恵器 鉢（図73-201）が出土している。（9区）

次に、これらの溝と建物の関係について、若干考えてみたい。

1019溝（1218溝）・1095溝と、これに並行する1018溝の間には、建物はなく空間地となっている。そして、この空間地によって、西の建物11a・b・cと建物13が、建物15・建物16・建物17・建物9・建物12、そしてさらに東にある建物4・建物5・建物6が分けられている。また、空間地の東側部分では1019溝（1218溝）・1095溝から東へ延びる1023溝とこれに並行する1248溝によって、建物15とそれ以外に区分されているようである。排水と境界を共有する溝として、並行する二条の溝は、道路・通路とみなすことはできないであろうか。そうであると、並行する溝の内側に建物が存在しない点についてはうなずける。また、1019溝（1218溝）・1095溝と1018溝の内法幅は、1023溝と1248溝の内法幅より広いいため、主たる道路・通路であり、1023溝と1248溝間はそれに準じる道路・通路と考えることはできないであろうか。

この他に検出した溝には、172流路から続く209溝（1413溝）があるが、方位はaグループとする建物2・建物7・建物10・建物18・建物20・建物22・建物23・建物24からなる8棟とほぼ揃っている。（図60）延長は約19m、深さは10～12cmを測る。最終埋没段階の172流路の底と、209溝（1413溝）底を合流部分で比較すると、11cmほど、209溝（1413溝）の底の方が高い位置にある。また、209溝（1413溝）の底の高さを見ると、さほど勾配は見られないが、地形から見て、南から北への水の流れが想定できる。出土遺物は、土器の細片のみで時期は不明であるが、建物23の妻筋にほぼ平行して、西4mの位置にあり建物に付随するなんらかの機能を有した溝と考え、奈良時代に属する遺構と考えられる。

668溝（図60、図版7-3）は、建物に関係すると考えられる溝とは、また異なった方向を示す溝で、

大きく北東から南西方向へ延びる。検出延長は約8m、深さは約13cmで、埋土はシルト混じり中砂～極粗砂である。溝内からは、土師器や須恵器片とともに7世紀前半の須恵器 甕（図73-202・203）が2点出土している。〈3-1区〉

次に、井戸について記述する。

244井戸（図60・58・59、図版5-2～4）は、172流路の南に造られている。検出時には、長軸3.1m、短軸2.7mの土坑状の遺構として検出したが、埋土である黒褐～灰黄褐粗砂～細礫混じりシルトを掘り下げると、検出面から約30cm下で、方形の井戸枠が検出され、井戸として認識した遺構である。

このことから、244井戸は、使用されなくなった時点、もしくはその後で井戸枠の上部を抜き取った後、埋め戻され廃棄されたと考えられる。

抜き取り穴の及んでいる部分から、機能時に堆積したと考えられる堆積物までの約75cm間には、加

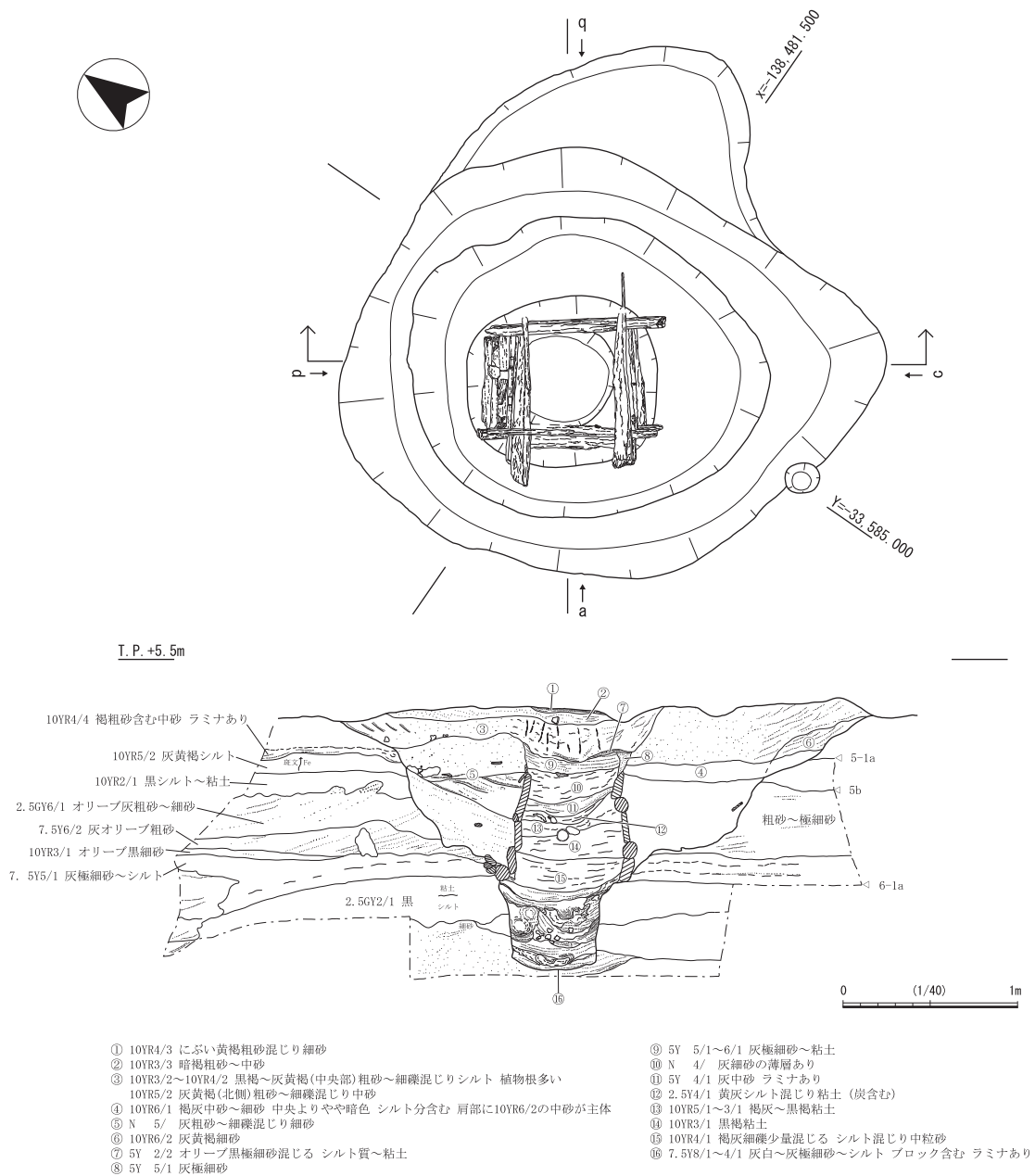


図58 244井戸

工材を含む枝などが入った複数層に分層できる粘土～シルトで極細砂～細砂の薄層が挟在する堆積物があり、井戸として積極的に使用しなくなってからかなりの間、外部から堆積物が流れ込む状況があったと考えられる。

検出した井戸枠は、4段分を検出しており長方形の板材を、相欠継ぎを用いて組み、積み上げられている。組み方は、最下段の1段目の枠として、上部に逆台形の欠き込みが入った2枚の板材を平行に並べ、その間を外皮の付いた直径8cm前後の太い枝や、やや幅の狭い板材で塞ぐ。2段目として、その上に1段目の板材に直角になるように上下に逆台形の欠き込みが入った板材の下端の欠き込みを1段目の欠き込みに合わせて組み、相継ぎという技法を用いる。さらに、3段目を2段目と直角方向に、相欠継ぎを用いて組み。4段目も同様に、3段目と直角方向に、相欠継ぎを用いて組み。なお4段目は、板材の上端部に相欠継ぎ用の欠き込みがなく、4段目以上は別の継ぎ方をする井戸枠が載るのか、4段目が井戸としての天端になるのかは不明である。(図77-269～271・図78-272～274・図79-275～277)

井戸からの出土遺物としては、埋土内から8世紀初頭頃の土師器 甕(図74-216)や、須恵器 甕口縁部(図74-219)・須恵器・土師器の細片が出土している他、流紋岩製の砥石(図74-220)、底付近からは両端を斜めに落とし三角形に仕上げた、薄い板状の木製品(図79-278)が出土している。また、掘方内からは、7世紀中頃の須恵器 杯H(図73-193)や須恵器・土師器の細片が出土している。

これらの遺物から、この井戸は飛鳥時代に造られ、使用されなくなってからは、検出した井戸枠の上部まで土砂が流入する状況にあり、その状況は奈良時代初め頃まで続き、井戸枠が抜き取られ、完全に埋められたと考えられる。

また、付け加えるならば井戸枠が、Cグループとする飛鳥時代の建物群と方位が揃っていることから、これらと関係する井戸ではないかと考えられる。〈1区〉

次に、遺物が出土したピットについて述べる。

188ピット・203ピット・486ピットは1区の微高地上で、278ピットは1区の北付近で、578ピットは2区で検出している。

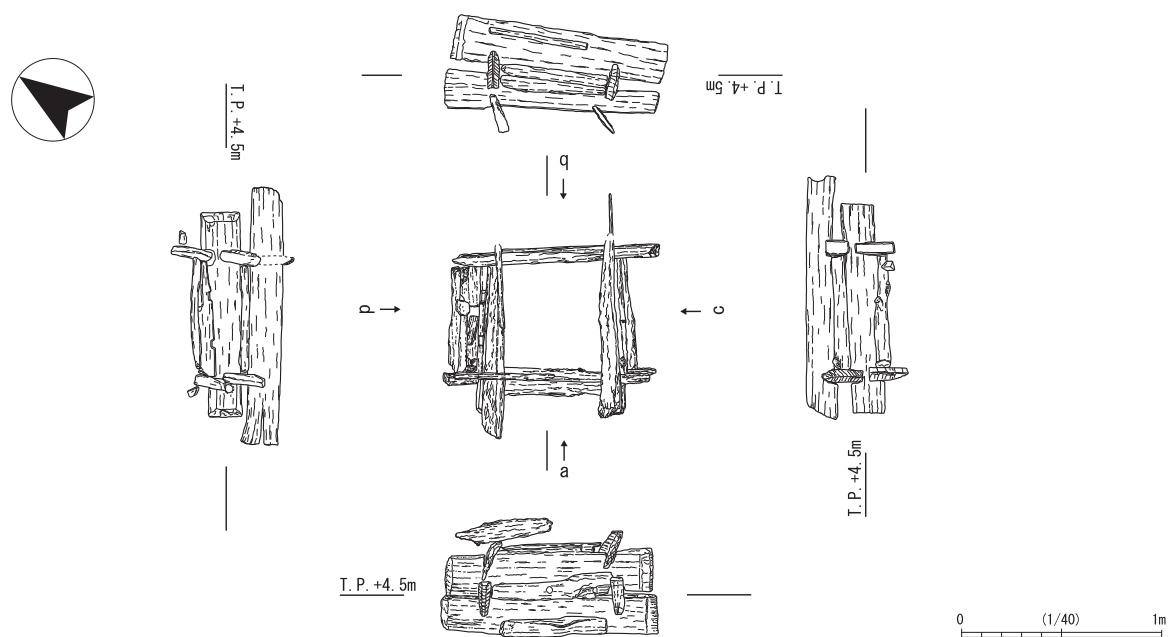


図59 244井戸 井戸枠立断面図

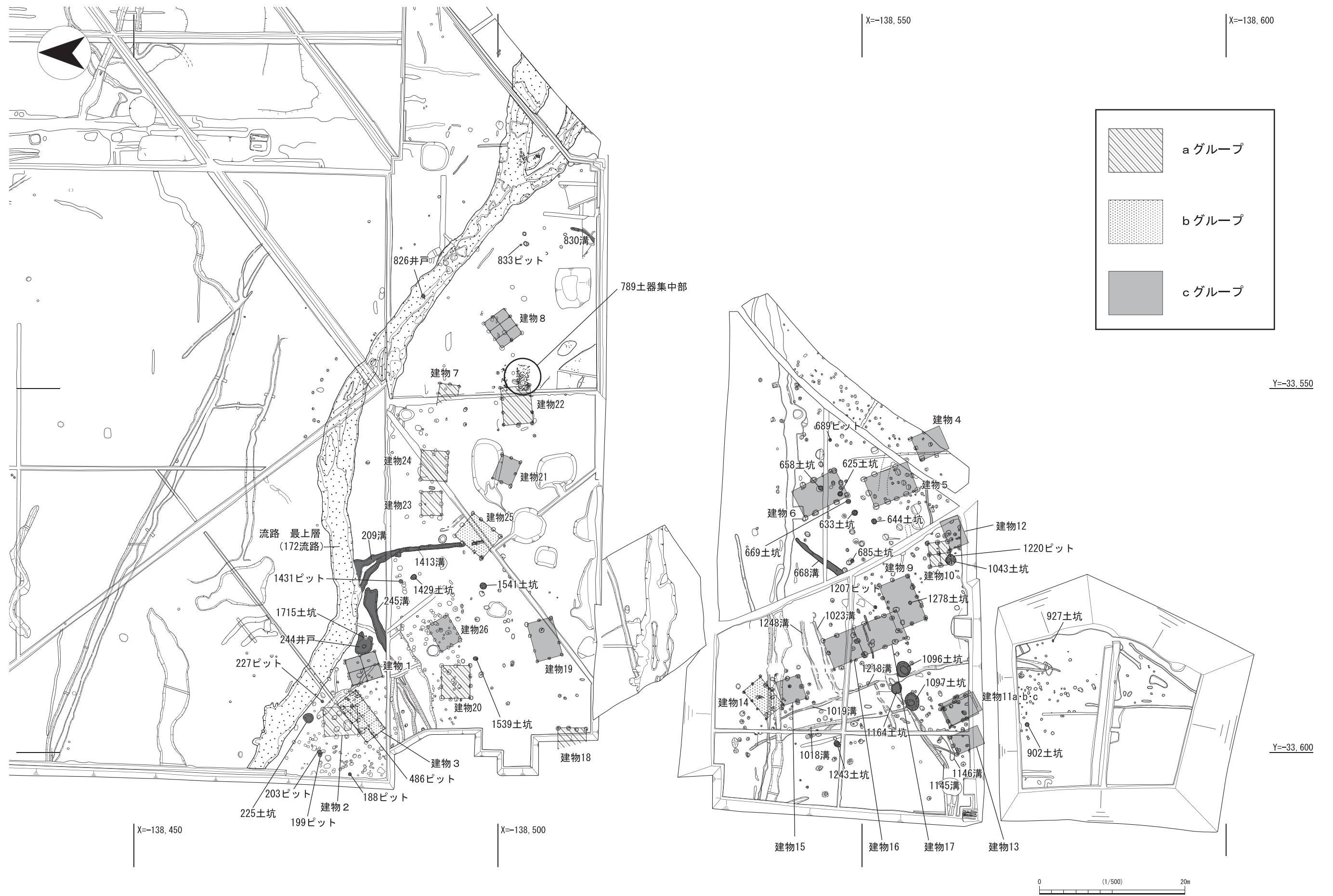


図60 微高地上検出遺構位置図（第4-2面 部分拡大図）

188ピット（図60）からは、6世紀中頃の須恵器 杯（図73-180）が、203ピット（図60）からは、6世紀前半の須恵器 杯（図73-181）が出土している。

278ピット（図23・図61・図版4-5）は、1区の北付近で検出した遺構である。この周辺は、中世段階の水田開発に伴い削平を受け、4層系の地層はほとんど残っておらず、6層上層の氾濫堆積物上面の遺構検出となっている。278ピットは、長軸35cm、短軸27cmの楕円形の平面形をしており、深さは20cmを測る。ピットからは、掘方の底面に底を接して、土師器 椀（図74-210）が口縁部を上にし、正立した状態で出土している。他に出土遺物はなく、埋土の堆積状況からも何らかの意図で土器を地中に納める、いわゆる土器埋納遺構と考えられる。土器の時期から、奈良時代末の遺構と考えられる。

486ピット（図60・図版4-6）は、建物2の西にある柱穴で、掘方内から柱根（図版58-353）が出土している。柱根の上端は腐っているが根元部分の残りは良い。掘方内からの遺物は、土師器細片が出土しているのみで時期の特定は難しい。また、199ピット（図60）からも柱痕跡が出土している。（図版4-7）これらのピットと組み、建物が想定できる柱穴を検出できていないが、柱根が出土していることから、今回確認できた建物以外にもさらに建物がある可能性は大きい。

199ピット（図60）は、1区で検出した遺構で、須恵器が出土している。（図版5-5）

578ピット（図23）は、2区で検出した遺構で、須恵器 杯H蓋（図74-205）が出土している。

次に、土坑について記す。9区で1541土坑、7区で902土坑を検出している。

1541土坑（図60・62、図版11-7）は、建物26の南で検出した遺構である。土坑の平面形は、ほぼ円形で直径約90cm、深さ約45cmを測る。断面形状は、やや底が平らな面を持つが、おおむね碗形を呈する。

埋土は、下部の堆積層に細砂のブロックが見られ、人為的に埋められた様である。土坑内からは、底面から15cmほど上から土器や石が出土している。出土した土器の内、図化したものに須恵器 杯H、杯H蓋、甕（図73-195・196、図74-197・198）があり、bグループに伴う遺構と考えられる。

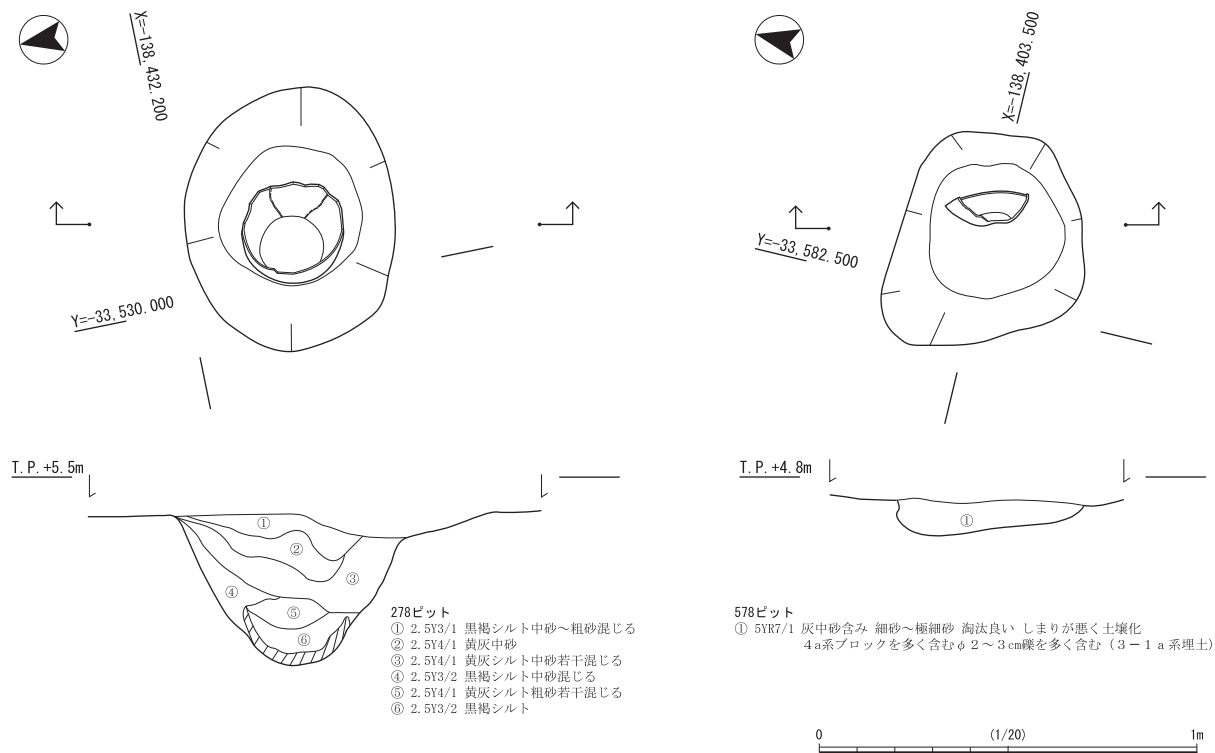


図61 278ピット・578ピット平・断面図

902土坑（図60）は、平面形が楕円形を呈する土坑で、大きさは長軸62cm、短軸56cmを測る。深さは、深い部分で約20cmである。土坑内からは8世紀の須恵器杯Aが1点出土している。（図73-199）

以上が、微高地上で検出した建物群の時期にほぼ相当し、何らかの関連性が考えられる遺構である。古墳時代以前の遺構・遺物（図60）

古墳時代に属する遺構として溝・ピット・土坑・井戸を検出している。井戸を除きこれらの遺構はすべて微高地上で検出している。検出した溝・ピットには830溝、689ピット・1220ピット・1207ピット・1278ピットが、土坑と井戸には、1715土坑・225土坑・625土坑・633土坑・644土坑・658土坑・676土坑・1096土坑・1097土坑・1164土坑・1243土坑・927土坑・1539土坑・1429土坑と826井戸がある。また、弥生時代後期に属する833ピットを検出している。検出した遺構の多くは、古墳時代前期ものが多い。以下、順に記述する。

830溝（図60）からは、甕と高杯脚部（図75-245・246）が出土している。〈5区〉

689ピット（図60）は、建物6の西側で検出した遺構である。ピット内から土師器片と6世紀中頃の須恵器杯（図73-191）が出土している。〈3-2区〉

1220ピット（図60）は、1043土坑と重複関係にあり、1220ピットが1043土坑に先行する遺構である。1220ピットからは、6世紀前半の須恵器杯（図73-183）が、1043土坑からは6世紀中頃の須恵器杯（図73-188）と、古い時期の土師器甕（図75-189・190）が出土している。〈3-2区〉

1207ピット（図60）からは、5世紀代の高杯の杯部（図75-249）が出土している。〈3-2区〉

1278ピット（図60）からは、5世紀代の高杯の杯部（図75-241）が出土している。〈3-2区〉

1431ピット（図60）からは、土師器甕底部片が出土している。（図版11-5）〈9区〉

625土坑（図60・62）は、直径約40cmのほぼ円形の平面形を呈する土坑で、深さは約30cmである。埋土は2層に分層でき、上層は黒褐中砂～粗砂シルト混じりで、下層は、ラミナ構造が見られる中砂～粗砂である。上層からは、5世紀代の高杯（図75-248）や甕の体部が出土している。〈3-1区〉

1715土坑（図60、図版5-6）は、244井戸の東に位置する。掘方は244井戸と重複しているが、1715土坑が244井戸よりも古い。平面形は楕円形で、長軸58cm、短軸49cmである。深さは67cmと深い。埋土は、土器が主に出土している最上層が、中砂混じり細砂シルトで、最下層はラミナの見られる中砂である。土坑の底は湧水層まで達しており、また、最下部の堆積層がラミナ構造を持つ中砂であることから規模は小さいものの井戸の可能性が考えられる。最上層より出土した遺物で図化したものに、土師器甕・高杯（図74-217・218・221・222）がある。いずれも5世紀代と考えられる。〈1区〉

225土坑（図60・62、図版5-1）は、直径が1.3～1.4mの不整円形の平面形の土坑である。深さは26cmを測り、断面形状は浅い皿型を呈する。埋土は大きく4層に分層でき、最上層には土器片が多く含まれる。いずれの層もブロックを含み人為的に埋め戻されたと考えられる。出土した土器に5世紀代と考えられる二重口縁壺、甕、高杯、小型丸底壺（図74-223～227、図75-228）がある。〈1区〉

633土坑（図60、図版6-7）は、直径約55cmのほぼ円形の平面形を呈し、深さは約29cmを測る。埋土は2層に分層でき、下層から5世紀代の高杯（図75-242・243）が出土している。〈3-1区〉

644土坑（図60、図版7-1）は、直径約73cmのほぼ円形の平面形を呈し、深さは約35cmを測る。埋土はシルトブロックが混じる粗砂～中砂で土器片を含んでいる。堆積状況から見て人為的に埋められたようである。埋土内から出土した土器には、5世紀代の甕（図75-235）がある。〈3-1区〉

658土坑（図60・62、図版7-2）は、直径約64cmの平面形がほぼ円形を呈する土坑である。深さ約

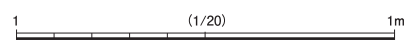
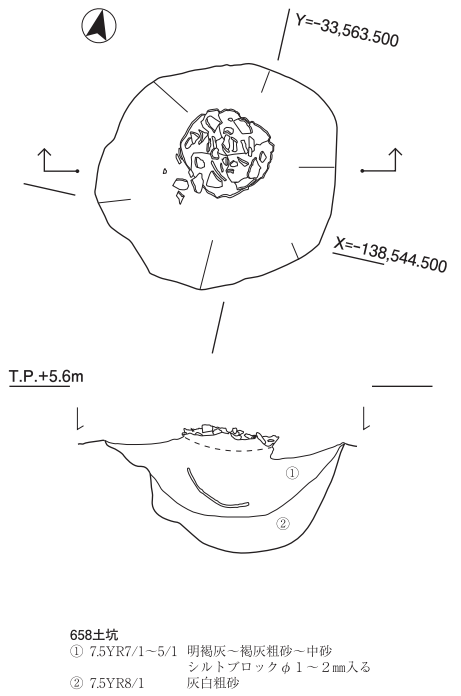
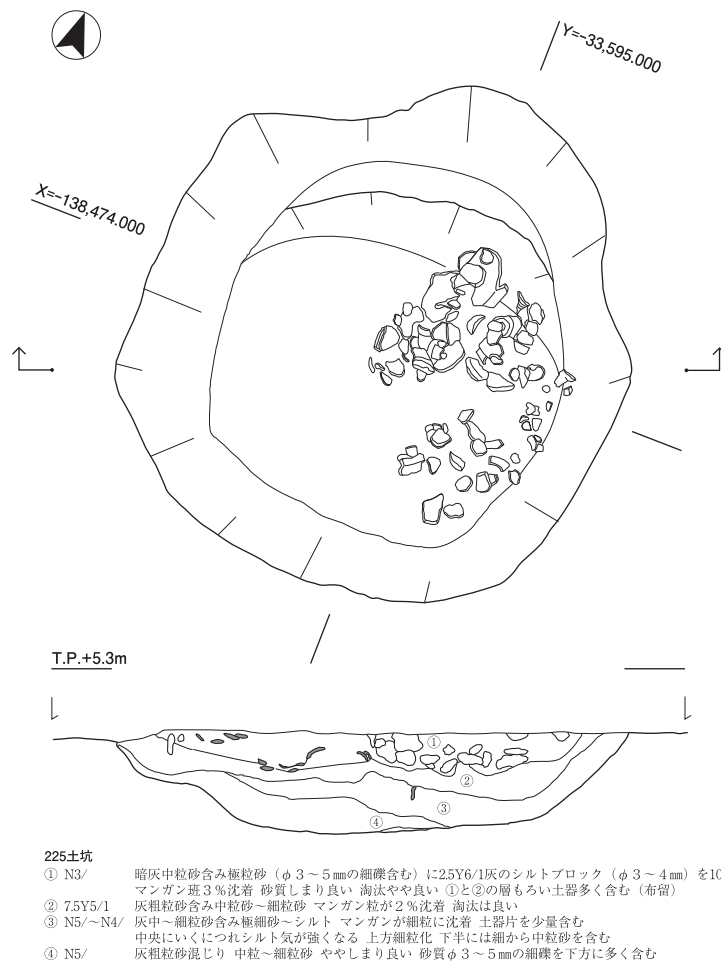
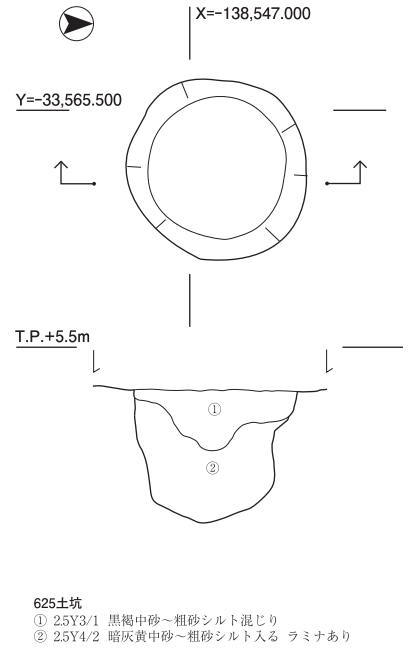
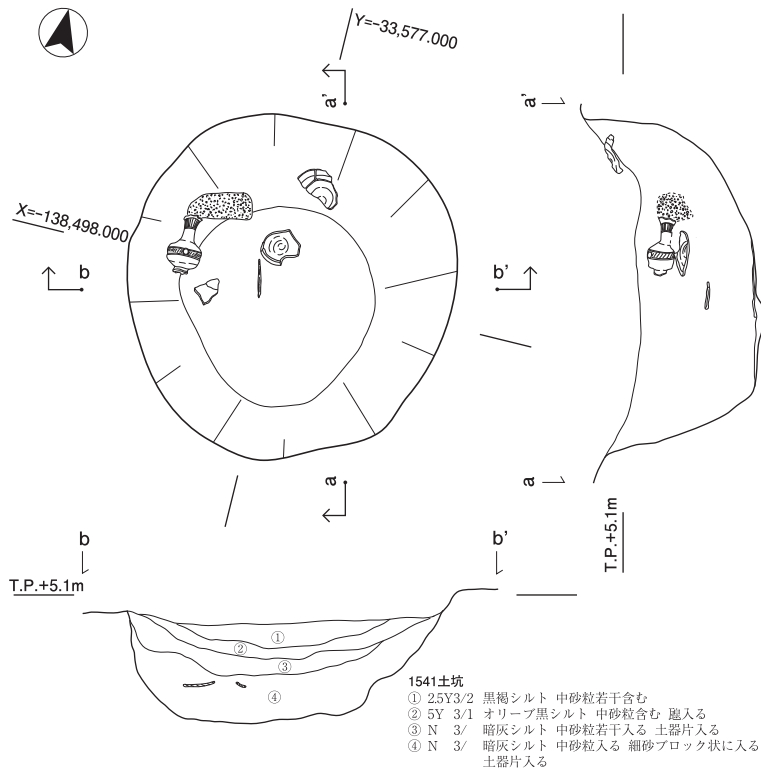


図62 1541土坑・625ピット・225土坑・658土坑平・断面図

32cmで埋土内から甕と高杯（図75-236～238）が出土している。〈3-1区〉

669土坑（図60）は、土師器 甕の他、土師器の細片が出土している。（図版7-4）〈3-1区〉

685土坑（図60）は、他の遺構と重複しているため、掘方の一部は失われているものの、直径44cmで平面形がほぼ円形の土坑に復元できる。深さは約27cmを測る。土坑内からは小型の壺（図76-265）が出土している。〈3-1区〉

1096土坑（図60・64、図版8-2）は、二段掘りを呈する土坑である。上端の形状はほぼ円形で、直径2m前後を測り、底面は長軸約1.3m、短軸90cmの楕円形である。埋土は、二段掘りになっている段より上の部分と下の部分の大きく2層に分層できる。下部は、粒形の粗い物が堆積する時期と、細かなシルトが堆積する時期があることを反映した堆積状況が見られ、一定期間開口していたものと推定できる。

埋土中から、遺物が出土しているが、主に段より上の部分の堆積層からである。図化している遺物に布留式甕がある。（図75-230～234）〈3-2区〉

1097土坑（図60・64、図版8-3）は、楕円形の平面形を呈する土坑で、大きさは長軸2.5m、短軸1.9mを測り、深さは約30cmである。平面の大きさに比べ、深さが浅い感じを受けるが、これは上層からの耕作に伴う攪拌により、削平を受けているためである。埋土を見ると、下層にラミナが見られる中砂～粗砂を主体とする堆積物が見られ、1096土坑と同様に一定期間、開口していた状況が推定できる。埋土内から5世紀代の壺と高杯（図75-239・240）が出土している。〈3-2区〉

1164土坑（図60・64、図版8-5）は、1096土坑・1097土坑の近くで検出されている。平面形は不整形円形で直径は1.3～1.6mを測る。深さは35cm前後を測る。埋土を見ると、1096土坑・1097土坑と同様に下層にラミナ構造を持つ中砂～粗砂を主体とする堆積物が見られ一定期間、開口していた状況が考えられる。土坑より出土した遺物も、1096土坑・1097土坑と同じ時期の甕（図75-244）がある。

この事から、これら3つの土坑は、ほぼ同時期に造られた、同じような性格を持つ土坑と考えられよ

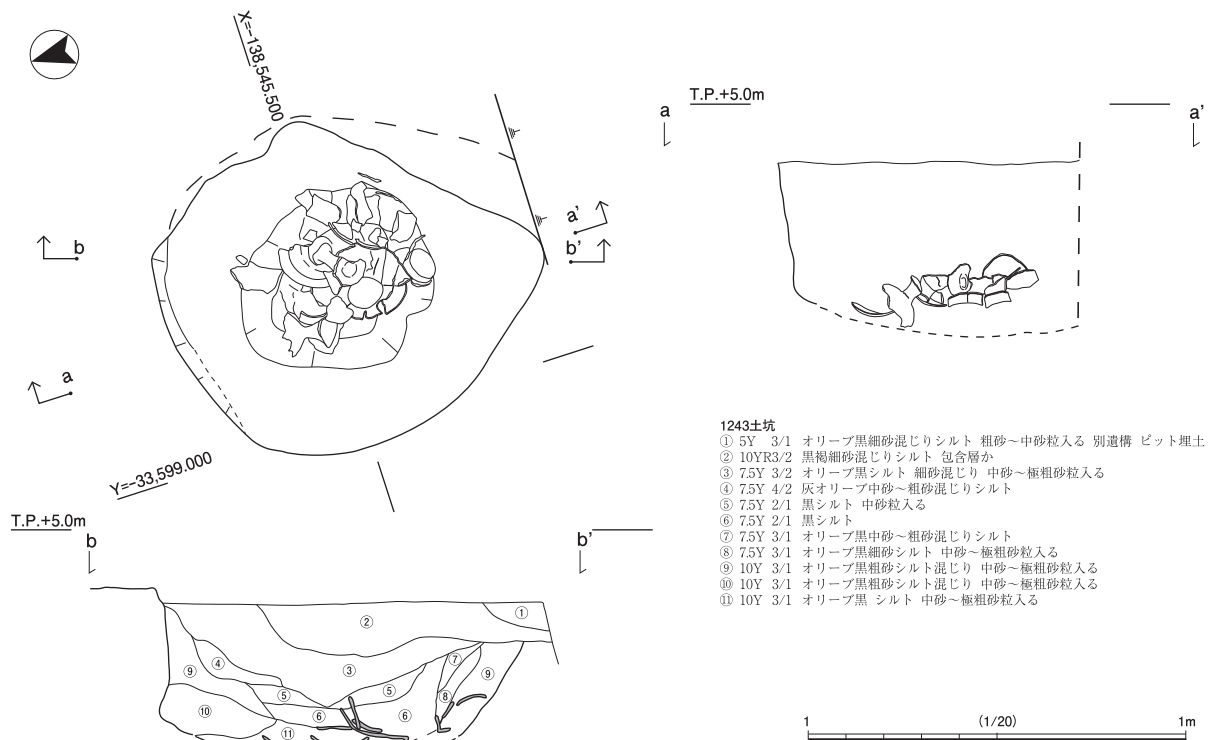
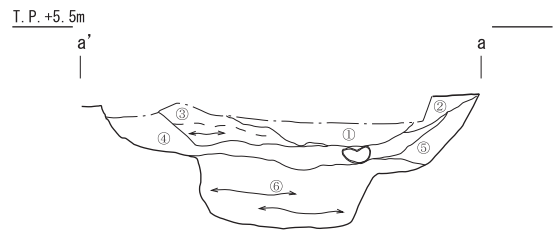
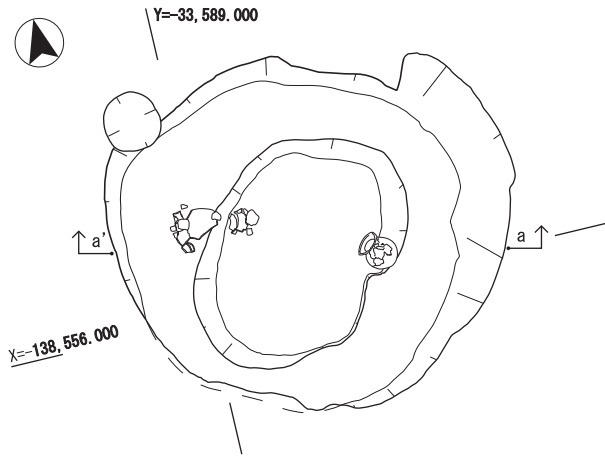
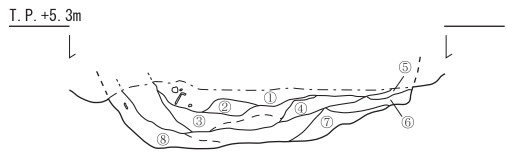
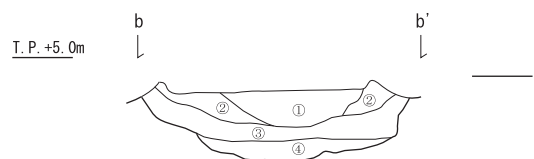
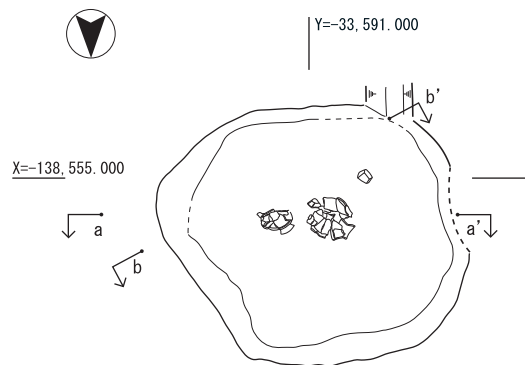
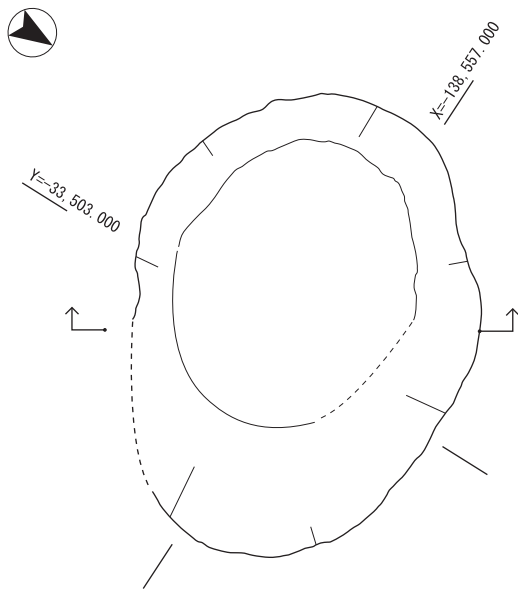
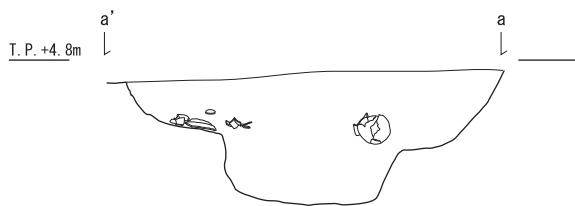


図63 1243土坑



- 1096土坑**
- ① 2.5G3/1~2/1 暗オリーブ灰~黒粘質シルト 中砂~細砂混じる
 - ② 7.5V 3/1~2/1 オリーブ黒~黒中砂~粗砂 シルト混じる
 - ③ 7.5V 7/1~3/1 灰白~オリーブ黒粗砂~中砂 下方に細砂シルト混じる ラミナあり
 - ④ 7.5V 4/1~2/1 灰~黒北側にシルト中砂~粗砂混じる 一部中砂南側に中砂~粗砂 シルト混じる 下方にシルト 土器入る
 - ⑤ N 3/ ~2/ 暗灰~黒中砂~粗砂 シルト混じり
 - ⑥ 7.5V 7/1~6/1 灰白~灰中砂~粗砂 極粗砂 シルトラミナ状に入る 止水



- 1097土坑**
- ① 7.5V4/1 灰シルト 中砂~粗砂 土器片入る
 - ② 7.5V3/1 オリーブ黒シルト 中砂混じる
 - ③ 7.5V6/1~4/1 灰細砂 下方に中砂~粗砂 ラミナあり
 - ④ 7.5V4/1 灰シルト 中砂混じる
 - ⑤ 7.5V5/1 灰中砂
 - ⑥ 7.5V4/1~3/1 灰~オリーブ黒シルト 中砂混じる
 - ⑦ 7.5V5/1~4/1 灰中砂 シルトブロック入る ラミナあり
 - ⑧ 7.5V4/1~2/1 灰~黒中砂~粗砂 シルト混じる 炭化物入る ラミナあり 中砂~粗砂 シルト混じり

- 1164土坑**
- ① 7.5VR3/2 黒褐シルト中砂~極粗砂粒入る
 - ② 7.5VR3/2 黒褐細砂シルト 中砂~極粗砂混じる
 - ③ 7.5VR2/1 黒中砂混じりシルト
 - ④ 7.5VR5/2 灰褐中砂~極粗砂シルト混じる
 - ⑤ 7.5VR7/1 明褐灰中砂~極粗砂 ラミナあり (5 b層)

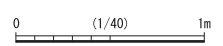


図64 1096土坑・1097土坑・1164土坑

う。〈3-2区〉

1243土坑（図60・63、図版8-4）は、不整円形の平面形で直径は約90cm、深さは約43cmである。埋土の土質や堆積状況から見て人為的に埋め戻されたと考えられる。底付近からは、土器がまとまって出土しており、図化したものに高杯・甕・小型丸底壺（図76-254～261）がある。〈3-2区〉

927土坑（図60、図版10-6）は、遺構上部が現代の攪乱により大きく削平を受け、検出段階で出土した甕の半分がすでに見えている状態であった。土坑の平面形は楕円形で、長軸は83cm、短軸約63cmを測る。深さは約17cmである。埋土は大きく3層に分層でき、上層は黒褐細砂～中砂混じりシルトで極粗砂が若干入る。中層は、暗灰黄～黒褐シルトで炭化物が入り、細砂～中砂が縞状に入るラミナ構造が見られる。下層は、黄灰中砂～極粗砂である。中層には、ラミナ構造が見られることから掘削された後、しばらく開口した状態であったことが考えられる。その後、甕を含む上層が堆積したのであろう。出土した甕は、5世紀の布留式甕（図75-247）である。〈7区〉

1429土坑（図60・66、図版11-4）は、長軸約87cm、短軸約70cmを測る。平面形が不整円形の土坑である。深さは約60cmで、平らな底面を有し、壁面は掘り込まれた地層が氾濫堆積層（5b層）であるためか、底面付近がやや抉られたように外側へ広がっている部分も見られる。埋土は大きく2層に分層しているが、上下層とも土質・色調とも非常に類似しており黒細砂シルト中砂～粗砂で細礫や土器を含み、下層がややシルトを多く含む層である。このことから、非常に短時間に一気に埋められたと考えられる。土坑から出土した甕は2個体あり（図76-267・268）ほぼ完形で出土している他、高杯などの破片も出土している。甕は5世紀代の布留式甕である。〈9区〉

1539土坑（図60、図版11-6）は、柱穴と重複している土坑である。遺構の前後関係は1539土坑→柱

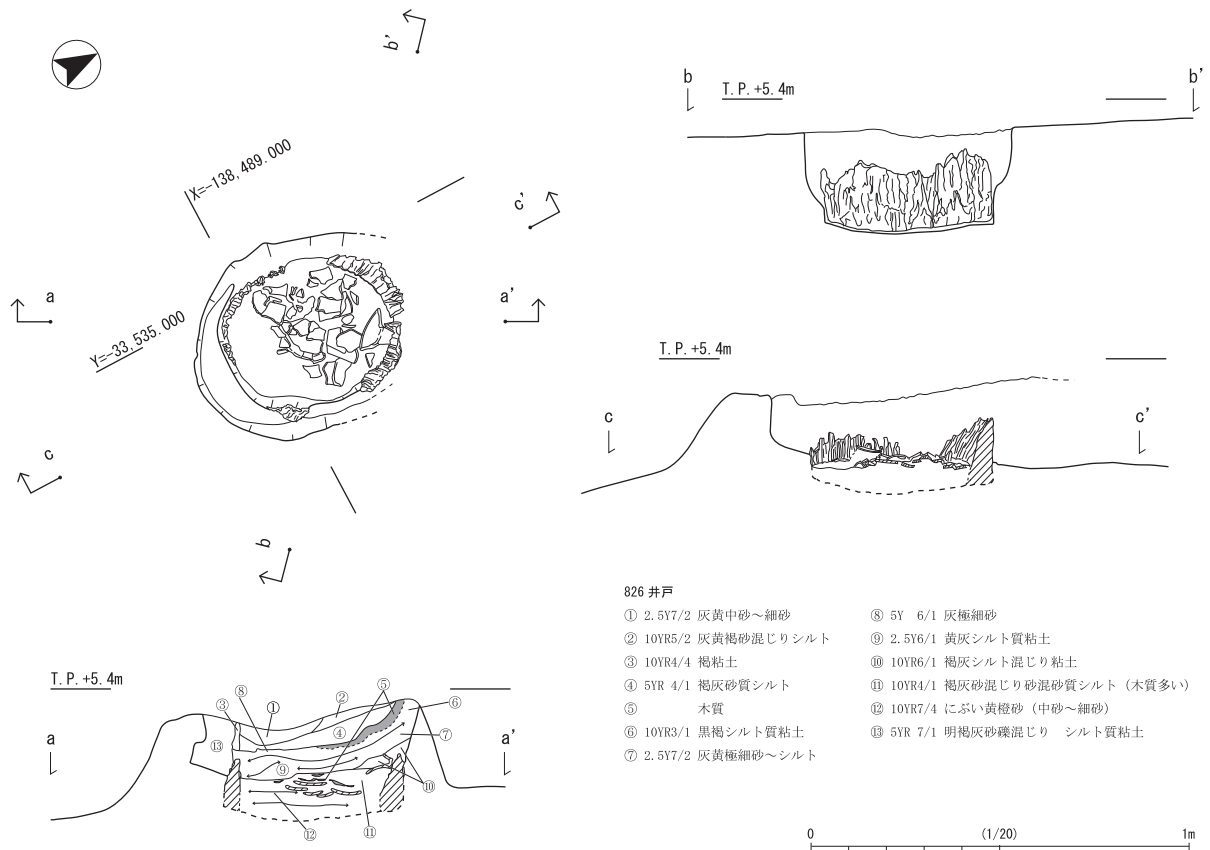


図65 826井戸

穴の順である。土坑の平面形は、ほぼ円形で直径約80cmを測る。深さは約40cmで、断面形は平らな底面から緩やかに外側へ開きながら立ち上がる形状である。埋土は、黒シルト中砂～粗砂粒が入り下部である土坑の底から、割れた状態で布留式甕（図76-264）と甕（図76-262・263）が出土している。埋土の様子から土器が入った後、人為的に埋め戻しているようである。〈9区〉

826井戸（図60・65、図版30-1・2）は、木の幹を半裁して中を削り抜き、再びそれを合わせたものを井戸枠として利用した井戸である。井戸枠は、検出面から8cmほど掘り下げて検出している。井戸枠は、全体に依存状態が悪く加工痕跡などは観察できなかつた。また、土圧や木自身の歪みなどから、平面形も楕円にゆがんでいる。その中でも比較的依存状態の良い下端部で、外径を測ると約44～48cm、内径は37～40cmで、厚みは実長で5cm前後を測る。井戸枠には半裁時の切込みが存在するが、遺存状態の悪さから、片側しか観察できなかつた。井戸枠の残存高は依存状態の良い部分で約19cmを測る。

掘方の直径は約55cm、井戸の深さは、約24cmで、井戸底は湧水層である縄文時代後期相当の氾濫堆積層に達している。井戸枠内の埋土は、大きく3層に分かれ、上層は粗い砂混じりシルト、中層はラミナ構造が見られる極細砂～シルト、下層はラミナ構造が見られる細砂混じりシルトで木質を多く含む土器が出土している。おそらく、下層は機能時の堆積で、中・上層は廃棄後の堆積ではないかと考えられる。出土した土器は、庄内式末から布留式初頭段階と考えられる高杯と外面に荒い叩きのある壺（図76-251～253）である。この遺物から、井戸は当該期に属する遺構と考えられる。

また、この826井戸は、172流路の下部である794流路・796流路を完掘して、流路内に中州状に残った部分で検出しており、このことは826井戸が造られ利用されていた時期には、流路が存在していなかったことを示唆するものである。〈5区〉

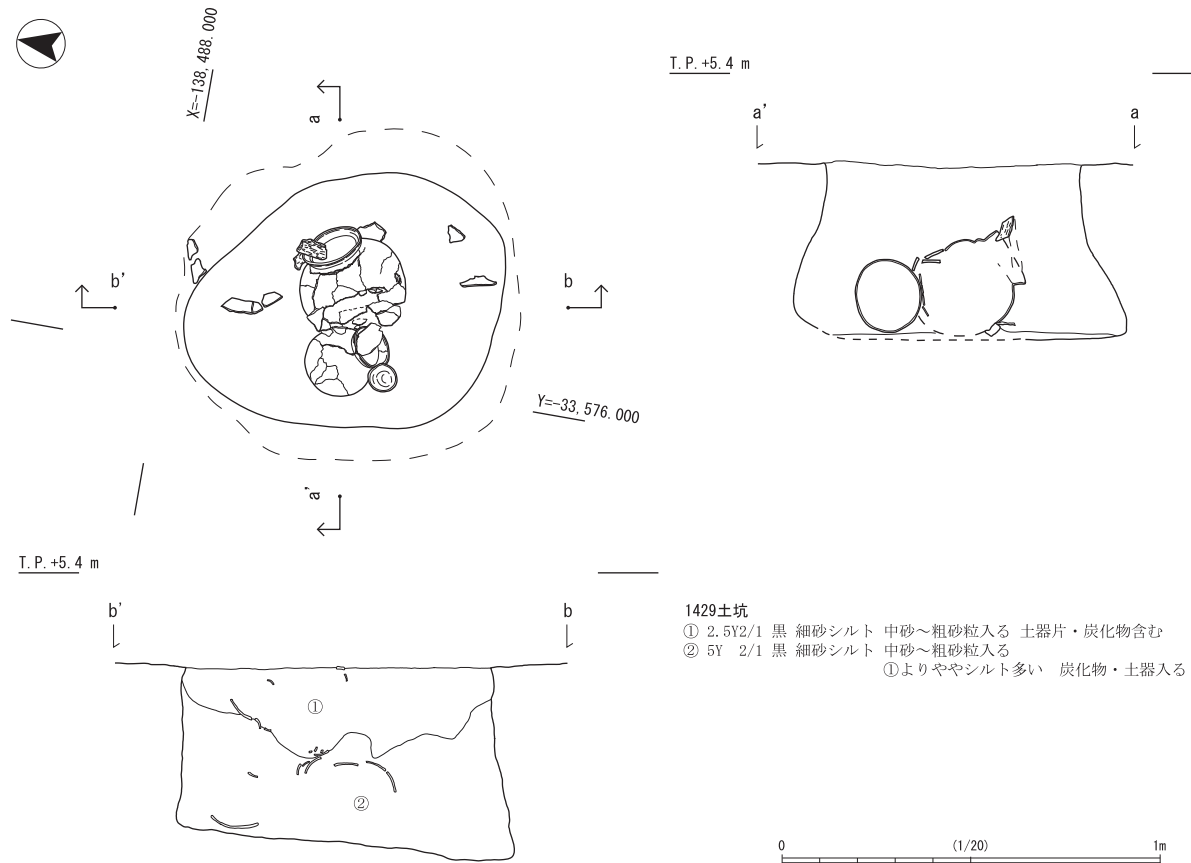


図66 1429土坑

833ピット（図60）からは、弥生時代後期の甕の底部（図75-250）が出土している。〈5区〉

この他、5区で土師器・須恵器の細片がまとまって出土した部分があり、789土器集中部（図60・図版9-7）としている。ここからは、須恵器 杯蓋（図74-208）などが出土している。

4-2 a層出土遺物

4-2 a層から出土した遺物の内、図化したものに、弥生時代後期から奈良時代の図67-48~56・58~61、図68-62~71・73~85がある。これ以外にも、主に縄文時代後期の土器片や、サヌカイト製の石鏃（図104-329・332・333・339・343）が出土している。中でも図68-82の耳環は、古墳から出土する遺物であることから、近くに古墳の存在が想定できる。これは、流路内から出土している石見形盾型埴輪や剣型埴輪が出土していることから言えよう。なお、耳環にはわずかではあるが、鍍金の痕跡が見られた。また、古墳時代前期のナスビ形木製品（図79-279）は、側溝掘削中に出土したものである。

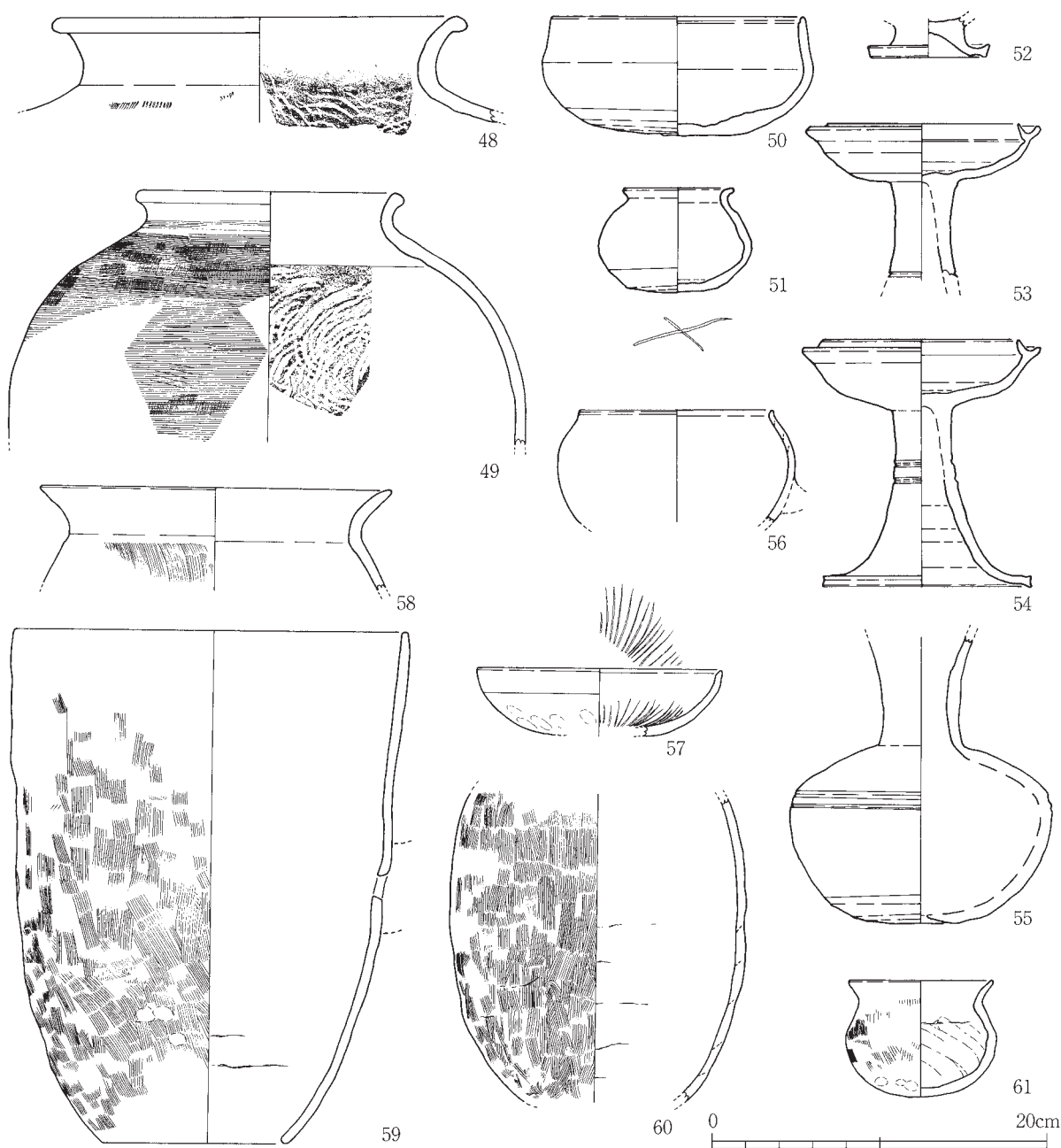


図67 4-2 a層出土遺物（1）

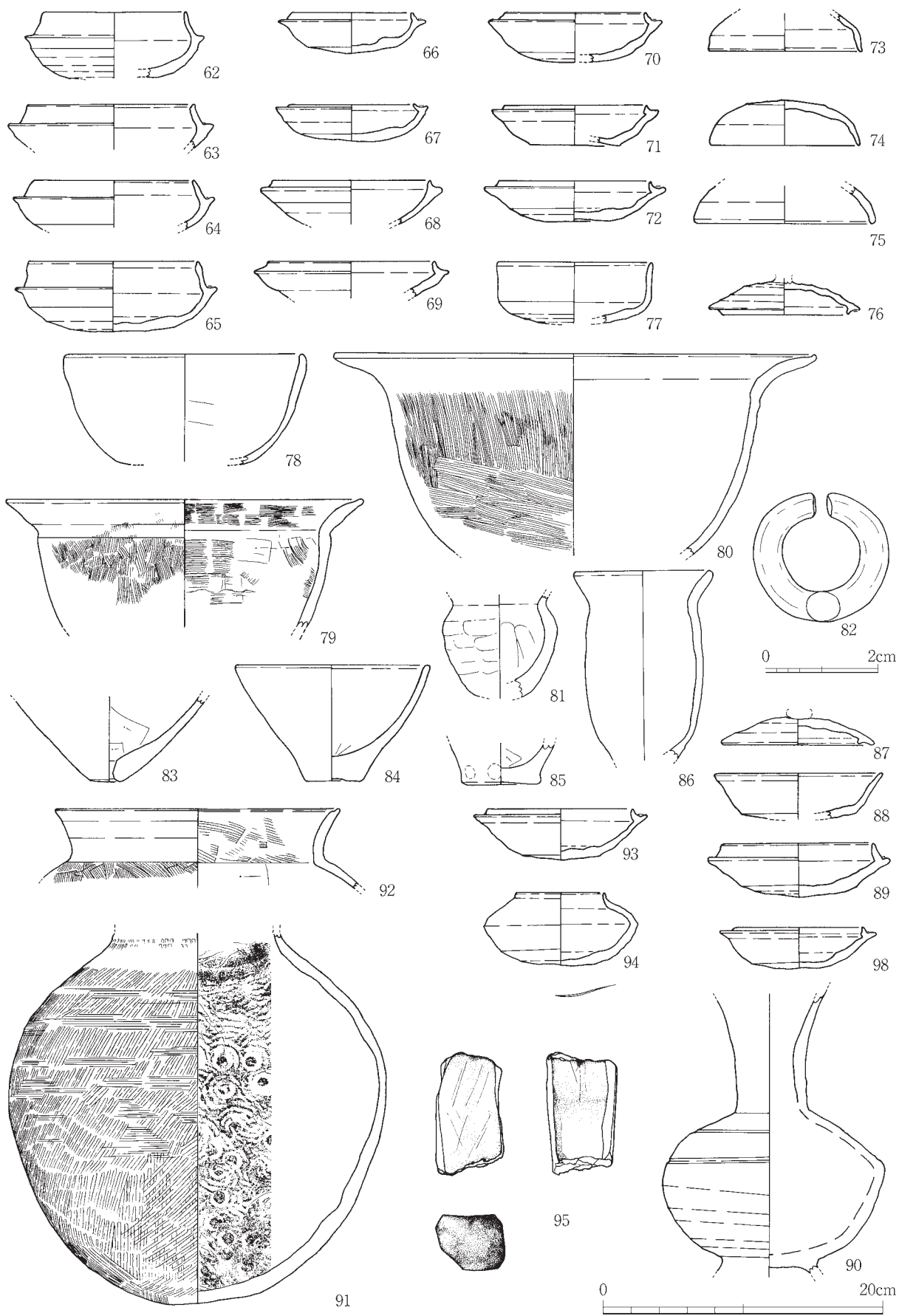


图68 4-2 a層出土遺物 (2)·第4-2面遺構出土遺物 (1)

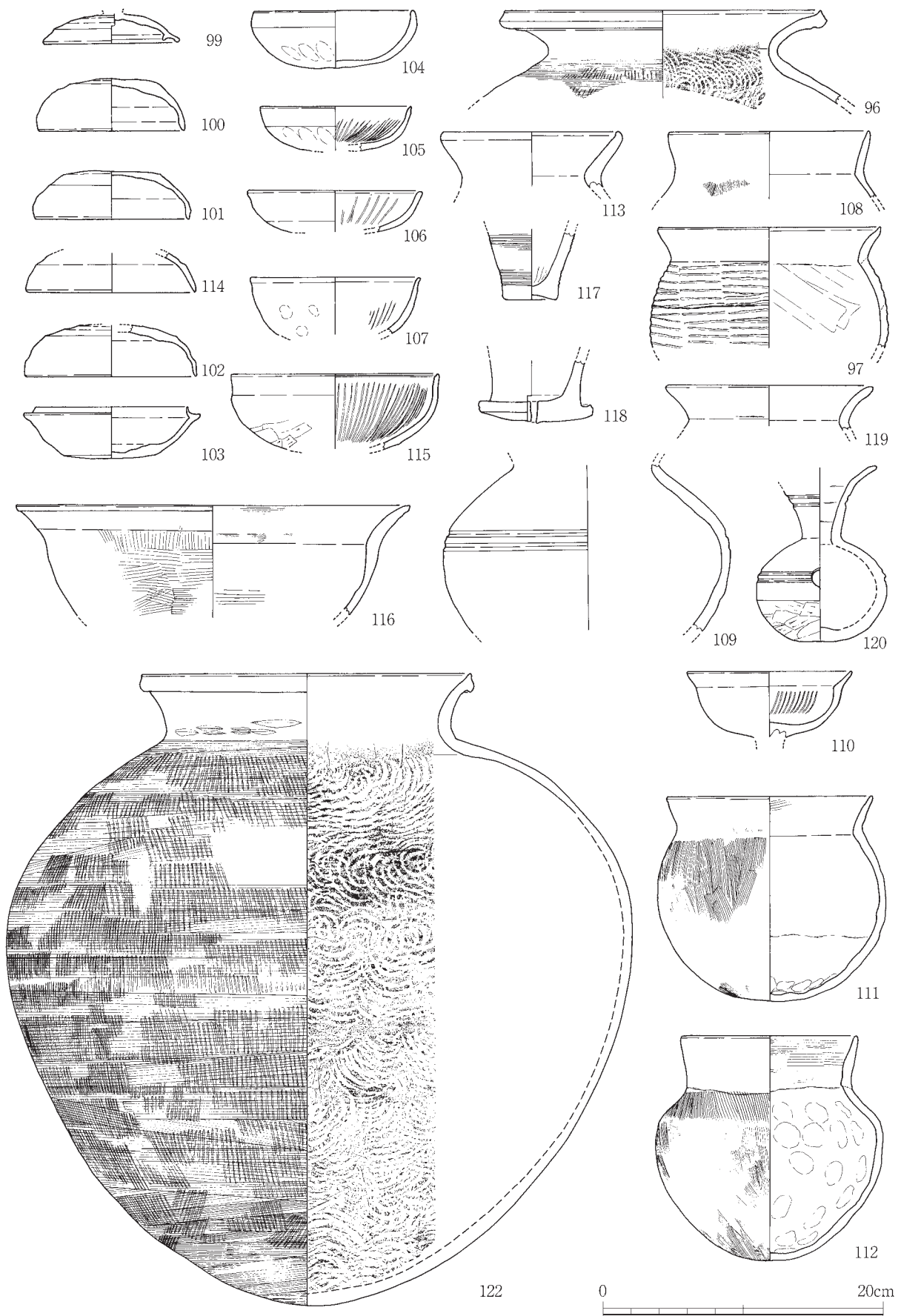


图69 第4-2面遺構出土遺物（2）

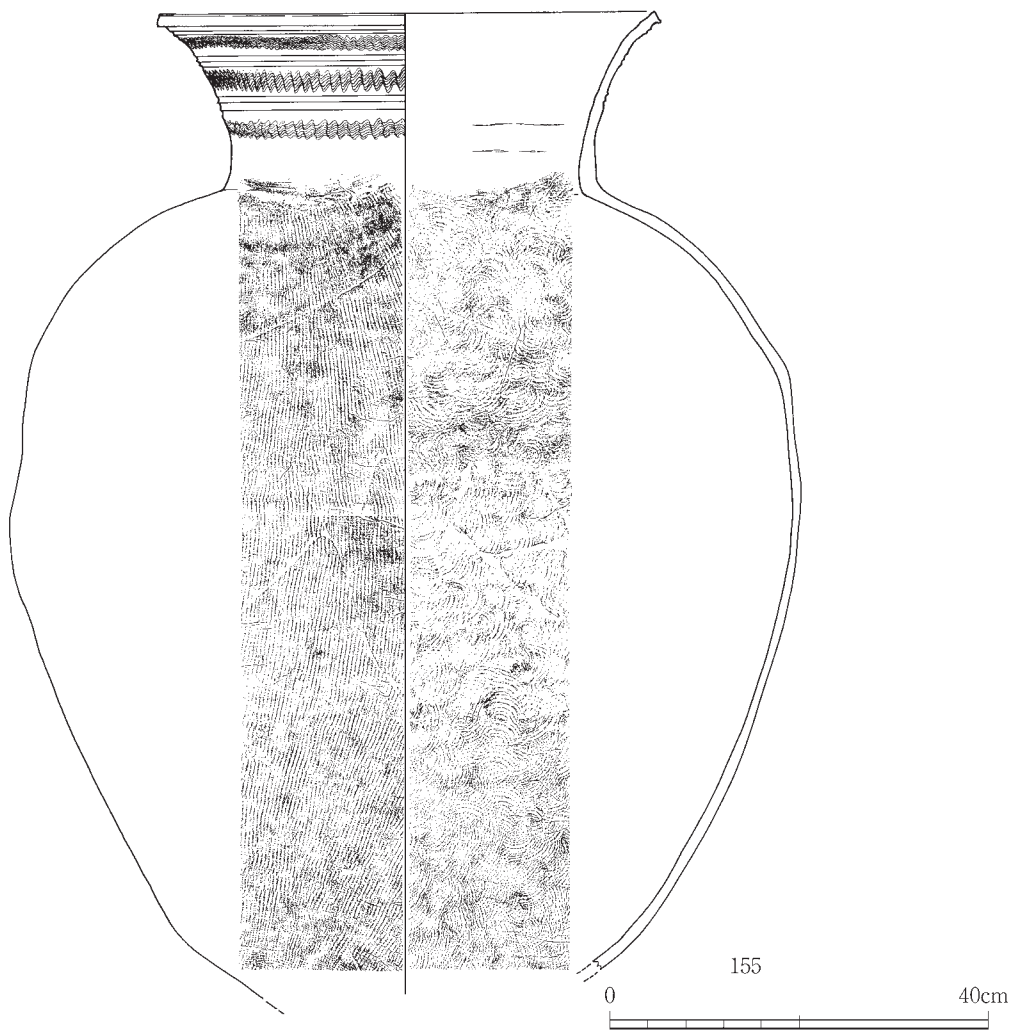
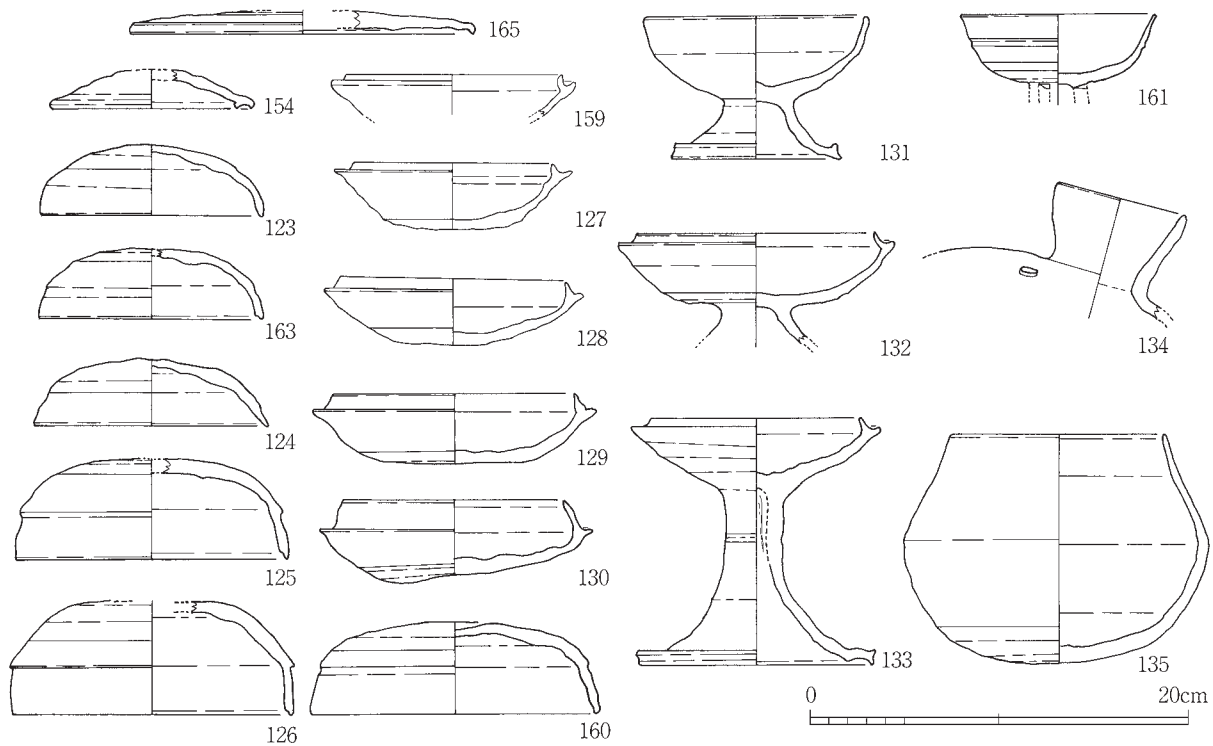


图70 第4-2面遺構出土遺物 (3)

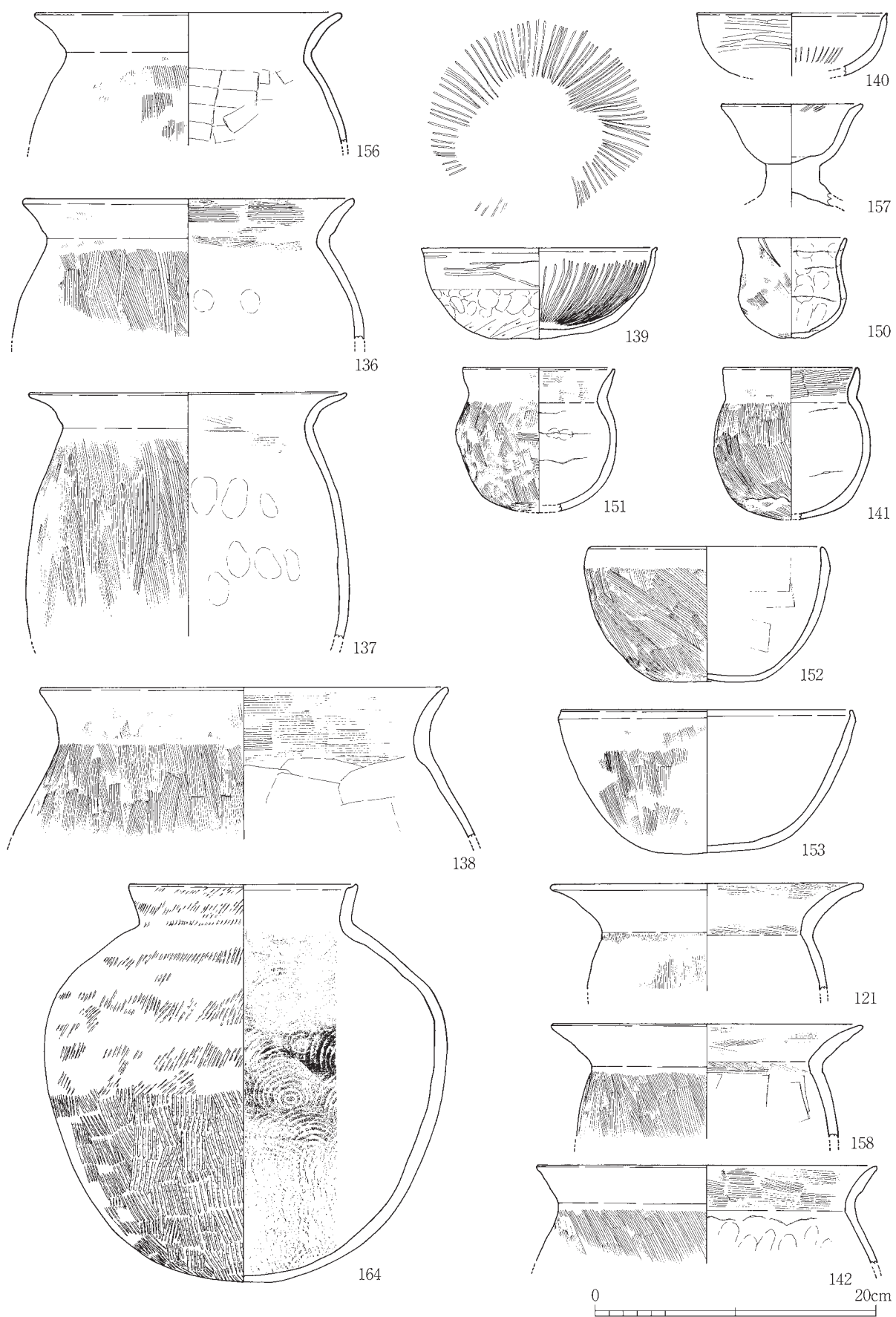


图71 第4-2面遺構出土遺物(4)

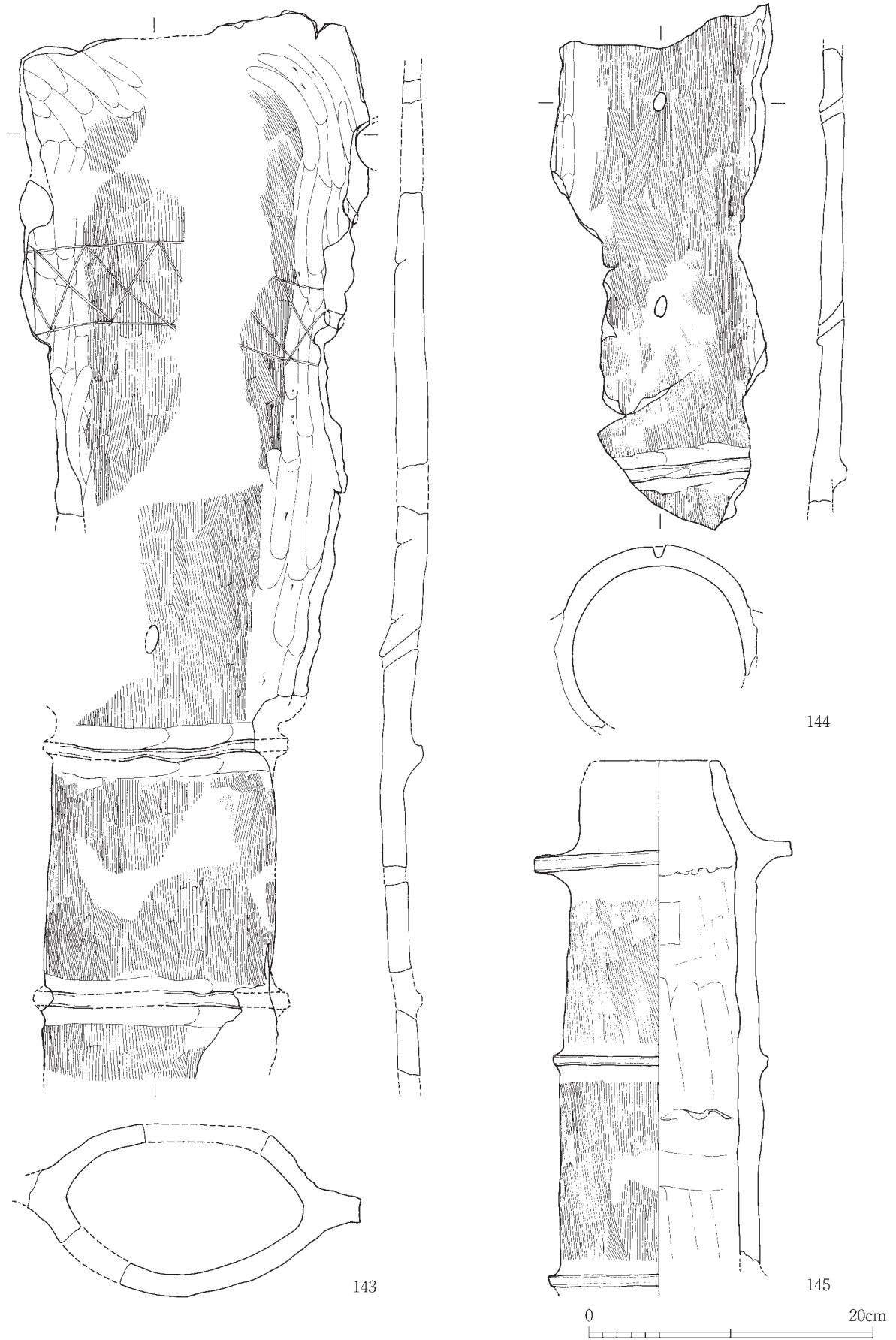


图72 第4-2面遺構出土遺物（5）

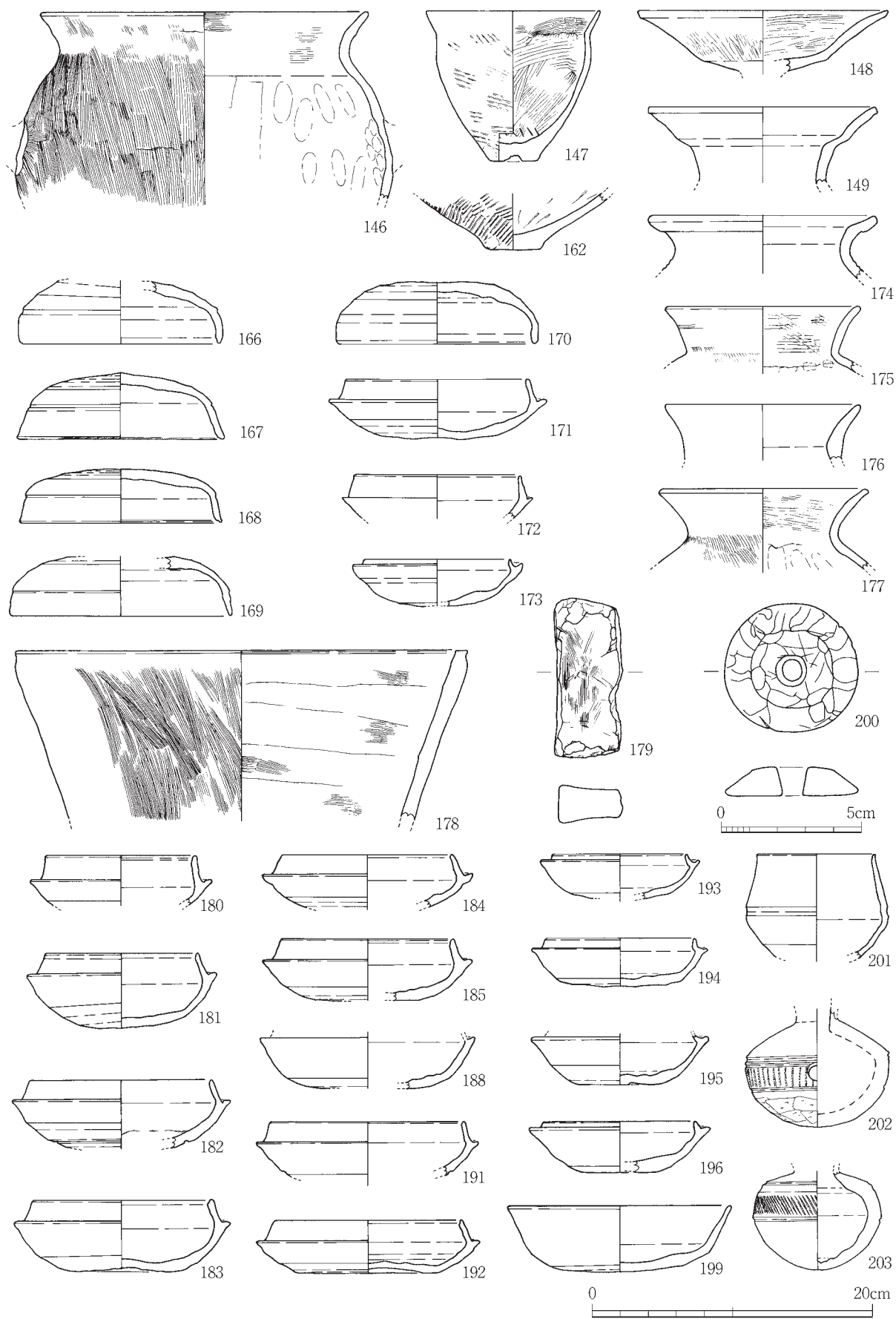


图73 第4-2面遺構出土遺物(6)

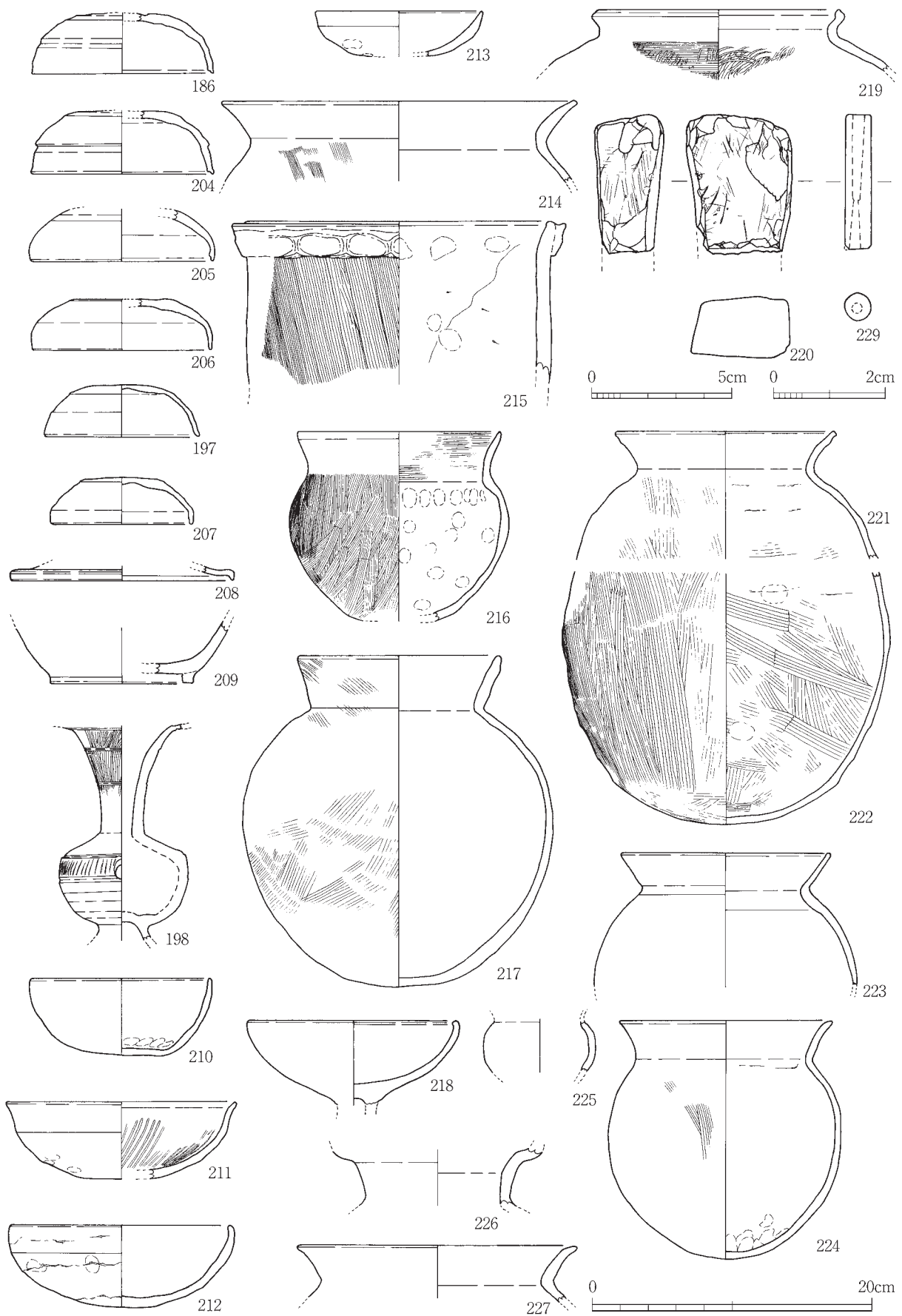


图74 第4-2面遺構出土遺物 (7)

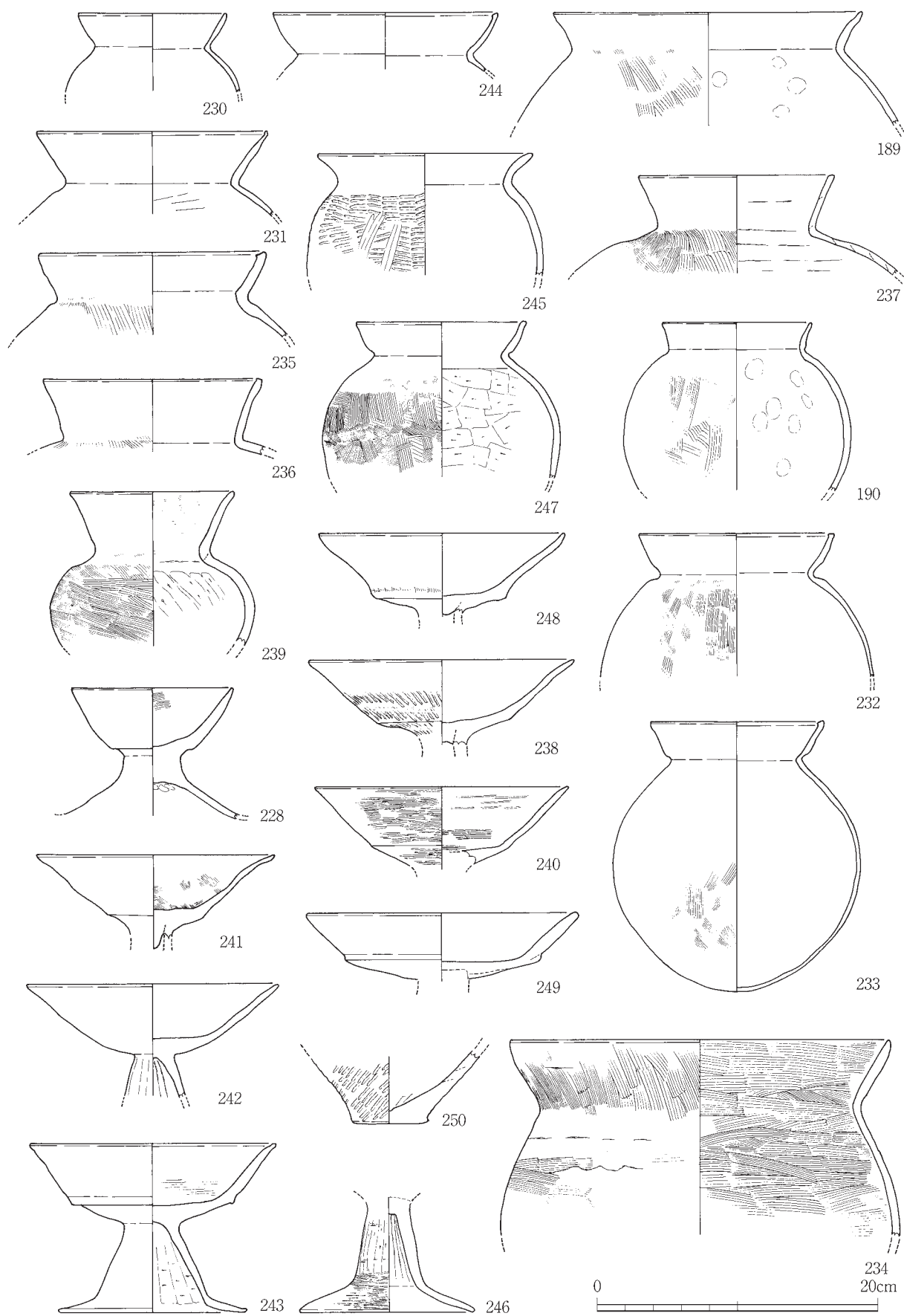


图75 第4-2面遺構出土遺物 (8)

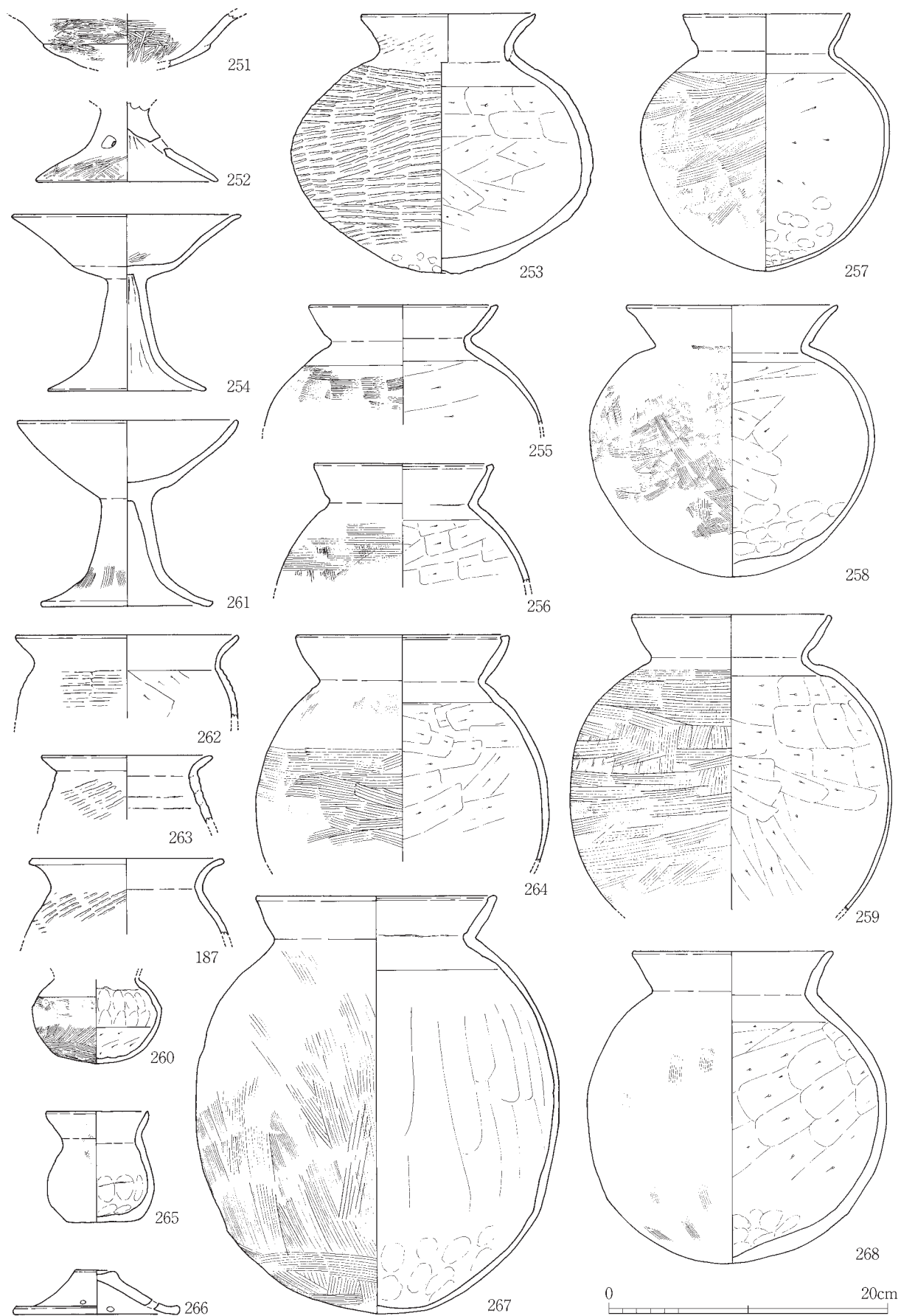


图76 第4-2面遺構出土遺物 (9)

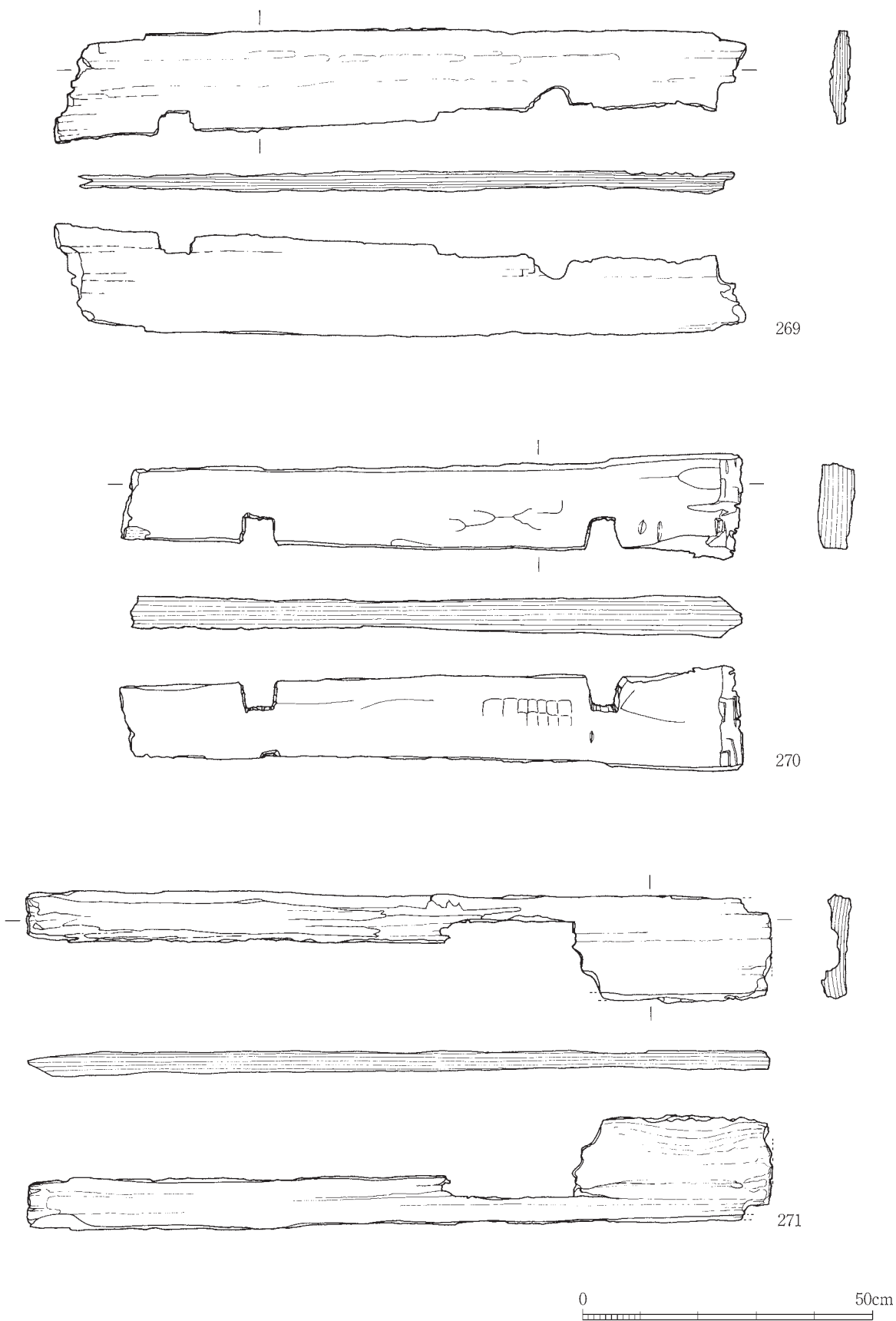


图77 第4-2面遺構出土遺物 (10)

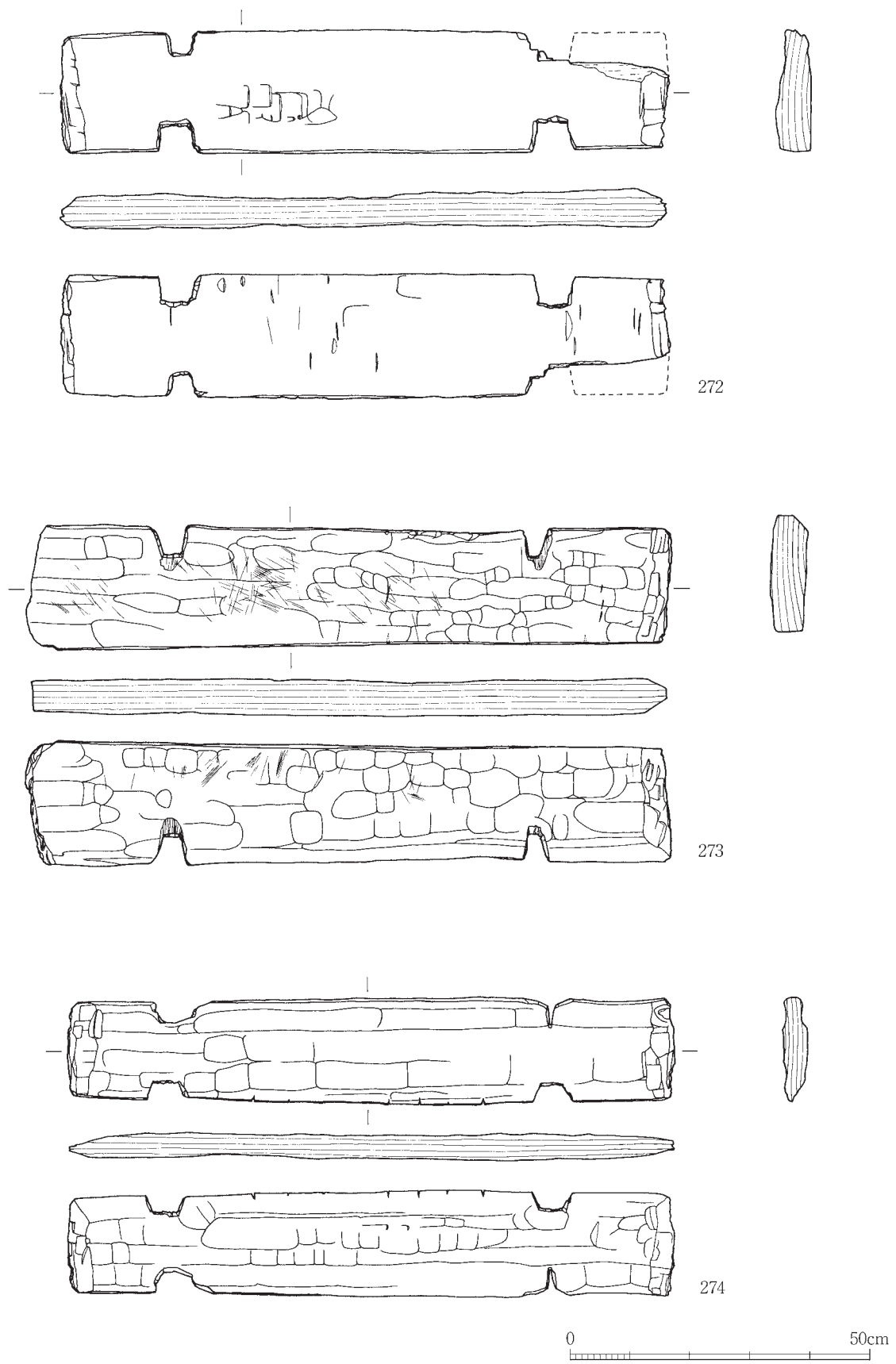


图78 第4-2面遺構出土遺物 (11)

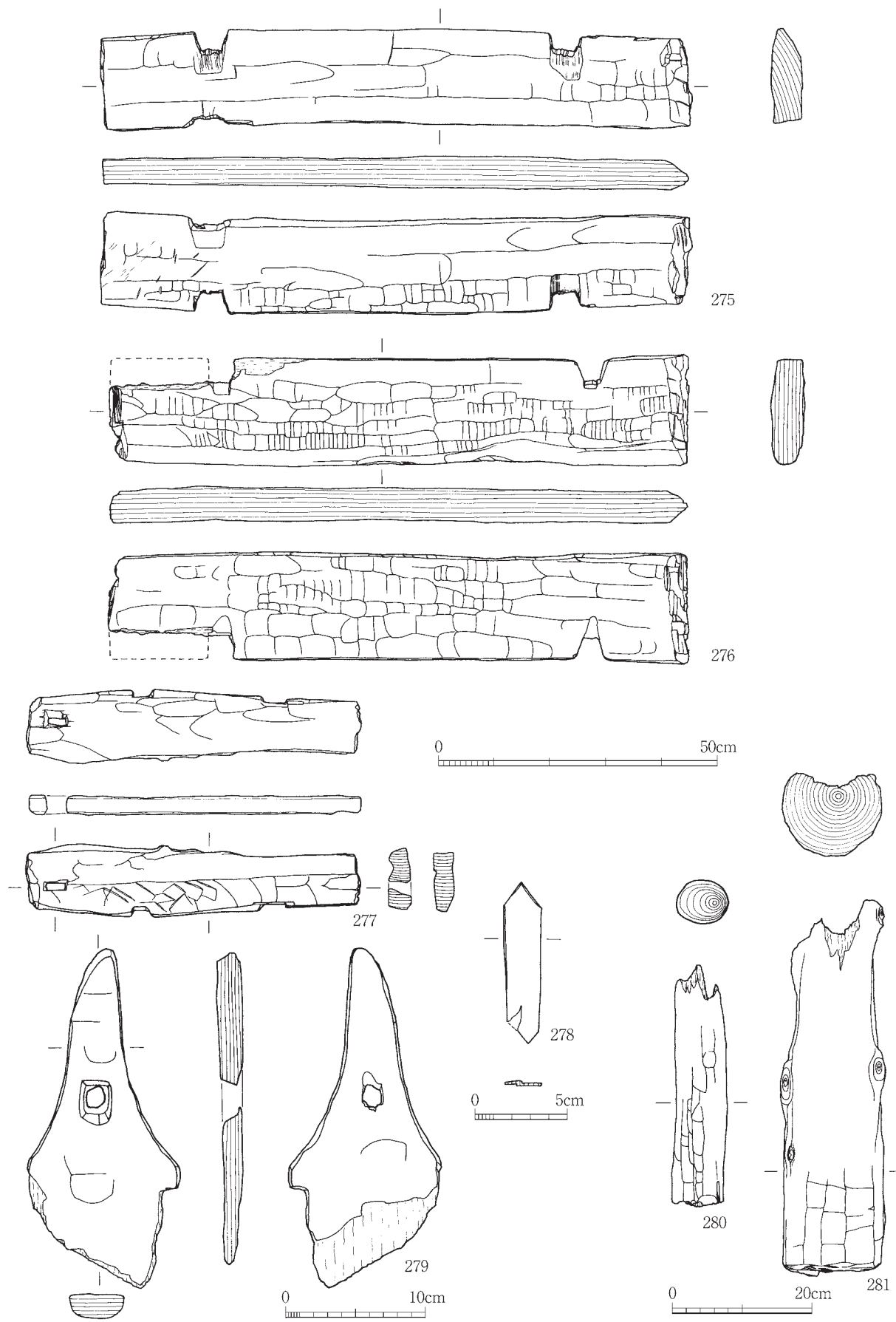


图79 第4-2面遺構出土遺物 (12)

第9節 第4-3面の遺構と遺物 (図81、図版27-1・2)

第4-3面は、4-2 a層を除去して検出した遺構面で、土壌層である4-3 a層を基盤層とする。

調査地の大部分では、上層の4-2 a層の土壌化に伴い失われており、特に調査区の東半部や微高地上など地形的に高い部分で顕著である。このため断面観察で層を認識していても、面的な調査ができなかった調査区もある。ここでは、比較的良好な状態で4-3 a層が遺存している1区を中心に、検出した遺構について記述する。

1区で検出した第4-3面では、流路を検出しており、主なものに339流路、380流路、352流路、384流路、360流路がある。

339流路 (図81・82) は、中世以降の耕作に伴う攪拌により大きく3 a・4 a・5 a層系が削平された部分で検出したものである。このため、第4-3面で検出したものであるが、帰属時期が遡る可能性がある。流路の幅は2m前後で、深さは30cm前後を測る。流路は、基本的に上方細粒化が見られる砂礫で埋没しており、また、下刻と埋没が繰り返された過程が流路断面からうかがえる。遺物は出土していない。

380流路 (図81) は、同位置にある下層流路の、最終埋没層である褐灰粗砂から中砂混じりのシルトブロックが混じる、灰黄褐シルト細砂混じり層を掘り下げた流路である。幅は2.3~4.2m、深さ10cm前後である。埋土内からは時期不明の土器片が4点出土している。

352流路 (図80・81、図版27-4~6) は、東端で幅1.8m前後、深さ約6cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。流路底の標高は約5.3mである。流路は、調査区中央付近で384流路と交わった後、西へ約16m延びて途絶える。途絶える付近での流路幅は約50cm、深さは約4cmで、底の標高は約4.7mを測る。また、352流路は、二段掘りのような断面形状を呈する部分が見られ、この部分での埋土は、3層に分層できる。上層は黒シルト中砂混じりに暗褐シルト中砂若干混じるブロックが混じる、中層は中砂から細砂シルト混じり、下層は黒褐層粗砂含む細砂から極細砂である。調査時には、下層部分を第4-4面帰属の375流路としていたが検討の結果、ここで改めて352流路に内包される遺構とする。溝内からは時期不明の土器が出土している。

384流路 (図81) は、調査区東端から南西方向へ延び、その後北西へ大きく屈曲し352流路と交わったあと、いくつかに分かれながら調査区内で収束する流路である。規模は東端で幅約1m、深さ約26cmを測り、断面形は椀形を呈する。流路が、収束する付近では幅約50cm、深さ約11cmである。東端での流路底の標高は約5.29m、西端では約4.72mを測る。本遺構面の時期は、出土遺物が少ないため特定しがたいが、層序から考えるとおそらく弥生時代に属すると考えられる。

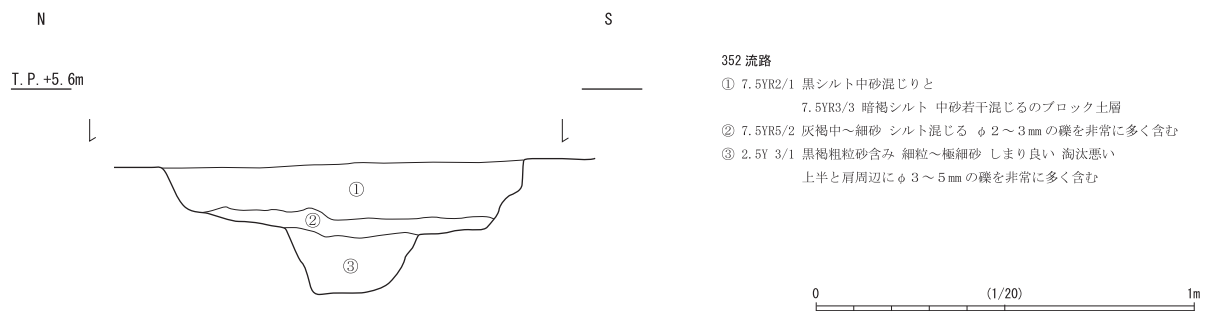


図80 352流路

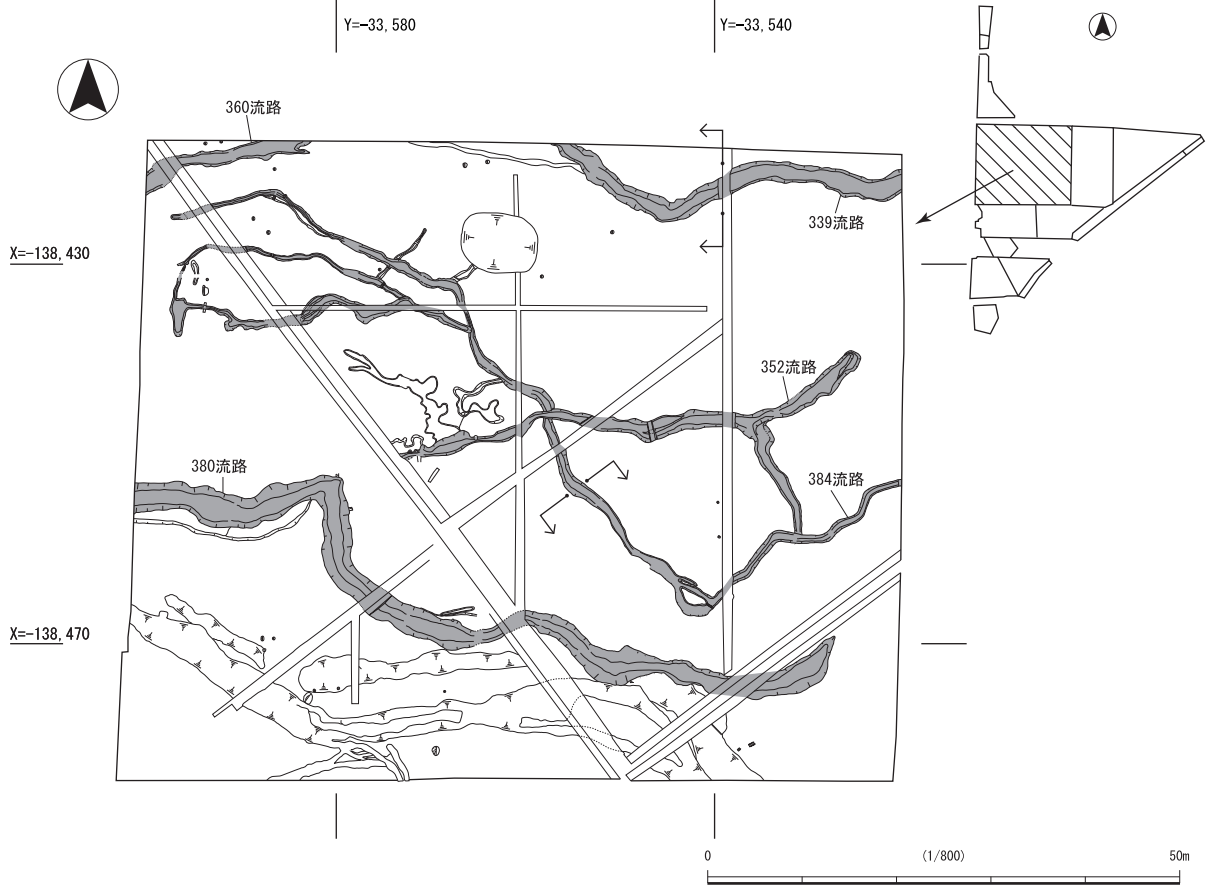
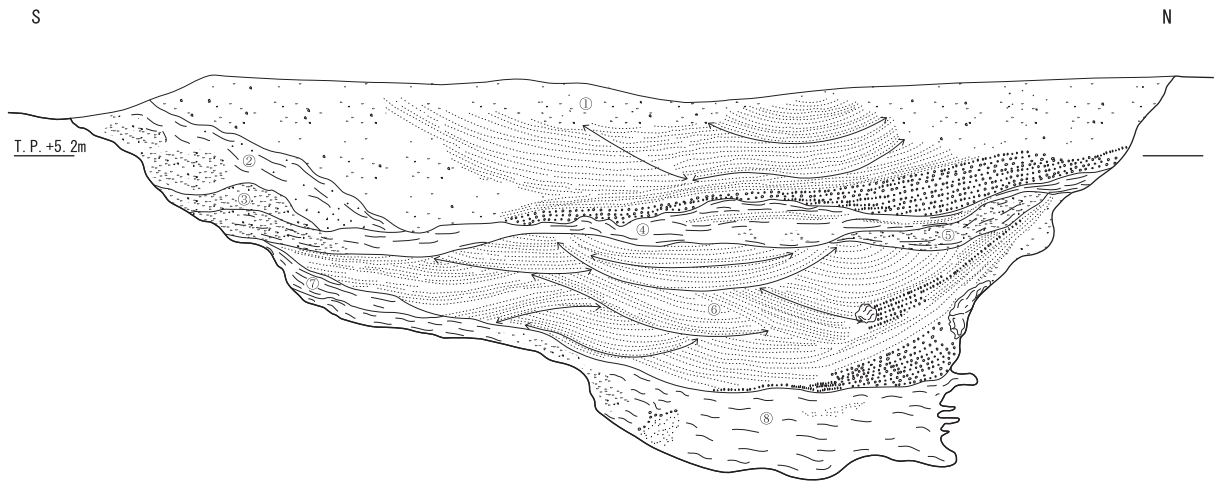


図81 第4-3面



- ① 10YR 4/3 にぶい黄褐 粗砂含み中砂 上部土壌化 下半にMn 20%沈着 しまり非常に悪く淘汰良い 上方細粒化 ラミナ顕著には認められず
- ② 2.5Y 6/1 黄灰 粗砂含み中砂～細砂 しまり良い 粗砂含み中砂～極細砂をブロック状に20%含む 上方は①の水流の影響か シルトに近く細粒化
- ③ 2.5Y 4/1 黄灰 中砂～細砂 しまりやや良い砂質 淘汰良い 下半シルト (リバースグレディング)
- ④ 2.5Y 6/1 黄灰 細砂含みシルト しまり良い ラミナ顕著 マンガン縦位に7%沈着
- ⑤ N3 / 暗灰 極細砂含み中砂～細砂 下半一部シルト (リバースグレディング) φ 5mm 以上の礫を少量含む
- ⑥ 5Y 7/1 灰白 粗砂含み中砂 (一部シルト含む) しまりやや悪い ラミナ顕著 上方やや細粒化傾向に有 ラミナは細砂～中砂とシルトの互層
- ⑦ N 4/ 灰 粗砂含み中砂 一部シルトを下半に含む (リバースグレディング) 上方に逆級化
- ⑧ 2.5Y 3/1 黒褐 粗砂含みシルト しまり良い 淘汰良いがブロック状に粗砂～中砂含み細砂～極細砂に起源する砂層混入 なお北側は攻撃面に相当するため侵食を強く受ける

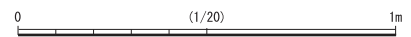


図82 339流路

第10節 第4-4面の遺構と遺物（図84、図版27-3、図版28-1・2・4～6、図版29-1）

第4-4面は、4-3 a層を除去して検出した遺構面で、4-4 a層を基盤層とする。層上面は上層の土壌化に伴い失われている。また微高地部分と4区では、上層からの影響が大きく地層自体が失われていることと、調査時に認識できなかったこともあり遺構面の検出は行っていない。ちなみにこれらの部分では、4-2 a層を除去すると5 a層もしくは5 b層となる。なお、これらの層の上面で検出した遺構の内、遺構の連続性や埋土などから、明らかに第4-4面に帰属する遺構については、以下そのむねを記述し、ここで述べる。

本遺構面は、上層上面と同じく、東から西へ傾斜する地形であり、かつ下層に堆積している縄文時代後期に考えられる氾濫堆積物が形成した微高地を大きく反映する。このため、微高地より北側の低い部分で流路を多数検出しており、これらの流路は侵食と堆積を繰り返し、蛇行しながら西方向へ延びる。

検出した主な流路に850流路・849流路・847流路（1361流路）・848流路・846流路（409流路）・431流路・408流路・603流路・846流路（409流路）と431流路間を網の目のように広がるやや幅、深さとも規模の小さい流路がある。

850流路（図84）は、幅1.2m前後、深さは20cm前後を測る。また、流路底は東端で約6.8m、847流路とつながる部分では約6.33mを測る。埋土は上層が、灰褐極粗砂から中砂混じりシルトで、ラミナは顕著に見られない。下層は、細砂でラミナが明瞭に観察できる。流路内から、遺物は出土していない。

849流路（図84）も、調査地東の6区で検出した比較的規模の小さな流路で、幅50cm前後、深さは10cm前後である。埋土は、黒褐シルトで中砂が多く混じる。ラミナが観察できないことから、849流路は一時的な流れで下刻された後凹みとなり、徐々に堆積と土壌化が進行しながら埋没したと考えられる。流路内から、遺物は出土していない。

847流路（1361流路）（図83・84）は、6区から8区にかけて検出した流路で、大きく南東から北西へ蛇行しながら延びる流路である。東南端で幅5m前後、深さ1.3m前後。北東端では幅3m前後、深さ1.2m前後を測る。流路底の標高は、南端で約5.3m、北端で約4.69mである。流路の埋土上半は、上方粗粒化が見られる灰黄褐極粗砂から細砂が堆積しており、その最上部はやや土壌化している。埋土下部には、シルトブロックが多く入る中砂から粗砂が堆積している。このシルトブロックは、断面位置より上流部分で流路内埋土などが侵食され、再堆積したものと考えられる。

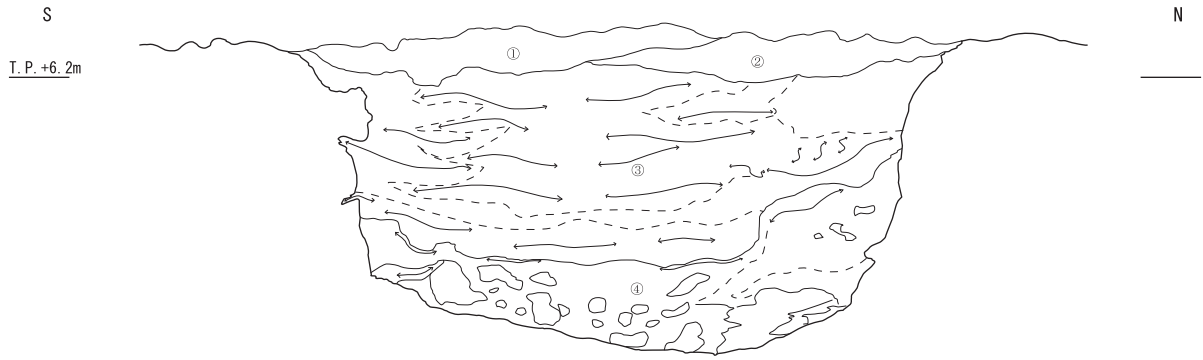
埋土内からは、口縁部に凸帯の付いた縄文時代中期の深鉢片（図版59-361）が出土しているが、この遺物は、流路が下層堆積物を、侵食したことによって混入したものであろう。

なお、8区で検出した847流路の延長である1361流路は、調査時には下面の第5面に帰属する遺構として認識していたが、遺構のつながりと地層の再検討によって、本遺構面に帰属する遺構とした。

（図版33-4）

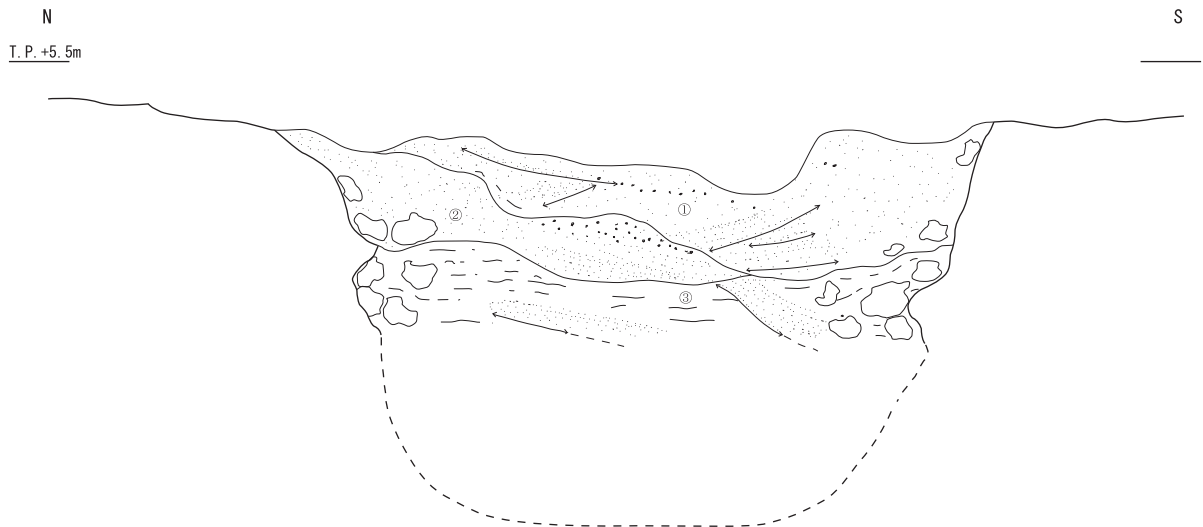
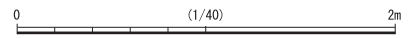
また、847流路（1361流路）（図83）が蛇行する部分では、攻撃面側に当たる流路の北肩から、西方向へ抜ける848流路を検出している。この流路は、847流路の破堤によってできたものと考えられる流路である。図81では、前後関係を示しているが、両流路ともほぼ同時期に存在するものと考えられる。

846流路（409流路）（図83・84、図版27-7）は、847流路（1361流路）の南西にあり、6区から1区にかけて検出した流路で、検出延長は直線で約125mを測る。東端での流路幅は4.5m前後で、深さは60cm前後である。流路は、侵食と再堆積を繰り返しながら、流路幅や深さを変化させており、北端で



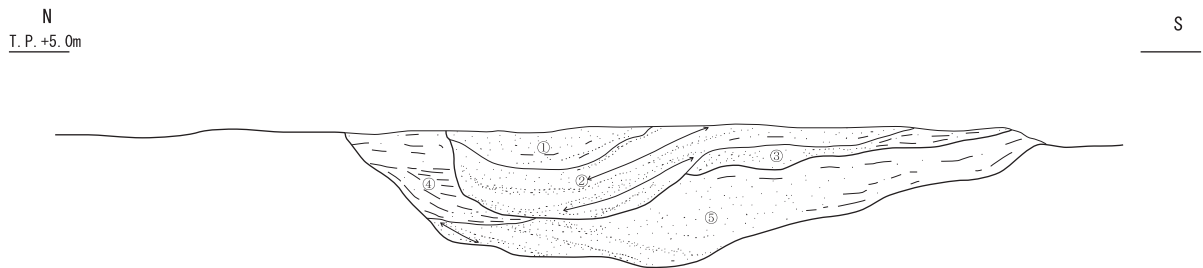
847流路

- ① 10YR3/3 暗褐細砂～極粗砂 シルト混じる 土壌化 流路内埋土上層がやや土壌化した層
- ② 10YR4/2 灰黄褐細砂シルト混じる 中砂～粗砂入る 土壌化 流路内埋土上層がやや土壌化した層
- ③ 10YR6/2 灰黄褐極粗砂～細砂 シルト Fe.Mn. 沈着有 ラミナあり
- ④ N 2/ 黒中砂～粗砂混じりシルト シルトブロック粗砂～中砂入る



409流路

- ① 10YR5/1 褐灰粗砂含み細砂～極細砂 中央中心にφ5mm以上の礫を非常に多く含む 側方は細粒化 褐粘土～シルトの土が南半中心にブロック状に崩落 淘汰悪い ラミナ下半中心に顕著 トラフ型斜行葉理
- ② 2.5Y5/3 黄褐細砂含み中砂 しまり悪い 上半に酸化マンガン沈着 北側細粒化 褐粘土～シルトの土をブロック状に多く含む 下半にラミナ顕著
- ③ 2.5Y5/1 黄灰粗砂含み中砂～細砂 しまり悪い 側方に黒褐極細砂～細砂を基調とする極細砂ブロック土を多く含む(φ5cm前後) ラミナ顕著 黒褐極細砂～細砂をベースとする516流路の埋土



408流路

- ① 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂含み中砂～細砂(一部シルト混じる) しまり良い 淘汰悪い φ1cm程度の礫を微量 φ3～5mmの礫を多く含む 360溝埋土
- ② 2.5Y4/3 オリーブ褐粗砂含み中砂(側方は一部極細砂) しまり悪い 淘汰悪い φ5mm程度の礫を多く含む φ3mmまでの礫を非常に多く含む ラミナ顕著だが中心に行くにしたがって不明瞭となる 360溝埋土
- ③ 2.5Y4/2 暗灰黄中砂～細砂 しまりやや悪い 淘汰良い φ3mm程度の礫を微量含む ラミナやや不明瞭 360溝埋土
- ④ 2.5Y5/2 暗灰黄中砂含み極細砂～シルト しまり良い 淘汰良い φ2～3mmの礫を少量含む 4-2a層が崩落しつつ堆積 マンガン班10%沈着 408溝埋土
- ⑤ 5Y 5/1 灰粗砂含み中砂～細砂 しまり悪い 淘汰良い 側方細粒化傾向に含む ラミナ顕著 マンガン班状に2%沈着 408溝埋土

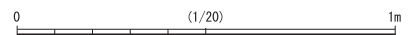


図83 847流路・409流路・408流路 断面図

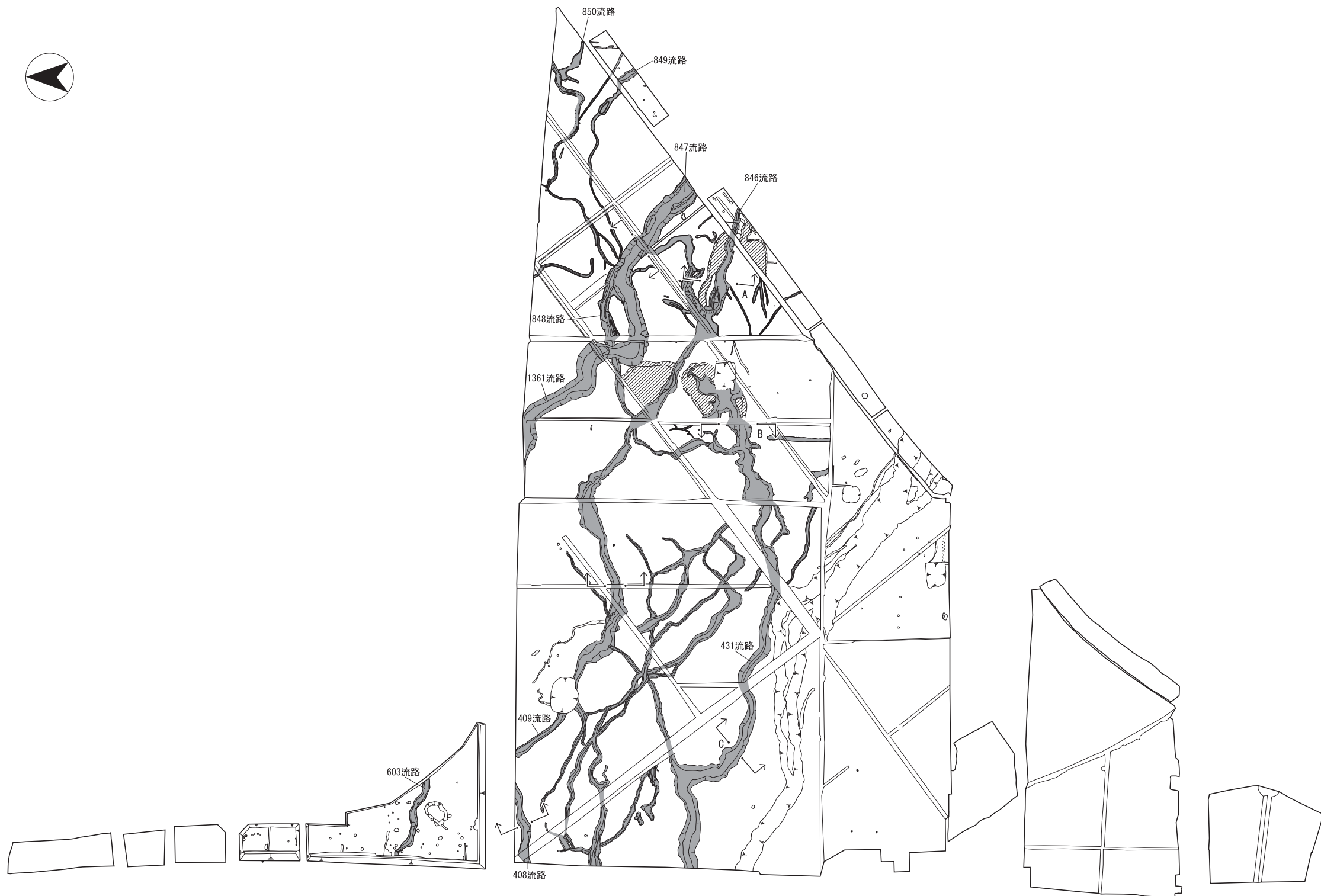
X=-138,300

X=-138,400

X=-138,500

X=-138,600

Y=-33,400



Y=-33,500

Y=-33,600

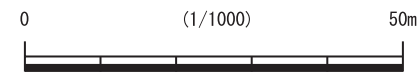


图84 第4-4面

の流路幅は約1.9m、深さは約26cmと、東端に比べ規模は小さくなっている。流路底の標高は、東端部で約5.7m、北端部で4.7mを測る。

埋土は、上方粗粒化が見られる細砂～極細砂である。流路肩際には直径10cm前後のブロックが見られることから、侵食を行いながら砂礫が堆積したことがわかる。

流路内から、遺物は出土していない。

431流路（図84）は、8区のほぼ中央にある不定形の凹みから発し、蛇行しながら西へ延びる。凹みは、下層下面で検出した流路が完全に埋まりきらず、周囲よりもやや低くなった部分である。

流路は、凹み付近で幅3～7m、深さは60～70cmを測り、流路底の標高は約5.2mである。調査地西端では、幅3m前後、深さ30cm前後を測る。流路底の標高は、約4.5mである。この431流路は、下層にある857流路が、シルトや細砂から中砂で徐々に埋没し、本遺構面でも流路として機能していた遺構である。次節の857流路のB・Cの2箇所での断面図（図86）を見ると、流路埋土がシルト～細砂・中砂～粗砂でラミナの見られる層であることから一時的にせよ水の流れがあった流路と考えられる。1区で検出した流路西肩部分から、縄文時代後期の深鉢片が出土している。（図103-306）

408流路（図83・84）は、1区の北西隅で延長17mを検出した流路である。幅は約2m、深さは約25cmで、流路東端の底の標高は約4.6m、西端の標高は4.5mである。埋土はラミナが見られる中砂～極粗砂である。この流路は、上面の第4-2面においてもほぼ同位置に、再下刻された360流路が検出されている。

603流路（図84）は、2区をほぼ東西に伸びる流路である。幅は約1.6m、深さは約20cmで、流路東端の底の標高は約4.7m、西端の標高は約4.5mである。埋土は中砂～粗砂混じりシルトである。

846流路（409流路）と431流路間を網の目のように広がる幅、深さとも規模の小さい流路跡（図84）は、いずれも平面では粗砂～極粗砂を多く含むシルトの埋土が、白く帯状に延びるものである。幅はおおむね50cm前後、深さは10cm前後で、流路肩は明確ではない。一時的に地表面を水が流れることによりできたものであると考えられる。流路内から石鏃（図104-337）が出土している。

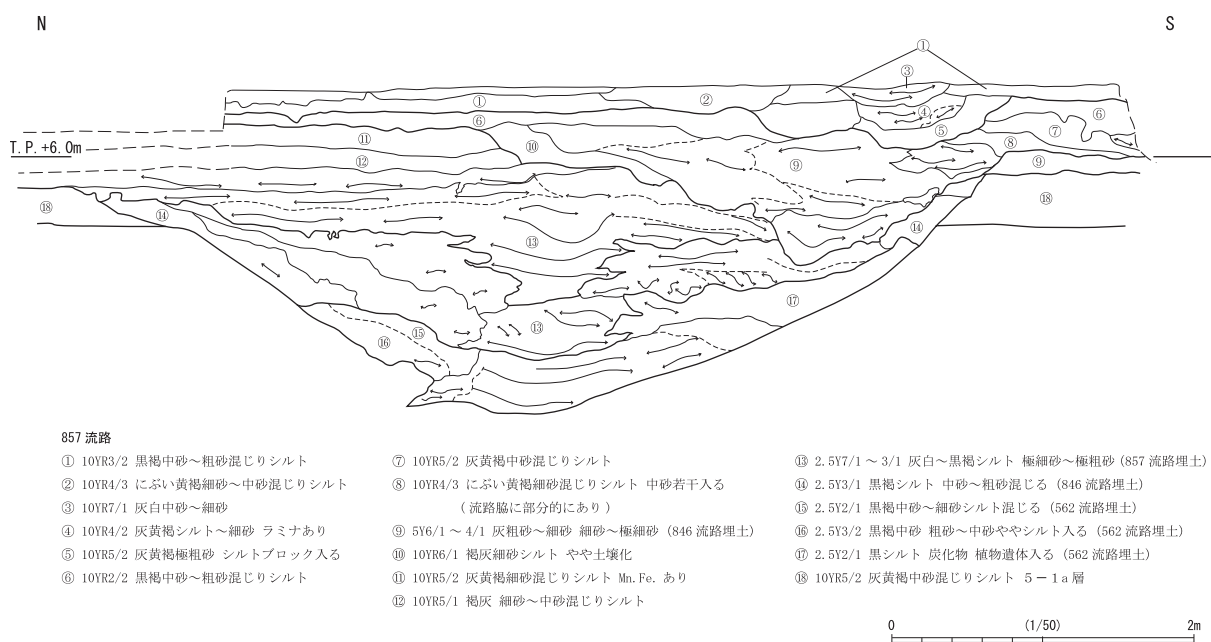


図85 857流路 断面A

第11節 第5-1面の遺構と遺物 (図87、図版29-2~6、図版30-3・4、図版31-1・2)

第5-1面は、4-4a層を除去して検出した遺構面で、5-1a層を基盤層とする。5-1a層は、下層の5-2a層とあわせて5a層系とする層序である。両層とも、下層に堆積している氾濫堆積層である5b層を母材とするため4a層系とは異なり、中砂から極粗砂粒を多く含む。また、この面も上面と同様に、上層からの土壌化の影響により、本来の層上面は失われている。なお、8区では第5-2面を検出しており、全景写真のみ図版に掲載しておく。(図版30-5・6)

この面では流路を検出している。検出した主な流路に863流路、857流路、857流路から分流して南西へ延びる516流路、857流路と516流路との間を網の目のように広がる、ごく小規模の流路跡、2区で検出した607流路、608流路、609流路がある。これらの流路の内、857流路と516流路は徐々に埋没し、また新たな流れにより削られながら、上層上面の4-4面までほぼ位置を変えず存続している。

この他、下層下面の流路が埋まりきらず、凹みとして検出した遺構もある。

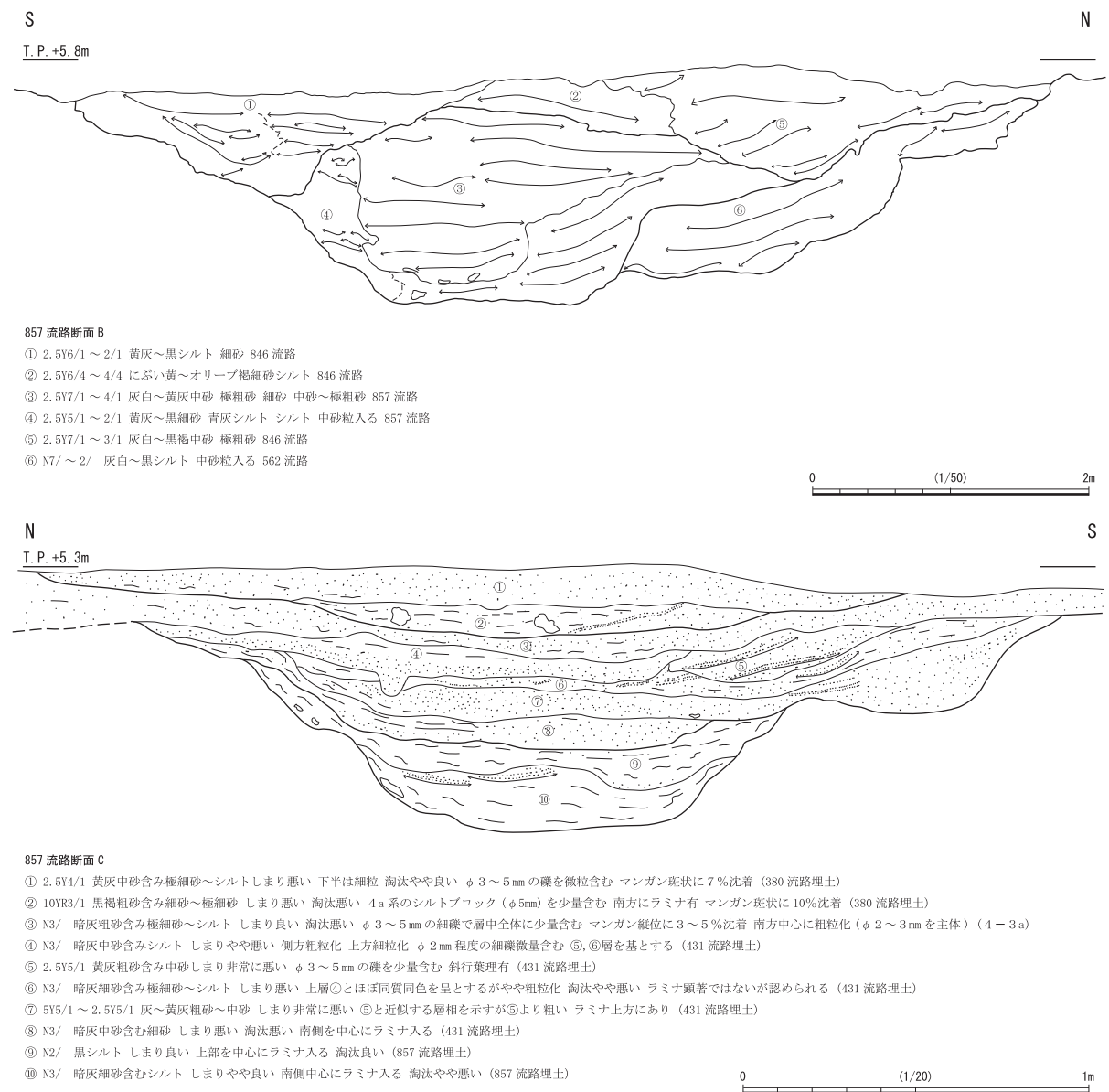


図86 857流路 断面B・C

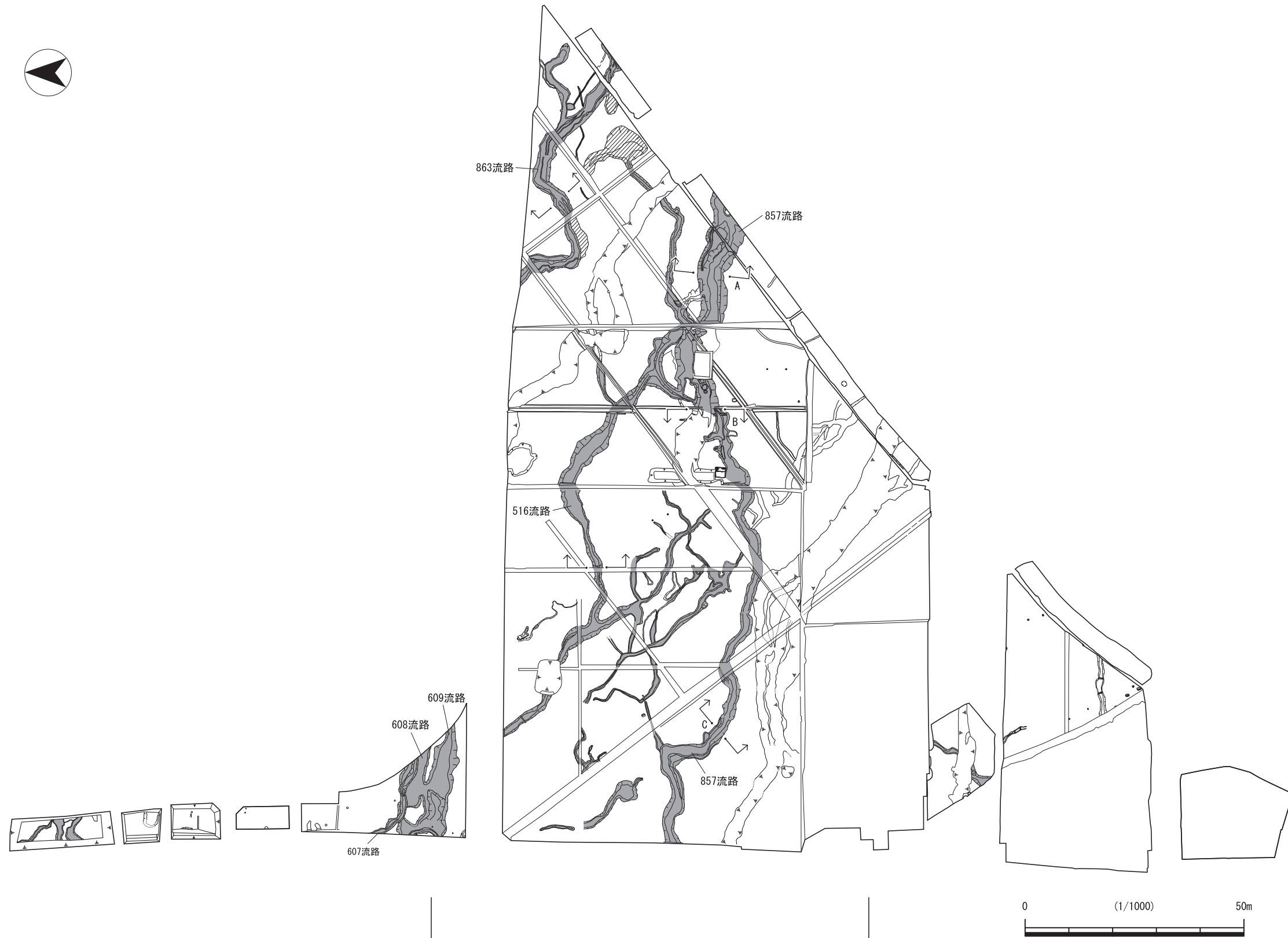
X=-138,300

X=-138,400

X=-138,500

X=-138,600

Y=-33,400



Y=-33,500

Y=-33,600

图87 第5-1面

なお、全体図の作成にあたって、第5-1面を検出できなかった部分については、5b層上面での平面図を検討の上、合成している。

863流路（図87・88）は、6区北端部分を蛇行しながら南東から北西方向に延びる流路である。流路は、南東端部分で幅2.5m前後、深さ約45cm。底の標高は約5.33m。北西端部分で、幅2.5m前後、深さ約60cm。底の標高が約5.86mを測る。埋土は大きく上下の2層に区分できる。上層は、黒褐色細砂混じりシルトで中砂粒が若干入る、下部にはラミナが見られるが上部は土壌化している。これは、流路が埋没した後、凹みとなった部分に緩やかに土砂が堆積しながら土壌化が進行したためと考えられる。

下層は、ラミナの見られる暗オリーブ褐色シルト・細砂～中砂・粗砂である。底部付近には、基盤層下層の堆積層が引きちぎられたようなブロックが見られることから、激しい流れで流路が刻まれたことがうかがえる。埋土下層から、縄文時代晩期の深鉢片（図103-309）が出土しており、出土状況などから見て流路が埋没した時期を示す遺物と考えられる。このことから、第5面も縄文時代晩期頃に属するものと考えられる。

857流路（図85・86・87）は、南東端で幅6m前後、深さ1.1m前後を測り、流路底の標高は約4.7mである。西端での流路幅は4m前後、深さは60cm前後、流路底の標高は約4.29mを測る。図85・86に857流路の各位置の断面を掲載しているが、流路下流側のC断面ではおおむねシルト～細砂・中砂～極粗砂のラミナ構造を持つ堆積層が見られる。また、流路中程のB断面、上流側のA断面では、流芯に粗砂～極粗砂が堆積しており、溝底には凹凸が見られる。

なお、6区で検出している857流路部分は、調査時に同位置にある下層の562流路の埋土も掘り下げてしまっており、検討の結果、図85に示すような流路断面形状となる。それに伴って平面図も変更している。

また、8区においても同流路から分岐する幅の広い流路を掘り下げているが、これも下層の562流路を誤って、掘り下げたものであり、訂正し平面図を作成している。そのため、これらの部分が写真とは異なっている。記して訂正する。

516流路（図87）は、857流路から分岐してやや北へ延びながら蛇行する流路である。この流路も857流路同様、徐々に埋没しつつ一部は新たな流れにより削られながら第4-4面まで流路として存続する。流路は、分岐するあたりで幅1.7～3m、深さ約1m。底の標高は約4.7mである。1区の北端付近では幅約1.5m、深さ約15cm。底の標高は約4.62mを測る。流路の方向を見ると、さらに大きく蛇行して2区の609・607流路につながる可能性が考えられる。埋土は、中砂～極粗砂を主とする堆積が見られる。

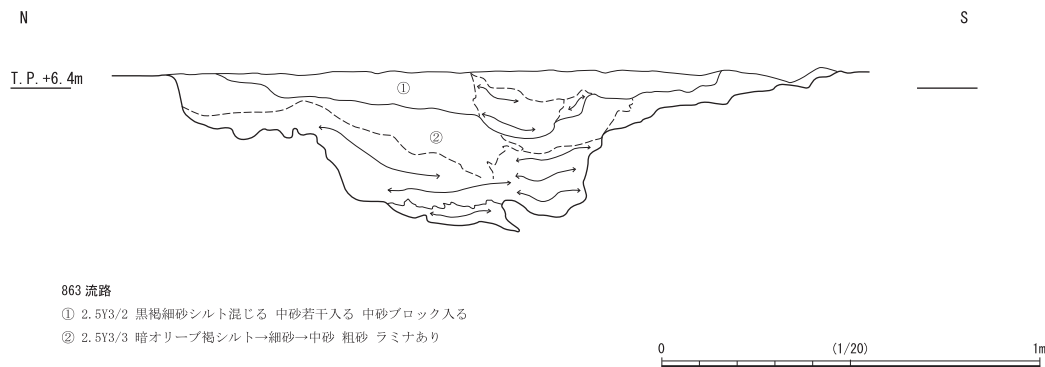


図88 863流路

遺物は出土していない。

516流路と857流路間を、網の目のように広がる幅0.5～1 m前後、深さが20cm前後のごく小規模の流路跡（図87）は、雨水や他の流路などから溢流した水が一時的に地表面を流れた痕跡である。平面形を見ると、基本的に南東の857流路から北西の516流路の方向に、やや幅の広い流路が見て取れる。

地形から見ても、おそらく857流路から溢流した水が、516流路へ流れ込み、その際できた流路跡であろう。遺物は出土していない。

607・608・609流路（図87）は、2区で検出した東から西方向へ延びる流路で、前後関係は608・609流路→607流路の順である。608流路・609流路は調査区内で合流する。608流路の幅は6 m前後、609流路は5 m前後を測り、合流すると約11mの流路幅となる。深さは約16cmである。流路底の標高は、東側で約4.5m、西側で4.0mである。607流路は、幅約2mで深さ34cmを測る。流路底は、東側で4.29m、西側で4.13mである。埋土はいずれも、細砂主体で、底部付近ではラミナが見られ、中砂から極粗砂が混じる。遺物は出土していない。また、4区でも流路を検出したが、遺物は出土していない。

1区微高地部分検出遺構（図版31-3～5）

1区の微高地上では、4 a層系を除去した下面、5 a層相当層の上面で遺構検出を行っている。この遺構面では、微高地の縁辺に位置する流路の南肩に沿って延びるわずかな高まりと、その南の平坦面で、北東から南西方向へ延びる畦畔状のわずかな高まりを検出している。調査時の所見では、これらを畦畔と考えており、水田遺構と捉えていたが、植物珪酸体分析を行った結果、上層の4 a層系に密度は低いもののイネが検出され、5 a層からはイネが検出されていないことから、おそらくこれらの遺構は転写畦畔であると考えられる。従って、これらの遺構は4 a層系のいずれかの遺構面に属すると考えられよう。なお、南に隣接する5区の調査では、ここで検出した遺構の広がりとは認められなかった。

第12節 第6-1面の遺構と遺物（図90、図版31-6、図版32-1・2、図版33-5～7、

図版34-1～6、図版35-1～3）

第6-1面は、5-1 a層・5-2 a層およびその下層に堆積している氾濫堆積物（5 b層）を除去して検出した遺構面で、暗色化が非常に強く、暗灰オリーブ～黒シルトで中砂が若干混じる土壤層である6-1 a層を基盤層とする。なお、6-1 a層の下層には、さらに暗色化した土壤層が堆積しており、順に上位から6-2 a層・6-3 a層としている。これらのa層間にはb層を挟在する部分も見られた。

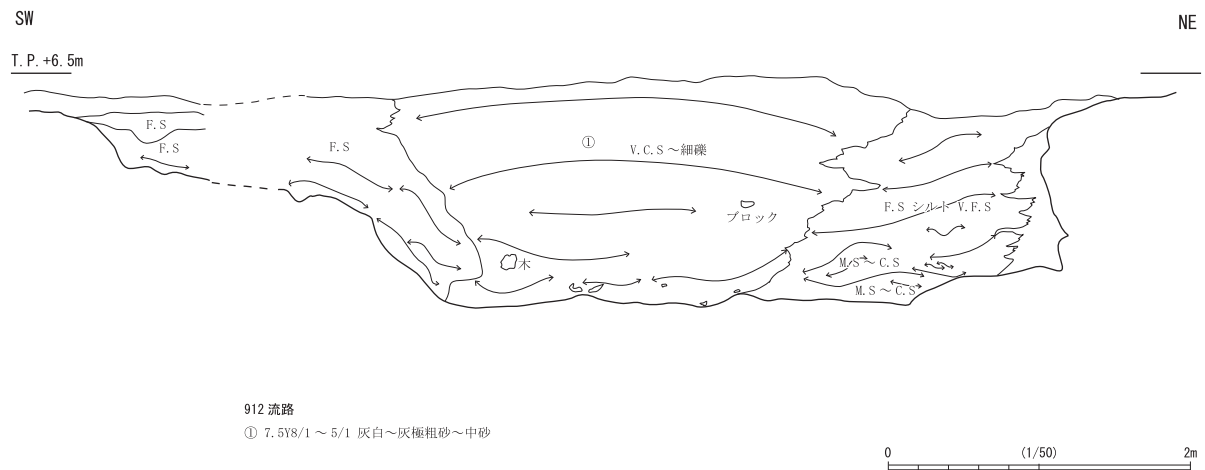


図89 912流路（A断面）

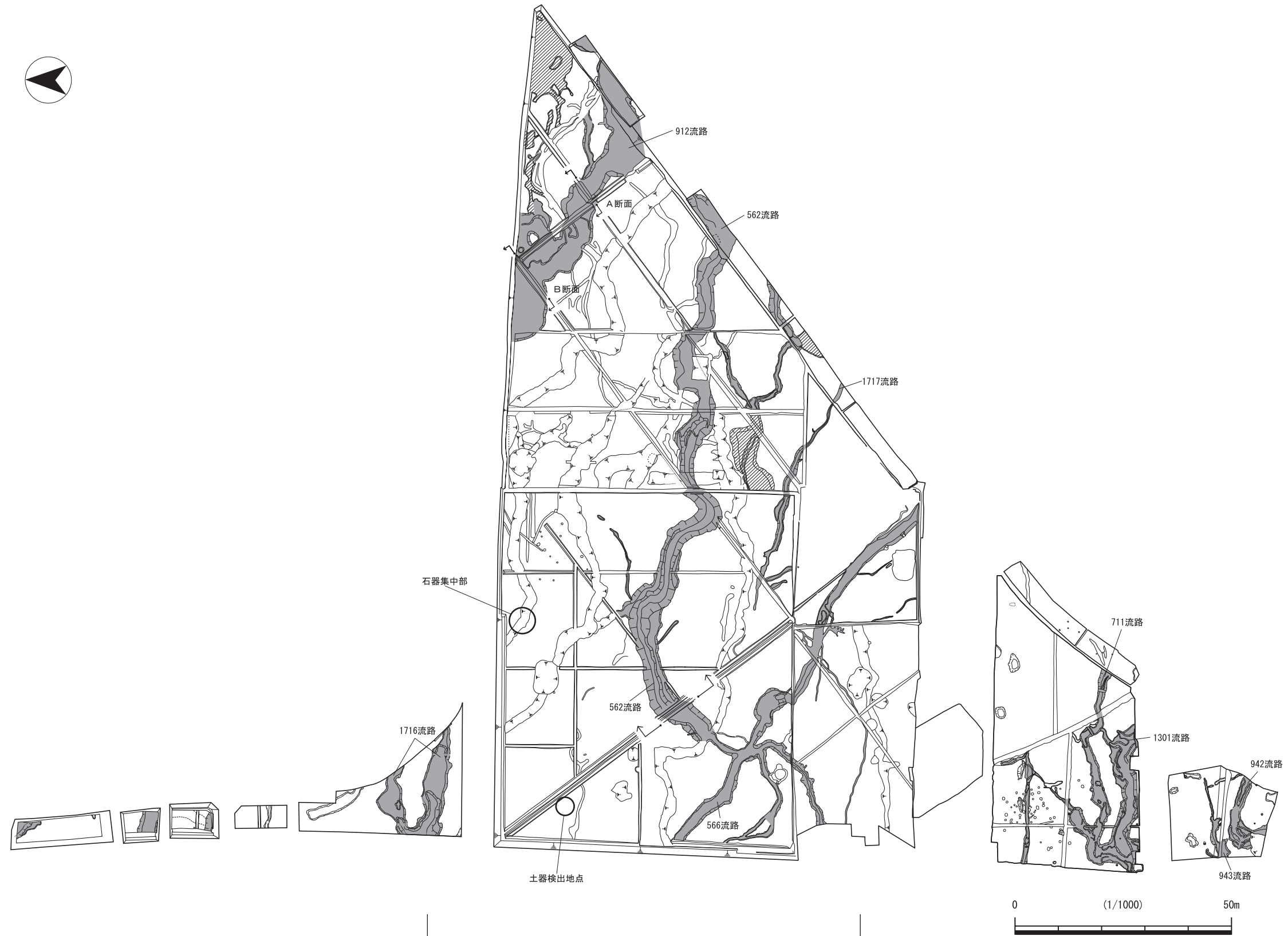
X=-138,300

X=-138,400

X=-138,500

X=-138,600

Y=-33,400



Y=-33,500

Y=-33,600

图90 第6-1面

本遺構面で検出した主な遺構は流路、遺構面上で検出された土器、石器集中部と呼称しているサヌカイト製の石鎌や剥片が集中して検出された遺構がある。

まず流路であるが912流路・562流路・566流路・1717流路・711流路・1301流路・942流路・943流路・1716流路を検出している。

912流路（図89・90・91）は、調査地東端部付近6区で検出した流路で、南東から北西方向へ延びる。幅も広く、深さも深い流路である。流路の南東付近では幅は5m前後、深さ約1m。底の標高は約4.94m。北西付近では、幅約14m、深さ1.4m前後、底の標高は約4.2mを測る。北西付近で流路が大きく広がっているのは、北東方向から延びてくる流路が、この位置で合流しているのか、もしくは、この部分で大きく西方向へ蛇行するため、東肩が攻撃面となり削られたためと考えられる。図89に流路南東側のA断面、図91に北西側のB断面を示している。どちらの断面でも、検出した流路幅のほぼ中心に、粗砂～極粗砂・細礫からなる層の堆積が見られる。これは、912流路がほぼ埋没した段階、もしくは若干流芯が窪んでいる段階に一気に下刻され砂が堆積した状況を示している。この流れは、6-1a層上層の5b層上面からと考えられ、後述する566流路とおそらく同時期と考えられる。そして、この流れによって削られた極細砂～細砂を主体とする層があり、その下層にやはり粗砂～極粗砂・細礫の層が堆積している。この層がおそらく、912流路の機能時に堆積していったものと考えられる。さらに下層には、粗砂～極粗砂で細礫を多く含む層が見られる。この層は、912流路の前身である945流路内堆積層である。この層を掘り下げると、層内の細砂層中から殻斗の付いたドングリが出土した。

流路内堆積層からは、縄文時代後期の鉢（図103-312・313・314）の他、最下層の粗砂～極粗砂で細礫を多く含む層付近から縄文時代中期の鉢・深鉢片が出土している。（図103-315～324、図版59-355・357・360）出土した縄文土器の内、縄文中期に属するものは、おそらく945流路に伴うものであろう。

この他、この流路に伴うものではないが、後期旧石器時代のナイフ形石器が1点出土している。

（図104-342）

562流路（図90・92、図版33-1・2）は、調査地のほぼ中央を東から西へ蛇行しながら延びその後、大きく南へ蛇行し566流路と交わった後、幅をやや狭め西へ蛇行する流路である。6区・8区および1区のほぼ中央付近までは、幅も広く深いが、566流路と交わった後、極端に規模が縮小し2本に分流す

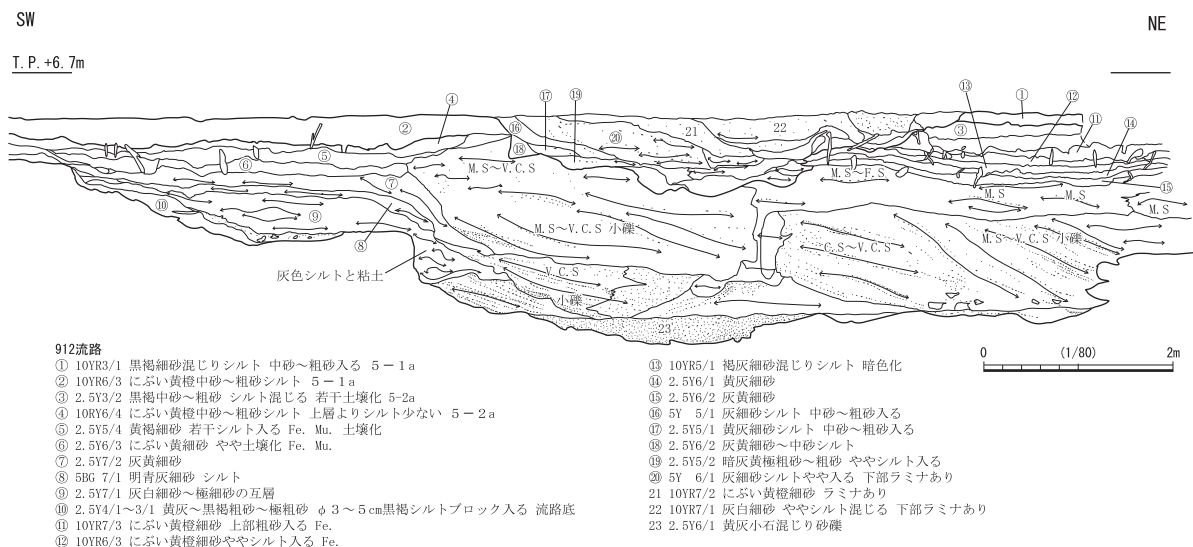


図91 912流路（B断面）

る。562流路東端付近では幅約5m、深さ約1m。底の標高は約4.48mである。1区で北西から南西へ大きく蛇行する付近では幅約5m、深さ約1.1m。底の標高は約3.57m。西端付近の分流した流路の規模は、北側が幅1～3m、深さ10cm前後で、底の標高は約4.0m。南側では、北側が幅1.5～2m、深さ60cm前後。底の標高は約3.64mを測る。

埋土は、ラミナの見られる極細砂から細砂で、所々粗砂から極粗砂で細礫を含む層が挟在する。流路内からは、底付近に堆積しているシルト～極細砂層内から縄文時代後期の注口土器の注口部と体部（図版59-358・359）が出土している。出土状況から見て比較的現地性の高いものと考えられ、流路が機能していた時期の一点を示す遺物と考えられる。従って、本遺構面も縄文時代後期に位置づけられよう。

なお、562流路の内、6区・8区で検出している部分については、上層で検出した流路を掘り下げる際、誤って562流路埋土まで掘り下げており、その結果、調査時には上層流路として取り扱っていたが、その後、検討の結果新たに、本遺構面帰属の562流路とする。そのため、全景写真には、本遺構面帰属の流路としての表現がされていない。

1717流路（図90）は、562流路とほぼ平行して延びる流路である。5区及び8区では、第5-1面検出の遺構としていたが、遺構の連続性や層位などの再検討によって本遺構面に帰属する流路とした。流路幅は、南東端で幅約1.5m、深さ約5cm、底の標高は5.66m。途切れる西端で幅約1m、深さ11cm、底の標高は約4.18mを測る。遺物は出土していない。

566流路（図90・94）は、本遺構面で検出しているが、上層に堆積していた5b層上面から掘り込まれた流路である。そのため、時期は縄文時代後期以降でおそらく縄文時代晩期頃と推測できる。流路は、5区から1区にかけて南東から北西方向へ蛇行しながら延びる。南西付近で幅は3m前後、深さ40cm前後。底の標高は約4.68m。北西付近で幅3m前後、深さ60cm前後。底の標高は約3.56mを測る。

埋土は、ラミナが見られる粗砂～極粗砂で細礫を含み、上方粗粒化が見られる。縄文時代後期から晩期の土器片が出土している。1区内で、瘤のように膨らんだ部分が、平面図で図化しているが、これは下層の流路内堆積層を誤認して掘り下げたためである。本来は、ほぼ同じ幅であったと考えられる。

埋土内からは縄文時代後期（図103-310・311）の土器片が出土している。なお、平面図では、562流路と566流路の前後関係を示していないが、上述の理由で、562流路→566流路の順で流路が形成されている。

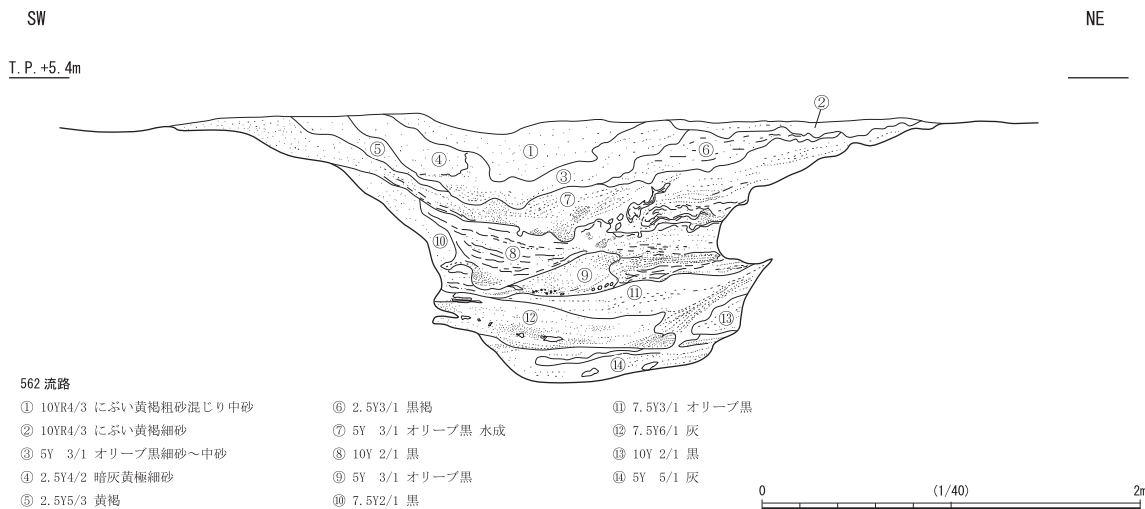


図92 562流路

711流路・1301流路（図90）は、3-2区で検出した流路で、調査区西端で合流しさらに西へ延びると考えられる。

711流路は、東端で幅約2m、深さは45cm前後、流路底の標高は約4.3mを測る。

1301流路（図版33-3）は、南西端で幅約5m、深さは40cm前後、底の標高は約4.25mを測る。両流路が合流した部分では、幅約6.5m、深さは84cm前後、底の標高は約3.78mである。埋土は、両流路とも細砂～極粗砂・砂礫であり上方粗粒化が見られることから、566流路同様5b層堆積時の流路で、縄文時代後期に属すると考えることができよう。流路内から縄文時代後期の土器片が出土している。

次に、遺構面上で検出した土器と石器集中部について述べる。

1区の南西隅で、5a層及びその下層の若干土壌化している層を除去し遺構面を検出すると、おおよそ1m範囲に散乱した状態で、縄文時代後期の粗製深鉢片（図103-305）が出土した。（図90・93、図版32-3・4）これらの土器片は、6-1a層中にも入り込んでおり、大きな破片の大半は、ほぼ水平な状態で出土している。この土器がどのような条件の下で破片となり、層中にまで入り込んだのかは不明

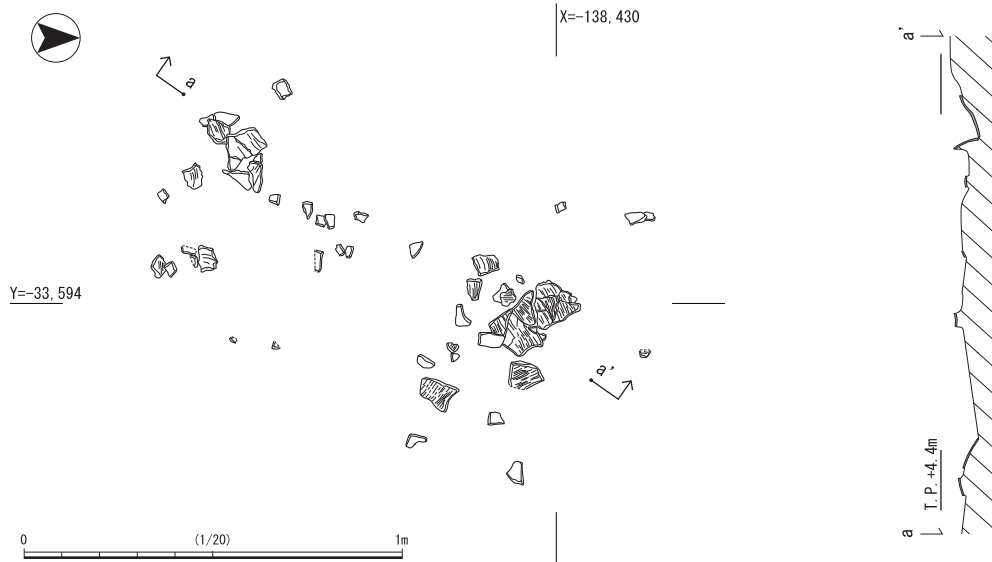
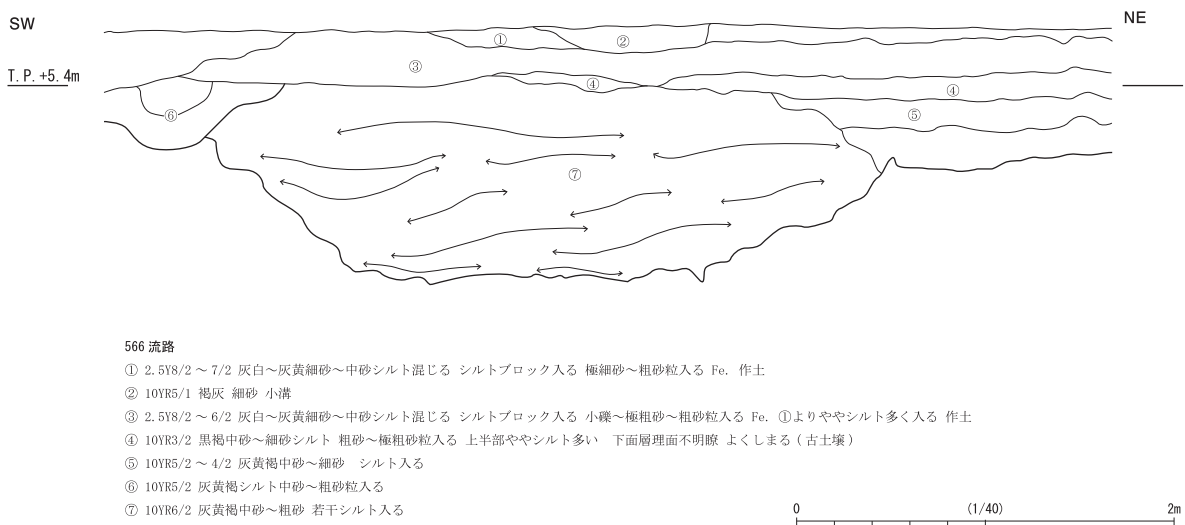


図93 第6面上 土器出土状況



566 流路

- ① 2.5Y8/2～7/2 灰白～灰黄細砂～中砂シルト混じる シルトブロック入る 極細砂～粗砂粒入る Fe. 作土
- ② 10YR5/1 褐灰 細砂 小溝
- ③ 2.5Y8/2～6/2 灰白～灰黄細砂～中砂シルト混じる シルトブロック入る 小礫～極粗砂～粗砂粒入る Fe. ①よりややシルト多く入る 作土
- ④ 10YR3/2 黒褐中砂～細砂シルト 粗砂～極粗砂粒入る 上半部ややシルト多い 下面層理面不明瞭 よくしまる（古土壌）
- ⑤ 10YR5/2～4/2 灰黄褐中砂～細砂 シルト入る
- ⑥ 10YR5/2 灰黄褐シルト中砂～粗砂粒入る
- ⑦ 10YR6/2 灰黄褐中砂～粗砂 若干シルト入る

図94 566流路

であるが、出土した土器から少なくとも6-1a層は縄文時代後期に位置づけられよう。

石器集中部は、多くのサヌカイトの剥片などと共に、石器や礫、土器の碎片が集中して検出された部分の調査時の呼称である。本書でもこの呼称を使用する。

この石器集中部(図90・95、図版32-5・6)は、上述の縄文時代後期の粗製深鉢と同様に5a層及びその下の若干土壌化している層を除去して、遺構面を検出している際に検出したものである。位置は1区の北端にあり、隣接する里道下部分に広がっているようである。そのため分布の全体像は不明であるが、おおよそ半径12mの円内に収まると考えられる。ここからは、石核、剥片(微細剥片を含む)、楔形石器、削器、石錐、石鏃のサヌカイト製石器と、磨石や石剣、礫、礫石器、注口土器片を含む土器の碎片が出土している。(図96-282・283、図97-284~294、図98-295~298、図106-345・346、図114-347~350、図版61-367~384、図版62-385~419)

図95の分布図は、これらを、サヌカイト製石器、土器、礫の3種に分けて、その分布を示したものである。まず、石器類に注目すれば、大きく2つの集中部が見られる。これを集中部A、集中部Bとする。集中部A・B共に、土器の細片・円礫を含み、楔形石器や剥片、石錐や石鏃などが出土しているが、相違点として集中部Aには、石錐と削器、未成品の石鏃・石錐が出土しており、集中部Bからは出土していない点が上げられる。このことが、集中部の性格を表すものかどうかは不明だが、1つの特徴として見る事ができよう。

また、円礫に注目すれば、特に集中部A付近で円礫がまとまって出土している。これらの円礫は、形状から河床礫と考えられ、ほとんどがチャートである。大きさは、長さ2~4cm、幅3~5cm、厚さ

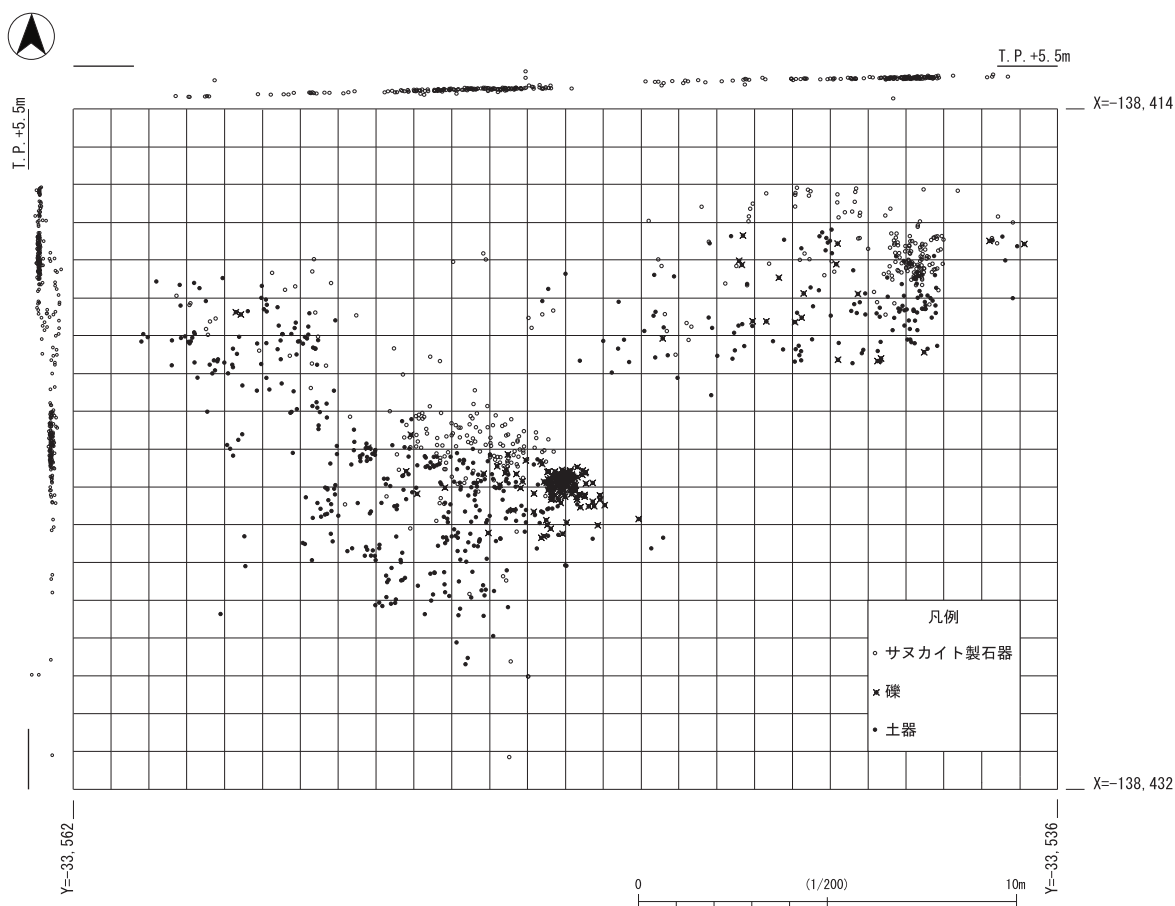


図95 石器集中部 遺物分布図

1.5～2.5cm、重さは20～40gのものが多く、比較的大きさが揃っている。チャートを含む堆積岩帯は、淀川より北の地域で、淀川と合流する天野川より東方に分布する丹波帯に由来するものが大部分を占めており、本遺跡周辺では産出しない。したがって、これらの石材は丹波帯を流れる淀川付近で採取したものと考えられる。

なお、この円礫の中には、明らかな加工痕跡が見られるものが4点ある。内、1点は円礫の両側に抉りのような加工があり、一見石錘のようでもある。また、1点は、それ自体が石器としてではないが、サヌカイト製品に加工を施したと考えられる痕跡が見られる。(図96-282・283)

最後に、これらの垂直方向の出土状況を見てみたい。集中部A・Bを含め石器や土器、円礫が出土した東西方向での深さを見ると、小さな剥片などは二次的に動いた可能性があるが、全体に東から西へ緩やかに下がって行く地形の傾斜にともなって、検出面からほぼ5cm以内に出土分布がまとまる傾向が見られた。なお、分布図を見ると中央部分に、北東から南西方向の空白地が見られるが、これは第4-3面で検出した339流路が本遺構面のさらに下まで及んでいるためである。この流路周辺の6-1a層中では、中砂から細砂の薄層を部分的に確認しており、この面の段階にも339流路の位置に流路の存在が考えられる。

この石器集中部には、製品が含まれてはいるが、剥片や未成品などを含むことから石器製作跡ではないかと考えられる。石器集中部の形成された時期は、出土した石鏃の形態や、土器の細片の中の注口土器などから、縄文時代後期に位置づけられる。

なおこの石器集中部についての若干の検討を、第6章に掲載しているので参照されたい。

4-3 a層～5 b層出土縄文土器・石器

この他、4-3 a層～5 b層から出土した縄文土器には縄文時代晩期から中期の土器がある。その内、中期に属する遺物に図103-299～301がある。また、石器では石鏃(図104-334)が出土している。

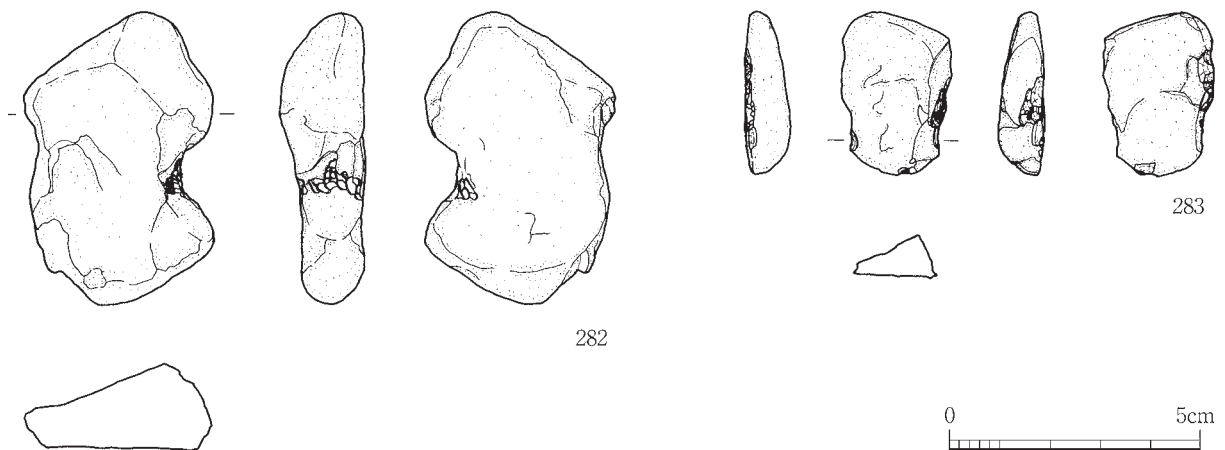


図96 加工が見られる礫

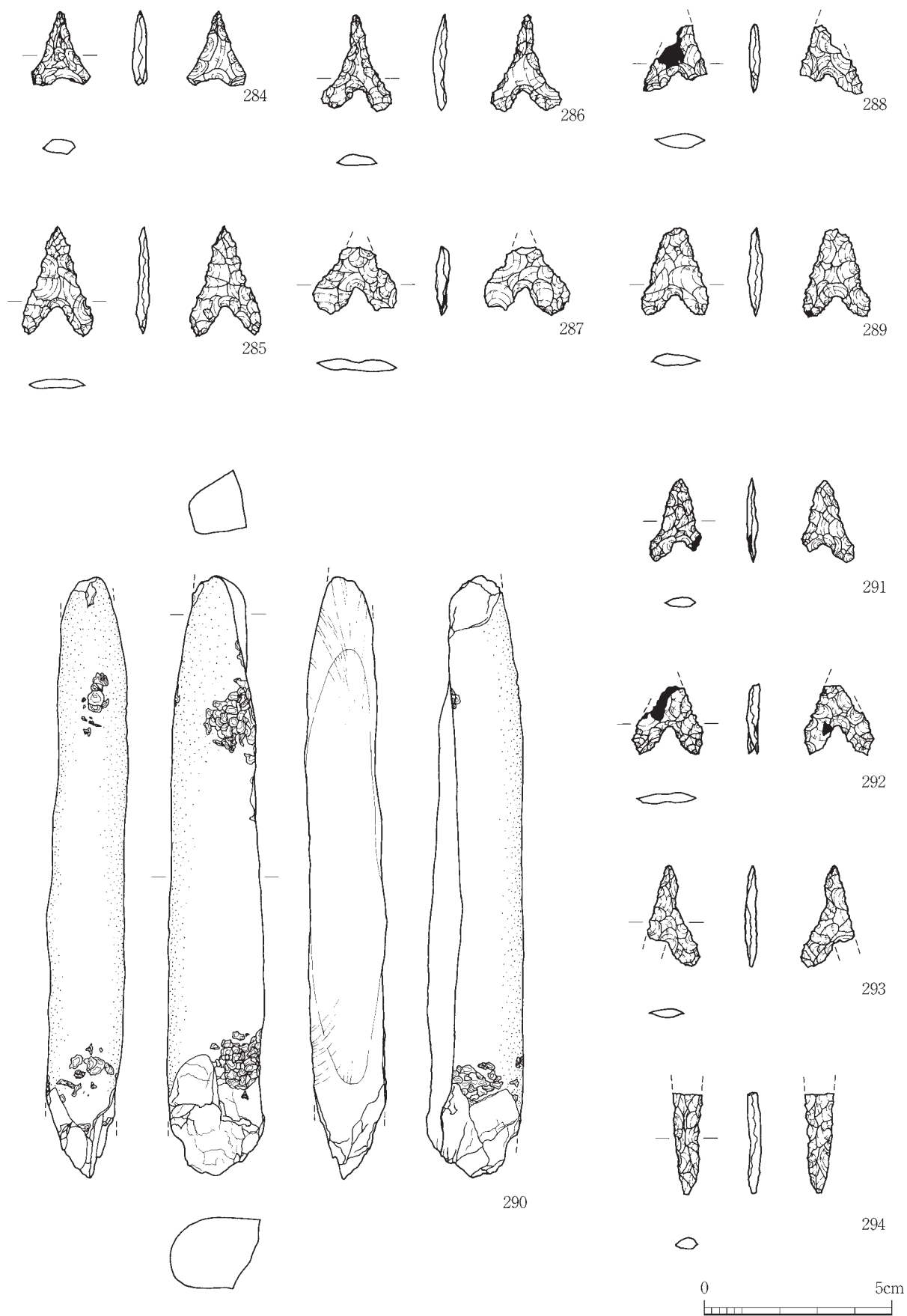


图97 石器集中部出土石器 (1)

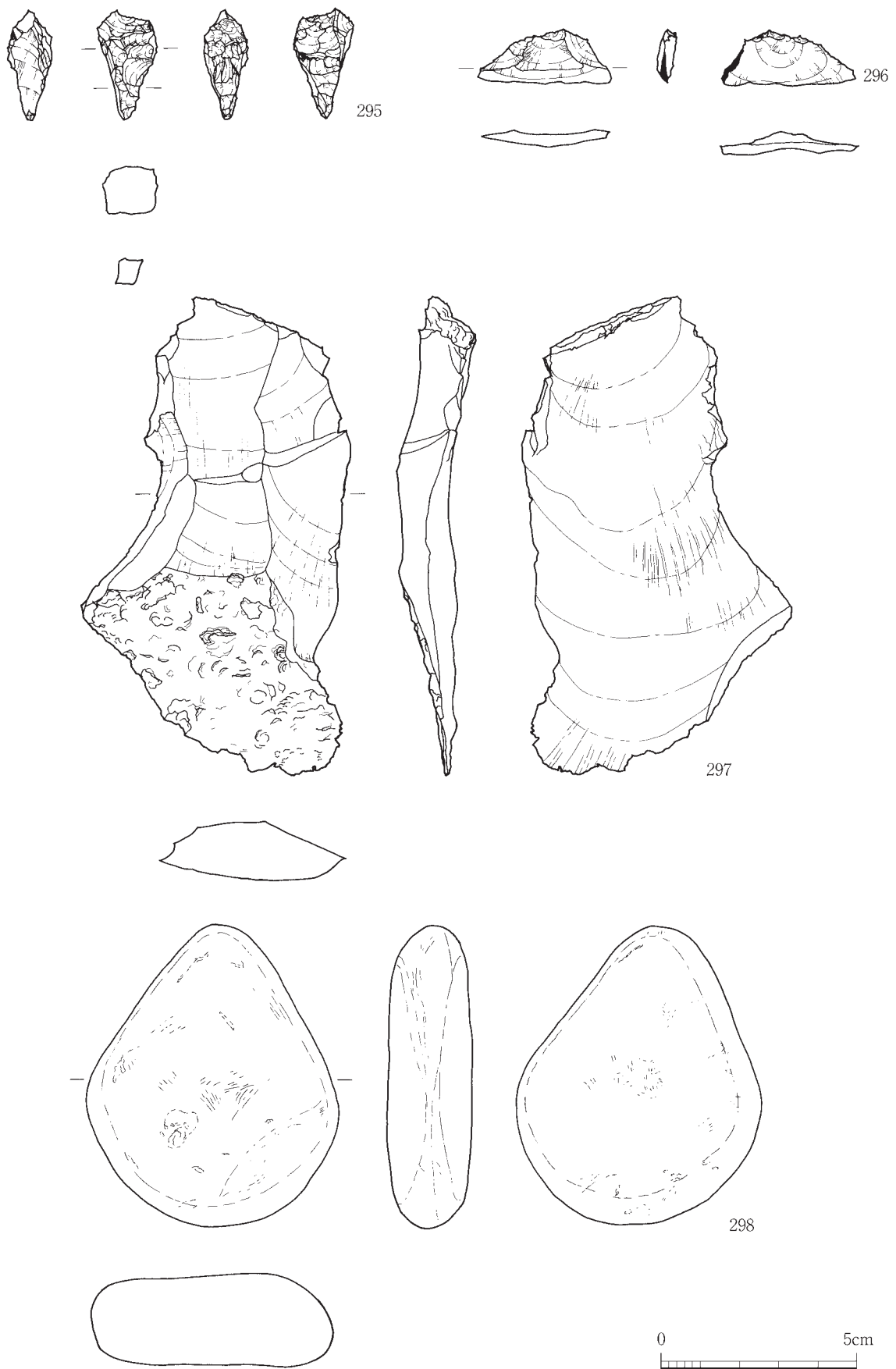


图98 石器集中部出土石器 (2)

本調査においては、土壌層である6-1 a層を除去して面的な調査を終了している。(図版35-4～6、図版36-1～3・6)しかし、当調査地の層序や遺跡の性格、時期を考える上で、特に必要とする部分については、部分的に掘り下げ調査を行った。それには、ある程度の面積で遺構検出を行った1区の第7面・第8面、6区・8区の第6-2面の他、トレンチによる下層確認調査を行っている。以下、それについて記述する。なお、9区などでは6-1 a層除去面で、古地震痕跡と考えられる遺構、土坑状変形を検出している。(図版37-6・7)

第13節 第6-2面の遺構と遺物 (図99、図版36-4・5、図版37-1～3)

第6-2面は、6区・8区において、6-1 a層及びその下層の部分的に堆積している6-1 b層を除去して検出した遺構面である。ここでは、8区で検出した遺構面について記述する。

遺構面は、東から西へ緩やかに下がっており、高さは東で約5.35m、西で約4.9mを測る。

この面では、1367流路を検出している。幅は約10m、深さ約1.2m、底の高さは南東端で約3.6m、西端で2.83mである。埋土は、ラミナが見られる中砂から極粗砂で細礫を含み、細砂とシルト層が挟在する。また、下部にはシルトブロックを含む。埋土中から、縄文時代後期から中期の土器(図103-325～328・図版59-362)が出土していることから、この面も、上面と同じく縄文時代後期と考えられる。

第6-2 a層・6-2 b層出土遺物

第6-2 a・6-2 b層及び、一部その下層からは縄文時代後期から中期の土器が出土している。その内、掲載したものに図103-302～304、図版59-364がある。

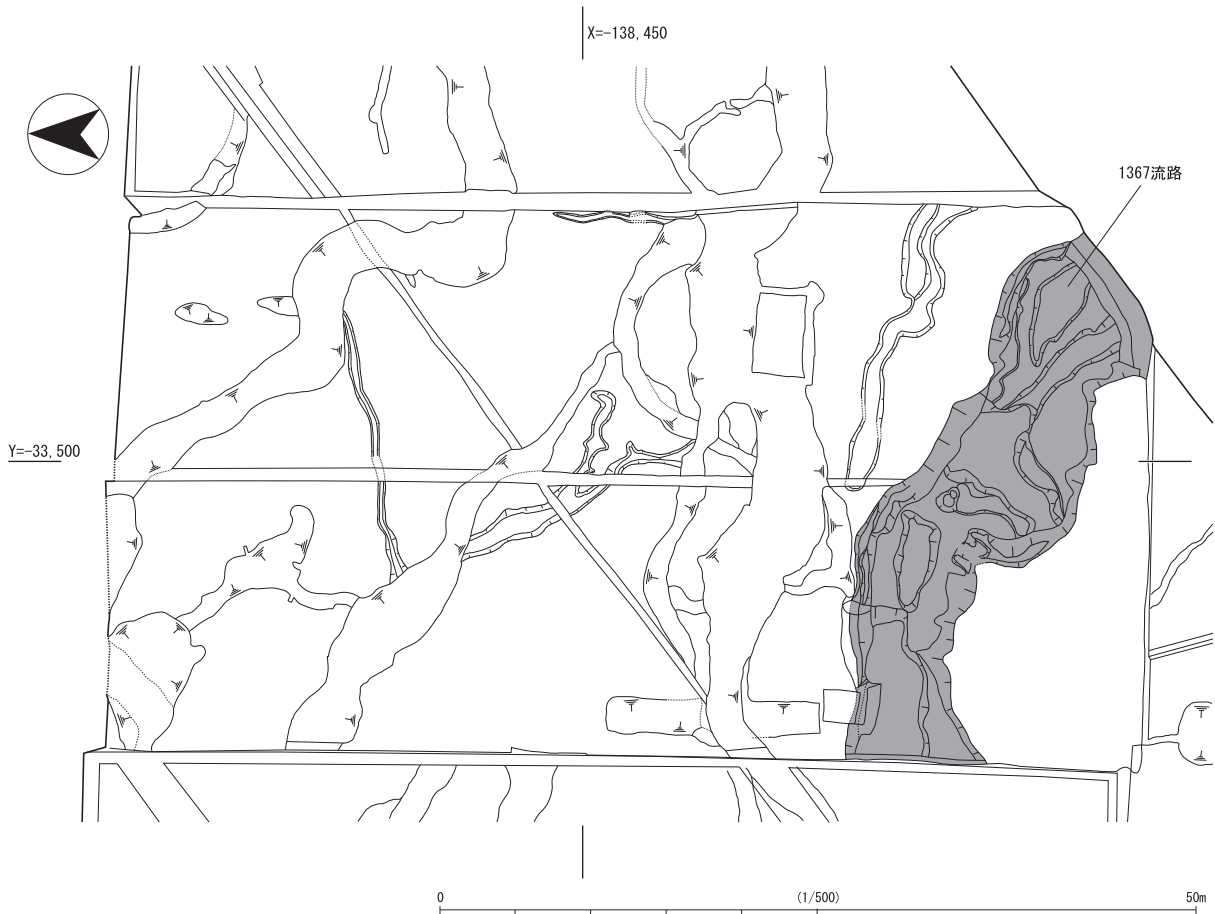


図99 第6-2面

第14節 第7面の遺構と遺物 (図100、図版37-4)

第7面は、1区で約13m×13mの169㎡の範囲を設定して調査を行った。この面は、6-1 a・6-2 a・6-3 a層とその間に堆積している氾濫堆積層の6層系と呼称している縄文時代後期に相当する土壌層を掘り下げ検出した遺構面で、7 a層とする土壌層を基盤層としている。遺構面の高さは、平均で約3.94mである。この面では、ほぼ東西方向に延びる574流路を検出している。574流路は、幅が約6.5m、深さ約1.06m、溝底の標高は、約3mである。流路底付近の粗砂～極粗砂内から、縄文時代中期の土器片 (図103-307・308、図版59-356) が出土している。

第15節 第8面の遺構と遺物 (図102、図版37-5)

第8面は、1区で約19m×19mの361㎡の範囲を設定して調査を行った。この面は、土壌層である7 a層とその下層の氾濫堆積物層の7 b層を除去して検出しており、土壌層である8 a層を基盤層とする。

8 a層は、基本層序でも述べたように、黒色を呈しシルト質で粗砂～細礫を多く含み、未分解の草木の根を多く含んでいる。遺構面の高さは、約3.7mである。非常に狭い範囲での調査であったが、南東隅に流路を検出した他、一時的な流れで形成された浅い流路を検出している。

流路は、かろうじて調査範囲の南東隅で肩を検出しており、幅は約6mを測る。深さは約1.54mである。埋土は、下部にラミナが見られる粗砂～極粗砂がブロックや有機物と共に堆積しているが、その上は極細砂～シルトの層が有機物を挟みながら約60cmにわたって堆積している。さらに、その上に粗砂～極細砂層が堆積し、ついで7 a層が堆積している。(図101) また、土壌層中には土器片が見られたが、細片であると共に非常にもろく、出土土器から時期を考えることができなかった。しかし、本遺構面は後に述べる自然科学的分析結果や、周辺との層序対比により、縄文時代後期に属すると考えられる。

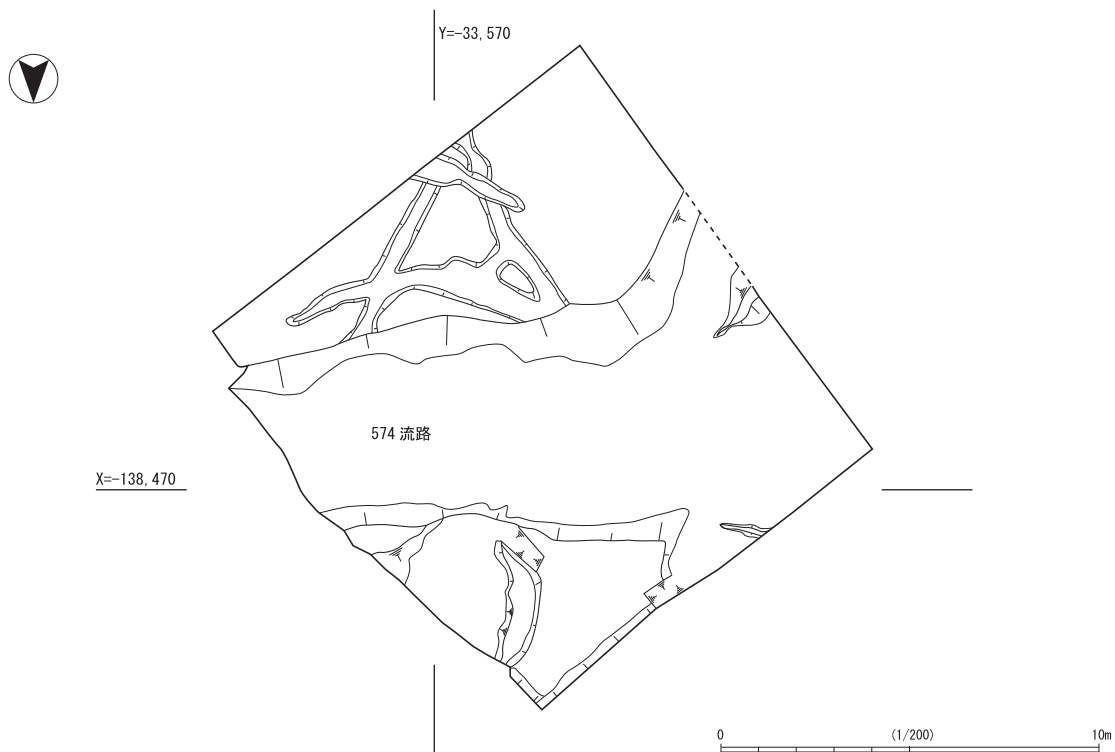
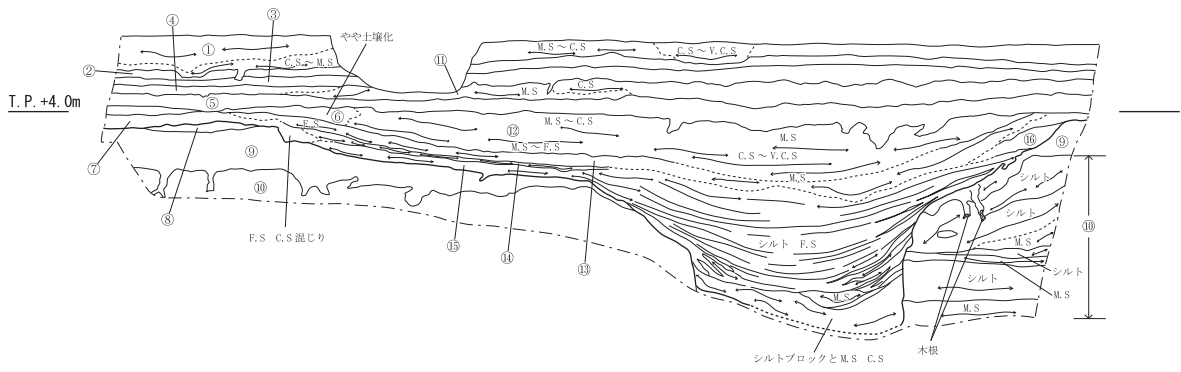


図100 第7面



- ① 7.5Y8/1 ~ 6/1 灰白~灰細砂~粗砂 6b
- ② 2.5Y2/1 黒シルト細砂混じる 中砂含む 7-1a
- ③ 5Y 2/1 黒シルト細砂混じる 粗砂多く含む 7-2a
- ④ 5Y 3/1 オリーブ黒細シルト混じる 粗砂多く含む
上下層よりやや砂っぽい 7-3a
- ⑤ 5Y 3/1 オリーブ黒細シルト混じる 粗砂若干入る 7-4a
- ⑥ 5Y 4/1 灰細砂シルト混じる 7-5a
- ⑦ 10GY5/1 緑灰シルト細砂混じる a
- ⑧ 10Y 4/1 灰シルト細砂混じる 粗砂多く含む a(8層系)
- ⑨ 2.5Y2/1 黒シルト細砂混じる 粗砂~極粗砂多く含む 8-1a
- ⑩ 10Y 7/1 ~ 6/1 明緑灰~緑灰シルト~粗砂複数に分層可
上半は谷の傾斜に沿う 下半は水平 8b
- ⑪ 2.5GY7/1 ~ 6/1 明オリーブ灰~オリーブ灰中砂~細砂 7-3b ?
- ⑫ 5Y8/1 ~ 6/1 灰白~灰中砂~極粗砂 b
- ⑬ 10GY6/1 緑灰シルト~細砂 互層 ラミナあり
- ⑭ 10GY6/1 緑灰シルト~細砂 植物遺体層入る ラミナ状 上面は一時期の地表あり
- ⑮ 10GY7/1 ~ 5/1 明緑灰~緑灰シルト~粗砂 谷埋土 b
- ⑯ 2.5Y2/1 黒=⑧

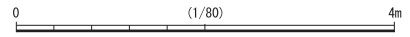


図101 東壁断面

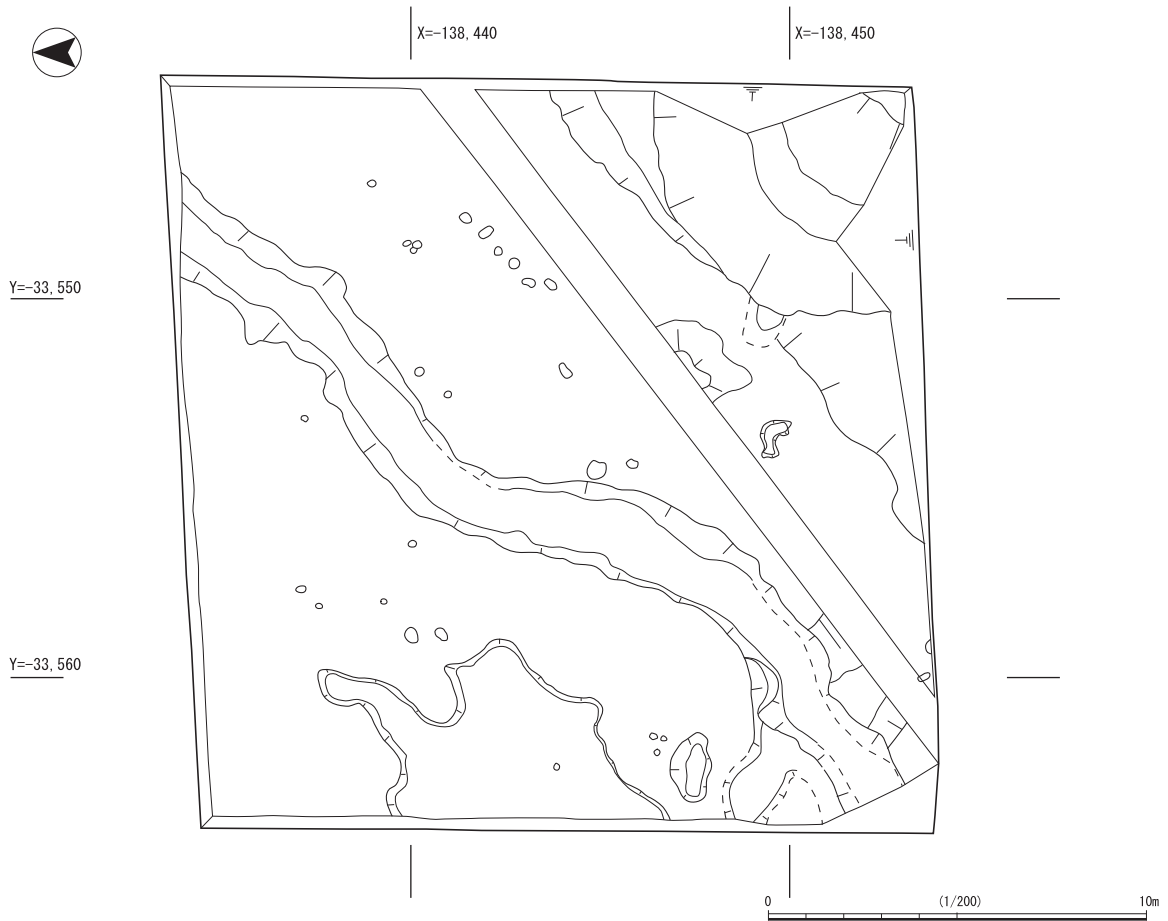


図102 第8面

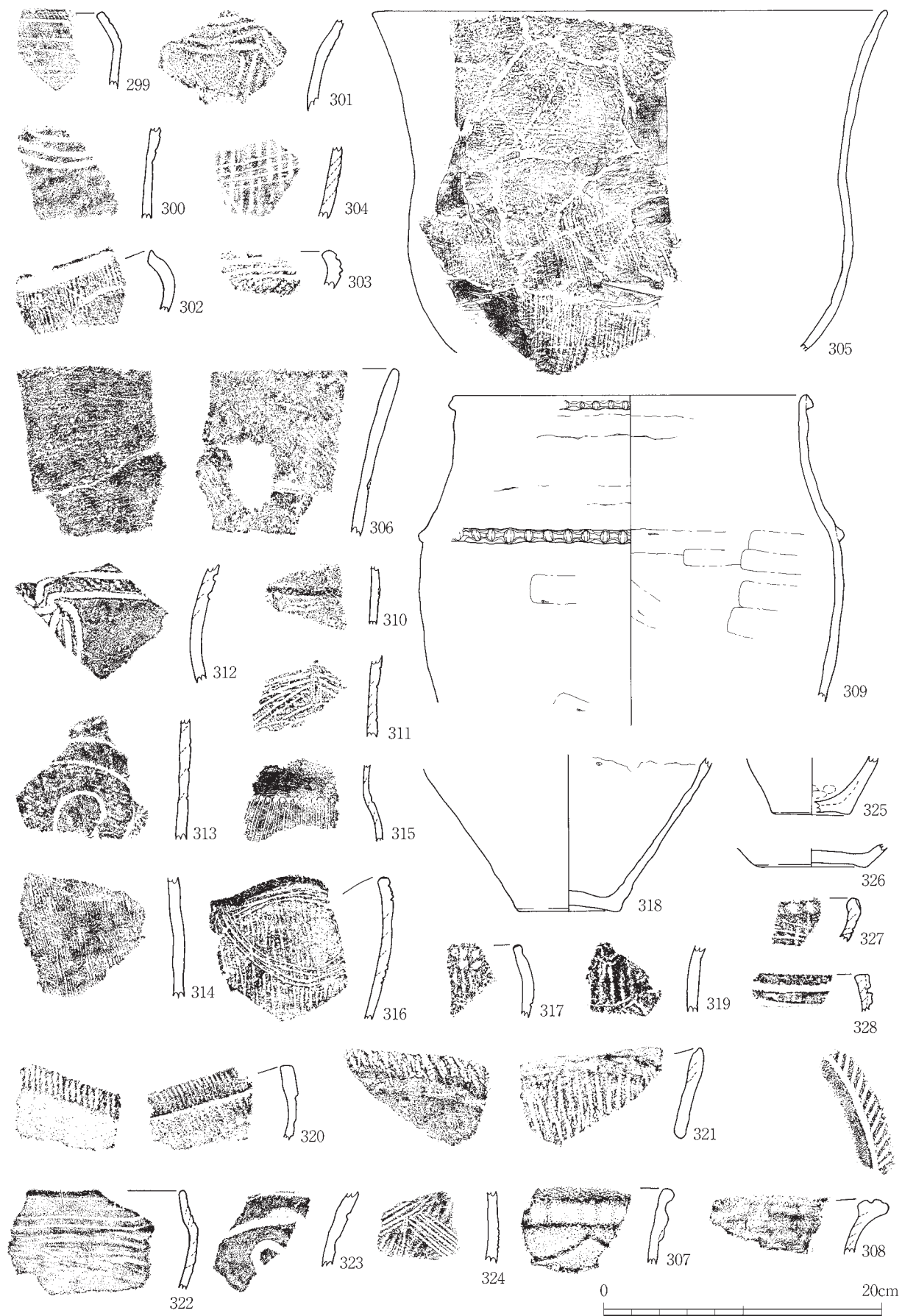


图103 第4-3面遺構・第7面遺構・第4-4a層~第7a層 出土遺物

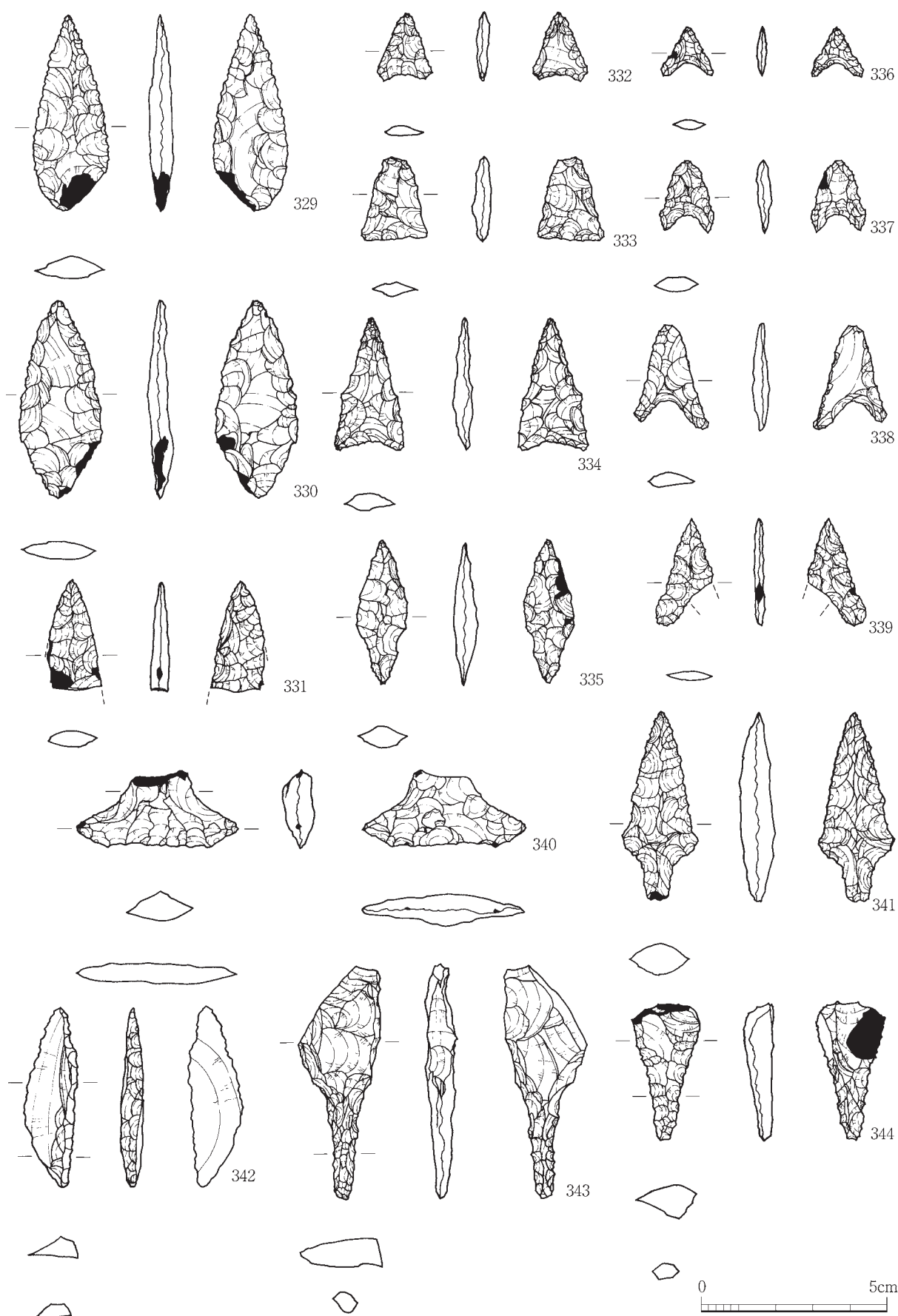


图104 石器

第6章 自然科学的分析 遺構・遺物の検討

第1節 放射性炭素年代測定（AMS法）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

讚良郡条里遺跡03-2から出土した有機質堆積物について、加速器質量分析法（Accelerator mass spectrometry; AMS）による放射性炭素年代測定を実施した。法は、放射性炭素原子をイオン化してその核種を直接、計測する年代測定法である（中村，1999）。

1. 試料

試料は、5区深堀り地点の標高1mの層準で確認された有機質堆積物1点。（図1）

2. 分析方法

(1) 前処理と測定過程

試料は、前処理として、木材の場合、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去を行う。前処理後、以下の化学処理を行う。

AAA処理（酸・アルカリ・酸処理）

HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去

NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去

HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去

酸化（C→CO₂）

試料をバイコール管に入れる。1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を同じバイ

コール管に入れる。管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。

精製（CO₂→CO₂）

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。

還元（CO₂→C：グラファイト）

真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 測定結果

放射性炭素の半減期は LIBBYの半減期 5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、BPとは before presentの略とされるが、before physicsの簡略形とも言われている（中村，1999，木庭，2000）。誤差として表現される±以下の数値は、年代値の標準偏差である（木庭，2000）。年代値の誤差とは確率的な意味をもち、誤差（±1σ）である場合、まったく同様な測定を繰り返したとき、誤差範囲内に入る確率が

68.3%である事を意味する（中村，2001）。

暦年較正（標準偏差:One Sigmaに相当）については、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2004 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。暦年較正年代値とは、¹⁴C放射年代と樹木年輪年代との対応データを用いて計算された年代値である（中村，2001）。¹⁴C年代測定では、大気中の放射性炭素年代濃度が過去数万年にわたって変化しないことが前提の一つとなっているが、放射性炭素年代濃度は過去2万年余りの間でも変動していることが判明している（木庭，2000）。よって、⁴C年代値については、基準年（0BP= AD1950）を単純にずらすだけでは暦年代へ変換することが不可能である（中村，1999，2001）。このため、歴年代に近い年代を求めようとする場合には、過去の放射性炭素年代濃度の変化が記憶されている樹木年輪の⁴C放射年代と年輪年代の対応データを参照する必要がある（木庭，2000）。本報告で使用している Stuiver et al (2005) の暦年較正曲線は、樹木年輪と年輪でカーブ出来ない年代範囲については高精度質量分析計によるサンゴのトリウム²³⁰Th/²³⁴U年代の成果や海底堆積物の縞模様を計数を用いて作成されている（木庭，2000，中村，2001）。

3. 結果

(1) 測定結果

測定結果のうち年代値を表1に、暦年較正年代値を表2に示す。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	層位	試料の質・種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1	標高 1.1m	有機質堆積物	9870±50	-21.75±1.00	9810±50	IAAA-41972

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)		相対比	Code No.
1	9865±50	cal BC 9,359 - cal BC 9,347	cal BP 11,309 - 11,297	0.097	IAAA-41972
		cal BC 9,344 - cal BC 9,270	cal BP 11,294 - 11,220	0.903	

- 1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0(Copyright 1986-2004 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
- 2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表1に記載される補正年代とは、測定試料の炭素同位体分別の補正を行った年代値のことである。炭素同位体分別の補正とは、試料によって異なる $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を $^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値=-25‰に規格化することを指す（中村，2001）。同位体分別とは、生物中の放射性炭素¹⁴C濃度については大気のその濃度に比べ少なくなる可能性が高く、その程度が同属であっても種によって異なったり、同じ個体でも部位によって異なったりする現象について呼ばれる。また $\delta^{13}\text{C}$ は、¹³C/¹²Cを化石PDB（炭酸カルシウムからなる白亜紀の米国南カロライナ州Peedee層産箭石〈やいし:Belemnite〉の鞘）の比で標準化した値である（木庭，2000）。

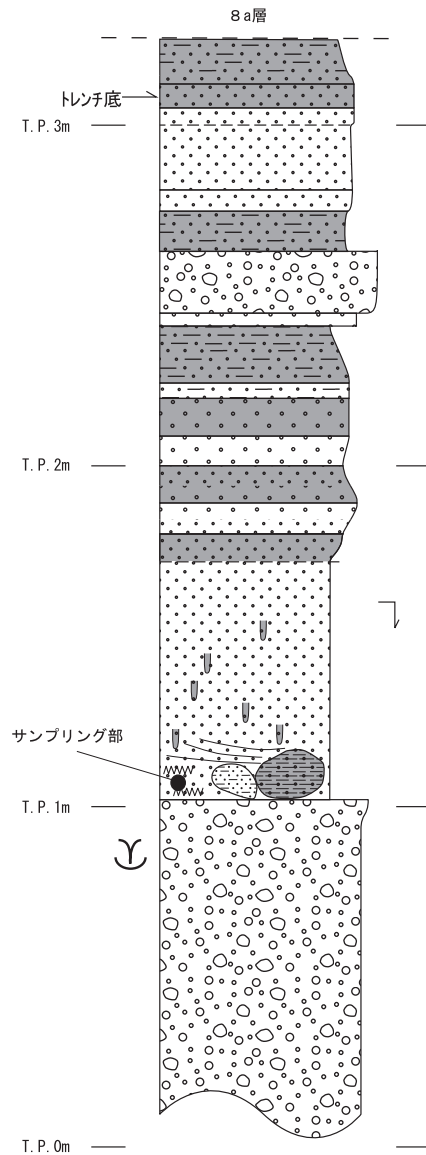
表2に示した相対比は、 1σ の範囲内に存在する暦年代校正値の確からしさを示す確率である。その数値は百分率によって表現され、その数値が大きいほど確率が高いと判断することができる。なお、暦年代校正年代値に用いられている Calは、calibratedを意味している（木庭，2000）。暦年代校正年代値については、測定試料の歴史上の意義を示すAD、BCで表される歴史年代（historical dates）と別物であることに留意する必要が指摘されている（中村，1999）。

(2) 放射性炭素年代値と暦年代校正年代値

考古遺跡における縄文時代の放射性炭素年代測定値については、谷口（2001）が関東・中部地方で行われた放射性炭素年代測定値に基づいて、縄文時代各時期の年代値を推定している（この際、暦年代校正年代値は、 2σ に相当する年代値を示している）。それによると、縄文時代草創期が補正年代値で13000～9800yrsBP、暦年代校正値では13680～9250calBC、縄文時代早期が補正年代値で9800～6300yrsBP、暦年代校正値で9250～5300calBCの範囲に収まることを暫定的に推定している。今回の測定値は、谷口（2001）と比較すると、縄文時代草創期から早期にかけての年代値に相当することになる。ただし、谷口（2001）のデータが関東・中部地方を中心としたものであることから、近畿地方におけるデータ蓄積をもって再評価していく必要がある。

引用文献

- 春成秀爾・今村峯雄編，2004，弥生時代の実年代 炭素14年代をめぐって・学生社，253p.
- 木庭元晴，2000，「畿内およびその周辺の考古遺物・遺跡の空間的・時系列的データベース作成-考古編年による放射性炭素年代軸の確立-」.関西大学文学部，83p.
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本 稔・陳 建立・松崎浩之・秋山浩三・川瀬貴子，2004，大阪府瓜生堂遺跡出土弥生～古墳時代出土土器の14C年代測定.「瓜生堂遺跡1 近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-考察・分析・写真図版編-」.（財）大阪府文化財センター，715-726.
- 中村俊夫（1999）放射性年代測定.長友恒人編，「考古学のための年代測定学入門」，古今書院，2-36.
- 中村俊夫（2001）放射炭素年代とその高精度化.第四紀研究，40，445-459.
- Stuiver, M., and Reimer, P. J., 1993, Extended 14C database and revised CALIB radiocarbon calibration program, Radiocarbon 35:215-230. Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G.v. d. Plicht, J., and Spurk, M., 1998. INTCAL98 Radiocarbon age calibration 24, 000 - 0 cal BP. Radiocarbon 40:1041-1083. Stuiver, M., Reimer, P. J., and Reimer, R. W. 2005. CALIB 5.0. [WWW program and documentation].
- 谷口康浩，2001，縄文時代遺跡の年代.季刊考古学，77，17-21



8a層

トレンチ底
T. P. 3m

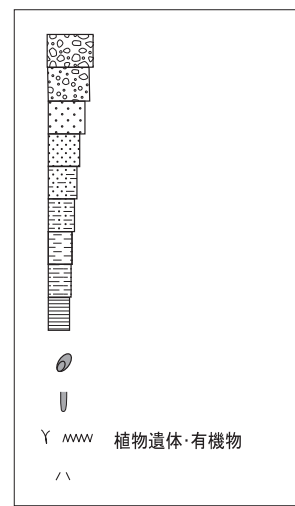
T. P. 2m

サンプリング部
T. P. 1m

T. P. 0m

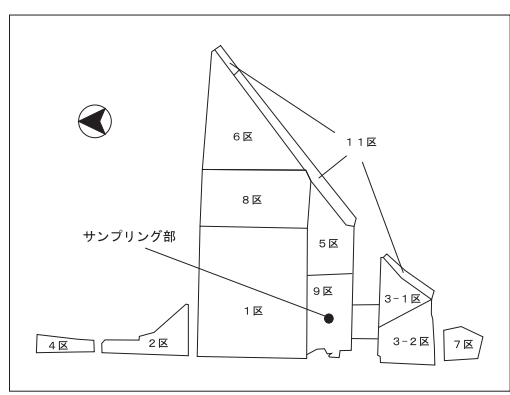
暗灰・黒色 m~f.s with c~v.c.s
 暗灰色 f~m.s with c~v.c.s
 灰色 f~v.f.s with c.s~gr.
 灰色 f~v.f.s massive
 青灰・青緑灰色 v.f~f.s with peb.~gr.
 黒色 m~v.c.s with st.~v.f.s, gr.~peb.
 灰色 砂礫(v.c.s~gr with peb. ややreverse grading)
 灰・暗緑灰色 m~c.s with v.c.s
 暗灰色 v.f.s~st with m~c.s (normal grading)
 暗灰色 c~m.s with st~f.s
 暗灰・濃灰色 c~m.s with st~f.s
 暗灰色 c~m.s with st~f.s (reverse grading)
 上部:暗灰色 c~m.s 下部:暗灰色 c.s (normal grading)
 暗灰・灰色 m.s(~f.s) with c.s (reverse grading)
 上部:灰・褐灰色 m.s~f.s 下部:灰褐灰色 v.f.s~f.s 淘汰良好
 灰色 v.f.s~f.sdy st 淘汰良好 擾乱受ける。
 下底部付近:やや暗色化する. 植物遺体のラミナあり.
 白色s団子あり. 暗色帯の団子含む.

灰色 砂礫 m.s~peb.
 (湧水多く、十分観察できず.)



極粗
粗
中粒
極砂
粗砂
砂礫

粘土—シルト質粘土
粘土質シルト
シルト
砂質シルト
シルト質砂



(小倉氏作成図を転載)

図1 試料採取地点・層序

第2節 テフラの検出と同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

讃良郡条里遺跡は、生駒山地西麓部の氾濫原上に立地する。本遺跡における周知の遺跡範囲は、沖積扇状地から沖積低地にかけて広がっている。遺跡範囲内では、西に向かって沖積扇状地からおもに後背湿地からなる沖積低地面へと地形面が推移していく。このうち沖積扇状地面は、離水時期が異なるいくつかの地形面によって構成されている。相対的な水位は、沖積扇状地から沖積低地に向かって上昇傾向にあり、西側へ行くに従ってより湿潤な表層地質の環境が形成される。このような西側に向かって湿潤化する環境・地形勾配が認められる讃良郡条里遺跡において、今回調査が行われた讃良郡条里遺跡03-2は、発掘調査結果から沖積扇状地に位置すると判断される。今回の分析調査では、2区の深堀り調査時に確認された縄文時代前期ないしそれ以前に形成された可能性がある堆積層について、テフラの産状を調べ、層序編年資料を得ることを目的とする。

1. 試料

試料は、2区下層確認トレンチの第8a層より下位の土壌層から採取された（図1）。層上部より厚さ5cmで連続に採取し、上位より試料番号5～18の試料名が付されている。本分析では、この14点の試料を分析の対象とする。

2. 分析方法

讃良郡条里遺跡の地理的位置と発掘調査所見による年代観から、検出が予想されるテフラは、K-Ah（後述）であることが予想される。大阪平野におけるK-Ahは、主に細粒の火山ガラスからなるテフラとして認められていることから、ここでは、試料の重鉍物組成と火山ガラスの量比を求め、その層位的な産状から、K-Ahの検出を試みる。以下に処理手順を述べる。

試料約4gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。火山ガラス比分析は、重液分離

により得られた軽鉍物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型

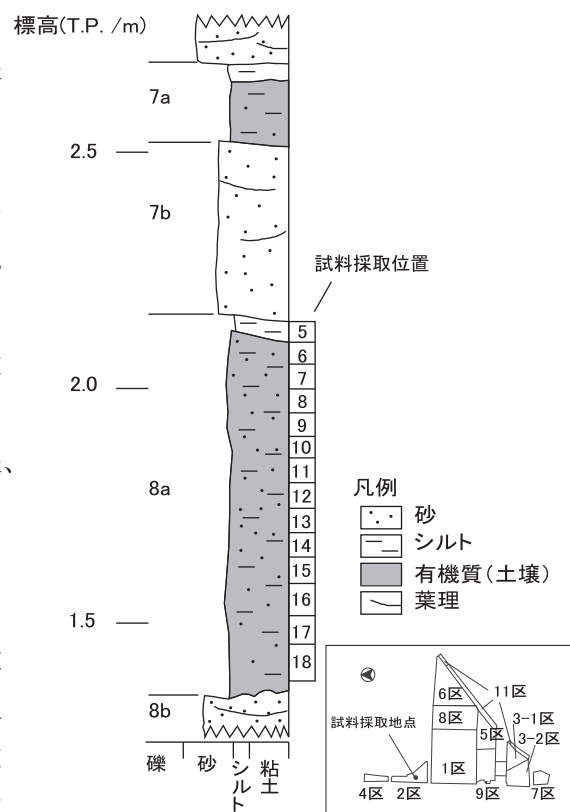


図1 試料採取地点と層序

に分類する。

なお、検出された火山ガラスについては、テフラの同定精度を上げるために屈折率の測定を行う。測定は、古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

結果を表1、図2に示す。重鉱物組成は、試料番号18から試料番号5まで、角閃石が90%前後を占め、微量の不透明鉱物を伴う組成であり、層的な変化はほとんど認められない。一方、火山ガラス比では、全試料に少量のバブル型火山ガラスと微量の軽石型火山ガラスが認められた。そのうち、バブル型火山ガラスの量比は、試料番号18で約20%、試料番号5で約6%を示し、下位ほど多く、上位に向かって減少する傾向が窺える。

なお、試料番号18で検出されたバブル型火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.508-1.511}$ （modeは $n_{1.509-1.510}$ ）であった（図3）。

4. 考察

層内の火山ガラス比分析により検出されたバブル型火山ガラスは、その形態と屈折率から、九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah:町田・新井，1978）に由来すると考えられる。

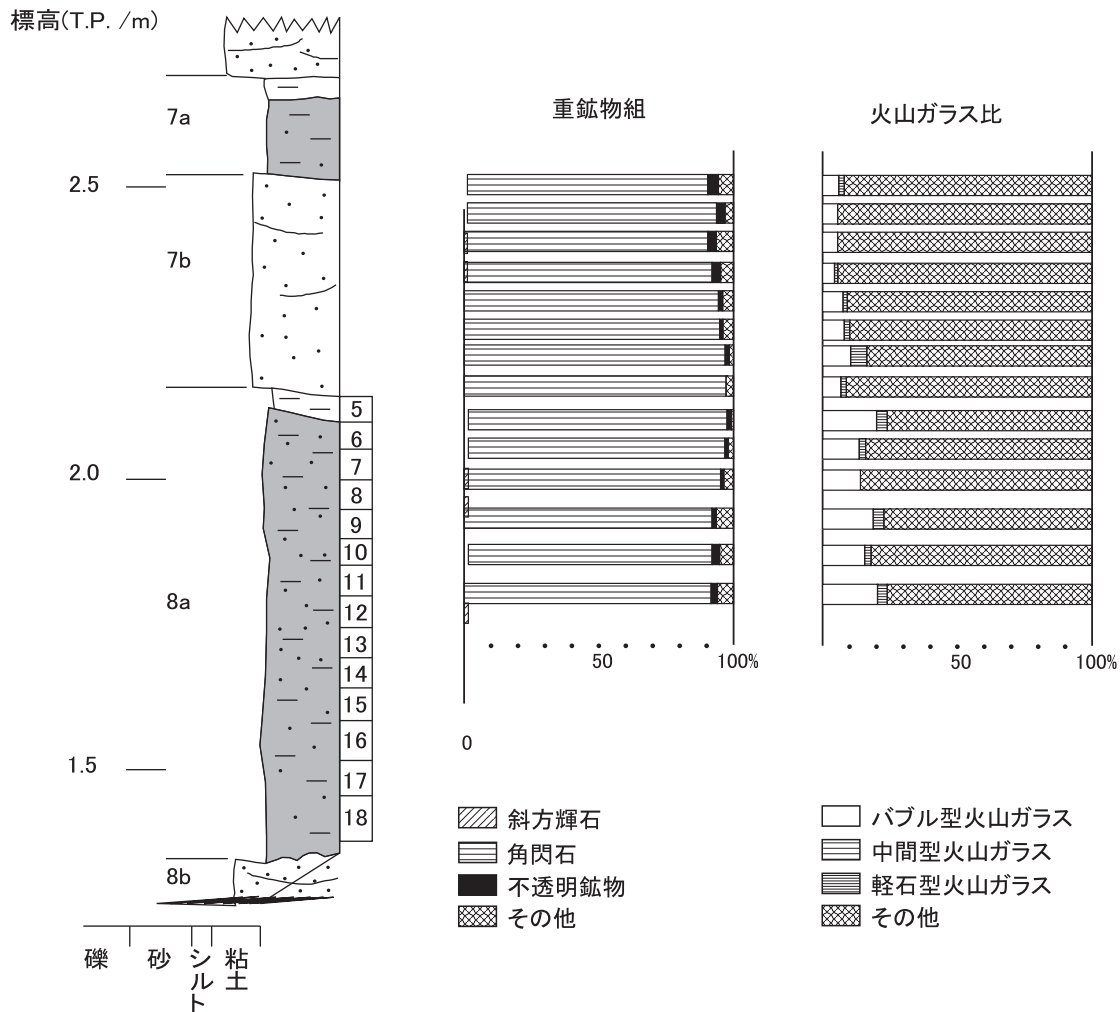


図2 重鉱物組成および火山ガラス比

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	重鉱物組成											火山ガラス比				
	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	角閃石族	酸化角閃石	燐灰石	ジルコン	電気石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
5	3	0	223	1	0	2	2	0	10	9	250	15	0	5	230	250
6	3	1	231	1	0	0	0	0	8	6	250	14	0	1	235	250
7	1	0	226	1	0	1	0	0	8	13	250	14	0	1	235	250
8	0	0	230	1	1	0	2	0	8	8	250	11	0	3	236	250
9	0	0	236	0	0	0	2	0	4	8	250	19	0	4	227	250
10	0	0	237	0	0	0	1	0	3	9	250	20	0	5	225	250
11	0	0	242	0	0	0	1	0	4	3	250	26	0	15	209	250
12	1	0	243	0	1	0	0	0	1	4	250	17	0	5	228	250
13	4	0	240	0	0	0	1	1	4	0	250	50	0	10	190	250
14	4	0	238	0	0	0	1	0	3	4	250	34	0	6	210	250
15	1	1	238	0	0	0	0	0	3	7	250	35	0	2	213	250
16	2	1	230	0	0	0	0	0	4	13	250	47	0	10	193	250
17	4	0	226	0	0	0	0	0	7	13	250	39	0	6	205	250
18	2	0	229	0	0	0	2	0	6	11	250	51	0	9	190	250

K-Ahの噴出年代については、町田・新井（1978）以来、放射性炭素年代である6300年前という年代が広く知られている。ただし、最近では、第四紀学および考古学において放射性炭素年代をそのまま使用するのではなく、それを「換算」した暦年代が使用されることが多い。そのため、K-Ahの噴出年代についても暦年代の7300年前という年代が表示されるようになってきている（例えば町田・新井（2003）など）。今回の分析地点におけるK-Ahの降灰層準は、火山ガラスの量比が上位に向かって減少していることから、試料番号18以下の土壌層下部あるいは、その下位層準にある可能性がある。今後この層より下位の堆積層における火山ガラスの産状を確認する必要があると考えられる。

なお、今回の重鉱物分析結果は、本遺跡の後背にある生駒山の地質の主体をなす領家帯の花崗岩類に由来する角閃石が大部分を占める。ここで、K-Ahに含まれる重鉱物は輝石類を主とする（町田・新井，1978）ことから、表層堆積物中にあるK-Ahの降灰層準を輝石の量比からも推定できる可能性がある。しかし、今回の重鉱物分析からは、それに相当するような組成を認めることはできない。これは、降灰したK-Ahに含まれていた輝石の量が、火山ガラスに比べると極めて少量であったために、土壌形成期の擾乱や再堆積が繰り返される中で拡散し、検出されないほど微量となってしまったなどの可能性が考えられる。いずれにしても、8b層より下位堆積物における火山ガラスの産状を確認した上で再検討する必要がある。

以上の結果から、少なくとも分析対象層はK-Ah降灰期ないしそれ以降に形成されたことが推定される。

引用文献

町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, 143-163.
 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.

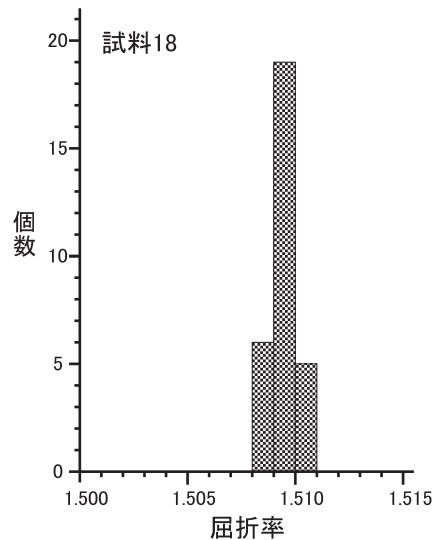
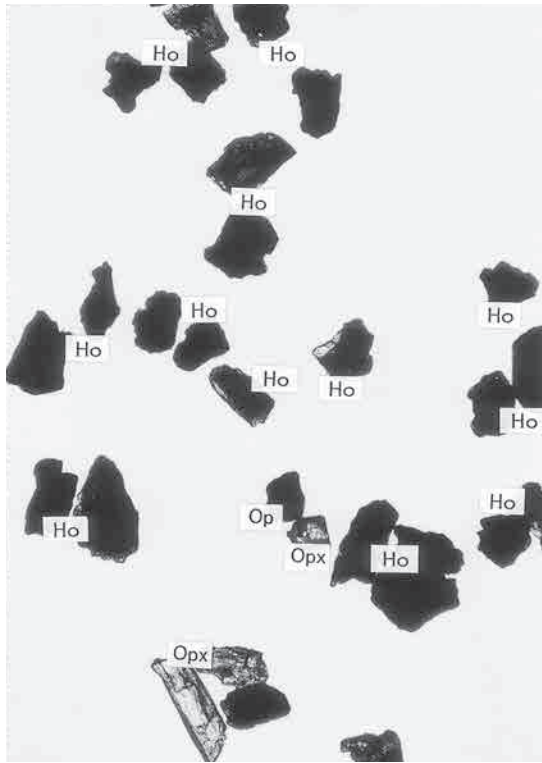
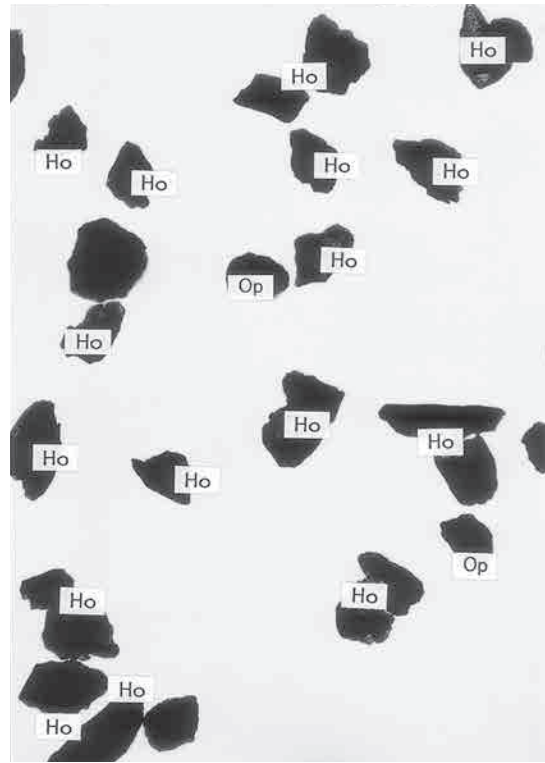


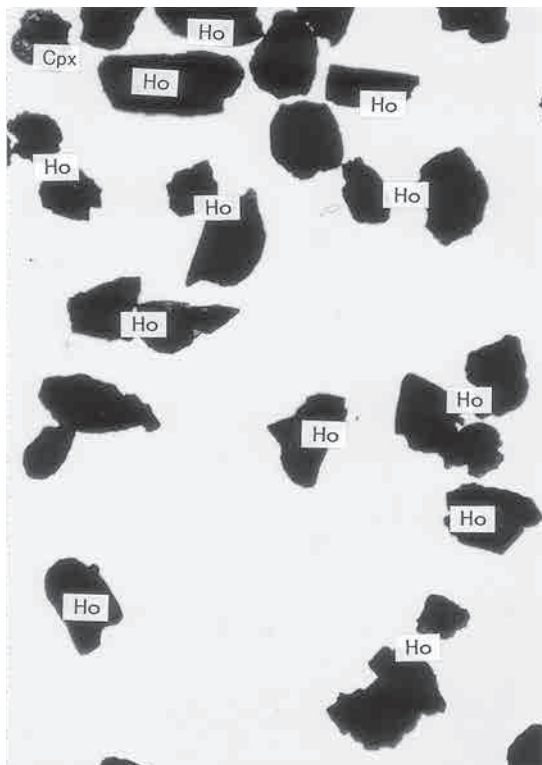
図3 火山ガラス屈折率測定結果



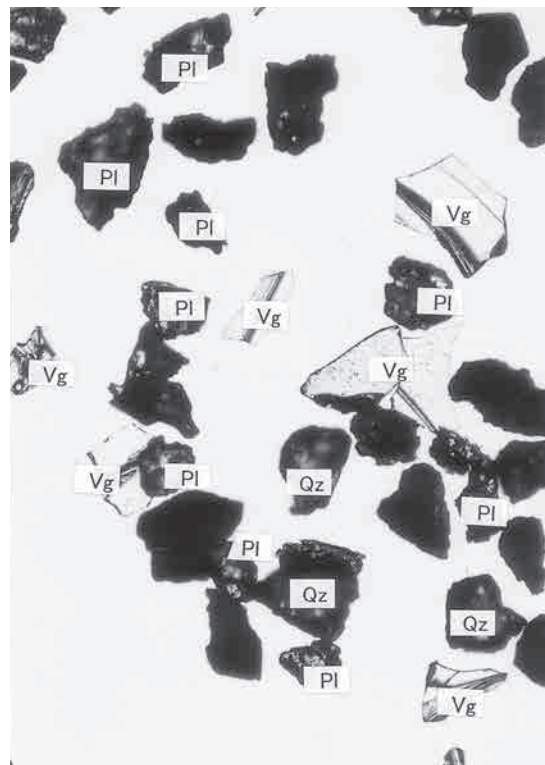
1. 重鉱物 (試料5)



2. 重鉱物 (試料12)



3. 重鉱物 (試料18)



5. K-Ahの火山ガラス

Qz:石英 Pl:斜長石 Opx:斜方輝石 Cpx:単斜輝石 Ho:角閃石 Op:不透明鉱物
Vg:火山ガラス

0.5mm

第3節 岩石石材鑑定（肉眼鑑定）

パリノ・サーヴェイ株式会社

石岡 智武

はじめに

讚良郡条里遺跡03-2の1区の縄文時代後期とされる第6-2a層上面検出遺構の遺物集中部からは、土器片、石鏃などの石器、剥片、礫などが出土している。特に礫は、鶏卵大以下のサイズで多数出土しており、集中して分布する産状を示す。自然礫として混在したとしては、不自然な産状でありその由来について関心が持たれている。

本報告では、これらの礫および礫群に伴って出土した石製品を中心として肉眼による石材鑑定を行い、周辺地質との比較からその由来について考察する。

1. 試料

肉眼鑑定を行った試料は、表1に示される礫172点および石製品類8点の計180点である。鑑定石材の状況写真は、写真図版1～2に掲載している。石製品類は、礫群に伴って出土している中世の硯、飛鳥時代の砥石、古墳時代の紡錘車・管玉、縄文時代後期の石刀などである。

2. 分析方法

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。礫については、加工痕の認められるものがあるため、加工されている可能性があると判断されるものについてはその程度を◎：明らかに加工している、○：おそらく加工している、および、△：剥離面あり（自然剥離の可能性十分あり）の3段階で分類した。

3. 結果

肉眼による石材鑑定結果を表1に示す。礫は、深成岩類として花崗岩1点、火山岩類として流紋岩1点および輝石安山岩1点、堆積岩類として礫岩1点、砂岩5点、頁岩3点、珪質頁岩3点およびチャート140点、変成岩類として変成チャート4点および珪質粘板岩2点、変質岩類として変はんれい岩1点および珪化砂岩1点、鉱物として脈石英8点が鑑定された。

礫の石材組成は、表2にまとめ、図1に円グラフとして示した。岩石のタイプ別には、堆積岩類が88.9%と最も多く（表2）、その中でもチャートが卓越しており、全礫種の81.9%を占めている（図1）。その他の各石材はおよそ3%以下であるが、脈石英はやや多く、4.7%で含まれている。礫にみられる加工痕は、表1に示されるように、◎と判定されるものが4点、○と判定されるものが4点、△と判定されるものが52点となっており、多数の礫が加工痕または剥離面を有していると判断される。加工は主にV字型の溝として認められ、石錘にしばしばみられる加工と共通している。また、未加工の礫についてもV字型に近い溝を有するものが多い傾向がある。

石製品類は、硯が頁岩、砥石が流紋岩・砂岩・緑色片岩、紡錘車が滑石、管玉が滑石、石刀・石器が頁岩と鑑定された。

4. 考察

(1) 礫群

讚良郡条里遺跡の東～南東には、白亜紀後期の領家深成岩類から主に構成される生駒山地が南北方向に延びて分布している（図2）。遺跡近傍の河川としては寝屋川があり、その支流は生駒山地やその西麓

表1 岩石肉眼鑑定結果

No.	取上番号	種類	時代	岩石名	備考	加工の程度
1	s34	礫	縄文時代後期	チャート		△
2	s40	礫	縄文時代後期	チャート		△
3	s43	礫	縄文時代後期	チャート		
4	s46	礫	縄文時代後期	チャート		
5	s50	礫	縄文時代後期	砂岩	新第三系	△
6	s53	礫	縄文時代後期	チャート		
7	s55	礫	縄文時代後期	脈石英		
8	s61	礫	縄文時代後期	チャート	黄玉様	△
9	s62	礫	縄文時代後期	チャート		△
10	s63	礫	縄文時代後期	チャート		○
11	s65	礫	縄文時代後期	チャート		
12	s66	礫	縄文時代後期	チャート		△
13	s67	礫	縄文時代後期	チャート		
14	s68	礫	縄文時代後期	チャート		△
15	s69	礫	縄文時代後期	チャート		
16	s70	礫	縄文時代後期	チャート		○
17	s71	礫	縄文時代後期	チャート		
18	s72	礫	縄文時代後期	チャート	黄玉様	△
19	s73	礫	縄文時代後期	チャート		
20	s74	礫	縄文時代後期	チャート		
21	s75	礫	縄文時代後期	チャート		
22	s76	礫	縄文時代後期	輝石安山岩		
23	s77	礫	縄文時代後期	チャート		
24	s78	礫	縄文時代後期	チャート		
25	s79	礫	縄文時代後期	チャート		△
26	s80	礫	縄文時代後期	チャート		◎
27	s81	礫	縄文時代後期	チャート		△
28	s82	礫	縄文時代後期	チャート		△
29	s83	礫	縄文時代後期	チャート	泥質	△
30	s84	礫	縄文時代後期	チャート		○
31	s85	礫	縄文時代後期	チャート		△
32	s86	礫	縄文時代後期	チャート		△
33	s87	礫	縄文時代後期	チャート		△
34	s88	礫	縄文時代後期	砂岩		
35	s89	礫	縄文時代後期	珪質頁岩	古期	
36	s90	礫	縄文時代後期	チャート		△
37	s91	礫	縄文時代後期	チャート		△
38	s92	礫	縄文時代後期	チャート		△
39	s93	礫	縄文時代後期	チャート		
40	s101	礫	縄文時代後期	チャート		◎
41	s118	礫	縄文時代後期	チャート		
42	s126	礫	縄文時代後期	珪質頁岩	古期	
43	s127	礫	縄文時代後期	チャート		
44	s128	礫	縄文時代後期	チャート		△
45	s129	礫	縄文時代後期	チャート		
46	s131	礫	縄文時代後期	変成チャート		△
47	s132	礫	縄文時代後期	チャート		
48	s133	礫	縄文時代後期	チャート		△
49	s134	礫	縄文時代後期	チャート		
50	s135	礫	縄文時代後期	チャート		
51	s136	礫	縄文時代後期	チャート		
52	s138	礫	縄文時代後期	チャート		△
53	s151	礫	縄文時代後期	チャート		
54	s169	礫	縄文時代後期	チャート		
55	s171	礫	縄文時代後期	脈石英		
56	s172	礫	縄文時代後期	チャート		
57	s175	礫	縄文時代後期	珪質粘板岩		
58	s176	礫	縄文時代後期	花崗岩		
59	s194	礫	縄文時代後期	チャート		△
60	s209	礫	縄文時代後期	チャート		
61	s228	礫	縄文時代後期	変成チャート		△
62	s231	礫	縄文時代後期	チャート		
63	s233	礫	縄文時代後期	チャート		
64	s242	礫	縄文時代後期	チャート		
65	s243	礫	縄文時代後期	チャート		△
66	s247	礫	縄文時代後期	頁岩	チャート質	
67	s259	礫	縄文時代後期	チャート		
68	s262	礫	縄文時代後期	チャート		◎
69	s264	礫	縄文時代後期	チャート		
70	s265	礫	縄文時代後期	チャート		△
71	s267	礫	縄文時代後期	チャート		
72	s268	礫	縄文時代後期	珪化砂岩		
73	s270	礫	縄文時代後期	チャート		△
74	s271	礫	縄文時代後期	チャート		
75	s272	礫	縄文時代後期	チャート		
76	s273	礫	縄文時代後期	チャート		
77	s275	礫	縄文時代後期	チャート		△
78	s276	礫	縄文時代後期	チャート		△
79	s277	礫	縄文時代後期	チャート		△
80	s278	礫	縄文時代後期	チャート	泥質	
81	s280	礫	縄文時代後期	チャート		
82	s281	礫	縄文時代後期	チャート		
83	s282	礫	縄文時代後期	チャート		
84	s283	礫	縄文時代後期	チャート		△
85	s285	礫	縄文時代後期	チャート		△
86	s286	礫	縄文時代後期	チャート		
87	s287	礫	縄文時代後期	チャート		△
88	s288	礫	縄文時代後期	脈石英		
89	s289	礫	縄文時代後期	脈石英		
90	s290	礫	縄文時代後期	チャート		△
91	s293	礫	縄文時代後期	チャート		△
92	s294	礫	縄文時代後期	チャート		△
93	s295	礫	縄文時代後期	チャート		
94	s296	礫	縄文時代後期	チャート		△
95	s297	礫	縄文時代後期	チャート		△
96	s298	礫	縄文時代後期	チャート		
97	s299	礫	縄文時代後期	チャート		△
98	s303	礫	縄文時代後期	チャート		
99	s304	礫	縄文時代後期	脈石英		
100	s305	礫	縄文時代後期	チャート		
101	s307	礫	縄文時代後期	チャート		△
102	s308	礫	縄文時代後期	チャート		○
103	s309	礫	縄文時代後期	チャート		
104	s310	礫	縄文時代後期	チャート		
105	s311	礫	縄文時代後期	チャート		
106	s312	礫	縄文時代後期	チャート		
107	s313	礫	縄文時代後期	チャート		△
108	s314	礫	縄文時代後期	チャート		
109	s315	礫	縄文時代後期	チャート		
110	s316	礫	縄文時代後期	チャート		
111	s318	礫	縄文時代後期	チャート		
112	s320	礫	縄文時代後期	チャート		
113	s322	礫	縄文時代後期	流紋岩	濃飛流紋岩	
114	s323	礫	縄文時代後期	チャート		
115	s324	礫	縄文時代後期	チャート		
116	s325	礫	縄文時代後期	チャート		
117	s326	礫	縄文時代後期	チャート		
118	s327	礫	縄文時代後期	チャート		
119	s328	礫	縄文時代後期	チャート		
120	s329	礫	縄文時代後期	チャート		◎
121	s331	礫	縄文時代後期	チャート		
122	s333	礫	縄文時代後期	チャート		
123	s334	礫	縄文時代後期	チャート		△
124	s335	礫	縄文時代後期	チャート		
125	s336	礫	縄文時代後期	チャート		
126	s337	礫	縄文時代後期	チャート		
127	s339	礫	縄文時代後期	チャート		△
128	s344	礫	縄文時代後期	砂岩		
129	s345	礫	縄文時代後期	珪質粘板岩		
130	s347	礫	縄文時代後期	礫岩	新第三系	
131	s351	礫	縄文時代後期	チャート		△
132	s352	礫	縄文時代後期	チャート		
136	s380	礫	縄文時代後期	チャート		
137	s383	礫	縄文時代後期	チャート		
139	s447	礫	縄文時代後期	チャート		
140	s448	礫	縄文時代後期	頁岩		
141	s474	礫	縄文時代後期	土製品?	含礫泥岩?	
142	s475	礫	縄文時代後期	チャート		
143	s476	礫	縄文時代後期	チャート		△
144	s477	礫	縄文時代後期	チャート		
145	s478	礫	縄文時代後期	変成チャート		
146	s480	礫	縄文時代後期	チャート		△
147	s481	礫	縄文時代後期	チャート		
148	s482	礫	縄文時代後期	チャート		
149	s483	礫	縄文時代後期	チャート		
150	s484	礫	縄文時代後期	チャート		
151	s485	礫	縄文時代後期	チャート		△
152	s486	礫	縄文時代後期	チャート		△
153	s487	礫	縄文時代後期	チャート		
154	s492	礫	縄文時代後期	チャート		
155	s523	礫	縄文時代後期	チャート		△
156	s524	礫	縄文時代後期	チャート	黄玉様	△
157	s530	礫	縄文時代後期	チャート		
158	s531	礫	縄文時代後期	チャート		
159	s532	礫	縄文時代後期	チャート		
160	s535	礫	縄文時代後期	チャート		
161	PL1-11	硯	中世	頁岩		
162	PL3-95	砥石	飛鳥時代	砂岩		
163	PL8-179	砥石	飛鳥時代	緑色片岩		
164	PL8-200	紡錘車	古墳時代	滑石		
165	PL9-220	砥石	飛鳥時代	流紋岩		
166	PL9-229	管玉	古墳時代	滑石		
167	PL17-334	石刀	縄文時代後期	頁岩		
168	PL18-342	石器	縄文時代後期	頁岩		
169	s125	礫	縄文時代後期	頁岩		
170	s130	礫	縄文時代後期	チャート		
171	s137	礫	縄文時代後期	変成チャート		
172	s263	礫	縄文時代後期	砂岩		
173	s269	礫	縄文時代後期	チャート		△
174	s274	礫	縄文時代後期	砂岩		
175	s284	礫	縄文時代後期	チャート		
176	s301	礫	縄文時代後期	チャート		
177	s306	礫	縄文時代後期	脈石英		
178	s317	礫	縄文時代後期	脈石英		
179	s321	礫	縄文時代後期	チャート		
180	s330	礫	縄文時代後期	チャート		
181	s332	礫	縄文時代後期	チャート		
182	s338	礫	縄文時代後期	脈石英		
183	s346	礫	縄文時代後期	変はんれい岩		
184	s479	礫	縄文時代後期	珪質頁岩	古期	△

加工: ◎明らかに加工している ○おそらく加工している △剥離面あり(自然剥離の可能性十分あり)

表2 礫群の石材組成

岩石のタイプ	岩石名	個数	%	
深成岩	花崗岩	1	0.6	0.6
火山岩	流紋岩	1	0.6	1.2
	輝石安山岩	1	0.6	
堆積岩	礫岩	1	0.6	88.9
	砂岩	5	2.9	
	頁岩	3	1.8	
	珪質頁岩	3	1.8	
	チャート	140	81.9	
変成岩	変成チャート	4	2.3	3.5
	珪質粘板岩	2	1.2	
変質岩	変はんれい岩	1	0.6	1.2
	珪化砂岩	1	0.6	
鉱物	脈石英	8	4.7	4.7
合計		171	100.0	

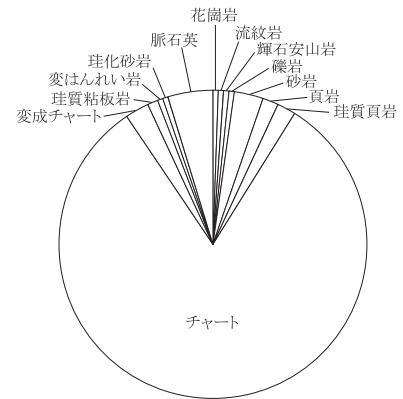


図1 礫群の石材組成

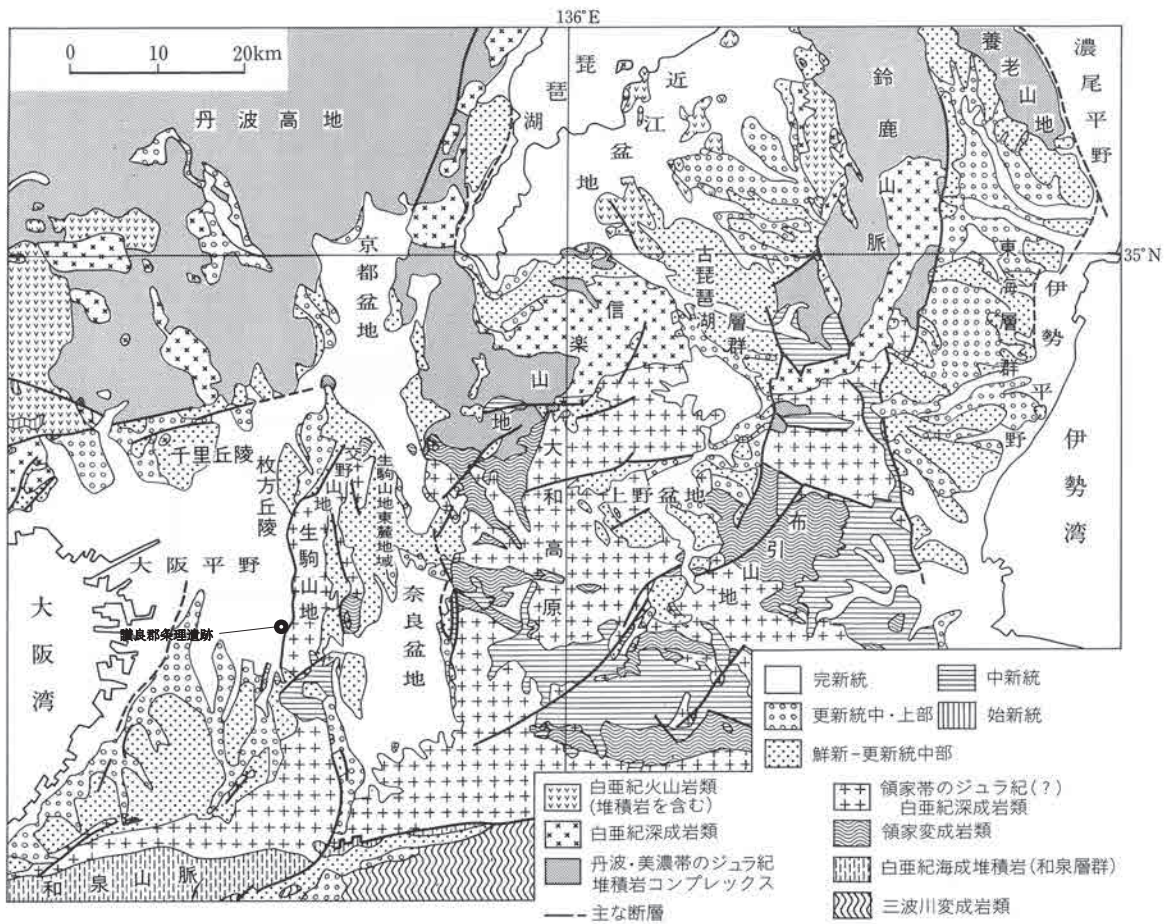


図2 近畿・東海地方の地質概略図 (宮地ほか、2001を一部編集)

に水源を持つ。そのため、礫などの碎屑物が遺跡周辺に分布する場合、生駒山地を構成する花崗岩類を主体とする組成を有すると推定される。

しかし、鑑定を行った礫は図1に示されるようにチャートが大部分を占めており、花崗岩やそれに伴う脈石英などの岩石・鉱物は合せて5%程度である。チャートを含む堆積岩類は、京都府を中心として広く分布するジュラ紀堆積岩コンプレックスの丹波帯に由来するものが大部分を占めていると考えられる。丹波帯は、淀川よりも北の地域、および、枚方市で淀川と合流する天野川より東方の地域において分布することから(図2)、これらの石材は遺跡周辺では入手不可能であり、搬入された石材と捉えることができる。礫表面が円磨された外形を示すことを考慮すると、河床礫を利用したと考えられ、近傍の河川となる淀川の河床より採取された可能性が示唆される。チャート以外の石材についても、淀川水系の地質と整合している。円磨された礫の由来としては、河床礫の他には、大阪層群に含まれる礫の可能性も考えられる。しかし、寝屋川市周辺の大阪層群に含まれる礫は細礫サイズのものが主体であり、出土した礫の粒径とは異なることが確認されている。

淀川の河床より採取したと考えた場合、チャートが卓越する礫群の石材組成は、淀川の河床礫の組成と異なっていることは明らかである。淀川の河床礫にはチャート以外の石材が多種多様に含まれていると考えられることから、礫の採取にあたっては用途による選別があったと推定され、その用途にはチャートがより適当であったものと理解される。礫の用途については、石錘様の加工が施されていることや、数cm大のものが多いということ considering すると、投網の重りなどへの利用や、近くに石鏃などの石器類が出土していることを考慮すると、石器製作に関わる石材であったなどの可能性が考えられる。礫の形態学的な観察からの検討も行う必要があり、材質としてチャートが適当であった理由の検討についても今後調査を進める上で重要であると考えられる。

(2)石製品類

石製品に使用されている石材は、火山岩類として流紋岩、堆積岩類として頁岩および砂岩、変成岩類として緑色片岩、および、鉱物として滑石が鑑定された。

流紋岩は砥石として使用されており、大阪府周辺における流紋岩の分布としては、兵庫県の武庫川流域に分布する白亜紀後期の有馬層群、琵琶湖南東に分布する白亜紀後期の湖東流紋岩類、生駒山地南部の信貴山周辺に小規模に分布する中期中新世の流紋岩の貫入岩などが知られている。

頁岩および砂岩は硯、砥石、石刀などに使用されており、堅硬緻密質であり、岩相から丹波帯のものと判断される。近畿地方における中世の硯の産地としては、滋賀県高島市安曇川町の高島石、京都府京都市右京区鳴滝地区の鳴滝石、京都府京都市右京区嵯峨清滝町の清滝石が有名である。

緑色片岩は砥石として使用されており、粗粒な斑状変晶を含む再結晶作用の進んだ岩相を示しており、三波川帯に由来する石材と判断される。最も近い三波川帯の分布地は、和歌山県の紀ノ川以南である。

滑石は紡錘車および管玉に使用されている。滑石は、一般に蛇紋岩類に伴う鉱物であり、蛇紋岩を含む地質としては京都府福知山市、兵庫県養父市、岡山県美作市大原地域などに分布する二畳紀の夜久野複合岩類などが候補となる。

古墳時代以降の石製品については、流通範囲がきわめて広範囲に及ぶため、地質分布からの産地の絞り込みは難しく、上記の産地よりもさらに遠方の産地も視野に入れて検討することが肝要である。

引用文献

宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭, 2001, 大阪東北部地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 130p.

第4節 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO₂）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2. 試料

分析試料は、1区の里道側地点、南西区地点、筋掘り地点、断割地点から採取された計26点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図4に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、

表1 植物珪酸体分析結果

分類群	地点・試料						南西区										筋振り	断面																																							
	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	14	16	17	21	22			23	24	25	26	27	28	29	30	31	32																													
イネ科																																																									
イネ	79	24	15	8	23	15											7											15	7																												
キビ族型																																																									
ヨシ属	14	6	7	22	8	8	8	15	7	15	45	30	8	15	29	20	14	15	23	38	15	8	8	15	27	20	15	7																													
シバ属	7																																																								
スキキ属型	7	6	7	8																								8	15	23																7											
ウシクサ族A	57	18	7	15	22	15	15	8	7	8	67	38	8	8	7	13	7	23	30	8	15	8	23	13	13	30	41																														
ウシクサ族B																																																									
Bタイプ	7																																																								
タケ亜科																																																									
Bambusoideae (Bamboo)																																																									
メダケ節型	14	18	7	15	7	23	30	38	15	38	7	23	23	14	20	7	8	46	30	38	23	15	38	265	91	443	300																														
ネザサ節型	50	90	37	68	67	136	106	105	157	106	8	23	98	65	20	14	68	53	83	53	53	75	152	411	156	731	669																														
クマザサ属型	6	7	7	7																								8	27	26	15	55																									
ミヤコザサ節型	7	6	7	8	8	30	8	22	15	7	15	15	13	7	8	23	8	23	8	23	33	13	44	55																																	
未分類等	64	12	45	23	7	15	38	15	22	23	15	8	8	29	27	55	15	15	15	30	8	66	20	52	27																																
その他のイネ科																																																									
表皮毛起源	14	18	7																								23	8	8	15	8	15	7	14	8	8	15	8	15	8	15	7	7	14													
棒状珪酸体	136	265	22	23	45	38	60	23	7	53	37	53	23	15	57	20	34	46	46	76	61	23	30	325	358	915	1051																														
未分類等	314	332	120	219	112	151	234	120	157	227	157	145	38	181	237	173	179	190	198	174	257	198	165	136	604	424	864	860																													
カヤヅグサ科(スガ属など)																																																									
Cyperaceae(Carex etc.)	6																																																								
シダ類																																																									
Fern	8																												7	8																											
樹木起源																																																									
Arboreal																																																									
ブナ科(シイ属)	6	8	15	23	15	23	30	23	15	15	15	15	15	7	14	15	30	8	8	13																																					
ブナ科(アカガシ亜属)																																																									
Castanopsis																																																									
Quercus subgen.Cyclobalanopsis																																																									
クスノキ科	23																												7	8	15	8	8																								
Lauraceae																																																									
はめ絵パズル状(ブナ属など)	8																												7	8	15	7	7																								
Jigsaw puzzle shaped (Fagus etc.)																																																									
その他	6	7	8	7	23	23	8	15	30	15	15	8	8	7	14	15	8	15	23	15	20	7	7																																		
(海綿骨針)	29	6	8	8	23	15	15	8	7	8	8	8	8	7	15	15	15	15	15	15	30	8	66	20	52	27																															
植物珪酸体総数	764	820	307	408	315	483	580	339	449	576	389	342	129	401	481	313	372	440	473	431	499	426	331	409	1811	1121	3152	3106																													
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m ² ・cm)																																																									
イネ	2.31	0.71	0.44	0.22	0.67	0.44											0.20											0.93	0.43																												
Oryza sativa (domestic rice)																																																									
ヨシ属	0.90	0.38	0.47	1.42	0.48	0.48	0.95	0.47	0.96	2.83	1.92	0.48	0.95	1.81	1.26	0.87	0.96	1.44	2.39	0.95	0.48	0.47	0.96	1.67	1.23	0.93	0.43																														
Phragmites (reed)																																																									
スキキ属型	0.09	0.07	0.09	0.09	0.09	0.19	0.28	0.09	0.19	0.28	0.26	0.35	0.44	0.17	0.44	0.09	0.26	0.35	0.44	0.26	0.17	0.44	3.08	1.06	5.14	3.48																															
Miscanthus type																																																									
メダケ節型	0.17	0.21	0.09	0.18	0.09	0.26	0.35	0.44	0.17	0.44	0.09	0.26	0.35	0.44	0.17	0.44	0.09	0.26	0.35	0.44	0.26	0.17	0.44	3.08	1.06	5.14	3.48																														
ネザサ節型																																																									
Pleioblastus sect. Medake																																																									
ネザサ属型	0.24	0.43	0.18	0.33	0.32	0.65	0.51	0.51	0.75	0.51	0.04	0.11	0.47	0.31	0.10	0.07	0.33	0.26	0.40	0.25	0.26	0.36	0.73	1.97	0.75	3.51	3.21																														
Pleioblastus sect. Nezasa																																																									
クマザサ属型	0.05	0.06	0.06	0.06	0.02	0.09	0.02	0.07	0.05	0.02	0.06	0.06	0.05	0.05	0.05	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.20	0.20	0.11	0.41																															
クマザサ属型																																																									
Miyakoza																																																									
Sasa (except Miyakoza)																																																									
ミヤコザサ節型	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.09	0.02	0.07	0.05	0.02	0.05	0.02	0.05	0.05	0.04	0.02	0.07	0.02	0.02	0.07	0.07	0.07	0.10	0.10	0.13	0.16																															
Miyakoza																																																									
タケ亜科の比率 (%)																																																									
メダケ節型	39	30	25	33	19	28	37	45	17	44	79	34	34	31	63	40	18	62	42	63	45	33	36	58	52	58	48																														
Pleioblastus sect. Medake																																																									
ネザサ節型	56	61	52	62	69	70	54	52	76	51	39	100	60	58	26	33	66	30	48	37	43	67	59	37	37	39	44																														
Pleioblastus sect. Nezasa																																																									
クマザサ属型	6	16	12	12	12	61	61	61	61	61	61	61	61	10	26	11	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6																														
Sasa (except Miyakoza)																																																									
クマザサ属型	5	3	7	4	4	2	10	2	7	5	21	6	6	11	11	5	8	8	3	12	6	2	2	2	2	2	2																														
Miyakoza																																																									
クマザサ属型																																																									

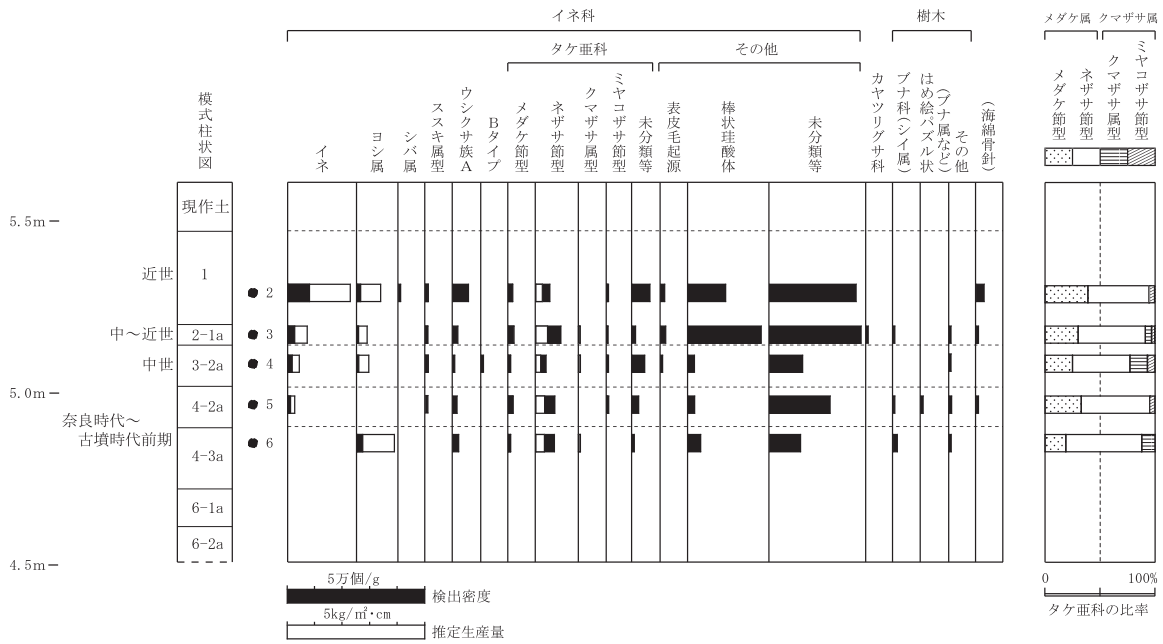


図1 讃良郡条里遺跡、里道側地点における植物珪酸体分析結果

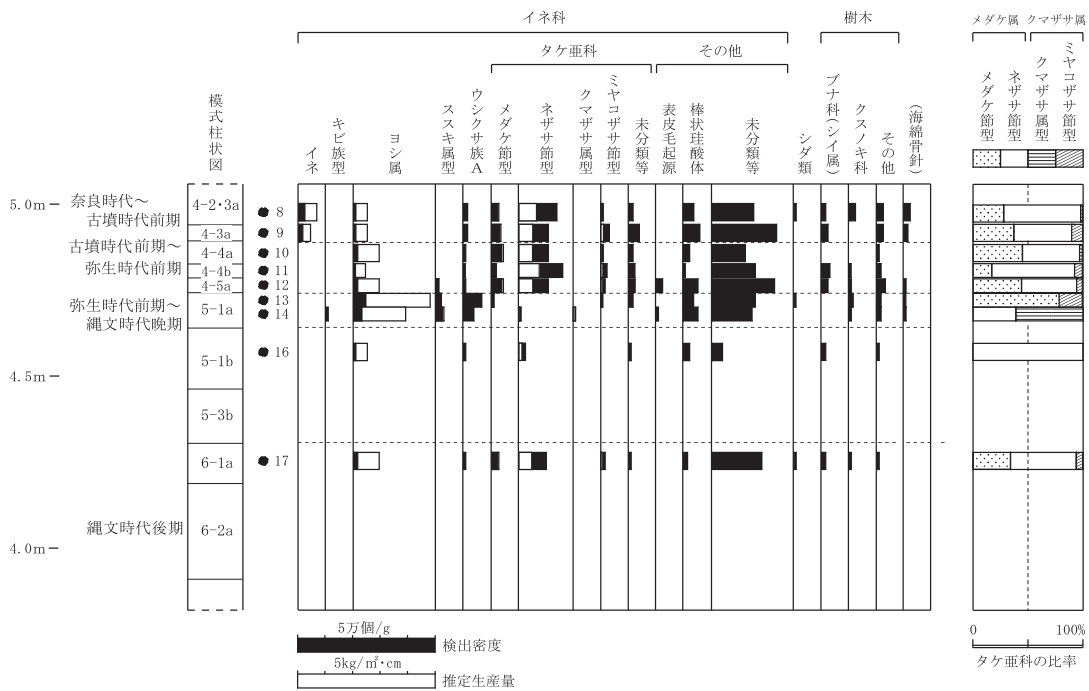
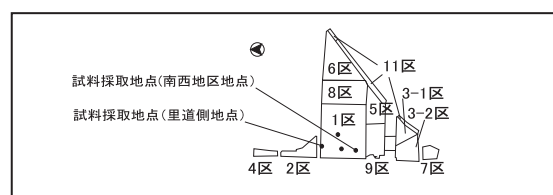


図2 讃良郡条里遺跡、南西地区における植物珪酸体分析結果



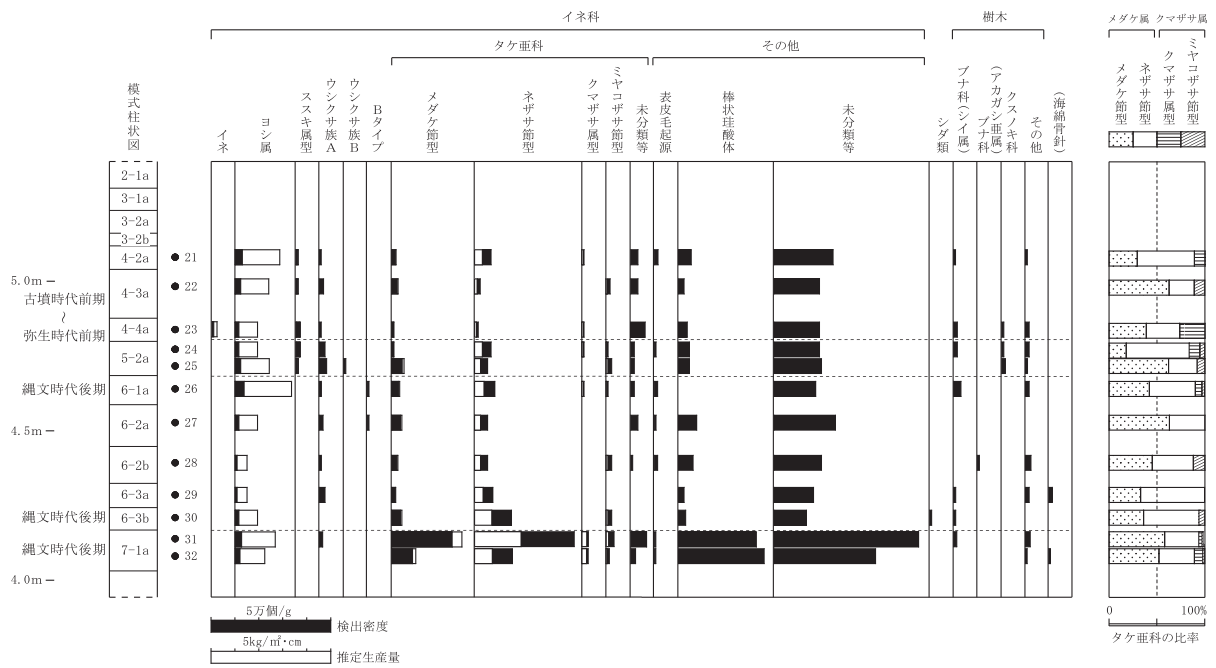


図3 讚良郡条里遺跡、筋掘り地点における植物珪酸体分析結果

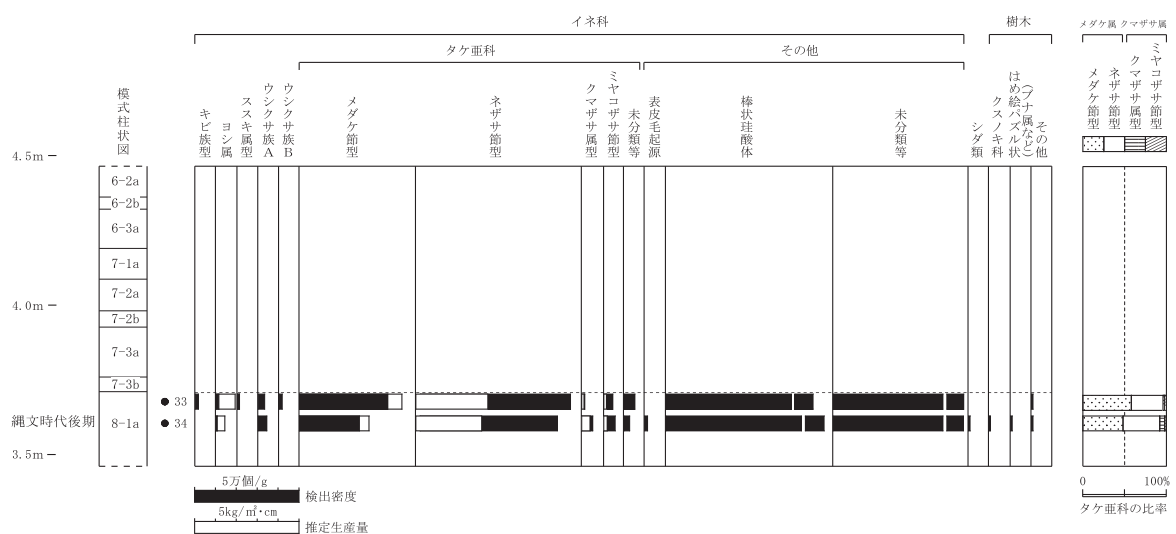
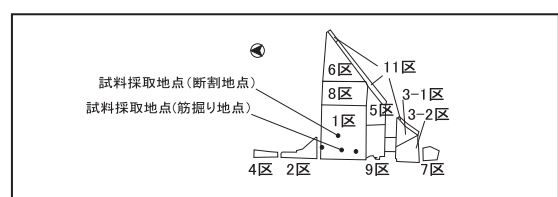


図4 讚良郡条里遺跡、断割地点における植物珪酸体分析結果



ウシクサ族B、Bタイプ（ヌマガヤ属類似）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔カヤツリグサ科〕

〔シダ類〕

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、その他

5. 考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。

ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 里道側地点（図1）

1層（試料2）から4-3a層（試料6）までの層準について分析を行った。その結果、近世とされる1層（試料2）から古墳時代～奈良時代とされる4-2a層（試料5）までの各層からイネが検出された。このうち、近世とされる1層（試料2）では密度が7,900個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

中世～近世とされる2-1a層（試料3）、中世とされる3-2a層（試料4）、古墳時代～奈良時代とされる4-2a層（試料5）では、密度が800～2,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 南西区地点（図2）

4-2・3a層（試料8）から6-1a層（試料17）までの層準について分析を行った。その結果、奈良時代～古墳時代とされる4-2・3a層（試料8）と4-3a層（試料9）からイネが検出された。密度は1,500～2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) 筋掘り地点（図3）

4-4a層（試料23）から7-1a層（試料32）までの層準について分析を行った。その結果、弥生時代～古墳時代前期とされる4-4a層（試料23）からイネが検出された。密度は700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

4) 断割地点 (図4)

8-1a層 (試料33, 34) について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したのものも含まれている。

これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) 植物珪酸体の出現状況

最下位の8-1a層では、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。メダケ節型の密度は44,300個/g、ネザサ節型は73,100個/gとかなり高い値であり、棒状珪酸体やイネ科 (未分類等) などを合わせた植物珪酸体総数は30万個/g以上にも達している。また、同層ではクスノキ科などの樹木も少量検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。

7-1a層では、メダケ節型やネザサ節型がやや減少しており、キビ族型やススキ属型は見られなくなっている。また、同層ではブナ科 (シイ属) が出現している。6-3b層から6-1a層にかけては、メダケ節型やネザサ節型が大幅に減少しており、その他の分類群も減少している。5-2a層から5-1a層にかけても、おおむね同様の結果であるが、5-1a層ではヨシ属が増加しており、ススキ属型も出現している。

4-5a層から4-2a層にかけては、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ節型、ブナ科 (シイ属)、クスノキ科なども検出された。また、前述のように4-2a層より上位ではイネが出現している。3-2a層から1層にかけては、イネが増加しており、ブナ科 (シイ属) などの樹木は減少している。

おもな分類群の推定生産量によると、8-1a層から7-1a層にかけてはメダケ節型やネザサ節型が卓越しており、ヨシ属も比較的多い。6-3b層から4-4a層にかけては、おおむねヨシ属やネザサ節型が優勢であり、5-1a層ではヨシ属が優勢となっている。4-3a層から1層にかけては、イネがしだいに優勢となっている。

2) 植生と環境の推定

縄文時代後期とされる8-1a層から7-1a層にかけては、メダケ属 (メダケ節やネザサ節) などの竹笹類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、とくに8-1a層の時期にはメダケ属が繁茂するような状況であったと推定される。また、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られ、遺跡周辺にはブナ科 (シイ属) やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

同じく縄文時代後期とされる6-3b層から6-1a層にかけては、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、比較的乾燥したところにはメダケ属などの竹笹類やウシクサ族などが生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはブナ科（シイ属）やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。縄文時代晩期から弥生時代前期とされる5-1a層の時期には、一時的にヨシ属などが生育する湿地的な環境になったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところも見られたと推定される。

弥生時代～古墳時代前期とされる4-3a層から中～近世とされる2-1a層にかけては、ヨシ属などが生育する湿地的なところを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと考えられ、周辺にはメダケ属などの竹笹類、およびブナ科（シイ属）などの照葉樹林が分布していたと推定される。近世とされる1層の時期には、水田稲作が本格化したと考えられ、周辺の照葉樹林は大幅に減少したと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、近世とされる1層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、中世～近世とされる2-1a層、中世とされる3-2a層、弥生時代～奈良時代とされる4-2a層、4-2・3a層、4-3a層、4-4a層でもイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

縄文時代後期は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはブナ科（シイ属）やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

縄文時代後期から弥生時代にかけては、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、とくに縄文時代晩期～弥生時代前期頃とされる5-1a層の時期にはヨシ属が多く見られたと推定される。また、比較的乾燥したところにはメダケ属などの竹笹類やウシクサ族などが生育していたと考えられ、遺跡周辺にはブナ科（シイ属）やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

古墳時代～奈良時代には、ヨシ属などが生育する湿地を利用して水田稲作が開始され、その後もおおむね継続して行われて現在に至ったと考えられる。また、水田稲作の本格化に伴って、周辺の照葉樹林は大幅に減少したと推定される。

文献

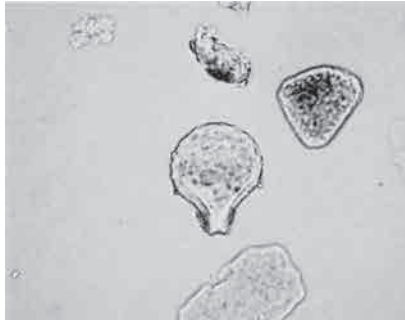
杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2)、p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学、同成社、p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学、17、p.73-85.



イネ
試料8



ヨシ属
試料4



ススキ属形
試料25



メダケ節型
試料2



ネザサ節型
試料9



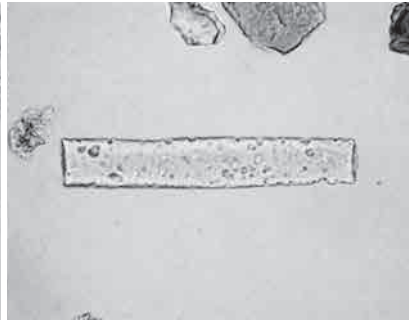
クマザサ属型
試料34



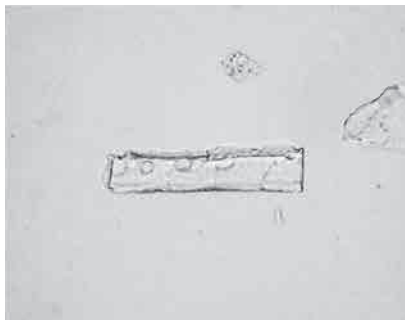
ミヤコザサ節型
試料8



表皮毛起源
試料2



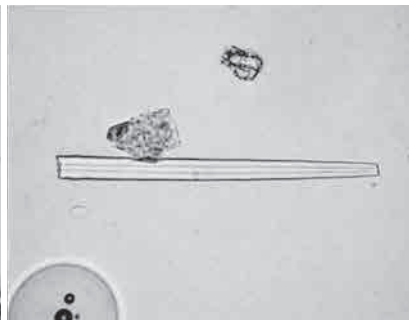
棒状珪酸体
試料34



シダ類
試料8



ブナ科(シイ属)
試料24



海綿骨針
試料5

50 μm

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

第5節 花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、1区の里道側地点、南西区地点、筋掘り地点、断割地点から採取された計25点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同じ試料である。（試料採取地点はP145・146参照）

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉10、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉8、シダ植物孢子2形態の計22である。分析結果を表1に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、寄生虫卵は検出されなかった。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科、シソ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

（2）花粉群集の特徴

1) 里道側地点

1層(試料2)から4-3a層(試料6)までの層準について分析を行った。その結果、花粉はほとんど検出されなかった。

2) 南西区地点

4-2・3a層(試料8)から6-1a層(試料17)までの層準について分析を行った。その結果、下位の6-1a層(試料17)と5-1b層(試料16)では、花粉はほとんど検出されなかった。5-1a層(試料13、14)では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、およびシダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。4-5a層(試料12)では、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、セリ亜科、シダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。4-4b層(試料12)では、セリ亜科、ヨモギ属、シダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。4-4a層(試料10)から4-2・3a層(試料8)にかけては、花粉はほとんど検出されなかった。

3) 筋掘区地点

5-2a層(試料24)から7-1a層(試料32)までの層準について分析を行った。その結果、7-1a層(試料31、32)では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、ヨモギ属、シダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。6-3b層(試料30)では、花粉はほとんど検出されなかった。6-3a層(試料29)から6-2a層(試料27)にかけては、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、セリ亜科、ヨモギ属、シダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。6-1a層(試料26)では、イネ科、セリ亜科、ヨモギ属、シダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。5-2a層(試料24、25)では、花粉はほとんど検出されなかった。

4) 断割地点

8-1a層(試料33、34)について分析を行った。その結果、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、シダ植物孢子などが検出されたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

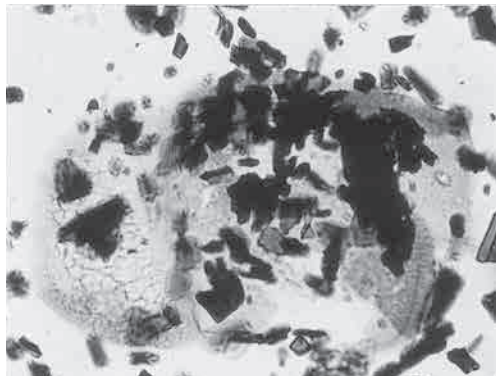
本遺跡では、各層準とも花粉があまり検出されず、とくに4-4a層より上位では花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことが考えられるが、層準によっては水流による淘汰を受けた可能性も想定される。花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、縄文時代後期とされる8-1a層および7-1a層の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、シダ類などが生育していたと考えられ、周辺にはカシ類(コナラ属アカガシ亜属)、ナラ類(コナラ属コナラ亜属)、クリなどが分布していたと推定される。同じく縄文時代後期とされる6-3a層から6-1a層にかけては、イネ科、ヨモギ属、シダ類などが生育していたと考えられ、周辺にはカシ類などが分布していたと推定される。縄文時代晩期～弥生時代前期頃とされる5-1a層から弥生時代とされる4-5a層にかけては、イネ科、ヨモギ属、セリ亜科、シダ類などが生育していたと考えられ、周辺にはカシ類、ナラ類などが分布していたと推定される。

文献 中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.

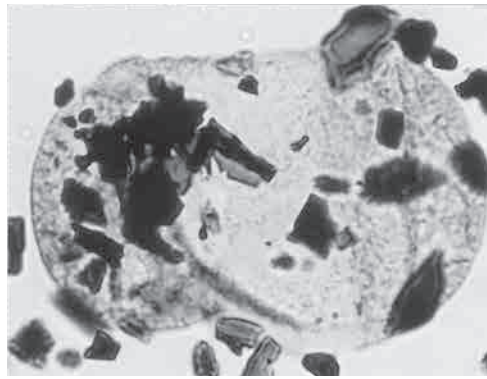
金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.



1 モミ属



2 マツ属複維管束亜属



3 クリ

10 μm

10 μm



4 スギ



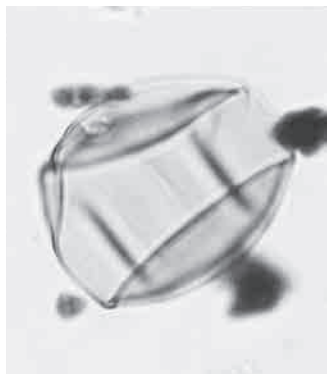
5 コナラ属コナラ亜属



6 コナラ属アカガシ亜属



7 イネ科



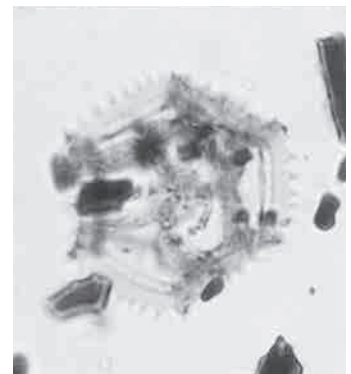
8 イネ属型



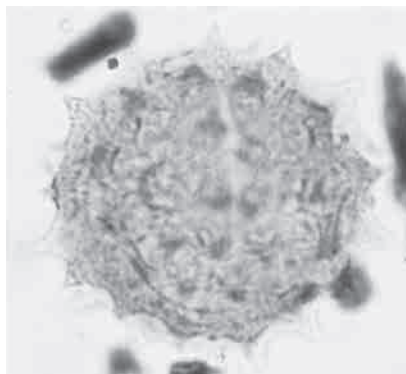
9 カヤツリグサ科



10 セリ亜科



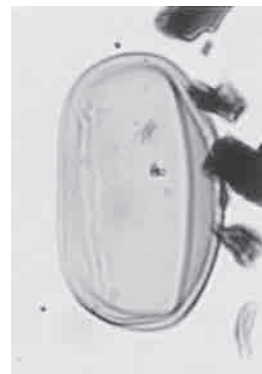
11 タンポポ亜科



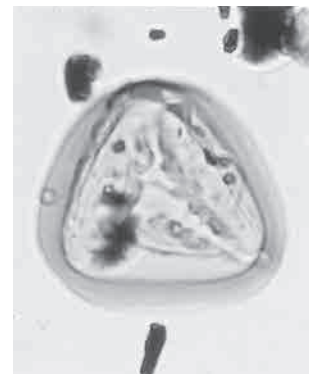
12 キク亜科



13 ヨモギ属



14 シダ植物単条溝胞子



15 シダ植物三条溝胞子

10 μm

讚良郡条里遺跡の花粉・胞子

第6節 珪藻分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、里道側地点、南西区地点、筋掘り地点、断割地点から採取された計25点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。（試料採取地点はP145・146参照）

3. 方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）7分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表1に示す。以下に表記した分類群を記す。

〔貧塩性種〕

Gomphonema angustatum、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula elginensis*、*Nitzschia clausii*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia microstauron*、*Stauroneis legumen*

(2) 珪藻群集の特徴

1) 里道側地点

1層（試料2）から4-3a層（試料6）までの層準について分析を行った。その結果、珪藻はほとんど検出されなかった。

2) 南西区地点

4-2・3a層（試料8）から6-3a層（試料17）までの層準について分析を行った。その結果、珪藻は検出されなかった。

3) 筋掘り地点

5-2a層（試料24）から7-1a層（試料32）までの層準について分析を行った。その結果、5-2a層（試料24）では流水不定性種の*Nitzschia clausii*などが検出されたが、いずれも少量である。その他の層準で

表1 珪藻分析結果

分類群	里道側								南西区								筋掘り								断割					
	1層	2-1a層	3-2a層	4-1a層	4-2a層	4-1・2a層	4-2a層	4-3a層	4-3b層	4-4a層	5-1a層	5-1a層	5-1b層	6-1a層	5-2a層	6-1a層	6-2a層	6-2b層	6-3a層	6-3b層	7-1a層	7-1a層	8-1a層	8-1a層	8-1a層	33	34			
食塩性種 (淡水生種)																														
<i>Gomphonema angustatum</i>																											1			
<i>Hantzschia amphioxys</i>																											1			
<i>Navicula elginensis</i>																														
<i>Nitzschia clausii</i>																														
<i>Nitzschia palea</i>																														
<i>Pinnularia microstauron</i>																														
<i>Stauroneis legumen</i>																														
合計	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0			
未同定	0	4	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
破片	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	0.0	1.0	6.0	2.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	2.0	0.0			
	$\times 10^3 \times 10^2 \times 10^2$														$\times 10^3 \times 10^2$														$\times 10^2 \times 10^2$	
完形殻保存率 (%)	0.0	(-)	75.0	(-)	0.0	(-)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	88.2	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	(-)	(-)	(-)	0.0			

は、珪藻はほとんど検出されなかった。

4) 断割地点

8-1a層（試料33、34）について分析を行った。その結果、珪藻はほとんど検出されなかった。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

本遺跡では、各層準とも珪藻がほとんど検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったことや、水流による淘汰を受けたことなどが考えられる。また、集約性の高い水田では、珪酸濃度低下のため珪藻殻が形成されなかったり、珪藻殻が溶脱して残存しないこともある。なお、5-2a層では少量ながら貧塩性種（淡水生種）の流水不定性種などが検出されることから、何らかの不安定な水域が示唆される。



讃良郡条里遺跡の珪藻

10 μm

1. *Pinnularia microstauron* 2. *Gomphonema angustatum* 3. *Stauroneis legumen* 4. *Nitzschia clausii* 5. *Nitzschia palea*

文献

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol. Suppl. 15, p. 131-506.

Patrick, R. Eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.

Patrick, R. Eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.

Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saphophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

第7節 第6-1面石器集中部の検討

検出状況

石器集中部は、1区第6-1面で検出された。石器はほとんどがサヌカイト製であり、第5層最下部で出土し始め、第6-1面検出作業をすすめていくなかで多量に出土したため、これを石器集中部として調査を行ったのである。石器をはじめとする大量の遺物をトータルステーションで座標計測して取り上げ、排土は区画ごとに採集して持ち帰り、ふるい分けを行った。

なお、第6-1a層では縄文後期無文土器の一括資料が検出された。したがって、第6-1a層は縄文後期に比定され、本遺構も当該期に帰属する可能性が高い。

石器の他には、土器と礫が出土している。各遺物は、折り重なった状態のものはほとんどなく、むしろ散乱したような状態で出土した。垂直方向にある程度の幅をもちながらも、大局的には、第6-1a層の堆積の傾斜に沿ってひろがっていた。

各遺物の分布状況については後で詳しく述べるが、本遺構は、そのほぼ中央を南北方向に走る流路によって2つに分断されている。しかし、第6-1a層が流路にきられるのではなく流路内にまで堆積していることから、この流路は第6-1a層形成時には存在していたことがわかる。したがって、遺物の分布が流路の東西に分かれるという状況は、少なくとも流路の存在そのものからは2次的なものとはいえない。

出土遺物の組成

石器 石核(11点)、剥片(3776点)、楔形石器(13点)、石鏃(15点)、石錐(4点)、削器(2点)のサヌカイト製石器がほとんどを占め、磨石(1点)と石剣(1点)がこれに加わる。
土器 650点が出土した。摩滅した小片ばかりで器種等も不明であるが、先に触れた検出状況から、縄文後期土器であると思われる。
礫 181点が出土した。図96-282・283以外は人為的な痕跡が認められなかった。円～隅丸方形を呈する。大きさは、4～5cmが最も多いが、ばらつきがある(図105)。

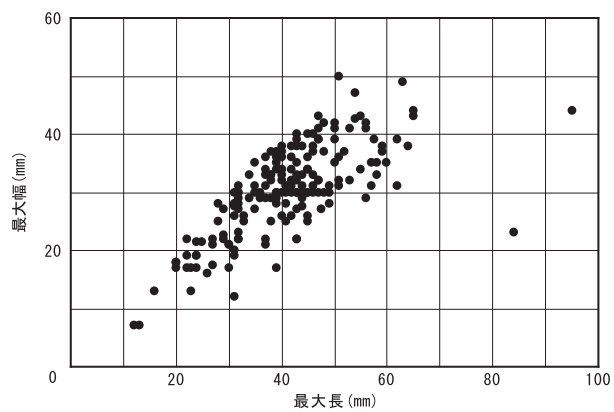


図105 礫の長幅分布

剥片の分類 (図106)

剥片には特徴的なものが2種類見られ、それぞれを剥片1、剥片2とした。また、その他のものを一括して剥片3とした。

剥片1：両極打法で剥離されたとみられる剥片。腹面には対称的な方向にひろがる2つのリング群が認められる。

剥片2：背面につぶれの認められる剥片。

剥片3：剥片1・2以外一般。

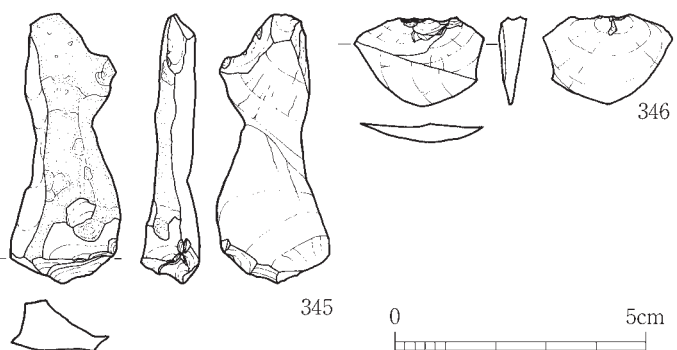


図106 剥片1と剥片2

出土遺物の分布

石器 332点を座標計測して取り上げ、3491点を区画ごとに取り上げた（このうち639点は作業中に出土区不明となった）。前者から得られた水平分布は、大きくA、Bの2群に分かれ、それぞれ特に密集する部分をもつ（図107）。後者を加えてさらに検討すると、剥片3の小サイズ（1cm未満）以外は想定ラインを越えないことがわかる（図108・109）。よって、想定した密集部の範囲は全体として妥当であろう。

垂直分布は約20cmの幅がある。第6-1a層は土壌化しており、この20cmという振幅は、植物の根や動物の行為による、小規模な2次的移動の結果であると思われる。集中部Aと集中部Bの比高は最大で約65cmであるが、これは集中部Bから集中部Aに向かって地形が傾斜しているためである。

これらの状況から考えて、石器の分布は若干の2次的移動が考えられるとはいえ、原位置から大幅には動かない程度のものであろう。

土器 532点を座標計測して取り上げた。石器の分布と同じように2群に分けられるが、明らかに密集する部分はなく、ある程度の同時性以外には石器との有意な空間的關係を認め得ない（図110上）。

礫 179点を座標計測して取り上げた。2群に分かれるが、 $X = -138424$ 、 $Y = -33549$ 付近に著しく密集している。この密集部は集中部Aの範囲内にはあるものの、集中部A密集部とは明らかにずれた位置にある（図110下）。したがってこれも、石器との関係について、同時期であるということ以外には指摘できない。

石器を類型別に見ると、各類型とも、両集中部それぞれにおいて、分布の中心をほぼ同じくしている（図111）。少量ではあるが、剥片1・石錐・削器は集中部Aにのみ認められるので、集中部Aと集中部Bとの間には若干の違いがあるといえる。しかし、少なくとも石核・剥片2・剥片3・楔形石器・石鏃をセットに持つことは共通している。以上から、両集中部において、縄文時代後期のある段階に石核・剥片2・剥片3・楔形石器・石鏃を伴うなんらかの行為が行われていた可能性が高いと判断される。

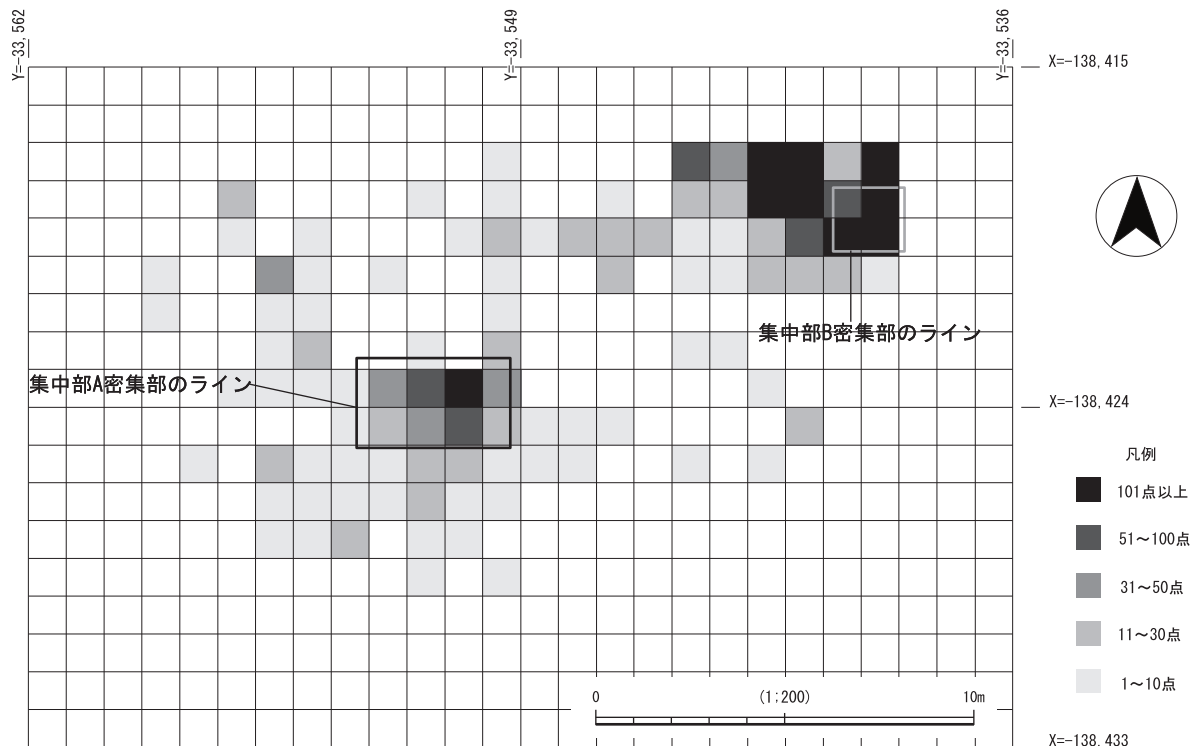


図108 剥片3（小サイズ）の区画別出土数

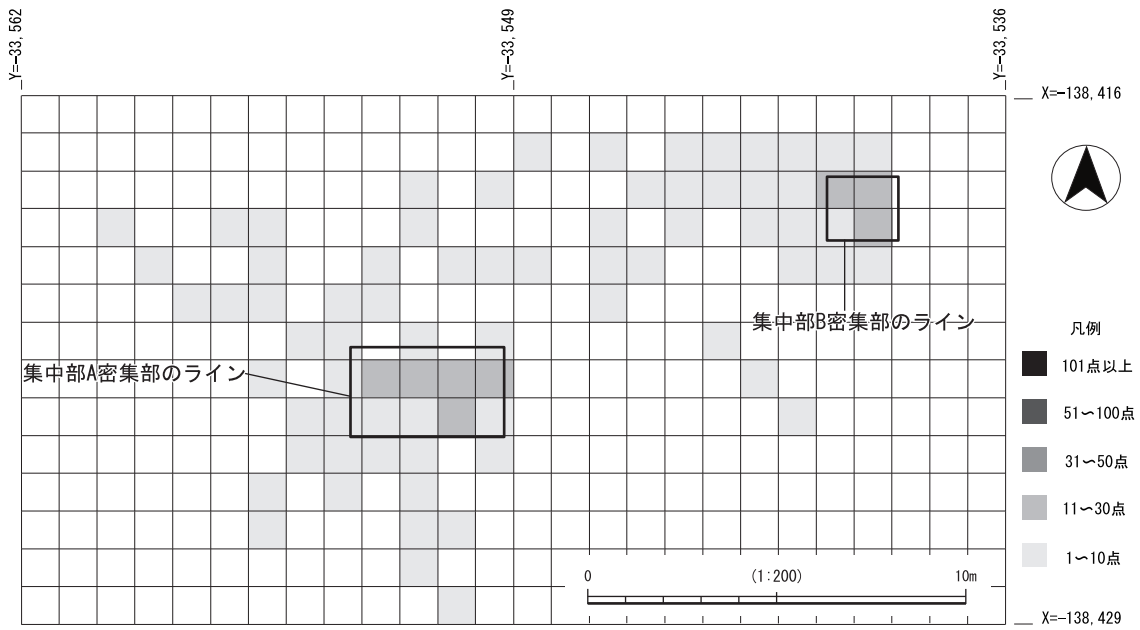


図109 剥片3（小サイズ）以外の区画別出土数

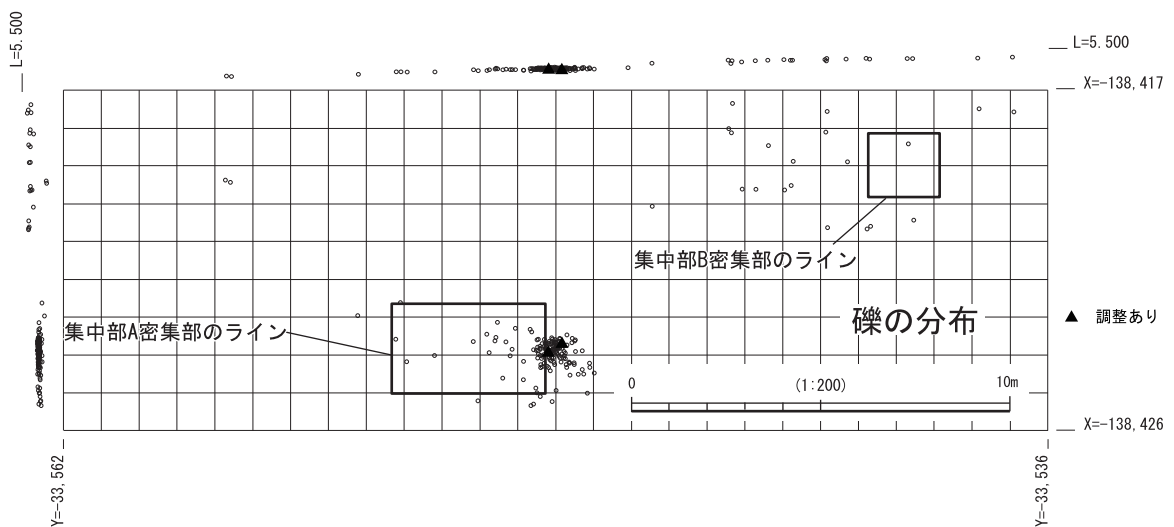
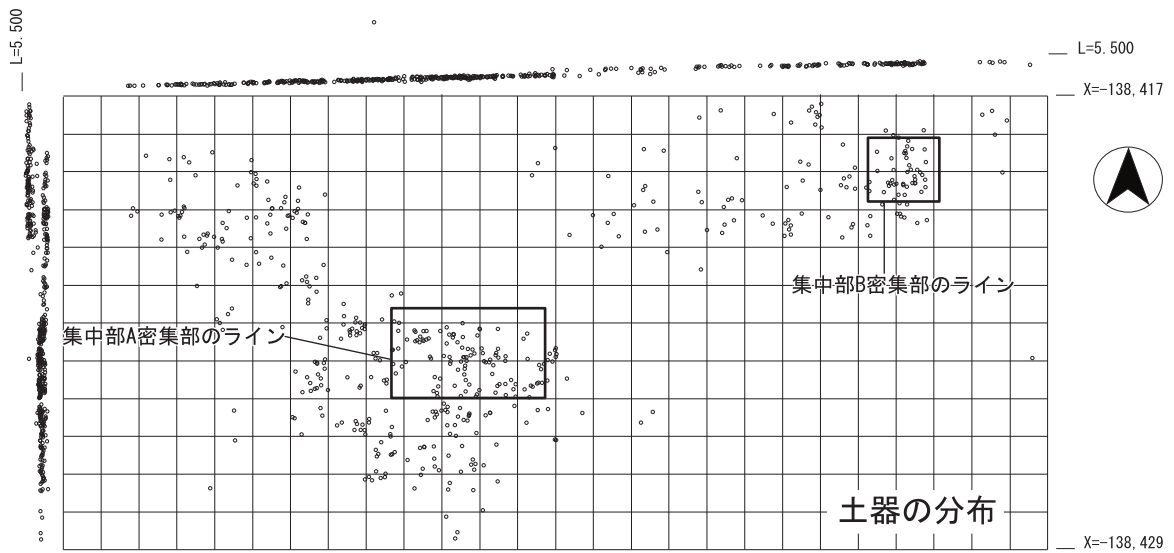
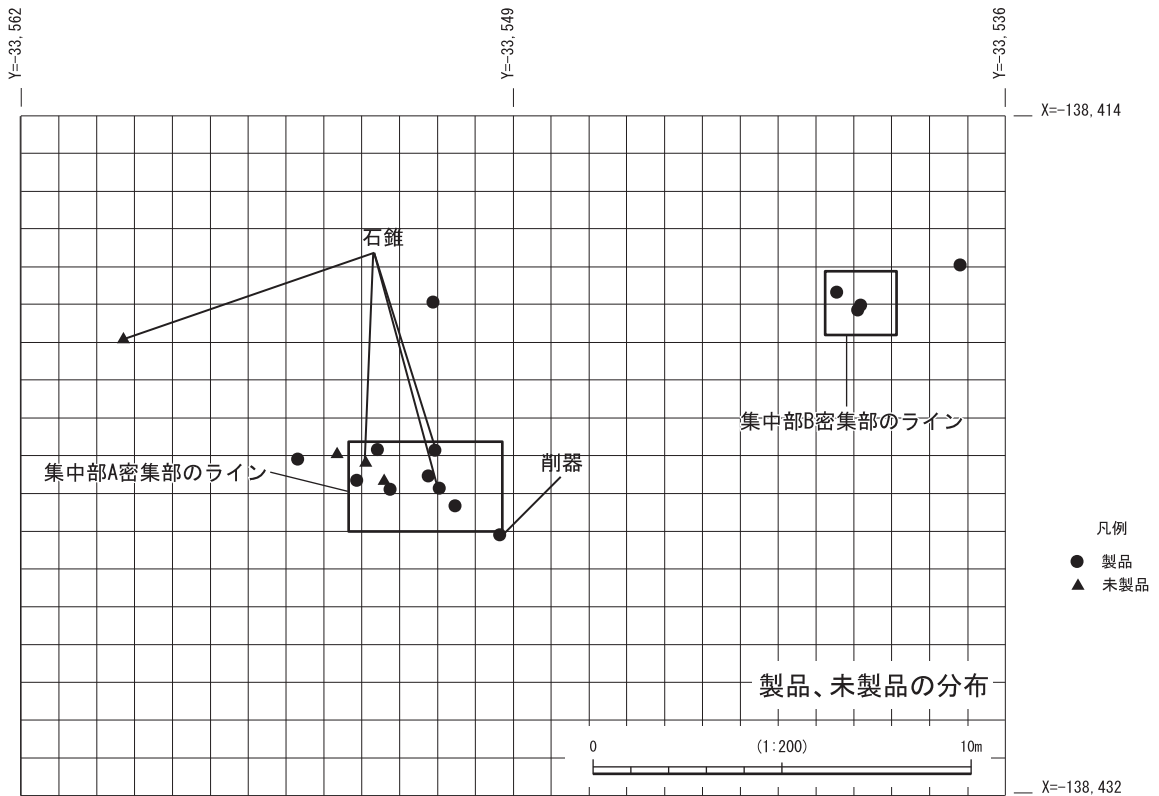
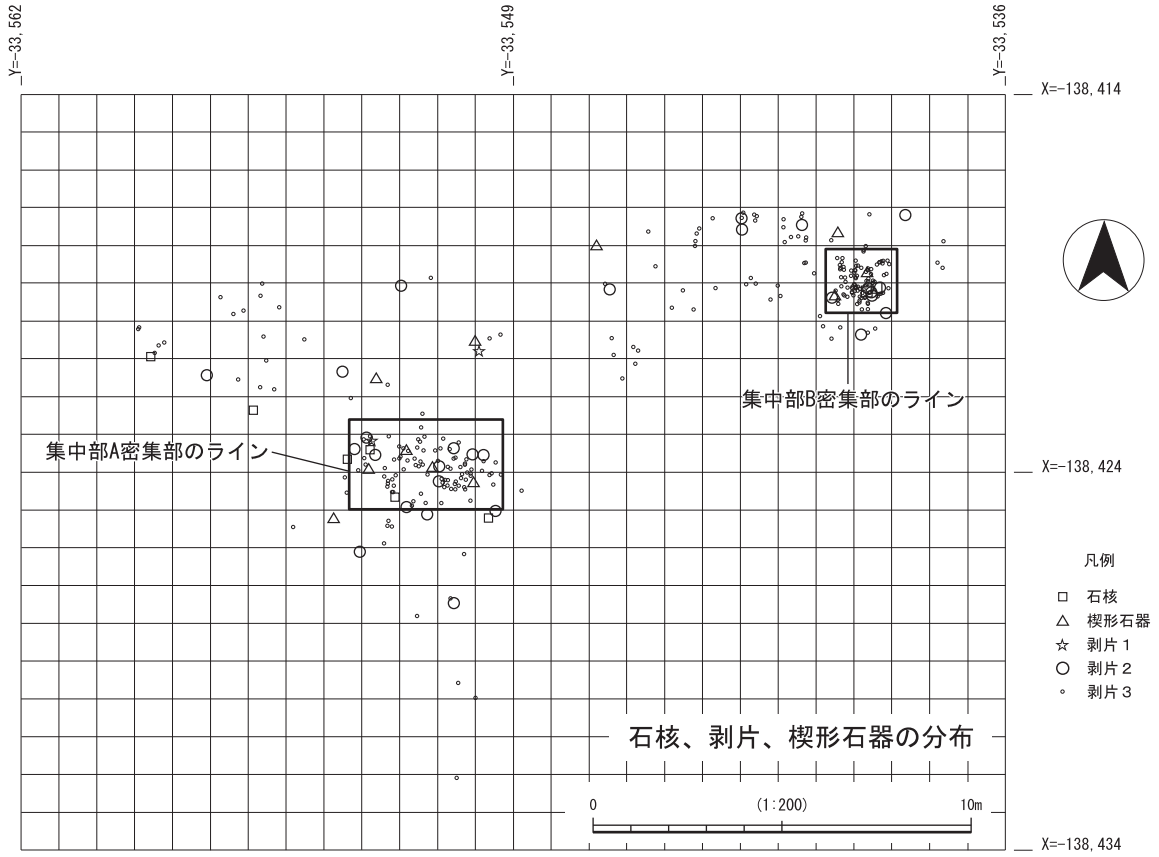


図110 土器・礫の分布



※特に注記のない限り石鏃

図111 類型別に見たサヌカイト製石器の分布

石器各類型の大きさ

完形品3813点のうち、具体的な数値を計測できたのは長軸（最大長）1 cm以上のものであり、資料数は317点である。5 mm以上1 cm未満のものは、石核が1点、剥片2が11点、剥片3が1204点であった。5 mm未満のものは、剥片2が1点、剥片3が2279点であった。

長幅分布の中心を比較すると、石鏃と楔形石器が比較的近い（図112・113）。ただし、楔形石器のなかには石鏃よりやや大きなものや幅狭のものが一定量存在する。剥片2は1 cm未満と2～3 cmの2つに分布の中心があるようで、後者は石鏃と重なる。石核は、ばらつきがある。剥片3は1 cm未満に非常に多く、小さいものが比較的多いといえる。そのほかのものについては量が少ないため明確な傾向を指摘できない。剥片1は、長さ5.3 cm・幅2.1 cmの大型品と、長さ1.8 cm・幅1.6 cmの小型品が認められた。石

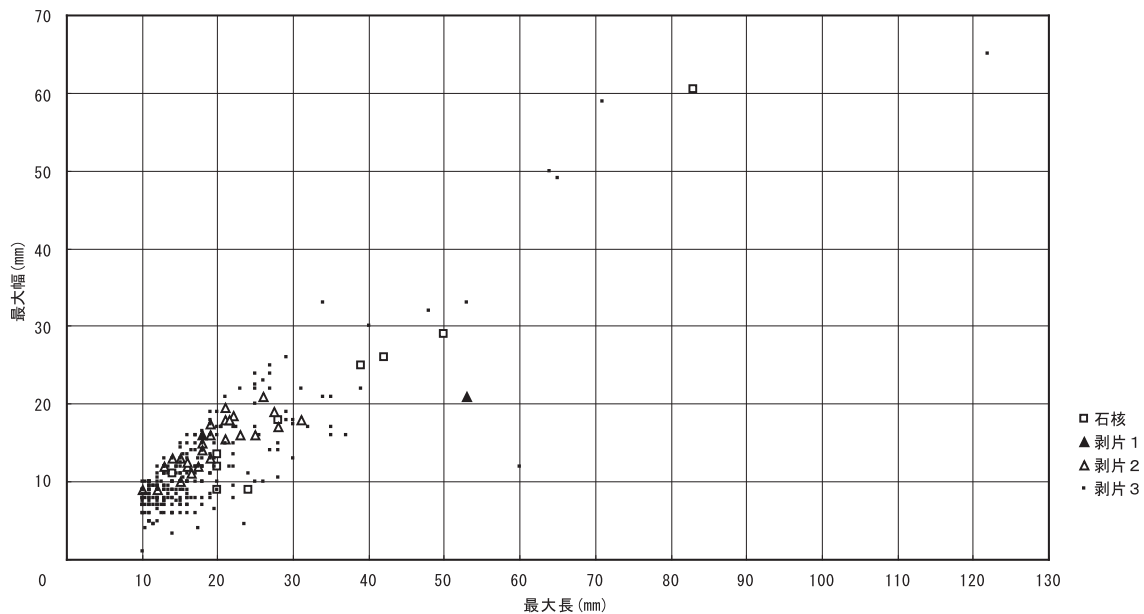


図112 石核・剥片の長幅分布

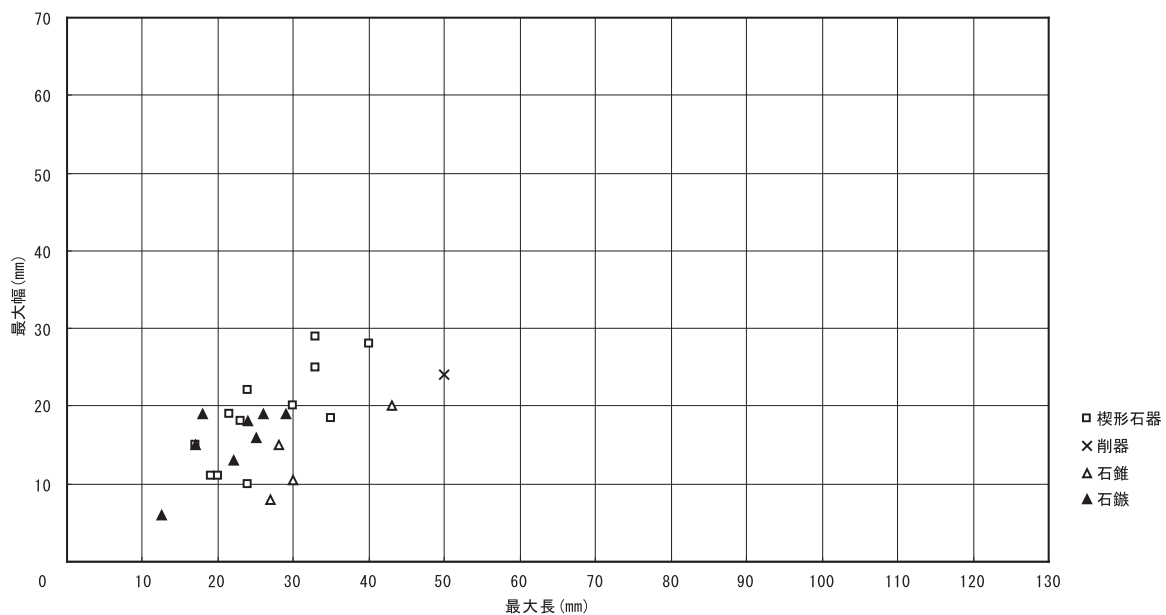


図113 楔形石器・削器・石鏃・石鏃の長幅分布

錐は、長さ4.3cm・幅2.0cm、長さ2.8cm・幅1.5cm、長さ3.0cm・幅1.0cm、長さ2.7cm・幅0.8cmのものが
見られる。削器は、長さ5.0cm・幅2.4cmのものが見られた。

以上から、似た大きさのものが比較的多いという意味で、楔形石器・剥片2・石鏃は石器製作上近い
関係にあった可能性がある。そこで、以下はこれらの関係について探してみたい。

楔形石器・剥片2・石鏃の関係

剥片2の石鏃との類似性 大きさの上で剥片2の一部が石
鏃と近い関係をもつ可能性があることはすでに述べたが、
形状の上でも、石鏃に似たものが存在する。これは、三角
形を呈し、頂点を上にしたときの長軸と短軸の比が1：1
～2：1となるもので、4点認められる（図114）。全体
の数からすると限りなく0%に近いが、本類型以外には見
られなかった。

剥片2の素材 剥片2はつぶれのあることを大きな特徴と
するが、背面にあることから、当然このつぶれは剥片剥離
の行われる前にすでに存在していたということがわかる。つまり、つぶれを有する何らかの石器から剥
ぎ取られたことになる。一般的に言って、つぶれは様々な形で生じるので、剥片2に対する石核となっ
た可能性のある石器も様々な存在することになる。しかし、石器集中部においては楔形石器以外にはつ
ぶれをもつ石器は希少である。したがって、少なくとも本遺構においては楔形石器から剥片2を生産し
た可能性が高いと考えられる。

以上から、楔形石器から剥片2を生産し、それを2次加工して石鏃が製作されたと推定される。

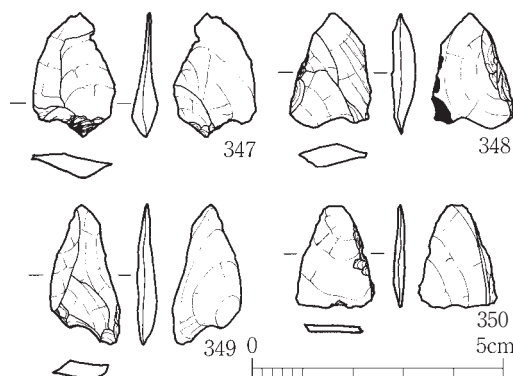


図114 石鏃に形状の類似した剥片2

本遺構における石器製作と今後の展望

これまで述べてきたことをまとめると次のようになる。

I 2つの空間的単位が認められ、それぞれ、少なくとも石核・剥片2・剥片3・楔形石器・石鏃を
セットとして持つ。

II 形態的に見て、楔形石器から剥片2が生産され、それを素材として石鏃が製作された可能性が高い。

この2点から、本遺構では、2つの作業空間でそれぞれ楔形石器を石核とした石鏃素材剥片の生産か
ら石鏃製作に至るまでが行われていた可能性が高いと思われる。

従来から、楔形石器が何に使用されたか議論されてきた。詳細は松田順一郎1999にまとめられてい
るので省略するが、大きく分けて①彫器説、②楔説、③石鏃の素材剥片生産のための石核説がある。なお、
石鏃の素材そのものであるという考えかたも、③に含める。

まず、彫器説は、「截断面」の微細剥離を使用痕とみなすものである（柳田俊雄1974）。これについ
ては、そのような特徴をもつ資料の数が少ないことからすでに否定的見解が提出されている（佐藤良
二・吉井宣子1984）が、本遺構から出土した楔形石器においても、該当例は1点のみであった。さらに、
「截断面」自体をもたないものも1点存在する。よって、そのように用いられた場合が全くないとはい
えないにしても、多くがそうであったとは考えにくい。

次に、その名の通り楔として使用された説についてであるが、これは両極打法によって両端が尖り縦

断面が凸レンズ状を呈するという、多くの楔形石器に見られる形態的特徴から推定された（岡村道雄1976）のものであり、本例においても多くが該当する。したがってそのように用いられた可能性は十分に考えられる。しかし、この考え方は剥片2の存在をなんら説明しない。よって、少なくとも楔に限定されたものではなさそうである。

最後に、石鏃の素材剥片を生産するための石核であるという説についてであるが、本稿はすでに述べてきたことからわかるように、基本的にはこの立場に立つ。楔形石器が石鏃と共伴しない例から石鏃と楔形石器とが無関係であった場合もあるとする議論（佐藤・吉井前掲）もあるが、そこでは製作後の製品搬出という可能性が考慮されていない。松田順一郎は、楔形石器を石核とした石鏃の素材剥片生産が実際にどのように現象化するかを製作実験によって明示した（松田1999）。楔形石器と石鏃の素材との関わりについては、具体的な技術復元にまで研究が及んでいるのである。

しかし、細かい面では課題が残る。松田は楔形石器そのものが石鏃の素材となったことも想定しているが、実験では明らかにされていない。本遺構出土の楔形石器も、そのまま2次調整して石鏃を製作できそうなものはなかった。また、本稿で剥片2としたもの以外にも楔形石器から生産した石鏃の素材剥片が存在するはずである。今後は、楔形石器の一部と石鏃との形態的類似性を追求していくとともに、剥片2を含む楔形石器から生産されたと思われる剥片群の形態的特徴をさらに明らかにしていく必要があるだろう。

参考文献

大原正義・藤崎芳樹1989『佐倉市向原遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』

岡村道雄1976「ピエス・エスキューについて－岩手県大船渡市碁石浜遺跡出土資料を中心として－」『東北考古学の諸問題』東北考古学会 pp76-96

佐藤良二・吉井宣子1984「滝ヶ谷遺跡の楔形石器」『二上山北麓石器製作遺跡の調査』奈良県文化財調査報告書第42集pp102-105

竹広文明1988「中国地方の剥片石器－その組成・剥片剥離技術－」考古学研究35 pp61-88

松田順一郎1999「楔形両極石核の分割に関する実験－縄文時代晩期サヌカイト製打製石鏃製作技術の復元に向けて－」『光陰如矢－萩田昭次先生古稀記念論集－』pp113-134

柳田俊雄1974「截断面のある石器」『ふたがみ－二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告』同志社大学旧石器文化談話会 pp164-173

渡辺修一1991「流山市このす台第Ⅰ遺跡採集遺物について」『研究連絡誌』pp1-11

第7章 まとめ

最後に、讚良郡条里遺跡03-2と讚良郡条里遺跡05-1の調査成果について簡単に、下層から順にまとめる。

縄文時代に相当する遺構面・層として、第8面・8a層から第5-1面・5-1a層がある。

第8面・8a層と第7面・7a層は、部分的な調査しか行わなかったが流路を検出した他、土壌中から土器片を検出している。また、8a層下の土壌層の自然科学分析では貴重な成果を得た。5区において実施した、8a層から約2m下の約1m付近に堆積している淘汰の良い粗砂～極粗砂で、下部付近がやや土壌化し植物遺体がラミナ状に入る層の下部からサンプリングした試料で、AMS法による放射性炭素年代測定を行ったところ、縄文時代草創期から早期にかけての年代が得られた。また、火山灰分析を2区の、8a層下の約2m～1.5mに堆積している土壌層で行ったところ、この層準は、喜界アカホヤ火山灰の降灰期ないしそれ以降に形成されたという結果が得られた。放射性炭素年代測定を行った層は、火山灰分析を行った層より下位にあり、年代的矛盾は無い。この火山灰分析を行った層から、8a層まではおおよそ1.2mあり、その中にはいくつもの土壌層と砂礫層が堆積しており、周辺の知見と考え合わせると、その中の土壌層が縄文時代中期～後期に相当し、その上に暗色化が著しい同じく縄文時代後期に相当する8a層・7a層、そして6a層系が堆積していると考えられる。

縄文時代後期と考えられる第6-1面・6-1a層では、縄文時代中期から後期にかけての土器片が出土する流路を複数検出した他、楔形剥片を素材とした石器製作跡と考えられる遺構を検出している。また、自然科学的分析から調査地周辺は、主にヨシ属などが生育する湿地的な状況の中に、竹笹類やウシクサ族が成育する比較的乾燥した部分が見られるような景観であったことが考えられる。

その後、第6-1面上に堆積した、5b層と呼称する縄文時代晩期頃の氾濫堆積物により調査地内に、微高地が造られたことで、調査地の地形環境は微高地部分とそれより低く、流路が検出される部分とに大きく区分される地形環境となる。

第5-1面・5-1a層では、まだ微高地部分は人による積極的な利用は見られず、ススキ属やチガヤ属などが生育する場所であったことが推定される。低い部分では、長原式土器が出土した流路が検出され、ヨシ属が生育するような湿地的な様相であったと考えられる。

第4-4面・4-4a層・第4-3面・4-3a層の段階では、第5-1面に続き低い部分で複数の流路を検出している。流路からの出土遺物は少なく時期を決めることは難しいが、層序関係から弥生時代から古墳時代前期に相当すると考えられる。

第4-2面段階になると、微高地部分では積極的な人間活動が見られるようになる。時期的には、古墳時代前期の布留式土器が出土する土坑などの遺構が検出されており、この頃から積極的に微高地の土地利用が行われ始めたと考えられる。そして、飛鳥時代から奈良時代には、建替えも含め計28棟の掘立柱建物が見られた。掘立柱建物は、出土遺物や建物の主軸方向などから大きくa・b・cの3つのグループに区分できた。b・cグループは、建物の軸が北で西へ振っており、条里型地割が施行される以前の建物で、aグループはほぼ正方位にのっていることから、条里型地割に規制された建物であると考えられる。そして、出土遺物や柱穴の前後関係から、b・cグループは飛鳥時代、aグループは奈良時代の建物群で、bグループ→cグループ→aグループという順の建物群の変遷が考えられる。また、こ

これらの建物の方位と同方向の小溝が建物周辺で検出され、建物間の境界あるいは、小溝間が道ではないかと考えられた。

また、微高地の北の縁辺に沿って延びる流路内からは、多くの遺物が出土している。古墳時代～奈良時代の土器はもちろん、中には盾形埴輪や剣形埴輪も見られ、3-2区で土壌層中から出土した耳環とも考え合わせると、本調査地周辺に古墳の存在が想起できる。

規模も大きく複数の流路を検出していた低い部分では、流路はほぼ埋没し、僅かな凹みとしてその名残を留めるのみとなり、新たに上述の微高地の縁辺に沿って延びる流路が主となるようである。これは、当調査地のさらに東側の上流部分に存在すると考えられる基幹流路の様相が変化したことに由来すると思われる。

中世と考えられる第3-2面段階になると、微高地の縁辺に沿って延びる流路もほぼ埋没し、わずかな凹みとしてその名残を留めている。さらに第3-1面段階になると完全に埋没し、微高地も含めて平坦化され、条里型地割が施行された耕作域として利用されている。そして以降現在まで連続と、条里型地割を有する水田域として利用されている。

なお、調査においては、その条里型地割がどの時点まで遡るかは、耕作行為による削平により明確にしえなかったが、少なくとも奈良時代の建物が条里型地割を意識する正方位を志向するため、この頃には条里型地割もしくは条里型地割に相当するような何らかの規制があったと考えられる。

また、条里型地割の施行に伴い、現在に見られる讚良川及び楠根川の川筋が整備されたと考えられる。固定化されたこれらの河川は、やがて天井川化し頻繁に耕作域へ土砂を供給したと考えられる。

以上、簡単にまとめを行ったが、当調査地は古く縄文時代から人間活動の見られる地域であり、縄文時代晩期に形成された微高地上を人間活動の中心として居住域が営まれ、そして現在に見られる条里型地割が見られる耕作域へと景観が変化していった過程を見ることができた。

遺物観察表 (1)

図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
20	1	38	瓦器 皿		2 a 層	13C	8.8	1.5		0.1~1.0mmの砂粒を含む	N5/ 灰	
20	2	38	土師器 皿		2 a 層	12C	8.4	1.3*		密	2.5Y7/3 浅黄	10YR8/2 灰白
20	3	38	土師器 皿		2 a 層	14C	8.5	4.3*		密	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙
20	4		土師器 皿		1-4 a 層	(中世)	10.6*	1.4*		1.0mm以下の右粒を含む	2.5YR7/3 淡赤橙	
20	5	38	備前 すり鉢		1-2 a 層 水砂層	16C	24.0*	6.3*		粗、0.5~3.0mmの砂粒を含む	10YR5/1 褐灰	7条を単位とする捕目
20	6	38	土師器 杯		1-2 a 層 水砂層	7 C 中頃	10.2	4.0		密	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙
20	7	38	土師器 皿		小溝	12C	13.6	2.7		やや粗、0.3~3.0mmの砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙	
20	8		土師器 甕		4-2 a 層	7 C	17.8*	7.2*		やや粗、砂粒を少量含む	7.5YR6/6 橙	
20	9		須恵器 甕		2 a 層	8 C	14.0*	8.0*		密、0.2~5.0mmの砂粒・礫をやや多量含む	N6/ 灰	
20	10	38	土製品 土罐		2 a 層	(中世)			長：5.4 幅：2.7 厚：2.6	2.5mm以下の右粒を含む	5Y6/6 橙	
20	11	38	硯		2 a 層	(中世)			現長：7.1 幅：5.6 最大厚：1.5			頁岩
20	12	38	丸瓦		1-3 b 層	(中世)			長：32.2 幅：14.2 高：7.6	やや密、0.5~1.0mmの砂粒を含む	5Y5/1 オリーブ灰	
20	13	54	宋銭 天聖元寶		1-2 a 層	11C			径：2.4 重：2.9		10Y6/1 灰	
20	14	54	北宋銭 紹聖元寶		2 a 層	11C			径：2.3 重：2.1			1023~1032年
20	15	54	明銭 永楽通寶		2 a 層	1 5 C			径：2.5 重：2.5			1094~1098年
20	16	54	皇朝十二銭 神功開寶		2 a 層	8 C			径：2.3 重：3.9			1403~1424年
20	17	38	須恵器 杯		4 a 層	7 C 中頃	9.6*	2.8*		2.0mm以下の右粒を含む	N7/ 灰白	杯H
20	18		須恵器 杯		3 a 層系	6 C 前半	11.2	4.2*		密	N6/ 灰	
20	19		須恵器 杯		1-5 a 層	6 C 後半	12.1*	3.7*		5.0mm以下の右粒を含む	N7/ 灰白	
20	20		須恵器 杯		1-5 a 層	6 C 中頃	12.8*	4.3*		5.0mm以下の右粒を含む	N7/ 灰白	
20	21		須恵器 杯		3 a 層系	6 C 中頃		3.8*		やや粗	N7/ 灰白	7.5Y7/1 灰白
20	22		灰釉陶器 皿		3 a 層系	11C	11.6	2.3*		密	N8/ 灰白	
20	23		須恵器 杯蓋		3 a 層系	7 C 中頃	9.4	2.9*		やや密、砂粒・砂礫を含む	N6/ 灰	杯H蓋
20	24		須恵器 杯蓋		3 a 層系	7 C 中頃	10.8	2.9*		密	N7/ 灰白	杯H蓋
20	25		須恵器 杯蓋		3 a 層系	7 C 中頃	11.8	3.9*		やや密、砂礫を少量含む	N6/ 灰	杯H蓋
20	26		須恵器 杯蓋		3 a 層系	7 C 中頃	9.3	2.8*		密	N6/ 灰	杯H蓋
20	27		須恵器 杯蓋		3 a 層系	7 C 中頃	9.4	3.1*		密	N6/ 灰	杯H蓋
20	28		土師器 杯		4 a 層	7 C 中頃	16.0*	5.8*		密	N5/ 灰	杯G蓋 内面に自然釉付着
20	29		須恵器 杯蓋		3-2 a 層	7 C 中頃	13.2*	2.8*		密、0.2~1.0mmの砂粒を含む	7.5YR6/8 橙	杯C 斜放特殊一段暗文
20	30	39	須恵器 杯		3-2 a 層	6 C 後半	13.1	5.4		密、0.2~1.0mmの砂粒を含む	N7/ 灰白	杯H蓋
20	31	38	須恵器 杯蓋		4 a 層	6 C 中頃	13.4*	3.9*		やや粗	N7/ 灰白	
20	32	38	土製品 土鈴		小溝	(中世)			長：2.5	密	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y6/6 橙
20	33		土師器 ミニチュア 土器		3-1 a 層		3.0*	3.2		2.5mm以下の右粒を含む	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙
20	34	40	土師器 甕		1-5 a 層	7 C	21.0	5.4*		やや粗、0.5~2.0mmの砂粒を含む	2.5Y6/3 にぶい黄	手捏ね土器
21	35	40	須恵器 杯蓋	1373	溝	7 C 前半	12.4*	3.7		密、0.1~4.0mmの砂粒を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白
21	36		須恵器 杯蓋	1373	溝	6 C 中頃	14.4*	4.1*		密、0.2~1.0mmの砂粒・3.0mmの礫を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白
21	37	49	須恵器 杯蓋	997	溝	7 C 中頃	11.4*	4.0		密、0.1~0.5mmの砂粒を含む	7.5YR6/1 灰白	7.5YR6/1 灰白

遺物観察表 (2)

図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他	
21	38		須恵器 杯	983	溝	6 C後半	10.8	2.5*		密	10Y7/ 灰白	10Y7/ 灰白	
21	39	40	均整唐草文軒平瓦	1221	土坑	8 C末～9 C初			現長：7.8 現幅：12.2 高：5.5	密、0.2～4.0mmの小石を多量含む	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
21	40	40	土師器 皿	124	小溝	13C	7.7	1.4*		密	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
21	41	38	瓦器 皿		小溝	12C	8.8	2.3*		密	N7/ 灰白	N7/ 灰白	見込み暗文あり
21	42		土師器 皿	1370	溝	17C	10.7*	2.2		1.0mm以下の右粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
21	43		瓦器 椀	946	窪込	12C	13.2*	4.4		密、0.2～1.0mmの砂粒を含む	N4/ 灰	N4/ 灰	棒葉型
21	44		土師器 皿	723	溝	13C	10.2*	1.1*		2.0mm以下の右粒を含む	7.5Y8/4 浅黄橙	7.5Y7/4 にぶい橙	
21	45	40	土師器 皿	124	小溝	13C	11.6	1.9*		密	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
21	46		土師器 皿	1329	ピット	10C	13.6*	2.4		密	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	口縁部外面から下方に向かい帯状にスス付着
21	47	38	土師器 皿		小溝	12C	14.8	2.6*		密	10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	
67	48		須恵器 甕		4-2 a層	7 C	23.6	5.6*		やや粗、砂粒・砂礫を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白	外面に自然袖付着
67	49		須恵器 甕	504	流路	7 C中頃	15.1	15.0*		4.0mm以下の右粒含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
67	50	39	須恵器 鉢		4 a層	7 C中頃	15.0	7.1		やや粗、0.5～3.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	N6/ 灰	
67	51	39	須恵器 壺		4 a層	7 C	6.5	6.2		密	N6/ 灰	N6/ 灰	底部にヘラ記号あり
67	52		須恵器 台付盥		4 a層	7 C前半		2.3*		粗、0.5～2.0mmの砂礫を含む	N7/ 灰白	N6/ 灰	
67	53	39	須恵器 有蓋高杯		4-2 a層	7 C中頃	11.4	9.8*		密、0.5～3.0mmの長石粒を含む	N6/ 灰	N6/ 灰	脚部に一条の沈線
67	54	39	須恵器 有蓋高杯		4-2 a層	7 C中頃	11.7	13.7		密、0.5～3.0mmの長石粒を含む	7.5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	
67	55		須恵器 壺		2 a層	7 C		17.1*		5.5mm以下の右粒を含む	N7/ 灰白	N6/ 灰	壺し、腹部に2条沈の線、焼成後底部穿孔
67	56	40	土師器 把手杯		側溝内出土	7 C中頃	11.4*	6.8*		密、0.2～1.0mmの砂粒・赤色酸化土粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	
67	57		土師器 杯	505?	流路	7 C中頃	14.4	4.0*		密	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	杯C 斜放斜状一段暗文
67	58		土師器 甕		4 a層	7 C	20.8	5.8*		密	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄	
67	59	40	土師器 把手付		4-2 a層	7 C	23.4	30.6		密、0.2～4.0mmの砂粒を多量含む	2.5Y6/6 橙	5YR6/6 橙	把手付着の痕跡あり
67	60		土師器 甕		4-2 a層	6 C		18.3*		密、0.2～3.0mmの砂粒を含む	7.5Y4/2 灰褐	10YR6/3 にぶい黄橙	部外面を中心に2次焼成痕あり
67	61		土師器 壺		4-3 a層	5 C後半	8.5*	7.0*		3.0mm以下の右粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	
68	62		須恵器 杯		4 a層	6 C前半	10.2	4.7*		密	N6/ 灰	N6/ 灰	
68	63		須恵器 杯		4 a層	6 C中頃	11.9	3.0*		やや粗、0.5～2.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	N7/ 灰白	
68	64		須恵器 杯		4 a層	6 C中頃	11.5*	3.6*		3.0mm以下の右粒を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
68	65	39	須恵器 杯		4-2 a層	6 C前半	12.1	5.1		0.5～3.0mmの長石粒を含む	10Y6/1 灰	5B6/1 青灰	
68	66	39	須恵器 杯		4 a層	7 C中頃	8.6	3.9*		密	N5/ 灰	N6/ 灰	杯H 外面に自然袖付着
68	67	39	須恵器 杯		4-2 a層	7 C中頃	11.0	2.6		1.0～5.0mmの長石を含む	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	杯H
68	68	39	須恵器 杯		4 a層	7 C前半	11.2*	3.2*		6.0mm以下の右粒を含む	N5/ 灰	N6/ 灰	
68	69		須恵器 杯		4 a層	7 C前半	12.0	2.6*		密	N5/ 灰	N5/ 灰	
68	70		須恵器 杯		4-2 a層	7 C中頃	10.1*	3.5		1.5mm以下の右粒を含む	N6/ 灰	N6/ 灰	杯H
68	71		須恵器 杯		4 a層	7 C中頃	10.2	2.8*		やや密、0.5～1.0mmの砂礫を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白	杯H 受け部に自然袖付着

遺物観察表 (3)

図番号	遺物 番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
68	72	42	須恵器 杯	505?	流路	7 C中頃	11.0	2.9*		密	N7/ 灰白	杯H
68	73		須恵器 杯蓋		4 a層	7 C中頃	10.8*	2.6*		やや密、0.5~2.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	杯H蓋
68	74	39	須恵器 杯蓋		4 a層	7 C中頃	10.7	3.2*		密	N6/ 灰	杯H蓋
68	75		須恵器 杯蓋	1088	ピット	7 C中頃	12.6*	2.6*		1.5mm以下の右粒を含む	N7/ 灰白	杯H蓋 (建物17)
68	76	39	須恵器 杯蓋		4-2 a層	7 C中頃	9.0	2.4*		密	2.5Y8/2 灰白	杯G蓋
68	77		須恵器 杯		4 a層	7 C中頃	11.0	4.4*		密	N6/ 灰	杯G
68	78		土師器 鉢		3 a~4 a層	7 C後半	16.7*	7.9*		5.0mm以下の右粒を含む	5YR6/6 橙	
68	79		土師器 鉢		4 a層	7 C	25.4*	9.2*		密、0.2~3.0mmの砂粒を含む	7.5Y5/4 にぶい褐	
68	80		土師器 埴		4-2 a層	7 C	34.4	14.3*		やや密	10YR5/3 にぶい黄褐	
68	81		壺		4 a層	(弥生時代)	7.4*			やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	2.5Y7/3 浅黄	外面に黒斑あり
68	82	54	耳環		4-2 a層	(古墳時代)			縦：2.3 横：2.4 厚：0.5			
68	83		鉢		4 a層	(弥生時代 後期)		6.1*		4.0mm以下の右粒を多量含む	2.5Y7/3 浅黄	底部に焼成前の穿孔あり
68	84	40	鉢		5 a層	(弥生時代 後期)	13.8	8.3		やや粗	10YR5/2 灰黄褐	
68	85		壺		4 a層	(弥生時代 後期)		3.0*		3.0mm以下の右粒を含む	10YR5/2 灰黄褐	
68	86	40	土師器 壺?	505?	流路		9.6*	13.5*		3.0mm以下の右粒を含む	10YR6/1 褐灰	製埴土器? 被熱していない
68	87	42	須恵器 杯蓋	172	溝	7 C中頃	8.5	2.1		密、0.3~0.5mmの砂粒を含む	N6/ 灰	つまみあり
68	88		須恵器 杯	172	流路	7 C後半	12.0	3.2*		やや粗、砂礫・砂粒を少量含む	N7/ 灰白	杯G
68	89		須恵器 杯	172	流路	7 C中頃	10.8	3.8		やや粗、0.5~7.0mmの砂礫を含む	2.5Y6/6 橙	
68	90	43	須恵器 台付長 頸蓋	172	溝	7 C後半		20.3*		密、0.2~3.0mmの砂粒を含む	5B6/1 青灰	体部に2条の沈線
68	91	41	須恵器 甕	172	流路	7 C		26.6*		やや密、0.5~2.0mmの砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白	内面 中央部が凸になる同 心円文
68	92	41	土師器 甕	172	流路	7 C		20.2*		密、8.0mm以下の長石粒・赤色酸化粒を含む	7.5YR8/4 浅黄褐	
68	93	41	須恵器 杯	172	流路	7 C中頃	10.3	3.7		密、0.5~2.0mmの砂粒を含む	5P6/1 青灰	
68	94	41	須恵器 短頸蓋	172	流路	7 C中頃	6.3	5.3		密、0.5~2.0mmの長石粒・砂粒を含む	5G16/1 オリーブ灰	底部外面にへラ記号
68	95	40	砥石	172	流路	7 C (共存遺物か ら)			長：8.7 幅：4.9 最大厚：5.0			砂岩
69	96		須恵器 甕	172	溝	6 C後半	22.6	6.2*		密	N6/ 灰	外面：カキメ
69	97	47	土師器 甕	172	流路	(庄内末~布留初頭 段階)	15.8	8.7*		やや粗	10YR7/3 にぶい黄褐	外面：粗い平行のタタキ
68	98	42	須恵器 杯	504	流路	7 C中頃	9.1	3.0		密、0.3~2.0mmの砂粒を含む	5B6/1 青灰	
69	99	42	須恵器 杯蓋	504	流路	7 C中頃	9.6	2.2*		密	N6/ 灰	杯G蓋
69	100	41	須恵器 杯蓋	504	流路	7 C中頃	10.2	4.8		やや粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	N7/ 灰白	
69	101	41	須恵器 杯蓋	504	流路	7 C中頃	11.0	3.5		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	7.5Y6/1 灰	杯H蓋
69	102	41	須恵器 杯蓋	504	流路	7 C中頃	12.2	3.7*		やや密、砂礫を少量含む	N5/ 灰	杯H蓋
69	103	42	須恵器 杯	504	流路	7 C中頃	10.8	3.7		1.0mm以下の右粒を含む	N6/ 灰	杯G蓋
69	104	44	土師器 杯	504	流路	7 C中頃	11.1	4.1		やや粗	10YR7/4 にぶい黄褐	杯G
69	105		土師器 杯	504	流路	7 C中頃	10.8	3.2*		密	7.5YR6/4 にぶい橙	杯C 斜放状一段暗文
69	106		土師器 杯	504	流路	7 C中頃	12.4	2.4*		密	7.5YR7/4 にぶい橙	杯C 内面に暗文
69	107		土師器 杯	504	流路	7 C中頃	12.0	4.1*		密	10YR7/3 にぶい黄褐	杯C 内面に暗文
69	108		土師器 甕	504	流路	6 C	14.2*	4.7*		やや粗、1.0~3.0mmの砂礫・砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰	

遺物観察表 (4)

図番号	遺物番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他	
69	109		須恵器 壺	504	流路	7 C後半		12.2*		密	N7/ 灰白	N7/ 灰白	垂し 外面に2条の沈線、 自然軸が付着
69	110		土師器 高杯	504	流路	7 C中頃	11.6*	4.7*		1.0mm以下の石粒を含む	5YR6/6 橙	10YR4/6 赤橙	内面に斜放射状一段暗文
69	111	45	土師器 甕	504	流路	7 C中頃	14.4	14.5		粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	10YR5/3 にぶい黄褐	5YR5/6 明赤褐	体部外面にスス付着
69	112	45	土師器 甕	504	流路	7 C中頃	12.4	16.0		粗、チャートを含む	5YR5/2 灰褐	7.5YR3/1 黒褐	
69	113		土師器 壺	348	流路	5 C	12.5*	4.0*		4.0mm以下の石粒を多量含む	7.5Y5/4 にぶい褐	7.5Y6/4 にぶい褐	
69	114		須恵器 杯蓋	500	流路	7 C中頃	12.0	2.8*		密	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	杯H蓋
69	115		土師器 杯	500・504	流路	7 C中頃	14.6	5.4*		密	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	杯C 斜放射状一段暗文
69	116		土師器 埴	500	流路	7 C中頃	28.0	7.9*		やや粗、0.5~0.1mmの砂粒を含む	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄	把手なし
69	117		壺	500	流路	(弥生時代)		4.7*		やや粗、0.5mmの砂礫・赤色酸化土粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	外面に6条を単位とする縞 描文を2帯
69	118	42	須恵器 すり鉢	500	流路	7 C		4.4*		粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	N5/ 灰	N6/ 灰	底部に穿孔 (内から外へ)
69	119		土師器 甕	500	流路	7 C	14.6	3.0*		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	
69	120	43	須恵器 甕	505	流路	7 C中頃		12.5		やや粗、0.1~0.5mmの砂粒を含む	N5/ 灰	N6/ 灰	口縁部と体部に2条の沈線
71	121	45	土師器 甕	505	流路	7 C中頃	22.0	7.5*		密、0.5~3.0mmの砂粒を含む	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部にスス付着 外面： 縦ハケ
69	122	44	須恵器 甕	793	流路	7 C	23.4	45.2		8.0mm以下の石粒を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
70	123	41	須恵器 杯蓋	793	流路	7 C中頃	11.7	3.8		密、0.2~5.0mmの長石粒・黒色粒を多量含む	N6/ 灰	N6/ 灰	
70	124	41	須恵器 杯蓋	793	流路	7 C中頃	12.3	3.6		密、0.5~2.0mmの長石粒を含む	7.5Y3/1 オリーブ黒	5Y7/1 灰白	
70	125		須恵器 杯蓋	793	流路	6 C中頃	14.2	5.3*		密	N6/ 灰	N6/ 灰	
70	126	41	須恵器 杯蓋	793	流路	6 C後半	14.8	6.1*		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	N6/ 灰	外面に自然細付着
70	127		須恵器 杯	793	流路	7 C中頃	11.4	2.2*		密	N7/ 灰白	N7/ 灰白	杯H
70	128	42	須恵器 杯	793	流路	7 C中頃	11.9	3.5		密、0.3~2.0mmの砂粒を多量含む	N5/ 灰	N5/ 灰	
70	129		須恵器 杯	793	流路	6 C後半	12.8*	3.7		密、0.2~2.0mmの砂粒を含む	N6/ 灰	N7/ 灰白	
70	130	41	須恵器 杯	793	流路	6 C後半	11.7	4.5		密、1.0~5.0mmの長石粒を含む	N7/1 灰白	N5/ 灰	
70	131	42	須恵器 無蓋高杯	793	流路	7 C中頃	15.6	7.6		密、0.2~5.0mmの長石粒を含む	N7/ 灰白	2.5GY7/1 明オリーブ灰	
70	132	43	須恵器 有蓋高杯	793	流路	7 C中頃	12.6	5.5*		やや粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	N6/ 灰	
70	133	43	須恵器 無蓋高杯	793	流路	7 C中頃	11.1	13.1		密、0.5~5.0mmの長石粒を含む	10YR8/1 灰白	10YR7/1 灰白	
70	134	43	須恵器 平瓶	793	流路	7 C	7.8	10.8*		密	5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	外面自然細付着、2個のボ タン状の浮文
70	135	42	須恵器 鉢	793	流路	7 C前半	11.2	12.2		密、0.5~3.0mmの砂粒 (主に長石) を多量 含む、チャートを含む	N7/ 灰白	N6/ 灰	見込みに平行する2条の直 線によるヘラ記号
71	136		土師器 甕	793	流路	7 C	23.4	10.0*		密	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄	
71	137		土師器 甕	793	流路	7 C	22.6	17.5*		やや密	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	体部外面にスス付着
71	138		土師器 甕	793	流路	7 C	29.0	10.6*		粗	7.5Y5/6 明褐	7.5Y5/4 にぶい褐	外面縦ハケ
71	139	44	土師器 杯	793	流路	7 C中頃	16.8	11.6		密	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	杯C 内面に放射一段暗文
71	140		土師器 杯	793	流路	7 C中頃	13.6	4.5*		密	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	杯C 斜放射状一段暗文

遺物観察表 (5)

図番号	遺物 図版 番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
71	141	45	土師器 壺	793	流路	7 C	9.4	10.9		密	2.5Y7/3 浅黄 7.5YR6/6 橙	黒班あり
71	142		土師器 甕	793	流路	7 C	24.2	6.8*		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	
72	143	46	盾形埴輪 (石見型)	793	流路	(古墳時代)			残長：75.0	粗、0.5~5.0mmの砂礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	盾面に鋸歯文帯を線刻
72	144		盾形埴輪 (石見型)	793	流路	(古墳時代)			残長：28.0	粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	
72	145	46	角形埴輪	793	流路	(古墳時代)			残長：42.6	粗、0.1mm~0.4mmの砂礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	
73	146	47	土師器 把手付 甕	793	流路	7 C中頃	23.2	13.3*		やや粗	7.5YR6/6 橙	把手付着の痕跡あり
73	147	47	甕	793	流路	(弥生時代 後期)	12.4	10.7*		密	10YR6/2 灰黄褐	
73	148		土師器 高杯	793	流路	5 C	17.8	4.3*		やや密、砂礫を少量含む	2.5Y7/2 灰黄	
73	149		土師器 壺	793	流路	5 C	16.0	5.4*		やや密、0.5~1.0mmの砂礫を含む	2.5Y5/2 暗灰黄	
71	150	45	土師器 甕	794	流路	7 C中頃	7.6	7.2		密	10YR5/6 黄褐	
71	151	45	土師器 甕	794	流路	7 C	10.8	10.4*		密、0.2~4.0mmの砂粒・1.0mm以下の雲母片を含む	2.5Y7/2 灰黄	
71	152	44	土師器 鉢	794	流路	7 C	16.4	9.6		密	7.5Y3/1 黒褐	
71	153		土師器 片口鉢	794	流路	7 C末	0.6*	10.2*		4.0mm以下の石粒を含む	2.5YR6/6 橙	
70	154	42	須恵器 杯蓋	793・794	流路	7 C中頃	10.5	2.1*		密	N8/ 灰白	杯G蓋 外面に自然釉付着
70	155	44	須恵器 大甕	793	流路	7 C	52.0	52.3*		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	N4/ 灰	外面に自然釉付着 口縁部~頸部外面にかけ1条の沈澱、波状文(9条)、2条の沈澱、波状文(9条) 2条の沈澱、波状文(9条)
71	156		土師器 甕	793・794	流路	7 C中頃	21.8*	9.3*		密、0.2~3.0mmの砂粒・0.1mm前後の赤色酸化粒を含む	5Y6/6 橙	
71	157	45	土師器 高杯	793・794	流路	7 C	9.9	7.2*		やや粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	10YR8/2 灰白	
71	158		土師器 甕	793・794	流路	7 C	22.0	8.0*		やや密、0.5~1.0mmの砂礫を含む	7.5Y6/4 にぶい橙	
70	159	42	須恵器 杯	740	溝	7 C中頃	10.6	3.5		密、0.1~1.0mmの砂礫を含む	7.5Y5/2 灰オリーブ	杯H
70	160	41	須恵器 杯蓋	740・739	流路	6 C後半	14.9	4.9		密、0.5~5.0mmの長石粒を含む	N8/ 灰白	
70	161	43	須恵器 無蓋高杯	740	流路	6 C中頃	10.3*	3.9*		2.0mm以下の石粒を含む	N6/ 灰	
73	162		土師器 甕	740	流路	(庄内)		4.0*		やや粗、1.0~5.0mmの小石・砂粒を含む	2.5Y4/2 暗灰黄	
70	163		須恵器 杯蓋	1341	流路 上層砂層内	7 C前半	12.0	3.8		密	N6/ 灰	
71	164	43	須恵器 甕	1341	流路	7 C	16.2	28.4		密、0.2~5.0mmの礫を含む	5Y7/1 灰白	
70	165		須恵器 蓋	1344	溝	8 C	18.0*	1.3*		密、0.3~1.0mmの砂粒を含む	10YR6/1 灰	杯B蓋
73	166	47	須恵器 杯蓋	786	凹み	6 C後半	14.2	4.5		密	N6/ 灰	
73	167	47	須恵器 杯蓋	786	凹み	6 C後半	14.6	4.7		密、0.3~1.0mmの砂粒を含む	5PB5/1 青灰	天井部にへら記号
73	168	47	須恵器 杯蓋	786	凹み	6 C後半	14.3*	3.8		4.0mm以下の石粒を含む	N4/ 灰	
73	169		須恵器 杯蓋	786	窪ち込み	6 C中頃	15.7	4.2*		密、砂礫を少量含む	5B6/ 青灰	
73	170	47	須恵器 杯蓋	786	凹み	6 C後半	14.0	4.9		密、0.1~1.5mmの砂粒を含む	N8/ 灰白	

遺物観察表 (6)

図番号	遺物 図版 番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
73 171	47		須恵器 杯	786	凹み	6 C後半	12.7	4.4		密、0.5~1.0mmの砂粒を含む	N6/ 灰	
73 172			須恵器 杯	786	落ち込み	6 C中頃	11.8	3.1*		やや密、砂粒を少量含む	N6/ 灰	
73 173			須恵器 杯	786	落ち込み	6 C後半	10.4	3.3*		密	N6/ 灰	
73 174			須恵器 甕	786	落ち込み	6 C	11.8	3.1*		やや密、砂粒を少量含む	N6/ 灰	
73 175			土師器 甕	786	凹み	6 C	13.4	4.0*		密	2.5V6/3 におい橙	外面に黒斑あり
73 176			土師器 甕	786	落ち込み	6 C	14.0	3.9*		やや粗、1.0~3.0mmの砂粒・砂礫を含む	2.5V7/2 灰黄	
73 177			土師器 甕	786	落ち込み	6 C	14.4	5.3*		やや粗	2.5V7/3 浅黄	外面に黒斑あり
73 178			土師器 甕?	786	落ち込み		32.0	12.0*		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	10YR6/3 におい黄橙 7.5Y5/6 明褐	
73 179			砥石	786	凹み				長：21.4* 幅：4.7* 厚：3.1*			緑色片岩
73 180			須恵器 杯	188	ピット	6 C中頃	10.5*	3.5*		2.5mm以下の砂礫を含む	N6/ 灰	
73 181	48		須恵器 杯	203	ピット	6 C前半	10.8	5.3		やや粗、0.5~3.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	杯H
73 182			須恵器 杯	649	溝	6 C中頃	13.0	4.8*		やや粗	N6/ 灰	
73 183	48		須恵器 杯	1220	ピット	6 C前半	12.8	5.2		密、0.3~2.0mmの砂粒を含む	N7/ 灰白 7.5Y7/1 灰白	
73 184			須恵器 杯	651	溝	6 C後半	12.2	3.7*		やや密	N7/ 灰白	
73 185			須恵器 杯	651	溝	6 C中頃	12.2	4.1*		やや密、1.0~2.0mmの砂粒・砂礫を含む	N5/ 灰白	受け部に陥着痕
74 186	48		須恵器 杯蓋	651	溝	6 C後半	13.0	4.3*		やや粗、1.0~5.0mmの砂礫を含む	N5/ 灰	
76 187			甕	651	溝	(弥生時代 後期)	13.7	5.0*		やや粗、1.0~3.0mmの砂礫を含む	10YR5/2 灰黄褐	
73 188	51		須恵器 杯	1043	上坑	6 C中頃	15.2	4.6*		密	N7/ 灰白	
75 189			土師器 甕	1043	上坑	5 C末~6 C	21.8	7.9*		密	10YR7/4 におい黄橙 2.5Y7/3 浅黄	
75 190	51		土師器 甕	1043	土坑	5 C末~6 C	10.3	12.0*		密	10YR6/4 におい黄橙 10YR7/3 におい黄橙	
73 191			須恵器 杯	689	ピット	6 C中頃	6.9*	3.8*		密、0.3~1.0mmの砂粒を含む	N6/ 灰 2.5G6/1 オリーブ灰	
73 192	47		須恵器 杯	616	ピット	6 C後半	13.4	3.8*		やや粗、0.5~2.0mmの砂礫を含む	N7/ 灰白	
73 193			須恵器 杯	244	井戸 (掘方内)	7 C中頃	9.6	3.1*		やや密、0.5~2.0mmの砂礫を含む	N6/ 灰	杯H
73 194	47		須恵器 杯	1374	流路	7 C中頃	10.7	3.4		密、0.3~2.0mmの砂粒を含む	N7/ 灰白	杯H
73 195	53		須恵器 杯	1541	上坑	7 C中頃	12.7*	3.6*		3.0mm以下の石粒を含む	N6/ 灰	杯H
73 196	53		須恵器 杯	1541	上坑	7 C中頃	10.8*	3.7		密、0.2~3.0mmの砂粒を含む	N6/ 灰	杯H
74 197	53		須恵器 杯蓋	1541	土坑	7 C中頃	11.0	3.7		0.5~2.0mmの長石を含む	N7/ 灰白 7.5Y7/1 灰白	杯H蓋
74 198	53		須恵器台付 甕	1541	土坑	7 C前半		15.4*		やや粗、0.2~2.0mmの砂粒を含む	N7/ 灰白	外面に縞描文、凹線、縞描文、凹線、縞描文、凹線、縞描列点文を意識した沈線、2条の凹線
73 199	50		須恵器 杯	902	土坑	8 C	15.8	4.8		密、0.2~3.0mmの砂粒・礫を含む	2.5X8/1 灰白	杯A
73 200	54		鈎錘車	433	ピット	(古墳時代)			上径：3.0 下径：4.8 穿孔径：1.1・0.8 厚：1.0	5B4/1 暗青灰		滑石
73 201	49		須恵器 鉢	245	溝	7 C前半	8.4	7.4*		やや粗	N7/ 灰白	外面に自然釉付着
73 202	49		須恵器 甕	668	溝	7 C前半		8.5*		やや粗、0.5~3.0mmの砂粒を含む	N6/ 灰	2条の沈線、縞描列点文、凹線
73 203			須恵器 甕	668	溝	7 C前半		6.9*		やや密、0.5~1.0mmの砂礫を含む	N7/ 灰白	体部に縞描列点文、1条の沈線が2帯
74 204			須恵器 杯蓋	450	ピット	6 C前半	13.0	4.5*		やや粗	N6/ 灰	
74 205			須恵器 杯蓋	578	ピット	7 C中頃	12.8	3.6*		密	N7/ 灰白	杯H蓋

遺物観察表 (7)

図番号	遺物 番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他	
74	206		須恵器 杯蓋	1160	柱穴 (掘方)	7 C中頃	12.8*	3.6*		4.0mm以下の石粒を含む	N6/ 灰	N7/ 灰白	杯H蓋 建物17
74	207		須恵器 杯蓋	1284	ピット	7 C中頃	10.0	3.4*		密、0.3~1.0mmの砂粒を含む	5B6/1 青灰	5B6/1 青灰	杯H蓋 建物17
74	208		須恵器 杯蓋	789	土器集中部	8 C	15.8*	1.0*		1.5mm以下の砂粒を含む	N7/ 灰白	N7/ 灰白	杯B蓋
74	209		須恵器 高台付 蓋	1180	ピット (半裁)	8 C		3.9*		やや密	N7/ 灰白	N7/ 灰白	垂K?
74	210	48	土師器 椀	278	ピット	8 C末	12.8	5.5		やや粗、0.5~1.0mmの砂粒を含む	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	黒斑あり
74	211		土師器 杯	1095	溝	7 C中頃	16.4*	5.5*		密、0.2~1.0mmの砂粒を少量含む	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	杯C 斜放射状一段暗文
74	212	48	土師器 杯	1549	柱穴	7 C	15.6	6.9		やや密、0.5~1.0mmの砂粒を含む	10Y R 7/3 にぶい黄 橙	2.5Y 8/2 灰白	杯C 建物19
74	213		土師器 椀	598	ピット	10 C	12.0	3.2*		粗、砂粒・砂礫を含む	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	
74	214		土師器 甕	1145	溝	7 C	25.4	5.8*		粗、1.0~4.0mmの砂粒、砂礫を多量含む	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	
74	215		土師器 甕?	1145	溝		21.6*	11.6*		密、0.3~2.0mmの砂粒を含む	2.5Y 6/3 にぶい黄	2.5Y 7/3 浅黄	
74	216	49	土師器 甕	244	井戸	8 C初頭	14.4	13.5*		やや粗、0.1mm~0.6mmの砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	小型甕 (薬A) 外面：ハ ケ目
74	217	50	土師器 甕	1715	土坑	5 C	14.3	23.7		密、0.3~2.0mmの砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
74	218	49	土師器 高杯	1715	土坑	5 C	15.0	6.0*		密	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	黒斑あり
74	219		須恵器 甕	244	井戸	7 C	17.2	4.4*		密、0.3~1.5mmの砂粒を含む	2.5G 7/1 明オリ ブ灰	2.5G 8/1 灰白	
74	220		磁石	244	井戸 (掘方内)	7 C (共存遺物か ら)			現長：5.0 現幅：3.5 厚：2.1		2.5Y 8/2 灰白		流紋岩
74	221	50	土師器 甕	1715	土坑	5 C				粗、1.0~3.0mmの砂粒・砂礫を含む	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	体部外面にスチス附着、87・ 88は同一個体
74	222	50	土師器 甕	1715	土坑	5 C	15.4	27.0		粗、1.0~3.0mmの砂粒・砂礫を含む	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	
74	223	50	土師器 甕	225	土坑	5 C	14.9*	9.5*		6.0mm以下の石粒を含む	10Y R 4/3 にぶい黄 褐	10YR4/1 褐灰	
74	224	50	土師器 甕	225	土坑	5 C	15.2	17.0		やや粗、1.0~3.0mmの砂粒を含む	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR3/2 黒褐	体部外面にスチス附着
74	225		土師器 小型丸 底壺	225	土坑	5 C		3.7*		2.0mm以下の石粒を含む	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	
74	226		土師器 壺	225	土坑	5 C	14.6*	4.1*		粗、4.0mm以下の石粒を多量含む	7.5YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
74	227		土師器 甕	225	土坑	5 C	19.6*	4.0*		2.5mm以下の石粒を含む	5YR4/6 赤橙	10YR8/2 灰白	
75	228	50	土師器 高杯	225	土坑	5 C	11.4	9.3*		粗、0.5~3.0mmの砂粒を含む	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	
74	229	54	管玉	1086	ピット (半裁)	(古墳時代)			径：0.5 長：2.4		5B3/1 暗青灰		滑石
75	230		土師器 甕	1096	土坑	5 C	10.4	5.6*		やや密	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	
75	231		土師器 甕	1096	土坑	5 C	16.4*	5.9*		密、0.2~2.0mmの砂粒・赤色酸化鉄、微細 な雲母粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
75	232	51	土師器 甕	1096	土坑	5 C	13.8	10.3		粗	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	黒斑あり
75	233	51	土師器 甕	1096	土坑	5 C	12.4	19.2*		粗、1.0mm~4.0mmの小石・砂粒を多量含む	5YR7/1 灰白	N6/ 灰白	
75	234		土師器 甕	1096	土坑	7 C	27.0	14.0*		粗、0.1~0.7mmの砂粒を含む	10YR6/4 にぶい黄橙	5Y6/6 橙	外面横ハケ後ナデ
75	235		土師器 甕	644	土坑	5 C	16.0	6.0*		やや粗、0.5~2.0mmの砂粒を含む	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	外面にスチス附着
75	236		土師器 甕	658	ピット	5 C	15.3*	5.4*		6.0mm以下の石粒を含む	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	
75	237		土師器 甕	658	ピット	5 C	13.8*	6.8*		密、0.2~5.0mmの砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
75	238	48	土師器 高杯	658	土坑	5 C	18.9	6.0*		粗、0.5~4.0mmの砂粒を含む	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	
75	239	51	土師器 壺	1097	土坑	5 C後半	11.6*	11.0*		粗、0.2~3.0mmの砂粒・赤色酸化土粒を含む	2.5Y 8/2 灰白	5Y 7/6 橙	外面に2次焼成痕あり

遺物観察表 (8)

図番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
75	240	土師器 高杯	1097	土坑	5 C	18.0*	5.6*		密、0.2~2.0mmの砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	
75	241	土師器 高杯	1278	ピット	5 C末~6 C初	14.8	6.2*		密、0.3~2.0mmの砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙 2.5Y7/3 浅黄	
75	242	土師器 高杯	633	土坑	5 C	18.0	8.7*		密	7.5YR6/4 にぶい黄橙 7.5YR6/6 橙	
75	243	土師器 高杯	663	土坑	5 C	17.4	12.0		やや粗	10YR7/3 にぶい黄橙	
75	244	土師器 甕	1164	土坑	5 C	15.9*	4.3*		2.0mm以下の石粒を含む	5YR6/4 にぶい橙	
75	245	甕	830	溝	(弥生時代 後期)	15.2*	8.7*		密、0.2~3.0mmの砂粒・黒雲母を含む	10YR7/3 にぶい黄橙	
75	246	土師器 高杯	830	溝	5 C	7.9*			密、0.2~1.0mmの砂粒、赤色酸化土粒、雲母片を含む	10YR7/3 にぶい黄橙 7.5YR7/3 にぶい橙	
75	247	土師器 甕	927	土坑	5 C	12.0*	11.2*		密、0.2~2.0mmの砂粒、赤色酸化土粒を含む	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR6/2 灰黄褐	
75	248	土師器 高杯	625	土坑	5 C	17.4	5.8*		やや粗、砂粒・砂礫を含む	10YR6/6 明黄褐 10YR6/3 にぶい黄橙	外面に黒斑あり
75	249	土師器 高杯	1207	ピット(掘方)	5 C	19.2*	4.7*		やや粗、0.2~4.0mmの砂粒を多量含む	10YR6/3 にぶい黄橙	
75	250	甕	833	ピット	(弥生時代 後期)		5.1*		やや粗、0.2~3.0mmの砂粒を多量含む	10YR6/3 にぶい橙	底部
76	251	土師器 高杯	826	井戸	(庄内末~布留初頭 段階)		3.8*		密、0.2~3.0mmの礫・赤色酸化土粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	
76	252	土師器 高杯	826	井戸	(庄内末~布留初頭 段階)	5.7*			4.0mm以下の石粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	三方向に透孔
76	253	土師器 壺	826	井戸	(庄内末~布留初頭 段階)	12.3	18.8		粗、0.5~5.0mmの砂礫を含む	2.5Y7/2 灰黄	体部外面にスズ付着
76	254	土師器 高杯	1243	土坑	5 C	16.4	12.7		粗、赤色酸化土粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	
76	255	土師器 甕	1243	土坑	5 C	13.2	8.7*		3.0mm以下の石粒を含む	2.5Y7/3 浅黄	外面：頸部下、ハケ後横ナ デ
76	256	土師器 甕	1243	土坑	5 C	13.0	9.0		やや粗、1.0~2.0mmの砂粒を少量含む	2.5Y7/3 浅黄	外面にスズ付着 外面体部 上半斜めハケ後横ナ
76	257	土師器 甕	1243	土坑	5 C	12.0	18.5		やや密、1.0~4.0mmの砂礫を含む	2.5YR6/6 橙	外面に一部スズ付着
76	258	土師器 甕	1243	土坑	5 C	15.0*	19.5		密、0.2~7.0mmの砂礫・赤色酸化土粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	内面に被熱による黒変 体 部外面頸部下、ハケ後横ナ デ
76	259	土師器 甕	1243	土坑	5 C	14.2	21.1*		粗	2.5Y6/4 にぶい橙	外面：体部上半斜めハケ後 横ナ
76	260	土師器 小型丸 底甕	1243	土坑	5 C	6.1			粗、1mmの砂粒を含む	2.5Y6/6 橙	外面：頸部下ハケ後横ナ 下半斜めハケ
76	261	土師器 高杯	1243	土坑	5 C	15.7*	13.3*		密、0.2~3.0mmの長石等の砂粒を含む	7.5YR6/4 にぶい橙	
76	262	土師器 甕	1539	土坑	5 C	15.8*	6.0*		3.5mm以下の石粒を含む	10YR6/1 褐灰	
76	263	土師器 甕	1539	土坑	5 C?	12.0*	4.7*		やや粗、0.2~3.0mmの砂粒を多量含む	10YR7/2 にぶい黄橙	外面に2次焼成痕あり
76	264	土師器 甕	1539	土坑	5 C	14.2	16.3		粗	2.5Y7/2 灰黄	外面にスズ付着 外面：頸 部下、ハケ後横ナ
76	265	土師器 壺	685	ピット	5 C	7.4	8.0		やや密	2.5Y8/3 浅黄	外面に黒斑あり
76	266	蓋	1089	ピット	(弥生時代 後期)	11.6	3.3		やや粗、0.2~1.0mmの砂粒・赤色酸化土粒 を含む	7.5YR6/4 にぶい橙	2孔を一對とし対角に二対 孔を穿つ
76	267	土師器 甕	1429	土坑	5 C	17.0	30.0		やや密、0.3mm~1.0mmの砂粒を含む	2.5Y6/3 にぶい黄	
76	268	土師器 甕	1429	土坑	5 C	14.0	22.4		粗(0.5mm~5.0mm)の長石を含む	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	
77	269	井戸	244	井戸	7 C			長：112.6 幅：17.0 厚：2.9			

遺物観察表 (9)

図番号	遺物番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
77	270	55	井戸枠	244	井戸	7 C			長:106.8 幅:18.2 厚:5.9			
77	271	55	井戸枠	244	井戸	7 C			長:128.2 幅:17.2 厚:3.7			
78	272	56	井戸枠	244	井戸	7 C			長:101.4 幅:20.5 厚:5.6			
78	273	56	井戸枠	244	井戸	7 C			長:107.4 幅:19.5 厚:5.9			
78	274	57	井戸枠	244	井戸	7 C			長:101.0 幅:17.3 厚:4.1			
79	275	56	井戸枠	244	井戸	7 C			長:105.8 幅:17.0 厚:5.6			
79	276	57	井戸枠	244	井戸	7 C			長:104.0 幅:19.7 厚:6.0			
79	277	57	井戸枠	244	井戸	7 C			長:59.8 幅:10.5 厚: 3.8			
79	278	58	木製品	244	井戸	7 C			長:8.6 幅:2.0 厚:1.0			
79	279	58	木製品 鉢(+ スビ形)	欄溝内		(庄内)			長:24.2 幅:10.9 厚: 1.7			
79	280	58	柱	1391	柱穴				長:34.5 幅:7.9 厚: 6.2			建物24
79	281	58	柱	1421	ピット	7 C			長:53.8 幅:15.0 厚:11.8			
96	282		礫		石器集中部	(縄文時代 後期)						チャート 加工痕跡あり
96	283		礫		石器集中部	(縄文時代 後期)						チャート 加工痕跡あり
97	284	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.0* 幅:1.6* 厚:0.4 重:0.7		7.5Y4/1 灰	サスカイト
97	285	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.9 幅:1.9 厚:0.3 重:1.1		N5/ 灰	サスカイト
97	286	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.6 幅:1.9 厚:0.3 重:0.7		N5/ 灰	サスカイト
97	287	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:1.8* 幅:2.2 厚:0.3 重:0.9		5Y6/1 灰	サスカイト
97	288	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:1.8* 幅:1.7* 厚:0.3 重:0.5		2.5Y6/1 黄灰	サスカイト、パティナやや 発達
97	289	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.3 幅:1.8 厚:0.4 重:1.1		N5/ 灰	サスカイト
97	290	61	石剣		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:15.9 幅:2.5 厚:2.1 重:127.9		7.5Y5/1 灰	頁岩
97	291	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.2* 幅:1.4* 厚:0.3 重:0.5		7.5Y4/1 灰	サスカイト
97	292	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:1.8* 幅:1.9 厚:0.3 重:0.7		N5/ 灰	サスカイト
97	293	60	石鉢		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.7* 幅:1.4* 厚:0.3 重:0.6		N5/ 灰	サスカイト
97	294	60	石錐		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.7* 幅:0.8* 厚:0.4* 重:0.7		N5/ 灰	サスカイト
98	295	60	石錐		石器集中部	(縄文時代 後期)			長:2.8* 幅:1.5* 厚:1.2 重:3.9		N5/ 灰	サスカイト

遺物観察表 (10)

図番号	遺物 番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
98	296	60	石匙		石器集中部	(縄文時代 後期)			長: 1.4 幅: 3.4* 厚: 0.4 重: 1.3		7.5Y6/1 灰	サスカイト
98	297	61	剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)			長: 12.2 幅: 6.5 厚: 1.4 重: 94.6		5G6/1 緑灰	サスカイト、パティナイヤや 巻達
98	298		磨石		石器集中部	(縄文時代 後期)			長: 7.7 幅: 6.3 厚: 2.2 重: 141.5		10Y4/1 灰	サスカイト
103	299	59	鉢		5 b 層	(縄文時代 後期)	5.5*			0.2~1.0mmの砂礫を含む	10YR4/2 灰黄褐	外面に3条の沈線
103	300	59	鉢		5 b 層 (流路)	(縄文時代 中期)	6.5*			0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	10YR7/3 にぶい黄橙	半截竹管いによる3条の沈 線
103	301	59	深鉢		5 b 層	(縄文時代 中期)	6.5*			0.2~5.0mmの砂礫を多量含む	10YR8/2 灰白	外面に沈線文
103	302	59	鉢		6-2 b 層 下層	(縄文時代 中期)	4.5*			0.2~3.0mmの砂礫を含む、生駒西麓産土?	10YR4/3 褐	
103	303	59	鉢		6-2 a 層	(縄文時代 中期)	2.7*			0.2~3.0mmの砂礫を多量含む	2.5Y5/2 暗灰黄	
103	304	59	鉢		6-2 b 層 下層	(縄文時代 中期)	5.2*			0.2~4.0mmの砂礫を含む、生駒西麓産土	2.5Y7/1 灰白	外面に3条の沈線
103	305	54	深鉢		6-1 a 層 上面	(縄文時代 後期)	24.5*			5.0mm以下の石粒を多量含む	10YR4/2 灰黄褐	外面に4条の沈線
103	306	59	鉢	431	流路	(縄文時代 後期)	12.0*			0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	10YR4/2 灰黄褐	
103	307	59	鉢	574	流路	(縄文時代 中期)	5.5*			0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	10YR6/2 灰黄褐	外面に2枚目による押圧 紋、刺突文、1条の貼り付け 凸帯
103	308	59	鉢	574	流路	(縄文時代 中期)	4.0*			0.2~4.0mmの砂礫を含む	10YR7/2 灰黄褐	
103	309	53	深鉢	863	流路	(縄文時代 晩期)	21.6*			やや粗、0.3mm~3.0mmの砂粒を含む	10YR5/4 にぶい褐	船橋式土器 2条の欄目突 帯文
103	310	59	鉢	566	流路	(縄文時代 後期)	4.3*			0.2~2.0mmの砂礫を多量含む	10YR3/2 黒褐	外面に2条の沈線、1条の 貼り付け凸帯痕
103	311	59	鉢	566	流路	(縄文時代 中期)	5.9*			0.2~3.0mmの砂礫を含む	2.5Y8/2 灰白	外面に4条の工具による沈線
103	312	59	鉢	912	流路	(縄文時代 後期)	8.6*			0.2~3.0mmの砂礫を含む、生駒西麓産土	2.5Y5/2 暗灰黄	外面に1条の半截竹管によ る沈線文
103	313	59	鉢	912	流路	(縄文時代 後期)	8.8*			0.2~5.0mmの砂礫・赤色酸化土粒を含む	2.5Y8/2 灰白	
103	314	59	鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	8.5*			0.2~3.0mmの砂礫を多量含む	10YR4/2 灰黄褐	外面に条痕の後刺突文
103	315	59	鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	5.5*			0.2~3.0mmの砂礫を含む	10YR5/2 灰黄褐	
103	316	59	深鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	10.3*			0.2~5.0mmの砂礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	波状口縁、口縁端部に刻目 文、外面に沈線
103	317	59	鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	5.3*			0.2~3.0mmの砂礫を多量含む	10YR4/2 灰黄褐	
103	318	54	鉢	912	流路 (下層流路)	(縄文時代 中期後 半・末)	11.0*			0.3~2.0mmの砂粒を多く含む	2.5Y7/3 にぶい黄橙	北白川式
103	319	59	鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	5.0*			0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	10YR7/2 灰黄	外面に沈線
103	320	59	深鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	5.4*			0.2~5.0mmの砂礫を多量含む	10YR5/2 灰黄褐	2面の凹形刺突列
103	321	59	深鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	6.5*			0.2~3.0mmの砂礫・雲母片を含む	2.5Y7/1 灰白	外面に2条一対の沈線が2 帯
103	322	59	鉢	912	流路 下層粗砂内	(縄文時代 中期)	7.1*			0.2~3.0mmの砂礫を多量含む	10YR4/2 灰黄褐	外面に沈線
103	323	59	鉢	912	流路 下層粗砂内	(縄文時代 後期)	5.5*			0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	2.5Y6/2 灰黄	外面に沈線
103	324	59	鉢	912	流路	(縄文時代 中期)	5.0*			0.2~2.0mmの砂礫を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	外面に沈線、スス付着
103	325	59	深鉢	1367	流路	(縄文時代 中期)	4.0*			0.2~4.0mmの砂礫を多く含む	10YR6/2 灰黄褐	
103	326	59	鉢	1367	流路	(縄文時代 中期)	1.6*			0.2~3.0mmの砂礫を多量含む	10YR6/2 灰黄褐	

遺物観察表 (11)

図番号	遺物番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
103	327	59	鉢	1357	流路	(縄文時代 後期)		3.2*		0.2~3.0mmの砂礫を含む	2.5Y6/2 灰黄	外面に押圧文、3条の沈線
103	328	59	鉢	1367	流路	(縄文時代 中期)		2.7*		0.2~3.0mmの砂礫を含む	2.5Y5/2 暗灰黄	外面に2条の貼り付け凸帯、外面全体にスス付着
104	329	60	石鏃		4-2 a層	(弥生時代)			長:5.3* 幅:2.0 厚:0.6 重:5.6		N5/ 灰	サスカイト
104	330	60	石鏃	(70・71)	小溝	(弥生時代)			長:5.3 幅:2.3 厚:0.6 重:6.0		N5/ 灰	サスカイト
104	331	60	石鏃		3-1 a層	(縄文~弥生時代)			長:3.0* 幅:1.5* 厚:0.5 重:1.8		N5/ 灰	サスカイト
104	332	60	石鏃		4-2 a層	(縄文時代)			長:1.8 幅:1.5 厚:0.3 重:0.6		N5/ 灰	サスカイト
104	333		石鏃		4-2 a層	(縄文時代)			長:2.3 幅:1.8 厚:0.5 重:1.4		N6/ 灰	サスカイト、パティナイヤや発達
104	334	60	石鏃		5 a層	(縄文時代 後期)			長:3.6 幅:1.9 厚:0.5 重:2.0		5Y6/1 灰	サスカイト、パティナイヤや発達
104	335	60	石鏃		3-2 a層	(縄文時代)			長:3.8 幅:1.4 厚:0.7 重:2.4		N5/ 灰	サスカイト
104	336	60	石鏃		3-2 a層	(縄文時代)			長:1.3 幅:1.4 厚:0.3 重:0.3		N4/ 灰	サスカイト
104	337	60	石鏃	(410)	流路跡	(縄文時代)			長:1.9 幅:1.5 厚:0.4 重:0.8		N5/ 灰	サスカイト
104	338	60	石鏃	651 (1309)	流路	(縄文時代)			長:2.8 幅:2.0 厚:3.0 重:1.3		N5/ 灰	サスカイト
104	339		石鏃		4-2 a層	(縄文時代)			長:2.9* 幅:1.5* 厚:0.3 重:0.7		7.5Y5/1 灰	サスカイト
104	340	60	石起		1-2 a層	(縄文時代)			長:2.0 幅:4.3 厚:0.8 重:5.4		2.5Y6/1 オリーブ 灰	サスカイト、パティナイヤや発達
104	341	60	石鏃		2 a層	縄文~弥生時代			長:5.1* 幅:2.0 厚:0.9 重:6.0		N5/ 灰	サスカイト
104	342	61	ナイフ形石器	912	流路	(旧石器時代 後期)			長:4.9 幅:1.4 厚:0.6 重:3.7		N6/ 灰	サスカイト
104	343	60	石鏃		4-2 a層	(縄文時代)			長:6.3 幅:2.2 厚:0.8 重:8.1		5Y6/1 灰	サスカイト、パティナイヤや発達
104	344	60	石鏃		2 a層	(縄文時代)			長:3.7* 幅:1.8* 厚:1.0 重:3.7		N5/ 灰	サスカイト
106	345		剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)						サスカイト 剥片
106	346		剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)						サスカイト 剥片
114	347		剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)						サスカイト 剥片 (石鏃に類似)
114	348		剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)						サスカイト 剥片 (石鏃に類似)
114	349		剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)						サスカイト 剥片 (石鏃に類似)
114	350		剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)						サスカイト 剥片 (石鏃に類似)
351	54	馬歯		504	流路							
352	54	馬歯		172	流路 (下層流路)							
353	58	柱根		486	ピット							
354												
355	59	鉢		912	流路	(縄文時代 中期)		4.3*		0.2~3.0mmの砂礫を含む	2.5Y6/2 灰黄	外面に工具の違う刺突文

遺物観察表 (12)

図番号	遺物番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他	
	356	59	鉢	574	流路	(縄文時代 中期)		6.2*		0.2~3.0mmの砂礫を含む、生駒西麓産土	2.5Y5/2 暗灰黄 10YR7/2 にぶい黄緑	10YR5/2 にぶい黄緑 10YR7/3 にぶい黄緑	外面に交互に2列に並ぶ刺突文
	357	59	鉢	912	流路	(縄文時代 中期)		4.5*		0.2~3.0mmの砂礫をやや多量含む			
	358	59	縄文土器	562	流路								
	359	59	縄文土器	562	流路								
	360	59	深鉢		流路	(縄文時代 中期)		3.4*		0.5~3.0mmの砂礫を多量含む	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	
	361	59	深鉢	847	流路	(縄文時代 中期)		7.7*		0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	口縁端部に刻目
	362	59	鉢	1367	流路	(縄文時代 中期)		7.0*		0.2~3.0mmの砂礫を多量含む	2.5Y5/1 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	外面に2条一組の沈線
	363	59	鉢	1593	ピット	(縄文時代)		6.9*		0.2~5.0mmの砂礫を含む	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/3 浅黄	混入遺物
	364	59	深鉢		6-2 b層 下層	(縄文時代 中期)		11.6*		0.2~4.0mmの砂礫を多量含む	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
	365	60	石錐	503	流路								
	366	60	石錐		3-2 a層	(縄文時代)			長:2.2 幅:1.2 厚:0.5 重:1.5		2.5Y6/1 黄灰		サヌカイト、パティナイヤヤ 発達
	367	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	368	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	369	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	370	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	371	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	372	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	373	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	374	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	375	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	376	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	377	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	378	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	379	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	380	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	381	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	382	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	383	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	384	61	サヌカイト剥片		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	385	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	386	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	387	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	388	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	389	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	390	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	391	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	392	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							
	393	62	礫		石器集中部	(縄文時代 後期)							

遺物観察表 (13)

図番号	遺物番号	写真 図版 番号	器種	遺構番号	遺構種類/層名	時期	口径	器高	長・幅・重	胎土	色調 (内/外)	その他
	394	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	395	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	396	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	397	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	398	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	399	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	400	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	401	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	402	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	403	62	碟		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	404	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	405	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	406	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	407	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	408	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	409	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	410	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	411	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	412	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	413	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	414	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	415	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	416	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	417	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	418	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						
	419	62	縄文土器		石器集中部	(縄文時代 後期)						

版 图



1 第2面南半 全景（東から）：1区



2 第2面北半 全景（東から）：1区



3 第1-4面 全景（北から）：3-1区



4 第1-5面 全景（南から）：3-2区



5 第2面 全景（北から）：4区



6 第2面 全景（北から）：9区

図版2



1 第3-1面北半 全景(東から):1区



2 第3-1面南半 全景(東から):1区



3 第3-1面 全景(南から):3-2区



4 第3-1面 全景(南から):4区



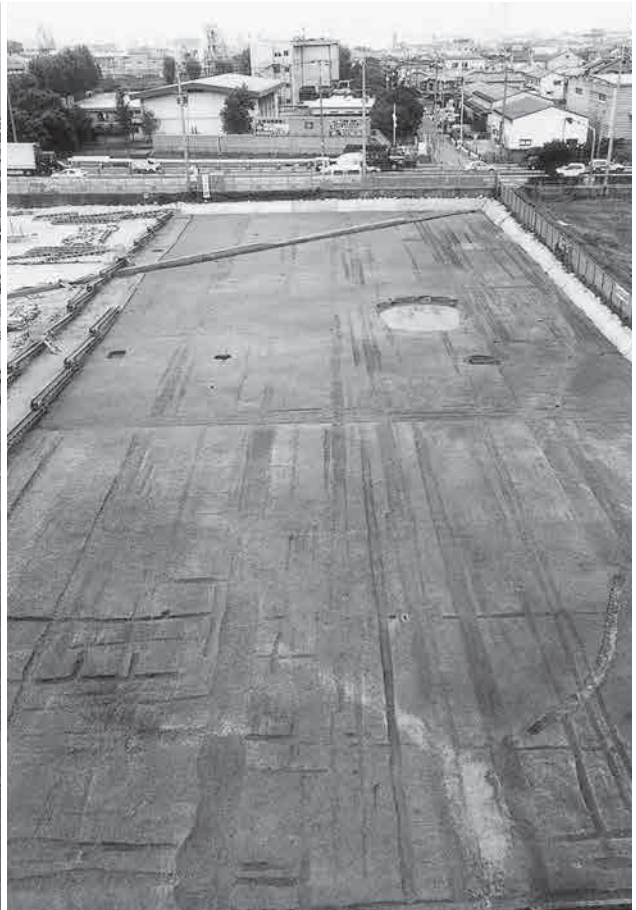
5 第3-1面 全景(西から):5区



6 第3-1面 全景(南から):8区



1 第3-2面南半 全景（東から）：1区



2 第3-2面北半 全景（東から）：1区



3 第3-2面北半 全景（西から）：8区



4 第3-2面南半 全景（西から）：8区



5 102土坑（西から）



6 103土坑（西から）

図版4



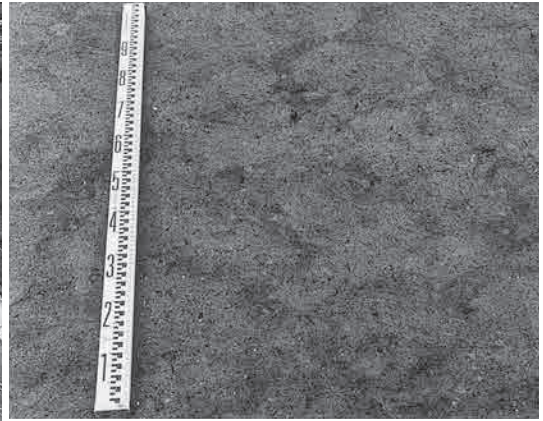
1 第4-2面南半 全景（東から）：1区



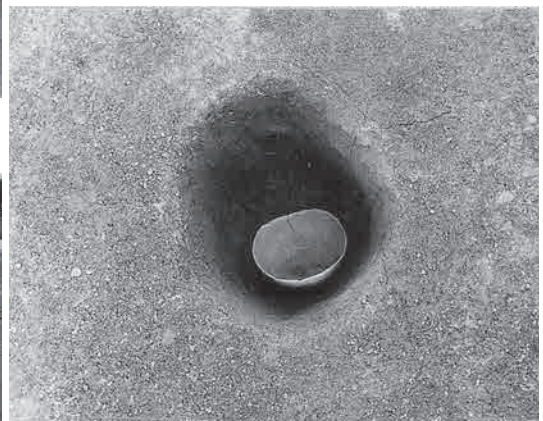
2 第4-2面北半 全景（東から）：1区



3 微高地上検出遺構（北から）：1区 第4-2面



4 荷重痕跡（東から）



5 278ピット（西から）



6 486ピット（南西から）



7 227ピット（西から）



1 225土坑（西から）



4 244井戸（北西から）



2 244井戸（南西から）



5 199ピット（西から）



3 244井戸（南西から）



6 1715土坑（南から）



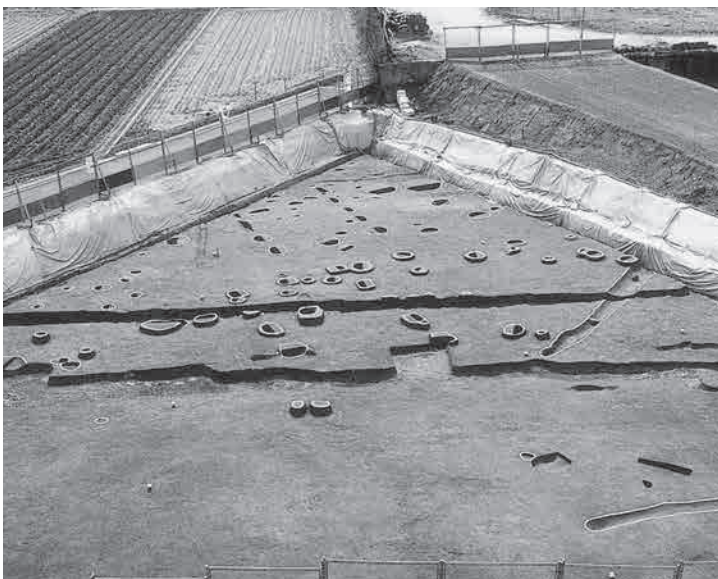
7 504流路北肩 遺物出土状況（南東から）



1 第4-2面 全景(南から) : 2区



2 652溝・651溝・678溝(北から)



3 第4-2面 全景(南から) : 3-1区



4 651溝・652溝(東から)



5 651溝(東から)



6 652溝(西から)



7 633土坑(西から)



1 644土坑 (西から)



2 658ピット (南から)



3 668溝 (南から)



4 669土坑 (東から)



5 第4-2面 全景 (南から) : 3-2区



6 第4-2面 全景 (北から) : 4区



7 第4-2面 全景 (北から) : 4区

図版8



1 1014溝・1015溝 (西から)



5 1164土坑 (北から)



2 1096土坑 (南から)



6 第4-2面 全景 (西から) : 5区



3 1097土坑 (南から)



4 1243土坑 (西から)



7 740流路 (北西から)



1 793流路 大甕出土状況（西から）



4 793流路内遺物出土状況（西から）



2 1341流路（北東から）



5 793流路内遺物出土状況（北から）



3 786凹み（北から）



6 830溝（東から）



7 789土器集中部（東から）



1 第4-2面南側 全景（西から）：6区



4 第4-2面 全景（南から）：8区



2 第4-2面北側 全景（西から）：6区



5 第4-2面 全景（北から）：7区



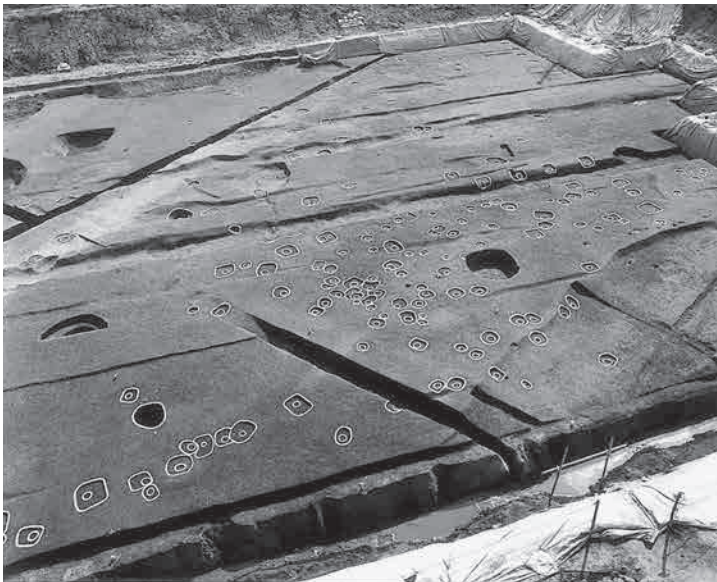
3 第4-2面 全景（南西から）：8区



6 927土坑（北から）



1 第4-2面 全景（東から）：9区



2 第4-2面 全景（北西から）：9区



3 第4-2面 全景（北から）：9区



4 1429土坑（西から）



5 1431ピット（南から）



6 1539土坑（南から）



7 1541土坑（南から）



1 建物1 (南東から)



2 建物2 (北から)



3 建物3 (東から)



4 247柱穴 (東から) : 建物1



5 248柱穴 (東から) : 建物1



6 256柱穴 (南から) : 建物1



7 211柱穴 (東から) : 建物2



1 224柱穴（東から）：建物2



5 186柱穴（北東から）：建物3



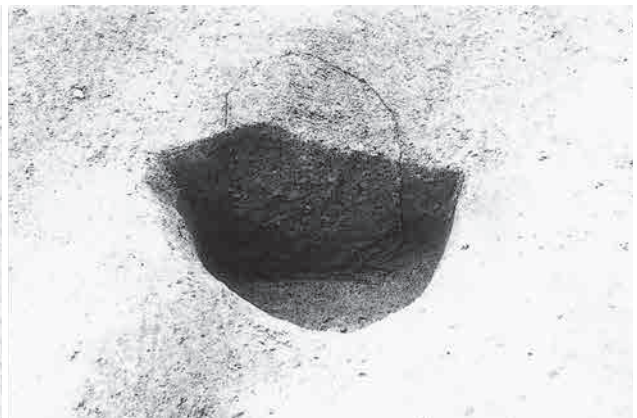
2 433柱穴（東から）：建物2



6 207柱穴（北西から）：建物3



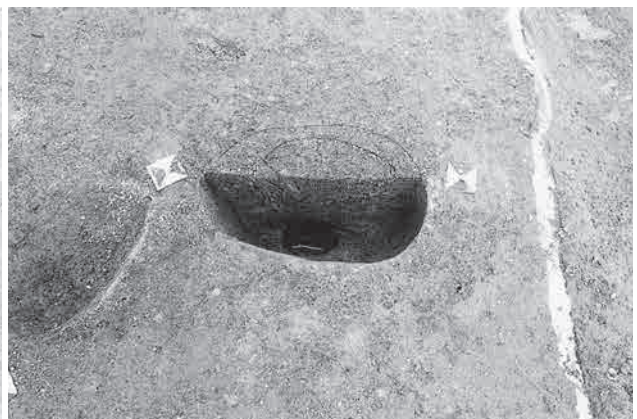
3 438柱穴（南から）：建物2



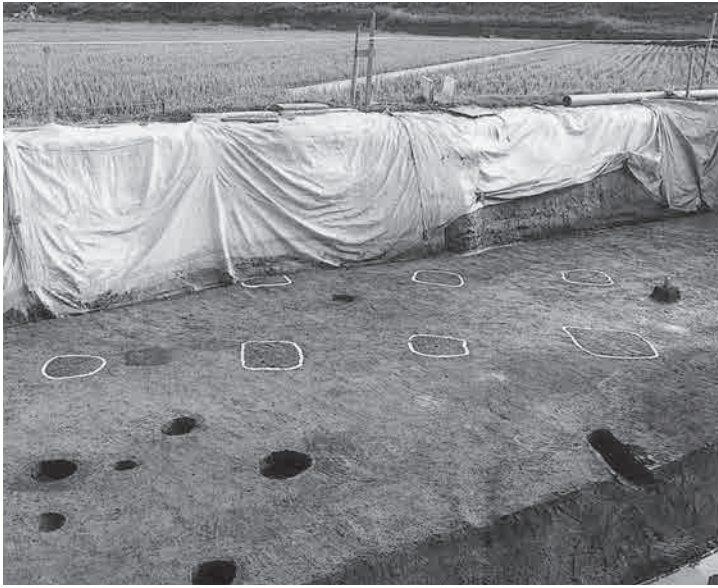
7 213柱穴（西から）：建物3



4 450柱穴（西から）：建物2



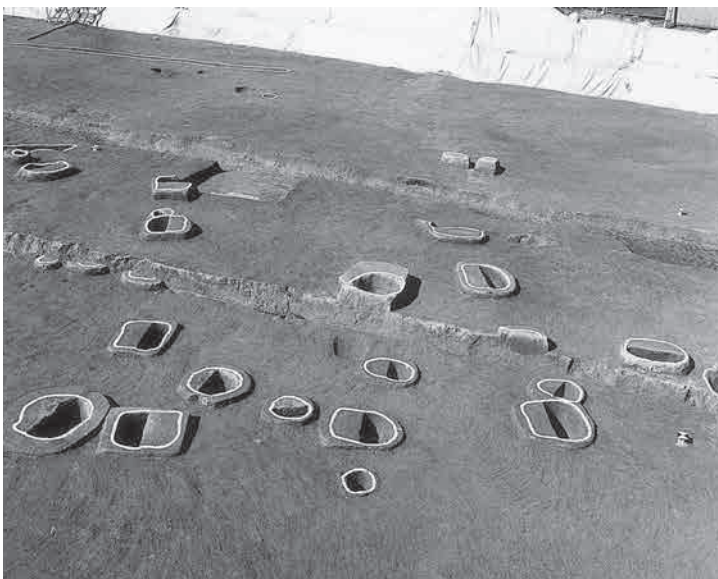
8 214柱穴（南から）：建物3



1 建物4（北西から）



2 建物5（北から）



3 建物6（南から）



4 1352柱穴（西から）：建物4



5 1347柱穴（西から）：建物4



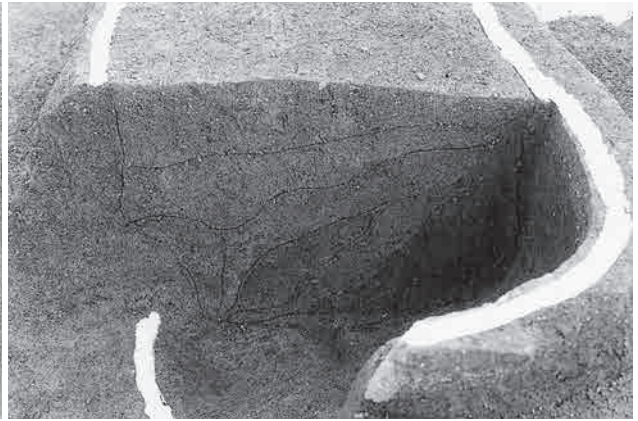
6 1348柱穴（南から）：建物4



7 613柱穴（南西から）：建物5



1 615柱穴（北から）：建物5



5 665柱穴（北から）：建物6



2 617柱穴（東から）：建物5



6 664柱穴（西から）：建物6



3 619柱穴（南から）：建物5



7 822柱穴（東から）：建物7



4 623柱穴（東から）：建物6



8 824柱穴（東から）：建物7



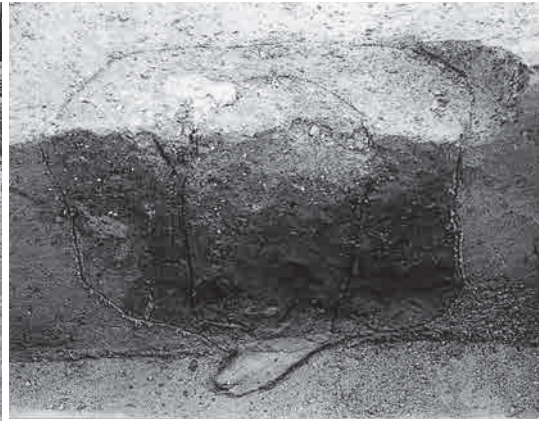
1 建物7 (東から)



2 建物8 (東から)



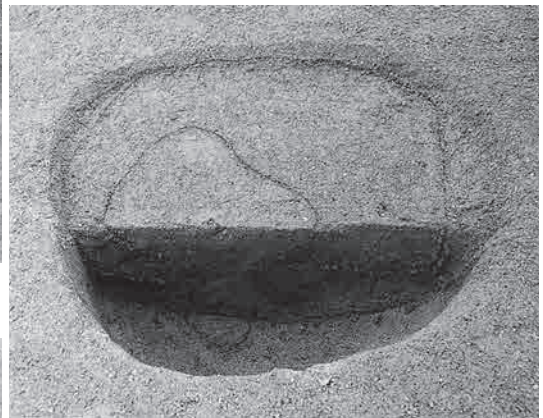
3 817柱穴 (北東から) : 建物8



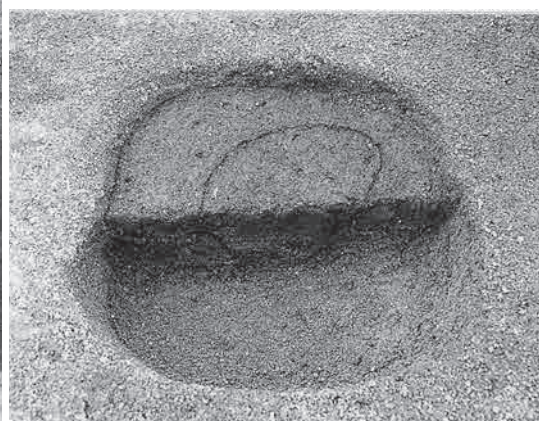
4 817柱穴 (北東から) : 建物8



5 818柱穴 (南から) : 建物8



6 1056柱穴 (北から) : 建物9



7 1057柱穴 (北から) : 建物9



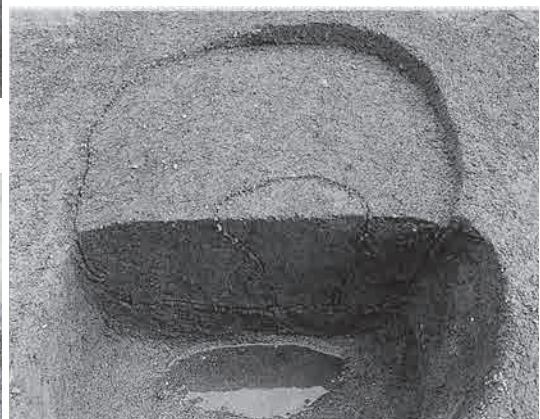
1 建物9 (南から)



4 1058柱穴 (南から) : 建物9



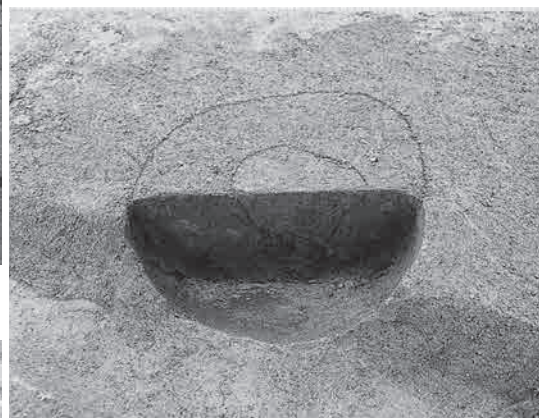
2 建物10 (西から)



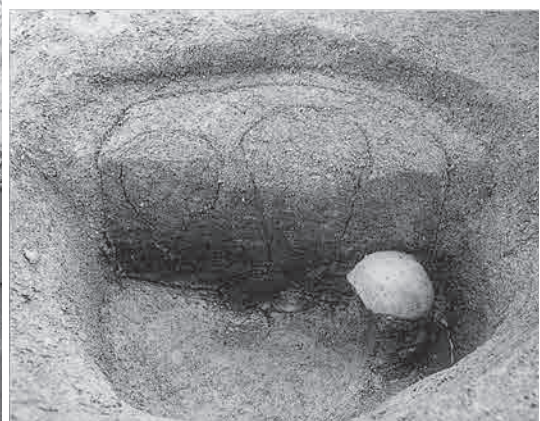
5 1082柱穴 (北から) : 建物9



3 建物11 (北から)



6 1174柱穴 (西から) : 建物9



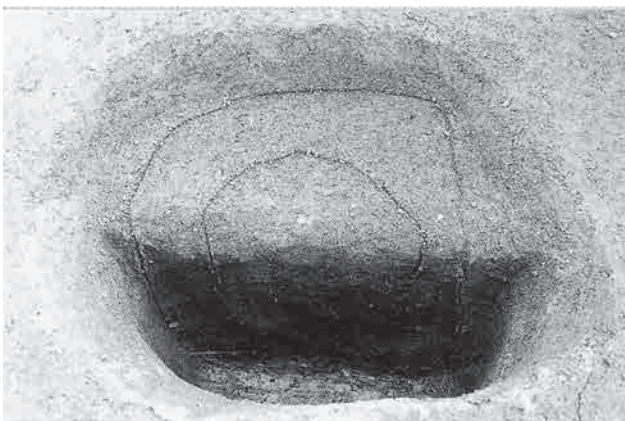
7 1036柱穴 (北から) : 建物10



1 1038柱穴（南から）：建物10



5 1112柱穴（東から）：建物11c



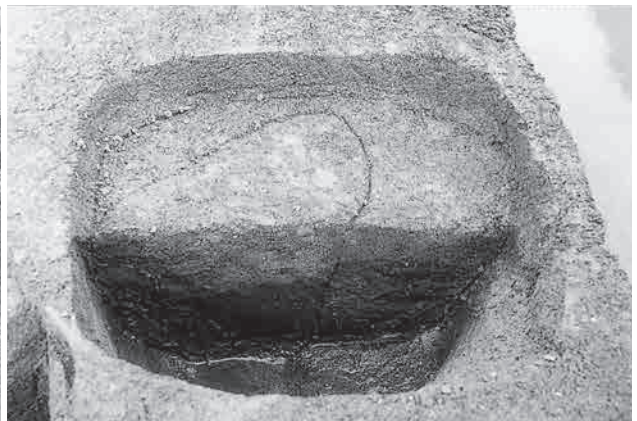
2 1039柱穴（北から）：建物10



6 1118柱穴（東から）：建物11b



3 1040柱穴（南から）：建物10



7 1122柱穴（西から）：建物11a



4 1041柱穴（北から）：建物10



8 1173・1127柱穴（南東から）：建物11a・b



1 建物12 (南から)



4 1045柱穴 (南から) : 建物12



2 建物13 (北西から)



5 1029柱穴 (東から) : 建物12



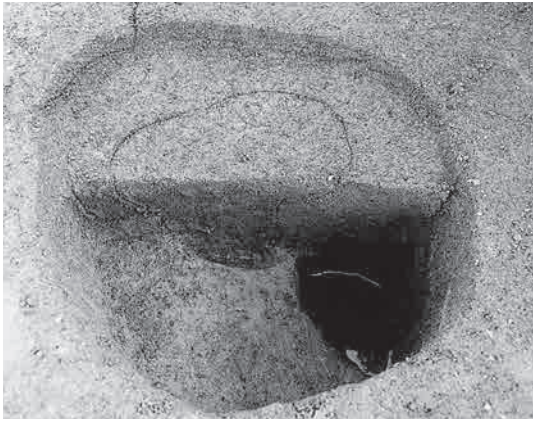
3 建物14 (南東から)



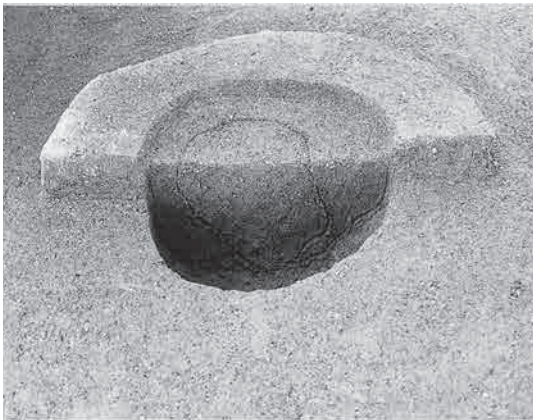
6 1125柱穴 (東から) : 建物13



7 1131柱穴 (北から) : 建物13



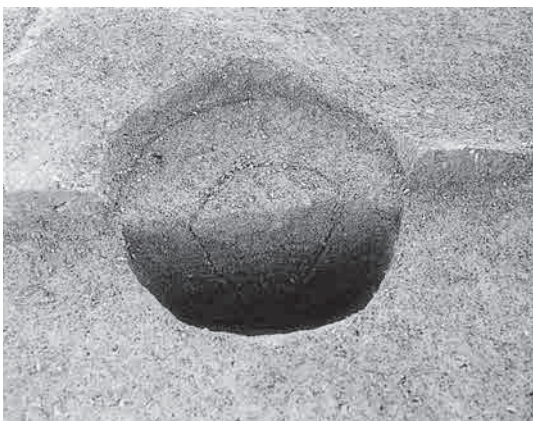
1 1136柱穴（北から）：建物13



2 1176柱穴（北東から）：建物14



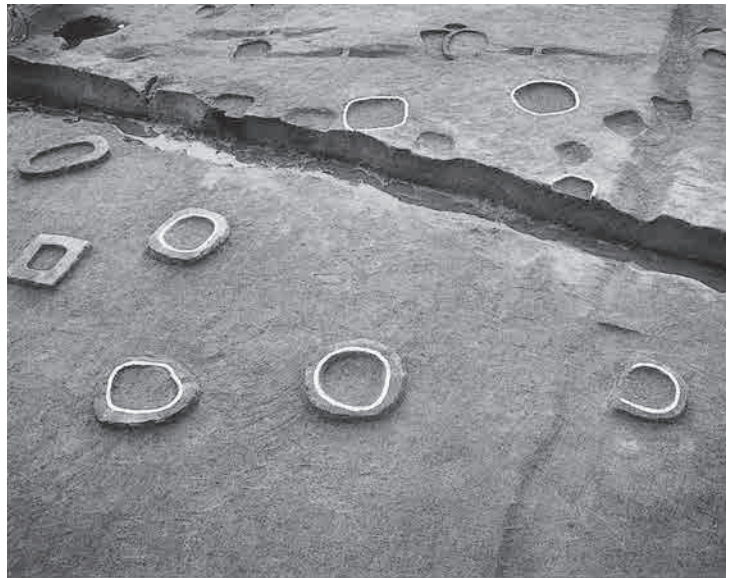
3 1177柱穴（北から）：建物14



4 1188柱穴（北から）：建物14



5 建物15（南から）



6 建物16（北南から）



7 建物18（東から）



1 1222柱穴（北から）：建物15



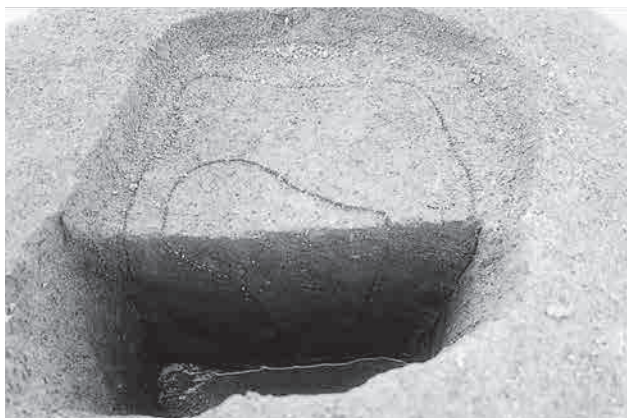
5 1153柱穴（北から）＜奥の柱穴＞：建物16



2 1227柱穴（南から）：建物15



6 1154柱穴（北から）：建物17



3 1232柱穴（南から）：建物15



7 1158柱穴（北から）：建物17



4 1235柱穴（南から）：建物15



8 1565柱穴（東から）：建物18



1 1566柱穴（東から）：建物18



2 1567柱穴（東から）：建物18



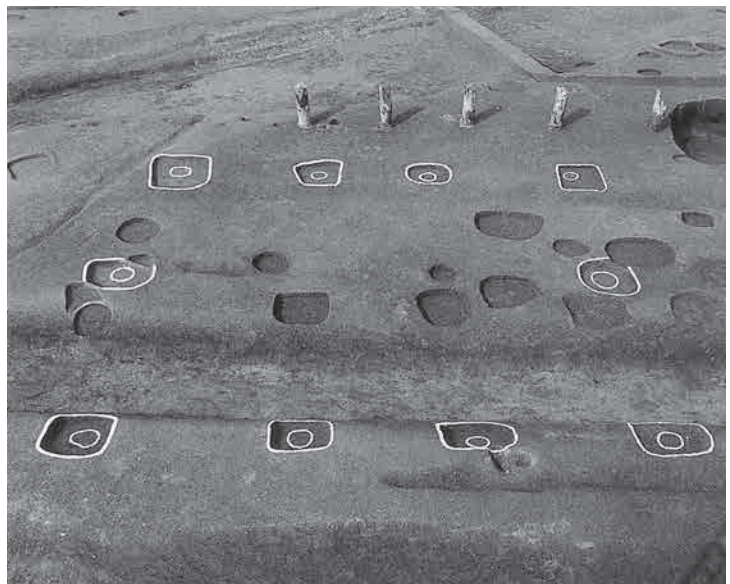
3 1553柱穴（西から）：建物19



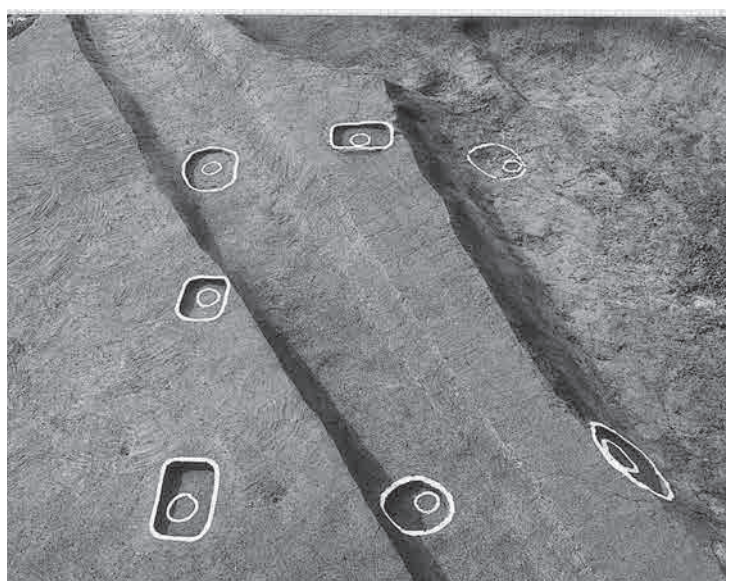
4 1549柱穴（北から）：建物19



5 建物19（北西から）



6 建物20（南から）



7 建物21（東から）



1 1549柱穴（北から）：建物19



5 1537柱穴（南から）：建物20



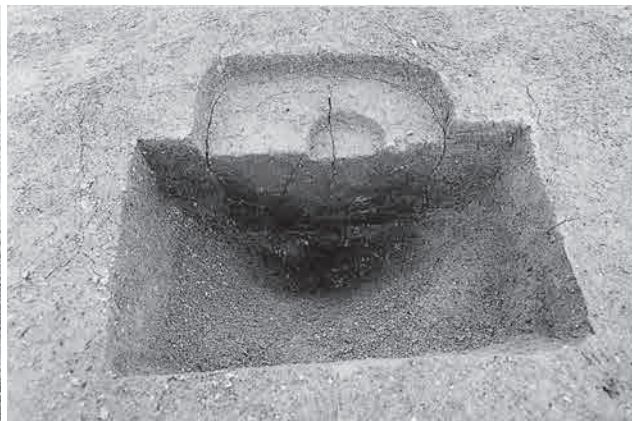
2 1583柱穴（南から）：建物19



6 1410柱穴（北から）：建物21



3 1535柱穴（南から）：建物20



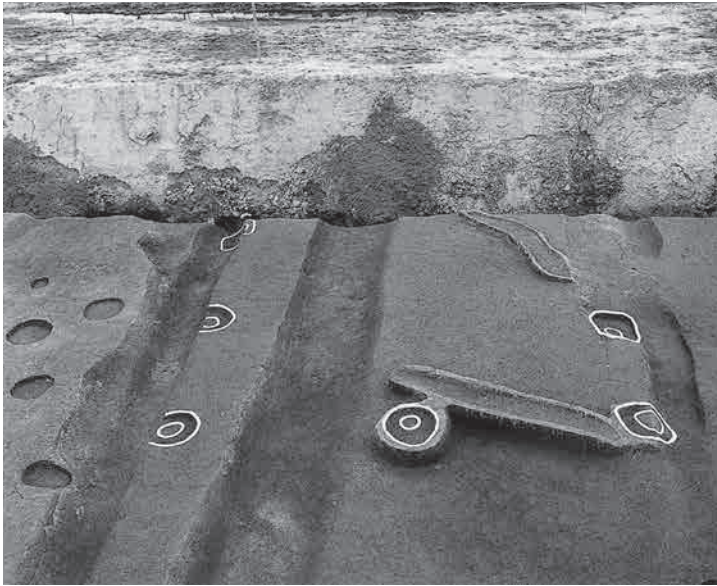
7 1584柱穴（南から）：建物21



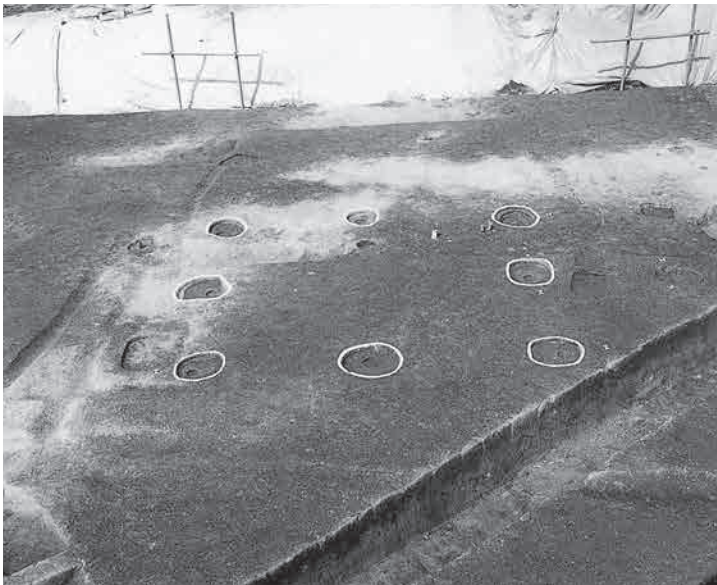
4 1536柱穴（南から）：建物20



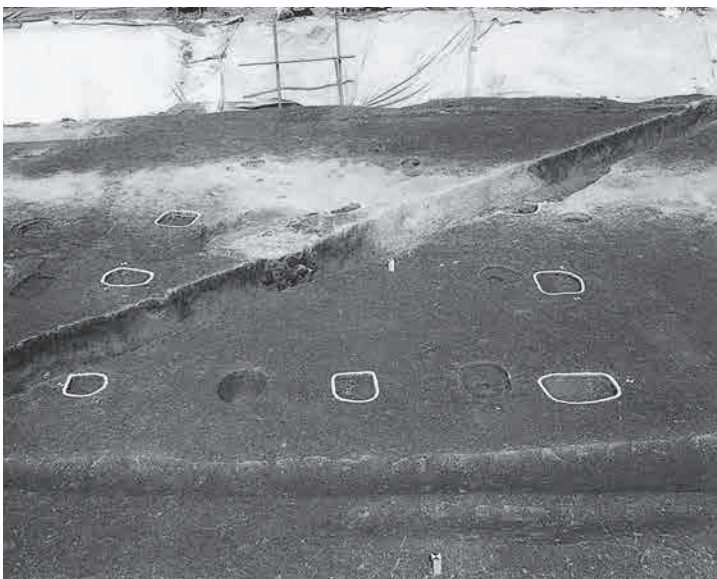
8 1458柱穴（南から）：建物21



1 建物22 (西から)



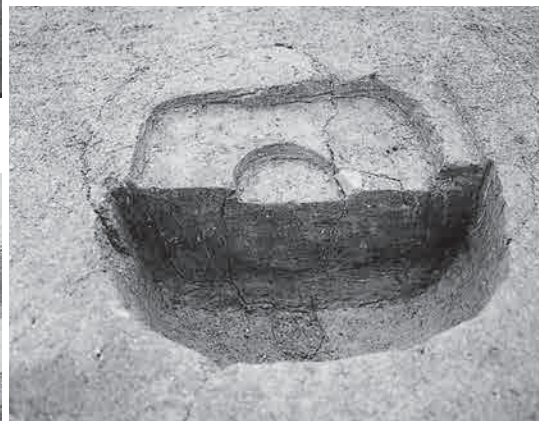
2 建物23 (南から)



3 建物24 (南から)



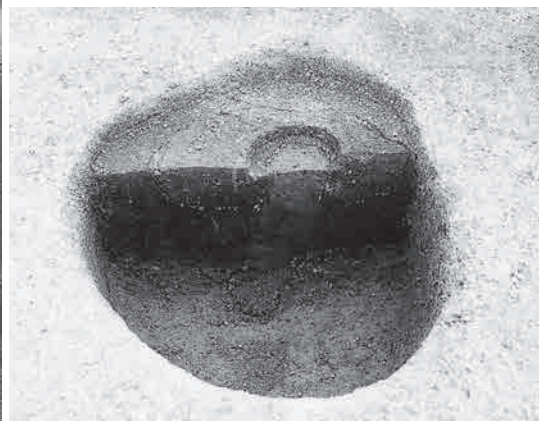
4 1405柱穴 (北から) : 建物22



5 1409柱穴 (南から) : 建物22



6 1675柱穴 (西から) : 建物22



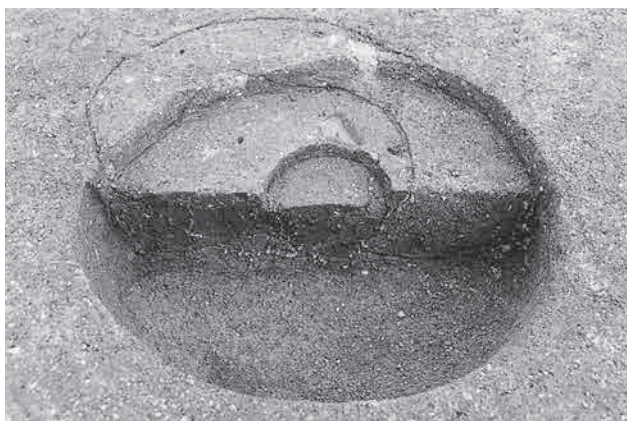
7 1437柱穴 (西から) : 建物23



1 1439柱穴（南から）：建物23



5 1392柱穴（南から）：建物24



2 1467柱穴（南から）：建物23



6 1475柱穴（西から）：建物24



3 1389柱穴（南から）：建物24



7 1662柱穴（南東から）：建物25



4 1391柱穴（南から）：建物24



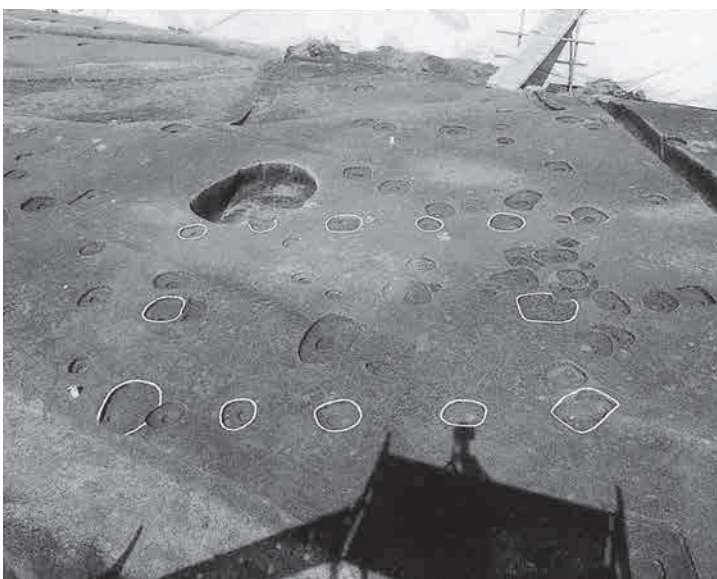
8 1665柱穴（南東から）：建物25



1 建物25 (北から)



2 1421柱穴 (北西から) : 建物25



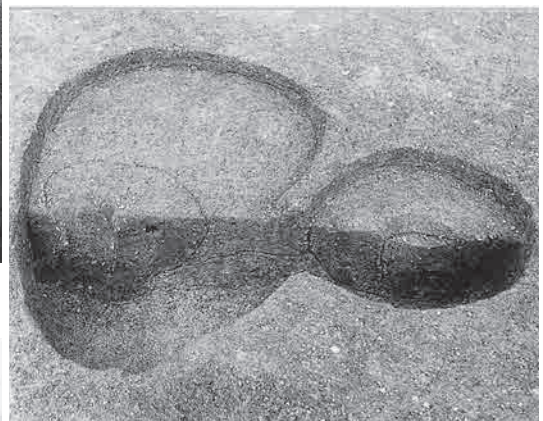
3 建物26 (南から)



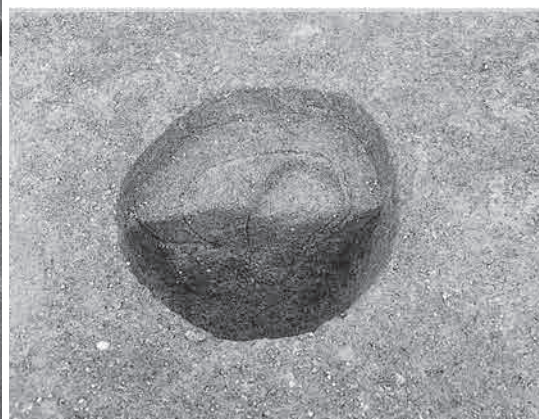
4 1416柱穴 (北から) : 建物25



5 1498柱穴 (北西から) : 建物26



6 1507柱穴 (南東から) : 建物26



7 1730柱穴 (南東から) : 建物26



1 第4-3面北半 全景（東から）：1区



4 352流路 遺物出土状況（西から）



2 第4-3面南半 全景（東から）：1区



5 352流路 断面（西から）



3 第4-4面北半 全景（東から）：1区



6 352流路 断面（西から）



7 409流路（西から）



1 第4-4面全景（南から）：2区



4 第4-4面 全景（南西から）：6区



2 第4-4面全景（南から）：5区



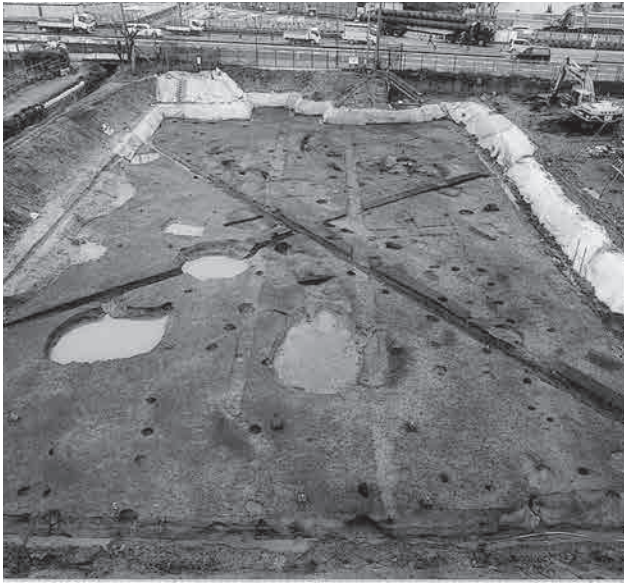
5 第4-4面南半 全景（西から）：8区



3 795流路（北西から）



6 第4-4面北半 全景（西から）：8区



1 第4-4面 全景(東から) : 9区



4 第5-1面 全景(南から) : 2区



2 第5-1面南半 全景(東から) : 1区



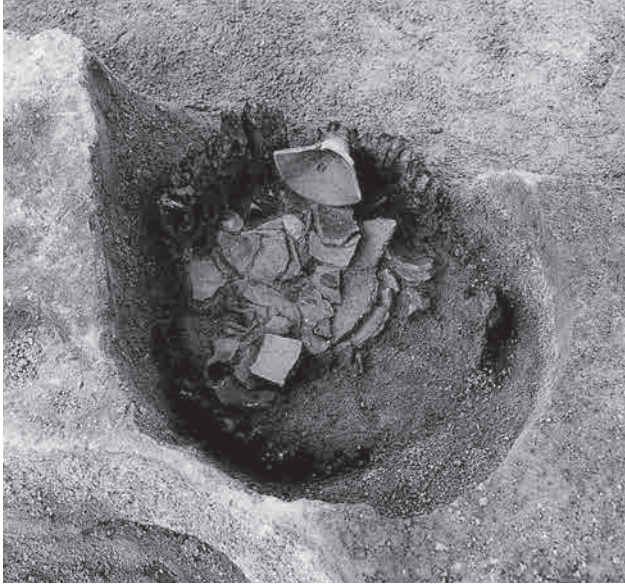
5 第5-1面 全景(南から) : 4区



3 第5-1面南半 全景(東から) : 1区



6 第5-1面 全景(西から) : 5区



1 826井戸 (南から)



4 第5-1面南半 全景 (西から) : 6区



2 826井戸 (北東から)



5 第5-2面南半 全景 (西から) : 6区



3 第5-1面北半 全景 (西から) : 6区



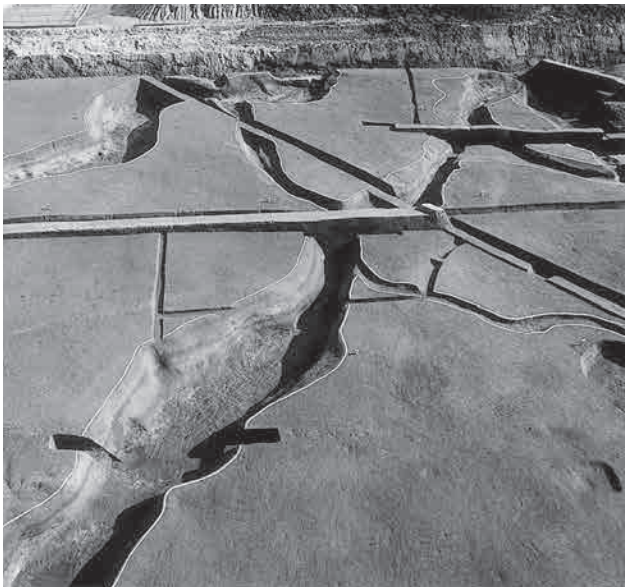
6 第5-2面北半 全景 (西から) : 6区



1 第5-1面南半 全景（西から）：8区



4 4a層系下面検出遺構（北から）：1区



2 第5-1面北半 全景（西から）：8区



5 4a層系下面検出遺構（東から）：1区



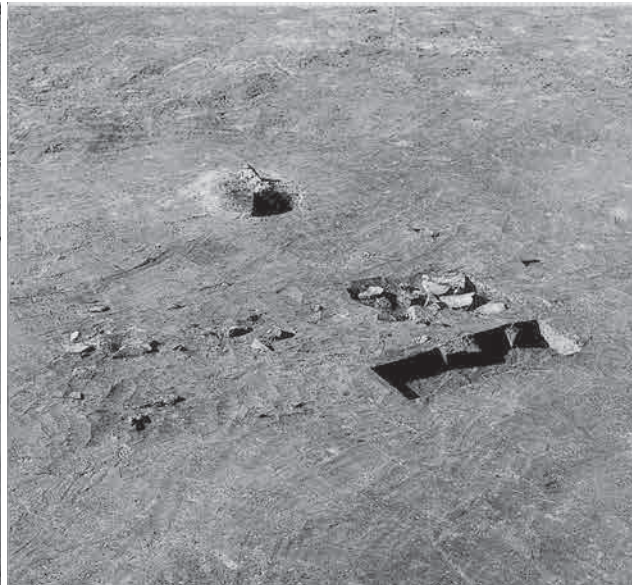
3 4a層系下面検出遺構（東から）：1区



6 第6-1面北半 全景（東から）：1区



1 第6-1面南半 全景（東から）：1区



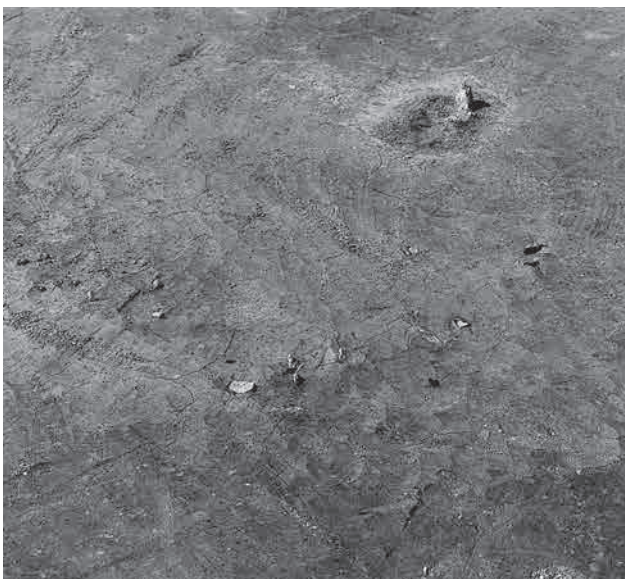
4 第6-1面検出土器（南東から）



2 第6-1面南半 全景（北東から）：1区



5 第6-1面検出 石器集中部（南東から）



3 第6-1面検出土器（東から）



6 第6-1面検出 石器集中部（東から）



1 562流路 (南東から)



2 562流路 断面 (南東から)



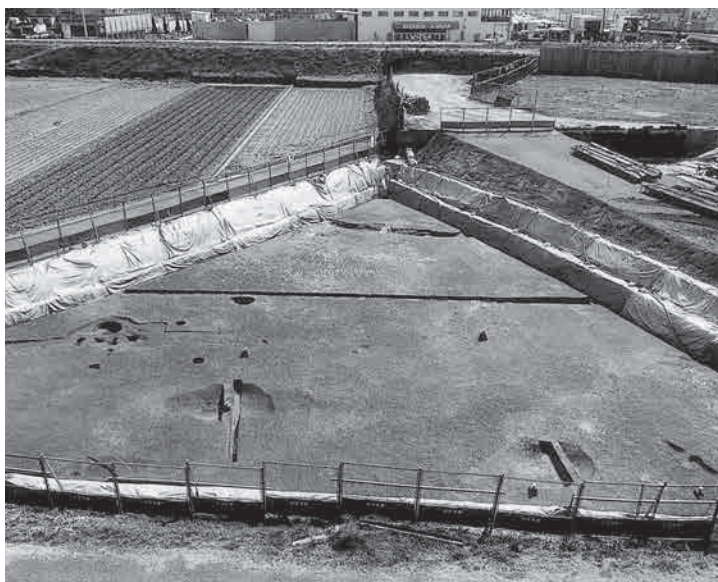
3 1301流路 (東から)



4 1361流路 (南から)



5 第6-1面 全景 (南から) : 2区



6 第6-1面 全景 (北から) : 3-1区



7 第6-1面 全景 (南から) : 3-2区



1 第6-1面 全景（南から）：4区



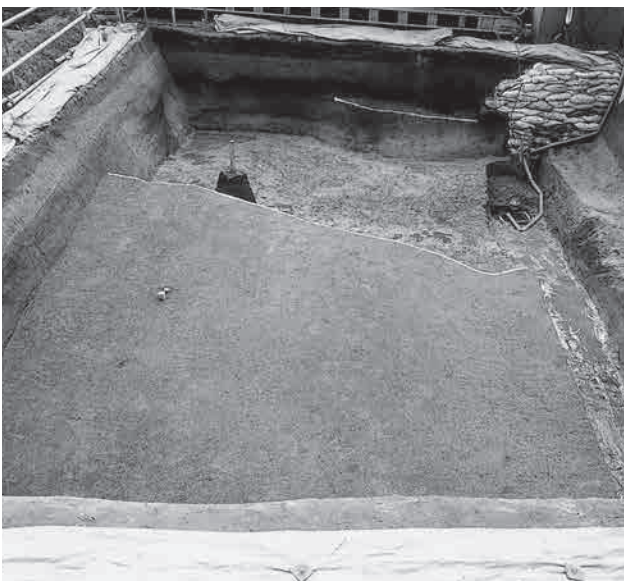
4 第6-1面 全景（西から）：5区



2 第6-1面 全景（北西から）：4区



5 第6-1面 全景（西から）：6区



3 第6-1面 全景（北から）：4区



6 第6-1面 全景（北から）：7区



1 第6-1面南半 全景（西から）：8区



4 第6-1a層下面南半 全景（東から）：1区



2 第6-1面北半 全景（西から）：8区



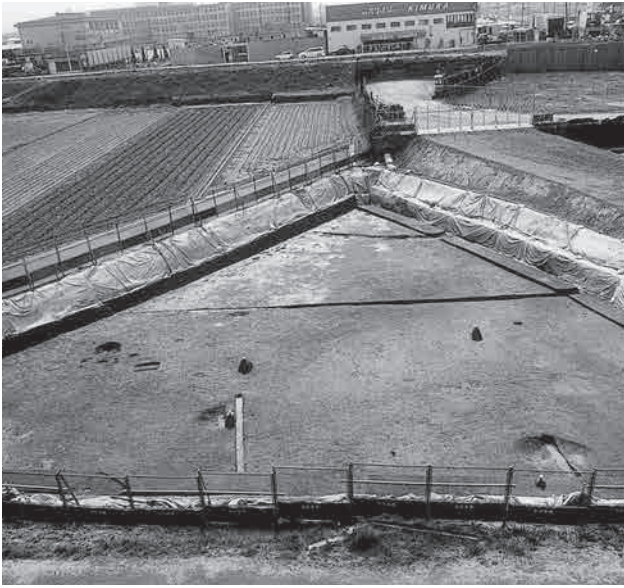
5 第6-1a層下面北半 全景（東から）：1区



3 第6-1面 全景（西から）：11区



6 第6-1a層下面 全景（南から）：2区



1 第6-1a層下面 全景（北から）：3-1区



4 第6-2面北半 全景（西から）：6区



2 第6-1a層下面 全景（南から）：3-2区



5 第6-2面南半 全景（西から）：6区



3 第6-1a層下面 全景（西から）：5区



6 第6-1a層下面 全景（北から）：7区



1 第6-2面北半 全景(西から) : 8区



4 第7面 全景(東から) : 1区



2 第6-2面南半 全景(西から) : 8区



5 第8面 全景(西から) : 1区



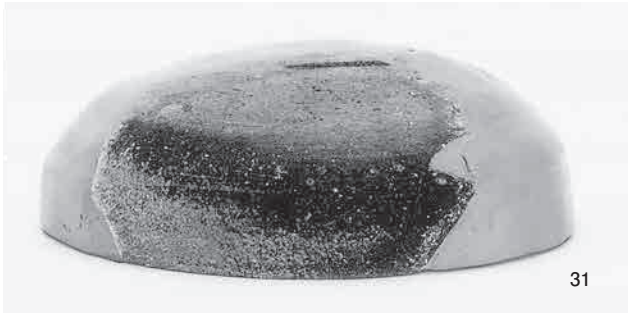
3 第6-2a層下面北半 全景(西から) : 6区



6 土坑状変形(北東から)

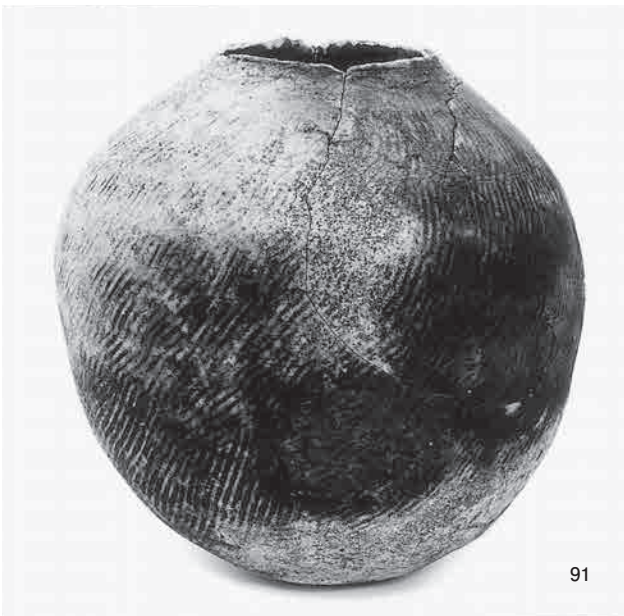


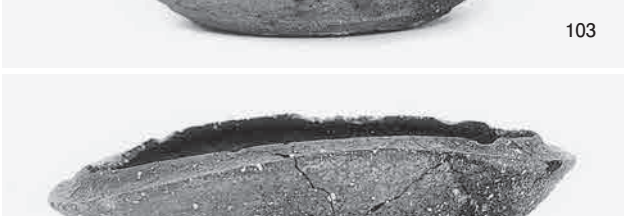
7 土坑状変形 断面(北東から)

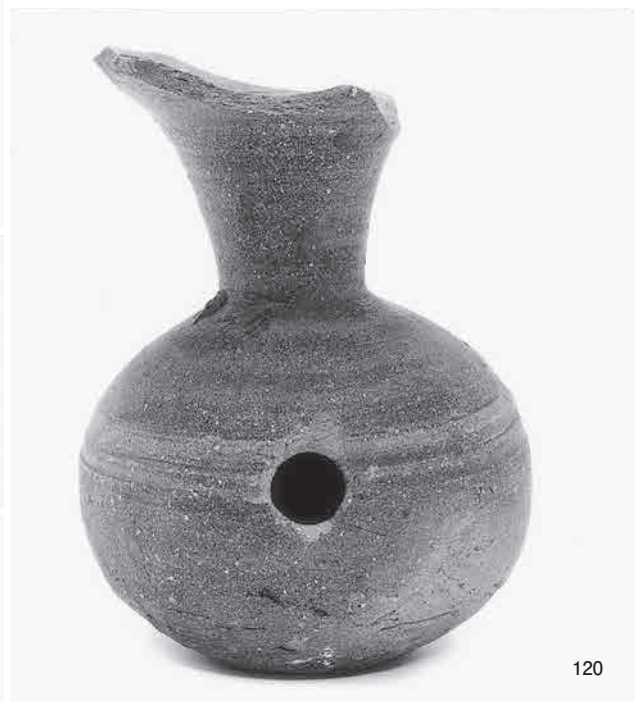
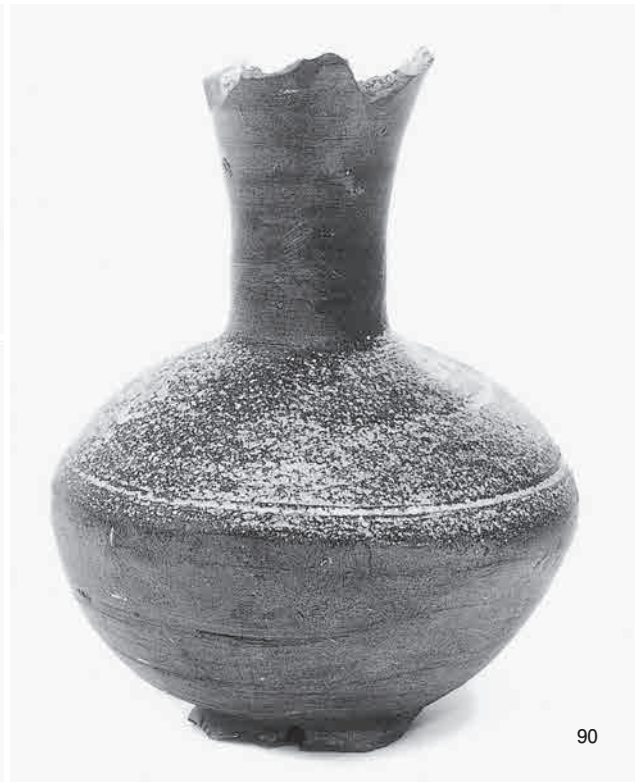








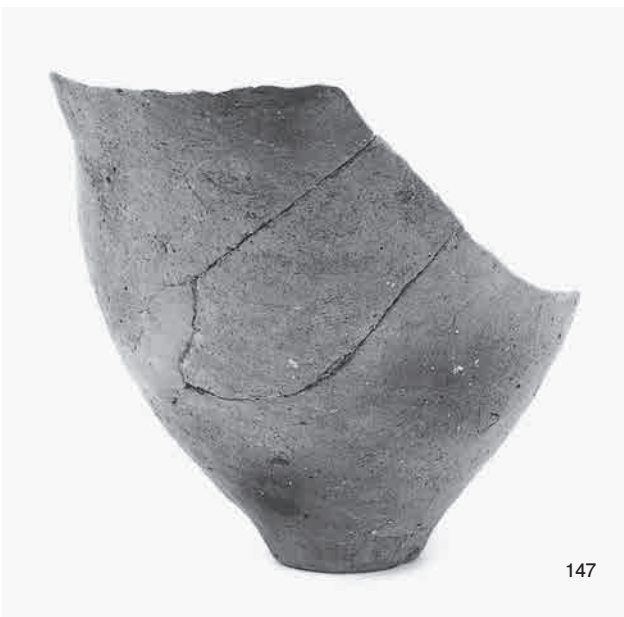






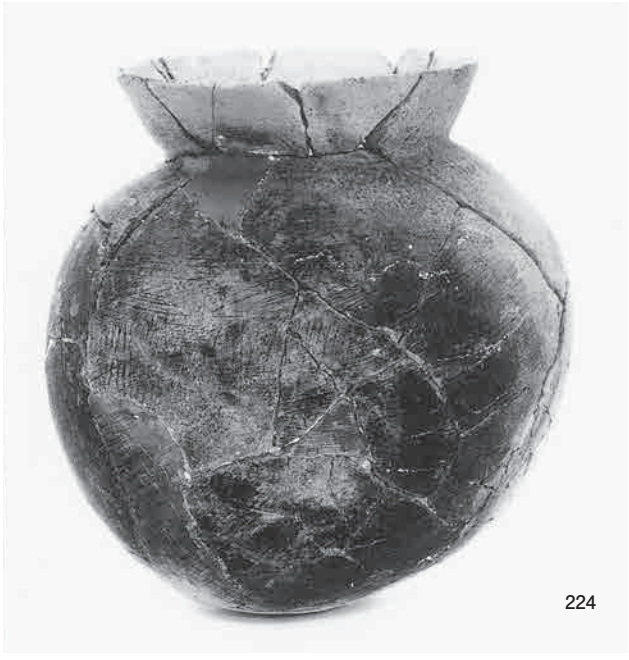


















195



197



196



264



198

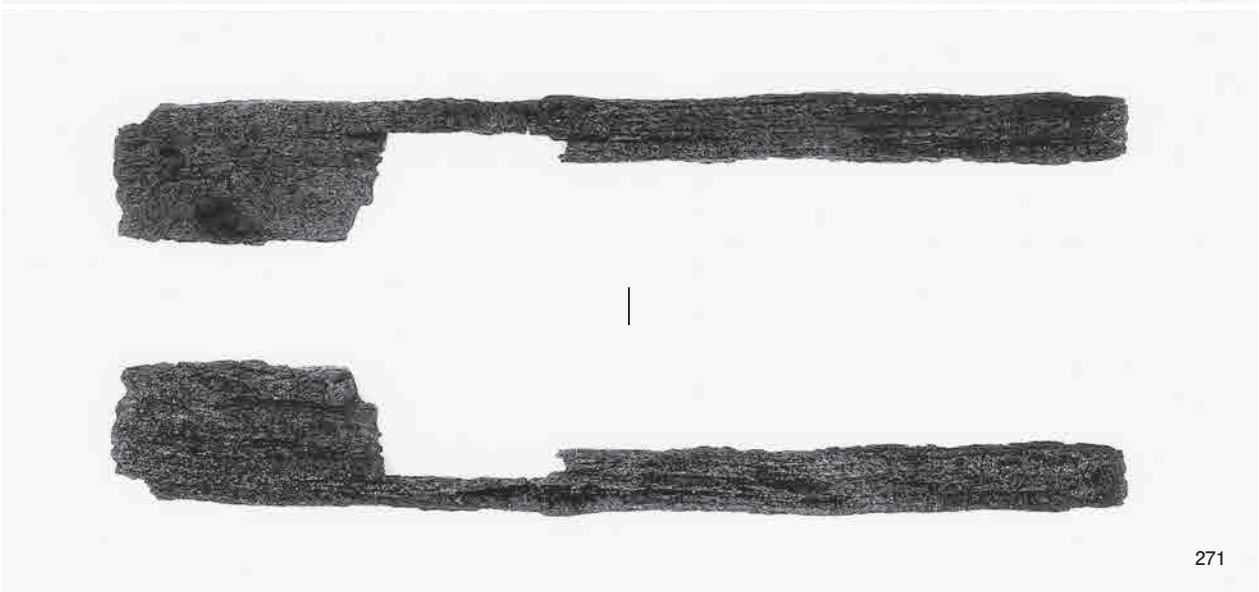
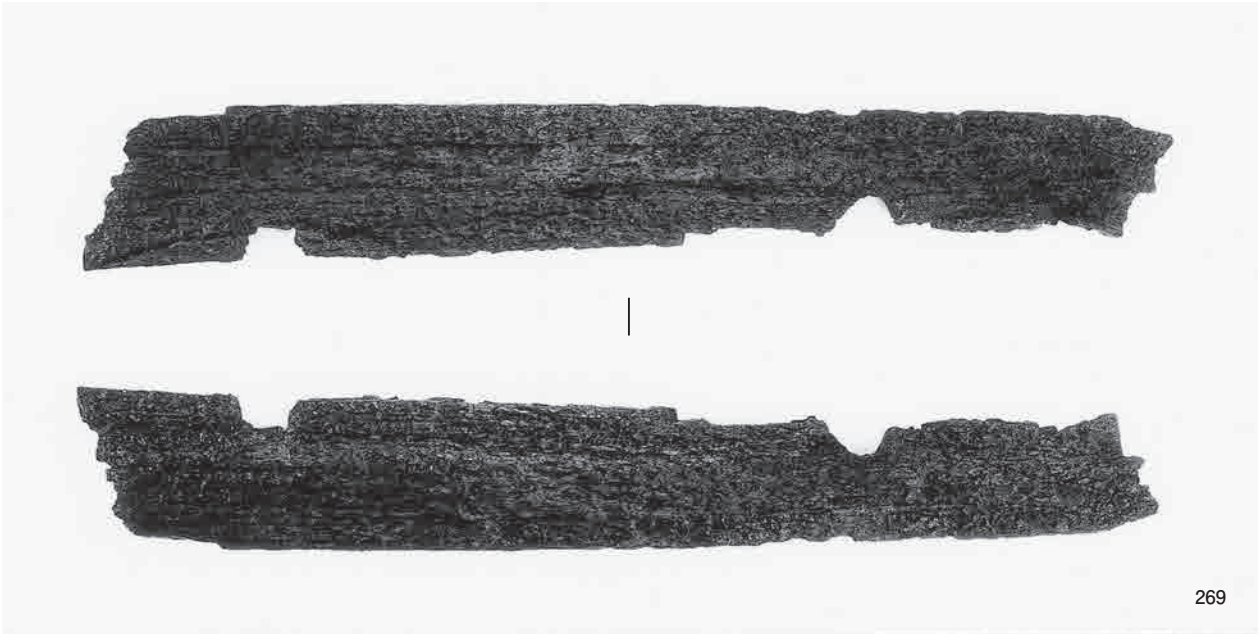


268

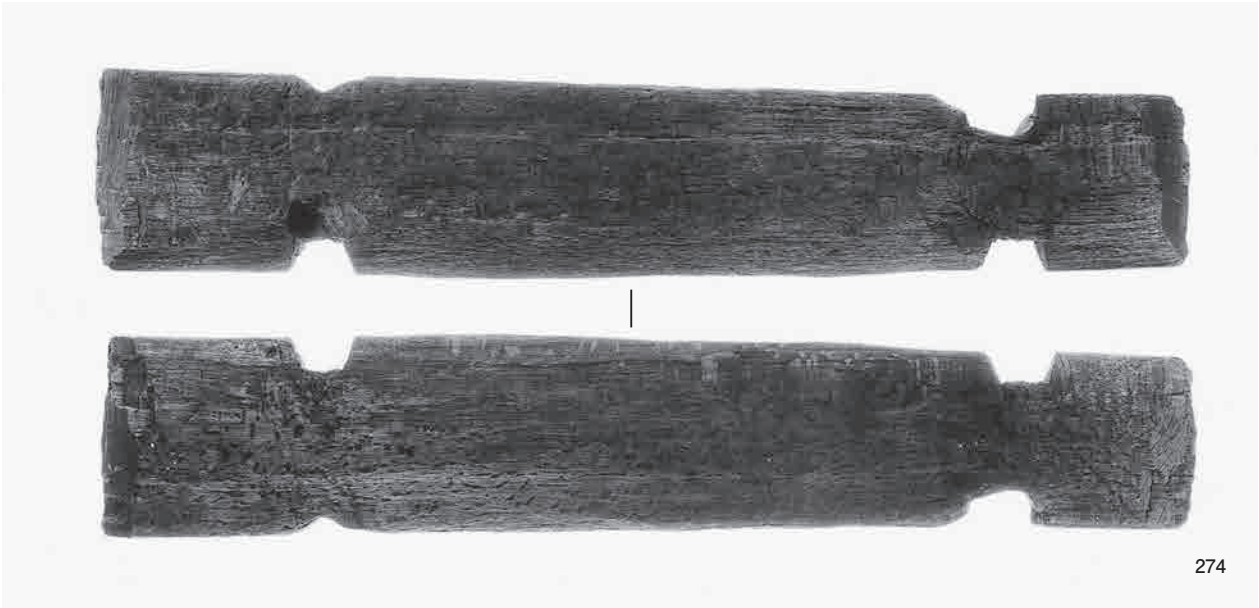


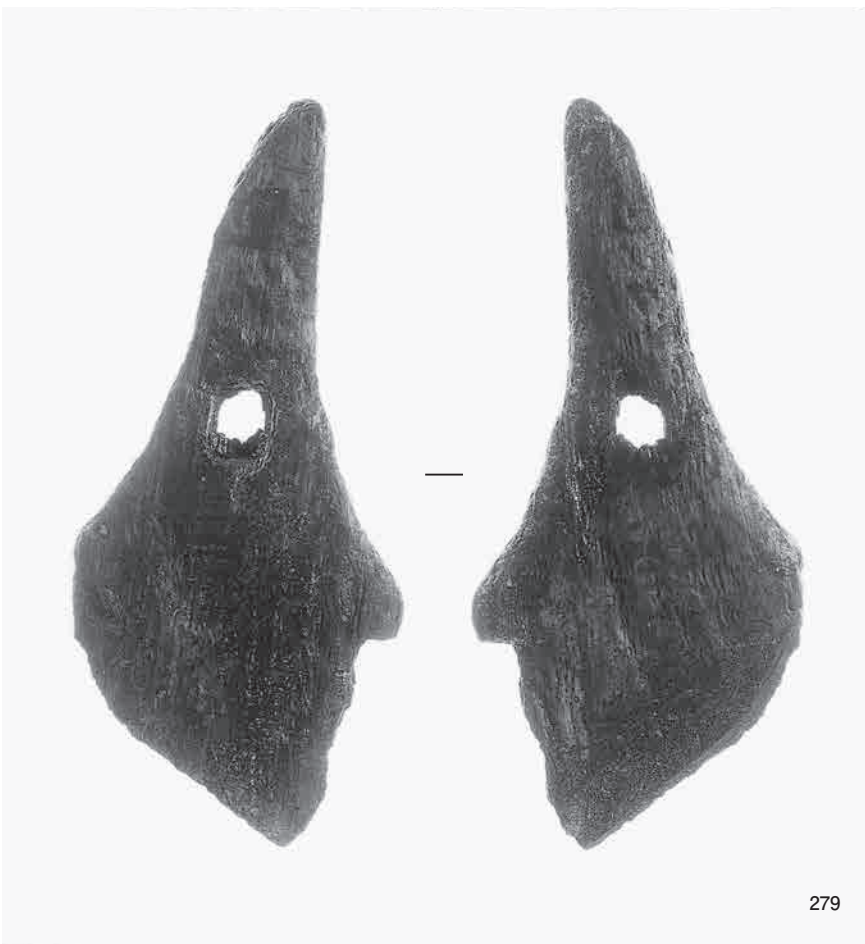
309

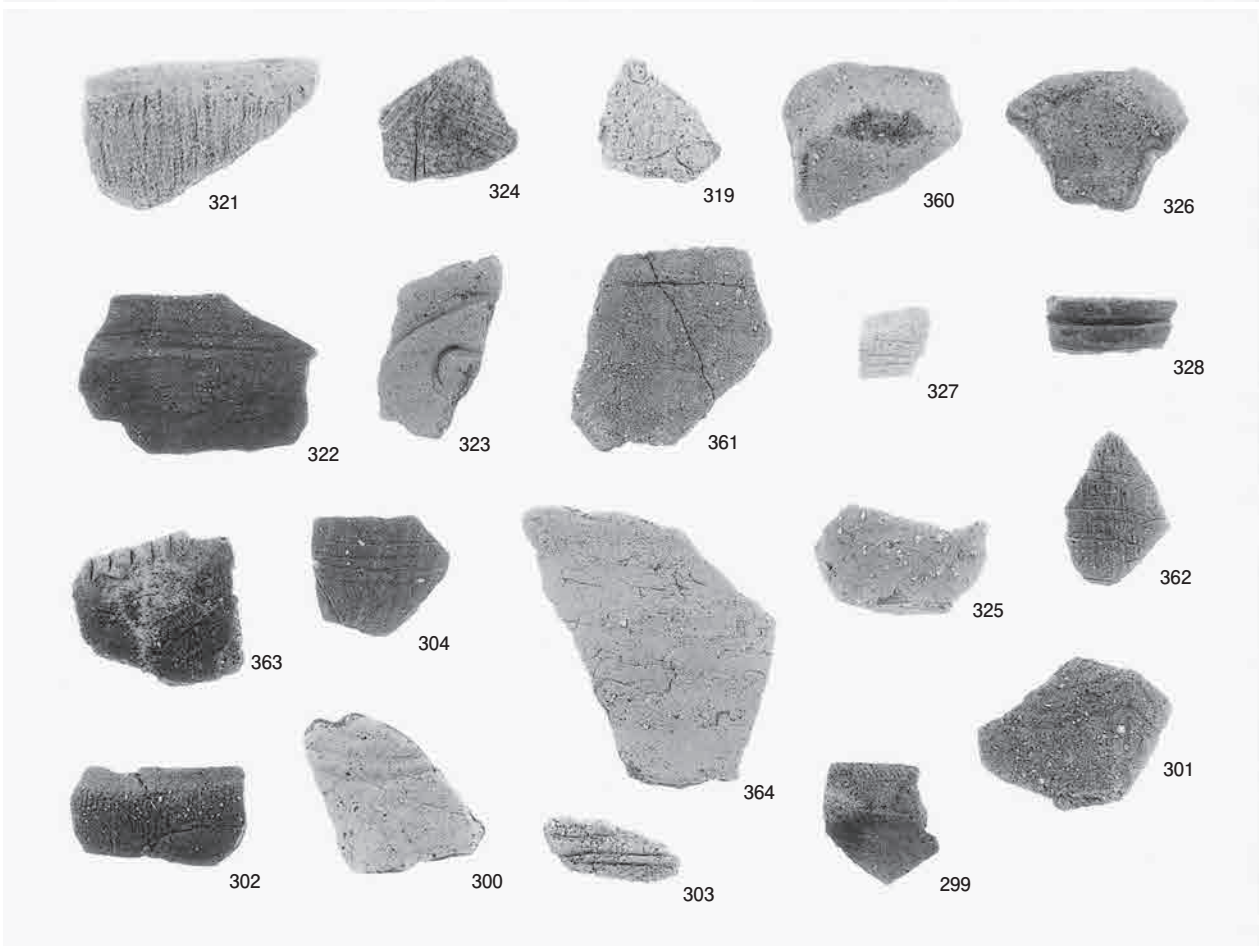
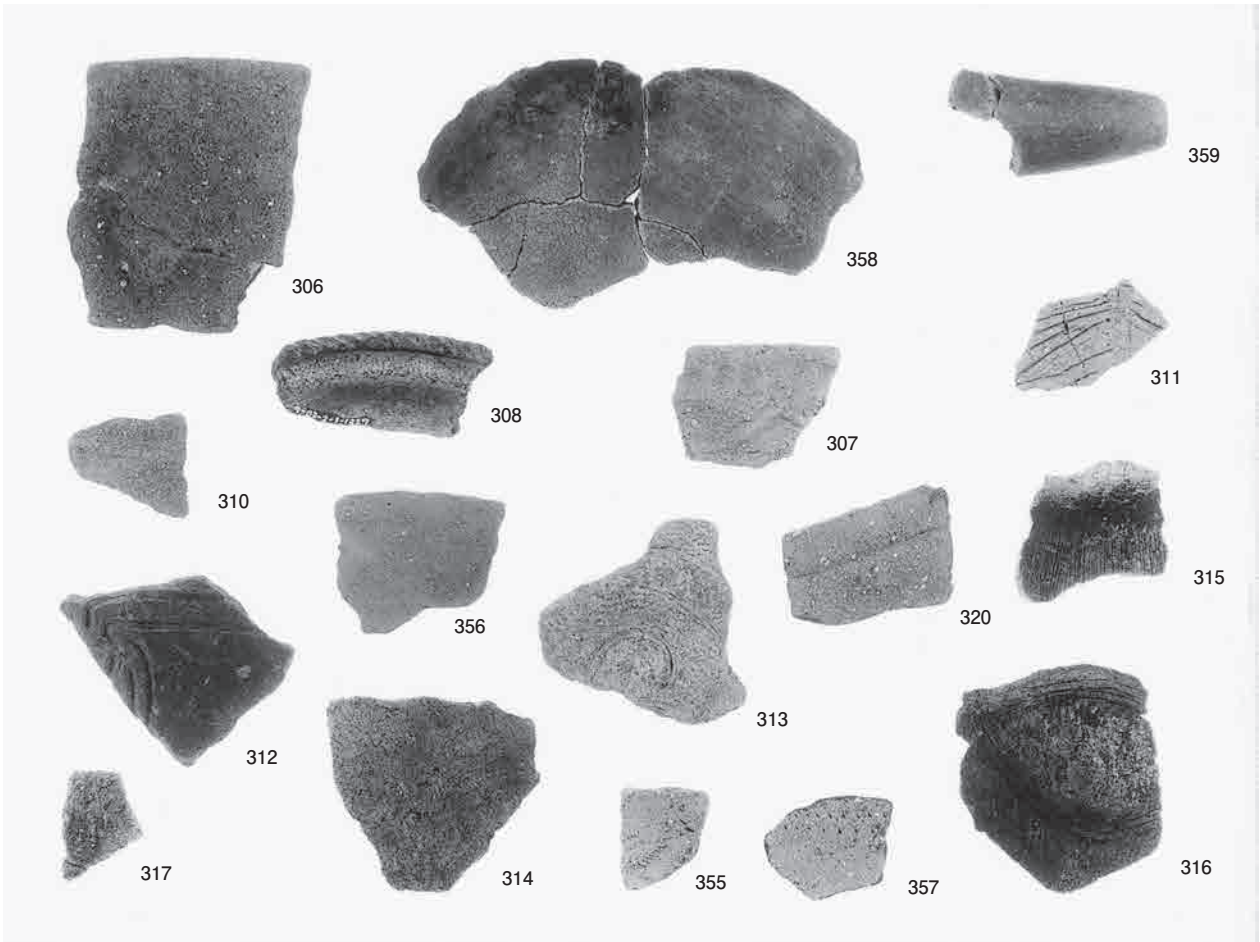


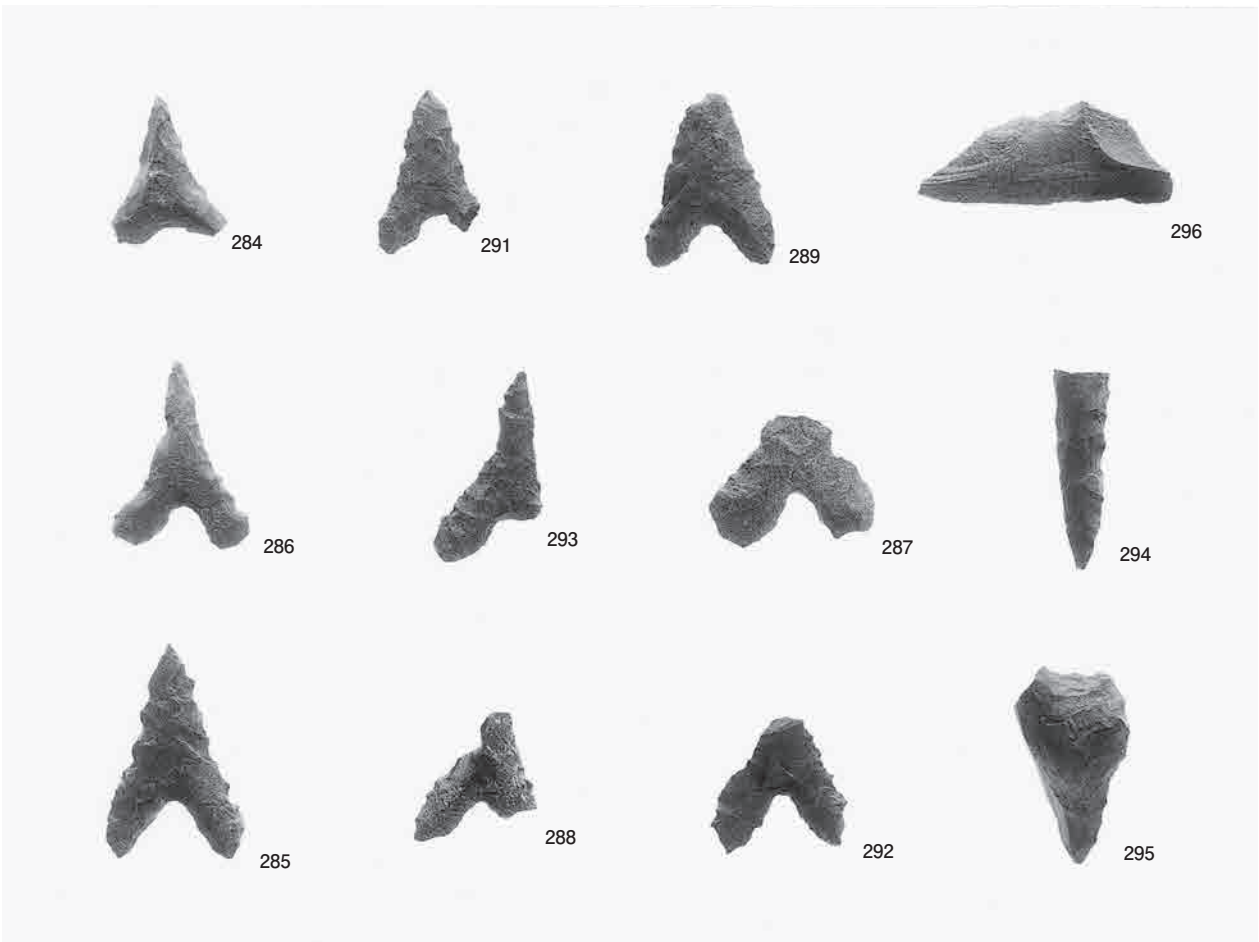
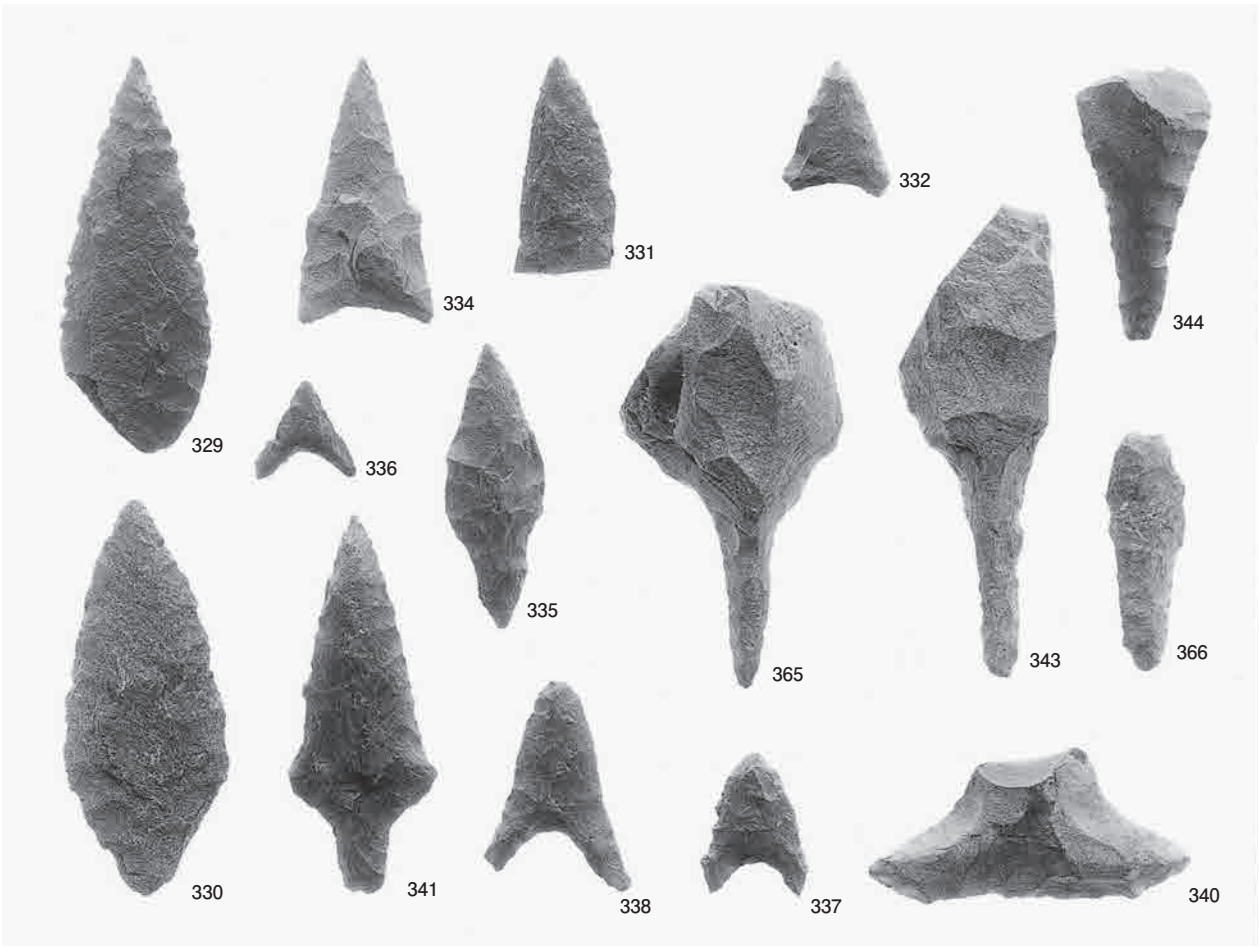


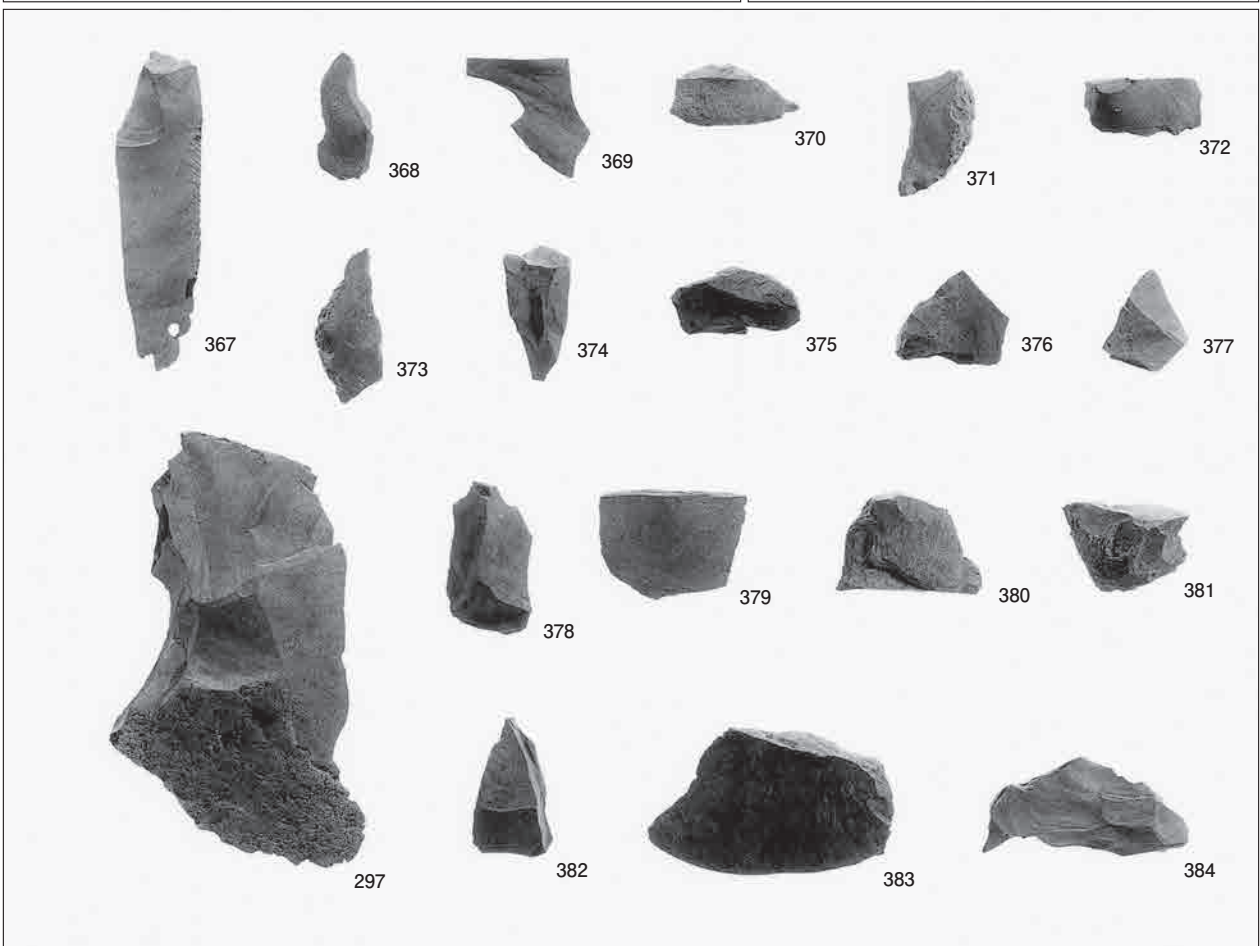
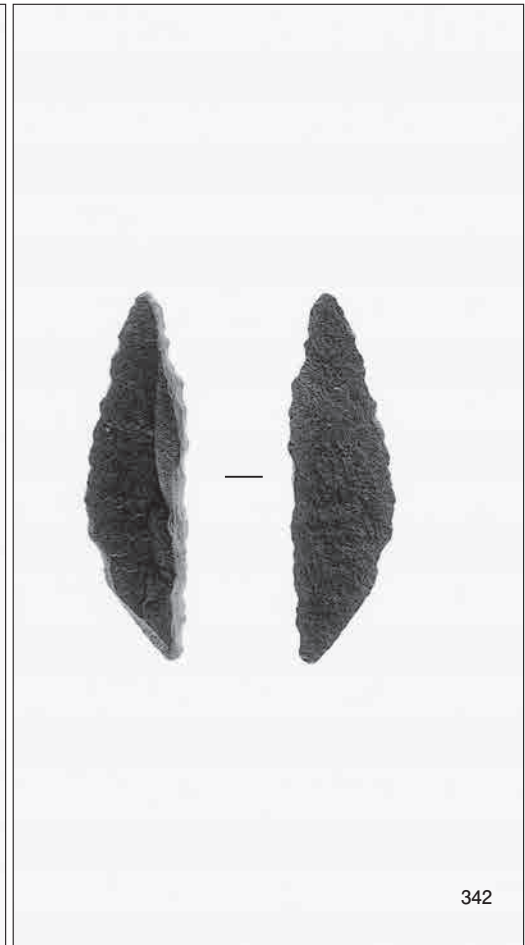


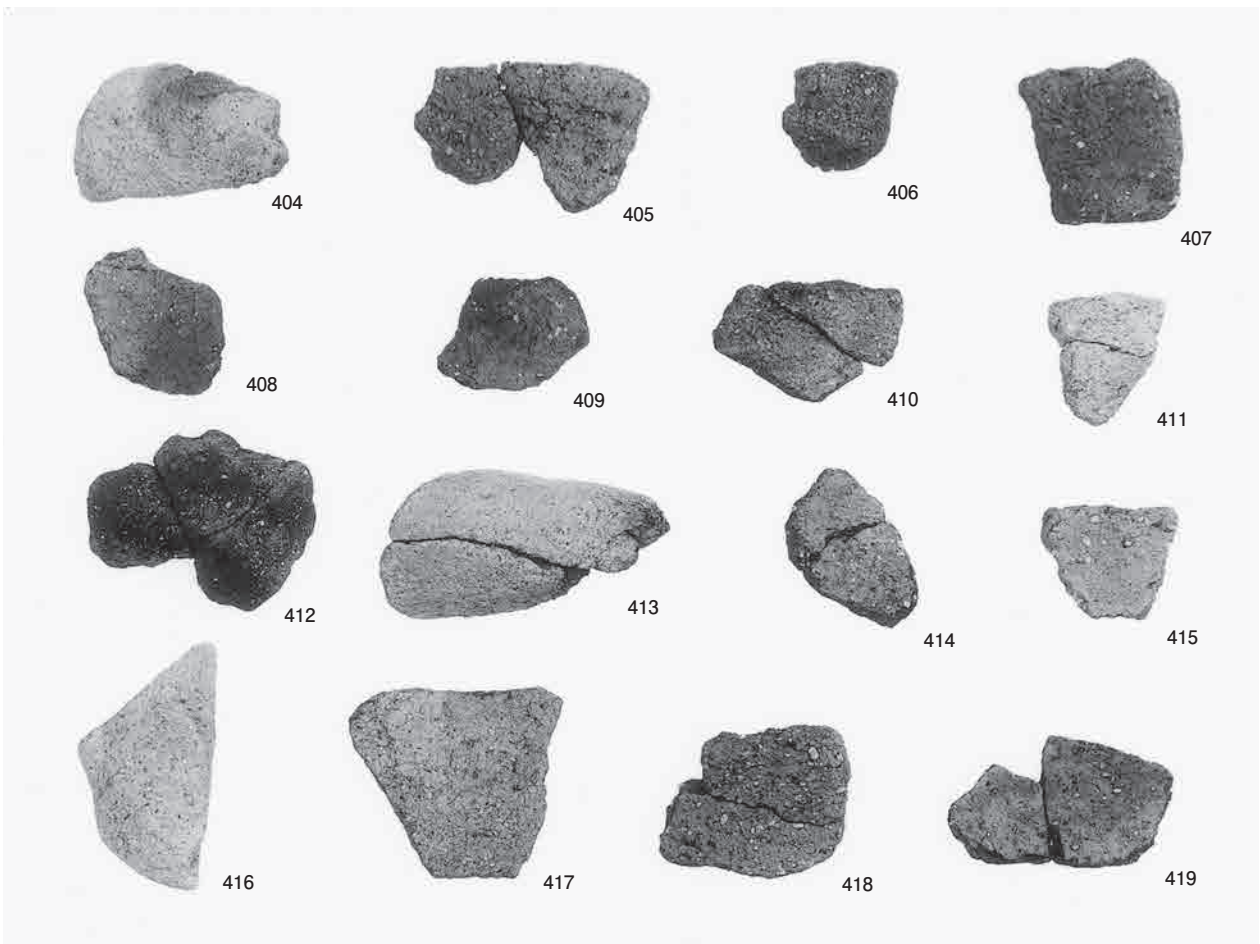
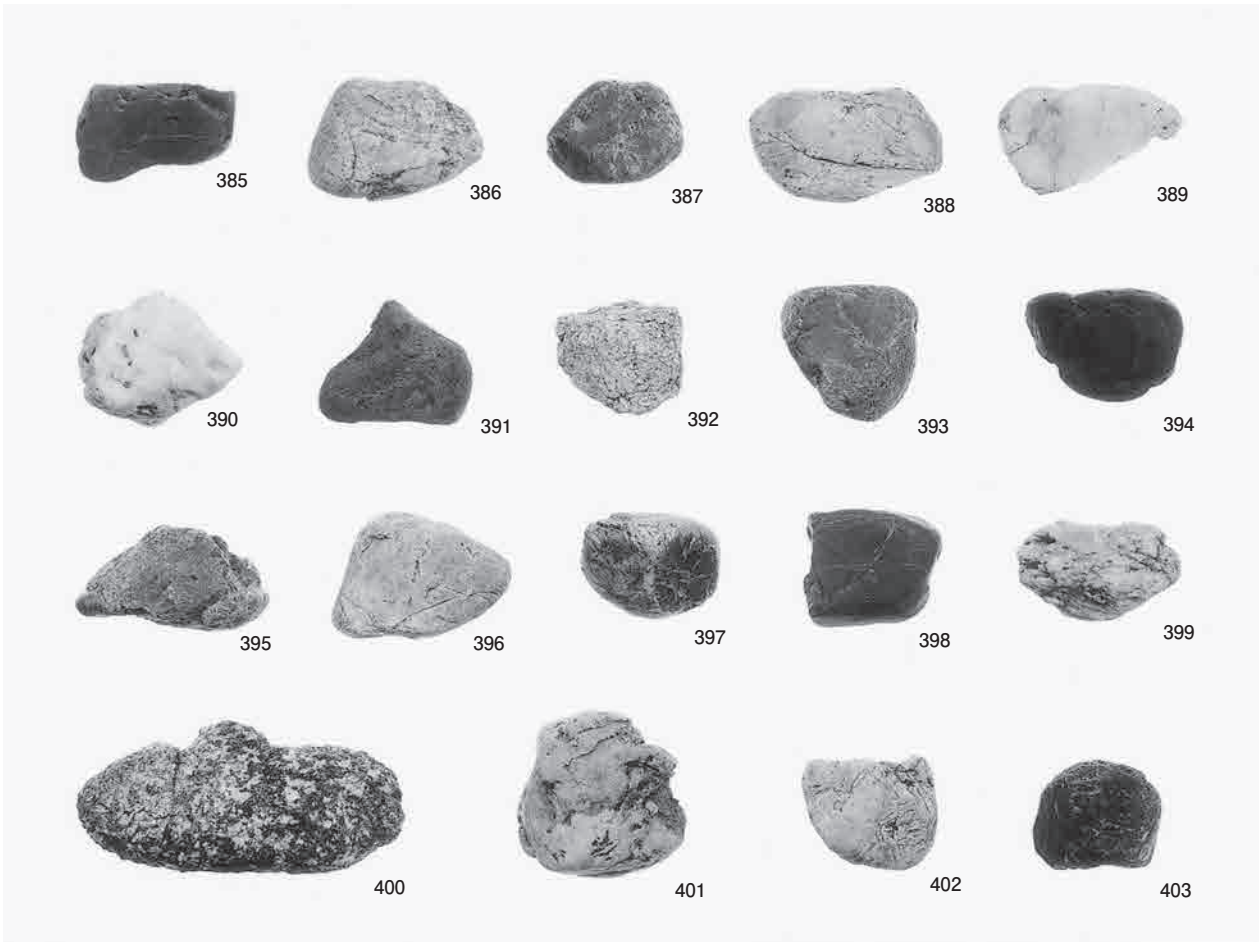












報 告 書 抄 録

ふりがな	さらぐんじょうりいせきV							
書名	讃良郡条里遺跡V							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第160集							
編著者名	佐伯博光、六辻彩香							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel.072(299)8791							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	大阪府寝屋川市高宮 地先・小路地先	27215	36	34° 44' 52"	135° 38' 11"	2003年 3月3日 ～ 2005年 4月28日	16,660㎡	一般国道1号 バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路 建設
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	大阪府寝屋川市小路 地先	27215	36	34° 44' 50"	135° 38' 9"	2005年 5月10日 ～ 2005年 6月14日	300㎡	一般国道1号 バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路 建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
讃良郡条里遺跡	その他	縄文時代	石器集中部、 流路	縄文土器、サヌカイト製石 器(製品・未成品・剥片)		石器製作跡と考えられる 石器が集中部した遺構を検出		
	その他	弥生時代	溝	弥生土器				
	その他	古墳時代	溝、ピット、 土坑、井戸	土師器、須恵器、埴輪、 耳環、紡錘車、管玉				
	集落	飛鳥～ 奈良時代	流路、溝、土坑 掘立柱建物、 井戸	土師器、須恵器		3時期に区分できる、掘立柱 建物28棟を検出		
	生産	中世	小溝、土坑	土師器、須恵器、瓦器、 陶器、磁器		条里型地割が施行された耕作 地として利用		
要約	讃良郡条里遺跡	<p>当調査地は、縄文時代から人間活動が見られ、縄文時代後期には、石器を製作した石器製作跡を検出している。弥生時代は遺物量が少ないものの、弥生時代後期の土器が出土した溝を検出している。古墳時代前期になると遺構が増え始め、遺物量も増加する。特に布留式段階の土器が出土する遺構が目立つ。やがて飛鳥時代～奈良時代にかけて3時期に区分できる掘立柱建物が造られ、集落が営まれる。この集落は、縄文時代晩期段階に形成された微高地上に位置している。そして現在に見られる条里型地割が施行された耕作域へと景観は変化してゆく。</p>						

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第160集

讃良郡条里遺跡 V

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日/2007年3月30日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本/三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町300